しふこもんじよ　集古文書　二十四巻

古文書を纂輯したるもの。寰筆類、綸旨類、敕書類、官符類、宣命類、院宣類、令旨類、御内書類、御教書類、下文類、證宣類、判物類等に分ち、豊臣時代までのを收めたり。

じふごやうたあはせ　十五夜歌合　一巻

文永二年乙丑(一九二五)八月十五夜、未出月、初昇月、停午月、漸傾月、欲入月の題にて、前關白左大臣眞實、關白左大臣實經、右大臣基平、藤嶌、前太政大臣公相、式乾門院御匣その他の歌合なり。『群書類從』卷二百〇二、和歌部第五十七に收入せり。

じふごやうたあはせ　十五夜歌合　一巻

一名、永仁五年八月十五夜歌合」の下に解題したり

じふごやさんしゆうたあはせ　十五夜三首歌合　一巻

永錄六年癸亥(一二二三)八月十五夜、月前松風、湖上月明、月前雁の題にて、中納言、法印雅智、權大僧都兼俊、堯遍、宣阿、小辨その他の三首歌合なり。『群書類從』卷二百十二、和歌部第六十七に收む。

しふさいそうしよ　習齋叢書　木四十五巻　菅野　元健

點竄法に於ける算題を解きたる書なり。一見以て氏の算學に勉強なること知るべし。年代詳ならざれども文化以前に成りたるもの、如し。

◎菅野元建は習齋と號す。藤田定資の門中に在りて、錚々の聞あり。著書頗る多けれど皆寫本に屬す

しふさうろく　志府雜錄　木一巻　田理

最初に志摩國島羽城主年譜略を揭げ、末に志摩記を附錄す。同記の自跋に、去年龜山より島羽の家に移りて、上人の說を記し、遺忘に備ふ。奥後の溫清軒にて田理書之」といへり。正德元年辛卯(一三七一)の跋なり。

◎田理は志摩國盤崎の人にして、省庵と稱し、海南また溫清軒と號す。別著に「志陽略誌」三卷あり。

じふさんかせん　十三歌仙　一册

菖蒲翁追善の爲めに、彦根連中の俳句を集めたるものなり。寶永三年丙戌(一三六六)京都にて版す。

じふさんだいしふ　十三代集　五十巻

藤原定家の「新敕撰和歌集」爲家の「續後撰和歌集」藤原基通等の「續古今和歌集」爲氏の「續拾遺和歌集」爲世の「新後撰和歌集」爲兼の「玉葉和歌集」爲世の「續千載和歌集」爲藤卿の「續後拾遺和歌集」花園天皇の「風雅和歌集」爲藤卿の「續後拾遺和歌集」爲明の「新拾遺和歌集」爲遠の「新後拾遺和歌集」飛鳥井雅世の「新續古今和歌集」の十三代集合せて版刻したるものなり。

じふさんてうきぶん　十三朝紀聞　七巻　源　照矩

後水尾天皇の慶長十六年辛亥(一六一一)より、孝明天皇御即位の初め、弘化四年丁未(一八五〇七)に至る十三朝二百三十餘年間の編年體の漢文略史なり。而して孝明天皇の御即位より、安政四年丁巳(一八五七)十二月までの事績を記したる「今日抄」を合刻したり。文久二年壬戌(一八六二)貫名菘翁の序を載す。著者源照矩は從六位下行兵庫衆史生兼和泉掾なり。

じふじかい　十事解　木一巻　古賀　樸

施政治民の要を論じたるもの。師傅、六官、經界、鄉黨、貢士、兵役、民食、四民、山澤、分敵の十に分ちて說明す。寬政元年己酉(一七八九)蓮池侯の爲めに著せるなり。

◎古賀樸は淳風と字し、彌助と稱し、精里と號す。德川幕府の儒臣たり。夙く福井小車、四依成齋等に學び、後尾藤二洲、賴春水等と交り、專ら朱氏に歸して攻究す。學成り國に歸りて佐賀藩の機密に參與し、また藩學の規則を定め、兼ねて教授に任ず。

後江戸に出でて推されて幕府の儒官となり、林祭酒、柴栗山、尾藤二洲等と協力して學政を振興し、遂に昌平黌教官となる。實に當年の碩學たり。がれて詩文を善くし、書法に巧にして、また槍術剣技に達せり。著書には大學纂釋、辨誤、讀通鑑評、近思錄集說、精里文集等あり。文化十四年丁丑(一八一七)五月四日、年六十八にて歿す。

じふじがうふんばいれい　十字號糞培例　一巻　佐藤　元庵

植物糞培の方法を說きたるもの。著者の口授を曾孫佐藤信淵の筆記するところなり。織田完之訂正を加へて明治五年壬申(一八七二)出版す。著者佐藤元庵は、獄庵の子にして、信淵の曾祖父なり。

じふしけいらくゆけつべんかい　十四經絡脈穴辨解　木四巻　寺尾　隆純

人體の解剖生理を記したるもの。諸經、脈穴、脈絡等の事を詳記したり。天明四年甲辰(一七八四)孟冬の著なり。著者寺尾隆純は常州笠間の人なり。

じふしちかでうけんぱふ　十七箇條憲法　一巻　聖德太子

憲法十七條として「け」の部に解題せり。『群書類從』卷四百七十四、雜部第十九にあるは、本題名也。

じふしちけんぱふちう　十七憲法註　一巻　僧　潮音

聖德太子の十七憲法に通俗平易なる註解を施したるもの。寬文十年庚戌(一六七〇)の著なり。著者潮音の傳は「皆月堂夜話」の下に出でたり。

しぶしよくしやうるゐじゆ　祠部職掌類聚　木二巻

山城、和泉、武藏、上野、出羽等の時宗寺院の黒印朱印。並に三河、伊豆、武藏、安房、下總、常陸、下野、播磨等の曹洞宗寺院の朱印の寫しを集めたるものなり。其の他の各宗のもありしが佚失せしものならんか。

しふせいじげん　習性邇言　一巻

心學者流の通俗教訓書。文久二年壬戌(一八六二)の序あり。

じふぜんはふご　十善法語　十二巻　僧　慈雲

佛教上不殺生、不偷盜、不婬泆、不惡口、不兩舌、不貪慾、不瞋恚、不邪見の十戒を說教したるもの。寬文十年庚戌(一六七〇)の著なり。著者潮音の傳は「皆月堂夜話」の下に出でたり。

しふだいおんうたあはせ　十題御歌合　木一巻

此の書は一名「嘉祿二年歌合」の下に解題す。

じふだいしふせう　十代集抄　一巻

和歌八代集の中「古今和歌集」を省きて「新敕撰集」「續後撰集」「續古今集」を拔抄撰集したるものなり。

しふだいわかしふ　拾代和歌集　十二巻　惠藤　一雄

二十一代集、三玉集、其の他諸家集、諸歌合等より適宜に抄出して四季、戀、雜、公事等に排列したるもの。自序及び眞言五年戊辰(一三四八)進藤知雄の跋を附す。著者惠藤一雄は河瀨常雄の門人なり。京都に往て伊藤長胤に經史文詩を習ひ、十九の年南部に歸省二教を學び、後、河内野中等秀富に謁して沙彌戒三聚淨戒等を受く。年二十七長榮寺に住し、親證菩法堂置の請師と別受戒磨を行ふ。また正法律なる一派を興して、盛んに僧制の復古を唱導し、餘暇には梵學を研究して其の奥底に達したり。齢八十にして河内の高貴山に退住す。幕府命して正法律派の本山となせり。其の著す所本書の外に、南湖答疑解纔鈔十卷、七九鈔五卷、方服圖式略二卷、同攷十卷、無門關論說等あり。文化元年甲子(一八〇四)十二月入寂す、享年八十七。世稱して日本の小釋迦となせり。

本書の具題「祕密曼陀羅十住心論」の下に解題す。

しふちせう　執持鈔　一卷　僧　覺如

眞宗の開祖親鸞聖人の法語二三を抄錄し、更にそれを祖述敷演したるもの。嘉曆元年丙寅（一九八六）九月、著者五十七歲の時、弟子願智坊永尊の需に應じて著したるなり。「眞宗法要」第六卷に收めらる。

◎覺如の傳は「本願寺聖人親鸞傳絵」の下に在り。

じふついみやうるゐへん　事物異名類編　二卷　荒井　公履

種々なる事物の別名を集錄したるもの。凡例に曰く「清の勵鄂鄧が著す所の「事物異名錄」に本きて、國字四十七音を以て部類を分ち「雜字類編」に倣ひて初學の捜索に便にす」云々。安政五年戊午（二五一八）の自序あり。文久元年辛酉（二五二一）刊本となる。著者荒井公履は淀藩の儒臣なり。

しふづがつはつ　集圖合結　本一卷　松平　定信

文化年間に現存せる日本國中の城郭圖なり。特彩色を以て城市山川を區別せり。別に著名の古城圖十八箇を添加す。

◎松平定信の傳は「花月草紙」の下に出づ。

じぶつけんよ　事物權輿　本二十六卷

天文、地理、神祇に關する事物紀原を記したるもの

なり。卷一は天文二十二條、卷三、四、五、六に全國地理に關する事項を國別に記せり。二十六卷中卷七、八、十七、十八、二十二等を闕本せり。

じふでふげんじ　十帖源氏　十卷　雛屋　立圃

源氏物語の每卷の大意を通俗的に證明し所々註釋また圖繪等も插入せり。著者雛屋立圃の傳は「なさな源氏」の下に出づ。

しふとごでんし　集杜五言詩　一卷

杜子美の詩を集句して作り成せる五言詩なり。嘉永四年辛亥（二五一一）小野湖山の序、中尾眞の跋を附して發行す。

じふにぐわつわらい　十二月往來　一卷

十二箇月間每月の往來書牘を集めたるもの。正月三日、二月二日、三月朔日、四月五日、五月七日、六月四日、七月六日、八月七日、九月八日、十月八日、十一月十四日、十二月七日、以上凡て二十四通より成る。俗間「壁垂相往來」といふ。正保四年丁亥（二六四七）出版す。「群書類從」卷百三十九、消息部第二に收めたるもあり。

じふにぐわつわみやうかう　十二月和名考　一卷　高内　眞足

本書は一名を「歲時和名考證」といふ。よつて該題下に解題したり。

じふにじんぱうやく　十二神方藥　本一卷

小兒疾病の療法十二箇條の處方を略述したるものなり。文化七年庚午（二八一〇）丹波元簡の奥書あり、「右從鈴木眞知而借、令門人虻村圭善抄寫之、以藏于家云」といふ。

じふにばんうたあはせ　十二番歌合　本一卷

音羽山、石瀨山、生田杜、布留ノ高橋、其他等二十四題の名所にて、眞平、賴範、範基、爲家其の他にて、建曆三年癸酉（一二一三）八月十二日に催したる歌合なり。

じふにやもんだふ　十二夜問答　一卷　田中　琴左

俳論の書にて、「夜話之一」より「夜話之十二」に分ちて、俳諧上の諸項を論述す。近年發行の俳諧文庫第十五編「續俳諧論集」の中にも收めたり。

◎田中琴左は尾張の人にして、東侯と稱す。俳諧を美濃派の蘆元坊に學び、琴左、錦童仙、玉筑坊「初め五竹房」等の俳號あり。江戸に出でて醫を業としたり。墓は牛込早稻田芳心院にあり。

じふにるうたあはせ　十二類歌合　一卷

龍、犬。蛇、猪。馬、鼠、羊、牛。猿、虎。鳥、兎。の十二類歌合なり。左右六番より成る。「群書類從」卷五百〇四、雜部第五十九に入れたり。

じふはつしりやくべんもう　十八史略便蒙　三卷　村山　隆

十八史略の註を增補訂正したるもの。天保八年丁酉（二四九七）の自序あり。同十年上木す。

じふばんきやうしあはせ　十番狂詩合　本一卷

非、象戲。話、舞。十炷香、立花。尺八、双六。楊弓、鞠。小鼓、琴。能、連歌。鷹野、川狩。鐵砲、兵法。茶湯、酒宴。以上十番の狂詩合なり。各番左右勝負を評判せり。「續群書類從」卷九百八十二、雜部第百三十二に收めたり。

じふばんさいくわはせ　十番左右句合　一卷　谷口　蕪村

此の書は著者の門人几董、月居の俳句に判を加へたるものなり。光格天皇の天明元年辛丑（二四四一）の編なり。近年發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉臺金集」の中にも收めたり。

◎谷口蕪村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

しふびろく　集美錄　六卷　聚　星　堂

古人の著錄を捜索して當時未だ版行せられざりしものを活版に附せり。本書は卷一、二、三、四に「鳩巢小說」、卷五に「珍說武家美談」、卷六に「武陵叢話」を收めたり。凡て五册に作る。弘化四年丁未（二五〇七）志賀孝思の序あり。編輯者聚星堂は紀州の書肆なり。

法名す。

しふれつしふ　拾烈集　木一巻

春山花盛以下景物十。競馬勝負以下在曲物十。深夜琴音以下哀物十。道人聖僧以下貴物十。遠國船路以下心細物十。渡海雷鳴以下畏物十。長者獨子以下樂物十。主君深思以下悦物十。智者短命以下惜物十。深泥長袴以下凡物十。大非意見以下憤物十。女性公人以下悪物十等の目を掲げたり。「續群書類從」卷九百八十、雜部第百三十に收めたり。

しぶろく　四部錄　一巻

「三祖繼智禪師信心銘」、「永嘉眞覺大師證道歌」、「臨濟宗の三祖鑑智禪師信心銘、永嘉眞覺大師證道歌、廓庵和尚十手圖頌、座禪儀の四編を輯めて一部と作し、冠註を加へたるもの。四部何れも禪宗に關する書なり。元祿十一年戊寅(一六九八)の撰。

しぶろく　四部錄　一巻

「三祖繼智禪師信心銘」、「永嘉眞覺大師證道歌」、「牧牛」、「座禪儀」の四部を合刻したるもの。辛未歲夏五吉丸時心堂新刊」とあれど年號姓名等なし。

しぶろく　首書四部錄　一巻

支那禪宗の三祖鑑智禪師信心銘、永嘉眞覺大師證道歌、廓庵和尚十手圖頌、座禪儀の四編を輯めて一部と作し、冠註を加へたるもの。四部何れも禪宗に關する書なり。元祿十一年戊寅(一六九八)の撰。

じふろくしゃうでん　十六將傳　木一巻

酒井忠次、大久保忠世、大久保忠佐、渡邊守綱、榊原康政、內藤正成、蜂屋貞次、平岩親吉、本多忠勝、井伊直政、鳥居元忠、松平庚忠、高木淸秀、鳥居直忠、

じふろくもんき　十六門記　一巻

淨土宗の開祖源空上人の行狀を記したるもの。故に「源空上人傳」とも云へり。著者は源空晩年の弟子にして、朝夕親しく見聞する所を敍述したるなれば、其の徴とするに足るや知るべきなり。安貞元年丁亥(一八七七)五月に成る。

◎聖覺の傳は「大原談義聞書抄」の下に在り。

しぶんえうりやう　紫文要領　木二巻　本居宣長

源氏物語の大體を記し、諸抄の誤謬等を論評したるもの。或は「玉の小櫛」の舊稿なるべしといふ。寶曆十三年癸未(一七六三)六月七日の跋に「右紫文要領上下二卷は、としごろ、丸が心に思ひよりて、此の物語をくりかへし、心をひそめてよみつゝ考へ出せる所にして、全く師傳の趣にあらず、又諸抄の說と雲泥の相違なり、見ん人あやしむことなかれ」云々といへり。

◎本居宣長の傳は「古事記傳」の下にあり。

しぶんかう　詩文稿　木一巻　北小路俊辨

寬文十二年辰申(一六七二)四月、「椙樟辨」といふ漢文、同二月「賀通川武田雅叟六十初度」の詩、辛酉二月「泰賀王部員外郎秦君六十一誕辰」詩、同三月「上下同稱伯叔姑辨通圖」の漢文を掲げたり。今見るところ著者の自筆にかゝる。「續群書料本」第三に收めたり。著者北小路俊辨は集褒齋と號す。

しぶんげんりう　斯文源流　一巻　河口子深

德川時代の儒者の道統及び諸家主張說の大略を記したる者。卷末に「他年訂正を加へて來學の標準となさむのみ暫く其の端を開くことしかりといふ」と記せり。記述簡略なりと雖も參考に資すべし。寬延三年庚午(一七五〇)八月の著。近刊「温知叢書」第三編にも收め、「輪池叢書」第三十七にも收む。

◎河口子深は江戸の人、郡山本多氏の文學。元祿十六年丁丑(一七〇三)に生る。字は穆仲、號を靜齋と云ふ。業を室鳩巢に受けて其學統を繼ぎ、中村蘭林と共に高足の弟子たりき。寶曆四年甲戌(一七五四)十二月、五十二にて歿す。

しぶんこくじどく　詩文國字牘　一巻　荻生茂卿

學術詩文の大體を叮嚀に論述したる假字尺牘なり。出羽莊內の大夫水野某への答書なりと云ふ。享保二十年乙卯(一七三五)林義卿、鍋島公明の序跋を附したり。近刊「日本文庫」第三編にも收めたり。

◎荻生茂卿の傳は「靈園秘錄」の下にあり。

じぶんてきひ　時文摘紕　一巻　村田春海

時文の誤謬、稱呼の濫訓を指摘したるもの。蜜鳩巢其の濫稱を非したるなり。寬政七年乙卯(一七九五)の作。「日本文庫」第八編にも入る。盖し「時文摘紕」は「作文通弊」の初の名なりといふ。源碧彦の「非時文摘紕」と併せ見るべし。

◎村田春海の傳は「作文通弊」の下に出づ。

しぶんるゐご　詩文類語　一巻　鶴峯戊申

時文用の類語を蒐集して、側に平仄を記したるもの。天保十三年壬寅(一八四二)綾瀨梓の序、寺門靜軒の序、天保七年松本政秀の跋等あり。同年橫綴小本に版行せり。

◎鶴峯戊申の傳記は「神階錄」の下にあり。

しへんえんかいぜんづ　四邊沿海全圖　木一舖　山田聯

日本を始め、朝鮮、蒙古の地、清國、滿洲、俄羅斯國に至るまでを記し、各其の諸屬國にまで及べり、總て國名、都會、城廓、府州、陣屋、柵塁、驛亭、鄉村、洞港、衙所、開墾、國界等は皆徽號を以て記したり。文化五年戊辰(一八〇八)作りたるものなり。

◎山田聯の傳記は「北齋圖說集覽」の下にあり。

しへんきつきよう　時變吉凶　一巻

文化四年深川八幡祭禮の節永代橋溺死人員數書を最初として、江戸の時變吉凶の調書を雜錄せるものなり。多く寬永以後の事をかけり。

しほうろく　士峯錄　六巻　土師玄同

富士山に關する古今の詩歌文章を抄錄したるもの。寬永元年甲子(一六二四)の自序中に、「昔日君子之嘉言善文雖沒而悉不傳于世、於是乎拾遺藁殘編二而不擇時世之先後、古今の汗隆、和歌一卷、和詞一卷、浮圖氏詩文一卷、浮圖氏詩文一卷、野史稗說一卷、本朝儒氏詩文一卷、異朝詩文亜錄而爲六卷「目」之曰士峯錄」とあり。其の大抵を知るべし。士峯は「富士峯」にかたどれり。此の書五までは玄同の作にて、六の卷菅德庵の加ふるところなり。

◎土師玄同は播磨國飾磨の人にして士德と字し、浦田得庵と稱す。藤原惺窩の高弟五人の一人なり。

しほがましやえんき　鹽釜社緣起　木一巻　吉田兼連（カネツラ）

陸奥國一宮正一位鹽釜大明神の緣起なり。左京武藏槍命、右宮經津主命別宮坡神の三座をも說明せり。元祿六年癸酉(一六九三)社家の所傳に、春日、香取、鹿島及び三州六所明神の社家の說等を參考して編輯したりといふ。附錄に、鹽釜明神讚說考、仙臺宮崎八景事緣考を掲げたり。

◎吉田兼連は卜部氏、兼起の子にして、小字を萬壽といふ。幼にして同族兼從に養る。家世々皇典の祕傳ありといへど、兼連幼にして、兼從の薨去に遭ひ、傳ふること能はず、長じて德川幕府に仕ふるに及び、家人吉川惟足を召して、悉く其の傳授を受けたりといふ。

しほがましやかう　鹽竈社考　木一巻　新井君美

奥州鹽竈神社に關する一切の考證なり。著者新井君美の傳は「折たく柴の記」の下に出づ。

しほがましやき　鹽竈社記　木一巻

奥州鹽竈神社の略記なり、古典に徵して其の祭神を論說す。末に「右鹽竈社記者亜加翁所考也、然有碧記翁未見之「補宣祕部等所祠如碧記」云々とて更

に筆記を畢げたり。

しほがまつしまきかう

鹽竈松島紀行　本朝一巻　井氏　文圭

享保十八年癸丑(一三九三)陸奥に寓居の時、鹽竈並に松島等を遊覧せし時の紀行なり。五月二十五日岩城城下の出立より、六月十日平野歸着までを記す。享保十九年友人高旭の序あり。巻末に利生翁の跋あり。「此の小册、松島其の外所々委曲に記し、岩城より行程最も詳し、芭蕉が「奥の細路」、桃林が「陸奥ちどり」合せて見るべし」といへり。著者井氏文圭は浪華の人なり。

しほどり

鹽尻　本朝四十五巻　天野　信景

著者の見聞隨筆なり。巻首に「伊勢物語」の跋事とせる鹽尻といふことな説明せるより取りて書名となせり。本書の巻数はもと千巻近くもありしが、散佚して僅に百巻を遺し、七十册、三十八册等にして行はる、由「雜書一覽」にも云へるが、今は十五巻完三套にせるものによる。

◎天野信景の傳は「牛頭天王辨」の下に出づ。

しほばらかう

鹽原考　本朝一巻　林　知修

下野國鹽原の名所舊蹟を詳記したるものなり。仁孝天皇の天保三年壬戌(一八四二)著者が君侯に陪して同地に入浴したる時の記なり。「輪池叢書」第二十に入れたり。著者林知修は佐久山の臣、三齋と號せり。

しほひのつと

潮干の都登　一帖

赤貝、白蛤、假盛、眞顏等以下三十六家の貝盡し狂歌仙なり。各首の彩色貝の上に各一首づつの狂歌を附したるなり。巻首に自序あれど年月を記さず。

◎四方赤良の傳は「雨瀟遊書」の下にあり。

しほんざう

詩本草　一巻

多く詩を插入して、蔬菜魚鼈等の食品を品騭したるものなり。萬延元年庚申(一八六〇)版刻す。

◎柏木祉は修して柏祉とも書せり。字を永日といひ、如亭、柏山人等は其の號なり。江戸神田に住せり。少にして詩を好み、市川寛齋に學びて此の技に長じ、遂に當陸の大雅詩佛、讃岐の池桐無弦と名を齊すと。著すところは、木書の外に巹詩集、如亭集、如亭百絶、驪珠詩格釋註、曉晴吟社集、如亭北遊集、四家絶句等あり。文政二年己卯(一八一九)七月八日、客遊中平安に歿す、年五十七。

しまぐんき

志摩軍記　本朝一巻

此の書は紀州の九鬼大隅守嘉隆が一代の軍戰事蹟を記したるものなり。嘉隆正親町天皇の永祿三年庚申(一五六〇)志摩礒部の鄉に至り、遂に近邊の豪族を討平して志州を押領し、織田豐臣等に屬し、文祿の後朝鮮に赴き、後石田三成に與して罪せらるゝ事等の事績を詳にせり。享保五年庚子(一七二〇)書寫の奥書あり。

しまし

志摩詩志　一巻　應羽　龍年

著者招聘により、學を志摩の國校に講ず。肆業の餘暇國中の山岳海濱を跋渉して詠出したるもの。長短凡て數十首あり。安政三年丙辰(一八五六)八月著者の末記、同年男維孚の跋、弘化四年丁未(一八五〇七)四月、烏羽小濱樸齋の序等あり。

◎鷹羽龍年の傳は「蓼唱庵存稿」の下にあり。

しまじまじゆんらんのき

島々巡覽之記　本朝一巻

伊豆八丈島巡覽日記なり。文政二年己卯(一八一九)夏六月、戊年六十六歳の人の寫本奥書あり。此の書記述の年時こそ記されざれ、比見するに、寛政八年丙辰(一七九六)の作なる「島日記」と大抵同じものなり。

しまだかうあんゆうかいものがたり

島田幸安幽界物語　本朝三巻　島田　幸安

幽界の事に關して、參澤宗哲の問へるに對して著者の答辨したるを、宗哲自ら筆記したるもの。神仙佛道等の俗說に據れり。時に寛永五年戊子(一六二八)兩人共に紀州和歌山の人、幸安は字を重信といひたる由見ゆ。

しまづかふ

島津家譜　本朝二巻

薩州島津家に關する二種の記錄を合册したるも

の。一は慶長以前の記錄にして元祖忠久より記し始め、一は關原役以後の記錄にして、貞享元年甲子(一六八四)十一月十六日德川幕府へ書出したるものなり。自ら次の家譜と異る。

しまづかふ

島津家譜　一巻

建久四年癸丑(一一九三)島津忠久に薩摩の守護職を賜はりし事より、同義弘の治世天正十六年戊子(一五八八)に至る、島津家の事歷を略記したるもの。「續群書類從」合戰部に收められ、「史籍集覽」に入れり。

しまづけいつ

島津系圖　本朝一巻

九州總地頭上總介貞久を祖として、左衞門尉忠久の子系に終れり。「續群書類從」巻百十七、系圖部第十二に收めたり。

しまづけいづぬきがき

島津系圖拔書　本朝一巻

同系圖中拔出せる越前、知覽、宇宿、山田、阿蘇、町田、伊集院、和泉、佐多、新納、樺山、北鄉、石坂、川上、大田、豐州、大島、義岡、桂、道永、喜入、龜山、藤野等の諸家の略譜なり。此書は一に「眞覺島家略系圖敍書」といへり。

しまづけおなりのき

島津家御成之記　本朝一巻　島津　家久

寛永五年戊辰(一六二八)將軍德川家光が、申納言島津家久宅へ臨御したる事の始末を記したるものなり。同七年庚午五月二十三日記するところなり。

◎島津家久は義久の季弟にして申務大輔と稱す。性質勇武にして夙く軍事に習熟し、天正年中に於ける諸所の軍陣に將として、武功多く戰史の傳ふるところ少からず。天正十五年丁亥(一五八七)六月、鴉疫に中りて卒す。

しまづけのき

島津家記　本朝一巻

薩州島津氏の家記なり。其の根元より、天正十六年戊子(一五八八)陸奥守成政自殺の事に及べり。「續群書類從」巻六百五十四、合戰部第八十四に收む。

しまづけぶんげんちやう

島津家分限帳　本朝一巻

前に解題したる「薩州分限帳」と全く同本なり。

しまづけぼんあづまかゞみさん

島津家本東鑑纂　一巻

島津家所藏「東鑑」の古本を以て、通行の古本に對校して、異文脫漏等を摘錄したるものなり。

しまつぜんろく

御小姓組始末全錄　本朝四巻

御役に付萬事私の覺書と記して、慶安二年己丑(一六四九)三月十日總御旗本物頭へ被仰渡の趣より、寛永十年癸酉(一六三三)二月十七日の御軍役積次第、及び御扶持方に至る四十三目を輯錄せり。春夏秋冬の四册に寫傳す。

しまづりうきうかつせんき

島津琉球合戰記　本朝六巻

慶長十四年己酉(一六〇九)島津家久が、德川家康の命により、家人新納一氏に命じて琉球を征伐したる始末を記したるもの。末に寛文十一年辛亥(一六七一)琉球王子來朝の事を記し、巻尾に「延享二年乙丑(一七四五)初夏仲幾井宴宿謄寫」の奥書あり。前に解題したる「薩琉軍談」と同本にして少異あるのみ。

しまづりうきうぐんせいき

島津琉球軍精記　本朝二十七巻

薩州島津家と、琉球王國との戰爭始末を詳記したるものにて、凡て數十項に分ち記す。二十七巻五册に寫傳す。

しまづれきだいうた

島津歷代歌　本朝一巻

島津家列祖に歷代の詩歌を揭げたるもの。高祖忠久より、少將大隅守光久、及び其の子に至る系なり。「續群書類從」巻百十七、系圖部第十二にあり。

しまにつき

島日記　本朝二巻

寛政八年丙辰(一七九六)八丈島巡見日記なり。一册は繪圖にして、折本に作り添へたり。

しまばらいつきえうぶんき

島原一揆要聞記　本朝一巻

単に「島原要聞記」といへるものと異名同物たり。

しまばらいつきしまつき
島原一揆始末記　本一巻

本書は「島原要聞記」と同物なり。該題下に解題す。

しまばらいつきのおほえがき
島原一揆之覚書　本一巻　坪部杢左衛門

肥前島原一揆の顛末覚書なり。寛文九年己酉(一六六九)五月二十五日、卽ち稲葉能登守殿島原城番の節、書き上げたるものなり。著者坪部杢左衛門は島原町別當なり。

しまばらいつきまつくらき
島原一揆松倉記　本一巻

肥前島原一揆に關し、松倉長門守領内の古老物語を筆記したるものなり。末に享保十九年庚寅(一七三四)の奥書あり。

しまばらそうぶんき
島原要聞記　本一冊

島原一揆の大要を記述したるもの。中に「島原一揆始末記」といひ、或は「島原一揆要聞記」とも云へり

しまばらかつせんき
島原合戦記　本五巻　遠山　信春

肥前島原の合戦始末を記したるもの。巻の一、耶蘇宗門禁制の由來に始まりて、巻の五總攻次第より最後板倉重昌戦死、同甚太郎出身の次第に終れり。一名を「島原記錄」とも云へり。貞享二年乙丑(一六八五)の自跋に「右島原天草一揆發興御退治のこと、家々の傳記、十條部集覽し、且松倉長州の猶子藤堂平右衛門方委細物語承知云數年會議之上撰記云ふものなり」といへり。

◎遠山信春のことは「織田軍記」の下にあり。

しまばらかつせんき
島原合戦記　本三巻

天草軍に從事せしもの、軍事見聞錄なり。寛永十七年庚辰(一六四〇)に記したるもの。其の自序中に「我れ一年鎭西の傍に籠居の比、肥の前後兩島に俄に狼煙立さわぎ、絶えて久しき弓矢のほこりをはらひ、西戎の敗勢、めずらかなる行粧にて、行て其の始終を粗見聞す。聞く事に自地なる事ながら、治亂の際何となくおもしろう侍れば、其の場にいたらぬ鄕黨、さこそ聞かまほしかるべきと思ひ出るを種として、そゝろなるよしなしごとを此の三巻につづり、齋里の友どちにおくる云々」とあり。從軍者の記しゝものなること知らる。寛永元年甲申(一六二四)六四)に刊行す。一名を「天草物語」といふ。

しまばらき
島原記　本一巻

肥後島原の一揆に關する諸記錄を集めたるもの。熊谷氏覺書、島原合戦首帳、別當杢左衛門覺書、切支丹蜂起覺書、伴天連イルマン同宿自狀の覺等を上巻に收め、下巻には鬼河内覺書、有馬傳記、有馬古老物語、浪人熊谷佐左衛門一支覺書等を載す。

しまばらき
参考　島原記　本四巻　新藤　安精

同藩福島愚齋と共に、肥前島原の耶蘇騒動を記したるもの。安永八年己亥(一七七九)愚齋の序文によれば參州岡崎の城主水野氏、元和三年穐を遷し、寛文九年に至りて其の緒を寛ひ、四十七年の歲月を累ねて編輯したるな、侍醫伊藤存琳の潤色したるものなりといふ。之を兩人の參考校訂したるなり。著者新藤安精は右兵衛と稱す、參州吉田の藩士なり。

しまばらきりしたんしまつき
島原鬼利支丹始末記　本三巻

名の如く肥前國島原城下に於ける耶蘇宗徒一揆の顛末を詳記したるもの。次に掲ぐる「島原始末記」を稍詳しくしたるものなり。

しまばらきろく
島原記錄　本五巻　遠山　信春

此の書は本名「島原合戦記」の下に解題せり。

しまばらじつき
島原實記　本一巻　佐野彌七左衛門

島原一揆の顛末を筆記したるものなり。末に寛文九年己酉(一六六九)の著者の奥書あり、事久しくたちて失念せる事もあるべしとことわれり。

◎佐野彌七左衛門は松倉長門守の家人なり。父總左衛門と共に島原役に從ひ、此の記は老後に至りて記したるものなり。

しまばらしまつき
島原始末記　本一巻

寛永十四年丁丑(一六三七)の頃より起りし肥前島原の耶蘇教徒一揆騒動の始末を記したるもの。於肥前國島原吉利支丹初發の事」に始まりて「島原寄手の諸將陣陣の事」に終れり。

しまめぐりのき
島めぐりの記　一巻

寛政八年丙辰(一七九六)四月以下十二月に至る間巡見使に從ひて、伊豆諸島を見廻りたる時の日記なり。「伊豆島日記」と大同小異なり。同時別人の筆錄したるものなるべし。

しまものがたり
島物語　本一巻　樋口　淳美

筑前國の船頭松兵衛といふもの、天明七年丁未(一七八七)十一月廿七日、乘員十一人にて、江戸を出で、相州三崎にて風待をし、十二月八日九十三里の灘を走り、犬吠崎にて颶風に遇ひ、遂に無人島に漂流しこゝに、既に天明五年乙巳(一七八五)に漂着したる一人の長平といふものと共に其の島に住せるに後寛政元年己酉(一七八九)また薩摩人漂流し來り、死殘り部合十四人にて、決死の覺悟をなし筏を作りて同九年青ヶ島まで着し、入丈に於て宮來の救を得て後江戸に送り還されたることあり。此の始末を詳細に記述したるものなり。寛政十年戊午(一七九八)太田方の跋、及び自跋あり。著者樋口淳美は醉山と號せり。

しみのすみかものがたり
しみのすみか物語　本二巻　石川　雅望

年來の見聞中、其の面白き限りの雜話を集めて假名書したるもの。「たゞ古きほうごのかひくさゝをさながらとりて書きつけつれば、しみのすみかとやなづけてん」と云へり。例へば強盜殺害の罪等以下凡て五十四項あり。享和二年壬戌(一八〇二)大村瑚の序あり。

◎石川雅望の傳は「雅言集覽」の下にあり。

しみんかくちちようほうき
四民格致重寶記　一巻　神尾　包晶

農務を重に民底を救ふべき趣意を述べて子孫に遺せるもの。享保七年壬寅(一七二二)林信言の序を附して普書の暦尾包晶は、代々御代官を勤めたる人にして、曾祖父忠次、祖父忠昌と四代間相繼ぎて政績の譽あり。

しみんまつげのかゞみ
四民睫の鏡　本一巻　荒陽散人

修身齊家に關する假名隨筆なり。四民各其の職業を勵み行狀を愼むべきことを論せり。

しみんわらい
四民往來　五巻　中村　平吾

民間書牘の書法、文例等を編輯したるもの。士農工商の四民に分ちて、各其の作法用法等を說明して、作例數十題づつを示したり。享保十四年己酉(一七二九)九月の自序あり。每巻の最初に四民の圖を入れたるは著者三近子の自筆なり。

◎中村平吾の傳は「俗宇簡用指南車」の下にあり。

しめいしふ
四名集　六册　僧　皆虛

俳諧の集なり。編輯年月は明記せざれど、承應前後のものなるべし。著者皆虛のことは「世話盡」の下にあり。

じもうしふ
二豪集　二巻　立野　春節

本書は前後の二編より成り、前編は寛文五年乙巳(一六六五)秋江戸に旅寓中、鎌倉に遊びたる時の紀行にて附載せる所の詩歌文章を、「江府雜錄」と題せり。後編は前年御ち寛文四年の春、京都より江戸に趣きし時の紀行なり。途中の吟詠を掲げて「東武紀行」と稱せり。二豪集の名は、自序中に「鶯春卦也、童蒙、面壁著生也、誠魯蒙也。殊鎌江再發、仍令題」といへりと。延寶五年丁巳(一六七七)落下散人如雲の序あり。

◎立野春節の傳記は「職原鈔別勘」の下にあり。

しもかもしやぜん
下鴨社傳　一巻

下鴨社の略傳にて、佐渡守佐伯朝臣の奥書に「右享保十七年(一七三二)三月十日、從松岡先生修閱

書寫之、此書元者先生之開書也。滉元敬裝飾而爲一軸、文句誤字等、今度予改之、且末社漏脫之分補之者也」とあり。僅數枚の寫本なり。著者は松岡某と記せり。

しもかもみおやくわうだいじんぐうしやき

下鴨御祖皇太神宮社記 本一卷

同社藏本社の略記、數枚の寫本なり。

しもだいつけん

下田一件 本一册

幕府評定所より引繼ざたるものにて、嘉永七年甲寅(一八五四)のものたり。內閣文庫に保存せり。

しもつけくし

下野國志 十二卷 **河野 守弘**

下野一國の詳細地誌なり。其の大綱を擧ぐれば、卷の一に毛野名義、卷の二に名所勝地、卷の三に神祇鎭座、卷の四に神祇鎭座及び聖廟學校、卷の五、卷の六、卷の七、卷の八に佛閣僧坊、卷の九、卷の十、卷の十一に古城塞寨、卷の十二に古碑墳墓、國產名物等凡て詳細を悉して考證せり。嘉永元年戊申(一八五〇)の自序、同三年山內豐正。綾瀨樞田梓、大僧正海嶽の序等あり。同年出版す。

◎河野守弘は越智姓、下野國芳賀郡大道泉の里正なり。通稱を伊右衛門といふ。家世々農を業とす。守弘弱齡より國學を好み、和歌を嗜み、壯歲諸國風土紀名所記等を讀みて大に悟る所あり自國完全の地誌なきを慨し、之れを編集せんと志し、これより國中を歷遊し、山河を究め、奇勝を探り、諸方に諸書を求めて刻苦經營し、二十餘年を積み嘉永元年戊申(一八五〇八)に至り、遂に此の書を大成せりと。

しもつけしやうらん

下野掌覽 二卷 **菅原 豐直**

下野國の名義、口光山、宮給圖、下野九那給圖、每郡高分村數、名所勝地、神祇鎭座等、或は圖し、或は表し、或は誌說す。卷末に副錄として子供遊國初の教くさとて、乳兒の手眞似、わきぐり〳〵、てうちてうち、と〳〵のめ〳〵、あたまてん〳〵、てんのこてんのこ、かんぶり〳〵、あつたい〳〵、にぎ〳〵等を國初の意義にかれりとて解釋したるものを添へたり。安政六年己未(一八五九)の自敍あり。萬延元年庚申(一八六〇)開版す。著者菅原豐直は常陸國那賀郡の人。三輪神社の宮つこなり。雲齋と號す。

しもつけなすみちのき

下野那須道之記 本一卷

安永四年乙未(一七七五)四月朔日より、父の產地下野那須へ向ひ、江戶より立ちて、同十九日江戶自宅に歸るまでの記なれど、居所氏名詳ならず。

しもつけのくにがうちやう

下野國鄕帳 本一卷

下野國各郡千三百六十一箇村石高六十八萬一千七百〇二石八斗〇一合四勺六才を郡村別に列記す。元祿十四年辛巳(一七〇一)七月の作。「岡部黔馬守」と署名せり。

しもつけのくにからもまえんぎ

下野國二荒山緣起 本一卷

下野日光山の緣起を記したるものなり。

しもつけのくにゆつかみむらひじつろく

下野國湯津上村碑實錄 本一卷

下野國那須郡湯津上村なる古碑那須國造の碑の事を記せり。碑の所在、寸尺、碑銘其の他に就て考記す。

しもつけふどき

下野風土記 本二册

一册は下野國二荒山に關する諸家の遺文十一編を輯め、更に名所古蹟等を揭げ一册は名所、古蹟社寺其の他の事を記載せり。

しもつまおぼくらほつかうたつねまうすでうでう

下間大藏法橋尋申條々 本一卷 **伊勢 貞助**

永祿三年庚申(一五六〇)三月九日、大阪に於て、下間大藏法橋の尋問によりて答へたる、將軍隨行者の準備放實を說明したるものなり。永祿九年貞助の奧書あり。著者伊勢貞助は別に「伊勢貞助雜記」の著あり。

しもつまけいづ

下間系圖 本一卷

源姓にして清和天皇より系を引き、源三郎右衛門尉賴盛父子に至れり。「續群書類從」卷百二十九系圖部第二十四に入れたり。

しもとのまにまに

撞木隨 一卷 **平田 篤胤**

阿波國德島、山陵卷里より、鐵の眞柱をえみて言ましほしく尊ばしきこと、一つ二つ書る」といふ問に答へたるもの。凡て十四問答あり。書名につきては卷端に著者の說明あり。曰く「こをしも斯く名くる由は、彼の鐘もしもとのあたりのまにまにといへる等の如く、問ふ人の言のまにまに、大きくも小さくも答へたるを、こなたにも留めおきたるなればなりでもしたまたまもよみ見む人は、其の心を得て、これに說き盡したりとな思ひそ」と。やまと叢誌」第十五に收めたり。

◎平田篤胤の傳は「吉史傳」の下にあり。

しもとのまにまにふろく

撞木隨附錄 一卷 **平田 延胤**

「撞木隨」に關錄したるもの。卷首に「天地月の事など、服部翁の三大考出でてより、古事記傳、靈眞柱なも合せてかにかく疑ひいふ者もありしを、三大考辨々天說辨々の書出で來て、彼の徒も大かた口を閉たれど、猶疑ひ思ふふしぐくもありとて、人々より問造せたるに答へたる趣をこゝに記す」とて、凡て神代開闢の說に關する辨明なり。「やまと叢誌」第二に收めたり。

◎平田延胤は鐵胤の男にして、家學を以て知らる。明治五年壬申(一八七二)正月、四十五にて歿せり。

しもふさしれう

下總志料 本一卷

下總國葛飾郡に關する志料なれど、輯むる所最も粗なり。末に「北條五代記」より抄錄して、里見義弘と、北條氏康との國府臺合戰の事を揭げたり。

しもふさづ

下總圖 本一卷

下總國大圖なり。年代詳ならざれど、其の古圖なるを見る。

しもふさのくにがうちやう

下總國鄕帳 本一卷

下總國金鄕千四百八十六箇村、石高五十六萬八千三百三十一石一斗一升三合七勺四才を、各郡村別に列記したるものなり。元祿十五年壬午(一七〇二)二月一日、牧野備前守、松平伊豆守と署名せり。

しもふさのくにかつしかごほりむらむらめいさいしよ

下總國葛飾郡村々明細書 本一卷

川筋を界ぐる故に三國に跨れり。江戶川通十九箇村、古川通五箇村、下利根川通二十二箇村にして、內香取郡十七箇村、埴生郡三箇村、印旛郡二箇村、鬼怒川通十六箇村にして、常陸眞壁郡一箇村、下總結城郡九箇村等なり。

しもふさのくにくみあひむらむらたかにんべつかきあげちやう

下總國組合村々高人別書上帳 本一册

慶應年度の書上帳にして、幕府評定所より引繼ざたるものにて、內閣文庫に保存せり。

しもふさのくにこがねほんどじくわこちやう

下總國小金本土寺過去帳 本九册

一箇月三十日に排列して同寺根元以來の總亡靈の法號列記なり。凡そ數千人あり。「續群書類從」卷九百九十五、上中下各三卷完凡て九册あり。雜部第百四十五として收めたり。

しもふさのくにしゆさうどりしらべちやう

下總國酒造取調帳 本二册

幕府評定所より引繼ざて、內閣文庫に保存なせる調書なり。年度は詳ならず。

しもふさのくにつばきしんでんらんじやうき

下總國椿新田濫觴記 本一卷

同國椿新田の濫觴を記し、卷末に「天明八戊申年三月下旬より、鎌數村外八箇村の新川堀出入出來、鑒已酉年三月二十九日に御評定所に於て御裁許相濟、椿新田八箇村一圓靜謐に相成者也。寬文十戊年(一六三〇)より文化六年己巳年(一八〇九)迄合て百三十九年になるとかや」とあり。

しもふさのくにてうしのつ

下總國銚子圖 一鋪

下總國海上郡の東邊常陸との間利根川の下流を境となせて其の海口を銚子口と云ふ。此の圖は其邊の海陸を圖したるものにて村々島々往來海路等を圖せり。

しもふさのくにはにふごほりひたちのくにかはちごほりあづ

下總國埴生郡常陸國河內郡繪圖 本一鋪

兩國二郡の山川池沼、道路村落等を圖し彩色にて區別せり。藏請方の人の撰なるべし。

しもふさのくによちぜんづ　下總國輿地全圖　一折　鶴峯　戊申

下總一國の彩色地圖にて四圍に諸統計を掲ぐ。嘉永二年己酉(一八五〇九)の出版にかゝる。

◎總案戊申の傳記は「神際錄」の下にあり。

しもふさふどき　下總風土記　本朝一卷

日本總國風土記第百二冊取郡の部なり。奥書あり、「右之風土記中、下總國椙取郡之一册、以閣院大臣家藏本與官本、塗校合畢、嘉慶二年(一八〇四)正月下旬、左羽林郎藤原元隆」と記せり。但し僞書なり。

じもんかうそうき　寺門高僧記　本朝一卷

古來我が寺門に於ける功帝、功女、功臣、その他の略歷を記述したるもの。慶長九年甲辰(一六〇四)の奥書あり。「續群書類從」卷八百十一、釋家部第九十六に收めたり。

しもんじげん　私門示言　一卷　若林　懋

辨題、緒論、由道、助內、務本、依仁、問孟、明德、懂罔、道基等の目を分ちて論述したる漢文なり。文政十一年戊子(一八二八)秋八月、谷輪有梁の序を附して出版す。著者若林懋は武藏秩父の人。游龍園主人と號せり。

じやうわしやうにんぎやうじやう　淨阿上人行狀　本朝一卷

淨阿は牧野を俗姓とす。上總の人、年十九歲同國井生山圓通寺に入て剃髮し、轉々勉學達に名を成す。曆歷四年辛巳(一二〇〇一)七十三にて示寂す。「續群書類從」卷二百二十三、傳部第三十四に收めたり。

しやうあんぐわんねんごしゆうたあはせ　正安元年五種歌合　本朝一卷

春曙、春夕、春夜、戀形見、戀命の五種題にてよめる歌合なり。九條左大臣女、敎長女、藥行其の他にて都て三十五番あり。「續群書類從」卷四百〇九、和歌部第四十四にあり。

しやうあんぐわんねんしんねんりやうしやみゆき　正安元年新院兩社御幸記　本朝一卷

此の書は一名「參議雅俊卿記」の下に解題せり。

しやうあんさんねんだいじやうえのき　正安三年大嘗會記　一卷　三條　實躬

此の書は後伏見天皇の正安三年辛丑(一二九九)大嘗會の記なるが、卷端及び卷中の所々闕文せり。「群書類從」卷九十四、公事部第十七に收めたり。同書末に「右正安大嘗會記、依無類不能校正」とあり。

◎三條實躬の傳は「實躬卿記」の下にあり。

じやうゐんぐう　譲位考　本朝一卷　賀茂　眞淵

朝廷の儀式、官職、稱呼、其の他の故實等を說明したるもの。「譲位考」と題したる、卷頭の第一項「譲位といひ踐祚といふに別ありやと問」といふにとりて名けたるなるべし。全編諸方の質問に答へたる雜錄せるなり。寶曆九年己卯(一七五九)八月の奥書あり。

◎賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

じやういごけうくんわたくしのおぼえがき　上意御敎訓私之覺書　本朝一卷

卷端に「有德院樣享保六年辛丑(一七二一)九月二十六日、御詰帝鑑之間菊之間縁頬之御譜代衆、被召呼上意之趣私之覺書」と記せる數枚の寫本なり。卷末に「右上意拜聽之人、私之覺書妄に不可仕之旨、堅言を以て誡め、謹で寫之者也、寶曆十庚辰年(一七六〇)二月、觀山先生授之、謹寫之」とあり。

しやういちこくしじろく　聖一國師語錄　一卷　僧　虎關

聖一國師は諱を辨圓といひ洛東東福寺の開基なり。本書は其の法語、頌偈、佛祖贊、自贊等を拔萃したるものなり。元德三年辛未(一三一九)二月五日、編者虎關の序文あり。

◎虎關の傳は「海藏略傳」の下にあり。

しやううつしあさがほにつき　生寫朝顏日記　一卷

院本朝顏日記宿屋の段を活劇したる一册子なり、朝顏と名くる盲女、(本名深雪)情人綉澤淡路郎左衛門に邂逅して、當時其の人を知らず、後を追うて大井川に至り、大水川留に會し、邊聞爲す所を知らざる有樣、關助、德右衛門の由來、朝顏の盲目癒えし事を物せり。

じやうえんしふぜんぺん　叢園集前編　八卷　野村　公臺

著者の文集、前三卷に詩、後五卷に文を收載す。明和四年丁亥(一七六七)元民の序、同七年松崎惟時の序、大窪詩佛の跋等を附して同年發行す。

◎野村公臺の傳は「世說筆解」の下にあり。

じやうえんばいふ　上苑梅譜　本朝一卷

吹上御苑に在る所の梅の種類、及び花形の大略を列記したるもの。通計二百十六種あり。附錄として、松岡玄達の「怡顏齋梅品」中に出でたる梅の名六十一種を抄記し、なほ吹上御苑九種の和歌を載せたり。附錄二種は寬政二年庚戌(一七九〇)と同六年との記なり。「續みそのゝ」卷之八に收めらる。

しやうおうけんきんぷ　將翁軒禽譜　本朝二册

鳥類を綱羅して綫本、鳴鶴、游の諸類に分ちて詳說せり。文政十一年戊子(一八二八)の寫本に係る。

しやうおうにねんさんじふばんうたあはせ　正應二年三十番歌合　一卷

正應二年己丑(一二八九)月前露を題として伏見院女房、中將、藤原大納言典侍、從三位親子その他の十人を會したる三十番歌合なり。「群書類從」卷二百〇三、和歌部第五十八に收めたり。

しやうおうろくねんくわんぶ　正應六年官符　本朝一卷　小槻　晴富

金剛峯寺に關する太政官牒なり。正應六年癸巳(一二九三)の作。著者小槻宿禰は修理東大寺大佛長官九五位上行左大史兼能登介とあり。「續群書類從」卷七十六、神祇部第七十六に在り。

しやうおうろくねんしちぐわつはちにちせんみやう　正應六年七月八日宣命　本朝一枚　經長

伏見天皇の正應六年癸巳(一二九三)七月八日の宣命なり。僅か一枚に認めて、「輪池叢書」第八に入れたり。

しやうかいをしやうさやうじつ　性海和尙行實　本朝一卷　小槻　晴富

東福寺四十三世性海和尙の傳記なり。俗姓は橘氏諱は嶺見、信州摸田縣の人なり。夙く佛門に入りて研究修德す。應永三年丙子(一四〇五六)八十二にて入寂す。「續群書類從」卷二百三十九、傳部第五十に收めたり。

しやうかいをしやうさやうじつ　性海和尙行實　本朝一卷　廣丹　晨夫

東福寺四十三世性海和尙の傳記なり。俗姓は橘氏諱は嶺見、信州摸田縣の人なり。夙く佛門に入りて研究修德す。應永三年丙子(一四〇五六)八十二にて入寂す。「續群書類從」卷二百三十九、傳部第五十に收めたり。

しやうかえやうしふ　匠家繪樣集　二卷　廣丹　晨夫

匠家に必要なる種々工作上の繪樣を圖示したるもの

しやうかこじつろく　匠家故實錄　三卷　松浦　久信

番匠の故實を始め、地鎭祭、地曳、龍伏(イレフシ)、初釿、清鉋、主柱、上棟等の式禮、棟札之事、家堅祭之大意、祭神のなること其の名の表すが如し。著者廣井晨夫の事は、別錄「匠家棟秘傳集」の下にあり。

しやうかくじゆつえうかい　匠家矩術要解　一折　平內(イノウチ)　安房

匠家必要の規矩準繩に關する說明なり。天保四年癸巳(一八三三)著者の奥書に「今數理を推し、解義をなし、眞の矩術を施し、初學末匠の一助とす。僅僅帖子といへども、墨繩矩術の定則此の書に盡せりといへり。數理に照して圖解せること詳密なり

しやうかごくひでんしふ　匠家棟秘傳集　二卷　廣丹　晨夫

匠家建築に關する規矩準繩の事を記す。尺式、造營式、料柾式、棟割之圖、同配之圖、軒廻之圖式、其の他種々の事を記して匠家の參考に供したるものなり。享保十二年丁未(一七二七)の出版にかゝる。著者廣丹晨夫は官匠なり。本書の外に「匠家繪樣集」を著せり。

しやうかきたやまきやうかうわか　正嘉北山行幸和歌　本朝一卷

正嘉三年己未(一二五九)三月、北山第に行幸の時、御製以下の和歌を輯む。卷首に太上皇の和歌一首並序あり。從一位藤原道家撰名す。

しやうかくじゆつえうかい　匠家矩術要解　一折　平內(イノウチ)　安房

匠家必要の規矩準繩に關する說明なり。天保四年癸巳(一八三三)著者の奥書に「今數理を推し、解義をなし、眞の矩術を施し、初學末匠の一助とす。僅僅帖子といへども、墨繩矩術の定則此の書に盡せりといへり。數理に照して圖解せること詳密なり

しやうかごくひでんしふ　匠家棟秘傳集　二卷　廣丹　晨夫

匠家建築に關する規矩準繩の事を記す。尺式、造營式、料柾式、棟割之圖、同配之圖、軒廻之圖式、其の他種々の事を記して匠家の參考に供したるものなり。享保十二年丁未(一七二七)の出版にかゝる。著者廣丹晨夫は官匠なり。本書の外に「匠家繪樣集」を著せり。

しやうかこじつろく　匠家故實錄　三卷　松浦　久信

番匠の故實を始め、地鎭祭、地曳、龍伏(イレフシ)、初釿、清鉋、主柱、上棟等の式禮、棟札之事、家堅祭之大意、祭神

勘請等之事、神供物祓詞、祭壇幣方、工匠祖神などの事を記したるもの。享和三年癸亥(一四六三)正月の自序、文化五年戊辰(一四六八)正月、栗林安正の跋あり。

◎松浦久信の傳は『家相祕傳集』の下にあり。

しやうかだん

橡下談　本朝六卷　三好　義英

太宰春臺の『經濟錄』を抄評したるものなり。故に內題には、『經濟錄術評』と題せり。著者三好義英のことは『天神講釋節錄』の下にあり。

しやうかひつどくじかい

商家必讀國字解　四卷　堤　正敏

商業經濟の事を論述したるもの。文化二年乙丑(一四六五)に刊刻せり。

しやうかひつようき

匠家必用記　三卷

番匠の營繕せる祖神の事を始め、神社佛閣の作方の故實、棟上の式禮、道具の起原等の事を記したるものなり。

しやうかひながた

匠家雛形　二卷　本林　常將

工匠の雛形圖式を示したるもの。種々の鳥居、藥醫門、棟門、玄關等の圖解、規矩繩墨の使用法等、凡て匠家の心得べき事四十餘箇條を記載したり。嘉永四年辛亥(一八五一)の作。著者本林常將は盛岡の人なり。

しやうかんぐわいでん

傷寒外傳　本朝三卷　橘　春暉

此の書は醫書にて、元氣、陽、陰、神、經絡、三焦、榮衛、三陽、三陰、其の他五十餘項を記す。就中卷の下には、本論傳來、本論編次、本論助字、本論藥物、變說等を摘記せり。光格天皇の寬政八年丙辰(一四五六)華華堂藏版の由を記せり。今見るところは寫本一冊に作れり。

◎橘春暉の傳は『國語律呂解』の下にあり。

しやうかんぐわいでん

傷寒外傳　本朝三卷　橘　春暉

此の書は醫書にて、元氣、陽、陰、神、經絡、三焦、榮衛、三陽、三陰、其の他五十餘項を記す。就中卷の下には、本論傳來、本論編次、本論助字、本論藥物、變說等を摘記せり。光格天皇の寬政八年丙辰(一四五六)華華堂藏版の由を記せり。今見るところは寫本一冊に作れり。

◎橘春暉の傳は『國語律呂解』の下にあり。

しやうかんぐわうえう

傷寒廣要　十二卷　多紀　元堅

晉唐以來明清に至る各醫書に就き、『傷寒論』に律して其の精英を綴輯したるもの。引用百五十家に及び、經旨を嚴むるの要を錄すとて廣要と名けたりと。文政十年丁亥(一四八七)多紀元胤の序あり。

◎多紀元堅は多紀元簡の次子。字を柔、通稱を安叔、號を寢庭といひ、提舉ぜられて幕府の醫官となり、晩に法印に叙せられ、藥眞院と稱したるを、更に樂春院と改めたり。

しやうかんぐわうえう

傷寒廣要　十二卷　多紀　元堅

晉唐以來明清に至る各醫書に就き、『傷寒論』に律して其の精英を綴輯したるもの。引用百五十家に及び、經旨を嚴むるの要を錄すとて廣要と名けたりと。文政十年丁亥(一四八七)多紀元胤の序あり。

◎多紀元堅は多紀元簡の次子。字を柔、通稱を安叔、號を寢庭といひ、提舉ぜられて幕府の醫官となり、晩に法印に叙せられ、藥眞院と稱したるを、更に樂春院と改めたり。

しやうかんくわいそ

傷寒圖說　一卷　原　元麟

醫書『傷寒論』中の圖すべきものを擧げて圖說したるもの。總目を示せば、中風傷寒陰陽兩道圖說、陽道中風證治圖說、陰道傷寒證治圖說、少陰卒病證治圖說、三陽合病證治圖說、誤汗證治圖說、誤下證治圖說、中風傷寒轉屬圖說、三陰三陽病位圖說。附錄に類證異方を圖表せり。寬政十年戊午(一四五八)の自序あり。著者原元麟は東都の人にして子振と字し、晉堂と號す。別著に『傷寒精義』五卷あり。

しやうかんづせつ

傷寒圖說　一卷　原　元麟

醫書『傷寒論』中の圖すべきものを擧げて圖說したるもの。總目を示せば、中風傷寒陰陽兩道圖說、陽道中風證治圖說、陰道傷寒證治圖說、少陰卒病證治圖說、三陽合病證治圖說、誤汗證治圖說、誤下證治圖說、中風傷寒轉屬圖說、三陰三陽病位圖說。附錄に類證異方を圖表せり。寬政十年戊午(一四五八)の自序あり。著者原元麟は東都の人にして子振と字し、晉堂と號す。別著に『傷寒精義』五卷あり。

しやうかんめいすうかい

傷寒名數解　五卷　中西　惟忠

醫書『傷寒論』の名數を類列解釋したるもの。全編漢文なり。應取惟恭、迎煥、渡邊宥密等の同校するところにして、安永三年甲午(一四三四)の刻成也。

◎中西惟忠は平安の醫者にして、子文と字し、圭馬と稱し、深齋と號す。幼にして儒を好み、中途志を變して醫となり、吉益爲則の古醫方を學ぶ。後門を杜ちて醫書を攻究すること三十年、遂に本書及び傷寒論辨正、刪訂傷寒論等を著せり。これより諸藩厚聘を以て招けども辭して就かず。享和三年癸亥(一四六三)年八十にて歿せり。

しやうかんろいかんべん

傷寒論易簡辨　本朝一卷

傷寒論の大意を略述したるもの。僅十枚より成る。抑、傷寒論一編は、六經を辨じ、十脈を別ち、病證を究じ、處劑を分ち、盡く條理比例を立てこれ

を明にし、其の詳悉明了、日月の朗々然たるが如し、實に方法の樞要、醫門の寶筏なり。然れども其の意淵深にして窺奧寡り難し、こゝを以て其の義を講究するもの或は寡し、唐宋以來名家諸註頗る備具すと雖も臆斷のもの多し。本邦醫學者の註釋評論するもの、亦、少からず、次々に掲ぐべし。

しやうかんろんじつぎ

傷寒論實義　五卷　早川　宗安

傷寒論を註釋したるものなり。編輯の年月を記さず。著者の傳記詳ならず。

しやうかんろんしふき

傷寒論輯義　七卷　多紀　元簡

傷寒論を註釋したるもの。享和元年辛酉(一四六一)の自序、文政五年壬午(一四八二)元堅の跋あり

◎多紀元簡の傳は『醫方類聚』の下にあり。

しやうかんろんしふせい

傷寒論集成　十卷　山田　正珍

醫書傷寒論に基き、諸書諸家の說を輯用して集成したるもの。首卷を序目凡例とし、卷一を太陽上編、卷二、三を太陽中編、卷四、五を太陽下編とし、卷六、七を陽明編とし、卷八を太陰編、卷九を厥陰編、卷十を雜病編とす。寬政元年己酉(一四四九)太田元貞の序、同二年丹波元簡の序、同壬子筥原方恒の跋あり。

◎山田正珍の傳記は『櫟園叢話』の下にあり。

しやうかんろんじゆつぎ

傷寒論述義　五卷　多紀　元堅

醫書『傷寒論』を述文にて講述敷衍したるもの。文政十年丁亥(一四八七)の自序あり。其の中に曰く、「以爲前賢有類證、有類治、有類方、未有求病情病機、能加剖判者、故微言大義、往々湮鬱而不明焉、仍不自揣、疏其要、通其異、纂五家、以擴充輯義之餘蘊、參互攷究、具爲條析、而更設答問數則、以辨其大例、附之卷末、竊恐猶是不過於想像懸揣已」云々とあり。五卷一冊に作れる。

◎多紀元堅の傳記は『傷寒廣要』の下にあり。

しやうかんろんしふせいぶんふくせいかい

傷寒論正文復聖解　四卷　古矢　知白

傷寒論を註釋したるものなり。文久元年辛酉(一五一一)の自序あり。其の卷首に題して「傷寒論古訓正文」と稱せり。

◎伊藤馨は出羽の儒者なり。字を子德、通稱を大三郎と稱し、風山と號せり。江戸に住したり。

しやうかんろんるるしよう

傷寒論類證　本朝一卷　寺尾　顯融

傷寒論全編に類證を加へたること名の如し。著者寺尾顯融は日向延岡の人、字を子明といへり。

しやうかんろんわごじもう

傷寒論和語示蒙　二卷　宮崎　貞順

傷寒論を和解して初學者に便したるなり。天保八年丁酉(一四九七)の自序、及び伊藤治碩の序を掲ぐ。

しやうき

匠記　本朝一卷　成　頼

保元四年己卯(一八一九)二月、應保元年辛巳(一一八二)十二月、同二年二月、嘉應元年己丑(一八二九)二月等の記錄十數條より成る。また、要識成頼朝記」とも云へり。

しやうきかう

傷寒論辨正　六卷　中西　惟忠

醫書『傷寒論』に基きて、脈證を辨論し、病病の變に應じて其の治法の機軸を示したるものなり。全編漢文を以て記す。寬政二年庚戌(一四五〇)六冊に作れり。

◎中西惟忠の傳記は『傷寒論古訓正文』の下にあり。

しやうかんろんもんじかう

傷寒論文字攷　四卷　伊藤　擊

傷寒論に關する字句を抄錄して訓詁考說したるもの。素問張書其の他より指鈔せるなり。嘉永三年庚戌(一八五一)丹波元堅の序あり。四卷中二卷は續編なり。同六年癸丑中島重の跋を附す。

しやうきかう

傷寒論辨正　六卷　中西　惟忠

醫書『傷寒論』に基きて、脈證を辨論し、病病の變に應じて其の治法の機軸を示したるものなり。全編漢文を以て記す。寬政二年庚戌(一四五〇)六冊に作れり。

◎中西惟忠の傳記は『傷寒論古訓正文』の下にあり。

しやうかんろんもんじかう

傷寒論文字攷　四卷　伊藤　擊

傷寒論に關する字句を抄錄して訓詁考說したるもの。素問張書其の他より指鈔せるなり。嘉永三年庚戌(一八五一)丹波元堅の序あり。四卷中二卷は續編なり。同六年癸丑中島重の跋を附す。

しやうきぐんきかう

鎭旗考　本朝一卷　近藤　守重

清朝の軍旗『鎭旗』を圖解考證したるもの。「喇嘛考」を附錄とせり。著者近藤守重の傳は『右文故事』の下に出でたり。

しやうきぬぶるひ

將裝紺縅　二卷　福島　順裝

梟盧の指方を示したる稀珍本。大橋錄英の校正に

係る。文化元年甲子(一二四六)四月、山本北山の序あり。

しやうぎこまのき　将棋駒之記　写一巻　水無瀬兼成

登子親具、嘗て豊臣秀次の命により将棊の駒の銘を作りたることありき。本書は其の始末を記せるものなり。著者水無瀬兼成は初め子なかりし時、高倉永家の子親具を養子とせしが、後實子氏成生れたれば、親具は家督を辭し、剃髪して一齋と號せり。能筆の名あるより、秀次将棊駒銘をかゝしめたりとなり。

しやうぎさくもの　将棊作物　写八冊

古宗碧、二代目宗印、三代目宗桂等の将棊詰手を輯錄説明したるものなり。

しやうきさん　聖圖贊　十六巻　僧　良定

佛教諸宗の大綱、諸家の教相緣起根地等の分別を論悉したるもの。始めに三國緣起として世界建立、天竺國の王種十四代を盡し、本朝由來百王百代間の世間事及び淨土、華嚴、天台、三論、法相、大乘律眞言、成實、俱舍四分律宗の地論攝論等の出世間大綱を論じ、凡を五百目を解釋したるものなり。もと「淨土初學鈔」に就きて諸家の大綱を略記せる一部三巻の疏「圖額集」といふものありしを註釋佐補して、「聖圖贊」と名けたるなり。枚に長題には「圖額聖圖贊」といへり。慶長十八年癸丑(一二七三)の草案を提したるものなり。假名文にて記せり。天保七年丙申(一二四九六)其の師佐藤坦の序、友人龜田梓の序あり。

◎宮本鉉は常陸の人伯耶と号し、窯村と號す。夙く學に志し、家を同胞に譲りて、江戸に出で、佐藤一齋に就きて儒を學び、遂に其の學成就す。

じやうきやうにつき　上京日記　写一巻

寛永二年乙酉(一三六五)二月二十六日、江戸を發足して、三月十九日京に着し、八月十六日まで滞留して十七日京を出立し、同二十八日江戸に歸着す。其の間、天氣の晴雨、宿主の氏名を始めとして、歷覽する所の名所、寺院、神社、佛閣、祭禮、法會、飲食、土産の事に至るまで、詳しく記せり。されど文章極めて倉卒にして、文字あるもの、記とは見えず。或は商人などの日記なるべし。巻末に、「正德二年辰(一三七二)二月下旬清書、宮城粂相」と書せり

しやうきやうもんだふ　正享問答　一巻　三輪　希賢

治民理財の要術に關する意見な問答體に詳述したるもの。是れ實に雒山侯及び小濱侯の下問に應じたるものなりと云ふ。書中には、納税の事を尤も詳に論じ、盜賊兵異之事、祥瑞兵災等の事等を記載したり。享保十六年辛亥(一三九一)の自序あり。初め起稿せしは正德年中にありたりと云ふ。題號の所由知るべし。近刊「日本文庫」第六編にも收めたり。著者三輪希賢の傳は「救饑大意附會大意」の下にあり。

しやうきやうりやくでん　聖教略傳　一巻

性空上人の略傳を漢文にて記したるもの。天保十年己亥(一二四九九)正月、九十六歳にて入寂す。

しやうぎさくもの　將棊作物　写八册

古宗碧、二代目宗印、三代目宗桂等の將棊詰手を輯錄説明したるものなり。

しやうきさん　聖圖贊　十六巻　僧　良定

佛教諸宗の大綱、諸家の教相緣起根地等の分別を論悉したるもの。始めに三國緣起として世界建立、天竺國の王種十四代を盡し、本朝由來百王百代間の世間事及び淨土、華嚴、天台、三論、法相、大乘律眞言、成實、俱舍四分律宗の地論攝論等の出世間大綱を論じ、凡を五百目を解釋したるものなり。もと「淨土初學鈔」に就きて諸家の大綱を略記せる一部三巻の疏「圖額集」といふものありしを註釋佐補して、「聖圖贊」と名けたるなり。枚に長題には「圖額聖圖贊」といへり。慶長十八年癸丑(一二七三)の草案

じやうぎぐさ　淨基句集　写一巻　水無瀬兼成

登子親具、嘗て豊臣秀次の命により將棊の駒の銘を作りたることありき。本書は其の始末を記せるものなり。著者水無瀬兼成は初め子なかりし時、高倉永家の子親具を養子とせしが、後實子氏成生れたれば、親具は家督を辭し、剃髪して一齋と號せり。能筆の名あるより、秀次將棊駒銘をかゝしめたりとなり。

しやうぎさくもの　將棊作物　写八册

古宗碧、二代目宗印、三代目宗桂等の將棊詰手を輯錄説明したるものなり。

しやうきさん　聖圖贊　十六巻　僧　良定

佛教諸宗の大綱、諸家の教相緣起根地等の分別を論悉したるもの。始めに三國緣起として世界建立、天竺國の王種十四代を盡し、本朝由來百王百代間の世間事及び淨土、華嚴、天台、三論、法相、大乘律眞言、成實、俱舍四分律宗の地論攝論等の出世間大綱を論じ、凡を五百目を解釋したるものなり。もと「淨土初學鈔」に就きて諸家の大綱を略記せる一部三巻の疏「圖額集」といふものありしを註釋佐補して、「聖圖贊」と名けたるなり。枚に長題には「圖額聖圖贊」といへり。慶長十八年癸丑(一二七三)の草案

じやうきやうにつき　上京日記　写一巻

寛永二年乙酉(一三六五)二月二十六日、江戸を發足して、三月十九日京に着し、八月十六日まで滞留して十七日京を出立し、同二十八日江戸に歸着す。其の間、天氣の晴雨、宿主の氏名を始めとして、歷覽する所の名所、寺院、神社、佛閣、祭禮、法會、飲食、土産の事に至るまで、詳しく記せり。されど文章極めて倉卒にして、文字あるもの、記とは見えず。或は商人などの日記なるべし。巻末に、「正德二年辰(一三七二)二月下旬清書、宮城粂相」と書せり

しやうきやうもんだふ　正享問答　一巻　三輪　希賢

治民理財の要術に關する意見な問答體に詳述したるもの。是れ實に雒山侯及び小濱侯の下問に應じたるものなりと云ふ。書中には、納税の事を尤も詳に論じ、盜賊兵異之事、祥瑞兵災等の事等を記載したり。享保十六年辛亥(一三九一)の自序あり。初め起稿せしは正德年中にありたりと云ふ。題號の所由知るべし。近刊「日本文庫」第六編にも收めたり。著者三輪希賢の傳は「救饑大意附會大意」の下にあり。

じやうきやうりやくでん　聖教略傳　一巻

性空上人の略傳を漢文にて記したるもの。天保十年己亥(一二四九九)正月、九十六歳にて入寂す。

じやうぎぐさ　淨基句集　写一巻　水無瀬兼成

登子親具、嘗て豊臣秀次の命により將棊の駒の銘を作りたることありき。本書は其の始末を記せるものなり。著者水無瀬兼成は初め子なかりし時、高倉永家の子親具を養子とせしが、後實子氏成生れたれば、親具は家督を辭し、剃髪して一齋と號せり。能筆の名あるより、秀次將棊駒銘をかゝしめたりとなり。

じやうぎさくもの　將棊作物　写八册

古宗碧、二代目宗印、三代目宗桂等の將棊詰手を輯錄説明したるものなり。

しやうきさん　聖圖贊　十六巻　僧　良定

佛教諸宗の大綱、諸家の教相緣起根地等の分別を論悉したるもの。始めに三國緣起として世界建立、天竺國の王種十四代を盡し、本朝由來百王百代間の世間事及び淨土、華嚴、天台、三論、法相、大乘律眞言、成實、俱舍四分律宗の地論攝論等の出世間大綱を論じ、凡を五百目を解釋したるものなり。もと「淨土初學鈔」に就きて諸家の大綱を略記せる一部三巻の疏「圖額集」といふものありしを註釋佐補して、「聖圖贊」と名けたるなり。枚に長題には「圖額聖圖贊」といへり。慶長十八年癸丑(一二七三)の草案

じやうぐうわうたいしぼさつでん　上宮皇太子菩薩傳　写一巻

漢文三枚に作られ、「續群書類從」巻百八十九、傳部第一にあり。巻末に正應四年辛卯(一二九一)書寫の奥書あり。

じやうぐうしやうとくたいしでんほつつき　上宮聖德太子傳補闕記　一巻

「日本書紀屠蘇」並に「四天王寺聖德王傳」の未だ委細を盡さざるより本書を作れり。具に行事の狀を漢文にて記す。「群書類從」巻六十四傳部一にあり。

じやうぐうしやうとくはふわういせつ　上宮聖德法王帝說　一巻

聖德法王に就き古記古錄を徵集したるものなり。「群書類從」巻六十四、傳部第一に收めたり。

しやうくうしやうにんでん　性空上人傳　一巻

性空は從四位下橘善根の子、三十六歳にして出家し、日向鵜戸山に住し、後播磨書寫山に移り、圓雅幽寂して一生を送れり。或はいふ寛和二年丙戌(一九八六)七十七にて寂す。「續群書類從」巻二百十七、傳部第二十八に入れたり。

じやうくわうえんはふいんげつかうしふ　淨光院法印堯孝集　写一巻　僧　堯孝

著者の獻集。寛永元年甲子(一二八四)中院通勝の奥書あり。著者堯孝の傳は「伊勢紀行」の下にあり。

じやうくわうくしざやうじやう　常光國師行狀　写一巻

江州淺井郡の人、明應と稱し、宗谷と字し、若虛と號す。夙く佛門に歸して修行鍛錬し、壽八十にて入寂するまでを略傳す。漢文にて記す。「續群書類從」巻二百三十九、傳部第五十にあり。

じやうくわうごらくしよくぶるゐ　上皇御落飾部類　写一巻

元應三年辛酉(一九九一)五月八日、淸和上皇の御落飾以下、歷代の御落飾を集錄したるもの。「三代實錄」「扶桑略記」「新國史」「百練抄」等の古記により集輯したるものなり。「續群書類從」巻七百四十三、雜家部第二十八に收めたり。

しやうくわうしやうにんでん　聖光上人傳　写一巻　僧　道光

聖光は筑後善導寺の開山なり。辨長と稱し、同國加月庄の人。應保二年壬午(一一六二)五月六日生れ、七歳にして善提寺に入り、妙法々師に從て學び、漸く精勵して遂に智識となり、嘉禎四年戊戌(一二九八)七十七にて寂す。「續群書類從」巻二百十七、傳部第二十八に入れたり。

◎道光の傳は「鎌倉光明寺開山御傳」の下にあり。

しやうくわうにつき　正廣日記　写一巻　僧　正廣

しやうぎはやしなん　將棊早指南　二巻　大橋　宗英

將棊指方の順序法式を領解し易く記したる稀珍祭丙書。一名を「步武二編」といひ、故名人大橋宗英の著を孫大橋宗英及び大橋錄英が刪刻したるなり。天保十年己亥(一二四九九)刊行。

しやうぎめうしゆ　將棊妙手　二巻　大橋　宗桂

將棊の指方を記したる小冊子なり。文化十二年乙亥(一二四七五)十月、朝川善庵の序を載す。

◎大橋宗桂は醫者なり、兼ねて將棊の名手を以て稱せらる。其の父吉田宗恂醫て明に行きて醫學を修め、また將棊を學び、頗る其の技に妙を得たり、宗桂其の傳を受けて名を關さ、技を以て幕府の祿を受く。萬治三年庚子(一三二〇)九月二十五日、年四十八にて歿せり。芝二本榎上行寺に葬れり。

じやうきやうこじつ　上卿故實　一巻

上卿座事、着陣時蒙上臈之許否、着奥座事、移着端座事、付刷穗直衣事、起端座事等より、參陣時劍帶事、禮節事、車立樣事等に至る凡て五十三項を記載す。引くところは多く近代の例なり。「群書類從」巻百、公事部第二十二に收めたり。

じやうきやうでんそうだん　釀經傳叢談　二巻　宮本　鉉

「經說」と題して經の精華を論述し、其概要を抽

著者の紀行。文明五年癸巳(一四七三)駿河に下るときの道の記なり。

◎正廣は招月庵徹書記の弟子にして、歌人なり。詩て詠じて曰く、「小簾の戸に獨や月の澄みぬらん、日頃の袖に涙もとめて」と。人呼んで日頃の正廣といふ。著書は本書の外に、正廣筆記一卷、松下集一卷等あり。

しやうくわうひつき

正廣筆記 一卷 僧 正廣

歌學に關する一切の事を評論したるものなり。人に就き歌により、詞に隨て一々評論す。著者正廣の傳は「正廣日記」の下にあり。

しやうぐわつさんせちゑおせんのづしだい

正月三節會御膳之圖次第 一卷 紀 宗直

別名「三節會御膳圖」の下に解題し、著者の傳も同下に揭げたり。

しやうぐんき

將軍記 十七卷 林 道春

保元三年戊寅(一一五八)源頼朝が皇后宮權少進に任ぜらるゝ事より、慶長三年戊戌(一六一五)豐臣秀吉薨去に至る、歷代將軍の事績を年序を逐うて記したるものなり。寛文四年甲辰(一六六四)の刊行にかゝる。

◎林道春の傳は「羅山文集」の下に出づ。

しやうぐんけうたあはせ

將軍家歌合 一卷

文明十四年壬寅(一四八二)六月十日、原上霞、見花忘歸、蔵納涼、田早秋、月似鏡、聲聞水、不叶心戀、互恨戀、山家戸、祈世神祇の題にて、二條前關白、天台座主尊鎮、前大納言爲富、前左大臣三條實量、右衛門督爲廣、前內大臣信量その他の歌合なり。「群書類從」卷二百十一、和歌部第六十六に收めたり。

しやうぐんけおびやうぶわか

將軍家御屏風和歌 一卷

道躬、光榮、公福其の他の作、七十二首を輯む。將軍家屏風の歌といふ。元文四年己未(一七三九)の寫本にかゝる。

しやうぐんけき

關東將軍家記 一卷 關東京都將軍、京都將軍、執權政所等の略傳譜なり。記者年代共に詳ならず。

しやうぐんけふ

將軍家譜 七卷 林 道春

鎌倉京都の將軍より、織田信長、豐臣秀吉に至る、歷世の系譜を漢文にて記したるものなり。

◎林道春の傳は「羅山文集」の下にあり。

しやうぐんごぐわいせきでん

將軍御外戚傳 五卷

德川氏累代の外戚の系譜を詳記したるものなり。家康外祖母のことを始めとして、吉宗の母のこと等に至り、宗家、支庶、乳母、側女等の系譜をも含めり。

しやうぐんしだい

將軍次第 一卷

右大將源朝臣頼朝、左衛門督頼家、右大臣實朝、及び從二位平政子、大納言藤原頼經、三位中將藤原頼嗣、一品親王宗尊、以上の補任次第を略記せるもの。「續群書類從」卷九十一、補任部第三十一に收む

しやうぐんしつけんしだい

將軍執權次第 一卷

治承四年庚子(一八四〇)將軍源頼朝以下、建武元年甲戌(一九九四)同成良親王に至る將軍執權次第を記せるものなり。「群書類從」卷四十八、補任部第五に收めたり。

しやうぐんせんげきりやく

將軍宣下記略 二卷 林 信充

享保元年丙申(一七一六)六月二十二日、德川吉宗に、征夷將軍の宣下ありし時の詳細記錄なり。同年冬、命を奉じて、林七三郎信充が、林百助信智と共に記するところなり。

◎林信充の傳記は「孝子十五郎傳」の下にあり。

しやうぐんせんげさんじふいちどのぎ

將軍宣下三十一度儀 一卷

鎌倉三代將軍をはじめ、足利將軍を經て德川四代家綱に至る、三十一度の將軍宣下の儀式に、異同あることを考證記述したるものなり。鎌倉時代のは「東鑑」「平家物語」「太平記」等を引證して論述したり。

しやうぐんせんげさんじふいちどのしだい

將軍宣下三十一度の儀不同の次第 一卷 新井 君美

頼朝、頼家、實朝、頼經、頼嗣、宗尊親王、惟康親王、久明親王、守邦親王、護良親王、成良親王、室町十五代、德川氏五代までの、將軍宣下の儀の異同を略記せり。大紙横折二枚に細書し、內閣文庫に特別書として藏せり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

しやうぐんせんげにつきしらべしよ

將軍宣下に付調書 五十冊

幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せるものにして、享保年度より、慶應年度に及べり。

しやうぐんせんげべつき

將軍宣下別記 一卷

享保元年丙申(一七一六)德川吉宗征夷大將軍拜命の後、八月廿五日、夫々臣下へ與へたる物品の記也

しやうぐんとくがはけれいてんろく

將軍德川家禮典錄 二十六卷

卷之一年中行事正月より、卷之二十六大奥女中御定書迄に曾前書之事に至る數百項よりなれり。外に御木丸表向御座敷圖、同御座敷向繪樣、紅葉山、御宮、御鎭屋繪圖を添へたり。四十一册に作り、二枚の圖を添へたり。本書は松平慶永、池田章政、伊達宗城等總裁となり、宮重朴山、阿久澤壯助等編纂し、鈴木重嶺事業を補助して作りたるものなり。

しやうぐんのまき

將軍之卷 一卷・小笠原政清

「頼朝之御事」として、其の略歷を記し、武衛に關する故實を主と記せり。永正元年甲子(一五〇四)政清の奥書に、一家の祕傳を傳授する由あり、以下寛永二年乙丑(一六二五)に至る迄の諸家の奥書あり

◎小笠原政清のことは「弓箭摘要」の下にあり。

しやうぐんよしあきらなにはまうでのき

將軍義詮難波詣記 一卷 足利 義詮

此の書は一名義詮公難波紀行」の下に解題せり。

じやうけいゐんはうもつもくろく

成慶院寶物目錄 一卷

紀州高野山金剛峯寺細入坊成慶院へ武田晴信以來納置したる所の寶物、古書籍等の目錄にて、寛文六年丙午(一六六六)春三月、櫻大僧都法印秀雅の奥書あり。右箇件々之書者、彼名家之芳筆、而當寺之重寶、世間、或紛失破除、而終滅其必乎。於是乎、修理之、卷軸之如之者、當寺之寶物、而壇那追感之一端者乎也」と記せり。

しやうげんぐわんねんき

正元元年記 一卷

後深草天皇の正元元年己未(一二五九)より、寛元四年甲寅(一二四四)に至る年間の仕置伺案等の抄出したるものなり。今傳ふるところは著し殘闕なり。著者經光は當時中納言たり。本書の外に「經光卿改元定記」二卷あり。

しやうげんぐわんねんとうぐうごげんぶくぶるるき

正元元年東宮御元服部類記 一卷

正元元年己未(一二五九)八月、東宮(鎭山院)御元服に關する記なり。「貞觀儀記」の抄か。元祿、享保等の寫本奥書あり。「續群書類從」卷二百九十五、公事部第四十八にあり。

じやうけんこうふ

常憲公譜 一卷

德川五代將軍常憲院綱吉一生間の年譜なり。

しやうけんさつえう

倚儉撮要 三卷 戸田 養悟

節儉の要を論述して專ら修身齊家の術を說示す。有限の財產を以て無究の人慾に絡はんとするの大誤より說破して、田野の愚生も遂に貧困の憂を免るべきことを敎ふ。全編假字にて記せり。享保十八年癸丑(一七三三)の自序あるも、明和七年庚寅(一七七〇)男戸田居正の序を附して出版す。著者戸田養悟は伊豫大洲の人なり。

しやうけんせう

詳獻抄 四卷

德川幕府に於ける天明八年戊申(一七八八)より、寛政六年甲寅(一七九四)に至る年間の仕置伺案等を拔抄したるものなり。

じやうけんせう
上堅抄　本篇一巻　上原　堅家
弓矢の故實傳書なり。永正十年癸酉(一五一三)の作なる由、同九年結城左衛門尉國家の奥書あり。次に元祿十三年庚辰(一七〇〇)貞方の奥書あり。「弓馬祕抄」の中に收む。

しやうげんにねんろんらくしよ
正元二年院落書　本篇一巻
正元二年庚申(一二六〇)正月十七日、院御所落書を集記したるもの。年始凶事あり、國土災難あり等より、武家過差あり、聖運既に來にあり等に至る四十八を挙げたり。「續群書類從」卷九百十、雜部第百三十に入れたり。

じやうげんほんざう
上言本草　本篇一巻　阿部　照任
藥石、藥草中より、其の新奇なるもの百數十種を撰びて將軍家へ進上せしものなりといふ。享保九年甲辰(一七二四)の事に係る。
◎阿部照任は常陸盛岡の人。名を友之進、字を伯重と稱す。延寶中大阪に航海中颶風の爲めに清國に漂着し、十八年間同國に留りて本草學を研究し、歸りて江戸に住し、享保中本草學を以て幕府に仕ふ博物學上の清鑑博識殆んど當時に比なかりきといふ。從て來り學ぶもの多し。著書には本草綱目類考、本草徵義、採藥筆記、採藥使記、眞偽讀藥考、三百種考、藥性要覽、藥性裁擇記、奇草集、人參耕作記、七十二候辨正、大雅之論、硫黄孟考、柳田雜記、精神考、將翁軒隨筆、續將翁軒隨筆等あり。寛曆三年癸酉(一七五三)正月、神田三河町の自宅に歿す

しやうげんみやうぎせう
正源明義抄　九巻
浄土宗の開祖法然上人(源空)の傳記。假字文にて九十餘項を分ち、同上人一生の事績を記せり。本書は眞宗存覺上人の作なりと云ふ說あれども、全く嘘僞なり。卷中記す所荒唐の事頗る多し。元祿五年壬申(一六九二)四册として刊行す。

しやうこいてん
尚古歷典　二巻　佐藤　方定
原名を「容魂」といふ。卽ち「くゎ」の部に解題したり。

しやうこがいしよくいろらん
尚古鎧色一覽　二巻　本間　百里
鎧威毛の圖說を集類圖說したるもの。凡例中に「此の圖に解說を加ふるは苟記物語等の文によりて、予が臆說なり。予が臆說をも交へしなり云々といへり。種扮小册子に作る。天保四年癸巳(一八三三)孟秋の跋あり。
◎本間百里の傳は「服色圖解」の下にあり。

しやうこかなづかひ
尚古假字格　一帖・山本　明清
古の詞の假名遣に關するものを、いろは順に集めたるもの。主として物語、歌集等より取れり。文政五年壬午(一八二二)十二月五日の作。翌六年刊行し、明治十三年庚辰(一八八〇)再版したり。
◎山本明清の傳は「古今和歌六帖標注」の下にあり

しやうこくじくやうき
相國寺供養記　一巻　東坊城秀長
明德三年壬申(一三九二)八月、相國寺に於て供養ありし時の次第を執柄より作進したるところなり。「群書類從」卷四百三十四、釋家部第十に收む。
◎東坊城秀長は藤原姓。參議勘長の孫。參議大輔長綱の長子なり。父に續ぎて參議式部大輔に至り、正二位に叙せらる。博學多識を以て當世に知らる。其の家記に「迎陽記」あり。應永十四年薨逝し、同十八年辛卯(一四一一)八月、七十四歳にて歿す。

しやうこくじたうくやうき
相國寺塔供養記　一巻　藤原　經嗣
同供養の記。綱に其の始末を記せり。「扶桑拾葉集」にも、また「群書類從」卷四百三十四、釋家部第十にも收めたり。
◎藤原經嗣は關白一條眞基の子なり。權大納言嗣經の後を嗣ぎて左大臣に位に累進し、關白に補せられ、また三宮に準ぜらる。應永二十五年戊戌(一四一八)十一月、六十一にて薨ず。成恩寺と稱す。二子皆眞其の後を嗣ぐ。

しやうこくはいがぶるゐき
相國拜賀部類記　本篇一巻
信範記、左府記、相國記、其の他によりて、相國拜賀の記を部類したるものなり。「續群書類從」卷二百九十八、公事部第五十一に收めたり。

じやうこそう
常語藪　二巻　岡田　挺之
我が國普通に行はるゝ漢語、及び地名の彼我兩國に同用せる字の、彼の國の書に散見せるものを、いろは順に列載したるものなり。寛政六年甲寅(一七九四)太田覃の序、恩田仲任の跋「共に漢文等あり
◎岡田挺之の傳は「彼此合符」の下にあり。

じやうこなにはづ
上古難波圖　本篇一鋪
難波の名所古蹟、山川池澤、渡津橋梁、江海島嶼等を記し、大隅島の傍に應仁天皇の都の蹟、豐崎宮木庄村に孝德天皇の都の蹟、また高津の宮の蹟といふものあり。年代は記されど、圖中、一も城廓市街等を載せざるを見れば、後世より想像して上古の狀を圖したるものなるべし。

じやうこなんによものどりのべん
上古男女髮辨　本篇一巻　賀茂　眞淵
本邦上古の、男女髮の結び方に就きて考記したるもの。著者賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

しやうこねんぺう
尚古年表　本篇七巻　山本　隱倫
古器、古像、古文書、墓碑、鐘銘等の年表。雄略天皇の御位元年丁酉(一一七)より、嘉永二年己酉(一八四九)に至り、大抵其の文及び銘を謄寫集錄し、「集古十種」、「好古日錄」、「和漢三才圖繪」、栗原信充、藤井貞幹等の考を附したるものなり。考古の好資料たるべし。著者山本隱倫は常陸の人和學を以て知らる。

しやうさいしふ
匠材集　四卷　里村　紹巴
作歌上の用語をいろは順に列擧して各項下に略解を加へたり。無名氏の序中に「上古の先達も今の世にも詞材を集めて匠の繩墨にあて、煩はしきふしなけづり、正風に歸すべし。此の故に是れを匠材集と名付けはんべるなり」とあり。慶長二年丁酉(一五九七)三月、法眼紹巴の跋あり。寛永二年乙丑(一六二五)横綴一册にて出版す。
◎里村紹巴の傳は「源氏物語紹巴抄」の下にあり。

しやうさいしふ
樟齋集　一巻
著者の歌集。早春のうた「うぐひすの聲にぬふてふ花はあれど、春の淺野は糸ゆふもなし」を始めとして、數百首の和歌、及び祕傳數編を收めたり。安政六年己未(一八五九)十二月、男飯田年平共の遺稿を編輯して、明治九年六月に出版す。
◎飯田秀雄の傳は「うぐひすの聲にぬふてふ」の下にあり。

しやうさうゐんごかいふうかうふくき
正倉院御開封行副記　本篇一巻
天保四年癸巳(一八三三)正倉院開封行副記なり。永倫、公周の兩人奉行たり。

しやうさうゐんごかいふうき
正倉院御開封記　本篇二巻
天保四年癸巳(一八三三)正倉院御開封の詳記。上生院擬得業永倫、龍樣院法印公周當時の奉行たり

しやうさうゐんごかいふうづ
正倉院御開封圖　本篇一折
天保四年癸巳(一八三三)正倉院開封の實況を、竪五年、橫羽二重延寸の彩圖したるものなり。

しやうさうゐんごくふうかうふくき
正倉院御開封行副記　本篇一巻
天保七年丙申(一八三六)六月二十日、正倉院御開封行副記の寫なり。奉行北林院擬講成堅、上生院擬講永倫の兩人なり。

しやうさうゐんこもんじよもくろく
正倉院古文書目錄　本篇三巻
正倉院の古文書數百通を輯收したるものなり。

しやうさうゐんしやうきもくろく
正倉院寶器目錄　本篇一巻
正倉院は南都の東大寺中智足院にあり。同院傳來

の器物巻軸書畫類を目錄したるものなり。書中の標目には「正倉院御寶物目錄」と題し、巻末には「以上御寶物百五十五種」と記せり。

しやうざまつわさん

正像末和讃 一巻 僧 親鸞

淨土眞宗の教義、著者の述懐等を味したるもの。流暢なる七五調に作られ、四句を一首となし、通計一百十六首あり。「淨土和讃」及び「高僧和讃」を併せて「三帖和讃」と通稱し、眞宗信徒が佛前にて誦咏するものなり。註釋書中「三帖和讃」を通釋せるものは、彼書目の下に讀り、本書のみに係るものを擧ぐれば、月溪圓信の「正像末和讃報恩解」十八巻、慧雲の「正像末和讃述環解」六巻、慧雲の「正像末和讃正說」十二巻、僧鐔の「正像末和讃後記」六巻等あり。

◎親鸞の傳は「敎行信證」の下に在り。

しやうざまつわさんはうさをぼん

正像末和讃方軌會本 四巻 僧 僧鐔

同三帖を釋くに、一に記夢、二に名題、三に本文として說明す。赤松皆恩の校するところなり。

◎僧鐔「子練」の傳記は「高僧和讃方軌會本」の下にあり。

じやうざんいかう

常山遺稿 二巻 小栗 世煥

上巻には五言古詩、七言古詩、五言律詩、五言排律、七言律詩。下巻には七言律詩、五言絶句、七言絶句を收めたり。弟蕙胤の輯むる所。天明五年乙巳(二四四五)巖垣彦明等の序跋あり。

◎小栗世煥は若狹小濱の人にして、字を明卿といひ、常山と號す。京都に遊學して諸家に交際あり。天明四年甲辰(二四四四)正月、年廿二にて早世す。

じやうざんをいさう

常山詠草 本 三巻 徳川 光圀

著者の歌集巻上之一、二、中、下之一、二と五册に作れり、凡そ數千首を收めたり。明細條の編輯に係る。安永三年甲午(二四三四)綱條の跋に曰く「先君政理の暇著述する所多し。其久しくして失ひ易きを慨れ、誰んで類似して以て編をなす。詩文二十五巻名けて常山集と曰ひ、和歌五巻常山詠草と曰ふ」云々とあり。或は「常山公詠草」と寫傳せるもあり。

◎徳川光圀の傳は「大日本史」の下にあり。

じやうざんきだん

常山紀談 十五巻 湯淺 元禎

上杉、織田、徳川、其の他大小侯伯及び其仕人に關する雜談を記し、傳說及び事實の異同等を考案したるもの。凡て四百七十條。文理明晃にして觀るに足るものあり。元文四年己未(二三九九)の自序、同五年乙酉、其他の序跋を載す。

◎湯淺元禎は千祥と稱し、常山と號す。通稱は源藏。藩士なり。寛永五年戊子(二三六八)に生る。幼時、曹子漢に從つて伊物の說を習ふ。後、江部に遊びて藤原惺窩等の諸名士に交り復、鄕に還り藩に仕へて至孝、官に在て方正、服部南郭、太宰春臺等の諸名士に交り復、鄕に還り祿を受く。常山親に仕へて至孝、官に在て方正、文を好みて又武を忘れず。晩年直言を以て忌諱に觸れ、退隱の身となる。是れより著書をなして自ら悞む。著す所、本書の外常山文集常山樓文集、常山樓筆餘、東江筆記、西疇筆錄、備藩典刑、支會雜記、儒澤先生行狀、左傳解、同兵車圖、湯王問答、幼學指掌褒餘稿、烈公遺事、君則等あり。天明元年辛丑(二四四一)四月九日、七十四歲にて歿す。

しやうさんちよもんきしふ

想山著聞奇集 五巻 三好 想山

奇事珍談凡そ六十條を集錄したるもの。其の中の三四を擧ぐれば、出雲大社遷宮の時雲出る事、天狗の怪妙蛆狗賓餅の事、菖蒲の根魚と化する事、白蛇靈異を顯す事、狐の行列附り火を燈す事、海鰻昇天するを打留むる事等あり。其の他は類推して知るべし。嘉永二年己酉(二五〇九)自記の凡例によれば、本書の原稿五十巻ありて刊本は其の一部なりと云ふ。著者三好組山は尾張名古屋の人なり。

じやうざんぶんしふ

常山文集 二十巻 湯淺 元禎

著者の詩文集なり。金編各體數百首より成る。別に序目一册及び著者の行實一册を附錄とし凡て二十二册なり。享保九年甲辰(二三八四)の自序、同五年藤原留光の序あり。

◎湯淺元禎の傳は「常山紀談」の下にあり。

しやうさんみものがたり

正三位物語 本 二巻

某正三位を中心として綴り成せる優美の物語なり。或は「清水物語」に此の名を負はせたるものなり。

りといへど、未だ對證せざれば其の說の是非判じ難し。今見るところは本居宣長の校正するところにかゝる。卽ち奥書して曰く「正三位物語柴田常昭が本なかりて寫させたる一かへり讀みおはせたゝしつ。寛政六年甲寅(二四五四)八月十一日、本居宣長とあり。源氏物語繪合巻に正三位といふ物語の事見えたり。本書はこれなるにや。

じやうざんろうしふ

常山樓集 五巻 湯淺 元禎

著者の家集。天明二年壬寅(二四四二)宮田明の序、及び宇野公器の跋ありて、同四年刊行せらる。

◎湯淺元禎の傳は「常山紀談」の下にあり。

じやうざんろうひつよ

常山樓筆餘 三巻 湯淺 元禎

本朝の文學武事其の他の事に關する假字文の隨筆。數百項あり。叙事評論共に精確にして、著者の識見を窺ふに足るべし。明和九年壬辰(二四三二)富士谷成章の序及び安永三年甲午(二四三四)赤松鴻の序あり。近刊「日本文庫」第一編にも收められる。

◎湯淺元禎の傳は「常山紀談」の下にあり。

じやうしうかじまえんぎ

常州鹿島緣起 本 一巻

常陸國眞壁郡大國玉村なる鹿島神社の緣起を記したるものなり。

じやうしうかはがはえつ

城州川々繪圖 本 一舖

じやうし

山城八郡を分布して、其の間經緯するところの淀川、木津川、宇治川、加茂川等を始めとして、分派枝流に至る川々の脈路を詳記し、橋梁堤塘神社名等なども其の著名なるを圖記せり。圖は縱三尺橫五尺程のものなり。

じやうしうくにかがみ

城州國鑑 本 一巻

山城國八郡の郡鄕村帳なり。享保年間の改正に基きて記すといふ。資曆元年辛未(二四一一)閏享の跋あり。

じやうしうぐんわけそんだか

上州郡分村高 本 一巻

本書は「上野國郡分村名石高帳」と同じ。但し統計上には、村數、石高等に多少の異同あり。

じやうしうごくへん

淨宗護國篇 一巻 僧 良信

念佛護國の德、阿彌陀名號所具の德を主張せんため、又同宗徒が德川氏の治政を補翼したることを示さんために、淨土宗高僧の傳を綴れるものなり。參州大樹寺開山勢譽愚底大和尙總目を擧ぐれば、參州大樹寺中興登譽天室大和尙傳、武州增上寺中興觀智國師傳、武州增上寺阿彌陀佛寶像記の四編より成る。正德二年壬辰(二三七二)三緣山衆首慈引堂沙門覺旨の序あり。

◎良信は上州高崎、大信寺の住持にして、眞學と稱し、戊寅(二三七〇)七月朔日の作、正德七年發行す。

じやうしうこうじやうじりうゆき

常州東城寺來山記 本 一巻 僧 靈天

常陸國筑波郡なる朝望山東城寺の山來記にて、最仙上人の草創、桓武帝敕して常州諸師に住じ、寮舍三百房、寺宇五十軒を立て、封田三千戶を捨て、永す。此の書は攝州生玉法泉寺住持實譽到然の校閱するところなり。

じやうしうそうしやくわうごんじゆらいき

上州總社光嚴寺山來記 本 一巻

同寺の山來を詳記したるものにて、明治八年內務省の寫すところによる。

じやうしうちやうらくじさうにつき

上州長樂寺藏日記 本 一巻

上野國新田郡世良田村なる眞田山長樂寺の日記なり。永錄八年乙丑(二二二五)正月以後、同十月に至る記事なり。延寶四年丙辰(二三三六)神無月十一日、同國同郡同村大澤正勝といふもの書寫したる奥書あり。

じやうしうつぼゆみらうたん

上州坪弓老譚 本 三巻

上野國新田郡金山城主眞宗信濃守國繁の事歷を記したるもの。關東管領上杉憲政の時代の事に始まりて、武後の上杉氏及び小田原の北條氏に歷仕せし事等より、秀吉の小田原征伐によつて領地を沒收せられしまでを記せり。

じやうしうとうじやうじりうゆき

常州東城寺來山記 本 一巻 僧 靈天

常陸國筑波郡なる朝望山東城寺の山來記にて、最仙上人の草創、桓武帝敕して常州諸師に住じ、寮舍三百房、寺宇五十軒を立て、封田三千戶を捨て、永

く佛僧の供養をなし給ひたる事より、慶安年中領主横山氏、德川幕府に其の類敗を訴へて山園莊田を寄賜せられし事までの事績を記せり。

じやうしうぼうさつにつき　淨修坊雜日記　木一卷

王者以仁勝桀事、不登民力役事、重人死命事、天時不如地利不如人和事、黃帝征伐事、舜服其三苗事、湯取桀事、武王放紂事、本朝時運興衰事、仙洞聖運武家權盛一々有其期事、其の他の雜記なり。奧書に淨修房は醍醐寺の一院にして本書は其の主僧の記したるものなるべきかといへり。「續群書類從」卷九百二十五、雜部第七十五にあり。

じやうしうぶしうじゆんげんづ　上州武州順見圖　木一帖

上武二州中の村閭、山川、社寺等を略載す。二國中にても僅に五郡のみを掲げたるものにて二國の全部にはあらず。

じやうしうゆうさんならびにぶしうみつみねさんさいやくき　上州妙義山並武州三峰山採藥記　木一卷　小野　職博

文化二年乙丑(一八〇五)君命を帶びて同地方に採藥したる時の日記なり。著者小野職博の傳記は「欽勝撫要」の下にあり。

しやうじき　正事記　木三卷

眞言宗の宗義に據りて、聲と字と實相との意義及び關係を說明して、眞言祕密の教義を明かにしたるもの。流暢なる漢文より成り、いはゆる「十卷書」中の一なり。註釋には、杲寶の「聲字義果寶口筆」五卷、道範の「聲字義鈔」三卷、宥快の「聲字義鈔」三卷、頼瑜の「聲字義開祕鈔」二卷等あり。

◎空海の傳は「祕密曼陀羅十住心論」の下にあり。

じやうじやうるんどのはふいんごばうごくわんちやうき　上乘院殿法印御房御灌頂記　木一卷

承元四年庚午(一二一〇)三月二十三日、月輪閑白兼實の子、眞基法印の受灌頂會の次第を記したるものなり。

しやうじやうおうごやうじやう　惺々翁行狀　木一卷　佐川田昌俊

有名なる書家八幡の泥本坊阿闍梨昭乘が大和國幷日の里に生れしより、寛永十六年己卯(一六三九)九月入寂までの行狀を記したるもの。惺々翁は昭乘の別號、また松花堂とも號せり。

◎佐川田昌俊は通稱を喜六といひ、竜齋、默々庵、俊瓢居士、また二山人等の號あり。越後長尾家の士木戸忠齋に仕へて後ち其の養子となる。慶長以後、大津の戰に從ひ、永井直勝に聘せられて容過を受け、同十九年大坂役に與り、後直勝に從て江戸に出で、嗣子尚政に至り益殊遇を受く。平生和歌を善くし、一時坂東の名家を以て稱せられ、また木下長嘯子、林道春等の碩學と友たり。寛永二十年癸未(一六四三)八月三日、年六十五にて歿せり。

しやうしくわいのき　尙齒會記　木一卷

承安二年壬辰(一一七二)九月十二日、寶嚴院に於て催したる同會の記なり。圖を插入せり。來會者は藤原敦頼(八十四歲)、神祇伯顯廣王(七十八歲)、源部成仲(七十四歲)、李部侍郎永範(七十一歲)、源頼政(六十九歲)、大江維光(六十三歲)、藤原清輔(六十五歲)等なり。

しやうしげんかうるゐさん　將士言行類纂　木五卷

元龜天正以來の諸將士の言行を類纂す。忠臣に四言に二十九人、守職に八人、節儉に五人、廉潔に九人を收めたり。諸記錄より抄出したるものにて、一一其の原書を擧げたり。

しやうじしよでんこもんじようつし　莊司氏所傳古文書寫　木一卷

紀州熊野の古本にして、莊司氏に傳ふるところの古文書を輯めたるものなり。

しやうじじつさうぎ　聲字實相義　一卷　僧　空海

元和(一六一五―二四)三(一六一七)年間より、寶曆年間に至る諸國の城主並に屋敷、城、國高、城主高等を列記したるものなり。

しやうしよかうぶんならびにえんぶんかう　尙書考文並衍文考　木四卷　大江　星洛

名の如く『書經』の疑義を正したるもの。文化五年戊辰(一八〇五)の自序中に、「自志固陋刪衍文、治錯簡正訛謬、自丁卯仲秋、至戊辰仲夏、一面成。凡所正正、必註其下云云。蓋雖下註者、卽錄蔡文於其編之後、一面標其金縢第二以別作衍文考一卷、以備參考」とあり。以て其の體裁を知るべし。

◎大江星洛の傳は「星洛先生對問」の下にあり。

しやうしよきぶん　尙書紀聞　木十三卷　太田　元貞

書經を講說したるものなり。最初同書の序文より起り、逐條本文を擧げて巨細に論述講說せるなり。金縢原文の外は皆片假名交りにて記せり。內題には「書經聞書」とあり。門人伊藤東涯の筆記せる也。

◎太田元貞の傳は「周易詳說」の下に出づ。

しやうしよきぶん　象肯紀聞　木三卷　山田　士雲

朝鮮國の雜事を記したるもの。集皆ば譯官の事なり。今、本書の總目を擧ぐれば、卷上に歷世、朝儀、道里、卷中に節序、人物、官制、禮俗。卷下に戶籍、文藝、武備、刑律、度量、服色、飮食、第宅、物產、雜聞等なり。寬政六年甲寅(一七九四)對馬學士源雄子惠の序あり。著者山田士雲は同じく對府の通事なり。

しやうしよせいとく　尙書正讀　二卷　蒔田　貞

古文尙書に句讀を施し、往々標註を掲げて、初學者の便に供したるものなり。天保十一年庚子(一八四〇)の自序あり。同十五年乙卯校刻す。

◎蒔田貞の傳は「幸經通」の下にあり。

しやうじんぎようるいくさものがたり　精進魚類軍物語　一卷

此の書は精進料理、及び魚鳥類の料理に使用すべき器具等の名を收めて軍物語に作り成せるものなり。

しやうしんげぐだいわか　正信偈句題和歌　一卷　僧　超然

正信偈の句々を題にして、味じたる和歌集なり。著者相模人美岡超流の出版するところなり。

◎超然の傳記は「山居錄譜」の下にあり。

しやうしんげたいい　正信偈大意　一卷　僧　蓮如

眞宗の始祖親鸞聖人著「正信念佛偈」の文意を簡略に和解したるもの。長祿四年庚辰(一四六〇)六月、金森道西の望によつて之れを著せり。「眞宗法要」第二十一卷に收めらる。

◎蓮如の傳は「五帖消息」の下に出でたり。

しやうじやうかくしせう　淸淨閣詩鈔　二卷　僧　雪象

著者の詩集。嘉永六年癸丑(一八五三)嚴谷鼇の序、僧拙菴の序、安政元年甲寅(一八五四)梁川綠の跋あり、同三年版行す。

しやうじやかう　燒麝考　三卷　大淵　常範

麝香の種類を網羅し、麝香の眞僞善惡產地等を詳論細考したるもの。歷年實見するところの實物を生寫し、其の年代場所等をもしるし、更に古來各國の諸書に徵して大に考說を盡せり。安政六年己未(一八五九)喜多村直筧、同七年田村充保の序あり。同年出版し大本二冊にて行はる。

じやうしゆやがへき　城主家替記　木二十一卷

上天正年間より、下寬文、延寶の比に至る城主領主の家替を記せり。其の十五卷までを城主家替記とし、十六以下を領主家替記とす。

じやうしゆれいでう　釀酒令條　木一卷

寬永十九年壬午(一六四二)五月より、文化三年丙寅(一八〇六)九月に至る、釀酒業に關する觸書等を集めたるものなり。

じやうしゆろく　城主錄　木三卷

しやうじんこんだてしふ　精進獻立集　一卷　越吉郎兵衞

精進料理法を詳述したるもの。春夏秋冬に應じ、一汁三菜より二汁九菜に至る獻立料理法を記す。文政四年辛巳〔一八二一〕出版し、小册子にて行はる。

しやうしんねんぶつげ　正信念佛偈　一卷　僧　親鸞

淨土眞宗の教義を述べたる偈頌。七言百二十句より成れり。これもと「敎行信證」中に在るを單行せしめたるなり。註釋書には佛光寺興敎の「正信偈聞書」二卷、西吟の「正信偈要解」四卷、空誓の「正信偈註解」六卷、高田派慧雲の「正信偈勘記」三卷、桃溪の「正信偈文軌」五卷、日溪法霖の「正信偈捕影記」三卷、智洞の「正信偈講林」二卷、僧樸の「正信偈五部評林」三卷、僧鋒の「正信偈講讀」二卷、道隱の「正信偈甄解」三卷、僧淑の「正信偈講讀」二卷、其の他十數部あり。

◎親鸞の傳は「敎行信證」の下にあり。

じやうすゐき　上水記　寫一卷　石野　廣通

江戸玉川と神田と兩上水との事につき、詳しく記述したるもの。寛政二年庚戌〔一七九〇〕著者御普請奉行として、公然兩水源に行くことあり。其の翌年「上水記」十卷を著せり。此の書は其の第一卷なり。著者の奥書あり、曰く「第二卷より以下は御普請の記錄にして、他に見すべきにあらず、他もまた見て用なし。後所に納め置くものなり。上覽獻納の一部、松平越中守定信に進達一部。御普請方役所一部。以上三部は廣通自ら校合す。外に稿本一部あり其の大略を知るべし。此の一册は別本なり」と。其の大略を知るべし。

◎石野廣通の傳記は「澤水」の下にあり。

じやうすゐきたどびなたこいしかはへんのづ　上水北小日向小石川邊圖　一折

江戸上水北、小日向、小石川邊の地圖にして、地名諸屋敷、社寺等を明記す。嘉永五年壬子〔一八五二〕出版の小折本なり。著者は「東都玉香園主人」と署名せり。

しやうぞくいろめ　裝束色目　寫一卷

諸家の記によりて、裝束色目を部類したるものなり。延享元年甲子〔一七四四〕左近衞大將藤原宗基の奥書に、九條家の識記を、尙實卿より借りて書寫する由あり。

しやうぞくえうりやうせう　裝束要領抄　二卷　壺井　義知

四位五位の裝束に關する考證なり。卷の上に束帶の具、衣冠の具、卷の下に狩衣の具、直垂の具、別に附錄一卷ありて女官の服の事を載せたり。正德六年丙申〔一七一六〕の春月啓益の序及び自序あり、木書の由來を記せり。

◎壺井義知の傳は「官職淨識或問」の下にあり。

しやうぞくをんこせう　裝束溫故抄　寫一卷　野宮　定基

官階の叅革によつて各其の冠服の制を異にせる次第をば、國史記錄に據りて抄錄略記したるものなり。寛永元年甲申〔一六二四〕の著。

◎野宮定基の傳は「有職聞書」の下にあり。

しやうぞくかきぬき　裝束書拔　寫一卷

り。「檀祥書類從」卷六百九十、武家部第三十六にも收めたり。

◎伊勢貞陸は武家故實家にて、常照と法號し、伊勢守と稱す。著書は、別に「伊勢貞陸自筆記」あり、

しやうぞくしよ　裝束書　寫一卷

西宮左大臣高明の「西宮記」の中より、裝束に關する記事を抄錄したるものなり。

しやうぞくしよ　裝束書　寫三卷

武家官服の故實を記したるもの。卷末には「武家年中衣服記」を載せたり。

しやうぞくしよくゐ　裝束色彙　寫四卷

裝束の染色の事を記したるもの。凡例に諸の裝束の中染て色を爲すものを載せ、其の色に因る名目と雖ども染むるに非ざる類は載せざるよしを記す

しやうぞくしよくもんづゑ　裝束織文圖會　一卷　松岡　辰方

裝束の種類を網羅して其の次第を記せり。色目織文なも生寫して相當の位階名家の番號等をも記す。收むる所は、天子東宮御袍六種、及び裏、親王、攝關、大臣家等の紋、及び四位以下七位迄の通用袍三十八種、及び裏半臂四種、下襲十八種、及び裏、袴四種、單七種、裝袴十二種、奴袴二十六種、襖袴二種、下袴四種、裏十一種、冠羅六種等なり。享和元年辛酉〔一八〇一〕藤原某年の序、寛政十二年庚申〔一七九二〕藤原正臣の跋、文化十二年乙亥〔一八一五〕八幡百里の跋あり。

◎松岡辰方の傳は「冠帽圖會」の下にあり。

しやうぞくしよせい　裝束集成　寫十三卷

博く裝束の事を輯錄したるもの。凡てを冠束帶より女官裝束に至る五十二類に分ち、每卷首に引用書目及び類內の細目を揭げたり。

しやうぞくしよせう　裝束諸抄　寫一卷

源氏裝束抄、三條家抄、狩衣抄、裝束寸法、深窓祕抄、衞府具、衣紋掛樣の七抄を輯錄したるもの。享保八年癸卯〔一七二三〕九月十八日石申辨藤原俊將の奥書に高里小路大納言の書を借寫する由あり。

しやうぞくしよせう　裝束抄　寫一卷

裝束事、官なりたる悅の次第、行幸供奉事、大嘗會供奉事、內侍所御行、五節大歌々人事、隨身次第、賀茂祭使事、其の他の數項を記す。正和三年甲寅〔一九七四〕の記。末に藤原眞幸作重賢等寫傳の由を記せり。

しやうぞくしやうろくくわん　裝束抄　寫二十六種

諸家の編著にかゝる諸種の裝束書なり。特に撰述したるも、某書中より抄出したるも、抄註をのみ加へたるも、年代の新古等もあり。大抵各特種の下に解題せれど、便宜上今見る所の諸種を、單に「裝束

裝束具申、武器に關する故實を裝書したる者なり。

しやうぞくぶつじせう　裝束雜事抄　一卷　藤原　永行

淨衣、半尻、布衣、臣下袍、凡人袍文、異文、わきあけの袍、裝束の下に著る小袖、裾丈數の事を略說す。應永六年己卯〔一三九九〕四月の作。「群書類從」一卷百十八、裝束部第七にあり。著者藤原永行は、柴議正三位行備中權守たり別に「法體裝束抄」の著あり

しやうぞくしきもくせう　裝束式目抄　寫一卷

此の書は服飾の作法故實等を記したるものなり。

しやうぞくしふ　裝束集　寫二卷

四位五位の裝束故實を略述したるものなり。延享五年戊辰〔一七四八〕某の奥書に、成瀨嘉朝所持の本に依て寫書する由あり。

しやうぞくしふえうせう　裝束拾要抄　二卷

裝束の故實作法等を記したるもの。慶長十九年甲寅〔一六一四〕某の奥書あり。元祿四年辛未〔一六九一〕に刊本となす。

しやうぞくしふえうせう　校　裝束拾要抄　二卷　大塚　嘉樹

前掲「裝束拾要抄」を校正して、篇頭に註釋を加へたるものなり。寛政九年丁巳〔一七九七〕の奥書あり。翌年出版す。

◎大塚嘉樹の傳は「碧梧隨筆」の下に出づ。

しやうぞくしふせい　裝束集成　寫十三卷

博く裝束の事を輯錄したるもの。凡てを冠束帶より女官裝束に至る五十二類に分ち、每卷首に引用書目及び類內の細目を揭げたり。

しやうぞくしよ　裝束書　寫一卷

西宮左大臣高明の「西宮記」の中より、裝束に關する記事を抄錄したるものなり。

しやうぞくしよ　裝束書　寫三卷

武家官服の故實を記したるもの。卷末には「武家年中衣服記」を載せたり。

しやうぞくしよくゐ　裝束色彙　寫四卷

裝束の染色の事を記したるもの。凡例に諸の裝束の中染て色を爲すものを載せ、其の色に因る名目と雖ども染むるに非ざる類は載せざるよしを記す

しやうぞくしよくもんづゑ　裝束織文圖會　一卷　松岡　辰方

裝束の種類を網羅して其の次第を記せり。色目織文なも生寫して相當の位階名家の番號等をも記す。收むる所は、天子東宮御袍六種、及び裏、親王、攝關、大臣家等の紋、及び四位以下七位迄の通用袍三十八種、及び裏半臂四種、下襲十八種、及び裏、袴四種、單七種、裝袴十二種、奴袴二十六種、襖袴二種、下袴四種、裏十一種、冠羅六種等なり。享和元年辛酉〔一八〇一〕藤原某年の序、寛政十二年庚申〔一七九二〕藤原正臣の跋、文化十二年乙亥〔一八一五〕八幡百里の跋あり。

◎松岡辰方の傳は「冠帽圖會」の下にあり。

しやうぞくしよせう　裝束諸抄　寫一卷

源氏裝束抄、三條家抄、狩衣抄、裝束寸法、深窓祕抄、衞府具、衣紋掛樣の七抄を輯錄したるもの。享保八年癸卯〔一七二三〕九月十八日石申辨藤原俊將の奥書に高里小路大納言の書を借寫する由あり。

しやうぞくしよせう　裝束抄　寫一卷

裝束事、官なりたる悅の次第、行幸供奉事、大嘗會供奉事、內侍所御行、五節大歌々人事、隨身次第、賀茂祭使事、其の他の數項を記す。正和三年甲寅〔一九七四〕の記。末に藤原眞幸作重賢等寫傳の由を記せり。

しやうぞくしやうろくくわん　裝束抄　寫二十六種

諸家の編著にかゝる諸種の裝束書なり。特に撰述したるも、某書中より抄出したるも、抄註をのみ加へたるも、年代の新古等もあり。大抵各特種の下に解題せれど、便宜上今見る所の諸種を、單に「裝束

抄」といふ普通名稱の下に列舉す。卽ち延喜式裝束抄、假名裝束抄、長暦裝束抄、後冷泉院裝束抄、御當代裝束抄、西宮記抄裝束抄、三條家裝束抄、次將裝束抄、寢殿裝束抄、人車記裝束抄、運慶裝束抄、當時裝束抄、愚管抄裝束抄、橘以國裝束抄、地紋圖裝束抄、蟲花院裝束抄、永縯裝束抄、南北廂時禁裝束抄、三條西實隆裝束抄、年中行事裝束抄、伏見院宸翰裝束抄、雅亮裝束抄、貞宗紳裝束抄、簷中裝束抄、連名三種裝束抄、衛府裝束抄、衛府長裝束抄等なり。委しくは各條下に見よ。

しやうぞくせう
玉葉 荒暦 **裝束抄** 本寫一卷　**野宮　定基**

一條家記より、裝束に關する項を抽出したるものなり。寶永六年己丑(一三六九)定基の奥書あり、著者野宮定基の傳は「有職問書」の下にあり。

しやうぞくぢもんづ
裝束地紋圖 本寫一卷

御袍、新院御袍、同御指貫、太閤御袍、親王御袍、童裝束、其他種々の衣紋、女官の衣、女御几帳の紋等の圖を集めたるものなり。

しやうぞくちやくようしだい
裝束着用次第 本寫一卷

藤原永綱の「撰塵裝束抄」を訂正し、束帶着用次第の大要を採錄したるものなり。延享二年乙丑(一七四五)無名氏の跋を載す。

しやうぞくちやくようづ
裝束着用圖 本寫五帖　**滋野井公麗**

裝束着用を圖したるもの。詳細に彩色圖せり。末に「依或所望書錄畢櫃中納言藤原朝臣」とあり。天明元年辛丑(一七八一)伊勢貞丈の奥書に「右一卷滋野井幾公麗卿門弟橘嘉樹之謄本を需之寫畢」とあり、今見るところは貞丈手自模にかゝる。

◎滋野井公麗の傳は「禁祕抄階梯」の下にあり。

しやうぞくちやくようろく
裝束着用錄 本寫一卷

裝束着用の故實次第を記述したるものなり。

しやうぞくづしき
裝束圖式 二卷

御冠、袍、靴服、下襲、半臂、袙、單、大帷、表袴、赤大口、石帶、劍、笏緒、弓、胡簶、魚袋、緌、扇、襪、靴、烏帽子、直衣、半尻、狩衣、奴袴等の各種類を黑圖して其の大略を說明したるものなり。元龜二年辛未(一五七一)の奥書あり、元祿五年壬申(一六九二)再版す。

しやうぞくづせう
裝束圖抄 一卷　**松波　茂興**

四位五位の束帶衣冠を彩圖して名稱、性質、服用法等を說明したるもの。卷末に「此の一帖は武家方四位五位必用の服のみを記す。三位の中將、四位の參議以上は、下襲、表袴、奴袴、有文を用ふる、又公家方には、半臂袙衣等の品あれども、こゝに記さず、名あれば、裝束圖抄と名く。」と附記せり。享和元年辛酉(一八〇一)九月の著にかゝる。「續裝束圖抄」一卷同年出版す。著者松波茂興は筑後久留米の人にして松岡辰方の門人なり。

しやうぞくはうるゐせう
裝束類抄 本寫十卷

卷の一に冠之事より、綿ぼうし之事に至る四十八條。卷の二に十二單之事、より袍袖大になる事に至る四十五條。卷の三に臣下袍之事より、ふくさの裝束之事に至る五十條。卷の四に半臂之事より、魚袋之事に至る三十條。卷の五に敍授帶劒並先朝帶劍不レ可レ用レ於二當今朝一事より、金魚袋並銀魚袋事に至る七十六條。卷六に履草鞋之事より、指貫括腹白之事に至る七十條。卷の七に狩衣之事附同色々より、傘袋之事に至る六十四條。卷の八に衛府具卷纓附狛夾之事より。檜垂掛杖之事に至る九十三條。卷の九に隨身裝束之事より、諒闇裏服事に至る百四十二條。以上九卷凡て六百十八條。皆古書中より、これに關する說明考證等を抄出せるなり。十卷の內一卷は本書の目錄なり。

しやうぞくひき
裝束祕記 本寫一卷

主上御束帶の具、院中御束帶の具、院中御烏帽子直衣、臣下の束帶、束帶衣冠着用の次第等を記したるものなり。寬文十年庚戌(一六七〇)の奥書あり。

しやうぞくぶきかきぬき
裝束武器書拔 本寫一卷

劍長刀等の裝束武器の事を、軍記物語の中より抄錄したるものなり。

しやうぞくぶるゐせう
裝束部類抄 本寫五册

諸家の書記によりて、裝束故實を部類したるもの。其の引用する所の書は、順德院の禁祕抄、土御門大納言通方の餝抄、一條兼良の桃華蒸菜、二條家の有職抄、新井白石、野宮定基の車服制度手記、一條房通の唯心院裝束抄、醍司冬平の後神念院裝束抄、三條西實澄の三光院裝束抄、二條康道の後淨明院裝束抄、壺井義知の裝束拾要抄、同裝束圖抄、同裝束圖式、東山實熙の名目抄、藤原定家の次將裝束抄、書陵部關白の世俗淺深祕抄、壺井義知の衣文愚案訓、雅波黃門宗城の或人記、ますすみ裝束抄等なり。

しやうぞくぶんしよくするだん
裝束文飾推談 本寫一卷　**壺井　義知**

官職衣紋の事を記したるもの。卽ち菊花御紋の事より、指貫の紋に姓氏によりて差別ある事等、每條其の考證を舊記に求め、間々繪圖をも加へたり。本書は著者京都に至りし時、輯錄して、寬政法皇に上りしものなりと云ふ。享保十二年丁未(一七二七)藤原隆英の跋あり。多田義俊の「ちがや草」には此の書杜撰の說多きよしを記せれど、如何。

◎壺井義知の傳は「官職淨說或問」の下に出づ。

しやうぞくみちしるべ
裝束道しるべ 本寫一卷

縫腋、闕腋、衣冠、直衣、小直衣、半尻、狩衣、道服、直垂、布直垂、水干、木賊腰巻、小腰巻、衛府長、布衣、如木の雜色、素襖、退紅、白張、十德等を略說す。

しやうぞくむめいせう
裝束無名抄 本寫一卷　**山科　持言**（モチトキ）

禁裏御裝束具より始め、院中、公家、辨官、臣下等の裝束衣冠等に關する故實なり。一名を「簪筋集」といふ。眞享二年乙丑(一七四五)二月の著、元祿三年庚午(一六九〇)八月、芥河時望の跋あり。

◎山科持言は櫪中納言藤原敎成の後にして、參議左衞門督言行の子なり。累進して、享保三年參議に任ぜらるゝに及び、自ら非例の任を喜ばず病を告げて致仕す。後、元文二年丁巳(一七三七)歲にて薨ず。

しやうぞくもんだふ
裝束問答 本寫一卷

裝束の故實に就ての問答を記したるもの。壺井義知の門人、速水房常書寫の奥書あり。

しやうぞくもんやう
裝束文樣 本寫一卷

其の名の如く裝束の模樣を圖示したるもの。現本には明和元年甲申(一七六四)岡六合雄書寫の奥書あり。

しやうぞくゆゐしんせう
裝束唯心抄 本寫一卷　**一條　房通**

此の書は「唯心院裝束抄」といふ別名の下に解題す。

しやうぞくるゐさん
裝束類纂 本寫一卷　**隆英**

裝束故實の書。古は袍の襠に入組付る事より其指貫の事に至る百十二條を類纂したる者。卷端に「不敢爲盡暨博識、聊備余之遺忘耳、因志其端云、享保癸卯(一七二三)夏五月、隆英、識於賢々齋」とあり。

しやうちうげさんじかい
上中下三字解 本寫一卷

上中下三字の字形成立を說き、其の關係の離るべからざるを、また相待て事を成就すべきを說いて、天

地人の關係に及び、君臣の和合を論じたるものなり。『叢書資料本』第十九に入れたり。

しやうちうげんてい　掌中古言梯　一卷　藤重　匹龍

楫取魚彦の『古言梯』を增補したるもの。五十音によりて古言を檢索し、更に語數の多少に關つて排纂すること『古言梯』の如し。文化三年丙寅(一二四六六)の自序、及び賀茂季鷹の序あり。同五年正月刻成す。

しやうちうこたうめいかん　掌中古刀銘鑑　一卷

古刀の鑑定に關するもの。弘化三年丙午(一二五〇六)刊本となる。

しやうちうこんこかなづかひ　掌中今古假字格　一折　高井　八穗

古今兩樣の假字格を示したるもの。古假字は『古事記』、『日本紀』、『萬葉集』、『和名抄』等に依り、今假字は宗匠家傳來の用法によりてといふ。歌會席上の使用に供したるなり。

◎高井八穗の傳は『古調類題和歌集』の下にあり。

しやうちうしがくじざい　掌中詩學自在　一卷　中根　玄石

年中の四季に分ち、各題を設けて、各下に詩語を輯め、一々平仄と語解とを記したるものなり。『己巳』(文化六年歟)北山老人の序を附し、天保十四年癸卯(一二五〇三)十月、小槻本に發行す。

◎中根玄石の傳記は『詩韻自在』の下にあり。

しやうちうしかん　掌中市鑑　一卷　青　吉　園

雜喉場の由來、苔牒、問屋の株式等を記し、魚介の形狀產地等をも圖說す。圖は高島春松の筆にかゝる。天保八年丁酉(一二四九七)出版せる小册子なり。著者青吉園は大阪の魚商なり。本書の外に『魚具能蓄品物圖考』一卷を著せり。

じやうぢうじぶつしやりき　常住寺佛舍利記　一卷

城州四山巢窟常住寺に寶藏せる佛舍利の記なり。天文三年甲午(一二九四)の奥書あり。『續群書類從』卷七百九十一、釋家部第七十六に收めたり。

しやうちうしよくげんらんえう　掌中職原擥要　一卷　速水　房常

神祇官太政官を始め、女官僧官等に至る官名、及び相當の位階を記したる袖珍書なり。重刻本の凡例に「原刻速水房常鈔出して、寶曆の比梓にちりばめもてあそびしが、天明の火にかゝりて失たるを、再びせんと欲すれど果さざるうち、小册にしてなりとも早く版行せまくほしと書肆のもとめによりてこたび慳本となしぬ」と云へり。文化九年壬申(一二四七二)新刊、現本は弘化四年丁未(一二五〇七)八月の改刻なり。

◎速水房常(或は常房に作る)は京都の人にして、蟲井義知の門に入りて有職故實を研究し、方市齋と號す。殊に律令格式に精通して當時に知られたり。また和歌を好みて、詠み出でたるもの多しといふ。著書は本書の外に、本朝續通鑑錄、本朝年號便覽、名目抄校註、諸家知譜拙記、職原須知、裝束問答見聞私記等あり。

しやうちうじよじかく　抄中助辭格　一折　木阿彌陀佛

手爾遠波の用法、變化等を一覽に作りたるもの。本居宣長の『組說』を抄略したるを岸本由豆流の校正したるものなり。

しやうちうしんせんねんぺう　掌中新撰年表　一卷　清宮　秀堅

携帶に便ならしめん爲め蝕に版刻したる『新撰年表』を抄略して、袖珍本となしたるものなり。

◎清宮秀堅の傳は『雲壑略傳』の下にあり。

しやうちうしんぞうえうがくしゐん　掌中新增幼學詩韻　一卷　東條　耕

著者の原輯を、門人三島高田頌の編次したるものにて、季節を分ち、題を擧げて、詩歌熟語を蒐集したるもの。天保十二年辛丑(一二五〇一)著者の序あり。弘化二年乙巳(一二五〇五)橫綴小册子に版行す。

◎東條耕の傳記は『近代著述目錄後編』の下にあり

しやうちうしんぞうじこすゐきん　掌中新增詩語粹金　一卷　內山　高基

季節を分ち、題を設けて、詩作の熟語を蒐集し

て、解と平仄とを示したるもの。弘化四年丁未(一二五〇七)の自序あり。同年橫綴小册に版行す。著者內山高基は江戸の人にして、助太郎と稱し、雷藍と號せり。

しやうちうだいりんせう　掌中題林抄　一卷　尾崎　雅嘉

中古以來の歌題を集めて註釋し、其の下に幾多の題用歌詞を集め、且近歌兩體の作例をも擧げたり。寬政九年丁巳(一二四五七)出版す。

◎尾崎雅嘉の傳は『群書一覽』の下にあり。

しやうちうちやうげんそくち　掌中町見速知　一卷　會澤　矩道

江戸各町一覽圖なり。嘉永六年癸丑(一二五一三)著山延光の序、菊池寬の跋等あり。著者會澤矩道は別に『掌中礮術便用』一卷をも著せり。

しやうちうはくじゆつべんよう　掌中礮術便用　一卷　會澤　矩道

礮術の說明に關するもの。主として礮の大小に因りて鉛丸距離の度を辨明したるなり。嘉永七年甲寅(一二五一四)出版す。

しやうちうはちいうでん　湘中八雄傳　五卷　北　壺　游

鑓倉の勇士朝比奈義秀の事績、南征の餘の由來等を書き綴りたる小說的傳記なり。自序中に『朝比奈の狂言は中村氏の家の藝にして、猿彥の祖、鶴の丸の藝能の起原なり。宋代雜狂言の一隊物』云々と記せり。明和五年戊子(一二四二八)の作なり。著者北壺游は粟水庵と號す。

しやうちうまさなぐさ　掌中まさな草　一卷　不　關　子

事物歌題をいろは順に排して各題下に歌詞を列擧して會席等の便に供せるなり。河瀨雷雄が『まさなきことゝもいと多かるべければ』と同種の『まさな草』てふ書にならひて『掌中まさな草』とは名づけたるなり。寬政七年乙卯(一二四五五)出版す。

しやうちうめいだいしふ　掌中明題集　一卷　尾崎　雅嘉

先著『和歌明題部類』の正續中より、幾多の組題ともを撰抄して袖珍に作りたるものなり。著者尾崎雅嘉の傳は『群書一覽』の下にあり。

しやうちうるゐだいしふ　掌中類題集　一卷

和歌四季戀雜等の歌の常に讀むべきものを撰集して袖珍に作りたるものなり。末に制の詞、小點の詞等を附錄せり。

しやうちうれいやしふ　掌中怜野集　一卷　清原　雄風

此の書は古今の歌集、救撰私撰中より、拔萃して春夏秋冬戀雜等に排列し、その數凡そ三千首を收めたり。『怜野集』を橫綴小本に作りたるなり。故に掌中とはいへり。

◎清原雄風の傳は『古人贈答歌抄』の下にあり。

しやうちうれき　掌中曆　一卷　賀茂　在方

天文曆數吉凶の事を敍述したるもの。天地、五行、歲德、大將軍、太陰、二十四氣、七十二候、日月蝕、十干、十二支、上川、弦望、社日、二十八宿、七曜、吉凶等六十四箇あり。漢文にて記す。應永二十一年甲午(一四一七四)の自序あり。著者賀茂在方は正議大夫司曆博士と宣書せり。

しやうちうわかんねんけい　掌中和漢年契　一卷

高祖の『和漢年契』を抄約したる袖珍書なり。體裁は大略原本に異ならず。干支年號の檢出は卷首に索引を附し、ます〳〵簡便を加へたり。享和元年辛酉(一八〇一)六月、陸可彥の序を載す。

しやうちうおんひやくしゆ　正治御百首　一卷

正治二年庚申(一二〇〇)八月後鳥羽院の御製百首及び惟明親王、宰相法親王、式子內親王、後京極、寶房公其の他諸家の詠百首、應製百首等を合輯せり。

しやうちうさしふ　正直集　一冊　如　元

著者の俳諧集なり。何時編輯したりしかは詳ならず。著者如元は伊勢山田の人なり。

しやうちうさにじのでん　正直二字の傳　一卷　跡部　良顯

「澤庵法語」に記したる正直二字の解は、釋氏の語なれど、よくも説き得たれば、服膺すべき言葉なりとて、其の文を引き、其のよしを附記したるなり。寶永二年乙酉(一七〇五)に書す。元文三年戊午(一七三九)八重垣繁源安築更に刪定を附記したり。

◎跡部良顯の傳は「三種祕傳考」の下に出づ。

しやうおぐわんねんえいくうたあはせ

正治元年影供歌合　寫一卷

正治元年已未(一一九九)十一月八日の歌合なり。

しやうおさんねんえいくうたあはせ

正治三年影供歌合　寫一卷

正治三年辛酉(一二〇一)正月十八日の歌合なり。倘正治三年の歌合書にては、三月十八日影供歌合、三月廿日新宮撰歌合、四月晦日影供歌合等あれど、今一々別に解題せず。

しやうおだいりうたあはせ

正治內裏歌合　寫一卷

正治元年已未(一一九九)十二月の歌合なり。

しやうおにねんひやくしゆ

正治二年院御百首　寫一卷

正治二年庚申(一二〇〇)の御製、三宮、御室、後京極攝政、入道左大臣、內大臣、大納言忠良、中納言信房、前中納言隆房、入道三位俊成、正三位季經、正三位經家、從四位上範光、從四位上定家、從四位下隆信、從四位下家隆、師光、前大僧正慈圓、丹後等の各百首を集めたり。『續群書類從』卷三百八十二上下、和歌部第十七に收めたり。

しやうおにねんえいくうたあはせ

正治二年影供歌合　寫一卷

正治二年庚申(一二〇〇)二月十日の歌合なり。

しやうおにねんじふぐわついちじつうたあはせ

正治二年十月一日歌合　寫一卷

正治二年庚申(一二〇〇)十月一日、秋冬戀、羇旅舟、梅野朝の題にてよめる歌合なり。作者は公經、範光、保季、隆祐、安成、其の他數名にて、藏筆定家、衆議判なり。『續群書類從』に收む。

しやうおにねんだいにどひやくしゆわか

正治二年第二度百首和歌　一卷　僧　正徹

正治二年庚申(一二〇〇)春夏秋冬雜の諸題にて、後鳥羽院、範光、雅經、具親、隆實、家長、長明、季保、宮內卿(女房)、越前(女房)詞主殿業等の百首を集めたり。『群書類從』卷百七十、和歌部第二十五に收めたり。

しやうおにねんぢしふ

上聽公事　寫三冊

幕府評定所より出繼ぎて內閣文庫にて保存せるもの にして、文政八年乙酉(一八二五)より、同十二年己巳(一八二九)に至る。

しやうおひやくしゆ

正徹百首　寫一卷　僧　正徹

卷二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、戀十五首、雜十五首。卽ち立春「霞のうちにいづる日影のさしながら、けふをはるとやのとけかるらん」の最初より、祝言の「萬代もあとたれそめし敷島の、國のちまたや神のまにまに」の最後に至る。今川了俊の判評するところにかゝる。『續群書類從』卷三百九十六、和歌部第三十一に收めたり。

◎正徹の傳は『草根和歌集』の下にあり。

しやうおひやくしゆわか

正徹千首　寫一卷　僧　正徹

卷の題八十三、夏の題四十四、秋の題百三十七、冬の題六十、戀の題百三十七、雜の題百五十、凡て六百十一題にて千首をよめり。著者の家集『草根集』より拔萃したるものなり。故に『草根集拔書』とも云ふ。一條兼良の編するところなり。『續群書類從』卷三百六十、和歌部第十五にも收めたり。

◎正徹の傳は『草根和歌集』の下に出でたり。

しやうおつものがたり

正徹物語　二卷　僧　正徹

著者の歌學上に關する物語なり。自ら詠出せる歌、古歌の論、其の他歌詞註釋、歌論、雜談を掲げたり。天明年中に再版せるところなり。

◎正徹の傳は『草根和歌集』の下にあり。

じやうてんもんろく

淨典目錄　一卷　僧　存覺

淨土門の典籍凡そ六十部の概略を記したるもの。應和二年壬寅(一〇二二)五月の著なり。著者存覺の傳記は「六要鈔」の下にあり。

しやうとうぜんじごろく

正統禪師語錄　三卷　僧　正統

卷一に小參、內殿說戒、機緣、源流頌、頌古、贊佛祖師十則。卷二に詩偈。卷三に書啓、雜著、禪門心地戒軌、普門家訓、偈贊、小佛事等なり。三卷一册に版行す。最初寬文三年癸卯(一六六三)の小參より掲げたり。門弟子祖澄、宇盛、道有等の編錄するところなり。著者正統は龍溪禪師と號せり。

じやうとうもんゐんきくあはせわか

上東門院菊合和歌　一卷

長元五年壬申(一〇三二)十月、上東門院の歌合にて、伊勢大輔伊與中納言、辨乳母、中納言內侍、小辨、五節の十番歌合なり。『群書類從』卷二百二十六、和歌部第八十一に收む。

じやうどえうげん

淨土要言　六卷　僧　玄智

淨土念佛の法語を輯錄したるもの。諸家、吉水、大谷の三部あり。「諸家部」は淨土宗已外諸師の法語、「吉水部」は源空上人の法語を集め、「大谷部」には「眞言法要」中より親鸞聖人以下歷代の法語を抄錄したり。安永元年壬辰(一七七二)八月の著。別に同人著「淨土要言典據考」二卷ありて、諸師法語の典據及び諸師の略傳を記したり。

◎玄智の傳は「大谷本願寺通記」の下に在り。

じやうどかうげんろく

淨土考原錄　一卷

本書は單に「考原錄」として「か」の部に解題したり。

じやうどきたん

淨土疑端　四卷

佛說觀無量壽經を註解したる書の疑問答百二十箇條を設けて、集錄經四帖疏に就て、問答百二十箇條を設けて、集錄衍義したるもの。正保二年乙酉(一六四五)、同人の著「楷定記」の卷尾に附刻せられたり。

◎顯意は淨土宗西山派の僧。竹林寺に住せり。深草の圓空隆信の弟子にして、派祖善惡坊證空の孫弟に當る。本書の外に「楷定記」三十六卷、「觀經疏聞隱鈔」三卷等を著せり。

じやうどくどくげんぶくにつき

常德院殿樣御元服日記　寫四卷

正德三年癸巳(一七一三)德川七代家繼の元服、將軍宣下、並に先代(天英院)、位階昇進の次第、諸方より獻上品の事等を記したるものなり。

じやうどくんよしひさこうしふ

常德院義尙公集　寫一卷　足利　義尙

和歌部第十七に收めたり。

しやうてつせんしゆ

正徹千首　寫一卷　僧　正徹

卷の題八十三、夏の題四十四、秋の題百三十七、冬の題六十、戀の題百三十七、雜の題百五十、凡て六百十一題にて千首をよめり。著者の家集『草根集』より拔萃したるものなり。故に『草根集拔書』とも云ふ。一條兼良の編するところなり。『續群書類從』卷三百六十、和歌部第十五にも收めたり。

◎正徹の傳は『草根和歌集』の下に出でたり。

しやうてつひやくしゆ

正徹百首　寫一卷　僧　正徹

卷二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、戀十五首、雜十五首。卽ち立春「霞のうちにいづる日影のさしながら、けふをはるとやのとけかるらん」の最初より、祝言の「萬代もあとたれそめし敷島の、國のちまたや神のまにまに」の最後に至る。今川了俊の判評するところにかゝる。『續群書類從』卷三百九十六、和歌部第三十一に收めたり。

◎正徹の傳は『草根和歌集』の下にあり。

しやうてつものがたり

正徹物語　二卷　僧　正徹

著者の歌學上に關する物語なり。自ら詠出せる歌、古歌の論、其の他歌詞註釋、歌論、雜談を掲げたり。天明年中に再版せるところなり。

◎正徹の傳は『草根和歌集』の下にあり。

しやうとくかんしゆれい

正德韓使論禮　寫一卷　新井　君美

正德元年辛卯(一七一一)韓使來朝の時儀禮を示したる一册子なり。寬政五年癸丑(一七九三)秋八月近藤守重の細雨奧書あり。「右一册白石先生所以處置韓使也、從來韓使無禮、我邦接之者無禮、文以考之者以肆其放縱大可憎矣、吾不肯欲正之日久矣、頃得先生之論使册欣躍何啻、惜哉不得全編、懼之將者修飾可謂千載之大快活事矣」といへり。

◎新井君美の傳記は「折たく柴の記」の下にあり。

しやうとくごげんぶくにつき

正德御元服日記　寫四卷

正德三年癸巳(一七一三)德川七代家繼の元服、將軍宣下、並に先代(天英院)、位階昇進の次第、諸方より獻上品の事等を記したるものなり。

「御乘馬始記」といふ。『群書類從』卷四百〇五、武家部第五に收めたり。

しやうとくくんよしひさこうしふ

常德院義尙公集　寫一卷　足利　義尙

正長元年戊申(一四二八)九月一日より、同十二月二十四日に至る日記なり。『續群書類從』卷八百六十八、雜部第十八に收入す。

しやうてつせんしゆ

正徹千首　寫一卷　僧　正徹

卷の題八十三、夏の題四十四、秋の題百三十七、冬の題六十、戀の題百三十七、雜の題百五十、凡て六百十一題にて千首をよめり。著者の家集『草根集』より拔萃したるものなり。故に『草根集拔書』とも云ふ。一條兼良の編するところなり。『續群書類從』卷三百六十、和歌部第十五にも收めたり。

◎正徹の傳は『草根和歌集』の下に出でたり。

しやうてつひやくしゆ

正徹百首　寫一卷　僧　正徹

卷二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、戀十五首、雜十五首。卽ち立春「霞のうちにいづる日影のさしながら、けふをはるとやのとけかるらん」の最初より、祝言の「萬代もあとたれそめし敷島の、國のちまたや神のまにまに」の最後に至る。今川了俊の判評するところにかゝる。『續群書類從』卷三百九十六、和歌部第三十一に收めたり。

◎正徹の傳は『草根和歌集』の下にあり。

しやうてつものがたり

正徹物語　二卷　僧　正徹

著者の歌學上に關する物語なり。自ら詠出せる歌、古歌の論、其の他歌詞註釋、歌論、雜談を掲げたり。天明年中に再版せるところなり。

◎正徹の傳は『草根和歌集』の下にあり。

しやうとくくんよしひさこうしふ

常德院義尙公集　寫一卷　足利　義尙

正德五年乙未(一七一五)江戶日本橋萬屋清兵衞の著者の歌集。卷末に多田院の廟前に陪して詠じたる五十首の歌あり。『群書類從』に收めらる。著者足利義尙の傳は『新百人一首』の下にあり。

しやうとくくんしきもく

正德御式目　一卷

正德元年辛卯(一七一一)諸方へ立てたる制札の文なり。京都にて上梓す。

しやうとくかんしゆれい

正德韓使論禮　寫一卷　新井　君美

正德元年辛卯(一七一一)韓使來朝の時儀禮を示したる一册子なり。寬政五年癸丑(一七九三)秋八月近藤守重の細雨奧書あり。「右一册白石先生所以處置韓使也、從來韓使無禮、我邦接之者無禮、文以考之者以肆其放縱大可憎矣、吾不肯欲正之日久矣、頃得先生之論使册欣躍何啻、惜哉不得全編、懼之將者修飾可謂千載之大快活事矣」といへり。

◎新井君美の傳記は「折たく柴の記」の下にあり。

しやうとくごげんぶくにつき

正德御元服日記　寫四卷

正德三年癸巳(一七一三)德川七代家繼の元服、將軍宣下、並に先代(天英院)、位階昇進の次第、諸方より獻上品の事等を記したるものなり。

「御乘馬始記」といふ。『群書類從』卷四百〇五、武家部第五に收めたり。

じやうどくんよしひさこうしふ

常德院義尙公集　寫一卷　足利　義尙

藏版にして、一分十五間、四分一町の積り圖なり。著者石川流仙のことは「日本圖」の下にあり。

しやうとくさんねんぶけんえどおほえづ 正徳三年分間江戸大繪圖 一鋪

「正徳二年江戸繪圖」と同繪圖にして、此の圖は同圖の圖端なる本所末より亀井戸東小松河までの圖を省きて版行せり。正徳三年は紀元二千三百七十三年なり。

しやうとくしんぎ 正徳新儀 本朝一卷

正徳元年辛卯(一七一一)十月議定せる朝鮮使待遇法等を規定したるものなり。同二年間の事實なも記せり。

しやうとくたいしどいちだいちやうか 聖徳太子御一代長歌 一卷

太子が渥華四天王寺を詠める長歌に、前に太子が片岡山にて飢人に遇ふ圖並歌を掲げ、後に奥書を添へて單行したるものなり。

しやうとくたいしごしゆいんき 聖徳太子御手印記 本朝一卷

攝津國四天王寺の本願縁起を記したるもの。本書或は「四天王寺本願縁起」と稱し、書中に聖徳太子の手形二十五箇處に在る故に「御手印記」と名けたるなりと云ふ。未だ此の筆者に就て、巻末に「皇太子佛子勝鬘(聖徳太子の法號)乙卯歳(推古天皇の三年)正月八日、是縁起内記舍堂藏不可披見」なるべし。

しやうとくたいしでんえほうし 聖徳太子傳繪寶誌 二卷 僧 一鳳

日本書紀の中より太子の事蹟に關する記事を抄錄したるもの。間々私註を加へて太子に對する世間の誤妄を辨明したり。明和二(一七六五)年刊行。

しやうとくたいしでんかいせつ 聖徳太子傳開説 一卷 紀 海音

太子傳に關する諸書の中、「聖徳太子傳暦」に據りたれども、「紀海音の傳記は「信田森女占」の手跡猥也」とあり。其の他延二年乙亥(一九五)の資後醍醐天皇御寫奥書を始め、「天王寺法事記」の寶物目錄、三善爲康の「拾遺往生傳」、珍海僧都の「菩提心集」、「無住法師の「雜談集」等に皆太子の事なりとせられたるも、全くこれ後人の僞作なり。姑く一證を擧ぐれば、奈良朝に漢海公(或は云ふ三船眞人)の撰定したる欽明敏達等の御諡號の、この書中に見ゆるが如し。但し弘仁より後のものにもあらざるべしと云ふ。

しやうとくたいしでんつうろく 聖徳太子傳通録 二卷 僧 一鳳

日本書紀の中より太子の事蹟に關する記事を抄錄したるもの。間々私註を加へて太子に對する世間の誤妄を辨明したり。明和二(一七六五)年刊行。年間に上梓す。著者一鳳は長崎の人なり。

しやうとくたいししやりのみやこ 聖徳太子舍利都 一卷 紀 海音

寶永三年丙戌(一七〇六)二月の初興行にかゝる淨瑠璃本なり。著者紀海音の傳記は「信田森女占」の下に出づ。

しやうとくたいしでん 聖徳太子傳 十卷

本書の記す所は大率「聖徳太子傳暦」と同じきも、殺述枝葉に渉りて冗談初説頗る多く、史實を失ふこと尤も甚し。通稱「十卷傳」と云ふ。文保二年戊午(一九七八)の著なり。別に異言宗僧豊作の名に於て寫傳せる「聖徳太子傳記」十卷あり。本書の異本なるべし。

しやうとくたいしでんえんぎ 聖徳太子傳暦 二卷 僧 一鳳

出世の大綱、本跡の定位、形像討論、諸傳の用不、當傳の作例、傳文の相承、解釋名題、入文判釋の八門に分ちて、太子の傳を記せり。

しやうとくたいしでんしふいせう 聖徳太子傳拾遺抄 本朝三卷

聖徳太子の傳記の遺漏せる事どもを綱羅輯收せり

しやうとくたいしでんれき 聖徳太子傳暦 二卷

其の名の如く厩戸聖徳太子の傳記。漢文にて記せり。上巻は欽明天皇の三十一年庚寅(一二三〇)より、推古天皇の十五年丁卯(一二六七)に至り、下巻は同十六年より孝徳天皇の元年乙巳(一三〇五)に終れり。古寫本の奥書に「六十六代一條院自正暦三年壬辰(一六五二)平朝臣基親作、至永正十七年庚辛(一五五百二十九年也)云々。多田義俊は太子傳には法隆寺の傳、橘寺の傳及び天王寺の傳あり、また太子傳に三箇の秘事、五箇の傳、十箇の雜など云へることあるよしを言ひたり。本書一名「平氏太子傳」とも云へるは、巻首に平氏攬とあるを以てなり。此の平氏に就ては異説多し。或は一品式部卿葛原親王といひ、或は平基親といひ、或は慶保胤ともなして、未だ何れとも定かならず。且らく疑はしきを闕きて著者未詳とす。「續群書類從」巻百八十九上下、傳部第一にも收めたり。

しやうとくたいしみらいきもん 聖徳太子未來記文 一卷

一遍親鸞自筆の三人を毀斥したるもの。これ名を太子に假りたる後人の僞作なり。宗徳の「聖徳太子未來記一巻」、宗信の「止峰集」、著者未詳の「僞聖徳太子未來記破説」等ありて、其の僞妄を辨じたり。

しやうとくちやうしんき 正徳注進記 本二卷

尾州海部郡門前庄日本總社正一位津島天王之本末攝社の縁起及び年中行事なり。正徳二年壬辰(一三七二)同社職掌等の注進せる由の漢文序文あり。

しやうとくながさきごしんれい 正徳長崎御新例 本一卷

最初「桐之箱上書左之通」と題し、「長崎御用之書物一番正徳五未(一三七五)春上使仙石丹波守持參」とありて、第一以下第七に至り法制、定例、沙汰の條々凡二十條通を收めたり。

しやうとくにねんえどえづ 正徳二年江戸繪圖 一鋪

正徳二年壬辰(一三七二)版行するところにして、江戸の分間圖なり。「正徳三年分間江戸大繪圖」は此の書を少しく改めて再版したるものなるべし。

しやうとくねんがうべん 正徳年號辨 本一卷 新井 君美

正徳改元の議を論じたるもの。巻尾に記す所に依るに、正徳二年壬辰(一三七二)徳川家宣薨ぜし時、林信篤正徳の年號字面不祥なるに因り改元すべしと進議しければ、關老間部詮房之れを君美に諮りし故に、君美乃ち此の書を進めて、其の不可なることを論じたるなりと云ふ。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

しやうとくぶかん 正徳武鑑 三卷

正徳年間の諸大名諸役人の姓名、知行高、邸宅等を連記したるもの。同四年甲午(一三七四)上木す。

しやうとくろくねんろくぐわつかいげんのさだめ 正徳六年六月改元之定 一卷

正徳六年丙申(一三七六)六月二十二日改元に關する勘申文なり。「類例漢例も記せり。「輪池叢書」第三十六に入れたり。

じやうどけいねんりうき 淨土溟渭分流記 二卷

淨土宗の開祖源空の門下より淨土眞宗の一派が出でし事を始めとして、眞宗の教義及び淨土宗鎮西派との差別等を述べたり。然れども記述簡淺にして取るに足らず。元祿三年庚午(一三五〇)の著也。

じやうどげんりうしやう 淨土源流章 一卷 僧 凝然

淨土教の經典の大綱及び發達沿革の要領を敍述し、其の本末緣起を明かにしたるもの。所載の事項には、淨土所依本經、淨土所依本論、天竺淨教弘通、震旦淨教傳通次第、日本國淨教弘通次第等あり。其の末項に於て、智光、禮光、憲眞、源信、永觀、珍海、

◎慧海は眞宗高田(專修寺)派の僧。字は法寮、英拳と號す。駿河の人なり。本書の外に、「進環辨道略」一巻、「唯信鈔文意聽聞訣」二巻、「文類聚鈔義贊」五巻等を著せり。

じやうどけちみやくろん 淨土血脈論 二卷 僧 良定

印度支那日本に於ける念佛法門の系脈流派を記したるもの。印支二國のは稍簡に失すと雖も、本邦淨土宗の開祖源空上人の門下に於ける、師資相承の系統を記すこと頗る詳密なり。但し卷に系譜の圖表にして傳記等は載せず。天正十一年癸未(一五八三)に成稿す。「元亨釋書」中に淨土宗を眞宗となせしに激して作りたるなりと云ふ。

◎眞定の傳記は「聖圖贊」の下にあり。

じやうどけんもんしふ 淨土見聞集 一卷 僧 存覺

初めに冥府十王の事を記し、次に淨土眞宗の教義を略述したるもの。「眞宗法要」第二十巻に收む。註釋には越後釋興隆の「淨土見聞集鈔」二巻あり。

◎存覺の傳記は「六要鈔」の下に出でたり。

じやうどげんりうしやう 淨土源流章 一卷 僧 凝然

淨土教の經典の大綱及び發達沿革の要領を敍述し、其の本末緣起を明かにしたるもの。所載の事項には、淨土所依本經、淨土所依本論、天竺淨教弘通、震旦淨教傳通次第、日本國淨教弘通次第等あり。其の末項に於て、智光、禮光、憲眞、源信、永觀、珍海、

源空、源空の門下〔幸西、隆寛、證空、聖光、信空、行空、長西〕等の念佛門に於ける主義地位を明確に記載したり。淨土教史の參考として價値ある書の一なり。應長元年辛亥(一九七一)著者七十二歳の作。
◎疑然の傳記は「八宗綱要抄」の下にあり。

じやうどさんきやうしき
淨土三經私記　二卷　僧　源空
淨土三部經を解釋したるもの。粗朴なる漢文より成る。もと假字文なりしを、其のまゝ漢文に改めたるなるべし。東大寺重賢の請に應じて講じたるを、門弟等の筆記したるものなりと云ふ。
◎源空の傳は「選擇本願念佛集」の下にあり。

じやうどさんぶせうごしやく
淨土三部抄語釋　一卷　賀茂　眞淵
淨土三部抄中の用語を、批評訂正したるもの。明和四年丁亥(一七六七)の編にかゝる。淨土三部抄は、江戸清淨院といふにありたる本なりといへり。
◎賀茂眞淵の傳記は「通雅考」の下にあり。

じやうどしうごはふがう
淨土宗御法號　一卷
德川氏族の淨土寺院に葬りしもの、法號、年月、廟塔の所在等を記せり。新田上西入道より九代將軍惇信院家重に至る代々の裏方等に及ぶ。

じやうどしうみやうもくもんだふ
淨土宗名目問答　二卷　僧　辨阿
淨土宗鎭西派の教義の大要を、問答體に略説したるもの。著作の年月詳ならず。元祿十三年庚辰(一七〇〇)に刊行せられたり。
◎辨阿は淨土宗鎭西派の初祖なり。又は辨長と名け、聖光房と號す。筑前香川莊の人。聖保二年壬午(一一八二)五月に生る。少くして白嚴寺の唯心、明星寺の常寂等に歷侍し、更に叡山の東塔觀叡、寶池坊證眞に隨て天台の蘊奥を極む。建久元年庚戌故國に歸り、同九年また上洛して、法然聖人源空に吉水の禪房に謁し、淨土法門の玄底を傳受し、元久元年に至る八年間、常に函丈に侍して教訓を稟く。既にして鎭西に還り、善導寺を山本鄕に創建して盛んに淨教を弘通す。其の著す所本書の外に、「徹選擇集」二卷、「念佛名義集」三卷、「念佛三心要集」一卷、「末代念佛授手印」一卷、「識知淨土論」等あり。嘉祿二年丙戌(一二二六)二月、七十七歳にて入寂。

じやうどしんえうせう
淨土眞要鈔　二卷　僧　存覺
淨土眞宗の教義を述べたるもの。中には正雜二行、平生業成、不來迎、現生不退、一念多念等の事あり。釋了源の望に因りて「淨土文類集」といへる書を加へ全部收むるところ無慮一千餘種に及び、各書の卷數、著者、由來、大綱等を指示せること、前にして要を得たり。安永七年戊戌(一七七八)の撰著なり。
◎存覺の傳記は「六要鈔」の下にあり。

じやうどしんしうぎよくりんわかしふ
淨土眞宗玉林和歌集　四卷　僧　先啓
本書は表題「釋敎玉林和歌集」の下に解題せり。

じやうどしんしうけうてんし
淨土眞宗敎典誌　三卷　僧　玄智
淨土眞宗殊に四本願寺派の書籍目錄。卷二には佛說を始めとして歷代宗主の著書を集錄し、項目を梵土撰述部、支那製作部、日本製作部、眞僞未決部、僞妄濫眞部に分てり。卷三には該宗末徒の著書を收め、註疏部、辨難部、紀傳部、雜纂部等の項を分つ。卷三には眞宗以外の淨土門の典籍を載せたり。

じやうどしんしうことはふりやく
淨土眞宗五派譜略　一卷
淨土眞宗の五派、卽ち東四本願寺、佛光寺、專修寺、錦織寺の略系譜なり。但し其の中四本願寺のみ洩らしたるは、剽竊の際佚せしものならんか。

じやうどしんしうしもんだふ
淨土眞宗私問答　四卷　僧　空誓
淨土眞宗の教義法式等、凡て二十箇條を記したるもの。延寶三年乙卯(一六七五)二月の著なり。
◎空誓の傳は「因陀羅網」の下にあり。

じやうどしんしうしやうげうもくろく
淨土眞宗聖敎目錄　一卷　僧　先啓
其の名の如く淨土眞宗に用ふる所の書籍の目錄なり。寬保元年辛酉(一七四一)の自序に、「紕明是非刊定眞僞辨別部類鈔錄書目以便考覽」といへり。然れども往々擇んで猶ほ綺ならざる箇處なきにあらず。明和六年己丑(一七六九)刊行す。
◎先啓は西濃龜山の人。子雅と字す。其の撰著校刻に係るもの本書の外に、「釋敎玉林和歌集」淨土眞宗龜鑒輯釋」、蓮如上人御傳記」、宣揚記拾遺」、大谷遺法纂集」、眞宗遺文纂要」、小部集要等あり。

じやうどしんしうゆかくへん
淨土眞宗諭客編　一卷　僧　義敎
眞言宗月潭淨土敎を駁斥し、金橋山千手空遍また淨土眞宗を毀謗せしに因り、本書を作りて彼等を返駁したるなり。元文三年戊午(一七三九)二月の著に係る。「洞貴勝法鈔」の下を參看すべし。
◎義敎は眞宗本願寺派の僧。第四の能化たり。越中射水郡氷見村圓福寺に住す。其の學該博にして理義の研究に長じ、人となり溫厚篤實頗る讓讓に富めり。されば學識德望能く學林の大衆を歸服せしめたりと云ふ。著書には本書の外、「觀經敎演記」四卷、「阿彌陀經淨眼鈔」二卷、「論註講義」六卷、「四帖疏講錄」十三卷、「二卷鈔模象記」六卷、「檜殿行藏錄」五卷、「千五百條彈惑」十卷、「本尊義破邪顯正」二卷等あり。
◎義敎の傳記は「六要鈔」の下にあり。

じやうどしんしうりやくかんふしやく
淨土眞宗略名目圖　一卷　僧　峻諦
淨土眞宗の教義法式等を一覽表樣に圖示したるもの。延寶四年丙辰(一六七六)四月の著。天明二年壬寅(一七八二)五月、釋玄智之れを校刻す。
◎峻諦は越前三國湊勝授寺の住僧。眞宗本願寺派の学匠にして知空の弟子となり、學成りて京都に出でて知空の弟子となり、學成りて講演著作以て後進の徒を接導せり。其の著す所本書の外に、「無量壽經會疏」十卷、「四帖疏會疏」二十卷、「小經間持記引證」二卷、「北意問談」二卷等あり。享保六年辛丑(一七二一)正月歿す。享年五十八歳。

じやうどしんしうりやくしやうもくろく
淨土眞宗略聖敎目錄　一卷　僧　日溪
淨土眞宗に用ふる所の書籍の目錄にして、支那淨土眞宗の祖師、道綽善導の二師、及び本朝眞宗の祖親鸞聖人の說を敍したるに因り、本書を作りて風潭の說を返駁したるなり。享保十六年辛亥(一七三一)の著。
◎日溪は眞宗本願寺派の名僧。第四の能化たり。法名、日溪は號、また松花子とも號す。紀州の人。高野山報慶僧都が剃者の命を蒙りしことありし其の願來を記したるもの。林雞山の論議始末記も添

じやうどせつしようへん
淨土折衝篇　二卷　僧　日溪
華嚴宗風潭著「念佛往生明導箱」の中に、支那淨土門の祖、道綽善導の二師、及び本朝眞宗の祖親鸞聖人の說を駁したるに因り、本書を作りて風潭の說を返駁したるなり。享保十六年辛亥(一七三一)の著。
◎日溪は眞宗本願寺派の名僧。第四の能化たり。越中射水郡氷見村圓福寺に住す。其の學該博にして理義の研究に長じ、人となり溫厚篤實頗る讓讓に富めり。されば學識德望能く學林の大衆を歸服せしめたりと云ふ。著書には本書の外、「觀經敎演記」四卷、「阿彌陀經淨眼鈔」二卷、「論註講義」六卷、「四帖疏講錄」十三卷、「二卷鈔模象記」六卷、「檜殿行藏錄」五卷、「千五百條彈惑」十卷、「本尊義破邪顯正」二卷等あり。
◎義敎の傳記は「六要鈔」の下にあり。

じやうどしんしうりやくかんふしやく
淨土眞宗略名目圖　一卷　僧　峻諦
淨土眞宗の教義法式等を一覽表樣に圖示したるもの。延寶四年丙辰(一六七六)四月の著。天明二年壬寅(一七八二)五月、釋玄智之れを校刻す。
◎峻諦は越前三國湊勝授寺の住僧。眞宗本願寺派の学匠にして知空の弟子となり、學成りて講演著作以て後進の徒を接導せり。其の著す所本書の外に、「無量壽經會疏」十卷、「四帖疏會疏」二十卷、「小經間持記引證」二卷、「北意問談」二卷等あり。享保六年辛丑(一七二一)正月歿す。享年五十八歳。

じやうどしんしうりやくしやうもくろく
淨土眞宗略聖敎目錄　一卷　僧　日溪
淨土眞宗に用ふる所の書籍の目錄にして、支那淨土眞宗の祖師、道綽善導の二師、及び本朝眞宗の祖親鸞聖人の說を駁斥し、金橋山千手空遍また淨土眞宗を毀謗せしに因り、本書を作りて風潭の說を返駁したるなり。享保十六年辛亥(一七三一)の著。
◎日溪は眞宗本願寺派の名僧。第四の能化たり。越中射水郡氷見村圓福寺に住す。其の學該博にして理義の研究に長じ、人となり溫厚篤實頗る讓讓に富めり。されば學識德望能く學林の大衆を歸服せしめたりと云ふ。著書には本書の外、「觀經敎演記」四卷、「阿彌陀經淨眼鈔」二卷、「論註講義」六卷、「四帖疏講錄」十三卷、「二卷鈔模象記」六卷、「檜殿行藏錄」五卷、「千五百條彈惑」十卷、「本尊義破邪顯正」二卷等あり。
◎義敎の傳記は「六要鈔」の下にあり

へたり。漢文にて記す。

じやうどふしうろく　浄土扶宗錄　二卷　僧　簡易

浄土宗の教義を辨明し訛謬を匡正したるもの。項目には、本願正業、訛略偽業、道俗惡本、斷玄忠方便、斷別願同異、麒麟聖財論非流支所造、辨園盆施食合行之失等あり。正德五年乙未(一三一五)の著。

じやうどぶんるるじゆせう　浄土文類聚鈔　一卷　僧　親鸞

浄土眞宗の教義を納凱したるもの。即ち「教行信證」の要を摘示したるもの。故に通稱して「略文類」とも云へり。註釋には、圓智の「文類聚鈔試解」三卷、道海の「文類聚鈔私記」七卷、日溪法霖の「文類聚鈔講證」五卷、僧鐔の「文類聚鈔證仰編」五卷、憲榮榮嚴の「文類聚鈔慶濺錄」四卷、法霖慧海の「文類聚鈔義證」五卷、僧機の「文類聚鈔講錄」五卷、道隱の「文類聚鈔法禮」六卷、大嶽の「文類聚鈔集信記」五卷、石泉僧叡の「文類聚鈔吉浦鑒」二卷、善譲の「文類聚鈔聞書」六卷、柔遠の「文類聚鈔肩窺錄」四卷、其の他數部あり。

◎親鸞の傳は「教行信證」の下にあり。

じやうどほんてうかうそうでん　浄土本朝高僧傳　八卷　僧　心阿

浄土宗鎮西派諸高僧の傳記。卷一、卷二には鎮西四十祖、卷三には圓光大師の門資十傑、及び聖光上人、記主禪師、寂慧上人、定慧上人等の門資、卷四より引續いて以下諸高僧等、凡そ二百人の傳記を列載し、附錄として、宗名志、四本山志、擯林志、九部志、二諦志等の五編あり。寶永元年甲申(一三六四)十二月の自序及び內題には「浄土鎮流祖傳」と云ひ、外題及び沙門到然の序には「浄土本朝高僧傳」と云へり。正德三年癸巳(一三七三)開版。著者心阿は湖北松江の稱名寺に住したる浄土宗鎮西派の僧にして、宣譽と字す。

じやうどろんざうしふ　浄土論藏集　一卷

浄土宗の教義に關する論題を立て、或問體に記述したるもの。總て百二十五題あり。其の中三四を擧ぐれば、明浄土往生何經爲正耶、今經教主三身中何耶、安養界有爲無爲中何耶、淨土教門三乘一乘中何耶、道綽禪師聖淨二門如何等の類なり。

じやうどわさん　浄土和讃　一卷　僧　親鸞

浄土眞宗の教義を和述讃詠したるもの。流暢なる七五調より成る、四句を以て一首となし、總計一百十八首あり。建長六年甲寅(一九一四)十二月の作なり。この外に「高僧和讃」及び「正像末和讃」あり。本書を併せて「三帖和讃」と通稱し、眞宗信徒が朝夕佛前に誦唱する所なり。註釋書の中「三帖和讃」の註釋は大抵本書のみに係る。智空の「浄土和讃愚鑑記」三卷、日溪法霖の「浄土和讃聖淚記」九卷、月筌榮信の「浄土和讃取意」三卷、其の他數部あり。

◎親鸞の傳は「教行信證」の下に在り。

じやうどわさんはうきをぼん　浄土和讃方軌會本　四卷　僧　僧鎔

浄土和讃三帖を釋義せるもの。最初造意、大旨、所爲、類例、製時、編輯、科節、校異、註家、題義等を詳說せり。赤松皆恩校正して四卷五册に發行す。

◎僧鎔の傳は「高僧和讃方軌會本」の下にあり。

しやうないものがたり　莊內物語　本二卷　小寺　信正

莊內は出羽國飽海郡田川郡の地名にて、本書は同地の武藤出羽守義氏の事蹟を記し、且地理と歷史とを、見聞に依て記述したるもの。一卷は附錄として、二郡の寺社其の他の事を雜記せり。正德元年辛卯(一三七一)の稿を、享保九年甲辰(一三八四)脫稿したるものなりといふ。

しやうにんぐんばいき　商人軍配記　五卷　川島　信清

商人の事情、立身出世の有樣を可笑しく書き綴りたる物語なり。目次には、曾編二つ重綴り持の金銀、掲屋へ計り出す米屋の仕果、貸苦を切替るかため綸書、悦び積つて十露盤の粒積の祖、商人の刃物目利は大庭の裝、其の他十箇條あり。著者川島信清は大和綸師なり。

しやうにんでん　上人傳　本十六軸

浄土宗の開祖法然上人(源空)の行狀を詳記したる

綸傳なり。著者の端書中に「ひろく諸聞をとふらひあまれく憑記をかんがへまことをえらびあやまちをたゞして粗始終の行狀を勒するところなり。おろかなる人のさとりやすく見んものゝ信をすゝめんがために數軸の圖畫にあらはして萬代の明鑒にそなふ」と云へり。以て其の用意を伺ふべし。著者の名を記さゞれども、該宗々徒の手に成りしものなること勿論なり。

しやうにんなりはいかゞみ　商人生業鑑　五卷　岩垣　光定

商人渡世の心得となるべき雜話を筋書に記したるもの。寶暦七年丁丑(一七五七)の自跋に、此一本は予若かりしより賢き人の見及び言傳へ、商事に益ある咄を聞て、愚なる心にも理とおもへる事を、老後の慰に憑筆に書付しなり云々とあり。

しやうねくらべあねがはづきん　性根競姉川頭巾　一卷　近松　半二

善平、平七、專助、笛躬等合作するところの淨瑠璃本なり。安永三年癸巳(一七七三)四月に成れり。著者近松半二の傳は「國取千兩幟」の下にあり。

しやうばいしほふたいせい　商賣仕法大成　六卷

商家諸職必要の事を網羅す。諸國產物、同寸尺等に至るまで記せり。故に一名を「萬金產業袋」といふ。

しやうはうじろく　正寶事錄　本五十册

德川幕府が、正保五年戊子(一六四八)より、寶曆五年乙亥(一七五五)に至るまで、年々町方に觸れ出したる書付、及び町年寄より、布告せる書類等を集めたるものなり。五十册の內部分目六册、總目錄六册にて以て五十八册なり。

しやうはうそうじやうでん　聖寶僧正傳　本一卷

眞言宗注連俗正法印大和尚聖寶の傳。漢文にて記す。「續群書類從」卷二百十三、傳部第二十四にあり。

しやうぼふげんざう　正法眼藏　九十五卷　僧　道元

著者の法語を纂輯す。寬喜三年辛卯(一八九一)、深草の安養院に說きし、第一「辨道話」の卷を、始めとし、建長五年癸酉(一九一三)、永平寺に說きたる、第九十五「八大人覺」の卷に至れり。編纂の由來を記せば、始め、建長七年乙卯(一九一五)に永平寺二代懷奘禪師が七十五帖を編集し、其の後嘉曆四年己巳(一九八九)の夏、義雲禪師は別に六十卷な編集す。而して應永二十六年己亥(一四一九)の頃、加州佛陀寺の梵清和尚、懷奘編集の七十五卷を書寫して二十册に分ち、更に散逸せる九卷を收寫して五册となし、別に綱目一册を加へて全部二十六册に、又別に辨道話、重雲堂式、承應院文の三卷を得、梓に始めて現今刊行の本書九十五卷は成れるなり。然るに本書の出版は久しく該本山の禁ずる所なりしが、寬政八年丙辰(一七九六)十二月、允許を得て開版に着手し、十六年を經て、文化八年辛未(一八一一)の春、全部の刻成を告げ、更に同十二年全く校合を了りたりと云ふ。明治十六年之れを重刻し、明治二十九年活刷に附し縮綴して一册となし携帶に便せり。

本書を註釋または提要したるものには、延慶元年戊申(一三〇八)十二月に成りし經豪和尚の「正法眼藏經豪抄」を最初とし、其の外に面山禪師の「正法眼藏涉典錄」、黃泉和尚の「正法眼藏涉典錄綴貂」、天桂和尚の「正法眼藏辨註」、面山和尚の「正法眼藏聞解」、本光和尚の「却退一字參」、一名「正法眼藏參註」(世に單に參註と稱す)、老卵和尚の「正法眼藏那一寶」、藏海和尚の「正法眼藏私記」等あり。別に面山和尚の「正法眼藏聞那訣」、乙堂和尚の「正法眼藏經綾講義」、面山和尚の「正法眼藏和語抄」、萬端和尚の「正法眼藏和語梯」、三休庵の「正法眼藏諫蠹錄」等の數部あれども、全部に渉りて註解したるものにあらず。近刊「永平正法眼藏顯開事考」は瀧谷琢宗禪師の著にして、本書撰述編纂等の來歷を詳細に考說せり。

◎道元は本邦曹洞宗の開祖なり。內大臣久我通親の子にして。正治二年庚申(一二〇〇)正月二日生る。これを太陽曆に推算すれば一月二十六日に丁る。故に近年曹洞宗務局より、全國の僧侶及び檀信徒に令し、此の日を以て承陽大師降誕の報恩會を終行せしむ。天資穎敏、聞一知十の明智あり。然るに、三歲にして父を喪ひ、八歲にして母に別れ、其の龕前に拈香するや、香烟の幻影、生滅無常なるに感悟して、怨ら出家求法の志を決定せり。これより

世親菩薩の俱舎論を始め、晝夜佛書の研究に從事す。時に外叔前關白藤原師家、道元を聘つて嗣となし、やがて年十三、加冠して顯職に榮顯せんとし、補任また將に決せんとするを察し、竊に家を脫して外叔良覺法眼の室に投じ、素志を告げて遂に其の同意を得、翌、建保元年四月九日天台の座主公圓僧正に就て薙髮受戒せり。學は天台八教より、祕密一乘の經文に至るまで、研究到らざるなし、然るに經理の深廣なる、研究するに隨つて益不審を生じ、公胤、榮西等の舍宿に就てこれを糺し、更に唐土に入り、其の源泉に遡りて不立文字の理、教外別傳の道を正傳せんと志し、貞應二年癸未(一二二三)年二十四、明全禪師に謁ひて唐土に入り、天童山に上りて無際禪師に見え、留錫二年にして正法傳授の血脈を受け、經山寺王等の名山に巡錫し、無際禪師の入寂に遭ひ、後住如淨禪師に參問して無上菩提を開悟し、正傳の大戒を受けて遂に歸朝せり。時に安貞元年丁亥(一二二七)なり。爾來山城の興聖寺、越前の永平寺等を與して專ら曹洞宗を弘通す。其の間の垂戒始終間なく、正法眼藏に收むる九十五編は其の大部分を集めたるものなり。著述には、正法眼藏、寶慶記、普勸坐禪儀、學道用心集、永平清規、永平廣錄、傘松道詠、正法眼藏隨聞記等あり。皆禪家の至寶とするところなり。建長五年癸丑(一二五三)八月二十八日、太陽曆九月二十九日年五十四(法臘四十一)にて入寂す。一宗本末の寺院及び檀信徒等此の日を以て忌日と定め供養す。孝明天皇の嘉永七年甲寅(一八五四)二月二十四日、佛性傳東國師の謚號を賜り、明治十二年十一月二十二日今上天皇陛下より、承陽大師の謚を賜り、また明治三十五年諡後六百五十年にあたり、承陽の敕額を賜る。實に曹門の紹隆、洞家の光榮なりとす。

しやうばふげんざうさんちう
正法眼藏參註　十四卷　僧　本光

永平承陽大師の「正法眼藏」の全部九十五卷の每章各節を註解考證したるもの。明和六年己丑(一七六九)に撰述し、文化九年壬申(一八一二)に之れを開版したり。

◎本光は曹洞宗の僧。字は瞎道、俗姓は新井、武藏の人なり。指月慧印の法嗣となり、諸方の招請に應じて禪法を提唱せり。人となり磊落不羈且つ博識強記なり。其の著す所本書の外に、衆寮清規求寂參註、大智偈頌參註、永平廣錄鹽梅錄、宏智錄國字註、曹山解釋、洞山五位顯訣、三賢四異類、心王銘參註等數十部あり。安永二年癸巳(一七七三)十月入寂す、享年詳ならず。

しやうばふげんざうしき
正法眼藏私記　十二冊　僧　藏海

永平寺道元禪師の「正法眼藏」の全部を註釋したもの。經藏和尚と本光和尚との說を參酌し自己の考案を加えて簡短に解釋せり。天明年間の作なり。

しやうばふげんざうずるもんき
正法眼藏隨聞記　六卷　僧　懷弊

永平承陽大師に就て、禪學の要旨を、聞くに隨て筆錄したるもの。始め寬文九年己酉(一六六九)に刊刻し、寶暦八年戊寅(一七五八)に再刻す

◎懷弊は曹洞宗の僧。永平道元禪師の法嗣なり。字は孤雲、姓は藤氏、洛陽の人。初め橫川の四能に從て剃髮受戒し、顯密諸教を研修せり。また多武峰の覺藏禪師に見え、其の提唱を聞き言下に證契したり。道元の永平寺を開くや力を戮せて輔翼し、法令ある每に懷弊に施行せしむ。建長五年癸丑道元病んで退休するや懷弊に永平住持の職を襲がしむ。弘安二年己卯(一二七九)八月入寂す、享年八十有三。

しやうばふげんざうせふてんろく
正法眼藏涉典錄　十一卷　僧　瑞方

本邦曹洞宗の開祖承陽大師の「正法眼藏」全部の事績典據を諸書によりて考證註釋したるもの。漢文にて記さる。享保元年丙申(一七一六)の撰述なり。

◎瑞方は曹洞宗の僧。肥後山本郡の人、今村氏なり、瑞方は名、面山は字なり。仙巖梵柱翁の弟子となれり。肥後の禪定寺若狹の空印寺等に歷住し、後に永福庵を建て、退隱の處と爲せり。京都の建仁寺南禪寺、江戶の青松寺、其他諸處の招請に應じて禪法を提唱し、著書頗る多く、本書の外に、正法眼藏聞解、正法眼藏闢邪訣、永福面山廣錄其の他十數部あり。明和六年己丑(一七六九)九月、享年八十七にて入寂したり。

しやうばふげんざうせふてんろくぞくそう
正法眼藏涉典錄續貂　一卷　僧　黃泉

前揭「正法眼藏涉典錄」の遺漏を補修したるもの。文化年中の著なり。著者黃泉のことは「心經忘筌疏」の下にあり。

しやうばふげんざうそくげんかうぎ
正法眼藏續紹講義　五卷　僧　乙堂

永平寺道元禪師の「正法眼藏」の面授章を註釋し、天桂禪師の「正法眼藏辨註」等の解釋を論議詳破したるものなり。凡例に曰く「續紹予直註正文、之書目也。講義議論或者之謬解也。或者有調紕悪述大綱、題本文、辨註之予從頭調紕、至辨註一々議破之、初題正、次舉耶譏正、次舉也云々。享保十六年の自序あり。同二十年再治す。明治二十九年新刻の刊本あり。著者乙堂は喚丑と字し、別に「竪辨道書」二卷の著あり。

しやうばふげんざうないつぱう
正法眼藏那一寶　九十五卷　僧　老卵

道元禪師の「正法眼藏」の全部九十五卷を註解したるもの。而して其の解釋は多く天桂和尚の「正法眼藏辨註」の說を祖述せり。寬政三年辛亥(一七九一)の撰述なり。

しやうばふげんざうぶんかい
正法眼藏聞解　二卷　僧　瑞方

承陽大師の「正法眼藏」を、卷を逐うて平易詳細なる註解を施したるもの。本書は著者自ら筆を執りたるにあらずして、師の講義を門人の筆記したるなるべし。寶曆年間の著にして百三十餘年窩本にて傳はり、明治二十四年新に活刷し、二冊として發行せられたり。

◎瑞方の傳は「正法眼藏涉典錄」の下にあり。

しやうばふげんざうへきじやけつ
正法眼藏闢邪訣　一卷　僧　瑞方

「正法眼藏」を讀む者の謬惑を辨斥したる書目也。講義議論或者之謬解也。或者有調紕惡述大綱題本文辨註之予從頭調紕至辨註一々議破之初題正次舉耶譏正次舉也云々。享保十六年の自序あり。同二十年再治す。明治二十九年新刻の刊本あり。著者乙堂は喚丑と字し、別に「竪辨道書」二卷の著あり。

しやうばふげんざうべんちう
正法眼藏辨註　廿二卷　僧　天桂

永平承陽大師の「正法眼藏」の全部を註釋したもの。而して其の解釋は多く天桂和尚の「正法眼藏辨註」の說を祖述せり。寬政三年辛亥(一七九一)の撰述なり。

しやうばふげんざうぼだいき
正法眼藏菩提記　一卷　僧　瑞方

後學の爲「正法眼藏」の大綱を述べ示したるもの。元文三年戊午(一七三八)春の撰述なり。著者瑞方の傳は「正法眼藏涉典錄」の下にあり。

しやうばふげんざうまいもん
正法眼藏埋門　一卷　僧　瑞方

永平寺道元禪師の「正法眼藏」の面授章を註釋し、天桂禪師の「正法眼藏辨註」等の解釋を論議詳破したるものなり。凡例に曰く「續紹予直註正文、之書目也。講義議論或者之謬解也。或者有調紕惡述大綱題本文辨註之予從頭調紕至辨註一々議破之初題正次舉耶譏正次舉也云々。享保十六年の自序あり。同二十年再治す。明治二十九年新刻の刊本あり。著者乙堂は喚丑と字し、別に「竪辨道書」二卷の著あり。

しやうばふげんざうやくしき
正法眼藏略式　一卷　僧　瑞方

永平寺道元禪師の「正法眼藏」の面授章を註釋し、天桂禪師の「正法眼藏辨註」等の解釋を論議詳破したるものなり。凡例に曰く「續紹予直註正文、之書目也。講義議論或者之謬解也。或者有調紕惡述大綱題本文辨註之予從頭調紕至辨註一々議破之初題正次舉耶譏正次舉也云々。享保十六年の自序あり。同二十年再治す。明治二十九年新刻の刊本あり。著者乙堂は喚丑と字し、別に「竪辨道書」二卷の著あり。

しやうばふげんざうようじやけつ
正法眼藏要訣　一卷　僧　瑞方

永平寺道元禪師の「正法眼藏」の面授章を註釋し、天桂禪師の「正法眼藏辨註」等の解釋を論議詳破したるものなり。凡例に曰く「續紹予直註正文、之書目也。講義議論或者之謬解也。或者有調紕惡述大綱題本文辨註之予從頭調紕至辨註一々議破之初題正次舉耶譏正次舉也云々。享保十六年の自序あり。同二十年再治す。明治二十九年新刻の刊本あり。著者乙堂は喚丑と字し、別に「竪辨道書」二卷の著あり。

しやうばふげんざうらいはい
正法眼藏禮拜　一卷　僧　瑞方

永平寺道元禪師の「正法眼藏」の面授章を註釋し、天桂禪師の「正法眼藏辨註」等の解釋を論議詳破したるものなり。凡例に曰く「續紹予直註正文、之書目也。講義議論或者之謬解也。或者有調紕惡述大綱題本文辨註之予從頭調紕至辨註一々議破之初題正次舉耶譏正次舉也云々。享保十六年の自序あり。同二十年再治す。明治二十九年新刻の刊本あり。著者乙堂は喚丑と字し、別に「竪辨道書」二卷の著あり。

しやうばふげんざうりやくしき
正法眼藏略式　一卷　僧　瑞方

永平寺道元禪師の「正法眼藏」の面授章を註釋し、天桂禪師の「正法眼藏辨註」等の解釋を論議詳破したるものなり。凡例に曰く「續紹予直註正文、之書目也。講義議論或者之謬解也。或者有調紕惡述大綱題本文辨註之予從頭調紕至辨註一々議破之初題正次舉耶譏正次舉也云々。享保十六年の自序あり。同二十年再治す。明治二十九年新刻の刊本あり。著者乙堂は喚丑と字し、別に「竪辨道書」二卷の著あり。

しやうばふげんざうりやくしき
正法眼藏略式　一卷　僧　瑞方

永平寺道元禪師の「正法眼藏」の面授章を註釋し、天桂禪師の「正法眼藏辨註」等の解釋を論議詳破したるものなり。凡例に曰く「續紹予直註正文、之書目也。講義議論或者之謬解也。或者有調紕惡述大綱題本文辨註之予從頭調紕至辨註一々議破之初題正次舉耶譏正次舉也云々。享保十六年の自序あり。同二十年再治す。明治二十九年新刻の刊本あり。著者乙堂は喚丑と字し、別に「竪辨道書」二卷の著あり。

しやうばふげんざうりやくしき
正法眼藏略式　一卷　僧　瑞方

永平寺道元禪師の「正法眼藏」の面授章を註釋し、天桂禪師の「正法眼藏辨註」等の解釋を論議詳破したるものなり。凡例に曰く「續紹予直註正文、之書目也。講義議論或者之謬解也。或者有調紕惡述大綱題本文辨註之予從頭調紕至辨註一々議破之初題正次舉耶譏正次舉也云々。享保十六年の自序あり。同二十年再治す。明治二十九年新刻の刊本あり。著者乙堂は喚丑と字し、別に「竪辨道書」二卷の著あり。

本に「令書寫進一授畢」とあり。

しやうふうのう

昌風流　二册　天岳

俳句の集にて、元祿十二年己卯(一六九九)京都井筒屋より發行するところなり。

しやうふきさいそんかう

尚不愧齋存稿　四卷　原忠成

著者の詩文集なり。明治十五年壬午(一八八二)門人緒引泰の編輯發行するところなり。

◎原忠成は水戸の藩士にして、字は仲寧、通稱市之進、號を尚不愧齋といふ。幼にして藥を會澤恕齋、藤田東湖等に受けて弘道館に入り、歲餘にして舍長となる。後江戸に出でて古賀謹堂に學び、昌平黌に入り、また當時の諸學者と交る。後年羽倉簡堂、鹽谷宕陰、藤森弘庵に從遊す。水戸に召還せられて、步士となり、弘道館訓導を兼ね、屢從人となり、史館編修を掌り、また家塾を開きて生徒を敎ふ。文久二年一橋公將軍たるに及び、召して機務に參預せしめ、倉祿百五十苞を與へて國政改革の事を管せしむ。慶應年中兵庫開港の議起るに及び、議論沸騰し、江戸にありて志を得ざるの幕臣、仲寧を姻みて、終にこれを刺殺せしむ。時に慶應三年丁卯(一八六七)八月十四日、年三十八。著書は本書の外に竅玉明神事績考、西遊記、論史會稿、晉府紀略等也。

しやうふくじぶつでんき

聖福寺佛殿記　一卷

西海道筑前博多津の安國山聖福禪寺の緣起なり。

しやうへいがくこそうげんばんしよもく

昌平學庫宋元版書目　一卷

昌平黌所藏の宋版書を、列載して、各解題したるものなり。

しやうへいざかがくもんじよづならびにきげんさうのづ

昌平坂學問所圖並鬼狀頭之圖　一帖　片岡直亮

江戸湯島昌平坂學問所再建後の繪圖、一帖は總構の圖にて有來建家、石垣、四半石、布敷石、石踏段、家居新規建直建引共、堂舍新知建引建直共、土手なだれ共、外構、下水、棟屏等着色を以て記し、一帖は鬼狀頭瓷瓦及び鬼龍子の圖、一帖は鬼狀頭及び瓷瓦正圖の圖、寸尺畫目等を記せり。

◎片岡直亮のことは「柳營祕圖」の下にあり。

しやうへいざかがくもんじよづ

昌平坂學問所圖錄目錄　一卷

昌平坂文庫の藏書記錄、御家、家傳、典故、戰記、漫錄、談話の諸綱に分ち書名と册數とを揭げ、凡て二千數百部を收めたり。

しやうへいし

昌平志　五卷

江戸學問所昌平學校の沿革を誌したるもの。德川三代將軍家光、始めて學校を忍岡に立てしより、五代將軍吉湯島の地に移して、歷世益盛なることまでを記せり。全編漢文にて記し、第一卷を廟圖誌(圖數三十種)第二卷を事實誌(寬永七年より寬政十二年に至る。第三卷を禮器誌(八十六種)、第四卷を經籍誌(四庫の書目)、第五卷を禮節誌(釋奠等の式)等に分ちて詳敍せり。寬政六年甲寅(一七九四)尼藤孝彙の序、同年自序あり。幕府へ進獻したるものなり。

◎犬塚遜の傳記は「文翰搜依」の下にあり。

しやうへんじせん

象變辭占　四卷　眞勢達富

易の象、變、辭、占の四を說明論述したるもの。百數十目に分ちて理論と應用等を詳にせり。假名文にて記す。著者の講述につきて、源雍基(松井某)の撰集するところなり。享和三年癸亥(一八〇三)同人の序あり。明治二十九年丙申(一八九六)阿部廣之進校正出版す。

◎眞勢達富は尾張の人、字を資貫、通稱を彦右衛門といひ、申洲と號す。新井白峨に就きて易を學び、後占筮を業とす。著書は本書の外に、復古易繩張入神傳、易占撰力、存々成務、受命總音、祕解、周易講義、範圍類應傳、眞瀨三祕傳、周易象徵、全諺解、左國占法斷解、復古堂一家言、復古雜著等あり。文化十四年丁丑(一八一七)二月、六十四にて歿す。

しやうほいじ

正保遺事　一卷　矢野玄道

正保のみかど後光明天皇御一生の聖德逸美を謹錄し奉れるもの。補翼賢臣の生卒年月及び白牡丹の

御製を附記す。假字文より成れり。寬政八年丙辰(一七九六)員衙の原署は「後光明天皇外紀」と名けたりしを、補正し題號も憚りありとて今の名に改めたるなりと云ふ。

◎矢野玄道の傳は「印度藏志略前集」の下にあり。

しやうほえどづ

正保江戸繪圖　一鋪

東は隅田川を限り、西は中野を限り、南は芝を限り、北は谷中を限り青(水)、黃(道)、淡墨(田)、朱(橋)、綠(丘及林)等を以て符記す。此の圖に長松君の御屋敷越前宰相忠昌の屋敷あり、長松君は正保元年甲申(一六四四)七月二十四日誕生、越前宰相朝臣は正保二年八月朔日逝去、されば此の圖は正保元年の末より、翌二年の七月頃までの繪圖なるべしと大久保忠寄はいへり。

じやうほくいぶん

常北遺聞　一卷

常陸國北方の事績にして、古城三所を擧げ、各城主の事績等を主に記したるものなり。

しやうほくろふねらいてうき

正保黑船來朝記　一卷

正保四年丁亥(一六四七)六月、葡萄牙船、長崎入津の時の始末を記したるもの。末に元祿九年丙子(一六九六)記したる由あり。

しやうほにねんごげんぶくき

正保二年御元服記　一卷

正保二年乙酉(一六四五)卯月二十三日德川家綱の元服したる所の日記なり。

しやうほぶかん

正保武鑑　一卷

正保年間の大名旗下の士の苗字をいろは分けにして、其の下に邸宅の所在等を記したるもの。同四年丁亥(一六四七)出版す。

しやうほやし

正保野史　一卷

後光明天皇の御事績を錄したてまつれるもの。漢文にて記せり。「正保遺事」に據りて、成せるものなるべし。文久二年壬戌(一八六二)正月の著なり。

◎矢野玄道の傳は「印度藏志略前集」の下にあり。

じやうみくわいさうき

上巳怪聲記　一册

天保八年丁酉(一八三七)より起りて翌九年に一件落着したる大鹽平八郎の騷擾始末を記したるものなり。

じやうみやうしゆゐんせうき

淨明珠院抄　一卷　藤原晴良

內題には、「裝束抄」とありて、裝束に關する種々の故實典例を記したるもの。一名を「二條家裝束抄」とも云へり。

◎藤原晴良は羽林の子なり。天文十七年戊申(一五四八)より、左大臣に至る。天正七年己卯(一五七九)四月二十九日五十四にて薨ず。淨明珠院と稱す。

じやうもうやまぶきだつき

上毛山吹日記　三卷

多田千健といふものと共に、江戸四谷門より出でて武藏、上野の名勝佳景等を探り歩きたる時の日記なり。故に一名を「武藏上野紀行」といへり「上毛山吹日記」の名は、卷末に引出せる「くちなしの色に言葉のそみぬれば、いはでぞたゞに山吹の花」に緣を取りしものなるべし。

じやうやうしせんき

常陽四戰記　一卷

常陽は常陸國を指せり。永祿二年己未(一五五九)四月二十八日、常州信太郡小田城主讃岐守氏治入道天庵と、越後の上杉輝虎入道謙信と眞壁郡山王堂に於て合戰したるを最初として、元亀四年癸酉(一五七三)四月、天庵と、眞壁の城主左衞門尉氏幹との戰、茨城郡笠間の城主大和守入道心休と同國猿子某〔辛都宮尙綱の一族にして四萬石を領す〕との戰、全上跡軍の四戰略記なり。「續群書類從」卷六百十四、合戰部第四十四にも入れたり。

じやうやさいやくし

常野採藥志　一卷　小野職博

享和元年辛酉(一八〇一)夏四月、採藥の命により、常陸氣波つゝきの山、並に下野日光の諸山を巡回する爲め、同月七日江戸千住の宿を立ちて、同十八日板橋宿より江戸に歸る間に於ける日記なり。藥草のことを記す事委し。

◎小野職博の傳は「欽勝摘要」の下にあり。

じやうらくき　常樂記　一卷

永仁三年乙未(一九五五)願行上人宗燈和尚の入滅より、曆永二十二年乙巳(一〇八五)に至る、賀識高僧の他界年月日を年序的に記したるものなり。「群書類從」卷五百十三、雜部第六十八にあり。

しやうりやうじえんぎ　清涼寺緣起　一卷

山城國嵯峨五臺山清涼寺の緣起を詳記したるものなり。「續群書類從」卷七百八十九、釋家部第七十四に收めたり。

しやうりやうしふ　性靈集　十卷　僧　眞濟

弘法大師空海の詩賦、上表、碑、銘、尺牘、願文等を撰集したるもの。內題には「遍照發揮性靈集」と記し、編輯者眞濟の序文あり。其の中後三卷は「續性靈集補闕鈔」として、末に「此集第八以來零落年久仍拾先聖美言補三軸闕文。于時承曆三年(一七三九)仲冬上旬愚昧珍芻濟運記」と書へり。現行の刊本中には釋印蓮全編の文段句節を解割したるもあり。

◎眞濟の傳は「空海僧都部」の下にあり。

しやうりやうしふせう　性靈集鈔　十卷　僧　運敞

弘法大師の詩文を集めたる「性靈集」を註釋したるものなり。全編十卷を十七册に刊行せり。著者運敞の傳は「三教指歸註劉補」の下にあり。

しやうりやくし　志陽略志　三卷　田　理

志摩國の地誌なり。上卷に形勝、郡名、村里、建置、沿革、城砦、神社の七門。中卷に寺院、古蹟、土產門。下卷に詠歌門を掲ぐ。正德三年癸巳(一三七三)の自序あり。

◎田理の傳記は「志摩雜錄」の下にあり。

じやうるりごぜんものがたり　淨瑠璃御前物語　一卷

淨瑠璃御前もうしごの最初より、其の一生浮沈を十二段に分ち作れる古小說なり。趣向、繪畫筆簡單なるところ却て面白し。世に淨瑠璃十二段草子と稱し、淨瑠璃を語ること此の書に始まれりとす。

じやうるりじふにだんざうし　淨瑠璃十二段草紙　二卷

小野於通淨瑠璃十二段の序といへる文なり。淨瑠璃本の嗤矢ともいふべし。

じやうるりはやがてん　淨瑠璃早合點　一卷　豐竹此大夫

表題に音曲語樣、口授祕傳淨瑠璃天狗と冠して、操芝居の辨、稽古の仕樣、同心得、聲を熟すの辨、外連決といふ論、無理當自然の辨、素人より大夫に成るの辨以下二十三目、凡て三十題に分けて說明せる初て本書の由來を知るべし。近刊「溫知叢書」第四編といふ簡短なる端書あり。天保十一年庚子(一五〇〇)出版す。著者豐竹此大夫は「豐竹祖越前少掾藤原重泰高弟筑前少掾藤原爲政門人豐竹此大夫保道」と末記せり。

じやうるりひめものがたり　淨瑠璃姬譚　八卷　狂蝶子文麿

牛若丸と參河矢矧長者の娘なる淨瑠璃姬との經歷情奕を綴りなしたる小說なり。文化九年壬申(一四七二)仲秋、十返舍一九の序に「此書を記すに參州矢はぎの長と聞えし淨瑠璃姬の眞操を稽古し、卷中すべて善惡の報を明にし其軸を期にす」云々と記せり。

じやうるりふ　竹本淨瑠璃譜　二卷

豐竹淨瑠璃譜(一三四四—一三四七)より、明和(一四二四—一四三二)に至る、凡そ八十年間の大阪竹本豐竹兩座の淨瑠璃の沿革を年序を逐うて記したるもの。上卷は竹本座、下卷は豐竹座のに係れり。文化元年甲子(一四六四)春花園主人太田蜀山の序あり。曰く「享和とあらたまりぬるとし、蘆がちる雛波にありて、此書ふたまきを得たり。竹本豐竹ふたつの園にかたりものぜし戲れ文の名を、書き列れて、笠翁傳奇の種より、傾師舞木の態に至るまで、見あつめ聞あつめて、諸事聞書往來としるせり。今その名の雅ならざるを憾みて、あらためて竹本豐竹淨瑠璃譜と題す。世に淨瑠璃年代記などいふものあれど、擇びて錄からず。語りて詳ならざりけらし」と。以

にも收めらる。

しやうろくかんき　正祿間記　一卷

永正年間足利將軍の老臣細川右京大夫政元に、九那澄之、六那澄元なる二人の養子ありて、細川家が終に二流と分れし事より筆を起して、足利季世の變亂を記し、永祿十一年戊辰(一五六八)織田信長越前征伐の役に終れり。

しやうわうほんぎ　聖皇本紀　四卷

攝事本紀大成經第三十五より第三十八に至る、卽ち太子の事績を記載したる分を別行したるもの。記事は大抵「聖德太子傳曆」と大同小異にして、間間虛誕の事談を雜へたり。

しやうわえうかんざつき　正和要簡雜記　一卷　赤松　範元

天正十二年甲申(一二四四)長久手合戰より、元和元年乙卯(一二七五)大阪落城までの大要を記載す。提要守簡の意より、正和要簡の名は附したる由序中に見えたり。元祿十二年己卯(一三五九)審齋河清の序文あり。

しやうわさんねんてうきんぎやうかうき　正和三年朝覲行幸記　一卷

正和三年甲寅(一九七四)正月二日、常磐井殿へ行幸遊ばせられたる時の記なり。御裝束事、御輦、御車事、御牛事、移馬事、移鞍事、移鞦事、前駈馬六匹事、同鞍六具事、同笠六本並同裝束事等の目錄なり。「續群書類從」卷八十四、帝王部第三にあり。

しやうわしふ　唱和集　一卷　早川　廣海

阿闍梨契沖と下河邊長流との贈答和歌を編輯したるものなり。清水濱臣の閱にかゝる。

しやうわしんき　正和辰記　一卷

正和三年甲寅(一九七四)正月二日より、同二十七日に至る間の御日記なり。

◎花園天皇の御傳は「震筆曆記」の下にあり。

しやうわにねんごうだのゐんかうやみゆきのき　正和二年後宇多院高野御幸記　一卷　朽木　頼濟

正和二年癸丑(一九七三)高野山へ行幸遊ばせられたる時の記。同年九月記すところなり。同山の規模帝王部第六にあり。

しやえきしんろん　瀉疫新論　二卷　高島　久貫

流行瀉疫の病因症候を論じ、診法處方等を說明したるもの。異城傳來の項より、治驗の項に至る三十七項、理論實際、經驗を併せて漢文にて記す。安政六年己未(一二五一九)重陽後一日の自序、淺田惟常の序あり。明治十二年男久也增補し、孫久敬校正して發行す。

◎高島久貫は字は子通、俗雪と號す。江戶の醫なり。淺田宗伯と友たり。慶應三年丁卯(一二五二七)秋七月、坂城に赴き擢でられて幕府の侍醫に班し法眼に敍せらる。

しやかいちだいでんき　釋迦一代傳記　四卷　僧　了意

書名の示す如く、釋迦牟尼佛一生の事績を假名書通俗に記したるもの。天和三年癸亥(一三四三)四月八日より筆を起して、貞享元年甲子(一三四四)二月十五日編輯し了へたりといふ。明治十七年小本四册に刻成す。

◎了意の傳は「孟園盆經疏新記直談」の下にあり。

しやかじつろく　釋迦實錄　五卷　梅暮里谷峩

釋迦牟尼佛の一生事實を譯述したるものなり。龍圖は橋本玉園の手になる。嘉永七年甲寅(一二五一四)成稿の自序あり。

◎梅暮里谷峩の傳は「斯波道說七長臣」の下にあり

しやかによらいせんだんずゐざうき　釋迦如來栴檀瑞像記　一卷

一名「酉曉部州嵯峨五臺山實記」の下に解題せり。

しやかによらいたんじやうゑ　釋迦如來誕生會　一卷　近松門左衛門

釋迦佛一生の行蹟を假託したる戲曲なり。摩耶夫

人悉多太子を誕みしなば、姉后憍曇彌が嫉妬して不和を生ぜし事、馬將軍と烏陀夷とが互に兩后を助けて爭ふ事より、太子が出家苦行して佛道を成すること、及び諸方遊化の事等を書き綴りたり。元祿八年乙亥(一三五五)の著なり。

◎近松門左衛門の傳は『國性爺合戰』の下にあり。

しやぎしき

射儀私記 一卷　小笠原持長

伊勢弓馬叢書の中の一書にして、歩兵稽古、弓の力地つき、矢かまへ、打上、ひかへ、二目仕、押手を握り得ざる射手、かつ手不若射手、ゆるす射手、放れ、大放、小放、打棄、前おし、すさき、造り放、弓倒、弓取落す射手、引のく射手、腰ののく射手、放し煩ふ射手、胴根のよわき射手、引のりする射手、矢所、能あてがいたれども矢所大きに違ふ、等略記し、更に稽古に就きての禁事十條を記せり。應永二十年癸巳(一四一三)三月十五日著者の奥書、永正二年乙丑(一五〇五)九月澁元の奥書あり。

◎小笠原持長の傳記は『犬追物集書』の下にあり。

しやぎしなんうた

射儀指南歌 一卷　吉田　廣興

射藝の諸法を百餘首の歌に詠出す。其の中の二三を例せば、「うしろよりかいなをとらへ射さするは、幼稚の人に指南する法」、「的弓の音たからかに聞えなば、手の内よわき射手と知るべし」、「三韓をしたがへにしも弓と矢の、威徳を仰ぎ誰も用ひよ」歌は卑俗にして取るに足らずといへども、家の兒等に暗誦せしめたるものなるべし。永祿三年庚申(一五六〇)自の奥書あり、「弓馬叢集」の中に收む。著者吉田廣興は但州の人にして、左近允と稱し、法名を等源と號す。

しやきていえう

寫紀提要 一卷　近藤　守重

德川氏諸記錄類の由來性質等を解題したるもの。著者近藤守重の傳は「右文故事」の下にあり。

しやきひせう

射騎祕抄 一卷　鳥居　興治

小笠原流流派入道長高の作と傳へ、卷首に足利尊氏の記押ある「騎射祕抄」を逐條に註釋したるもの。正德五年乙未(一三七五)十二月の自序あり。著者鳥居興治は紀陽の微臣とあり。

しやぎよかんえう

射御簡要 一卷

弓馬故實の書にて、犬追物、四物、草鹿等に關する射御一切の故實を詳說す。「弓馬叢集」の中に收む。

しやぎよくしふ

車玉集 一卷　月光院

四季戀雜に分ちて三百數十首の和歌を收載せり。霞の「かすみしく波も綠の朝ぼらけ、春のいろそふ浦の松原」より、君恩如雨露の「ほどほどにうけてしらなん雨とふり、露とうるほす君のめぐみを」に至る。冷泉家の長點を附せり。別に「月光院樣御集」として寫傳せるもあり。

◎月光院は勝田備後守典愛の姉にして、名を輝子といふ。幼にして、京極氏、戸澤氏等に仕へ、後、矢島次太夫の猶子となり、將軍家宣に仕へて寵を受け、享興の方と稱し、後永六年七月家繼を生み、名を左京の方と改む。家宣薨するに及び、薙髮して月光院と號し、正德三年十一月從三位に敍せらる。寶歷二年壬申(一七五二)九月十九日薨ず、年六十八。芝增上寺に葬れり。法名を「理樂淸玉智天」といひ、文政十一年從二位を贈らる。

しやぎよくわかしふ

砂玉和歌集 一卷　後崇光院

「京にすみ侘しし頃、應永十年九月九日、伏見殿よりめされし三首の歌より、應永二十五年戊戌(一四一八)中の雜御歌に至り、年序的に凡て二百九十餘首を收められたり。「群書類從」卷二百三十、和歌部第八十四、家集第二にも入れたり。

◎後崇光院の傳は「看聞御記」の下にあり。

しやぎよこじつ

射御故實 一卷

集書亜狩詞、鞭並矢諸道具等の故實を說明す。二卷共同じ奥書あり。「右一册長岡中務入道休甯宗也御所持之御本申請者也、寬永二十年(一六四三)吉月吉日、按察使」とあり。

しやぎよしふい

射御拾遺集 一卷　小笠原持長

弓馬故實の書にて、弓矢の事、鎧直垂の事、軍陣の事等を記す。伊勢眞丈の標註あり。應永二十七年庚

子(一四二〇)持長の奥書あり、時に年三十七といふ。文祿元年辛酉(一五九一)長元の奥書、天文十四年乙巳(一五四五)の末記、紹眞の奥書等あり。「弓馬叢集」及び「伊勢弓馬叢書」等の中に收めたり。

◎小笠原持長の傳記は「犬追物集書」の下にあり。

しやぎよしふいせう

射御拾遺抄 一卷　小笠原持長

射御の術に關する種々の故實を考說したるもの。應永二十九年壬寅(一四二二)の著なり。著者小笠原持長の傳は「犬追物集書」の下にあり。

しやぎよもちながき

射御持長記 一卷　小笠原持長

家傳の故實を輯錄して七父滿長の筆削を得たるものなりとの少序あり。且、應永二十九年壬寅(一四二二)三月一日、自ら奥書せり。所々眞丈の雜評ありて、「伊勢弓馬叢書」の中に收めらる。

◎小笠原持長の傳記は「犬追物集書」の下にあり。

しやきるゐじゆせう

寫記類聚抄 一卷

德川家に關係し、若くは其の當時に寫傳せられたる記錄軍書等の梗概を解說したるもの。凡そ八十種を收めたり。天保九年戊戌(一八三八)朝倉靖英校訂の奥書あり。

しやきんさうし

砂金草紙 四册　岡西　惟中

本書は書名を「一時軒隨筆」といふ該題下に解題す

しやきんふくろ

沙金袋 六册　山本　西武

著者の俳諧集にして、一華堂切臨の序、永三の跋あり。明曆四年戊戌(一六五八)霜月上旬の編にかゝる。著者山本西武の傳は「あは、千句」の下にあり

しやくけうぎよくりんわかしふ

釋敎玉林和歌集 四卷　僧　先啓

淨土眞宗の宗義に適へる和歌を撰集したるもの。內題には「淨土眞宗玉林和歌集」とあり、世々の撰集、數多の家集傳記中より抄す。寬政九年丁巳(一七九七)九月、釋辨基の漢文序を附して出版す。

◎先啓の傳は「淨土眞宗聖教目錄」の下にあり。

百種を蔵せたり。上巻の五種は各敷を牽して、延喜十四年甲戌(一五七四)に集録奏進したる者。「五宗録」とも云へり。圓超の序に、「皇帝敕爲二傳章疏一使二六宗碩學進二宗々之録一」云々とあり。

◎圓超は和州東大寺の住職なり。夙く海印寺の真緒に従て華嚴頓教を受け、又南都に遊て諸善宿に就き、三論法宗の玄義を叩き、東大寺に在て專ら華嚴を究め遂に智識を以て畿内に聞ゆ。敕して僧都に任ぜらる。延喜十四年甲戌(一五七四)春、朝廷諮山の碩學に命じて各宗の章疏を記錄せしむ。時に圓超は華嚴宗の疏鈔及び因明の目錄を撰びて進獻し、叡稱を賜りきといふ。

しやくけくわんばんき
釋家官班記 一卷 尊圓法親王

僧家の官位の事を記したるもの。壺井鶴翁曰く、官班記は伏見院皇子尊圓親王文和四年(一三五)敕撰に依て注進せらるゝの書なり」云々。

◎尊圓法親王は伏見天皇第六の皇子にして、二品に叙し、天台座主に任じ、青蓮院第十七世の門主となる。大乘院の宮と稱する是れなり。世尊寺行房に書法を學び、後其の弟行尹を師とし、遂に其の流派を看破して一家の書法を結構し、後歴代に傳ふ。謂はゆる御家流是れなり。延文元年丙申(一三六一)九月二十三日、年五十九にて十樂院坊に入寂す。

しやくけしよれいせう
釋家初例抄 二卷

僧正、僧都、律師、法印、法眼、法橋等の最始の僧名年月日等を始として、灌頂、供養、法務、誦經例其の他の釋家諸最初例を記したるものなり。『群書類從』卷四百二十五、釋家部第一に收めたり。

じやくしううんびんはつけい
若州雲濱八景 一卷 岡原仲

雲濱は若州遠敷郡の名勝なり。小濱の城地もと海濱漁鹽の地なりしといふ。八景とは、後瀨春望、青井晩鐘、津田落雁、雨見歸帆、雲濱秋月、若島漁火、久須夜雪、多太晴雲等なり。本書は八景の方位形勢風景の大略を敘し、宇都宮由的梅月堂宣阿等の詩歌を輯錄したるものなり。著者の名を記されど、其の跋文によりて岡原仲の編とす。著者岡原仲は東庵と號す。

じやくしうくわんせきき
若州觀跡記 一卷

若狹の國地誌にして『若耶群談』に洩れたるものを拾集せり。寛永十一年甲戌(一六三四)の事實等書中に見えたり。

じやくしうたけだけいづ
若州武田系圖 一卷

清和天皇より出でて應永二十七年庚子(一四二〇)生れ、永享十二年庚申(一四四〇)に至る迄の武田信賢に至れり。『續群書類從』卷百二十三、系圖部第十八にあり。同卷には同淺羽本、同山縣本等の別本をも收めたり。

しやくしとんげんき
釋氏根元記 二卷 平田篤胤

佛教各宗、即ち三論、曹洞、成實、淨土、法相、俱舍、法華、律、天台、眞言、日蓮、華嚴、臨濟等の由來、故實教旨等を記述評斥したるものなり。著作の年月を記さず。

◎平田篤胤の傳は『古史傳』の下にあり。

しやくじさん
借字纂 一卷 木村 正辭

此の書は、皇國の古書中に、同音の文字を借りて、某々の字の意に用ひたるものあるを博く拾集したるなり。

◎木村正辭の傳は『萬葉集美夫君志』の下にあり。

じやくししふ
雀子集 六冊 銀河

俳諧の集なり。編輯の年月、及び著者銀河の傳は詳ならず。

じやくしつをしやうぎやうじやう
寂室和尚行狀 一卷

寂室は元光と諱す。作州高田の人なり。攝政小野宮左府實頼の後裔なりといふ。正應三年庚寅(一二九〇)生れ、年十三、父母に訣絶して三聖寺智海禪師に従て佛乘を學び諸方遊歴して遂に名の學僧となる。貞治六年丁未(一三六七)入寂す。本書は此の行狀を漢文にて記す。巻末に「小師永釋嘗在永源舍下親所見之事綴輯記萬之一耳、于時應永念四年丁酉(一四一七)正月十三日書之」とあり。應永二十四年は稱光天皇の時なり。『續群書類從』卷二百三十五、傳部第四十七に收めたり。

じやくしつろく
寂室錄 二卷 僧 寂室

著者一生の偈文等を釋元光の集錄したるものなり享保元年丙申(一三七六)九月出版して、端石山永源禪寺に藏版す。

◎寂室は江州永源寺の開山なり。諱は元光、字は寂室、世姓は藤原氏なり。伏見天皇正應三年庚寅(一九五〇)五月十五日を以て生る。夙に佛門に歸し京都東福寺大智海禪師に從て剃を披す。是れより佛乘に餘事なく諸國に師を訪ひ友を尋ねて研磋怠ることなく遂に智德大成す。曉年應和元年辛丑(一〇二一)飯高山永源寺を創す。蓋し江州の大守佐々木雲江の獻地なり。後に飯高を改めて瑞石といふ。貞治六年丁未(一三〇七)九月一日七十八にて寂す

しやくじやうどにさうき
釋淨土二藏義 三十卷 僧 了譽

淨土宗鎭西派の教義に關する書なり。支那念佛門の祖唐の善導和尚は、釋迦一代の教法を分判するに、「雜開藏菩薩藏の二を以てせず、淨土宗に依用する「觀無量壽經」の如きは、菩薩藏に屬すべきものなりと判定したり。今、本書は偈頌一百六十六(七言四句を一偈とす)を作りて、上の二藏の教判及び「觀經」の要旨を表顯し、更に其の偈頌の意義を詳細に敷演したるものなり。又は「釋淨土二藏頌義」と云ひ、或は「二藏頌義」とも通稱す。至德二年乙丑(一三八五)の著。註釋には、「二藏義見聞」八卷、「二藏義批判付」四卷、「二藏義引文私考」二卷等あり。

◎了譽は淨土宗鎭西派の名僧。名は聖聞、了譽は其の字、常州久慈郡の人なり。應永四年辛巳(一三九七)正月に生れ、九歳の時同宗了實に就て出家し、其後淨土の宗義を蓮勝定慧に、密教を祐存に、天台を眞源に、禪學を月庵天明の二人に習學し、兼ねては頓阿に就て和歌をも修めたり。應永二十二年乙未(一四一五)、江戸小石川傳通院を創營して並に其の著す所本書の外「決疑鈔直牒」十卷、「二藏義批判付」四卷、「決疑鈔直牒」八卷、「決疑鈔直牒」十卷、「二藏義引文私考」二卷、「淨土傳戒論」一卷、「選擇分流鈔」二卷、心具往生義、神道擬氣鈔」二卷、「鎭心鈔」二卷、「銘心鈔」二

力涅槃像の譯にまで及べり。註は江戸の前ノ北齋老人の手に成る。著者山田意齋は浪華の人なり。

しやくそんじきうき　釋尊寺舊記　一卷

伊勢二所皇太神宮領國釋尊寺の舊記。建久、正安、延慶、應長、延元年間の事を記せり。「續群書類從」卷二十八、神祇部第二十八に收めたり。

しやくにほんぎ　釋日本紀　二十八卷　卜部　懷賢

日本書紀を註釋したるもの。卷一開題、卷二注音卷三亂脫、卷四帝皇系圖（以上第一帙）卷五、六、七、八、九、十、述義（以上第二帙）卷十一、十二、十三、十四、十五、述義（以上第三帙）卷十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、祕訓（以上第四帙）卷二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、和歌（以上第五帙）に作らる。其の解釋に間々肯綮なる箇處なきにあらずと雖も、博く古の記錄、風土記等の、後世に傳はらざるものを引用したれば、稽古の資料となすの價また少からず。書中の大間は圓時寺入道實經の間、撮聞は一條攝政家經の聞なり。正安（一二九九）一九六一年中に卜部賢永本書を考閱したり。東京經濟雜誌社近刊の「國史大系」第七卷中にも收めたり。該書は、前田家所藏本を以て流布の版本を校訂し、傍ら前田夏陰校本、及び影考館本に據り比校せし井上頴圖翁の校本と、故矢野玄道翁の釋日本紀私記を參考せりといふ。著者卜部懷賢は後嵯峨天皇、後深草天皇の御代の人なり。今詳傳を得ず。

しやくにほんぎへうもく　釋日本紀標目　一卷

釋日本紀の中の事件所在を標出せる索引なり。例へば「日本紀竟宴事」の標目の下に「一之一右、同五左、同六右、同六左、同七右、同十八右」等全編中の所在丁數左右等を記せるなり。

しやくにほんぎるるへう　釋日本紀類標　一卷

釋日本紀の中の事件毎にいろは順に標出したる索引なり。毎項其の所在丁數裏表を記す。例へば「い」の部に「出雲國風土記六ノ六ウ」「出雲大社八ノ十二ウ」の如し。

じやくねんはふしふ　寂然法師集　一卷

卷夏秋冬戀雜等に分ちて百數十首を收めたり。「群書類從」卷二百六十九、和歌部第百二十四に收む。

◎藤原賴業は丹後守爲忠の子にして、官壹岐守たり。性最も和歌を好みて、其の妙に至る。夙く剃髮して寂然と法號し、寂念（爲業）と俱に大原山に隱遁したりといふ。

しやくもんかうでん　釋門孝傳　一卷　僧　高泉

印度支那日本に於ける佛門孝子の傳を簡短に記したるもの。目錄題者を始め五十一人あり。寛文五年乙巳（一六六五）の著なり。

◎高泉の傳は「山堂清話」の下にあり。

しやくもんさんじふろくにんかせん　釋門三十六人歌仙　一卷　僧　棨海

達磨和尚、菩提僧正、大僧正行基、傳敎大師、弘法大師、慈覺大師、智證大師、沙彌滿誓、僧都玄賓、僧正遍昭、喜撰法師、僧正聖寶、素性法師、空也上人、日藏上人、蟬丸、性空上人、少僧都源信、基慶法師、能因法師、良暹法師、律師永覺、登蓮法師、寂蓮法師、寂念法師、僧正行意、眞慶上人、高辨上人、以上三十六人の歌各一首宛を收めたり。眞和三年丙寅（一〇〇七）三月の自序あり。一本には嘉祥上人入て律師永覺なきもありと、又書名を「釋敎歌仙」といへるもありと。

◎棨海の傳は「眞言傳」の下にあり。

しやくもんじしかう　釋門事始考　一卷

佛敎に關する種々事物の起原を記したるもの。敎

法傳道の事より、東西遊化、度者出家、火葬封塔等の濫觴、凡て六十四箇條あり。近世僧徒の手に成りたるものならん。續史籍集覽に入れり。

じやくりんしごろく　若林子語錄　一卷　若林　進居

著者の種々なる物語を門人の筆錄したるものなり。享保十七年壬子（一七三二）の記日あり。著者若林進居の傳は「家禮祖裳疏」の下にあり。

じやくれんはふしふ　寂蓮法師集　一卷　藤原　定長

著者の詠歌、凡て二百九十五首を收めたり。「群書類從」卷二百六十九、和歌部第百二十四にあり。

◎藤原定長の傳は「蒿蹊類抄」の下にあり。

じやくれんはふしひやくしゆ　寂蓮法師百首　一卷　藤原　定長

大貳入道の出願にて詠める百首なり。元日立春の「立かへる年とともにや春もまた、ゆきあふ坂を越えて來つらん」より、社頭祝言「里わかすくもりなき世を思ふかな、春日の山の月を眺めて」に至れり。「續群書類從」卷三百九十五、和歌部第三十に收めたり。

◎藤原定長の傳は「蒿蹊類抄」の下に出づ。

しやさうかいわ　社倉解語　一卷　酒　彥

貯蓄備從の要を說き社倉の貴重なる事を示したるもの。蓋し著者管て社倉を創設し、其の意を廣告吹聽して廣く入社を勸誘したるものなり。嘉永三年庚戌（一八五〇）十月の作。著者酒彥は陸奥國栗原郡の人なり。

しやさうくわんゆ　社倉勸喩　一卷

社倉の救飢に切要なることより貯蓄の大切要務なることを論述したるものなり。安政元年甲寅（一八五四）出版す。

しやさうしぎ　社倉私議　一卷

社倉創設に關する建議なり。嘉永三年府崇安縣開耀鄉に創立せる社倉法に倣ひて其の落主に勸告したるなり。末に朱子の社倉法を附錄とす。安永三年甲午（一七七四）五月の作。

◎中井積善の傳記は「逸史」の下にあり。

しやさうはふかう　社倉法考　一卷

宋の朱子の「社倉法」を假名書に註釋說明したるもの。

しやさうはふわりあひ　社倉法割合　一卷　雨森　正煥

社倉法の利益を算出說示したるもの。文化十四年丁丑（一八一七）九月の筆記に係る。

しやさうゆらい　社倉由來　一卷

社倉の由來を記し、寶永元年甲申（一七〇四）佐藤某が前橋城主酒井氏の爲めに記進したる「御條目」を合編す。共に勤勉貯蓄の要を述べたるものなり。

しやしよるゐじゆくごかい　射書類聚國字解　二卷　荻生　茂卿

明の戚南塘の「紀效新書」、高叔英の「射學正宗」、唐の荊川の「武編」等を主として射法を說述したるもの。上卷審法より個馬法に至る十六條、下卷弓強弱より雜箭に至る十六條あり。卷末には弓矢器械の圖を載せたり。宇惠の校正したるを、寬政元年己酉（一七八九）出版す。

◎荻生茂卿の傳は「靈園祕錄」の下にあり。

しやせいいへん　寫生遺編　三卷　牧野　貞幹

草木、禽、蟲、魚、總じて百八十餘種の着色圖を收載したるもの。博物學者の參考に供すべし。著者牧野貞幹の傳は「草花寫生」の下にあり。

しやせきしふ　沙石集　十卷　僧　無住

佛道に關する雜話を輯錄して敎徒の訓誡に供したるもの。傳說あり、實譚あり、或は神佛の靈驗を語り、或は敎義の一端を說く。間々附會の謬なきにあらずと雖も、佛徒自省の資となすべき節少からず。自序に「狂言綺語のあだなる戲を緣として、佛道の妙なる道に入れ、世間淺近の賤き事を譬へ、勝義の深き理を知らしめんと思ふ」、また「彼の金を求る者は沙をあつめてこれをとり、玉を欲ふ類は

石をひろひて是を盤く。仍て沙石集と名く」云々。以て本書の性質及び題號の由來を知るべし。弘安二年己卯(一二七九)に起草し、同六年に完稿したるなり。

◎無住、字は一圓、相州鎌倉の人、梶原景時の甥なりと云ふ。少くして出家し諸國を遍歴す。關城寺に至て教を聞き、雨都に至て律及び密を習ふ。のち東福寺に往きて聖一國師に見え、弟子となり禪法を傳ふ。文永の始め尾張の長母寺を創め、一住四十餘年。資產頗る甚しく、竈烟時に絕ゆることあるも、之れに處して坦然たり。其の著す所本書の外に、聖財集、雜談集、雙鏡等あり。正和元年壬子(一九七二)十月、伊勢蓮華寺に沒す。辭世偈に曰く、「一遍浮ノ海八十七年、風体波靜依ノ恵湛然」と。

しやせんしふい

謝選拾遺 七卷 賴 襄

謝璧山の撰「文章軌範」に洩れたる唐宋名家の文を撰集したるもの。凡て五十有八編あり。蓋し撰者の意、「續文章軌範」の撰雜にして取るに足らざるを以て、此れを以て換へんと欲するに在り。嘉永二年己酉(一八五〇)刊行す。

◎賴襄の傳記は「日本外史」の下に出だせり。

しやそげしよ

捨訴下書 一卷 村山 正隆

嘉永六年癸丑(一八五三)十二月二十四日、當年の外交問題につき、外船燒打の藥方を神受したりとて、其の採用方を、水戸前中納言へ捨訴したる下書なり。「秘錄叢書」の中に收む。著者村山正隆は江戸麻布廣尾拜領地なる神職にして、近江と稱す。

しやだんどうあいきうひやくしゆ

社壇同詠祈雨百首 一卷

春二十首、夏十五、秋二十、冬十五、戀十、雜二十首、皆雨字を用ひたる題にて詠めり。「群書類從」卷百七十六、和歌部第三十一に收めたり。

◎津守國冬は攝津守國助の長子にして、攝津住吉社の神主となり、また左近將監に任じ從三位に敍せらる。生來和歌を好みて、頗る其の道に達し集外の歌仙を以て稱せらる。

しやてきはふ

射的法 一卷

弓馬故實の書にて、射的の故實を記す。「弓馬雜集」の第一に收む。

しやでふさんぶんせう

謝璧山文鈔 二卷

宋謝枋得の撰中より、書七、序六、記三、墓記二、跋二、敍一を拔抄して、訓點を附したるものなり。萬延二年辛酉(一八六一)新刻す。

◎跋世大のことは「遯齋文鈔」の下にあり。

じやのすけひやくくん

蛇之助五百韻 一札 田中 常矩

俳書「俳諧一番」(或は破帶と書す)の中より抄出したる俳諧五百韻なり。

◎田中常矩の傳は「ねざめ」の下にあり。

じやのすし

蛇之鮨 一册 池西 言水

著者の俳諧集なり。延寶年中の作なるべし。「蛇のすし」下になれたる沖の石」の句あり。著者池西言水の傳は「東日記」の下にあり。

しやはふいつさう

射法一統 六卷 淺野 正矩

射術射禮等の事を述べ、同射術に關する器械等を圖解せり。貞享四年丁卯(一六八七)の自序あり。

しやはふさんぶのしよ

射法三部書 十一卷

淺野正矩の「射法一統」六卷と、村上正武の「射法提要」三卷と、慶瀨彌一の「用射錄」二卷と、以上三部十一卷を合刻したるものなり。

しやはふていえうしふ

射法提要集 三卷 村上 正武

射禮に關する說明。或問體に記述せり。貞享元年甲子(一六八四)の自序、及び北村可昌の序あり。

しやはふほんぎびげんせつかい

射法本紀微言節解 一卷 馬場 正統

舊事本紀大成經の軍旅の卷中より、射法本紀を抄出して、平瀨光雄、其の略說を作り、「正木眞明また諺解を作りたるも、尙不足ありとて更に此の節解を著したりといふ。天保十年己亥(一八三九)六月

の自跋、同七月布施正孝の跋あり。

◎馬蛤正統の傳は「嗣刺圖揭算法」の下にあり。

じやひん

蛇 品 一卷 簑蟲庵花翁

蛇類三十餘種を輯錄したるもの。安政四年丁巳(一八五七)に成りたり。

しやふくせいどしゆき

車服制度手記 三卷 野宮 定基

車服の制度、其の他の故實等を、新井君美の問に對して答錄したるもの。上下二卷には乘車下車、冠烏帽子、稍額、袍、裝束、牛車、長絹、裝束、玉帶、鎧、手綱等の事あり。附錄一卷には邸鄉、庄園、御厨、杜、勳位、別當、勾當、寄人、公文、牒狀、舍人、近衛、使部、門部、雜色、青侍、青女、廉呂、姓氏等の數十箇條あり。

◎野宮定基の傳は「有職聞書」の下にあり。

しやふくもんだふ

車服問答 三卷 野宮 定基

車服に關する故實を記述したるもの。乘車之儀、下車之儀、女房乘車之儀、同下車之儀、打板、前板、簀、袖無尾、以下凡て百餘項を記し、まゝ圖解をも示せり。新井君美の質問に對して著者の答へたるもの。寬延四年辛未(一七五一)秋九月著者の奥書あり。

◎野宮定基の傳は「有職聞書」の下にあり。

しやふくもんたふ

車服問答 三卷 野宮 定基

車服に關する故實を記述したるもの。乘車之儀、下車之儀、女房乘車之儀、同下車之儀、打板、前板、簀、袖無尾、以下凡て百餘項を記し、まゝ圖解をも示せり。新井君美の質問に對して著者の答へたるもの。寬延四年辛未(一七五一)秋九月著者の奥書あり。

◎野宮定基の傳は「有職聞書」の下にあり。

しやふんがんびつ

寫憤含筆 一卷 僧 明存

しやぶんしやうき

遜志齋集 二十四卷 解 縉

明解縉の撰。縉、字は大紳、江西吉水の人。洪武中、舉げられて翰林に入り、累遷して侍讀學士に至る。永樂中、獄に下され、廣西に謫せられ、後ち召還せられて、太子賓客に進む。仁宗卽位の初め、復た官を削られ、交阯に謫せられ、道に病死す。年五十四。其の著す所の文集なり。

しやへいきやくしやうき

遜平客商記 一卷 僧 洞然

後奈良天皇の天文五年丙申(一五三六)十一月二十二日、修理入道沙彌洞然より、撮所新兵衛尉へ宛てたる書狀なり。古談十餘條を記す。卷頭に「既被懸御意、鄭重承候之條、雜默止之儀、眼見耳聞、面影相殘たる古事共、大概書付申計候」とあり。「群書類從」卷三百九十九、合戰部第三十一に收めたり。

しやへいこくいきさつ

遜羅國風土記 七卷 智原五郎八

遜羅國に渡航して、同國王となりし山田仁左衛門長正の事績を詳記したるものにて、專ら通俗的に記せり。五郎八當時軍中にありて實記したるものなりといふ。遜羅國人は財を以て日本人が英邁の氣象あるを尊び、特に一圓を設けて日本町と名け、日本より渡海するものは凡てこゝに寄留せしめたりといふ。隨て本書中にも日本町の事を記すこと最も詳なり。第七卷には「天竺德兵衛渡天物語」を載せたり。彼此共に當時の筆なれば、參照して事實を詳悉することを得べし。凡て七卷一册に寫傳す。

◎智原五郎八は遜羅國日本町に住して、山田長政の軍に從ひたるものなりといふ。

しやへいこくふどき

遜羅國風土記 七卷 智原五郎八

遜羅國に渡航して、同國王となりし山田仁左衛門長正の事績を詳記したるものにて、專ら通俗的に記せり。五郎八當時軍中にありて實記したるものなりといふ。遜羅國人は財を以て日本人が英邁の氣象あるを尊び、特に一圓を設けて日本町と名け、日本より渡海するものは凡てこゝに寄留せしめたりといふ。隨て本書中にも日本町の事を記すこと最も詳なり。第七卷には「天竺德兵衛渡天物語」を載せたり。彼此共に當時の筆なれば、參照して事實を詳悉することを得べし。凡て七卷一册に寫傳す。

◎智原五郎八は遜羅國日本町に住して、山田長政の軍に從ひたるものなりといふ。

しやむこくうらうきだん

遜羅國漂流奇談 一卷

文政十一年戊子(一八二八)八丈島の商船、江戸よりの歸航中、風波の難に遇ひて、遜羅國に漂着して、後歸朝したるもの〻奇談を詳錄したるものなり。繪圖を入れて記したり。

しやむこくやまだうぢこうばき

遜羅國山田氏興亡記 一卷

山田長政立身の最初より、其の興亡始末を詳記したるものにて、全編五章に分けて記せり。次に享保二十年乙卯(一七三五)松平經長の「淺間宮繪圖の記」を附したり。卷末に「此の一卷松平周防守殿之御留守居松井氏之記也余當時一列故借請面寫之者也。時元文三戊年年(一七三八)春中旬書之松山照誠」と記せり。

しやめいさんぷ

社盟算譜 二卷 白石 長忠

同門の諸子或は學友等が神社に掲げたる額面の算題集なり。終卷同盟の徒を以て成れり。故に題して「社盟算譜」と謂ふ。當時眞理の問題、漸く世間に盛んなれども、未だ幾何の問題を設すること少し。殊に三次以上の級術に關する算題の出版せる者は、本書に於て初て之を見たり。自序中に「是等を以て門人を敎導するに間一知十の徒又鮮からず。各新奇の題術を撰びて予に問せんことを請ふ。熱是をみるに或は自ら敎學の蘊奧を得るにちかし。其の中最も可なるものを撰び是を神廟に掲げて普く世に

示す。予集て一書となす。と。文政九年丙戌(一八二四六)の出版なり。

◎白石長忠は八蔵と稱し、世諺また龜々と號す。清水卿に仕へて、算法家の名高し。初め横井時信に就て數學を修め、又藤田嘉言に受け、又日下誠に從ひ、後和田寧の門に入りて、終に圓理の妙に達す。文久二年壬戌(一八五二)七月卒す。松樹院龜々英凉居士と謚す。遺書頗る多し、皆寫本なり。

じややぐんだん

若耶群談 一卷

若狹國の地理歴史沿革等に關することを詳叙しまた詩を掲げたり。若耶は渓土越州にありといふ若耶溪に擬して、若狹を假稱したる名なるべしといふ。寛永三年丙戌(一六二六)五月六日、明空書寫の奥書あり。

しやよづかう

車輿圖考 一卷　安積　信

車輿を解剖して各部を説明考證したるもの。『周官義疏』『考工記』等によりて、遠井孝徳の『雜圖』所載等を改訂すといへり。

◎安積信の傳記は『長窓問話』の下にあり。

しやりつ

赦律 一册

幕府評定所より引繼きて内閣文庫に保存せるものにして、年度不詳に屬す。

しやりふうど

舍利風語 一册　花の本梅通

俳諧の隨筆。夢窓舍隨筆、梅室隨筆、苔虫翁道事の三部を編輯したるものにて、弘化二年乙巳(一八四五)出版す。俳諧文庫第十八編『俳諧珍本集』の中にも收めたり。

◎花の本梅通は京都の人にして通稱を俵屋六兵衛といひ、苔虫の門に入りて俳諧を學び、夢窓舍と號す。元治元年甲子(一八六四)三月歿す。

しやれいしき

射禮式 一卷　小笠原元長

弓馬故實の書にて、家傳の射禮四十五箇條を詳説す。文明十二年庚子(一四八〇)三月八日元長の奥書あり。『弓馬諸式』の中に收む。

◎小笠原元長のことは『犬追物日記』の下にあり。

しやれいしき

射禮私記 一卷　小笠原持長

弓馬故實の書にて、射禮を詳説せる傳書なり。永享五年癸丑(一四三三)十二月二十四日の作。諸家の奥書あり、萬延二年吉辰盛德膳寫朱書せり。『弓馬祕蔵』の中に收む。著者小笠原宗長は武家故實家にして、別に『足踏之大事』を著せり。

じやれいにつき

射禮日記 一卷

射禮の由來沿革より一切故實を傳書したるもの。元長、宗立その他の書をも引用して詳説す。明應五年丙辰(一四九六)六月二十二日宗長末記、次に天文二年癸巳(一五三三)五月二十二日元綱の署名あり。『弓馬雜藁』の中に收む。著者小笠原宗長は武家故實家にして、別に『足踏之大事』を著せり。

じやれいにつき

射禮日記 一卷

弓馬故實の書にて、射禮を詳説せる傳書なり。永享五年癸丑(一四三三)十二月二十四日の作。諸家の奥書あり、萬延二年吉辰盛德膳寫朱書せり。『弓馬祕蔵』の中に收む。著者小笠原宗長は武家故實家にして、別に『足踏之大事』を著せり。

じやれいにつき

射禮日記 一卷

弓馬故實の書にて、家傳の射禮四十五箇條を詳説す。文明十二年庚子(一四八〇)三月八日元長の奥書あり。『弓馬諸式』の中に收む。

◎小笠原元長のことは『犬追物日記』の下にあり。

しやれいしき

射禮式 一卷　小笠原元長

弓馬故實の書にて、家傳の射禮四十五箇條を詳説す。文明十二年庚子(一四八〇)三月八日元長の奥書あり。『弓馬諸式』の中に收む。

◎小笠原元長のことは『犬追物日記』の下にあり。

しやれいしき

射禮私記 一卷　小笠原持長

弓馬故實の書にて、射禮を詳説せる傳書なり。永享五年癸丑(一四三三)十二月二十四日の作。諸家の奥書あり、萬延二年吉辰盛德膳寫朱書せり。『弓馬祕蔵』の中に收む。著者小笠原宗長は武家故實家にして、別に『足踏之大事』を著せり。

じやれいにつき

射禮日記 一卷

射禮の由來沿革より一切故實を傳書したるもの。元長、宗立その他の書をも引用して詳説す。明應五年丙辰(一四九六)六月二十二日宗長末記、次に天文二年癸巳(一五三三)五月二十二日元綱の署名あり。『弓馬雜藁』の中に收む。著者小笠原宗長は武家故實家にして、別に『足踏之大事』を著せり。

じやれいにつき

射禮日記 一卷

射禮の由來沿革より一切故實を傳書したるもの。元長、宗立その他の書をも引用して詳説す。明應五年丙辰(一四九六)六月二十二日宗長末記、次に天文二年癸巳(一五三三)五月二十二日元綱の署名あり。『弓馬雜藁』の中に收む。著者小笠原宗長は武家故實家にして、別に『足踏之大事』を著せり。

じやれいにつき

射禮日記 一卷

射禮の由來沿革より一切故實を傳書したるもの。元長、宗立その他の書をも引用して詳説す。明應五年丙辰(一四九六)六月二十二日宗長末記、次に天文二年癸巳(一五三三)五月二十二日元綱の署名あり。『弓馬雜藁』の中に收む。著者小笠原宗長は武家故實家にして、別に『足踏之大事』を著せり。

じやれいにつき

射禮日記 一卷

射禮の由來沿革より一切故實を傳書したるもの。元長、宗立その他の書をも引用して詳説す。明應五年丙辰(一四九六)六月二十二日宗長末記、次に天文二年癸巳(一五三三)五月二十二日元綱の署名あり。『弓馬雜藁』の中に收む。著者小笠原宗長は武家故實家にして、別に『足踏之大事』を著せり。

じゆいちるきんみやさやうさつわ

從一位公通卿雜話 一卷　藤原　公通

神書に關すること、その他諸書、和歌等の事に就きて問答體に記したるものなり。明和七年庚寅(一七三〇)八月十七日と末書あり。『倫池叢書』第二十七に收む。著者藤原公通は別著『東館夜話』一卷あり。

しゆうじしふ

種子集 二卷　僧　澄禪

眞言宗に尊信せる佛陀、菩薩、及び天部諸神の種子(印契)を圖表せるもの。金胎兩部諸尊の種子より、不動明王、愛染明王、毘沙門天等のに至れり。寛元十年庚戌(一二三〇)の著。

◎澄禪の傳は『悉曇藏雜集』の下にあり。

じゆうさう

二酉洞 一卷　一色　時棟

古今漢土の類書目錄なり。經史、諸子其の他に分類して凡そ一千部を網羅し、書名と作者とを簡す。元禄十二年乙卯(一六九九)の自引、松崎祐の序あり。

◎一色時棟は字を子紱、通稱を雲溪といひ、菊叟と號す。京師の名儒にして松山侯に仕ふ。著書は此の外に『吟藻』あり、享保十年乙巳(一七二五)十月年七十にて歿す。

じゆえふそらくしふ

樹葉沮落集 一卷

寛曆十一年辛巳(一四二一)六月十二日、德川九代將軍家重(惇信公)薨去の時の詳記にして、首に生前の事績をも略記したり。

じゆがいろく

堅玄錄 二卷　今村　知商

本書は『塵劫記』に次ぎたる日本第二の古算書なり。『塵劫記』に比して術理頗る高尚なり。記載の法は、數式、定式、術式、開平式、開立式、方平式、圓平式、圓直式とす。數式とは大數、小數、度數、算數、粮數、衡數等且つ命位等をいひ、定式とは九因、九歸の歌、撞除法等、凡そ一定の則たるものをいふ。術式以下皆算術種々の部類なり。一讀する者當時の算法の樣を知るに足らん。序に曰く、「山海經曰、帝令、竪玄歩自東極到於西極、乃使之、治之、四維八紘、高天廣地、歩、「中略」以此書推之、治之可座而致也」と。是れ表題の起る所以なり。寛永十六年己卯(一六三九)の版行にかゝる。

◎今村知商は算術家なり。仁兵衛また甚兵衛と稱す。毛利重能の高弟にして、三子の一人なり。或は水戸光圀に仕へたりきといふ。

じゆがいろくかなせう

堅玄錄假名抄 五卷　安藤　有益

今村知商の著したる『堅玄錄』は漢文にして、讀み難ければ本書は著者が通俗語を以て、それを解説したるものなり。本文に數無くして覺り難きもの

養和二年壬寅(一七八二)五月、壽永と改元あらせらるゝ時の定記勘文なり。『槐林記』より抄出したるものか。享祿元年戊子(一五二八)書寫の奥書あり。『續群書類從』卷二百八十七、公事部第四十に收めたり。

じゆえいにねんてんぱふりんばふき

壽永二年轉法輪法記 一卷

壽永二年癸卯(一一八三)執行の同法を記したるものなり。『續群書類從』卷七百四十、釋家部第二十五に收めたり。

じゆえうしやくるかう

授幼僮位考 四卷　宇都宮由的

漢土の爵位を考證したるもの。『槎來』の中に出でたる二百餘を同書の順序に説明せり。授幼は幼童に授くる初歩の書なりといへる著者の意に出でたるものなるべし。著者本書の末端に記して「有貴介公子、使三余講説乘来一、且請二開三其所一レ戴之官位之職掌一、固辭不レ許、遂考二諸書一、而鈔二出之一、至二其闕漏之不詳一、乃俟二彼來哲之是正一云」と云へり。年代詳ならず。

◎宇都宮由的の傳は『日本人物史』の下にあり。

しゆえきえんぎ

朱易衍義 三卷　山崎　嘉

朱易に和訓を施し諸子が易を論じたる語を抄錄し、往々自家の註解をも附記したるもの。延寶五年丁巳(一六七七)の自序あり。

◎山崎嘉の傳は『垂加文集』の下に掲ぐ。

じゆえふそらくしふ

樹葉沮落集 一卷

寛曆十一年辛巳(一四二一)六月十二日、德川九代將軍家重(惇信公)薨去の時の詳記にして、首に生前の事績をも略記したり。

じゆがいろく

堅玄錄 二卷　今村　知商

本書は『塵劫記』に次ぎたる日本第二の古算書なり。『塵劫記』に比して術理頗る高尚なり。記載の法は、數式、定式、術式、開平式、開立式、方平式、圓平式、圓直式とす。數式とは大數、小數、度數、算數、粮數、衡數等且つ命位等をいひ、定式とは九因、九歸の歌、撞除法等、凡そ一定の則たるものをいふ。術式以下皆算術種々の部類なり。一讀する者當時の算法の樣を知るに足らん。序に曰く、「山海經曰、帝令、竪玄歩自東極到於西極、乃使之、治之、四維八紘、高天廣地、歩、「中略」以此書推之、治之可座而致也」と。是れ表題の起る所以なり。寛永十六年己卯(一六三九)の版行にかゝる。

◎今村知商は算術家なり。仁兵衛また甚兵衛と稱す。毛利重能の高弟にして、三子の一人なり。或は水戸光圀に仕へたりきといふ。

じゆがいろくかなせう

堅玄錄假名抄 五卷　安藤　有益

今村知商の著したる『堅玄錄』は漢文にして、讀み難ければ本書は著者が通俗語を以て、それを解説したるものなり。本文に數無くして覺り難きもの

じゆがくねんみゆきぶぎやうれつしよ

修學院御幸供奉行列書 一卷

光格天皇の文政七年甲申(一八二四)九月二十一日、始めて洛北修學院に御幸ありし時の行列を記したり。

しゆがくねんみゆきしよ

修學院御幸書 二卷

仁孝天皇の文政七年甲申（一八二四）九月二十一日、太上皇、始めて京都日吉の離修學院へ御行幸遊ばされし時の記事なり。上一卷には前年來の問院修複の事、御用掛、供奉等の任命其の他の事を掲げ、下一卷の終には御行幸當時御能の箏曲和歌を附したり。著者の名を記さず、今、文政八年乙酉（一八二五）正月二十九日、大阪長田鶴夫の寫本に依る

しゆがくゐんみゆきしんき
修學院御幸宸記 寫一卷

靈元法皇

修學院別莊に御幸の御記。享保六年辛丑（一三八一）十月、同七年三月、同九月、同八年四月、同九月、同十月、同九年八月、同九月、同十年四月、同九月、同十月、同十一年四月、以上十一回の行幸を記し給へる也。

◎靈元法皇は後水尾帝第十二の皇子。御年十歳にして後西院帝の禪を受け、在位二十四年にして位を皇太子朝仁親王（東山天皇）に讓り、中御門天皇の享保十七年壬子（一三九二）崩御し給ふ。御年七十九。

しゆかくべん
主客辨 寫一卷 鶴峯 戊申

神儒佛の關係を論述したるものなり。神州人民は、神道を主とし、儒佛二道を客とし、能く本末を辨へて取捨すべきことを論じたり。

◎鶴峯戊申の傳は「神階錄」の下にあり。

しゆかくべん
朱學辨 一卷 鎌田 鵬

朱子學の大意を辨明したるもの。享和二年壬戌（一八〇二）恩田延頴の序、脇坂義堂の跋、寛政十二年庚申（一七八〇）金子義門の序等あり。

◎鎌田鵬は字を圖南といひ、玄珠と稱し、柳泓と號す。紀州の人江村北海に學び、儒者を以て知らる。本書の外に心學五則、理學祕訣、中庸首章講義筆記、心苑餘材、道の府、心之花實、莊子譯說、老子鑑、詩文鈔、擬水滸傳等あり。

じゆかじふはのづ
儒家十馬圖 一卷 清水 春流

御馬の圖、未牧、初調、受制、廻首、馴伏、無碍、任運、相忘の八を畫き、更に獨照、雙泯の二圖を寫して每圖二首宛の評讚を作る。蓋し、清居十牛の圖に擬し、牧馬を假りて人々固有の心法を表せるなり。延寳二年甲寅（一三三四）遠藤玄格の跋あり。

◎清水春流は名を仁、字を不存といひ、春流、釣虛子等の號あり。儒を以て尾張侯に仕ふ。著書には論語或問、周易或問、三敎同旨、詩學一指、心詩百詠、資文翁傳、懺悔物語、宮城野草、不存醒跡、徒然草新註、續徒然草、薫香物、桑名百詠等あり。近年未だ詳ならず。

しゆがんどうてうしふ
殊眼同調集 一卷 慈圓

尊使秋月、龍淵、玄川、退石、蓋庵、默齋の六人衆朝したるとき、我が夢澤、鷺湖、鷺洲、梅嶺、南葵、菊莊、勝山、東亭、篁洲等九儒者と贈答したる詩を編輯したるもの。寳曆十四年甲申（一七六四）尾張侯に仕へ尾張の儒者にして、子爵と號せり。

しゆきよくしふ
拾玉集 一卷 源 輝辰

物部、來目部、衙府、諸口、軍士、守護等、武士に關する名目を考說したるものなり。

しゆぎよくしふ
拾玉藻 七卷 僧 慈圓

著者の家集なり。貞和二年丙戌（一三四六）五月二十三日、尊圓親王の奥書あり。述むる時慶運の詠じたる歌の、「あひにあひてまたみかかるいにしへの、玉のひかりや君をてらさん。もしほくさ昔の跡のかきつめて、いくよろづよか玉もひろはん」とありしに、其の返歌として、「いにしへの玉もひかりなさしをへて、我そかげん法のともしび。しるべする友ぞうれしきあらましの、末となりぬる數島のみち」とあり。これら贈答の歌語よりして「拾玉集」とは名付けたるべしといふ。本書に寫傳の異本あり、歌數も少く、また他人の作も入り部立等も異れり。奥書に「右慈鎭和尚御詠等採摭草、仰慶運令類之。斯言若臨將來可悲可悲、今任先賢之金言、令集祖師之玉章。偏存眞俗一致之旨。莫論內外異論之嘲。于時嘉應三年（一一八一）五月二十一日難波津末流我立柚不才判記」とあり。

◎慈圓は關白藤原忠通の子なり。學を好みまた和歌を善くす。出家して道快といひ、また慈圓といふ。學德成就して、大僧正となり、天台の座主となる。嘉祿元年乙酉（一二二五）九月二十五日入寂す。

しゆぎよくしふ
拾玉集 四册 西田 元知

諸家の俳諧を拾集したるものなり。萬治元年戊戌（一六五八）十一月編輯す。著者西田元知は松永貞德の門に學びたる俳人なり。

じゆくごていしき
熟語定式 寫一册 鶴峯 戊申

漢文熟語の格法を論じたるものなり。九言九對の目を設け。例證を論語の文句に取れり。天保元年庚寅（一八三〇）の著なり。

◎鶴峯戊申の傳は「神階錄」の下にあり。

しゆくじゆへん
祝壽編 一卷 石川 凹

此の書は一名「石川丈山祝壽編」の下に解題せり。

しゆくゆうえうむ
祝融要務 寫一卷 有馬 譽純

火災の事に關し、其の豫防、消止、避難の法等を記述したるもの。家作心得、火除具並に要用小道具、火消具消場心得、取片付方心得、不取片付可殘置品、兼日用意物心得、土藏品物入込次第、土藏手當、燒亡後心得、土藏製作等の十目に分ちて記す。著者屢火災に罹り、經驗により工夫したる方法にて一家の僕婢等に心得しめんために記したりといふ。文化十一年甲戌（一八一四）夏六月の自跋、同十月臣貞敎の端書、同十二月岡正精の跋等あり。著者有馬譽純は圓陵侯にて佐兵衛佐といひ、藤原氏を稱す。

しゆくろかう
宿蘆稿 寫一卷 宿蘆

著者の詩稿なり。數十首を收む。天正二十年壬辰（一五九二）太閤明國征伐の時屢從して其の征途に作りたるものなり。「續群書類從」卷三百五十六、文筆部第四十に收めたり。

しゆくろく
蔌錄 寫一卷 南亭 田珍

和漢古今の書中より、蔬菜の類を鈔集して名稱、形狀、效用等を記したるもの。寳延二年己巳（一七四九）の編輯にかゝる。著者南亭田珍は京都の人なり

じゆげいかう
樹藝考 寫一卷

五穀、菜蔬、木綿、煙草等の下種栽培耕法等を記述したるものなり。著者年代共に詳ならず。

しゆげいしふするふ
種藝拾穗集 寫一卷 池上 幸豐

甘藷の栽培法、及び其の用法等を記したるもの、末に玉蜀黍の效用を附記せり。

◎池上幸豐は武藏國橘樹郡池上新田の人。通稱を太郎左衛門といふ。享保年中、德川八代將軍吉宗より甘藷種を賜りて、其の栽培に力を用ひたる人なり。

しゆげいねんぢうぎやうじ
種藝年中行事 寫一卷 岩崎 常正

植物の培養法につき年中の順序を記す。著者の稱を安部幸任の補輯したるものなり。著者岩崎常正の傳は「岩崎蘭園遺稿」の下にあり。

しゆげいひはふきゝがき
種藝祕法聞書 寫一卷 米倉 器水

杉、檜、松、桐、椿並製紙、漆、櫨、藥草、藥木、竹、葦、其の他の栽培法を詳記したるものなり。天保十一年庚子（一八四〇）述作す。著者米倉器水のことは「種樹試書」の下にあり。

じゆげふへん
授業編 十卷 江村 綏

學者授業の要旨、修學讀書の方法を論述すること、頗る親切なり。其目次を擧ぐれば、幼學、習句讀、學書、讀書、三則、圈點、吳音漢音、四聲五音、韻鏡反切、唐音、敎授、講經、講釋三則、書生之學、講談、歷史學、諸子學、作文七則、詩學十四則、詩賞、寄題詩文、地名三則、和習、姓氏、名字號、稱呼、著書雜書、闕疑等の事あり。天明元年辛丑（一七八一）の序跋あり。同三年の凡例及び諸家の序を添へて刊行す。原本二十卷の中十卷を刊行したるものなりといふ。近到「日本文庫」第三編にも收めたり。

◎江村綏は君錫と字し、傳左衛門と通稱し、北海と號す。初め俳諧を學び、後、京に還りて始めて儒に志し、遂に父龍洲に代りて經史を講說す。見伊藤錦里、弟清田君錦と共に伊藤家の三珠樹と稱せらる。後宮津侯の文學江村綏庵の後を繼て文學となり、これより江村氏を稱す。はやく致仕して詩文を娛む。時に江戸の入江北海、浪華の片山北海、京の江

村北海と三部の三海と稱せらる。著書は本書の外に、日本詩史、日本詩選、詩選續編、七子詩集譯說、樂府類解、菅遮論誡、北海詩抄、北海文抄等あり。天明八年戊申(一七八八)二月二日、七十六にて歿す。落東善正寺に葬らる。

じゆごういんさんこうかう

准后准三后考 一卷 新井 君美

准后准三后の所由を考究したるもの。先づ北畠親房の「職原鈔」中務省の下なる太皇太后宮(帝王祖母)皇太后宮(帝王母)皇后宮(帝王妻)を三宮といひ、公廻補任等を按じて清和天皇の貞觀十三年四月十日帝の御外祖、太政大臣從一位藤原良房に詔して「賜封三十戸」或る本に四月朔日に隨身兵仗を賜り、年官並に准三宮とあるを始めとして、賜ふところの御給の三宮に准ぜられし事なるべしとして種種古書に徵して論じたるなり。「百家說林」第九卷に收めたり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

じゆごうしんわうざしのこと

准后親王座次事 寫一卷

慶長年代に於ける准后親王の座次等を記したること名の示すが如し。親王准后座次の事と合編す。

しゆごこくかいしやう

守護國界章 九卷 僧 最澄

法相宗の德一其の他諸宗の僧より、天台宗に對する駁難誹謗を論駁し、天台宗にいはゆる四教五時、四種四諦、階位、止觀、妙法蓮華の意味、法華經の經體、十妙、八大、七喩、十德、唯有一乘、悉有佛性、法華權實等の教義を闡明せしもの。目次の大綱凡て五十一箇條あり。「東域錄」によれば本書もと三卷なりしを、現行の本は後に九卷に分ちたるなり。弘仁九年戊戌(一四七八)の著。「續群書類從」卷六百二十、合戰部第五十にも收めたり。著者に木書寫は信州小笠原主水殿」と記せり。「續群書類從」卷六百二十、合戰部第五十にも收めたり。著者に木書寫は信州小笠原藩の士にして豐後と稱す。

しゆざうき

酒造記 寫三卷

酒造に關する說明なり。酒造一切心得、酒道具積り、菩提性仕込、煮元仕込、水元仕込、寒造仕掛、生酒仕掛、春造仕掛等の目に就て說明す。第三卷の末に、卷四酒藏流口傳の事、並に名酒仕掛の事、卷五酒仕掛口傳の事、酒直し方口傳の事等の目あれど、其の書なし。

しゆざうそのほかをおしらべじやうどめ

酒造其外取調御用留 寫一冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、慶應三年丁卯(一八六七)のものにかゝる。

しゆざうのぎについさふれとめ

酒造の儀に付觸留 寫一冊

天明年度より享和年度に至る觸留書類にして、幕府評定所より引繼ぎ內閣文庫に保存せり。

じゆさんみやすけなほきやうひやくしゆ

從三位資直卿百首 寫一卷 資直

慶瀨社法樂十首中なる「三芳野はみゆきうちとけ

行水の、きよき河內春風そ吹く」より、七所新宮法樂一日百首中の「そなれきて老もかくすむかげやこれ、春秋とめる宿の友鶴」に至る百首なり。「續群書類從」卷三百九十三、和歌部第二十八に收めたり

じゆさんみやうもくしふ

壽算名目集 寫一卷 大塚 嘉樹

四十歲より九十歲までの年齡に關する雜事を考證したるもの。初生より極老までの異稱をも載せり。寬政二年庚戌(一七九〇)に筆記する所なり。

◎大塚嘉樹の傳は「群書隨筆」の下にあり。

しゆじうこころえぐさ

主從心得草 十卷 僧 眞鏡

心學の主意に據りて、主從の關係を說述したるもの。古今の例話を引徵し、圖畫狂歌を擧げて、從主に仕ふる方法を叮嚀周密に說明せり。初編以下二册づつ二編、三編、四編、五編として十卷十册に作れり。文政六年癸未(一八二三)正月の自序、及び天保十三年壬寅(一八四二)等の序あり。著者眞鏡は江戶淺草新寺町遠福院に住せり。

しゆしかれいひつき

朱子家禮筆記 寫九卷 淺見 安正

「朱子家禮」の註解なり。享保十一年丙午(一七二六)鍾名氏の序、元文四年己未(一七三九)宮崎眞利の奧書あり。

◎淺見安正の傳は「靖獻遺言」の下に出せり。

しゆししでんかうくわう

朱子詩傳旨 二卷 太宰 純

朱子の詩經傳の誤謬を辨論したるもの。其說の是非は今輒く斷定すべきにあらず。享保十五年庚戌(一七三〇)の自跋あり。延享三年丙寅(一七四六)上梓す。

◎太宰純の傳記は「經濟錄」の下にあり。

しゆししんぺん

酒史新編 二卷 青山 延光

酒に關する歷史的事實を說述したるもの。酒神、造酒司、酒禁、名酒、酒徒、酒器、酒失、雜記の八項目に分ち漢文にて論ず。著者の末書あり。曰く、「先大人愛酒、然獨酌不過數杯、時或與衆賓相會、乃飛觴政、古人一斗亦醉、一石亦醉、非虛言也、世之嗜酒者、醉時多醒時少、先大人則醉時少、醒時多、嘗自號曰醒狂叟、天下之善飲者也。古人稱三酒之功德二者、劉伶若有經、述之法者蘇軾有經、述此編、特以先大人遺愛耳、非敢模擬古人也、若夫檢誡之衆、則酒誥具焉、嘉徠後人之論戒、甲子(一七二四)春日延光識」とあり、其の意見るべし。諸家の序跋あり、明治十年出版す。

◎青山延光の傳は「赤穗四十七士傳」の下にあり。

しゆしかかくげんじくん

朱子治家格言兒訓 一卷 松井 濤

「治家格言」を通俗に和解したるもの。而して其の解釋は多く齋田氏及び源淡然のを參酌したりと云ふ。嘉永二年己酉(一八四九)の自序あり。

しゆしびきやう

洙泗微響 寫二卷 原 善

仁、性、情、心、理、道、德、智、禍、樂、義、信、恕、誠、恭、敬、廉、耻、欲、真、志、意、謀、備、質、節、才、命、魂、魄、

鬼神、要、以上語目を古言に徴して説明したものなり。内題には「雙桂原先生洙泗微響」とあり。

◎原善は字を公道、通稱を三右衛門といひ、念齋と號せり。父の職を繼ぎて徳川幕府に仕ふ。皆て山本北山に就學し、日夜勉強して業大に成り、遂に帷を下して學生を教授す。林述齋また嘱めて史事に與らしむ。著すところの「先哲叢談」は幕府の旨により進呈し、賞賜あり。文化三年丙寅(一八〇六)三月十九日、四十七にて歿す。

しゆしふくわんぶもんじかう

朱集官府文字考 一卷

淺見 安正

朱子文集の中、第十六、第十七、第十八の三卷中より、官府の文字を抄出して俗解したるもの。三宅重固と同編したるなり。元文元年丙辰(一七三九)六若林述居の奥書あり。

◎淺見安正の傳は「精齋遺言」の下に出づ。

しゆしふししよせつ

朱集四書説 全五十三卷

合田 潛

朱子文集の中より、四書の義に關するものを撰輯して、四書の各編章の下に列れ、以て朱注の參看に供したるもの。其の意に曰く「朱子諸集註、而後諸儒疏解之多、如烟海、而其宜備參考者、終莫如語類、語類又不如文集、其故何也、語類門人之所輯、猶有記錄之誤、而至文集、則出其手筆、故雖時有未定之説、而其意則瞭然矣」云々といへり。卷一に總論、卷二より四までに大學、卷五より二十五までに論語、卷二十六より四十までに孟子、卷四十一より四十六までに中庸を收め、卷四十七より五十三までを附錄として、心説、性説、仁説、其の他の雜論を掲ぐ。享和三年癸亥(一八〇三)七月の自序あり。五十三卷十八册に寫せり。著者合田潛は讀破の人なり。

しゆじやうどげんぶくじやうじゆさはふせう

主上御元服上壽作法抄 一卷

藤原 道綱

西宮抄、北山抄、外記記、經信卿記、行成卿記、李部王記、外記師平記其の他の諸記錄より、主上の元服に關することを諸類したるもの。「群書類從」卷九十八、公事部第二十に收めたり。

◎藤原道綱は關白兼家の子なり。長德(一〇九五—一六五八)中、大納言兼右近衛大將東宮傳に至る。世に博大納言と稱せり。寛仁四年庚申(一〇二〇)年六十六にて薨ず。

しゆじやくるんをみなへしあはせ

朱雀院女郎花合 一卷

卷頭に「亭子院の御門、おりゐさせ給うて、またの年の秋、せさせ給ふをみなへしを合なり」といひ、末に「花は右なり、歌は左かちけりの評點あり、凡て十一番なり。「群書類從」卷二百二十六、和歌部第八十一に收む。

しゆじゆゑんぱふ

種樹園法 三卷

草藥を開きて種樹園を興し、園圃の經營、花木の栽植、接木、壓條法等を假字文にて記したるもの。園藝書も插入せり。

文化六年己巳(一八〇九)八月の著。其の序言に曰く「先大人種樹の業に精く、暫て接樹擺樹壓條等の法を研究せられて種樹秘要の著ありき。天明五年乙巳(一七八五)の春疏蘇に寿はる。惜むべき哉。其後文化庚辰の年予阿藩大矢集堂氏に陪し阿州に至り德島府に滯留す。此時渡華産小泉英伯といふ人數年前より南海に漫遊し接樹法を敎るを以て事とし德島に居れり。就て學ぶ者頗多く其術甚巧妙なりと稱す。予先大人の遺書を失ひたるが故に此を聞て堪ること能はず。乃ち往て此に入門し壘に往事を語て歎息しければ小泉此氏予が志を感じ、接樹擺木壓條の祕事を悉く皆予に傳達せり。阿州より歸るに及て上總國大豆谷(マメガヤ)に卜居し、園を立て種樹の業を修む。於此乎小島氏が傳を忘草して、此書を作り此を種樹祕要と名け以て先大人の宿志を續ぐと云爾」とあり。以て本書の由來を伺ふべし。

◎佐藤信淵の傳は「經濟要錄」の下に出づ。

じゆしよくかけい

儒職家系 全五卷

田畑 吉正

德川氏の儒職、四十六家の系譜なり。第一卷は林氏及び其の支流、第二第三卷には人見友元を始めとして、林氏の門に出で儒官に擢でられたる者を掲げ、第四第五卷に、木下順庵以下、獨學者を載せ、次第を分て之れを記せり。蓋し諸家の書上の輯綴したるものなり。文化六年己巳(一八〇九)之れを撰して將軍家へ進上せしものなり。今、史籍集覽の中に收めて刊行せり。

◎田畑吉正は喜右衛門と通稱す。系譜の事に詳しかりきといふ。

じゆしよくどくせう

受職功德抄 一卷

僧 日蓮

法華經に依りて成佛するもの、他の諸經によつて成佛するものよりも、其の功德の殊勝なることを述べたる假字文の書なり。受職とは卷首に説明して「四位の極際に初めて佛位を成するの義なり」と云へり。文永九年壬申(一二七二)四月の著。「錄內」十七卷及び「續圓藏經」霜帙第十に收めらる。

◎日蓮の傳記は「開目鈔」の下にあり。

しゆしよくろん

酒食論 一卷

篠田 厚敬

造酒正醫屋朝臣長持といふ最上戸と、飯室律師好飯といふ最下戸と、中左衛門大夫中原仲成といふ中戸と、各の好むところに任せて、其の功德を述べ盡せり。即ち三編の長歌に詠めるなり。「群書類從」卷三百六十八、飲食部第五に收めたり。同書には卷末に「古酒食論者不知何作也、或曰後成恩寺禪閤之戲作、余讀之雖鄙言俚語無復可取焉、而有足觀時世之變警者、亦係雜助、故逐收編云」とあり。

しゆしんひえうせう

種心祕要抄 全八卷

古來の歌題を集め、一々註釋を加へ更に用語作例等を集録したるものなり。「古今和歌集」の序中な「種心」の句に取りて「種心」と名けたり。

◎日輝は日蓮宗久遠寺の名僧。加賀藩士野口氏の子なり。初め啓善と稱し、後に堯山と改め、優陀那とも稱す。妙立等日雅に就て剃髮せり。儒佛兩典に精通し、殊に日蓮の奥旨を發揮し、其の宗軌を變更するや前代の軌轍を脫する所あり。宗徒中異派を以て目せらる。天保四年癸巳立像寺に住し、弘化四年丁未水戸の楞林を興し、また嘉永三年庚戌池上の楞林を復興し、東關の日宗師に依て振ふことを得たり。安政六年己未(一八五九)二月、六十歲にて入寂す。

じゆせん

儒仙 二卷

漢以後唐宋に至る間の名儒三十六人の肖像を掲げて、各四言八句の贊辭を冠せり。

しゆだいえうぎ

首題要義 一卷 僧 日輝

「妙法蓮華經」ふ題目の意義を講説したるもの。定法體、釋名義、明經意、辨宗判、出祖意、簡五章、議異名、論行相の八科を設けて辨じたり。

◎日輝は日蓮宗久遠寺の名僧。加賀藩士野口氏の子なり。初め啓善と稱し、後に堯山と改め、優陀那とも稱す。妙立等日雅に就て剃髮せり。儒佛兩典に精通し、殊に日蓮の奥旨を發揮し、其の宗軌を變更するや前代の軌轍を脫する所あり。宗徒中異派を以て目せらる。天保四年癸巳立像寺に住し、弘化四年丁未水戸の楞林を興し、また嘉永三年庚戌池上の楞林を復興し、東關の日宗師に依て振ふことを得たり。安政六年己未(一八五九)二月、六十歲にて入寂す。

しゆちやろん

酒茶論 一卷 僧 蘭叔

釀好法師の事績を記したるもの。園太曆、吉野拾遺、碓嚢集、家集等に據りて作り、一名を「釀好略傳」と云へり。年月の次第等に想像の事多くして、事績の微とするに足らず。元祿七年甲戌(一六九四)四月の自跋あり。著者篠田厚敬は平安の處士なり。

り。全文漢文にて記せり。「群書類從」巻三百六十八、飲食部第五に收めたり。著者圓叔は一條岐陽乙律寺の住僧たりきといふ。

しゆづがふけつ

主圖合結　和十巻

全國各城主の氏名、領知、所替、配分等を圖示し、圖毎に着色ありて山川市街を區劃せり。事實は寛永頃までに及べり。

しゆづがふけつき

主圖合結記　和五巻　山縣　昌貞

德川氏時代に於ける將軍家三家諸大名の居城の位置、及び其の構内の詳細繪圖なり。悉く彩色を以て町家山川、乾濠内外等を區別せり。畿内より、國によりて分ち、各城の起原沿革等を略記し、城主の石高、家中の分限等を記せり。

◎山縣昌貞は通稱を大貳、字を士期、號を柳莊といふ。享保十年甲斐國巨摩郡篠田村に生る。夙に學を好み、三宅尚齋の門人加々美櫻嶺に就て學び、日夜勉勵して遂に和漢百家の學に通じ、最も兵學に精し。寶暦六年江戸に出でて教授す。諸侯の聘するもの多し。小幡侯織田信邦は賓師を以て之れを待つ。其の老臣吉田玄蕃、津田賴母、及び藤井右衞門、竹内式部等常に出入して文武を論ず。其の寄するところ本書の外に、柳子新論、醫非擬倭、業雜詳、孫子講義等あり。大政平生兵を談するに、江戸城を攻め南風に乘じ品川火に箭を放つべきを以て徵とす。故を以て死刑に處せらる。時に明和四年十玄(一四二七八月二十二日なり、年四十三。明治十三年今上天皇陛下山梨縣に行幸あらせられたる時、大武の尊王の志を褒し非命に死したるを憐み祭祀料を恩賜し、尊で藤井竹内と共に正四位を贈らせ給へり

しゆづがふけつだうきかう

主圖合結道規考　和二巻

五畿七道の國名、郡名、田數、知行高等を記し、全國縱横の道程を記したるものなり。

しゆづくわのせつこころえしよ

出火の節心得書　和一册

享保年度の心得書にして、幕府評定所より引續き、内閣文庫に保存せるものなり。

しゆづくわんしふ

出觀集　一巻

入道二品親王覺性の詠歌なり。春夏秋冬戀雜に分ちて數百首を收めたり。「群書類從」卷二百六十四、和歌部第十九に收む。同書には「右出親集、雖多不審、依無類本、不能校合」と記せり。

◎覺性法親王は後陽成院の第一皇子にして、天正十年壬午(一五八二)五月生れ、剃染して法親王となり、正保五年戊子(一六四八)正月二十一日入寂す、御年六十七。

しゆづけたいかう

出家大綱　一巻　僧　榮西

佛敎滅師の大要、卽ち二衣二食三衣一鉢の制戒說したるもの。正治二年庚申(一二〇〇)年七十四にて歿す。識して快烈房君といふ。

◎榮西の傳は「興禪護國論」の下にあり。

じゆつさいぐうひつ

逃齋偶筆　一巻　林　衡

著者逃齋の和文隨筆なり。何くれとなく書き出でて長短凡そ六十餘段より成れり。今卷端の一二段を例とし擧ぐれば、「古の歌詞ほど、風韻高きものはあらじ、梅に下風といひ、萩に上風といふ。如何にして斯く思ひ寄りけん」「花發て風雨多きのみかは、月の夜頃に、花盛りなる春も、またまれなり。長き春日にあかぬ花を、更に月前にめづる程樂しきことはあらじかし。又桂花も、中秋に際會せる年は、たま〳〵なり。花さへ時は得がたきなや」等の如し。以て其の筆つかひ見るべし。

◎林衡は字を德詮、逃齋また蓬壁と號す。父能登守乘薀夙に大猷廟渚、服部仲山を聘して其の師となす。後ち淺井太室、細井平洲等に學び日夜奮勵して和漢古今の書に通じ、自ら一家を成す。年二十六にして幕府に抽でられ林祭酒簡館の跡を襲ぐ。是れ實に異數の榮なり。是より教育を奬勵し、學制を更革し、賢能を推擧する等文敎上の功績實に許多なりとす。白河樂翁、堀田水月の兩侯と親交最も厚く四十年一日の如くなりきといふ。著書は官撰のものに意を用ひ編輯を監するところ多し。史料、地誌、朝野旁聞、武家名目等凡そ數千卷、また逸存叢書等あり。蘇三千五百石に至る。實に一世の推すところなり、學者の榮を極む。天保十二年辛丑(一五〇一)年七十四にて歿す。識して快烈府君といふ。

しゆつしかう

出思稿　二巻　松下　一清

著者の詩集なり。天和三年癸亥(一六八三)の自序あり、「余所作詩、因兒輩之請、將輯爲卷、檢塵散稿、失脫不少、蟲丁未以前、悉刪不取、自寛文戊申、迄天和壬戌、獲詩二百六十一首、編次所賦年月、不以類分、歸言野句、犯古人、犯今人、問亦或犯吾詩、眞是詩家罪人也、然余纔知学之武夫而已、非文章之徒也、觀者請狥愚之、卷中遊覽諸編、率多感言、感言出於思也、因以出思命吾集、」これ其の全文なり。一書の大概を知るべし。

◎松下一清は孫七と字し、確峯と號す。儒を以て安藤侯に仕へ、最も詩を善くせり。

しゆつするのせつさりはからひがたてつづき

出水の節取計方手續　和一册

幕府評定所より引續きて内閣文庫に保存せる法制書類なり。中御門天皇の享和元年辛酉(一二四六一)幕府の取扱にかゝるものなり。

しゆつせかげきよ

出世景清　一巻　近松門左衞門

淨瑠璃本なり。貞享三年丙寅(一三四六)二月の初興行にかゝる。著者近松門左衞門の傳記は「國性爺合戰」の下にあり。

しゆつせげんい

出世元意　一巻　僧　覺如

法華と念佛とは同時同味の教なることを述べたるもの。僅に一紙に過ぎず。「眞宗法要」第六巻に收められる。

◎覺如の傳は「本願寺第八親鸞傳繪」の下に在り。

しゆつせやつこむかしものがたり

出世握虎昔物語　五巻　八文字舍自笑

武士と領城とを假り來りて世話人情を描き出したる小說なり。其の序文に「南枝暖に向ひ北枝は寒し。一種の春風兩般ある花の香をしたひて、梅の雖波の浦めづらしき初爲の聲を揃へて節をしたひて、竹本が淨瑠璃の趣向をみて、おもしろの花の都の獻舞妓の仕組と取集めて五卷に綴り芝居好の子達のお慰にするのみ」と云へり。享保十一年丙午(一三八六)の作なり。江島屋其磧とともに連作したるものなり。

◎八文字舍自笑の傳は「諸人形容」の下にあり。

じゆつだうそうしよ

述堂叢書　和十册

藤森大雅の「新政談」及び其の他の政治的雜說を摘抄叢輯したるものなり。雜說は嘉永文久間のもの多し。

しゆつちやうこうご

出定後語　二巻　富永　仲基

此の書は釋敎の事を論辨指斥したる漢文の隨筆なり。櫻町天皇の延享元年甲子(一二四〇四)に撰びたる自序あり。

◎富永仲基は通稱を道明寺屋吉兵衞といふ。浪華の書肆にして、陽明學を三宅萬年に學び、「說蔽」を著はして儒と諸子とを破し、本書「出定後語」を著して佛者を論せり。

しゆつちやうこうごひやう

出定後語　二巻　平田　篤胤

佛說を批難し、印度の風俗等を述べたるもの。「伊吹能舍著撰書目」には「印度藏志全部の趣意を見易く、書き記されたる物にて、勁學の第一、天竺國の風土、佛道の大意を知るには此の書に及くものなし」といひ本書の開卷第一には「抑是は出定笑語の大意で、演說致すことは先第一に天竺の國の水土風俗より致して、其國の傳說由來、また釋迦一代のあらまし、又もろ〳〵の佛敎一部一册として釋迦のまことのものでなく、殘らず後人の記したるものなる證な論辨、さて佛法が諸國へ傳り來より御國へつたはつたる事のあら〳〵、御國に有る所の諸宗の始り、および其の宗旨々々の立かた、さて佛法の本意、又當時世におる者の佛法の心得かたなどのことを申すのでござる」云々といへり能く本書の梗概を言ひ盡したり。嘉永二年己酉(一五〇九)八月の都下賣文の序を載す。明治二十六年戊前下毛郡神田の人、湯谷某宇八平田の門人の註解したるもの「出定笑語和解」上中下三卷(合本一册)の活版本あり。好適の參考書なり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

しゆつぢんきゝがき

出陣聞書　和一巻　小笠原持長

伊勢守馬簗書の中の一書にして、出陣同放置數十條を記し、伊勢貞丈標註し、更に考證して、持長の筆記に、何人か增補加筆して大永二年壬午(一五二二)の事などを書き添へしものなるべしといへり。

◎小笠原持長の傳記は「犬道物集書」の下にあり。

しゆつぢんせんく　出陣千句　寫一卷　親氏

巻頭に、「於豆州參島社頭獨吟千句」として永正元年甲子(一五〇四)十月二十五日の第一句より始めて千句に及べる連歌なり。「續群書類從」巻四百七十九、連歌部第九に收めたり。

しゆつぢんにつき　出陣日記　寫一卷

出陣に關する故實作法諸注意等を記述したるもの。末に應永二十九年壬寅(一四一八)三月五日前備前守源持長の奥書あり。「續群書類從」巻七百〇五、武家部第五十一にあり。

しゆてきよだん　酒滴餘談　二卷　谷　素外

古今見聞せしこと將た思ひ寄れることを筆の隨意隨意に書き集めしもの、由本文の最初にあり、伊勢おかげ參りの話、管廟話、梅の木人の命にかはりし話、以下雜件凡て三十九項より成る。嘉永六年癸丑(一八五三)ふみのや原勤堂の序あり。此の書は谷素外翁の作にして、「玉池雜藻」と云ひしが、年限たつに隨ひ、僅に其の三箇一を存せりしを、平林堂森山先生、其の足らざるを補なはんとせしに、事成らずして歿せり。予憙友の心ざしを序で、森山翁の墨筆の書名をかり着して酒滴餘談と改らして二卷の草子となしぬ」とあり。小册子二卷に作れり。

◎谷素外の傳は「龍の宮津子」の下にあり。

しゆはうたいづくへん　聚芳帶圖左編　寫九卷　江村　如圭、

草木を模寫し、漢文にて解說したるもの。巳老、未考、各巻冒頭に「於豆州參島社頭獨吟千句」として永正元年甲子(一五〇四)十月二十五日の第一句より始めて千句に及べる連歌なり。「續群書類從」巻四百七十九、連歌部第九に收めたり。

しゆつぢんにつき　出陣日記　寫一卷

出陣に關する故實作法諸注意等を記述したるもの。末に應永二十九年壬寅(一四一八)三月五日前備前守源持長の奥書あり。「續群書類從」巻七百〇五、武家部第五十一にあり。

しゆてきよだん　酒滴餘談　二卷　谷　素外

古今見聞せしこと將た思ひ寄れることを筆の隨意隨意に書き集めしもの、由本文の最初にあり、伊勢おかげ參りの話、管廟話、梅の木人の命にかはりし話、以下雜件凡て三十九項より成る。嘉永六年癸丑(一八五三)ふみのや原勤堂の序あり。此の書は谷素外翁の作にして、「玉池雜藻」と云ひしが、年限たつに隨ひ、僅に其の三箇一を存せりしを、平林堂森山先生、其の足らざるを補なはんとせしに、事成らずして歿せり。予憙友の心ざしを序で、森山翁の墨筆の書名をかり着して酒滴餘談と改らして二卷の草子となしぬ」とあり。小册子二卷に作れり。

◎谷素外の傳は「龍の宮津子」の下にあり。

しゆみせんぎやいならびにじよわかい　須彌山儀銘並序和解　二卷　僧　圓通

佛經に說ける天文曆象の事を論辨したる書なり。著者圓通の傳は「佛國曆象編」の下に在り。

じゆもうやくせいのうどく　授蒙藥性能毒　寫一册

藥草の名を揭げて各下に可被用の病狀を列擧し、其の用法等をも記せり。下半册には藥草の名稱製法等を略記す。文政五年壬午(一八二二)五月、玄蠹子の奥書あり。

じゆもんくうきよしようご　儒門空虛聚語　三卷　大鹽　後素

論語中の空虛ないへる語を類聚して註解す。天保四年癸巳(一八三三)冬十二月の自序あり。讀來れば實に一大論文なり。著者の本領を見るべし。其の序文にいふ。嗚呼、孰學孔子之空々顏子之屢空、不失上帝所賜之太虛、而執中安仁、以達位育之功哉、天下之廣、四海之大、而來世之遠、儒門必有其人焉。余是以有斯編之輯、非予等之所知也。遂名曰儒門空虛聚語」と。其の目を擧ぐれば、卷首に自序、序後附載。上卷に自記一條、經語十一則、註疏九十七條。下卷に、自記一條、諸儒論說百十一條、細註二條、按語二條、自識一條、代跋楊龜山玉龍洩鄭京山之文三條等あり。一卷を附錄とし、諸家門弟等に答へたる文章十餘編を收む。

◎大鹽後素の傳は「洗心洞劄記」の下にあり。

じゆもんしもんろく　儒門思問錄　四卷　林　道春

倫理道德、歷史文學等の事に就きて辨明したるもの。或る人の問題を設けて一々之れを假名書に說明したるものなり。巻一に弑君殺人、身體毀髮不毀傷、父母在不遠遊等より、日本美女論に至る十五條。巻二に喪葬土壇三尺より叩馬應諫に至る七條。巻三に伍子胥報仇、吳起興毗盟別、孔子不聽父子訟等より、養志養口に至る十四條。巻四に湯武受命禪放弑殺、文王事紂武王伐紂等より、輒拒扇瞰至る七條。凡て四十三條より成る。寛文二年壬寅(一六六二)出版。

◎林道春の傳は「羅山文集」の下に揭ぐ。

じゆもんしようご　儒門證語　一册　東　正純

宋の周濂溪以下、明末の李二曲に至る先儒諸家の要語を輯錄したるもの。内題には「考工記圖解」といへり。圖器物の寸尺まで詳記せり。寛政二年庚戌(一七九〇)秦主林氏の序、同八年紀德民、由本惟恭等の序あり。

◎川合孝衡の傳は「春川詩草」の下にあり。

しゆらくだいさやうかうき　聚樂第行幸記　一卷　楠　正虎

天正十六年戊子(一五八八)後陽成天皇、豐臣秀吉の聚樂第へ行幸遊ばせられたる時の詳細記事なり「群書類從」巻四十一、帝王部第十三に收む。

◎楠正虎は初の名大夔長左衛門、後民部卿長庵と

時に聚分韻略と名けて、韻を三段に重錄す。天野氏の藏する所の古版の聚分韻略を見れば、十二門を立て、五卷となし、虎關自筆の序、寧一山自筆の跋あり。同人の藏むる享保庚寅の年刊する聚分韻略三重韻のごとく韻を重れて、跋に作者宿園筆者秀篤とあり。是前候にとりて、宿園はしめて聚分韻略の韻を三段に重れたるによりて、作者宿園と記したると見えたり。同人の藏むる朝鮮本の韻略と云ふ一册の書を見れば、三重韻の如く韻を重れて十二門を立す。宿園韻略によりて聚分韻略の韻を重れたりと見えたり」云々といへり。永正元年甲子(一五〇四)出版。四卷一册に綴り、内閣文庫に特別書として藏するものあり。

◎虎關禪師は「海藏略韻」の下に傳せり。

じゆぼくくでんせう　入木口傳抄　寫一卷　世尊寺行尹

書法口傳の書。頴事、色紙形事、祭文事、綸旨事、戒牒事、願文事、以下凡て二十一箇條の要法を記せり。

◎世尊寺行尹は中將行房の弟にして時に從三位たり。家傳の書を善くし、嘗て尊圓法親王の師たりし事ありきといふ。元弘建武比の人なり。

じゆぼくだうびでんしよ　入木道祕傳書　寫一卷

詠草書式等の家傳書。卽ち色紙及び軸の物に詩歌散し形一通書樣の事、短册並に懷紙書樣の事、團扇歌かゝれた團形菱等一通書樣の事、懷紙色紙短册料册寸法の事、其の外數箇條あり。元祿五年壬申(一六九二)仲秋に記す所なり。

じゆもんしもんろく　儒門思問錄　四卷　林　道春

倫理道德、歷史文學等の事に就きて辨明したるもの。或る人の問題を設けて一々之れを假名書に說明したるものなり。巻一に弑君殺人、身體毀髮不毀傷、父母在不遠遊等より、日本美女論に至る十五條。巻二に喪葬土壇三尺より叩馬應諫に至る七條。巻三に伍子胥報仇、吳起興毗盟別、孔子不聽父子訟等より、養志養口に至る十四條。巻四に湯武受命禪放弑殺、文王事紂武王伐紂等より、輒拒扇瞰至る七條。凡て四十三條より成る。寛文二年壬寅(一六六二)出版。

◎林道春の傳は「羅山文集」の下に揭ぐ。

じゆもんしようご　儒門證語　一册　東　正純

宋の周濂溪以下、明末の李二曲に至る先儒諸家の要語を輯錄したるもの。内題には「考工記圖解」といへり。圖器物の寸尺まで詳記せり。寛政二年庚戌(一七九〇)秦主林氏の序、同八年紀德民、由本惟恭等の序あり。

◎川合孝衡の傳は「春川詩草」の下にあり。

しゆらくだいさやうかうき　聚樂第行幸記　一卷　楠　正虎

天正十六年戊子(一五八八)後陽成天皇、豐臣秀吉の聚樂第へ行幸遊ばせられたる時の詳細記事なり「群書類從」巻四十一、帝王部第十三に收む。

◎楠正虎は初の名大夔長左衛門、後民部卿長庵と

號す。正親町天皇の御宇織田信長の執奏に依りて、敕免を蒙り、河内守從四位上に敍せられ、楠氏に復せり。

しゆらくだいりやうどきやうかうにちじき　聚樂第兩度行幸日次記　卷一卷

天正十六年戊子(一二四八)四月と、同二十年壬辰(一二五二)正月と、二度聚樂亭へ行幸遊ばせられたる時の略記なり。「續群書類從」卷八十四、帝王部第三に收めたり。

しゆらくぶかん　聚樂武鑑　卷一卷

豐臣秀吉の事歷を記したるもの。其の族黨家士老臣等を網羅して各系譜紋處、知行高臨戰を略記す。天正十八年庚寅(一二五〇)より端を起して慶長五年庚子(一二六〇)青野ヶ原の合戰に及べり。

しゆらくものがたり　聚樂物語　二卷

太閤秀吉四國發向の事、附り惟任謀反並山崎合戰の事、秀吉天下を治給ふ事、附り秀次登子になり給ふ事、並淀殿御事、附り若君御誕生事、田中兵部內通の事、附り德善院幸藏主聚樂へ參りすかし出す事等より。白井備後阿波の木工最後の事、附り備後が女房最後の事、並幽靈の事、同じく備後夫婦夢に見ゆる事、木村常陸が妻子の事、並に秀次老母の御事等に至る都合十二項の物語なり。盡し秀次の一生を主と敍述したるなり。中に女房三十餘人の辭世の和歌をも揭げたり。

じゆりんしふえうでん　儒林拾要傳　卷一卷

宣旨書樣、同調文樣、院宣書式諸例を詳擧したるもの。天保十一年庚子(一二五〇〇)十二月の作にかゝる。著者米倉器水は本書の外に「種藝秘法聞書」の著あり。

しゆろしよ　種櫨試書　卷二卷　米倉　器水

櫨樹栽培の方法を詳述したるもの。天保十一年庚子(一二五〇〇)十二月の作にかゝる。著者米倉器水は本書の外に「種藝秘法聞書」の著あり。

しゆんうせう　春雨抄　十卷　鱸　重常

我が國語の單語單句を列擧し、これをいろは順に排列し、其の用例引證として、幾多の文を抄出列載し、各其の出所典據をも記したるものなり。寛永十六年己卯(一二九九)四月中浣林道春の漢文序あり

しゆんうろうしせう　春雨樓詩鈔　九卷　藤森　大雅

著者の詩集。五七絕律の諸體、總じて四百八十一首あり。橫山卷の評選に係る。嘉永七年甲寅(一二五一四)六月同人の凡例を載せたり。九卷三册に刊行。

◎藤森大雅の傳は「如不及齋文鈔」の下にあり。

しゆんうろうそうしよ　春雨樓叢書　卷三十二卷　藤森　大雅

傳記、世話、名稱、敎訓、其の他種々雜類の由來故實等を雜錄したるもの。何れも記述明細にして、各其の據る所あれば參考に供するに足るべし。

◎藤森大雅の傳は「如不及齋文鈔」の下にあり。

しゆんえふしふ　春葉集　二卷　荷田　春滿

著者の家集。上卷に四季、戀、雜の部を揭げ、下卷に古今集の假名序、及び國學校創啓の漢文上書を載す。上田秋成、橘經亮、荷田信美等の序、寛政七年乙卯(一二五五)荷田信鄕の跋あり。同十年戊午出版

◎荷田春滿の傳は「伊勢物語童子問」の下に出づ。

じゆんかいろく　巡海錄　卷一卷　關　修齡

漂流清人を護送したる時の記事なり。端書に、寶曆癸酉(一二四三)冬十二月南京商船遭颶風難屬到八丈島、島長發舟救渡而舍房給糧、明年甲戌三月具狀轉奏東都、於是議移送長崎轉囘唐山、八丈島豆州所理也、知尹山本君奉命督護送之事、餘假書記執楮墨之役故敍其事云々。

◎關修齡は武藏河越の人、字は君長、通稱は永二郎、松窓と號す。井上蘭臺に學び、また昌平黌に入り、業成りて資明するところ多く遂に折衷學を主張す。著書には國語略說、孟子詳解、高註戰國策補正、韓館贈答集、松窓論語略說、松窓漫筆、松窓史稿等あり。享和元年辛酉(一二四六一)四月五日歿す。時に年七十有餘。

じゆんかうさいてんしき　順考祭奠式　卷四卷　關　守一

卷一に祭典通式、正月朔日式、七日式、十五日式、新年祭、三月三日式、除蝗祭、風神祭、五月五日式、大祓式、道饗祭、鎭火祭、七月七日式、九月九日式、新嘗祭。卷二に遷宮式、迎神輿式、新雨祭、雷神祭、地鎭祭、大殿祭、新室祭、御門祭、龍神祭、井神祭、船神祭、開船祭、鎭魂祭、探湯祭、宅神祭、武神祭、醫神祭、酒神祭、取魚祭、餞送祭、送神祭、庚申祭、來占式。卷三に考證部上。卷四に考證部下を揭げたり。大藤定久、絲山貞幹と共に編輯するところなり。安政五年戊午(一二五一八)正月二十五日、六人部宿禰是香の序あり。著者關守一は越中高岡の神官なり。明治に至り射水神社の宮司となれり。

じゆんかんせつぐん　駿江俗說辨　卷一卷　林　道春

駿戶皇子不知君臣之義、聖武帝歸淨居等より、牛頭天王說、夢想妙藥僞之辨等に至る條說二十八箇條につきて辨說せり。「日本史記」百石、鳩巢、白樂軒、祖徠、益軒等の說を拔萃して材料となせるなり。天明四年甲辰(一二四四)の自序あれども其の姓名を記さず。

しゆんかんせう　春鑑抄　一卷　林　道春

五常の義を假名書したるものにて、慶安元年戊子(一二三〇)八槇本一卷に版行す。

◎林道春の傳記は「羅山文集」の下にあり。

しゆんき　春記　卷十册　藤原　齊房

著者の日錄にして、後朱雀院の長曆二年(一〇九八)より、後冷泉院の永承七年(一〇五二)に至れり。然れども中間闕如ありて記事連續せず、また傳本によりて異れり。蓋し世の爭亂に遇ひて散亡區區なりし結果なるべし。「春記」と名けたるは、著者が東宮(春宮)權大夫たりしより名けたり、また一名を「資房雜記」また「野房記」と稱す。こは著者が小野宮を能稱せるによるなり。

◎藤原資房は右大臣實賴の孫にして、大納言資平の子なり。參議に任じ、東宮權大夫を兼ねたり。天喜五年丁酉(一〇五七)薨ず、年五十一。

しゆんぎうまごとば　駿牛綸詞　一卷

牛車の沿革、用牛の撰擇飼養法等凡て輿服の制を

詳しく記したるもの。元禄十三年庚辰(一七〇〇)正月、花山院家の祕抄を寫出せる旨の奥書あり。『群書類從』卷四百九十三、雜部第四十八にあり。

しゆんぎよくひやくにんいつしゆひめぶんこ

春玉百人一首姫文庫 一卷

小倉の百人一首を圖解したるもの。下欄に各作者の肖像と歌とを寫し、上欄に更に歌中の大意を圖して毎首詳細に講說せり。末に「今川になぞらへて自ら戒しむ制詞の條々」といふを掲げ、其の上欄には「和漢賢女鑑」とて圖を入れて賢女の逸話を擧げたり。卷首には數葉の彩色畫を入れ歌學上の注意數件をも記したり、何時何人の作か詳ならず。

しゆんくわしうげつせう

春花秋月鈔 二十八卷 僧 宗性

著者の日記にして、原本は東大寺に寶藏せられたり。用紙は著者と他との往復書翰紙の裏面に手書したるものなり。

◎宗性は東大寺の僧にして、凝然上人の師僧なり。深く華嚴の學に通ぜり。『調伏異朝怨敵抄』は其の寫傳せる所。元弘比の人なり。

しゆんくわもんゐんいかのき

春華門院御五十日記 一卷

建久六年乙卯(一一九五)十月七日、今上第一皇女五十日の記なり。『群書類從』卷五百二十七、雜部第八十二に收めたり。

しゆんくわんそうづしまものがたり

俊寛僧都島物語 十卷 瀧澤 馬琴

文治二年丙午(一一八六)配所硫黄島に死歿したりと言ひ傳ふる。法勝寺執行俊寛僧都の跡を討尋し、其の生涯を骨子として、四圍繞繞の事情を脚色し長編に作り成せる小說なり。文化五年戊辰(一八〇八)中亥曲亭の自序あり。

◎瀧澤馬琴の傳は『南總里見八犬傳』の下にあり。

しゆんけつしんたうするこでん

俊傑神稻水滸傳 百三十五卷

八島 春信

神洞小次郎、稻場太郎兩賊の事績を書き綴りたる小說なり。自序に曰く「余本神史所傳著二小册一命曰二俊傑神稻水滸傳一。一擬二忠義水滸傳一而其所レ述者稻場神洞兩賊之實蹟也。抑此兩賊奸雄而植黨、敵二鎌倉新府一。故討二之官軍一屠戮之容。然天威不レ違終誅二滅之一。其事奇崔巍、不レ足レ取、聊著二此書一。充二兒女翁嫗永畫長夜之遣閑資一云」と。以て本書の梗概を覗ひ知るべし。初編五卷は文政十一年戊子(一八二八)に二編五卷は其翌年に成り、以下續々年を逐ひて刊行せられたるなり。

◎八島春信の傳は『狂歌奇人譚』の下にあり。

じゆんざうぞくだん

馴象俗談 一卷 井上 通熙

名の示す如く馴象に關する俗說を記述したるものの。享保十四年己酉(一七二九)支那の廣南より馴象を幕府に贈りたる時、命ぜられて之れを撰述したりと言ふ。

◎井上通熙は江戸の人、字を叔夷また子叔といひ、通稱を嘉膳といひ、閑窗また圖南と號す。少より學を好み、天野泰嵐、林鳳岡等に學び、儒學に明らかにして儒を以て稱せらる。元文五年岡山侯に聘せられて教官となる。其の學必ずしも程朱に拘せず、また、古學を主張するにもあらず、見識頗る公平なり。著書は本書の外に三韓世表、圖南子臣術訓、明七才子詩集、左傳異名考、山陽行錄、北越行錄、圖南稿等あり。寶曆十一年辛巳(一七六一)十一月二十七日江戸に歿す、享年五十七。淨舍泰雲等に葬る。

じゆんざうへん

馴象編 一卷 林 信充(カンナン)

享保十四年己酉(一七二九)五月、廣南王獻する所の象、江戸に到りし時、著者の陪觀して作りたる賦、及び同諸家の詩賦を編集したるもの。同年刊行す。

◎林信充の傳は『孝子十五郎傳』の下にあり。

しゆんじうけいぶんゐさん

春秋經文彙纂 六卷 蒔田 貞

春秋の經文中より、時月、即位、生子、立君、朝聘、會盟、侵伐、遷滅、弑殺、享嘗、裘祭、祭祀、蒐狩、興作、甲兵、田賦、豐凶、災祥、出國、入國、盜賊、刑戮等の二十二門、百八十餘事を彙類して詳註を施したるもの。毛勉齋の『屈辭比事』を續成せる意にて、同體例に倣ひ作れり。天保六年乙未(一八三五)の自序、及び翌七年庚申島長弘の序あり。六卷を四册に版行したり。

◎蒔田貞のことは『孝經通』の下にあり。

しゆんじうこしでんしかう

春秋胡氏傳私考 本 八册 林 恕

春秋胡氏傳に就き、逐條註釋考述したるもの。卷端に「胡傳發端の諺解」、假名文にて旣枝の一編を掲げ、其の末に「右因武田道安所求而抄出之者齋」と記せり。次に「春秋三傳授受」を講義し、次に本文に入る。承應三年甲午(一六五四)著者の末記、及び家弟の跋あり。

◎林恕の傳記は『本朝通鑑』の下にあり。

しゆんじうさしでん

春秋左氏傳 三十卷 小畑 行簡(僞譯)

春秋左傳の經傳全文に、片假名にて、僞訓註釋を加へたるものなり。初學者の獨學に至便を謀りて作れるなり。安政四年丁巳(一八五七)の自序あり。三十卷十五册に版行す。

◎小畑行簡の傳記は『詩山堂詩話』の下にあり。

しゆんじうさしでんかい

春秋左氏傳解 本 六册 末包 時亮

春秋左氏傳を經と傳とに分ち、各自註を加へたるものなり。更に其の舅氏の補註、及び、校正者受業の凡例あり。

◎末包時亮は岩瀨と字し、金陵と號す。東讐の人なり。本書の外に、春秋左氏傳解圖說、同案、論語解、國語解、雜語斷、唐詩序論解等の著あり。

しゆんじうさでんけい

春秋左傳觿 十卷 岡 白駒

本書は「左傳攜」として「さ」の部に解題せり。

しゆんじうさでんこくじ

春秋左傳國次 七卷 金澤 休

左氏の經傳を、周及び十二國の國分に類したるものなり。寛政四年壬子(一七九二)の自序、及び同三年、四年、七年、九年等の諸家の諸序あり。著者金澤休は參州岡崎の驛長なり。字を子匹と稱し、松下亭と號したりき。

しゆんじうさでんづせつ

春秋左傳圖說 本 一卷 末包 時亮

春秋左氏傳を圖說したること名の示すが如し。著者末包時亮の傳は『春秋左氏傳解』の下にあり。

しゆんじうさでんてうだいりやく

春秋左傳雕題略 六卷 中井 積德

三傳を參考し諸註を取舍して、『春秋左氏傳』を註釋したるもの。著者の凡例に「三傳異レ其事一或有二一長一也、而長不レ可レ保焉。是故欲レ解二春秋一者、當會二萃三傳一而精擇焉以成二一家之言一。庶幾乎有二得レ魚人之旨一也。乃欲レ偏據二左氏一可レ也。故今所レ訂特正二註家之謬一以明二經之文意一也已。於二經文一本無レ所レ發明一者亦訂傳之餘波矣」と云へり。以て其の用意を窺ふべし。弘化三年丙午(一八四六)、佐藤坦の序を載せて上梓す。

◎中井積德の傳は『七經雕題略』の下にあり。

しゆんじうさでんろれきかう

春秋左傳魯歷考 一卷 東山

「春秋左傳疏」(二十册)に附錄せる魯歷考なり。假名文にて、最も詳細に纂註す。寛政七年乙卯(一七九五)にて出版す。

しゆんじうじゆつれき

春秋述曆 一卷 澁川 春海

春秋十二公の際、經傳所載の歲時月日を敍し、年序成曆したるもの。月の大小干支、冬至日月蝕等をも記す。松田順承と同編するところなり。寛文九年己酉(一六六九)の自序、及び林子の序あり。

◎澁川春海の傳は『新蘆面命』の下にあり。

しゆんじうせつちう

春秋折中 十二卷 福井 軋

春秋左傳に就て道氏の三書に基き雜說を集め自案を附して成せるもの。由あり。寛政三年辛亥(一七九一)の自序、男緯蕕の序あり。

◎福井軋は大車の二子にして字を小車といい、衣笠山人と號す。夙く宗學を研究し、また詞文に通じ、父の職を繼ぎて德川幕府の醫官となる。

しゆんじうされきかう

春秋杜曆考 一卷 澁川 春海

春秋、隱公元年より、哀公二十七年に至る、凡二百五十五年、三千一百五十四箇月間の每月大小、朔支朔干等を記したるもの。松田順承と同編するところなり。寛文十年庚戌(一六七〇)の自序あり。

◎澁川春海の傳記は『新蘆面命』の下にあり。

しゆんじうなくさ

春秋七艸 一卷

春秋七艸を圖說したるもの。寛保二年壬戌(一七四二)

二〇上木せり。著者は「後藤某」と記せり。

しゆんじうびかう

春秋備考 木 十二卷　**人見　壹**

春秋の各句を抄出して、逐條註釋したるもの。家君の遺稿に就て校正編輯したる由、元祿六年癸酉(一六九三)の序にあり。十二卷六册に寫傳す。今見るところは其の寫本直筆なり。

◎人見竹洞の傳は「土佐日記附註」の下にあり。

しゆんじうへきさうろんせつ

春秋劈頭論說 木 四册　**林　道春**

春秋の「春王正月」の句に就き、古來の異論紛々たるを、考徵斷論したるもの。寛永七年庚午(一六三〇)の自序に、諸家の諸說を略敘して、其衆說、共引經史諸傳、以爲證據、讀者未知歸一、今聚衆說、抄註疏、共爲一帙、且爲圖進論、以備遺忘、復獻于廷、因號曰春秋劈頭論說」といひ、其の題名の出所を說きて、朱文公曰、只這劈頭一箇王正月、便說不去、是所以題其名也、春王正月、此經開卷第一義也」といへり。萬治三年(一六六〇)刊癈の奥書あり。

◎林道春の傳記は「羅山文集」の下にあり。

しゆんじうめいれきじよかう

春秋命歷序考 二卷　**平田　篤胤**

唐土の「春秋命歷序」を考證したるもの。古來紛々の說を斷して、自ら一家の說を見る。天保四年癸巳(一八三三)孟春九日庚子の自序、及び屋代弘賢の序、三枝守運の跋あり。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

しゆんじうれきほんじゆつへん

春秋曆本術編 木 一卷　**平田　篤胤**

春秋曆、卽ち謂はゆる周曆魯曆の本術を論述したるもの。本術は卽ち殷曆、殷曆は卽ち夏曆、夏曆は卽ち太昊の古曆なり。夏后氏以前は建寅の月を以て正月とし、殷は建丑の月を以て正月とし、周は建子の月を以て正月とす。これを以て異るとすれども、氣策の推歩に至ては異ることなしといふ。天保四年癸巳(一八三三)著者の凡例、同五年甲午(一八三四)春川好尙の序あり。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

しゆんじうれきほんじゆつへん

春秋曆本術編 木 一卷　**平田　篤胤**

春秋曆、卽ち謂はゆる周曆魯曆の本術を論述したるもの。本術は卽ち殷曆、殷曆は卽ち夏曆、夏曆は卽ち太昊の古曆なり。夏后氏以前は建寅の月を以て正月とし、殷は建丑の月を以て正月とし、周は建子の月を以て正月とす。これを以て異るとすれども、氣策の推歩に至ては異ることなしといふ。天保四年癸巳(一八三三)著者の凡例、同五年甲午(一八三四)春川好尙の序あり。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

じゆんしかう

荀子考 木 二卷　**猪飼　彥博**

荀子の拠據が註と、物徂徠の「讀荀子」との誤謬を訂し、家田大峰の「荀子斷」を評定したるもの。寛政七年乙卯(一七九五)の自序、同年の猪飼彥博の傳は「管子補正」の下にあり。

じゆんしかう

荀子考 木 二卷　**猪飼　彥博**

荀子の拠據が註と、物徂徠の「讀荀子」との誤謬を訂し、家田大峰の「荀子斷」を評定したるもの。寛政七年乙卯(一七九五)の自序、同年の猪飼彥博の傳は「管子補正」の下にあり。

じゆんしけい

荀子觿 木 二卷　**岡　白駒**

荀子を補註したるもの。卽ち揚倞の註の不足を補ふるなり、寶曆六年(一七五六)春三月と末記あり。

◎岡白駒の傳は「皇朝儒臣傳」の下にあり。

じゆんしけい

荀子觿 木 二卷　**岡　白駒**

荀子を補註したるもの。卽ち揚倞の註の不足を補ふるなり、寶曆六年(一七五六)春三月と末記あり。

◎岡白駒の傳は「皇朝儒臣傳」の下にあり。

じゆんしかう

荀子考 木 二卷　**猪飼　彥博**

荀子の拠據が註と、物徂徠の「讀荀子」との誤謬を訂し、家田大峰の「荀子斷」を評定したるもの。寛政七年乙卯(一七九五)の自序、同年の猪飼彥博の傳は「管子補正」の下にあり。

◎猪飼彥博の傳は「管子補正」の下にあり。

しゆんじゆけんびせう

春樹顯秘抄 木 一卷

手爾波の考說なり。用例證歌等をも擧げて初學の階梯とす。手爾波は草木の葉を出すに隨て其の木其の葉を知るが如く、手爾波に因て其の義を知るなれば出假葉の義によりて春樹の字を用ひたるなるべしといふ。

しゆんじゆけんびぞうせう

春樹顯秘增抄 木 二卷　**有賀　長伯**

春樹顯秘抄を增補したるもの也。原書二十一條の內容を、此の書增して四十九條とせり。凡てそれにに關する考說なり。明和九年壬辰(一七七二)長伯の後、敬義齋長園といふもの、寬元正則に傳へたる由の奥書あり。

◎有賀長伯の傳は「歌枕秋の寢覺」の下にあり。

しゆんじようばうさんぐうき

俊乘坊參宮記 木 一卷

此の書は一名「神宮大般若經轉讀記」の下に出せり

じゆんしんとうふ

惇信公譜 木 一卷

德川九代將軍惇信院家重一生間の年譜なり。

しゆんすゐいかう

春水遺稿 十二卷　**賴　惟寬**

卷一より卷八までに詩五百四十二首、卷九より卷十一までに文六十七篇、別錄三卷に在津事紀事及び師友志附行狀、附錄一卷に新甫墓碣代序、新甫遺詩等を收載し、十二册として刊行せらる。文政五年壬午(一八二二)弟惟柔の端書あり。

◎賴惟寬の傳は「藝備孝義傳」の下にあり。

しゆんすゐしゆしだんき

舜水朱氏談綺 三卷　**安積　覺**

舜水の說話を集錄したるもの。事物名義、喪祭儀禮、深衣幅巾の制、簡牘牋奏の式等を記す。寬永四年丁亥(一六二七)の自序を附し、同五年刊行す。

◎安積覺の傳は「湖亭涉筆」の下に出づ。

しゆんすゐぶんしふ

舜水文集 二十八卷　**朱　舜水**

著者一生の作を、德川光圀の編輯する所にして、而かも卷頭に「門人權中納言從三位綱條校」と記せり。本集收むる所は、卷一に奏疏、賦、書。卷二、三、四、五、六、七、八に書。卷九に啓。卷十、十一、十二に尺牘。卷十三に策問、論、說。卷十四に議。卷十五に對。卷十六に序、記、志、規、箴。卷十七に贊。卷十八に銘、碑銘。卷十九に祭文。卷二十、二十一、二十二、二十三に雜著。卷二十四、二十五に批評。卷二十六に釋奠儀註。卷二十七に陽九造略。卷二十八に安南供役紀事。附錄に行狀を載す。正德二年壬辰(一三七二)源綱條の序、元祿十年丁丑(一六九七)安東守約の序等あり。

◎朱舜水は明の浙江餘姚の人にして、名を之瑜、字を魯屼といふ。學六經を究め、殊に毛詩に長ぜり

慣軒と號す。小比叡翻宜從四位に任叙せらる。最も詩に長じたり。其の家稿十卷天覽に入りて叡賞を賜りたることあり。安政四年丁巳(一八五七)二月十七日、八十二にて歿す。門弟等文煥先生と謚す。

しゆんせうのうらくきだん

春笑能樂奇談　三卷　清川　山住

無雜助、風來、分明權助なと云へる假人を出して、滑稽諧謔の作話をものしたるなり。十返舍一九の彌次郎喜太の膝栗毛に擬へて作りたるなりと云ふ。

しゆんせつかいわ

春雪解話　二卷　新井　堯民

方法曆法等を述説したるもの。天保十五年甲辰(一八五四)の自序あり。

◎新井堯民は晴湖と號す。本書の外に、梧坡攷讞、民家童蒙解、談錄瓮錄、龍背師傳圖說、龍背狡祕等を著せり。

しゆんせんしさう

春川詩草　四卷　川合　孝衡

著者の詩集。天明二年壬寅(一七八二)龍公美、岡崎信好等の序、及び兒玉寄雄の跋あり。同年版行す。

◎川合孝衡は美濃の人、字を選平、通稱を丈平、號を春川といふ。儲を龍草廬に學び、文章を以て知られ、紀州侯に仕へて儒官となる。著書には二禮說統、周禮圖解考工記、圖官疑疑、儀禮釋、宮圖解、讀韓文法、五禮類纂、國朝詩龍作文圖鑒、勢遊草、梅花月百絕、帝王承統譜、鶴樓文集、及び春川詩草等あり。文化年中、七十餘歳にて歿す。

しゆんせんよじ

春薦餘事　一卷　頼　綱

萬延元年庚申(一八六〇)熊谷鳩居堂追薦の爲め、同志相會して書畫展覽會を開く。本書は其の列品珍物を列記したるものなり。同年靜逸山中獻の引、立齋頼綱の跋あり。

しゆんそうろうわ

春湊浪話　本二卷　土肥　經平

歷史、家記、物語、讀經、名稱等の考語及び其の他の雜事を記したる隨筆なり。凡て七十條あり。前年の冬、老の集覺に書きたりしを、春になりて、淨書し、假める湊に迎ふ、ころにて書名とせし由、安永四年乙未(一七七五)の自跋に見えたり。明治十八年乙酉(一八八五)出版す。

◎土肥經平の傳は「甲冑威毛色目」の下に出づ。

しゆんたいじやうしよ

春臺上書　本一卷　太宰　純

天變地異の事を說き、人君たるものは戒愼して萬機に心を用ひさるべからざる事を論じて、時の老中黒田豐前守直邦朝臣に建白したるものなり。享保十八年癸丑(一七三三)のことなり。

◎太宰純の傳は「經濟錄」の下にあり。

しゆんだいどくご

春臺獨語　本二卷　太宰　純

著者の假名文隨筆なり。歌學、茶道、俳諧、琴、三絃、謠、淨瑠璃、猿樂、衣服、其の他の事を考述考證したるものなり。

◎太宰純の傳は「經濟錄」の下にあり。

しゆんてうだん

春鳥談　一卷　慈舍　半藏

蠶の飼養法を評論したるもの。蛭の辨、疫病の方、瘟病の法、師弟の事より成る。弘化二年乙巳(一八四五)出版す。

しゆんでんじつじつき

旬殿實々記　十二卷　瀧澤　馬琴

簡獨義猿の奇譚を旬殿兵衛に擬して綴り成したる小說なり。而して勸善懲惡を以て著作の用意とすることは著者自らも端書に辨じ置きたり。光格天皇の文化五年戊辰(一八〇八)仲夏の自序及び杏林百凝の序あり。

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

じゆんてんだうさんぷ

順天堂算譜　二卷　岩田　清甫

福田一派の自證問題五つ神社に掲げたる算題等の問答を集め、各答術を附したるもの。全卷中値に點竄問題を辨へたるも、概して四理問題なり。弘化四年丁未(一八四七)の梓行にかゝる。

◎岩田清甫は七平と稱し、實齋と號す。播州廣田の人にして、福田理軒の門人なり。本書は福田理軒總理と爲り、門人諸氏が漸く集めて大成せんとして、先づ其の二卷を成したるものなり。故に池田、小林、川合等の編校等に係るものとす。

じゆんさくのゐんおんひやくしゆ

順德院御百首　本一卷　順德天皇

四季雜の御百首にて、後鳥羽院の御點、定家卿の點及び判詞あり。嘉禎三年丁酉(一二三七)定家、以旨目染奏筆了」の奥書あり。

◎順德天皇の御傳記は「禁祕抄」の下にあり。

じゆんさくのゐんおんひやくしゆ

順德院御琵琶合　一卷

承久二年庚辰(一二二〇)三月二日、行はせられたる琵琶合なり。部合十三番より成れり。「群書類從」卷三百四十九、管絃部第十に收めたり。

じゆんさくのゐんおんぴはあはせ

順德院御琵琶合　一卷

承久二年庚辰(一二二〇)三月二日、行はせられたる琵琶合なり。部合十三番より成れり。「群書類從」卷三百四十九、管絃部第十に收めたり。

じゆんてんだうさんぷ

順天堂算譜　二卷　岩田　清甫

福田一派の自證問題五つ神社に掲げたる算題等の問答を集め、各答術を附したるもの。全卷中値に點竄問題を辨へたるも、概して四理問題なり。弘化四年丁未(一八四七)の梓行にかゝる。

◎岩田清甫は七平と稱し、實齋と號す。播州廣田の人にして、福田理軒の門人なり。本書は福田理軒總理と爲り、門人諸氏が漸く集めて大成せんとして、先づ其の二卷を成したるものなり。故に池田、小林、川合等の編校等に係るものとす。

じゆんさくのゐんごしふ

順德院御集　三卷　順德院

一名「紫禁和歌草」といふ。上卷は建曆元年辛未(一八七一)三月の五十首より、下卷は建保四年丙子(一二一六)正月十九日の御歌より、凡そ數百首あり。末に沙彌明靜、その他の寫本の奥書あり。「續群書類從」卷四百二十四、和歌部第五十九にも收む。

◎順德院の御傳は「禁祕抄」の下にあり。

じゆんさくのゐんごそくゐき

順德院御卽位記　本一卷

承元四年庚午(一二一〇)十二月二十八日御卽位の記なり。卷末永正七年庚午(一五一〇)の奥書に「右卽位記一卷者光明峯寺禪閤自筆正記也」と記せり。「續群書類從」卷二百七十三、公事部第二十六に收めたり。

じゆんさくのゐんじんしんひやくしゆ

順德院壬辰百首　本一卷

貞永元年壬辰(一二三二)の御會百首なり。法皇の墨點と定家の朱點とを併せ付したり。さかせわたる春の氷のひまをあらみ、あらはれ出づるにほのした道」より、「いくち代のかけとか神もちぎりけん、ふるのやしろの杉の下風」に至る百首なり。末に「丁酉歲應鎭月以旨目染筆候沙彌明靜上」とあり。「叢書料本」第一に收めたり。

しゆんばろうひつき

春波樓筆記　一卷　司馬　江漢

著者の感懷見聞等を輯錄したる假字文の隨筆。春波樓は著者の號なり。文化八年辛未(一八一一)十月の作。「近刊百家說林」第五卷にも收めたり。

◎司馬江漢の傳は「世間西遊譚」の下に出づ。

しゆんびせう

俊祕抄　本二卷　源　俊賴

和歌の評論なり。壽永二年癸卯(一一八三)八月二日、紫金臺寺に於て見合子の奥書あり。著者源俊賴の傳記は「金葉和歌集」の下にあり。

しゆんむさう

春夢草　三卷　牡丹花肖柏

著者の歌集。最初に百首を載せ、次に部立あり、卷末に三愛記を附したり。著者牡丹花肖柏の傳は「伊勢物語肖柏抄」の下にあり。

しゆんめいこうふ

凌明公譜　本一卷

德川十代將軍凌明院家治一生間の年譜なり。

じゆんやういかう

純陽遺稿　三卷　前田　道伯

著者の遺稿を集めたるもの。卷末に餘承裕が撰したる著者の墓碑銘を附したり。安永五年丙申(一七七六)源師道の序あり、同七年刊行す。

◎前田道伯は小字を銅丸といひ、後ち哀長と改め、純陽と號す。家世々醫を以て宇土侯に仕へたり。秋山玉山、服部南郭等に就きて儒を學び、又詩に長ず。寶曆九年(一七五九)七月晦日歿す、年四十七。

じゆんやだん
春夜談　五巻
思ひに浮び、見もし聞きもしたる事ども何くれとなく書き記したる假字文の隨筆なり。別に著者の名を記さず。卷末に「常陽筑波山の麓なる閑居のすさびなりしが、其後行脚して、享和二つのとし〔一八〇二〕彌生の下旬九重の望西樓に綴り捨ぬ」とあり。文化二年乙丑〔一八〇五〕上梓す。

じゆんれいきうしんしき
巡禮舊神祠記　木一巻　宮田　泰好
諸國の神祉を巡拜して各祉の所在神、祭神、神主別當等を列記したるもの。甲斐國にて二十座。相模國にて十三座、武藏國にて四十四座、安房國にて六座、上總國にて五座、下總國にて十一座、常陸國にて二十八座、遠江國にて六十二座、下野國にて十一座、出羽國にて九座、陸奥國にて一百座等を記す。寶暦十四年甲申〔一七六四〕成る。
◎宮田泰好は下總國相馬郡文間領布川庄押戸村蛟鋼神社の祠官なり。

じゆんれいみちしるべ
巡禮道志留邊　一巻
西國三十三番の觀音緣起を記したるものなり。稀珍一册に作らる。

じゆんわてんわうそくゐき
淳和天皇卽位記　木一巻
弘仁十四年癸卯〔一八一三〕四月二十七日、皇帝大極殿に於て卽位し給ふ。本書は當日の儀式を略記し末に宣命文を掲ぐ。「續群書類從」卷二百七十一、公事部第二十四に「淳和天皇御卽位記」として入れたり。

しよあんくづし
諸幅圖會　木二巻
裂布、內辨幅、外辨幅、年中行事大臣大饗、同中宮大饗、庭座幅、釋奠大學寮座幅、石山寺緣起圖、圖雜圖、其の他幞幅諸種、幅帋、幅骨等近く文化文政御卽位川の分までを圖せり。皆彩色を以て寫し尺寸も記せり。

しよあんくづしふ
諸幅圖集　木一巻
文政元年戊寅〔一八一八〕大嘗會小忌幅圖以下、諸幅を彩圖し、且說明を加へたるものなり。

しよあんにつき
諸鞍日記　木一巻
移鞍の事、御幸鞍の事、唐鞍の事、水干鞍の事、前駈鞍、大和鞍等の名目を解說せり。著者伊勢貞丈の「諸鞍日記考註」を、增訂したるもの。鏡鞍、金鞍、黃地鞍、銀鞍、白鞍、龜甲地鞍、沃懸地鞍、水晶地鞍、蒔繪鞍、梨子地鞍、瑪瑙鞍、角伏輪鞍、螺鈿鞍、螺鞍、綠螺鈿鞍、鉢鞍、黑地鞍、白橋鞍、平文鞍、遠文金具鞍、走馬鞍、雜鞍、女鞍、張鞍、鹿鞍伴野鞍、赤漆鞍、海無鞍、總革鞍、繰革鞍、布衣鞍、鐵鞍、作鞍、打鞍、小鞍、以上三十六品を說錄す。文化二年乙丑〔一八〇五〕の自跋あり。
◎本多忠憲の傳記は「鞍具文字小集」の下にあり。

じよあんほんざうかうもくぶん
怨庵本草綱目記聞　木四巻　松岡　玄達
水火土金石草穀菜果、木服器蟲鱗介禽獸等に分ち、更に細目をあげて考訂したるもの、門人甲賀敬元、熊谷玄圓、江村如圭等の同校する所にして、他說には、稻若水、貝原篤信、堀元厚等のものを引用す。
◎松岡玄達の傳記は「櫟品」の下にあり。

じよあんほんざうきぶん
怨庵本草記聞　木四巻　松岡　玄達
「本草綱目記聞」を內題して、水土金草穀菜果木服器蟲鱗介禽獸等の名詞を列擧して、註釋したるものなり。

◎松岡玄達の傳記は「櫟品」の下にあり。

しよいうへん
庶有編　一巻　松平　定信
著者在官中財政經濟の事を論述したるものなり。末に「天明年間識之」とあり。「樂翁公遺書」上卷中に收めたり。
◎松平定信の傳は「花月草紙」の下に出づ。

じよゐき
敍位記　木一巻　萬里小路惟房
敍位の次第を記したるもの。卷末に、「右原本者、唐之裏書之牛切小卷物也、萬里小路惟房卿自筆也、以件逢手寫了、右京權大夫賀茂縣主清茂」とあり。
◎萬里小路惟房は「惟房公記」の下に傳せり。

じよゐちもくせう
敍位除目抄　木一巻
敍位及び除目に關する事を記述せるもの。永享十一年己未〔一四三九〕三月二十七日、同四月三日等の奧書あり。

しようあき
松亞記　木一巻　忠　嗣
著者の日錄。貞和五年己丑〔一三四九〕正月、二月、三月、六月、八月、九月、十月、十一月、十二月等の記なり。延文六年辛丑〔一三六一〕三月二日二位藤原長顯書寫の奧書、永享七年乙卯〔一四三五〕八月九日某の奧書等あり。著者忠嗣は前大納言にして、松殿と稱せり。

しようあんひつご
松庵筆語　木一巻　今井　敏卿
寶暦十三年癸未〔一七六三〕朝鮮の信使來聘の時、正使及び三書記等と、東本願寺にての筆談を錄したるものなり。
◎今井敏卿は子愼と字し、松庵と號す。其の先は近江源氏より出で、高祖父の時江戶に移り、三世相繼ぎて醫を業とす。松庵は松崎雜貼の門に入りて儒を學べり。

しようあんしご
稱謂私言　一巻　尾藤　孝肇
名分稱呼の事數十則を辨說したるものなり。寬政十二年庚申〔一八〇〇〕の自序を附して發行す。
◎尾藤孝肇は字を志尹、通稱を眞佐といひ、二洲、約山また靜寄軒と號す。もと伊豫川江村の人なり、はやく大阪に出でて片山北海に儒學し、頼春水、中井竹山、同履軒と相親しく、古學を講習し、また洛陽を研究す。寬政中昌平黌の教官となり、祿二百石及び邸宅を賜る。著書には、素餐錄、正學指掌、中庸圖解、易傳廣義、論孟講旨、學庸衍目、國學指要、靜寄餘筆、靜寄餘著、靜寄軒文集、文章一隅等あり。文化十年癸酉〔一八一三〕年六十九にて歿す。

じよういちじゆつかい
剩一術解　木一巻
剩一術の問題解術を擧げたるもの。卷首に「剩は餘なり。一をあます術なり。又剩一の反するものを腦一と云。腦はまゝまるなり。これは一を缺くなり。剩二腦一、源一術にして只式の正負に依て變するのみなり。故に剩一を以て術の題號とす」とあり。

しようういんだん
松陰醫談　一巻　雨森　宗眞
名醫評家の、著書議論等につきて、其の實否利害是非損益等を評論したるもの。寬政元年己酉〔一七八九〕門人長岡宗宅の序あり。同十二年出版す。
◎雨森宗眞は越前の人、大野の醫官たり。牙卿と字し、松陰また半南と號す。山本北山に就きて經史を學び、また醇を善くせり。著者は、本書の外に、松陰春秋、半南子、論語質說、詩說蒲鞭、筆耒、萬日紀行等あり。文化十二年乙亥〔一八一五〕十二月、六十歲にて歿す。

しよういんかう
松陰薬　本一巻　僧　琴齋
著者の詩集なり。文明十四年壬寅(一四八二)村庵銭彦の序、同壬辰村庵より、琴齋、梅陽に贈る書を掲ぐ。

しよういんかんご
松陰閑語　本十一巻　阿川　義康
諸事の考證に關する隨筆なり。吉書始考、神前帶劍考、矢口餅考、亥猪餅考、私淑考、以下數十項、或は古言を、名稱を、或は事實を、形色を、或は年代系圖、又は書史註解等の事を考證したるものなり。著者阿川義康は伊勢國安濃津の人なり。和學を以て知らる。

しよういんぎんかう
松陰吟稿　本二巻　僧　松陰
著者の詩稿なり。各體雜載數百數を掲ぐ。「續群書類從」巻三百四十六上下文雜部第三十に收めたり。

しよういんしご
松陰私語　本五巻　僧　松陰
永正年間の關東の騒亂を記し、殊に新田國繁の事績を記せり。今見るところ目錄は具存すれども、本文には闕脫多くして頗る讀み難し。

しよういんしふ
松陰詩集　二巻　吉田　松陰
嘉永七年甲寅(一八五一四)九月十八日出獄して、十月二十四日歸國する時の詩、即ち出獄歸國之間雜感五十七解より以下、凡そ年次を以て著者が當年の作を輯む。口羽愛庵、僧月性等の評あり。明治十六年出版す。
◎吉田松陰の傳記は「講孟劄記」の下にあり。

しようううんさんご
湘雲瓚語　本三巻　祇園　瑜
本書の大體に就きては自序中に云へり。曰く、五代に馬瓚といふものあり。府幕となる。其の人爺懃にして聞見することあり、他人已に厭熟せり、而してなし、之れを道ふ。故に事の陳腐己れ前めて新奇となし、之れを壁と謂ふと、劉貢父が詩話に見えなるもの之れを壁と謂ふと、劉貢父が詩話に見えたり。予、書を讀で事の奇なるもの味あるもの、法とるべきものに逢ひて、一時遺忘を恐れ、遂に錄して以て之れを藏す。如し人の觀るものあらば、必ずや予を笑ひて馬瓚となさん、固て名けて瓚語といふ」と。以て其の性質、題名の由來等を知るべし。
◎祇園瑜の傳は「一夜百首」の下のあり。

しようえいおんかがみ
松影恩鏡　一巻　清水　春齋
心學の教訓書なり。天保十五年(弘化元年)甲辰(一五〇四)に刊刻す。著者清水春齋は別に「三道一致心學辨」を著せり。

しようえいぶかん
昇榮武鑑　二巻
德川氏時代に於ける江戸武家の姓名石高、紋所、太刀飾、花押、家老、用人等を列記せり。姓名のいろは順に排列す。天保十二年辛丑(一五〇一)新版の袖珍本二册なり。

しようえいぶんさう
松永文草　十巻　村松　貞吉
著者の詩文集。巻一に擬古樂府百九十首。巻二に五言古詩四十四、七言古詩八。巻三に五言律九十五、五言排律六。巻四に七言律二十八、五言絶句二十二、七言絶句四十九、六言律二、六言絶句二、賦一首。巻五に序十三、願辭七。巻六に記九。巻七に傳九。巻八に家譜一、墓碑銘二、祭文三、銘十三、讚四、雜二。巻九に張湯治風一、田樽三十九、誄樽二百五十。巻十に書牘三十九篇を收む。安永三年甲午(一七四三四)出版す。
◎村松貞吉は越後の人、字を士博、通稱を與右衛門、蓋溪と號す。服部南郭に學びて儒學者となり、寶曆中高田藩に仕ふ。著書は此の外に「儀禮圖」あり。天明七年丁未(一七八四)五月七十三にて歿す。

しようえふめいしよわかしふ
松葉名所和歌集　十六巻　宗　惠
我が諸國名所に關する和歌を類聚したるもの。名所類字和歌、類字名所和歌集、類字名所和歌集拔書、類字名所補翼抄、類字名所外集等に遺りたるものを數十の歌集物語等に搜索したるなり。萬治三年庚子(一六六〇)の編にかゝる。同著者の續松葉集四卷、尾崎雅嘉の增補松葉名所和歌集八卷、同新松葉名所和歌集二卷等あり。そは其の名の下に解題すべし。
◎宗惠は六字堂と號す萬治(一六五八—一六六〇)

中の人にして、和歌を善くし、また連歌に巧なり。

しようえんしふ
松緣集　本一巻　僧　堯慶
和歌に關する事なれば何くれとなく筆書になしたるもの。中には歌の病、歌題の時節、歌集、かなづかひ、かけ詞、十二月花鳥次第、名所等の事、其の他種々雜多の事を記せり。永正四年丁卯(一五〇七)五月に書きたるなり。

しようえんはふげんき
勝延法眼記　本一巻
此の書は東寺大行事を記せる寫傳殘闕本のなり。

じようおういじ
承應遺事　本一巻
後光明天皇の逸言遺行を書き記したるもの。「史料叢書」の中に收められる。

じようおうぐわんねんしやうがつおんしき
承應元年正月御式　本一巻
承應元年壬辰(一六五二)正月は、德川四代將軍家綱が職を繼ぎし最初の正月にして、其の元日より二十九日までの儀式を記したるなり。

じようおうじんじのうひやうばん
承應神事能評判　本一巻　秋扇翁
承應二年癸巳(一六五三)九月十八日、江戸神田明神に於て、神事能ありしを、觀て評判したるもの。

本書に著者の名は記されざれど、萬治元年の「舞正語磨」(秋扇翁の著)の中に、承應二年九月十八日に江戸神田の明神の神事能の評判に書きあらはし侍りぬれば、今さらいふに及ばず云々とあるによりて、其の翁の作なるべき事を知る。著者秋扇翁は別に「舞正語磨」二巻を著せり。

しようおうだうわ
松翁道話　三巻
心學の教訓書なり。神儒釋老の格言より、狂言綺語固緣俗談に至るまで巧に應用して說教すること親切なり。文化十一年甲戌(一八一四)平安手島堵庵男正揚の序、鎌田魯の跋あり。
◎布施矩道は伊布御門と通稱し、松翁と號す。京都松原の邊りに住たり。石門の教を信じ富岡に就て性理學を極めたりといふ。

じようおうなんちん
承應難陳　本一巻
慶安五年壬辰(一六五二)九月十八日、承應と改元する時、日野新中納言弘資正親町右宰相中將實豐以下諸卿の年號難陳を列擧したるものなり。

じようおうにねんしやうぐんせんげおぼえがき
承應二年將軍宣下覺書　本一巻
承應二年癸巳(一六五三)八月三日、德川四代家綱が右大臣に轉任の時の記。片假字にて記されたり。

じようおうにねんねんぢうぎやうじ
承應二年年中行事　本一巻
承應二年癸巳(一六五三)九月十八日、江戸神田明神に於て、神事能ありしを、觀て評判したるもの。

じようおうぶるるせう
承應武鑑　一巻
承應年間の萬石以上及び諸役人の賜邸家紋等を記したるもの。同元年壬辰(一六五二)十月、上木す。

じようおうぶかん
承應武鑑　本十冊　壺井　松翁
「神事部類抄」と同書なり。十冊の中表題を異にして、「松翁部類抄」ともいへり。

しようかうきんたいしよへん
松江近體詩初編　五巻　小西　績
巻一に五言律、巻二に五言排律六言絶句、巻三に七言律、巻四に五言絶句、巻五に七言絶句を收錄す。寛政五年癸丑(一七九三)後應道、太田象、香山彭の序、同七年菅原胤長、細谷方明、柚木太淳、菁川篤、釋顯常等の序、松本愚の跋あり。
◎小西績は與右衛門と稱し伯熙と字し、松江と號す。丹後國熊野浴の人にして、詩を善くせり。

しようかぶげごしよ
諸侯下知書　本一巻
近年御代官、所役人等の諸侯及び諸下知書等を輯錄す。

しようかしふ
松下集　本一巻　僧　正廣

著者の歌集。正徳二年庚戌(一七一二)正月朔日試筆の早春雑の歌以下数百首を収む。著者正廣のことは「正廣日記」の下にあり。

しようかせう 松下抄 一巻

聴雪の歌集を註したるもの。聴雪は後柏原院の御師範にて歌道は道遠院實隆に學び、後遁世して我が家の奥に山里と號し大松の下に庵を作りて住したりといふ。嘗て永正の比道遠院實隆より三十首の歌題を得たるに、其のうち山里の題にて「山にてもうからむ時の隠れ家や、都のうちの松の下庵」とよみたるに一入感じて此の抄を作れりとなり。

しようかん 訟鑑 本 七冊

徳川氏時代の訴訟事件の處断書付類を蒐録したるものなり。

しようがんだうぶんせう 松巌堂文抄 本 一巻

著者の詩と文とを編集したるものなり。文数編詩数十種あり。著者及び年代詳ならず。

じようきういくさものがたり 承久軍物語 六巻

承久乱の顛末を記したるものなり。「群書類従」巻三百七十、合戦部第二に収入す。

じようきうき 承久記 二巻

承久三年辛巳(一二二一)に後鳥羽院、北條義時を征討せんことを謀り給ひしも、事成らずして、終に義時等の爲に隠岐國へ徙され給ふに至りたる顛末を記したるものなり。

じようきうへいらんき 承久兵乱記 二巻

承久乱の顛末を記したるもの。後鳥羽院の御寵臣朝昇進並に藐姑射の事、義時追討御評定の事、光季親廣被召事、官兵攻光季事等より、一院隠岐國被流給ふ事、廣綱子息被切事、胤中院被移阿波國給ふ事等の目に至る凡て三十六目より成る。「続群書類従」巻五百七十二上下、合戦部第二にも収めたり。

じようきうろく 承久錄 六巻

後鳥羽院、武家討伐を思ひたちて却て敗れたまひたる承久乱の始末を記したるものなり。

しようきんでふ 繍錦帖 二折 頼 襄

山陽の筆蹟草書臨本なり。明治十年適所僻の跋、同年近藤真の自作詩なり。明治十年適所僻の跋等あり。

◎頼襄の傳記は「日本外史」の下にあり。

しようくわたうしやうにんぎやうげふき 松花堂上人行業記 本 一巻

佐川田昌俊

南山湛本坊阿闍梨昭乗(松花堂上人)の行狀を記述したるもの。文政十年丁亥(一八二七)石井至穀の寫本による。

◎佐川田昌俊の傳は「惺々翁行狀」の下にあり。

しようけいあんししふ 松桂園詩集 七巻 陰山 雍

體を分ちて著者の詩を輯録したるもの。文化五年甲子(一八〇四)六月、後鳥羽天皇、前大相國頼實の郷第に臨幸し給ひて行はせられたる蹴鞠御宴の次第を詳叙したるものなり。「群書類従」巻三百五十三、蹴鞠上にあり。

しようけいしふ 松桂集 二巻 僧 志岸

著者の家集。享和元年辛酉(一八〇一)村瀬之熙、釋蒿蹊等の序を附し、翌二年發行す。

じようげんおんまりのき 承元御鞠記 一巻

承元二年戊辰(一二〇八)四月十三日、後鳥羽天皇、前大相國頼實の郷第に臨幸し給ひて行はせられたる蹴鞠御宴の次第を詳叙したるものなり。「群書類従」巻三百五十三、蹴鞠上にあり。

じようげんせう 承元抄 本 一巻 藤原 定家

歌學上の注意を記したるもの。巻首に「或る人歌は如何やうによむべきものぞと問はれて侍りしかば、おろかなる心に、僅に思ひ辨ふることを書き付け侍りしいさゝかのよしもなく、只ことばに書きつゞけて侍る。見苦しけれど、たゞ思ふまゝの事なり」云々とあり。弘長二年壬戌(一二六二)九月、桑門融覚(爲家の法名)の奥書には、「承元之比、自二征夷將軍一依レ被レ尋、先人所二注進一之秘本也」とあり。

◎藤原定家の傳は「拾遺愚草」の下にあり。

しようげんだいふけい 松源大譜系 本 十九巻

松平家の先祖より、結城松平大和守直矩に至る略系譜なり。別に圀紳二巻あり。参河松平十八家、附二十四家の事より松平諸家從の事等を掲ぐ。

じようげんにねんとうぐうごげんぷくき 承元二年東宮御元服記 本 一巻

承元二年戊辰(一二〇八)十二月、東宮(順徳院)御元服を記し來れるもの「長兼記」の抜抄か。元禄十三年庚辰(一七〇〇)書寫の奥書あり。「續群書類従」巻二百九十四、公事部第四十七に入れたり。

しようこうはつ 衝口發 本 一巻 藤井 貞幹

我が古代の諸事を論述せるもの。皇統、言語、姓氏、國號、紳璽、年號、容飾、衣服、喪葬、祭祀、拍手、和歌、詩賦、國史、制度等に類次し諸書を引きて辨明せり。天明元年辛丑(一七八一)七月の著にかゝる。

◎藤井貞幹の傳は「逸號年表」の下にあり。

しようこしへん 稱呼私辨 一巻 富岡 百錬

我が稱謂のことにつきて辨説したるもの。巻端に「稱謂名義鄙者流、尤不可不用意焉。是之不レ愼、書法濫稱妄呼、或有二渉僭擬一、乃誤人之嫌豈淺々也哉。今僅撮二抄一二先哲之説一以作二一册子一、我猶之子孫當二擇取一焉」といへり。元治二年乙丑(一八六五)出版す。

◎富岡百錬は京都の人にして、字を飫輔、號を鐵齋といふ。世を遊くす。性洒落爽快にして、仙骨あり。石上、大島等の大宮司に任じ、正七位に叙せらる。

しようこぶるひつ 松戸隨筆 二巻 僧 性均

著者の漢文隨筆にして凡て八十五篇あり。享保十五年庚戌(一七三〇)の夏、總州松戸村の別墅にあるを時、見聞所感によりて隨筆したるを、統數篇次等に意なくして筆録したるものなりといふ。刊筆は享保十七年壬子(一七三二)の跋ある故、これは寛延元年戊辰(一七四八)出版せり。

◎性均の傳記は「新撰發心傳」の下にあり。

しようこべん 稱呼辨 一巻 奈佐 勝皐

我邦より支那を指して、中國中華等と稱するは、甚しき僻事なるよしを論じたるものなり。著者奈佐勝皐の傳は「管絃相成義」の下にあり。

しようしじつくぎろんき 勝宗十句義論記 二巻 僧 嚴藏

本書は「十句義論」を註釋したるもの。其の解釋には間々杜撰誤謬あることは、先哲の既に評破せし所なり。天明三年癸卯(一七八三)に刻成す。著者嚴藏の傳は未だ詳ならず。

しようしじつくぎろんき 勝宗十句義論記 本 二巻 僧 法住

印度衛世哲學派の「十句義論」を註釋したるもの。倶舎唯識因明三論天台眞言等各宗の諸書中に斯派の主義を記述したる箇處を輯録し、加ふるに著者の考按を以てして本書を作りたるなり。本書は「十句義論」の註釋の嚆矢にして、寛暦二年壬申(一七九二)正月に初稿を成し、同八年六月に修訂完功したりと云ふ。

◎法住の傳は「管絃相成義」の下にあり。

しやうしやうじつくぎろんけつちやく
勝宗十句義論訣擇　五巻　僧　快道

「十句義論」註釋書の随一、而も其の翹楚たるもの。經律論の三藏及び三論唯識因明等の諸書を考據引證し、諸家の說を集成し、其の誤謬をも訂正し、以て原論の主意、註釋の是非、他敎との關係等を詳確に辨明せり。安永七年戊戌(一四三八)に成り、寛政八年丙辰(一四五六)刊行す。

◎快道の傳は「俱舍論法義」の下にあり。

しやうしやうじつくぎろんしやく
勝宗十句義論釋　二巻　僧　基辨

「十句義論」の註釋にて俱舍唯識因明等の諸書を引證し、著者の考按をも加へたり。然れども其の解釋に杜撰誤謬多く、「勝宗十句義論訣擇」「勝宗十句義論釋傍觀錄」等に駁えれを評破せり。安永二年癸巳(一四三三)に成り、同八年秋刊行す。

◎基辨の傳は「渓語八轉聲」の下にあり。

しやうしやうじつくぎろんしやくぼうくわんろく
勝宗十句義論釋傍觀錄　附一巻　僧　光嚴

大同坊基辨の「勝宗十句義論釋」の誤解を摘評正したるものなり。著者光嚴は高野山の僧なり。

しやうしやうじつくぎろんそうりん
勝宗十句義論叢林　附一巻　僧　快道

佛敎諸書中の勝論哲學に關する文句を抄錄したるもの。卽ち「唯識述記」「因明大疏」「了義灯」「唯識演祕」「華嚴支談」「因明入正理論疏」等より採りたり。この派哲學の研究に便宜なること、「因明海鏡」の因明學に於けるが如し。

◎快道の傳は「俱舍論法義」の下にあり。

しやうしやうしふ
鍾秀集　一巻　祇園　瑜

諸友人の詩を採輯したるものなり。自序、寛政十年戊午(一四五八)草野意儒の序あり。同人の校正するところなり。由惟恭同年の跋を附す。

◎祇園瑜の傳記は「一夜百首」の下にあり。

しやうじかう
勝事考　附二巻　梅津　方昌

草木圖編の後編を完成したるもの。藤掛似水の遺業を襲ぎて作りたるなり。杜子美の詩の「多勝事」の句によりて名を成せる由序中に見えたり。享保元年丙戌(一三七六)男濱野移水の序跋あり。著者梅津方昌は通稱を貞四郎といひ、如城と號す。

しやうしやうしふ
鍾情集　一巻　服部　惟恭

著者の詩集。其の殁後親友熊元瑚之れを編輯し、交情の深密なりしにとりて殊に鍾情集と名けたりといふ。卷首に父南郭の撰したる墓誌祭文の二編と、哭詩四首とを掲げ、次に惟恭の遺稿九十五首を收めたり。末に諸友の吊詞を附す。

◎服部惟恭は服部南郭の次子なり。字を愚卿、通稱を辰之助といへり。父に肖て才藻卓絕なりしも、元文五年庚申(一四〇〇)痘の爲めに死せり、年十七。

しやうじやうつうき
松城通記　附十巻　桃井　友直

信州松代眞田氏の事績を記したるもの也。第一卷に眞田氏元祖貞元親王より海野小太郎幸氏までの事を、第二卷に中興眞田彈正幸隆より源太左衞門尉信綱までの事を、第三卷に安房守昌幸傳を、第四卷第五卷に伊豆守信幸傳を、第六卷に大內記信政傳を、第七卷に伊豆守孝道傳を、第八卷に左衞門佐信繁傳を、第九卷に累代の盛狀證文、第十卷に信州埴科郡松城の事績を擧げたり。享保十八年癸丑(一三九三)の自跋あり。此の書もと「滋野世記」と題して二十卷ありしを、其の第一卷より第十卷までを取りて「松城通記」としたりしと。今、十卷三冊に寫傳せり。著者桃井友直は信濃國松代(眞田氏)に仕へたるものにして、又七郎と稱せり。

じやうしやうめいじ
丞相名字　附一巻

歷代大臣の名をいろは四十七字に分類して搜索に便したるものなり。

しやうしんびやうくわ
稱心病課　一巻　僧　元政

著者嘗て稱心庵の病床にありて錄出したるところの詩を輯めたるものなり。陳元贇の批評あり。近來「聖凡唱和」と合せ行へるものあり。

◎元政の傳記は「扶桑隱逸傳」の下にあり。

しやうしんろく
證心錄　三巻　東　正純

心性の理、及び、中庸の要旨、儒家修學の工夫等より、治國平天下の要道に至る諸論述を編成して、著者證心の具としたるもの。卽ち嘗て自ら撰著したる論文、又は門生等の問學に答へたる書牘、若くは語錄等より成り、類別して、說、解、書、語の四とす。上卷に說十一首(性二編、中和二編、致良知三編、易四編)。解十三章(大極圖說、朱陸、王門諸說、慎獨、管仲、孟子、告子、死生、出處、封建、郡縣、宋儒、老佛、各一編)。下卷に、書二首(答某問目二編)。語六十條(上下編に分ち、各編三十條)。上下卷の外一卷を餘錄とし、說六首(居敬、窮理、靜座各一編、讀書二編、仁義禮智一編)。解三章(敎養、蘧廬選錄、兵農各一編)。書二首(啓問某生、與某生各一編)。語二十五條(上下編に分ち、上編に十三條、下編に十二條)等なり。本書は著者の最も心血を注きたる著書の一にして、議論の深奥、措辭の嚴確なること、他に比類少し。欄外に栗栖天山の評語あり。天山は夙に英後の資を抱き著者勤王の擧に同意し、遂に其國事に死す。而して、其の書の傳ふるもの少ければ、此の評は、適以て其の學を知るに足るべし。餘錄の後に「天山遺事」あり。同じく著者の筆に成りて、天山の實傳たるべきものなり。本書は慶應二年丙寅(一八六六)晩秋の作にして、普通三卷を二冊に製本せり

◎東正純は防州岩國藩吉川氏の家臣にして、天保三年壬辰(一四九二)十月に生る。通稱は崇一郎、白沙、迂悔子、水月道人、蘆邸主人、陳梗主人、澤瀉等の號あり。就中晩年の白沙と、暁年の澤瀉とは最も

しやうそ
しやうそ

世人に知られたり。幼にして、豪邁活潑、動もすれば學に就かざらんとす。然れども一朝其の志の學に向ふに及びては、直に全幅の熱誠を以て突進せり。其の性の凡ならざること夙に其の兆ありしと謂ふべし。初め同藩二宮錦水の社中に學び、後、東遊して佐藤一齋に從學し、轗て其の高弟吉村秋陽、安積艮齋、大橋訥庵、及び池田草庵、山田方谷、門田朴齋等と交際あり。故を以て友たり。月田蘭齋、木下韋村等とも交際あり。故に其の修業の沿革は、禪に入り儒に復り、竟に陽明學の領袖たるなり。後年、門人に語りて、我れ初め朱王の學に決せず、頗る劉念臺の折衷を喜びたりしも、後、見る所ありて、一に意を陽明に歸せり。念吉慶應中同志と力を國事に盡し、天由制腕、五竹處刑のことありしも、著者は絕食十餘日、死期已に一至るも君命あつて死することを得ず。王政一新始めて歸鄉することゝなれり。世上風雲尚安んせざるものあるも斷然高蹈隱遯して遂に保津村に地を卜し、澤瀉に藥を開き徒を集め家學を傳ふ。千里笈を負うて來り從學するもの輻輳す。予の不肖も嘗て數年同門に遊び、親しく其の敎導を受けしことあり。門人の中、世に知られたるもの少からず。著書には、靜心錄、儒門醒齋、學庸正文、論孟撮說、周易要略、近思錄參考、傳習錄參考、疇海翻瀾、國史臆說、三備遺規、鄰延、平事略、文章訓蒙、澤瀉文約、百人一首一讀笑、新庄日記、鵜窟雜誌、風雅餘

しやうそうざつき
松窓雜記　附六巻　關　修齡

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

しやうぜんあんきしふ
勝善安驥集　附九巻　稻垣　圭馬

療馬法の傳書なり。脈論針灸、應治秘口等にて九病八十一疾の驗方等を記せり。安永(一四三二—一四四〇)年間馬場隆藏(輿へたるものなりといふ。

しやうせんじやうしあきのなゝくさ
松染情史秋七草　七巻　瀧澤　馬琴

楠氏に擬して阿染久松情死の事を作りなしたる小說なり。端書に曰く、此書寫に細々要記糢靈記吉野拾遺南朝記傳等の諸說を據として、はじめに楠氏の事績を述ぶるといへども、亦彼三楠實錄楠戰功實錄楠家全書等の趣と同じからず。其の事多くは寓言にして只阿染久松が奇緣をいはんとて姑く楠氏の名を假るのみ。夫艷曲演藏海盛衰奏なる小說者流は取らず。更に松染は簡操を錄して楠の七草と命るものは華說の花のみにして事實の實なればなり云々。文化五年戊辰(一四六八)の自序あり。

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

于持筋紋付棟、筵蓼、澤庵和尚之語、馬背具、唐土の去狀、茶津、女泰公人寺請證文、五百八十五餅、小手の名目、其の他數百の雜記なり。

◎關修齡の傳は『巡海錄』の下にあり。

しようそうぶんかう

松牕文稿　本二卷　關　修齡

著者の漢文集なり。數十編を收む。最末に寛政九年丁巳(一七九五)十月の作、「琅音」を收む。卷首に肖像あり、其の裏面に自筆自題あり。「杏壇趨走十年前、重顧顏容私自憐、已竭吾才何所得、令君誤入畫圖傳」「鴻漸上人、爲余寫眞、時及七旬、視此帳然、今則老矣」といふ。

◎關修齡の傳記は『巡海錄』の下にあり。

しようそうまんろく

松窓漫錄　本六卷　關　修齡

北條氏歷代の戰事大略を記したるものなり。岩田恒足軒の記事中より取りて補入せる由を記せり。六卷五册に寫傳せり。

◎關修齡の傳は『巡海錄』の下にあり。

しようたうしせう

松塘詩鈔　一卷　鱸　邦

著者の詩稿。嘉永四年辛亥(一八五一)大沼厚の序、鷲津宣の跋を附したり。

◎鱸邦は其の本姓鈴木なり、國音相通ずるを以て自ら鱸と記す。字を彦之といひ、松塘また東洋と號す。安房國の詩家なり。今詳傳を得がたし。明治に至りて歿したりといふ。

しようだうそんじやねんぷ

勝道尊者年譜　一卷

下野國芳賀郡高岡鄉勝道尊者の事績を記したる年譜なり。記事は詳細なれども、引用の書記に僞書との雜り居れば、信用し難き節も少からず。元祿十三年庚辰(一七〇〇)に撰集せられたり。

しようちくもんだふ

松竹問答　本一卷　竹屋　光棣(みつとき)

有職故實の事を問答體に記したるものなり。松岡行義の質問に對して答へたるものなり。

◎竹屋光棣は右兵衛佐に任ぜらる頓擧の故を以て病申上退御幸あり。天保八年丁酉(一八三七)逆修故實勘進の當に依り從三位に叙せられて薨ず。時に年五十七なりき。

しようちくわいらん

勝地回覽　本一卷　度會　常昭

伊勢國饗庭園東山、二見浦、宮川以外內宮攝社參詣等の紀行なり。享保四年己亥(一七一九)二月の自序末に「われ生れし一州の中にも、もとより勝地多し、遠きを極めんと先づ近きよりこそと此の比思ひ起して、登臨所々を里數をも記し、小冊となせり、志のひとしき人に與へて登覽の嚮導ともなりかしと思ひてなむ」と云へり。今見るところは天保十四年癸卯(一八四三)正四位上度會常善の寫本にかゝる。

しようちくわいへん

勝地吐懷編　二卷　僧　契沖

諸名所を諸歌集等に就さて考證したるもの。類字名所集の歌の名國相違ある事、名所の脫漏せる事、從來誤り來れる地名等を正誤論證す。元祿五年壬申(一六九二)の自序、寛政四年壬子(一七九二)伴蕃蹊の頭書を加へて出版す。

◎契沖の傳は『萬葉代匠記』の下にあり。

しようちくわいへんいつぽん

勝地吐懷編異本　本四卷　僧　契沖

刊本『勝地吐懷編』と事實の多少精粗の異同あるのみ。奥書に「元祿九年(一六九六)九月六日、三卷抄出畢、先有二卷三合四卷草稿成訖、神道乘沙門契沖」とあり。蓋し先きに一卷といへるは元祿五年の落にして、寛政四年に出版せる二卷は前後合したる此の寫本四卷申より、二卷だけを出版したるにはあらざるか。姑く疑を存す。

◎契沖の傳は『萬葉代匠記』の下にあり。

しようちくわいらん

勝定國師年譜　本一卷

同師の一生の年譜歷傳なり。其の世五吉山の文珠に祈りて誕生せるより、滅後五年太上皇帝より、佛智國師の謚號を賜り、今上皇帝より淨印翊聖國師を加へらるゝに至るを、『續群書類從』卷二百三十九、傳部第五十に入れたり。

しようていずゐひつ

鉏雨亭隨筆　三卷　東　聚

著者の漢文隨筆。卷末に「客冬寮生相謀、刻余詠史

百絕、並及拙編。是余少時病中劄記、文字蕪陋、固不足傳、然亦一二載先師亡友事、距今三十餘年、邈如隔世。不勝追感、於是更加刪補、分成三卷、名曰鉏雨亭隨筆、以起稿于此也。考後嘗見所得、別有橘黃漫錄。以挨他日之暴。弘化戊申(一八四八)初春、夢亭山人識」とあり。嘉永三年庚戌(一八五〇)後崎彌の序あり。同五年出版す。著者東聚は伯順と字す。伊勢國山田の人也。鉏雨亭、夢亭等は其の號なるべし

しようていほごふくう

松亭反故囊　本二卷　松亭　金水

古今の俗諺、俚諺、習俗、傳說等につきて解說考證したるもの。和漢の古實例に徵して考說すること頗る着實なり。來を猿の牙といふ、生飯(さば)、草字を眞字となす。今は昔にしかず、九月十三夜、道饗の盛豆、醫道、狂を發す、死人杓す、うば狐、狐の術、九思の歌、天物を雨らす、目を以て食ふ、富貴を羞ふ、犬の孝心、一非の兒に器を執らしむ、物に疑はる、禁厭、海の異蟲、孝子父の罪を穿む、和尚魚等の目より成る。所々に插畫せり。

◎松亭金水の傳は『松亭漫筆』の下にあり。

しようていまんぴつ

松亭漫筆　二卷　松亭　金水

漢事、和事の區別なく、古今の故事にして、話柄相對するもの列舉して、評論を加へ、庶人勸懲の資に供したるもの。芭蕉翁三月のより、文字を可敬といふ十五條の好話にてなれり。まゝ一頭書插畫などを入れて專ら兒女の讀物とせるなり。嘉永三年庚戌(一八五〇)出版す。

しようて

◎松亭金水は江戸の人。中村氏にして、名を保定、通稱を源八といふ。積翠道人の別號あり。初、手蹟を教へ、また筆耕に從ひ、爲永春水の原稿を淨寫するに至りて、漸く其の文體を覺り、遂に人情本の作者となれり。著作の拙劣なることは、人既に評定して金水と名く。著作の拙劣なることは、人既に評定して金水と名く。著作の拙劣なることは、江戸近郊名勝一覽、和漢珍物考證圖說、嘯風月物語、教訓御伽草紙、日本百將傳一夕話、怪談花の吹雪、大岡仁政錄、尼子孝敎訓、平家物語、仇競花の夕栞、歌枕二世物語、積翠閑語、時話今樓の駒、太平樂皇國性實、善知安方忠義傳等なり。文久二年壬戌(一八六二)十二月十二日歿す、年六十八、牛込榎町大法寺に葬れり。

◎川村榮譽は江戸の人、字を萬年、通稱を孫八といひ、華陽また松風館と號せり、井上金峨に從學し、儒者を以て知らる。天明四年甲辰(一七八四)八月、四十九にて歿す。

しようぶ

しようぶうんれきだいにつき

松梅院歷代日記　本二十五卷

北野神社の社僧松梅院歷代の日記なり。卷の一寶德元年己巳(一四四九)より、卷二十五慶長七年壬寅(一六〇二)に至る凡そ百五十四年間の大概を記せり。慶長七年八月十一日禪昌の奥書あり。

しようぶうんれきだいにつきそしだい

松梅院歷代日記總次第　本一卷

しようぶうんれんぜきれつそしだい

勝寶院門跡列祖次第　本一卷

高祖弘法大師十二代の祖勝寶院阿闍梨頼弊〔佛頂

しようぶうろんまんぴつ

松風樓漫筆　本六册　松　風　樓

德川氏初代の略傳事績等を記したるものなり。最初家康前六祖の略傳より、家康秀忠の略傳及び其の事績を記したり。

しようぶうろん

松風論　三卷　僧　澄圓

夢窓國師の「夢中問答集」中に、念佛法を小乘淺劣

しようふ

の教なりと論じたるを評破したるもの。巻内には「夢中松風論」と題せり。全編の結構は、著者が賀茂社頭へ参籠の時、或る法師と俗士がありて、俗士が「夢中問答集」の文句を挙げて如何にと問ひければ法師これに應じて答辨したるを、側に在りて聽記したる様に書き成されたり。慶安五年壬辰(一六五二)三月上梓す。

◎澄圓、名は智演、泉州大鳥の人。浄土宗鎮西派の僧なり。九歳の時東大寺圓雅法師に従て出家してより、諸名師に歴従して各宗教義を研究し、東都に往き浄土宗白旗流の徒となれり。文保元年丁巳(一九七七)渤海を越えて廬山に登り、留學五年顯密の教を精研す。著書は本書の外に、十勝論、覺覺論、獅子伏象論等あり。應安五年壬子(一三七二)七月入寂す。享年九十なりき。

しようふくじちうしようくわんじんちやう

勝福寺鑄鐘勧進帳 本一巻

永正十三年丙子(一五一六)九月、勝福寺鑄鐘の勧進帳趣意書なり。二枚に寫さる。「続群書類従」巻八百〇二、釋家部第八十七に收めたり。

しようへいにつしんろく

昇平日新録 本十四巻 家田 虎

徳川家康、同秀忠、同家光、同綱吉、及び家康の第七子尾張敬公、第八子紀伊南龍公、家康孫水戸義公等の善行事績を漢文にて詳述して尾張公に上るところなり。文化四年丁卯(一八〇七)夏六月の自序来に「書曰、徳日新、萬邦惟懐、又曰、終始惟一、時乃日新、是此題名之所取」とあり。十四巻六冊に寫傳す。

◎家田虎の傳記は「滑川譚」の下にあり。

しようへいやわ

昇平夜話 本十巻

徳川幕府昇平の時に於ける、諸侯諸士等に關する雑話を記載し、其の治政の盛習を述べたるもの。上下二篇に分れ上篇は諸侯、下篇は諸士に關す。本務當務、文武、政事、風俗、心術、諫諍、飲食、家居、衣服、儉約、世子、閨門、士魂、俸祿、雜事等の分類あり。寛政八年丙辰(一七九六)正月に記したるものなり。

しようほししふ

松浦詩集 三巻 僧 元皓

著者の詩集。享保十三年戊申(一七二八)釋黙菴の序を添へたり。

◎元皓は字を大潮また月枝といひ、眷寮、西溟、泉石、松浦等の號あり。肥前松浦の人にして、本姓浦氏なり、はやく、染衣となりて、後同院第三世の住職となれり。常に詩を好み、物徂徠等の碩學と交際ありきといふ。

しようまんぎやうぎしよ

勝鬘經義疏 三巻 聖徳太子

劉宋天竺三藏求那跋陀羅の譯したる「勝鬘經」を註釋したるもの。章句訓詁の疏鑿よりも、寧ろ一部の大意、各章の要領を概括指示して、本經の蘊奥を發揮せんことを務められたり。推古天皇の十七年己巳(一二六九)八月八日に起稿して、同十九年正月二十五日を以て成稿す。實に本邦撰述の佛教典籍中最先のものたり。尚ほ太子は「法華經義疏」、「維摩經義疏」をも撰述せり。本書と合せて太子の「三經疏」と稱せり。明治二十八年乙未(一八九五)島田蕃根氏の新刻にかゝるものあり。

◎聖徳太子の傳は「靈法十七條」の下にあり。

しようみやうおんうふき

稱名院右府記 本一巻 三條西公條

著者の享祿四年辛卯(一五三一)七月の日記なり文化二年乙丑(一八〇五)塙保己一の校合本による。

◎三條四公條の傳記は「稱名院集」の下にあり。

しようみやうおんうふくだいごひやくしゆ

稱名院右府句題御百首 本一巻 三條西公條

冬日春日社壇詠百首和歌なり。春十五首、夏十首、秋十五首、冬十首、戀十首、旅十首、閑居十首、雜二十首より成る。巻末に天文十三年甲辰(一五四四)三月十七日發俊書寫の奥書あり。「續群類從」巻三百八十九、和歌部第二十四に入れたり。

◎三條四公條の傳記は「稱名院集」の下にあり。

しようみやうおんうふくらうどのかみそうけいじうじしだい

稱名院右府藏人頭奏慶從事次第 本一巻

刻限、東帯、勧文、行列、隨身其の他の事を記す。「續群書類從」巻三百〇一、公事部第五十四に入れたり

しようみやうおんうふしちじふのがのき

稱名院右府七十賀記 一巻 九條 稙通

入道前大臣稱名院七十賀の記なり。「續群書類從」巻五百三十、雜部第八十五に收めたり。

◎九條稙通の傳は「嘯嘅記」の下にあり。

しようみやうおんうふんきんえだとうしふ

稱名院公條公集 本一巻 三條西公條

本書は別名「稱名院集」の下に解題したり。

しようみやうおんうふんしふ

稱名院集 本一巻 三條西公條

永正十年癸酉(一五一三)重陽の日親王御方に於ける着到百首の和歌集なり。奥に五十首百首等の歌を掲ぐ。本集は別に「稱名院公條公集」と題して寫傳せるもあり。

◎三條西公條は長享元年丁亥(一四八七)生る。翌年從五位下に叙し、侍從に任ぜられ、後内大臣を經て右大臣に至る。天文十二年癸卯(一五四三)官を辭して剃となり、諸方を遊歴して詩歌をなす。稱名院と稱す。著書には本書の外、吉野詣記、石山月見記、宇槐記抄、稱名院右府句題百首等あり。永祿六年癸亥(一五六三)十二月、七十七にて卒せり。

しようみやうおんうふんどのつるぜんどくぎん

稱名院殿追善獨吟 本一巻 里村 紹巴

永祿六年癸亥(一五六三)十二月十四日、稱名院右府入道二七日追善のために、詠出したる獨吟の俳諧なり。

◎里村紹巴の傳記は「源氏物語紹巴抄」の下にあり

しようみやうじさしたしおかきつけ

稱名寺差出御書附 本二軸

三州碧海郡大濱村なる稱名寺に藏せる古文書なり德川家の朱印書付類なり。

しようようろくべんかい

從容錄辨解 二巻 僧 天桂

禪機の奥義を論述せるもの。宏智禪師の頌古百則を講述せるなり。著者嘗て衆徒を集め、縷々講述するもの實に數日に渉り、精細を盡したるものなり。其の侍者の筆記せるものを、古田梵仙、葉繁晉道校訂して行はる。

◎天桂の傳は「正法眼藏辨註」の下にあり。

しようらんふ

松蘭譜 二巻 深見玉青堂

松葉蘭の各種類を生寫圖譜したるもの。天保八年丁酉(一八三七)版刻す。著者深見玉青堂は三河の人なり。

しようりんねんしやうぞくかう

松林院裝束考 本一巻 賀茂 眞淵

裝束の事につきて考説したるもの。松林院權大僧都の問によりて答へたるものといふ。延享四年丁卯(一七四七)の註なり。

◎賀茂眞淵の傳は「冠儀考」の下にあり。

しようりんやわ

松隣夜話 三巻

關東管領足利持氏自殺して、山内扇谷兩上杉氏互に權を爭ひ、北條氏その際に乘じて、關東を併呑せし事より、天正十五年丁亥(一五八七)、上杉讓信兵を越前に出して、宮野の城を陷れし事までを記したるもの。三巻三册に作る出版の年月を記さず。

しようれいせんじさやうじやう

松嶺禪師行狀 本一巻

武州河越の人、安藤右典厩右宗六世の後胤なり。諱を道秀といふ。元徳二年庚午(一九九〇)に生る。應永廿四年丁酉(一四一七)年八十八にて寂す。「續群書類從」巻二百四十、傳部第五十一に入れたり。

しようわにねんとうじりやうこくはん

承和二年東寺領國判 本一巻

承和二年乙卯(一四九五)東寺領國の榜印記錄なり「續群書類從」巻九百七十五、雜部第二十五に收めたり。

しよおかきつけしようがひしるゐ

諸御書附諸伺書類 本二巻

安政元年甲寅(一八五四)の蝦夷地開拓に關する諸書類を輯集す。箱館並に同所より五六里四方上知之場所御預所被仰付候御書付より、箱館蝦夷地御備除金之儀に付奉伺候書付に至る通計五十七通を收めたり。

しよおかきつけるゐ

諸御書附類 本一巻

天明安政間に於ける、焚鐘、地震、愚賑金、行軍等に

關する書類を輯錄したるものなり。

しよおとゞけがきひかへ　諸御屆書控　本寫一冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せる諸御屆書控にして、享和元年辛酉(一八〇一)より、天保四年癸巳(一八三三)に至る。

しよおとゞけちやう　諸御屆帳　本寫一冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、天明八年戊申(一七八八)より、天保四年癸巳(一八三三)に至る。

しよかきんのう　書家錦囊　一卷　山崎　美成

二字句以下、十四字句に至る成語を輯めて、鑒場書家に供用したるものなり。嘉永五年壬子(一八五二)出版せり。

◎山崎美成の傳記は「書家便覽」の下にあり。

しよがくえうし　書學要旨　寫二卷　本　山本　格安

書法に關し、古今和漢の書法書中より、其の要旨を摘抄して假名書にしたるもの。數十目より成れり。寬政二年己巳(一七九〇)の自序あり。末に「寶曆十一年辛巳八月丁酉八月甲戌納之于祠堂」とあり。

◎山本格安の傳は「獻暄錄」の下にあり。

しよがくかんえう　書學鑑要　一卷　武田　司馬

書法、字體、筆墨、硯紙等の事を論述したるもの。嘉永三年庚戌(一八五〇)根本貞一の序、中山義泰の跋を掲ぐ。著者武田司馬は實庵居士と號す。周防國の人なり。

しよがくくわげふしだい　初學課業次第　本寫一卷　佐藤　坦

漢學の順序、讀書の次第を示したるもの。經、史、子、集に區別し、經類にては小學、四書、四經史類に於ては稽古錄、通鑑綱目子類にては孔子家語、劉向說苑集類にては文章軌範、三體詩、唐詩正聲、楚辭といふ風に順序し、各用ふべき註釋まで懇に指示せり。全編片假名交り文にて記す。卷末に「松山藩更張二學政、因請二課業規則一於昌林公(公乃口授、坦錄レ之、公之意盖不レ過二此、則非一公之所一レ以望一レ之、簡省二耳。若謂二書亦值々讀一、則非二多士一也。文政四年辛巳(一八二一)稻月下院受業弟子佐藤坦記」とあり。

◎佐藤坦の傳は「愛日樓文詩」の下にあり。

しよがくくん　初學訓　五卷　貝原　篤信

初學の教訓に供せんため、人倫の道を辨說したるもの。享保三年戊戌(一七一八)序あり。最も切要にして識すべく守るべき字句を抄出して類聚編纂したるもの。爲學、修身、接物、處事、警戒の五綱に分ちて凡そ四十餘目を掲げたり。元祿十年丁丑(一七〇一)の自序、及び門人伊藤業安の序あり。

◎貝原篤信の傳は「自娛集」の下にあり。

しよがくてならひしき　初學手習式　本寫一卷

執筆法、用筆法、書法、その他筆道に關する諸法を說明し、末に筆道の自論、永字八法の七十二法訣を添へたり。

しよがくてんもんしなん　初學天文指南　五卷　馬場　信武

璿璣玉衡新製渾天儀圭表景符圖等の講論より、九天日月行道交食宿星等の講論し、後ち雲漢風雨雷電等の諸氣象に及びたるものにして頗る初學に益あるものなり。終りに海水、潮汐、霜、露を總論し、本朝分野圖等を掲げたり。寶永三年丙戌(一七〇六)出版す。

◎馬場信武は京都の漢學者なり。初め尾田芝古といひ、後、改名す就中易に精しく、また占筮を能せり。かれて我が古典に精しく、また兵學に明らかなり。著書は本書の外に五經圖解、梅花心易掌中指南、斷易指南、周易指掌大成、易學蒙圖說、看命一掌金和解等あり。

しよがくぶんき　初學文軌　二卷　僧　大典

韓柳二家の文章中、敍事と議論とを摭抄して解剖

評批したるもの。蓋し初學者の作文に資給したるなり。自序、附言等あれど年月なし、明治二十七年東京博文館より出版す。

◎大典の傳は「柿本人丸事蹟考」の下にあり。

しよがくべんもう　初學便蒙　和漢　五卷　伊藤　宣誰

漢字熟語を網羅し、天門、地理、宮屋、時候、人倫、身體、氣形、生植、衣服、飮食、器財、彩色、數量、藝術、禮記、切韻、詩賦、音律、詠歌、神仙、醫療、釋道、雜用、以上二十三門に分ちて、其の意義を解き事實を說明したるものなり。元祿六年癸酉(一六九三)の自序あり、同八年出版す。

しよがくわかしき　初學和歌式　七卷　有賀　長伯

歌學上の諸要件を記述したるもの。歌の證方故實、題に相應不相應の事、四季戀雜名所等の歌の證方、本歌取りやう、返歌兼題當座等の事を說き、更に三代集の詞よせ、諸抄註釋の事等を掲げたり。正德三年癸巳(一七一三)出版す。

◎有賀長伯の傳は「歌枕秋の寢覺」の下に出づ。

しよかしゆはうぼん　書家聚寶盆　三卷　山田　敬直

幾多の古書中より、二言、三言、四言、五言とやうに熟語、成句を抄出して揮毫家の用に供したるもの。其の言數にて順序し、二言の熟語より逐に百六十言の文章に至れり。著者の歿後門人錦洞櫻非能監の增訂するところにして、明治十三年庚辰(一八八〇)出版す。

◎山田敬直は別著に「四時遊人心得」あり。

しよかひつえう　書家必用　一卷　山崎　美成

「書家便覽」及び「書家錦囊」と同じく書家必用の成語を集めたるもの。嘉永三年庚戌(一八五〇)刊本となる。

◎山崎美成の傳は「書家便覽」の下にあり。

しよかべんらん　書家便覽　一卷　山崎　美成

書家應用の成語を集めたるもの。經、史、詩集中より適宜に拔抄せるなり。別著「書家錦囊」「書家必用」等と相似たるものなり。安政六年己未(一八五九)出版す。萩原韋の序あり、萬延元年庚申(一八六〇)出版す。

◎山崎美成は寬政八年丙辰(一七九六)江戸に生る。字は久作、通稱は新兵衛、北峯、又は好問堂と號す。儒者にして藥舖を業とし長崎屋と稱せり。性、讀書を好み、廢倦を厭棄して其の業を廢し、常に罪視に從事して著書をなせり、著す所本書の外に三養雜記、書籍目錄、歌舍目錄、富士山の記、詠方便品和歌、阿佛房海道記、顯昭陳狀、八雲日傳、和歌式、正風體抄、近來風躰抄、古今和歌集聞書、雲上銘鑑略、洛陽墨蹟等を收めたり。

しよかんこじつ　書簡故實　本寫一卷

公方樣、言上の事、賜り請文、大中納言宰相へ之事、賜り四品諸大夫、僧家への事、制札の事、賜り壁書過書、感狀の事、所領折紙の事、與奪狀の事、女中方狀の事、總別書札法の事、目安の事等を說明例書せり。「續群書類從」卷七百〇三、武家部第四十九に收めたり。

しよきかだせう　書紀荷田抄　本寫一卷　荷田　春滿

日本紀神代卷上下に、簡單なる註釋を加へたるものなり。本書は別に「神代卷荷田氏抄」と題して寫傳せるものあり。享保五年庚子(一七二〇)の講也。

◎荷田春滿の傳は「伊勢物語童子問」の下にあり。

しよきかんれいもくろく　諸記勘例目錄　本寫五卷

禁中公事の搜索に便したるもの。卽ち事目、錄名、年代等を標記して諸家記錄中に散在せるものを索出し易からしむるなり。天保の初年、昌平黌にて編輯したるものなるべしといふ。

しよきぐんるゐ　書記群類　本寫十卷

諸種の歌書記文等を纂輯したるもの。其の中、神名記、書籍目錄、歌舍目錄、富士山の記、詠方便品和歌、阿佛房海道記、顯昭陳狀、八雲日傳、和歌式、正風體抄、近來風躰抄、古今和歌集聞書、雲上銘鑑略、洛陽墨蹟等を收めたり。

しよきさん　諸記纂　本寫五卷

猪熊家日次殘編、部玉御記、伊勢一社本儀、元弘元劍璽渡御記、冊命皇后式、長元九年記、雅兼神記等

を雜輯す。

しよきしふげ
書紀集解 三十卷　河村　秀根

日本書紀を詳細に解釋したる漢文の書なり。卷首に總論八條あり論國家之號、論繫國家之號、論著作之人、論書紀之名、論誰撰一說、論訓、論諸本、論註例等を述ぶ。天明五年乙巳(一七八五)の自序あり。

◎河村秀根は尾張の人秀穎の弟にして、復太郎と稱し、葑庵と號す。夙に國書の紀傳學に志し、最も博通を以て知られたり。生平著書を事とし、書紀集解、續紀集解、後紀補集解、續後紀集解、文德實錄集解、三代實錄集解、古事記集解、祝事紀集解、古語拾遺集解、姓氏錄集解、萬葉集集解、三代格集解、令義解集解、神宮儀式帳集解、延喜式集解、儀式集解、律集解、禁祕御鈔集解、公事根源集釋補、三朝抄、名目鈔解、狹衣入紐、宇母鬘會、葑庵遺戒、葑庵吟藻あり

しよきひやくしほでん
書紀百氏補傳 五卷　榮名井廣聰

日本書紀の中なる人臣泰道のものを選び、「古事記」、「古語拾遺」、「姓氏錄」等を以て文辭等を增補し、其の傳に擬して作れるもの。全編漢文に作り割註を加へ、本文には國音を附して作る。天明八年戊申(一七八八)冬十月の自序あり。著者榮名井廣聰は甲斐國二宮の祀主なり。

しよきやうえきかい
書經釋解 四卷　皆川　愿

書經の全編につき、各章順序に解釋したるもの。

しよきやうきやうがき
書經聞書 十三卷　太田　元貞

此の書は表題「尚書紀聞」といふ該題下に解題せり

末に「古文辨僞」一卷を添へたり。皆漢文にて記せり。條理貫暢、奥義精徹して、編次相承り、錙銖の微も亂毛の末も釋繹せり。

天明三年癸卯(一七八三)の年八月、稿を起し、翌甲辰春三月卒業したること、其の乙巳九月の自序中にあり。寬政十二年庚申(一八〇〇)十二月、門人來谷子虎の後序あり。

◎皆川愿の傳は「洪園文集」の下にあり。

しよきやうきやうくもう
書經訓蒙 二卷　和田　絅

書經の本文に平易なる註釋を施したるものなり。

◎和田絅の傳は「易傳圖解」の下にあり。

しよきやうさふかい
書經插解 八卷　河田　興

書經の全文に訓詁字義等を插註若しくは傍註したるもの。凡例に曰く「蔡九峯書集傳指授を朱文公に受く。之を諸家に較すれば優となす。今僭して插解となし、亦一に蔡傳を遵守す」云々。弘化二年乙巳の序跋あり。同三年上梓す。

◎河田興は字を猶興、通稱を八之助といひ、屏淑ま た林遠齋、佐藤一齋等の門に出入す。一齋其のオ學を愛重して妻すに女を以てす。業成りて江戸に一家を成し、教授を以て任す。名聲大に聞ゆ。諸侯の延聘、學徒の來遊日に盛なり。著書には書經捷解易學啓蒙圖考、詩經插解、發音私議、自警編、朝鮮槿世略、南征日記、日光摘勝記、文詩稿等あり。安政六年己未(一八五九)正月十七日歿す、年五十有四。

しよきやうしかう
書經私考 四冊　林　恕

書經を逐條考註したるものなり。第四の末に「升庵外集第二十六終」と記せり。

◎林恕の傳記は「本朝通鑑」の下にあり。

しよきやうちようかう
書經重考 十五冊　林　整宇

書經蔡傳を考註したるもの。內題には直に「書經蔡傳重考」といへり。延寶二年甲寅(一六七四)の自序中に、「幸遇蔡氏而文義精密、此經之明、如揭日月也、余既講周詩、終三百篇、欲窺書傳之藩籬也、家君壯歲曾講解此經、既作私考、今以其考而爲之基址、聊布所補益、故名曰書經重考、所援件々可見而知焉」云々とあり。其大意を知るべし。

◎林整宇の傳記は「鳳岡林學士集」の下にあり。

しよきやうてうだい
書經雕題 二卷　中井　積德

書經全編中より、疑義難解を順序に摘抄して考說したるものなり。漢文にて記す。「雕題附言」を添へ一冊に作れり。

◎中井積德の傳は「七經雕題略」の下にあり。

しよきやうほうげん
書經逢原 四冊　中井　積德

書經を註釋したるもの。群註を取捨して自ら一家の見を發揮す。著者が「七經逢原」中の一なり。

◎中井積德の傳は「七經雕題略」の下にあり。

しよきるゐえうせう
諸記類要抄 一卷

猪隈園自記中の、神事、官位、衣服、作法、雜等と「岡屋兼經公記」中の神事、禮節、官位、衣服、作法、雜と、「公悟公記」の神事部、禮節部、衣服部、雜部と、「管見記」の神事部、衣服部、雜部等を抄錄したるものなり。

しよきるゐご
書紀類語 三卷

日本書紀中の類語を綱羅し、五十音順に列擧して、各其の所在丁數の表裏等を記したるものなり。捜索の便少からず。

しよきんまんえきしふ
諸禽萬益集 一卷　左馬介　元政

諸鳥類の形狀、捕方、飼法等を記述したるもの、まま圖解をも加へたり。享保二年丁酉(一七一七)の作にかゝる。

しよくいえうへん
食醫要編 一卷　僧　元政

倘家食品につきて性質、氣味等を研究したるものなり。著者元政の傳は「扶桑隱逸傳」の下に出す。

しよくがくけいげん
植學啓原 三卷　宇田川榕庵

植物の莖葉花實生植、飼養蕃息等に關する一切の事を詳述す。蓋し西洋植物學の主張にかゝるものなり。天保四年癸巳(一八三三)の自序、及び箕作皮の序を附して版行せり。

◎宇田川榕庵は名か榕本といふ。もと大垣の醫官江澤養樹の子なりしが、津山侯の侍醫宇田川榛齋の養嗣となりて其の職をつぐ。夙に植物學を崎學を研究し、また馬場貞由につきて蘭書を研究し、後幕命を受けて洋書の翻譯に從事す。其の著者中には本草、植學啓原」と「舍密開宗」とは實に本生の精力を費したものなりといふ。蓋し本邦化學を講ずるもの、最初となす。弘化三年丙午(一八四六)四十九にて歿す。

しよくきぎりやく
穢儀略 一卷　古屋　南

祭禮に於ける觸穢忌諱の二三項を列擧すれば や否、答曰不憚之、但血を出す事あれば憚」、「問云人を殺害する非殺して觸日計穢也、予忌物は三十三箇所までは大社宮寺之」等の如し。凡て四十御返事如此」とあり。何人の答へたるかを知らず。「續群書類從」卷八十一、神祇部第八十一にあり。

しよくきもんだう
續紀問答 一卷　寺村　成相

「續日本紀問答」の略稱なり。本名の下に解題す。

しよくくわんし
職官志 六卷　蒲生　秀實

唐の六典に倣ひて本朝官職の事を記述したるもの。著者の夙に志したる九志(神祇、山陵、姓族、職官、服章、禮儀、民、刑、兵)の一なりと。文化十三年丙子(一八一六)春澤安の跋、天保六年乙未(一八三五)藤原以文の序等あり。

◎清生秀實の傳は「今書」の下にあり。

しよくげんかでんひろく
職原家傳秘錄 ㊀十冊

北畠親房の「職原鈔」を註解したるもの。假名文にて記す。享保十三年戊申(一七二八)速水昌勝寫本の奥書あり。

しよくげんかなせう
職原假名鈔 ㊀二卷 壺井 義知

北畠親房の「職原鈔」を假名にて註釋したるものなり。卷首に原著者の傳、成書の由來等を記けり。

◎壺井義知の傳は「官職浮說或問」の下に出づ。

しよくげんかんもつ
職原拾物 ㊀六卷

北畠親房の「職原鈔」を註釋したるものなり。卷端に親房の系圖略傳を掲げたり。

しよくげんくわいつう
職原會通 ㊀十三卷 林 恕

職原鈔を講解したるもの。寛文十二年壬子(一六七二)の自跋に云く、職原講說辛亥(一六七一)の季秋に始り、壬子の仲冬に終る。席を暑ること二十六回、毎席愚制を考へ、證據を正し、積みて册子と成す。號て會通といふ。總て八百八十餘葉、勒して十三册となし、以て編輯の一に備ふ」云々とあり。

◎林恕の傳は「本朝通鑑」の下に出づ。

しよくげんしき
職原私記 ㊀一卷

簡單に職原鈔を抄解したるものなり。著者年代共に詳ならず。

しよくげんしせう
職原私鈔 二卷 清原 宗尤

職原鈔を註釋したるもの。寛永五年戊辰(一六二八)出版す。

◎清原宗尤は「古今和歌集傳授切紙」の下に傳す。

しよくげんすごろく
職原雙六 ㊀一折

職原鈔に基き、其の官職に應じて裝束器具等を、雙六形に彩圖したるものなり。

しよくげんせう
職原鈔 二卷 北畠 親房

我が邦歷代の官位の沿革補任の次第等を記したるもの。其の「職原」の名に就きて、藤井貞幹の「好古日錄」には「職原鈔は、原、題號なく、卷首に只百官の二字あるのみ、後人猥に增補をなし、官位鈔、明職、職原鈔等の名を附したり。然るに其の題號なきもの亦一種にあらず」といひ、壺井義知の「官職浮說或問」には、「職原鈔と云へる題號も亦後學誤りて名けたるものなり。舊本には或は明職とあり、官位鈔とあり、是れも後に名けたるものにて含ざるなり。其の誤りなる所以は、唐宋の職源と云へる書には諸官を擧げて、其の職掌を戒せたり。今の職原鈔には諸官の職掌を戒せずして只任道の旨と後世の上古に如かざる事を述べ給へるのみにて、又親房卿自ら此の題號な名付け給ふと云ふものは猶誤れりと云々と云へり。其の著述の年月に就きては「擾寧記」に、興國二年辛巳(一三四一)十二月下旬、本書二卷を作り獻する由を記す。慶長十三年戊申(一六〇八)出納大藏大輔中原職忠の始めて刊行するところ、舟橋式部少輔清源秀堅跋を附せり。本書を註釋、抄出、評論したるもの極めて多し。左に掲ぐ。

註釋　多田義俊の「職原鈔辨講」二十卷、白井宗因の「職原鈔旬解」十二卷、清原宗尤の「職原私鈔」二卷、林道春の「職原鈔」六卷、宇都宮遯庵の「三五庵職原鈔標註」二卷、林恕の「職原會通」十三卷、興志多分宜の「職原鈔聞書」八卷、植木悅の「職原鈔男事大全」十二卷、後藤世鈞の「職原鈔考證」十六卷、近藤芳樹の「標註職原鈔校本」四卷、藤原惺窩の「職原鈔首書」五卷、壺井義知の「職原鈔通考」二十三卷、藤原貞基の「職原秘鈔」一卷、速水房常の「職原鈔支流大全」二卷、「職原鈔助物」六卷、「職原鈔之抄」二卷、「職原鈔註」一卷、「職原鈔參考」五卷、「職原私記」一卷等あり。

◎北畠親房の傳は「神皇正統記」の下にあり。

しよくげんせう
職原鈔 ㊀六卷 林 道春

前掲北畠親房の「職原鈔」を註釋したるものなり。寛永八年辛未(一六三一)十月上旬と記せり。

◎林道春の傳は「雜由文集」の下にあり。

しよくげんせう
標註職原鈔 四卷 近藤 芳樹

職原鈔の本文を校正して、欄外に註釋したるもの、初二卷を校本といひ、二卷を別記といふ。それには冠位十二階、官位冠位の別、三種神器等の事を辨せり。寛永七年甲寅(一六五四)安積信の序あり。

◎近藤芳樹の傳は「續記論」の下にあり。

しよくげんせういんじたいぜん
職原鈔引事大全 九卷 植木 悅

職原鈔の中の引事を集輯したるもの。原書の條を逐うて詳細に割註を施せり。普漢文なり。參考引用書は和書にて四十九部、漢書にて三十六部の多きに沸りて最も捜索を盡せり。全部九卷の外に首卷三册ありて凡て十二册に作らる。首卷には職原鈔起、親房系圖、同補任、本朝歷代官位冠始、衣服次第、諸臣指貫、諸國釋典、封戶職田位田之事、諸節祿、親王以下月料、諸司一位以下馬料、租稅賦役、年給、大內裏圖、八省院指圖位記式、詔書式、敕旨式、宣命、口宣宣旨令旨、星圖、近代京都昇進次第、當代禁中圖、同所々殿之註、太政官內外次第、凡例、目錄等を掲げたり。明曆二年丙申(一六五六)の自序あり。識語に「寛治二年記」(一〇八八)とあり。

◎植木悅のことは「慶長軍記」の下にあり。

しよくげんせうかうしよう
職原鈔考證 ㊀十六卷 後藤 世鈞

北畠親房の「職原鈔」を考證註釋せる諸家の說を參酌し、更に自家の見を加へて考述したるものなり。安永六年十月既望の漢文自序あり。十六卷八册に寫傳す。

◎後藤世鈞の傳記は「元明史略」の下にあり。

しよくげんせうかうしようひつき
職原鈔考證筆記 ㊀四卷 荷田 春滿(アヅママロ)

しよくげんせうさんかう
職原鈔參考 五卷

藤原惺窩の「職原鈔首書」に諸說を參考して增補集成したるもの。本文の行間に小註を入れ、欄外更に詳說を掲ぐ。寛永元年甲申(一六二四)那須資俊の跋を附して刊行す。著者與志多分宜は幸庵と號す。

しよくげんせうしき
職原鈔私記 四卷

北畠親房の「職原鈔」を逐條講解したるものなり。假名交り文にて記し、正保五年戊子(一六四八)出版せらる。

しよくげんせうしりうたいぜん
職原鈔支流大全 一卷

「職原鈔」の順序により、其の大體を假名文にて註釋したるものなり。

しよくげんせうせつかい
職原鈔揔解 三卷 三宅 帶刀

一條兼良の「職原鈔追加」を註釋したるもの。故に「職原鈔追加揔解」と內題す。漢文にて割註す。三卷の外別に一卷を附錄す。延寶九年辛酉(一六七三)高橋清庫の序あり。

◎三宅帶刀の傳は「官職備考」の下にあり。

しよくげんせうたいぜん
職原鈔大全 九卷 植木 悅

北畠親房の「職原鈔」を集註したるものなり。卷八に一條禪閤の說を追加し、卷九に慶長十三年戊申(一六〇八)清原秀賢の作れる說を追加す。九卷十一册に作れり。

◎植木悅のことは「慶長軍記」の下にあり。

しよくげんせうちう
職原鈔註 本 一巻
職原鈔を略註したるもの。註者年月等を記さず。

しよくげんせうつぬか
職原鈔追加 三巻 一條 兼良
職原鈔の闕漏を補へるもの。蓋し北畠親房の職原鈔は官職の故實を論じて其の義殫くせりと雖も、位階に至ては闕て釋せざるものあり。故に本書は位階は「官位令」に基き敍例は「公卿補任」「續日本紀」等を宗とし、並に院の廳以下數條を掲げて本書に便したるなり。本書を註釋したるものに、三宅帶刀の「職原鈔抽解」あり。
◎一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

しよくげんせうつぬかせつかい
職原鈔追加抽解 一巻 三宅 帶刀
本書は一名「職原鈔抽解」といふ題下に解題せり。

しよくげんせうつぬかせつかい
職原鈔追加抽解 本 四巻 荷田 春満
此の書は一名「職原鈔考證筆記」の下に解題せり。

しよくげんせうつうかう
職原鈔通考 本 二十巻 壺井 義知
神祇官、太政官、中務省、式部省、治部省、民部省、兵部省、刑部省、大藏省、宮内省、糺正臺、東宮、齋宮寮、檢非違使、藤原氏長者、諸國、外戚の官、諸衛、親王以下、位階、女官、院司、僧官、位署式等の順序に制註を以て考證せり。享保十三年戊申(一三八八)門人多田義俊の序に曰く、「縉紳家之子弟一面不レ識諸古典、或據臆說一而失二故實一、獨先生博學約記、闕疑言レ其餘二而已、雖二是有一商量說一也、不レ有二證文一不レ取之、雖二是有一商量說一、不レ有二證文一、不レ取之、雖二是有一商量說一、不レ有二證文一、不レ取之、雖二是有一商量說一、不レ有二證文一、

し有智案三十巻語多く來證事亦疎漏。前朝謂敎中納言從三位石川朝臣名足、刑部卿從四位下淡海眞人三船、刑部大輔從五位上當麻眞人永嗣等、分ち帙修撰以續前紀。而因循荏苒、竟無刊正。其所上者唯二十九巻而已。寶字元年之紀全亡不存。臣等捜求故實於司存、詢問於耆老、綴殘簡、補闕文、雖論美猷義關勧誡、者總而載之。細語常事理非書策、者並從略請。凡所刊削三卷。並前九十五年四十巻。始自草創、迄于脱筆、七年於茲。」云々。また村尾元融の「續日本紀考證」に曰く、「釋日本紀、本朝書籍目錄皆云續日本紀四十巻菅野朝臣眞道等撰。而不ㇾ屬之於繼繩公(藤原)。然此書自ㇾ文武天皇元年至ㇾ孝謙天皇二十巻眞道朝臣所ㇾ撰。自ㇾ孝謙帝卽位至ㇾ桓武天皇延暦十年大尾二十巻繼繩公所ㇾ撰。其前後總裁固不ㇾ同而非ㇾ成於一手者明矣。二君上表及本書每巻首所ㇾ題皆一而可ㇾ知矣。蓋繼繩公薨時其書首尾未ㇾ備。眞道朝臣獨能竣ㇾ修成之功。故釋紀書目係ㇾ諸一人ㇾ歟云々。依て以て本書の由來梗概を窺ふことを得べし。なほ現今の刊本は明曆三年丁酉(一六五七)京都立野春節が點を附したるものなり。本書は「國史大系」の第二卷にも收めたり。該書は、故文學博士小中村清矩氏の校本に據りて、流布本を標註校訂し、內藤廣前、狩谷望之、其の他學者の考按を集げ、且續日本紀考證を以て補ひたるものなりといふ。

◎菅野眞道は賀茂中少內記近江少目を歷て、延曆四年左兵衛佐兼東宮學士となり、九年圖書頭兼伊豫守となり、後治部少輔を兼ね、治部大輔民部大輔を歷て左兵衛督、造宮亮、伊勢守、勘解由長官、左衛士督、相模守、但馬守、參議左大辨、太宰大貳等を經、大同二年丁亥(一四六七)山陰道觀察史兼刑部卿に進み從三位に敍せられ、東海道觀察使兼左大辨に遷り、宮內大藏卿に轉じ、また右大辨兼大藏卿に進み從三位に鄕に歸り、弘仁に至りて近江守を兼ねまた參議となり常陸守に遷る。本傳「續日本紀」は其の在職の日、敎を奉じて撰したるものなり。年七十四にて薨ず。

しよくにほんぎかうえう

續日本紀綱要 一卷

續日本紀の綱要を採摭記錄したるものなること其の名の表せるが如し。著作の年代及び著者の名未だ詳ならず。

しよくにほんぎこうき

續日本後紀 二十卷 藤原 良房

續日本紀の後を繼げる國史なり。事は淳和天皇の天長十年癸丑(一四九三)二月乙酉より起りて、仁明天皇の嘉祥三年庚午(一五一〇)三月己亥に終る凡て十八年間の國史なり。尋常の辭事は略記すと雖も、人君の擧動に至りては巨細を論ぜずして之れを網羅せり。最初先帝文德天皇の時太政大臣從一位藤原良房、右大臣從二位藤原良相、大納言從三位伴善男、參議正四位下春澄善繩、散位從五位下大養眞守等に詔して撰修を命じ給ひしが、帝中途にして崩じ給ひたれば、休止したりしを清和天皇再び其の業を繼がしめ給ふ。然るに良相既に薨じ、善男誅罰に處せられ、眞守邊州に吏となりたれば、今や良房、善繩の二人して其の事を擔當し、貞觀十一年己丑(一五二八月十四日、功を奏して以聞したるものなり。本書は「國史大系」の第三卷にも收めたり。該書は、故文學博士小中村清矩氏の校本により、傍ら祕閣本其の他二三の校本を參攷して、流布本に校訂標註を加へたるものなりといふ。

◎藤原良房は右大臣冬嗣の子なり。天長中藏人に補し、從五位の下に敍せらる。爾來累進して、左近衞權中將、參議權中納言兼陸奥出羽按察使、右近衞大將、大納言兼民部卿等を歷て、嘉祥元年右大臣に拜し、仁壽寮衞の開正二位に進み兼左近衞大將監「右大將者加兵裝藏之、一帙今傳寫以附問答之卷尾云天保十一年庚子(一五四〇)五月寺村成相」といふ。「續史籍集覽」の中に收入す。著者寺村成相は主殿と稱す。

しよくにほんこうきるゐへう

續日本後紀類標 一卷

續日本後紀の中所載の事件をいろは分に標出して其の所在丁數を記したるものなり。例へば「伊」の部に「伊勢齋宮一ノ二十一右」「石灰ニ四ノ十五左」等の如し。

修國史に遷り、天安元年太政大臣となり後從一位に進む。朝廷の恩遇益加る。貞觀十四年壬辰(一五三二)九月薨ず、年六十九、謚して正一位を贈り、美濃公に封じ、忠仁と謚す。世に染殿大臣また白河殿と稱す。

しよくにほんこうきうたのかい

續日本後紀歌解 一卷 荒木田久老

續日本後紀の中の和歌を抄出して解釋したるもの。「槻の落葉」と內題せり。寬政三年辛亥(一七九一)信濃國人永井幸直の序あり。同年伊勢國人田內秀眞跋行す。

◎荒木田久老の傳は「萬葉考槻の落葉」の下にあり

しよくにほんこうきうくいん

續日本後紀索引 四冊

藤原眞房、春澄善繩の奉撰かゝる「續日本後紀」所載の事實を、其の名義によりているろは順に原本所在の丁數を記したるもの。第一冊は「い」より「か」に、第二冊は「よ」より「く」に、第三冊は「や」より「す」に至り、第四冊は地名にかゝる全記事索引にして此の中またいろは順に列擧せられたり。凡て一萬餘を採引す。いま紀州古學館の寫本による。

しよくにほんこうきるゐへう

續日本後紀類標 一卷

續日本後紀の中所載の事件をいろは分に標出して其の所在丁數を記したるものなり。例へば「伊」の部に「伊勢齋宮一ノ二十一右」「石灰ニ四ノ十五左」等の如し。

しよくにんかせん

職人謌仙 一卷 烏丸 光廣

醫師、陰陽師、佛師、經師。看匠、鍛冶、刀磨、鏡物師。巫、盲目。漆、草、畫塗。紺掻、鑓折、染師、檜物師。轆打、船人。針磨、數珠引。挂女、大原人。商人、等人。具足屋、絲屋。皮屋、經物屋。弓師、靱屋。筆結、扇屋。彫物師、鏡屋。傘張、桶結。以上三十六人十八番歌合なり。「續群書類從」卷九百八十二、雜部第百三十二に收めたり。

◎烏丸光廣の傳は「蹴鞠書」の下にあり。

しよくにんづくしうたあはせ

職人盡歌合 一卷 三册

藤原定家の事實を、其の名義によりているろは順に原本所在の丁數を記したるもの。第一冊は「い」より「か」に、第二冊は「よ」より「く」に、第三冊は「や」より「す」に至り、第四冊は地名にかゝる全記事索引にして此の中またいろは順に列擧せられたり。凡て一萬餘を採引す。いま紀州古學館の寫本による。

しよくにんづくしうたあはせ

職人盡歌合 一卷 文亭 一通

戀と題との題にて、諸職人の七十一番の歌合なり。判詞の次に畫あり、彩色密畫にて折本三册に作る。末に「右百工圖、世稱謂職人盡之繪、土佐光信所畫、而歌詞者甘露寺辨親長所賦也。其歌詞錄于別卷云。乙卯三月君美識」とあり。次に明和六年己丑(一七六九)伊勢貞丈の奥書に、「白石の藏本を其の孫源邦二に借濕國人永井幸直の序あり。同年伊豫國人田內秀眞跋行す。

◎荒木田久老の傳は「萬葉考槻の落葉」の下にあり

しよくにんづくしうたあはせ

職人盡歌合 三册

藤原定家の事實を、其の名義によりているろは順に原本所在の丁數を記したるもの。第一冊は「い」より「か」に、第二冊は「よ」より「く」に、第三冊は「や」より「す」に至り、第四冊は地名にかゝる全記事索引にして此の中またいろは順に列擧せられたり。凡て一萬餘を採引す。いま紀州古學館の寫本による。

しよくにんづくしうたあはせ

職人盡歌合 一卷 文亭 一通

戀と題との題にて、諸職人の七十一番の歌合なり。判詞の次に畫あり、彩色密畫にて折本三册に作る。末に「右百工圖、世稱謂職人盡之繪、土佐光信所畫、而歌詞者甘露寺辨親長所賦也。其歌詞錄于別卷云。乙卯三月君美識」とあり。次に明和六年己丑(一七六九)伊勢貞丈の奥書に、「白石の藏本を其の孫源邦二に借濕國人永井幸直の序あり。同年伊豫國人田內秀眞跋行す。

◎荒木田久老の傳は「萬葉考槻の落葉」の下にあり

し有豊案三十巻語多ニ来醜一事亦疎漏。前朝詔ニ故中納言従三位石川朝臣名足、刑部卿従四位下渤海員人三船、刑部大輔従五位上當麻眞人永嗣等ニ分ニ帙修撰以繼ニ前紀一。而国ニ猶豊案一竟無ニ刊正一。其所ニ上者唯二十九巻而已。寶字元年之紀全亡不レ存。臣等捜ニ故實於旧存一。詢ニ前聞於耆老一。綴ニ殘残簡一補ニ闕文一。雅論英猷発ニ蹟謀一者總而載レ之。細語常事理非ニ書策一者並從ニ略諸一。凡所ニ刊削一三巻。並前九十五年四十巻。始レ自ニ草創一。迄ニ于脩撰一。七年於茲。論集總畢其目如レ列云々。また村尾元融の「續日本紀考證」に曰く「釋日本紀、本朝書籍目錄皆云續日本紀四十巻菅野朝臣眞道等撰。而不レ屬之於繼繩公一。藤原。然此書自ニ文武天皇元年一至ニ孝謙天皇二十巻眞道朝臣所レ撰。自ニ廢帝即位一至ニ桓武天皇延暦十年大尾二十巻繼繩公所レ撰。其前後總幾個不レ同而非レ成ニ於一手一者。則撰ニ二君上裴及本書毎巻首所ニ題署一而可レ知矣。盖繼繩公薨時其書首尾未レ備。眞道朝臣獨能奨ニ修成之功一。故釋紀書目係ニ諸一人一歟云々。依て以て本書の由来梗概を覩ふことを得べし。なほ現今の刊本は明暦三年丁酉(一六五七)京都立野春節が點を附したるものなり。本書は「國史大系」の第二巻にも收めたり。該書は、故文學博士小中村清矩氏の校本に據りて、流布本を標註校訂し、内藤廣前、狩谷望之、其の他學者の考按を擧げ、且、續日本紀考證を以て補ひたるものなりといふ。

◎菅野眞道は賓亀中少内記近江少目を歴て、延暦四年左兵衛佐兼東宮學士となり、九年圖書頭兼伊豫守となり、後治部少輔を兼ね、治部大輔民部大輔を歴て左兵衛督、造宮亮、伊勢守、勘解由長官、左衛士督、相模守、但馬守、參議左大辨、太宰大貳等を經、大同二年丁亥(一四六七)山陰道觀察使兼刑部民部となり、また右大辨兼大藏卿に進み從三位に叙せられ、東海道觀察使兼左大辨に遷り、宮内大藏卿を歴、弘仁に至りて近江守を兼ねまた參議となり常陸守に遷る。本書「續日本紀」は其の在職の日、敕を奉じて撰したるものなり。年七十四にて薨す。

しよくにほんぎかうえう

續日本紀綱要　一巻

續日本紀の綱要を採摭記錄したるものなること其の名の表せるが如し。著作の年代及び著者の名未だ詳ならず。

しよくにほんぎかうしよう

續日本紀考證　十二巻　村尾　元融

續日本紀の異本(六種のこと)を校合し、遺漏を補ひ誤字を訂し、故實の考證と難解文句の註釋とを叮嚀にしたるもの。嘉永二年己酉(一八四九)正月の著。明治の初年男元矩の校正出版に係る。

◎村尾元融は遠江濱松藩の儒にて、國史を研究し、新見正路、内藤廣前等と交り、源氏物語の註も成へたる同書の問答數箇を掲げ、其の末に奥書あり。「右本書者加裏裝潢之、一帙今傳寫以附問答之卷尾云天保十一年庚子(一八四〇)五月寺村成相」といふ。「續史籍集覽」の中に收入す。著者寺村成相は主殿と稱す。

しよくにほんこうき

續日本後紀　二十巻　藤原　良房

續日本紀の後を繼げる國史なり。事は淳和天皇の天長十年癸丑(一八二三)二月乙酉より起りて、仁明天皇の嘉祥三年庚午(一八五〇)三月己亥に終る凡て十八年間の國史なり。幕常の幸事は略記すと雖も、人君の擧動に至ては巨細を論ぜずして之れを細錄せり。最初先帝文徳天皇の時太政大臣從一位藤原良房、右大臣從二位藤原良相、大納言從三位伴善男、參議正四位下春澄善縄、散位從五位下大養眞守等に詔して撰修を命じ給ひしが、帝中途にして崩じ給ひたれば、休止したりしを清和天皇再び其の業を繼がしめ給ふ。然るに良相既に薨じ、善男竄罪に處せられ、眞守遠州に吏となりたれば、今や良房、善縄の二人して其の事を擔當し、貞觀十一年己丑(一八五九)八月十四日、功を奏して以聞したるものなり。本書は「國史大系」の第三巻にも收めたり。該書は、故文學博士小中村清矩氏の校本により、傍ら祕閣本其の他二三の校本を參攷して、流布本に校訂標註を加へたるものなりといふ。

◎藤原良房は右大臣冬嗣の子なり。天長中藏人に補し、從五位の下に叙せらる。爾來累進して、左近衛權中將、參議權中納言兼陸奥出羽按察使、右近衛大將、大納言兼民部卿等を歴て、嘉祥元年右大臣に拜し、仁壽殿衛の開正二位に進み兼左近衛大將監

修國史に遷り、天安元年太政大臣となり後從一位に進む。朝廷の恩遇益加る。貞觀十四年壬辰(一五三三)九月薨ず、年六十九、詔して正一位を贈り、美濃公に封じ、忠仁と謚す。世に染殿大臣また白河殿と稱す。

しよくにほんこうきうたのかい

續日本後紀歌解　一巻　荒木田久老

續日本後紀の中の和歌を抄出して解釋したるもの。「槻の落葉」と内題せり。寛政三年辛亥(一七九一)信濃國人永井幸直の序あり。同年伊豫國人田内秀眞整行す。

◎荒木田久老の傳は「槻の落葉」の下にあり

しよくにほんこうきさくいん

續日本後紀索引　一冊

藤原眞房、春澄善縄の撰かゝる「續日本後紀」所載の事實を、其の名義によりているは順に原本所在の丁數を記したるもの。第一冊は「い」より「か」に、第二冊は「よ」より「く」に、第三冊は「や」より「す」に至り、第四冊は地名にかゝる全記事索引にして此の中またいろは順に列擧せられたり。凡て一萬餘を採引す。いま紀州古學館の寫本による。

しよくにほんこうきるくう

續日本後紀類標　一巻

續日本後紀の中所載の事件ないは分に標出して其の所在丁數を記したるものなり。例へば「伊」の部に「伊勢齋宮一ノ二十二右」「石床二四ノ十五左」等の如し。

しよくにんかせん

職人歌仙　一巻　烏丸　光廣

醫師、陰陽師、佛師、經師、木匠、鍛冶、刀磨、錺物師、轉經、百目、深草、壁塗、細工、鑓折、塗師、檜物師、轉巫女、大原人、商人、薬人、具打、船人、針摺、數珠引、挂女、足屋、絲屋、皮屋、鍵物屋、弓師、親属、筆結、扇屋、彫物師、鏡屋、傘張、桶結。以上三十六人十八番歌合なり。「續群書類從」卷九百八十二、雜部第百三十二に也も收めたり。

◎烏丸光廣の傳は「職人歌合」の下にあり。

しよくにんづくしものあはせ

職人盡歌合　三冊

月と戀との題にて、諸職人の判詞の次に歌あり。彩色寫書にて折本三冊に作る。末に「右百工圖、世稱謂職人盡歌合、而歌詞者廿露等辨親長所賦也。其歌詞錄于別巻云。乙卯三月君美識」とあり。次に明和六年己丑(一七六九)伊勢貞丈の奥書に、「右百工圖、世稱謂職人盡歌合三巻、畫は光信、書は東坊城和長卿、淺彩なれども其の圖ばえなり。此の歌合作者烏丸光廣卿といふ説あれども、和長卿眞蹟傳ほりたれば、俗説なること知るべし」云々といへり。

しよくにんづくしものかあはせ

職人盡狂歌合　一巻　文亭　一通

しよくもつてきえう

食物摘要　六巻　館林　了菴

しよくもつちしん

食物知新　七巻　神田　玄泉

あらゆる食品を網羅して、其の略圖を示し、各、名稱、性質、效用等を説明し、更に醸造製法を記せり。和漢名稱の疑はしきは字書に據りて正せりといふ。享保十一年丙午(一七二六)の作にかゝる。

◎神田玄泉は醫家なり。本書の外に、本草考、日東魚譜、鐘鵐經註、十四經註、難經原奸、疹痘口訣、眼科方藥、婦人方藥等あり。

しよくもんだふ

續日本紀問答　一巻

續日本紀の中の不審數十箇條を掲げて一々說明考證したるもの。渡邊蓊、生駒正直、吉田正秋、横山直方、金子宅弘等の質問に對して著者の答へたるものなり。來に著者等村成相の問に、穗井田忠友の答へたる同書の問答數箇を掲げ、其の末に奥書あり。

あらゆる食品類に關する事を、名義氣味禁忌主治等の目に分ちて集錄したるものなり。延寶六年戊午(一六七八)上木す。

しよくもつでんしんさん 食物傳信纂 ㊀十二卷 稻生 宣義

草類百數十種を撰出列記したるものなり。元祿八年乙亥(一六九五)藩主加州侯の命によりて纂輯したるところなりといふ。

◎稻生宣義の傳は『庶物類纂』の下にあり。

しよくもつふくようのまき 食物服用之卷 ㊀一卷 小笠原政清

飲膳作法の一切を詳叙したるもの。膳に向ひて覺悟の事、食まゐり候しあはせの事、二の汁のまゐりやう、食のさいしんうくる事等より、四足の汁、貴人へめし候はし御はし下さるゝ時等に至る百餘項を掲げ、卷末に當家の祕書を傳授する由の奥書ありて下の連名あり。永正元年甲子(一五〇四)九月七日小笠原備前守政清、天文七年戊戌(一五三八)二月八日伊藤又右衞門尉宗家、天正八年庚辰(一五八〇)六月三日伊藤兵部少輔正家、寛永二年乙丑(一六二五)八月十三日伊藤兵衞尉宗旁、伊藤新吾入道桃庵ホト等なり。『續群書類從』卷五百六十四、飲食部第二にあり。

◎小笠原政清の事は『弓箭纂要』の下にあり、

しよくもつほんざう 食物本草 一卷 宜春庵

各種の食品類をば穀、菜、水草、菌、菓、魚、介、禽、獸の九部に分ちて各々其の性質效用等を說明したるものなり。寶曆十一年辛巳(一七六一)刊行す。

◎宜春庵(名古屋玄醫)の傳は『丹水子』の下にあり

しよくもつでんしんさん 食物傳信纂 ㊀十二卷 稻生 宣義

草類百數十種を撰出列記したるものなり。元祿八年乙亥(一六九五)藩主加州侯の命によりて纂輯したるところなりといふ。

◎稻生宣義の傳は『庶物類纂』の下にあり。

しよくもつふくようのまき 食物服用之卷 ㊀一卷 小笠原政清

飲膳作法の一切を詳叙したるもの。膳に向ひて覺悟の事、食まゐり候しあはせの事、二の汁のまゐりやう、食のさいしんうくる事等より、四足の汁、貴人へめし候はし御はし下さるゝ時等に至る百餘項を掲げ、卷末に當家の祕書を傳授する由の奥書ありて下の連名あり。永正元年甲子(一五〇四)九月七日小笠原備前守政清、天文七年戊戌(一五三八)二月八日伊藤又右衞門尉宗家、天正八年庚辰(一五八〇)六月三日伊藤兵部少輔正家、寛永二年乙丑(一六二五)八月十三日伊藤兵衞尉宗旁、伊藤新吾入道桃庵ホト等なり。『續群書類從』卷五百六十四、飲食部第二にあり。

◎小笠原政清の事は『弓箭纂要』の下にあり、

しよくもつほんざう 食物本草 一卷 宜春庵

各種の食品類をば穀、菜、水草、菌、菓、魚、介、禽、獸の九部に分ちて各々其の性質效用等を說明したるものなり。寶曆十一年辛巳(一七六一)刊行す。

◎宜春庵(名古屋玄醫)の傳は『丹水子』の下にあり

しよくもつでんしんさん 食物傳信纂 ㊀十二卷 稻生 宣義

草類百數十種を撰出列記したるものなり。元祿八年乙亥(一六九五)藩主加州侯の命によりて纂輯したるところなりといふ。

◎稻生宣義の傳は『庶物類纂』の下にあり。

しよくもつほんざいたいせい 食物本草大成 四卷 新井 了庵

諸家の本草書中より、精確のもの二百數十種を拔抄して其の性質效用、及び發誤等を掲げたるもの、元祿六年癸酉(一六九三)の編纂、翌七年出版す。著者新井了庵は京都の人、本書は其の門人木村了古、町田了仙の校訂するところなり。

しよくもつわかほんざう 食物和歌本草 三卷 山岡 元隣

食物の品種を擧げ、毎品和歌に詠じて其の性效能毒を說示せり。寬政七年乙卯(一七九五)の作なり。

◎山岡元隣は京都の人なり。字を德甫と稱し、號を面盤齋といふ。また抱甕軒の別號あり。北村季吟の門人にして和學に通じ、著書多し。列擧すれば、源氏家傳抄、百人一首新抄、伊勢物語言餘抄、徒然草鐵鉢和、同別傳、方丈記抄、同別書、今川抄、腰越狀抄、風月往來抄、水鏡抄、誰が身上、百物語評判、吉野山獨案內、歌仙俳諧捌、俳諧合、同仕樣、諸國獨吟、身藥千句、醫藥集大全、家內幸藏、少杯、寶藏、增補食物歌本草、大學明德之圖、歷代異口考、四書評論等なり。

しよくもつわかほんざう 食物和歌本草 三卷 山岡 元隣

食物の品種を擧げ、毎品和歌に詠じて其の性效能毒を說示せり。寬政七年乙卯(一七九五)の作なり。

◎山岡元隣は京都の人なり。字を德甫と稱し、號を面盤齋といふ。また抱甕軒の別號あり。北村季吟の門人にして和學に通じ、著書多し。列擧すれば、源氏家傳抄、百人一首新抄、伊勢物語言餘抄、徒然草鐵鉢和、同別傳、方丈記抄、同別書、今川抄、腰越狀抄、風月往來抄、水鏡抄、誰が身上、百物語評判、吉野山獨案內、歌仙俳諧捌、俳諧合、同仕樣、諸國獨吟、身藥千句、醫藥集大全、家內幸藏、少杯、寶藏、增補食物歌本草、大學明德之圖、歷代異口考、四書評論等なり。

しよくもつわかほんざいたいせい 食物本草大成 四卷 新井 了庵

諸家の本草書中より、精確のもの二百數十種を拔抄して其の性質效用、及び發誤等を掲げたるもの、元祿六年癸酉(一六九三)の編纂、翌七年出版す。著者新井了庵は京都の人、本書は其の門人木村了古、町田了仙の校訂するところなり。

しよくもつわかほんざう 食物和歌本草 三卷 山岡 元隣

食物の品種を擧げ、毎品和歌に詠じて其の性效能毒を說示せり。寬政七年乙卯(一七九五)の作なり。

◎山岡元隣は京都の人なり。字を德甫と稱し、號を面盤齋といふ。また抱甕軒の別號あり。北村季吟の門人にして和學に通じ、著書多し。列擧すれば、源氏家傳抄、百人一首新抄、伊勢物語言餘抄、徒然草鐵鉢和、同別傳、方丈記抄、同別書、今川抄、腰越狀抄、風月往來抄、水鏡抄、誰が身上、百物語評判、吉野山獨案內、歌仙俳諧捌、俳諧合、同仕樣、諸國獨吟、身藥千句、醫藥集大全、家內幸藏、少杯、寶藏、增補食物歌本草、大學明德之圖、歷代異口考、四書評論等な

く所在及び當分住宅、代臣、差配等の事を註したるもの。水戸家より山口伊豆守に至る「右拜領屋敷數多く、或は身代相應より坪數廣く所持仕候分相認申候。植田備中守、島田佐渡守、佐々木五郎右衛門、山岡助右衛門、右萬石以上屋敷改候帳面、享保御役中屋敷數多く持候者、又は數は少く候とも、上屋敷にても、中屋敷にても、相應より格別廣き屋敷持候ものは、居屋敷の外の屋敷の事と御座候御書付の上なり以て書出候帳」と末書せり。

しよけおほやしきよせちやう
諸家大屋舗寄帳　本一冊

諸家の大屋舗を列舉し、水戸に始りて山口、伊豆等に終れり。

しよけかうみやうき
諸家高名記　十五卷

國

凡て我が戰國時代の武邊逸事を輯集したるもの。其の目錄の一班を擧ぐれば、卷一は石田佐五右衛門秀吉公を欺む事、階り愎腹の女子が男子に變る術の事、江州光明寺の觀世音利生の事、細川忠興朝鮮陣軍忠の事、附り加茂大宮司松下丹波へ下向の事、小野木縫殿助田邊の城實の事。百々越前守早打にて京へ登る事、附り入江左近後妒を以て忠臣を支ふる事、佐沼十郎兵衛討手を蒙む事。小西攝津守憤をつよく蕊る事、附り前右衛門督義鄕勇氣の事、石田治部少輔が家來鼻をそがるゝ事を收め、卷二卷以下凡て數十項あり。平假名記繪圖入にて兒女の讀物に作れるなり。正德四年甲午（一三七四）出版す。本書の前編として「諸家前太平記」十五卷あり。

しよけかんみ
諸家鑑　本一卷

德川家の一門諸代上方衆國衆の順序を記したるもの。卷末には關東入國の際の知行割を附錄せり。

しよけかげふき
諸家々業記　一卷　二條　康道

撮家々業、神祇道、陰陽道、儒門紀傳道、同明經道、和歌、雅道、和琴、琵琶、箏、蹴鞠、裝束、雅等の諸家業を記したるもの。文化十一年甲戌（一八一四）七月、著者の奥書あり。「輪池叢書」第十八にあり。奥書に著者の家記中より殊に抄出したる由あり。寛文八年戊申（一六六八）刊行す。別に文化十一年甲戌（一八一四）刊行す。本書の奥書を附して「輪池叢書」第十八に收めたる書もあり。

◎二條康道の傳は「寛文記」の下にあり。

しよけかんじやうろく
諸家感狀錄　三十一卷

諸家所藏の武家の感狀尺牘等を纂集したるもの。凡て三百數十通あり。足利時代より德川時代のを收めたり。

しよけき
諸家記　本八卷

德川時代に現存せる諸武家の略系にして、其の本國家紋分派生卒法號等を記し、大抵往古より德川三代將軍家光の比に至れり。

しよけきうめいもんだふ
諸家糺明問答　本一卷

寛政文化年中に於ける德川幕府の糺明書等を輯錄せるなり。寺院取扱、寺社取扱、神主取扱、席順、本院女房置候取計、本院取扱、寺院仕置、無宿坊主道拂問答、神位之內、社僧席順、虛無僧、元祿御法御書付、別紙切紙、口上問答等の目より成る。

しよけきんだいでん
諸家近代傳　二卷

弘安年中より、慶長年中に至る諸名家の敍任生卒等を列記したるもの。卷末には二條家歌道々統の系圖、葉室の系圖、同古今傳授歌道相傳の圖等を附載し、一名を單に「諸家傳」ともいふ。著者は藤原公實といふ一說もあり。

しよけくわんゐしようしんのしだい
諸家官位昇進之次第　一卷

德川三代將軍家光時代より、文化年中までの上下諸家官位昇進の次第を記したるものなり。

しよけけいづ
諸家系圖　十四卷　洞院　公定

本書は原名を「歷朝帝王分脈」といふ該題下に解題す。

しよけけいづらん
諸家系圖纂　本七十三卷　德川　光圀

源平以下諸家の系圖を纂輯類別したるもの。卽ち姓を以て氏を統べ、氏を以て稱を分ち、公武を先後して下藩別にまで及び當分住宅、代臣、差配等の事を註したるもの。水戸家より山口伊豆守に至る「右拜領屋敷數多く、或は身代相應より坪數廣く所持仕候分相認申候。植田備中守、島田佐渡守、佐々木五郎右衛門、山岡助右衛門、右萬石以上屋敷改候帳面、享保御役中屋敷數多く持候者、又は數は少く候とも、上屋敷にても、中屋敷にても、相應より格別廣き屋敷持候ものは、居屋敷の外の屋敷の事と御座候御書付の上なり以て書出候帳」と末書せり。

しよけおほやしきよせちやう
諸家大屋舗寄帳　本一卷

諸家の大屋舗を列舉し、水戸に始りて山口、伊豆等に終れり。

しよけかうみやうき
諸家高名記　十五卷

國

凡て我が戰國時代の武邊逸事を輯集したるもの。其の目錄の一班を擧ぐれば、卷一は石田佐五右衛門秀吉公を欺む事、階り愎腹の女子が男子に變る術の事、江州光明寺の觀世音利生の事、細川忠興朝鮮陣軍忠の事、附り加茂大宮司松下丹波へ下向の事、小野木縫殿助田邊の城實の事。百々越前守早打にて京へ登る事、附り入江左近後妒を以て忠臣を支ふる事、佐沼十郎兵衛討手を蒙む事。小西攝津守憤をつよく蕊る事、附り前右衛門督義鄕勇氣の事、石田治部少輔が家來鼻をそがるゝ事を收め、卷二卷以下凡て數十項あり。平假名記繪圖入にて兒女の讀物に作れるなり。正德四年甲午（一三七四）出版す。本書の前編として「諸家前太平記」十

五卷あり。

しよけかぶみ
諸家鑑　本一卷

德川家の一門諸代上方衆國衆の順序を記したるもの。卷末には關東入國の際の知行割を附錄せり。

しよけかげふき
諸家々業記　一卷　二條　康道

撮家々業、神祇道、陰陽道、儒門紀傳道、同明經道、和歌、雅道、和琴、琵琶、箏、蹴鞠、裝束、雅等の諸家業を記したるもの。文化十一年甲戌（一八一四）七月、著者の奥書あり。「輪池叢書」第十八にあり。奥書に著者の家記中より殊に抄出したる由あり。寛文八年戊申（一六六八）刊行す。別に文化十一年甲戌（一八一四）刊行す。本書の奥書を附して「輪池叢書」第十八に收めたる書もあり。

◎二條康道の傳は「寛文記」の下にあり。

しよけかんじやうろく
諸家感狀錄　三十一卷

諸家所藏の武家の感狀尺牘等を纂集したるもの。凡て三百數十通あり。足利時代より德川時代のを收めたり。

しよけき
諸家記　本八卷

德川時代に現存せる諸武家の略系にして、其の本國家紋分派生卒法號等を記し、大抵往古より德川三代將軍家光の比に至れり。

しよけきうめいもんだふ
諸家糺明問答　本一卷

寛政文化年中に於ける德川幕府の糺明書等を輯錄せるなり。寺院取扱、寺社取扱、神主取扱、席順、本院女房置候取計、本院取扱、寺院仕置、無宿坊主道拂問答、神位之內、社僧席順、虛無僧、元祿御法御書付、別紙切紙、口上問答等の目より成る。

しよけきんだいでん
諸家近代傳　二卷

弘安年中より、慶長年中に至る諸名家の敍任生卒等を列記したるもの。卷末には二條家歌道々統の系圖、葉室の系圖、同古今傳授歌道相傳の圖等を附載し、一名を單に「諸家傳」ともいふ。著者は藤原公實といふ一說もあり。

しよけくわんゐしようしんのしだい
諸家官位昇進之次第　一卷

德川三代將軍家光時代より、文化年中までの上下諸家官位昇進の次第を記したるものなり。

しよけけいづ
諸家系圖　十四卷　洞院　公定

本書は原名を「歷朝帝王分脈」といふ該題下に解題す。

しよけけいづらん
諸家系圖纂　本七十三卷　德川　光圀

源平以下諸家の系圖を纂輯類別したるもの。卽ち姓を以て氏を統べ、氏を以て稱を分ち、公武を先後

して下藩別にまで及び當姓を以て記錄せり。各、源氏、平氏、藤原、橘、紀、清原、中原、菅原、在原、和氣、丹波、惟宗、坂上、雙岡、賀茂、安倍、穗積、田口、大江、小野、日下部、越智、伴、大中臣、滋野、三枝、宮道、雙臣、丹治、日奉、眞苹、御神木、蕃別大藏、多多眞、秦等の本枝族系、及び本姓未詳家、社家等凡て四十四姓五百九十三氏のを收めたり。元祿五年壬申（二六九二）五月發旦編輯に與りし丸山可澄の凡例あり。

◎德川光圀の傳は「大日本史」の下にあり。

しよけけいふ
諸家系譜　本二百卷

卷一、二、三、德川氏元祖以來の詳細系譜を揭げ、卷二百、松前系譜に終れり。

しよけこうはうき
諸家興亡記　本十卷

豐臣德川の時代にして天和の頃に至る、二百有餘家の盛衰興亡の事績を記したるもの。「武家譜略」「國家變異錄」、「古今大小名家傳記」等と體例殆んど相類し、記事互に詳略あり。

しよけこくさんぶつのぎにつきとりしらべ
諸家國產物の義に付取調　本一冊

天保年度より、嘉永年度に至る調書なり。幕府評定所より引繼ぎて、內閣文庫に保存せるものなり。

しよけこじつしふ
諸家故實集　本三十六卷

武家諸家の故實類を輯錄したるものなり。全卷三十五、目錄一卷、凡て三十六卷あり。

しよけこじつしふもくろく
諸家故實集目錄　本一卷

武田家記錄の目錄（三十五卷）、武田家小卷物の目錄（三十八卷）、武田家小卷物の目錄（十二卷）の目錄なり。天正四年丙子（一二三六）高坂彈正寫本の奥書あり。

しよけざうしよいんいちらん
諸家藏書印一覽　本一卷　堀　誠齋

近世諸家の藏書の印を集めたるもの。悉く切截して大小朱墨凡て五百十三箇を貼成す。安政六年己未（一二五九）秋七月の末書あり、曰く「藏書中有他氏藏書記印、乃燕居之日案之爲一册爾」と。

しよけざうしよもくろく
諸家藏書目錄　本一卷

神門御小道具掛御預御本目錄、桑名侯藏納卷物目錄、松物類控帳、稻庭御本目錄、神田橋御手鑑、軸山侯藏納卷物目錄、村上大和守義雄藏書御記錄等を集錄す。諸家に記錄目錄、住吉內記所藏本目錄等を集錄す。諸家を分ちて何れも書名と卷數とを揭げ、凡て半紙七十五枚に寫傳す。

しよけしようしんろく
諸家昇進錄　一卷

詳細に公卿諸家の歷代補任の次第を記載したるもの

しよけしんぴろく
諸家深秘錄　本十二卷

慶長以來諸家の早變、または敎令條目等を集めたるもの。例へば龍造寺伯奄誅戮之事、附り鍋島家之事。備中國高松城水攻、附り清水宗治兄弟生害之事。今川氏眞失國根元、附り龍臣三浦行跡之事。田中筑後守殿斷絕子孫流浪、附り田中大隅守殿家之事。吉川惟足出世神道之事。牧野駿河守殿毒藥之事。分部伊賀守殿於在所橫死之事、以上第一卷の目次なり。第二卷以後同種の記事、凡て百餘を列載す。別に「諸家大祕錄」と稱せる十二卷のものあり。本書と同なり。

しよけじんぶつし
諸家人物志　本二卷　池永　豹

儒家醫家歌學國學書畫等の諸家の小傳、並に著述目錄を記載したるもの。寬政四年壬子（一七九二）刊行。同十二年庚申岩川愚再校して世に行ふ。著者池永豹は南山道人と稱す。

しよけずゐひつ
諸家隨筆　本四十卷

本書は二十五種の隨筆叢書を纂輯したるものなり。編者年代共に詳ならず。

しよけせいしぐわんそき
諸家姓氏元祖記　本一卷　淺井　方勝

多くの姓氏を類別して、其の元祖の名を分註したるもの。巻末には本文氏族の讀習あるものを抄出して、假字を附したり。安永四年乙未(一七七五)に記す所なり。

しよけせいしぐわんそでん
諸家姓氏元祖傳　木一巻

源平藤橘菅清和等以下數十諸姓の元祖を尋討したるもの。明治八年内務省の寫本するところなり。

しよけせいすゐたいひろく
諸家盛衰大秘錄　木三巻

慶長以來の諸武家の、興廢盛衰の事績を記したるもの。蒲生家斷絶の事に始まり、太田但馬守狐を殺して禍災に遇ふ事に終れり。

しよけせいひろく
諸家政祕錄　木十巻　馬文耕

内題に「近世諸家政祕錄」として、諸家總論、諸大名國究に及びし論、諸家賄賂に耽る事等より、諸家の傳歷、時勢の變遷等を記し、君臣之辨に終る。凡數十條あり。安永八年己亥(一七七九)淺草道人淺草茅舍に書する由あり。十巻二册に寫傳す。

◎馬文耕の傳は「近世江都著聞集」の下にあり。

しよけぜんたいへいき
諸家前太平記　十五巻　國護

「諸家高記前編」と記して、太閤秀吉公立身の由來の事、附り鎭宅靈府の祕法の事、持萩の黄門配流の事。眞田安房守昌幸沼田を北條へ渡さる、事、附り上州名來美騷動の事、箱根の山中新城の事。秀吉公關東御發向の事、附り加賀越後勢松枝の城仕寄の事、小幡彦三郎宮崎の砦沒落の事。戸田三郎右衞門尉悪次に後殿を仰せ付らる、事、附り秀吉公白紙を以て城を作り給ふ事、大道寺駿河守政繁開城の事。第二巻以下同種のものにして亦數十項あり。絵入假名書にして正德六年丙申(一七一六)出版せらる。十五巻の内首の一巻は目錄なり。著者は「諸家高名記」の著者と同人なるべし。

しよけちふせつき
諸家知譜拙記　五巻　速水　房常

諸公卿の系譜を記したる「諸家傳略」を增補したるもの。原書は眞享の頃土橋定代が抄出上梓せしものなるを、享保十年乙巳(一七二五)の頃何人か之れを補刻したるなれば、延享二年乙丑(一七四五)に房常が更に增補刊行し、明和二年乙酉(一七六五)に再び補刻したるもの、即ち現行の本なり。檢索に便せん爲に每家別々に錄したり。

◎速水房常の傳は「擧申職原壁要」の下にあり。

しよけでん
諸家傳　三巻

此の書は一名「諸家近代傳」の下に解題したり。

しよけてんづ
諸家點圖　一巻

諸家の讀書例、乎許斗點の如き讀符を點圖したるもの。喜多院點、東南院點、觀堂點、中院僧正點、寶幢院點、智證大師點、西墓點、三寶寺點、水尾點、禪林寺點、遍照寺點、香隆寺點、淨光房點、順曉點、俗家點、俗點、經點等を圖す。「群書類從」巻四百九十五、雜部第五十に在り。

しよけでんりやく
諸家傳略　三巻　土橋　定代

諸家の略傳を掲げたるもの。眞享年代(一七四四―一七四六)出版す。

しよけひいん
諸家祕隱　木二十四巻

德川幕政時代における德川一族、及び諸大名に關する雜事を、年序に係はらず筆錄したる斷片假字の書なり。書中能く隱微の事實を探り記したれば、祕隱の名を附したるなるべし。

しよけひやうぢやうき
諸家評定記　二十巻　小笠原勝三

將士、諸奉行、小身の人、取籠者、囚人の番、旅人、檢使、人に藥を與ふるもの、馬醫、地の形相、軍の祭、合戰等の事、修身奇兒の事に至るまで心得記くべき件數百箇條を記したるもの。假字文通俗本なり。元和七年辛酉(一六二一)の著、明曆四年戊戌(一六五八)刊行す。

◎小笠原勝三の傳記は「軍法功者書」の下にあり。

しよけぶんげんしよ
諸家分限書　木一巻

加州、薩州、仙臺、最上諸家の分限を記したるものなり。

しよけまるけいづ
諸家圓系圖　二折

上折に清和天皇を中心元祖とし、下折は源忠を中心元祖として、各蠻繰の圓表に作りなせる諸家の系圖なり。寬文延寶の頃に至れり。

しよけみちあんないのき
諸家道案内記　木四巻

諸家萬石以下百石に至るまでの姓名、支配役名、及び石高住所家紋等を記したるものなり。各いろは分に列ねたり。著者は櫻井某とのみ記して其名詳ならず。

しよけめいきもくろく
諸家名目記錄　木一巻

最初に「李部王記」以下、諸家の日記類七十二部を列擧し、次に永仁二年甲午(一二九四)八月四日書寫の奥書を附し、追加として、記錄、有職、管絃等の書類二百十部、和歌の類八十二部、和歌雜類二百〇四部、また記錄類百〇四部、公事類二十部、官位補任類三十部等の目を掲げたり。

しよけもん
諸家紋　木一巻

永正七年庚午(一五一〇)の頃、諸家の紋を模圖したるもの。其の數頗る多し。

しよけもんおこりせう
諸家紋起抄　木二巻

德川時代諸大名の家紋の由來を記したるもの。四十餘家のを收めたり。

しよけもんしよさん
諸家文書纂　木十四册

白河結城の古文書より始めて、諸家古來の文書類を集輯したるものなり。凡て數百千通もあるべし。

しよけもんづくし
諸家紋盡　木一巻　佐々木秀勝

當代諸家の紋所姓名等を記したるもの。卷末に天文八年己亥(一五三九)卯月十九日と記して著者の名及び花押あり。

じよげんさんてんれい
序言三轉例　一巻　鹿持　雅澄

萬葉集古義の附錄として作られたるものにて、なかさまく、かたりはましを、やすけく等の延言といへる例を集めて、其の轉用を、さ行、は行、や行、ら行、が行等に分類したるものなり。

◎鹿持雅澄の傳は「古言證通」の下にあり。

しよけんじかう
書言字考　十巻　槇島　昭武

「和漢音釋書言字考節用集」と內題して、いろは順に熟語を列輯して、音訓字義を註せる辭書なり。乾坤、時候、神祇、官位、人倫、支體、氣形、生植、服食、器財、言辭、數量、日本姓氏等に分類し、各類中は五十音順による。林逸の「節用集」を增補したるもので、「合類節用集」と通稱せり。元祿十一年戊寅(一六九八)の自序あり。十巻三册に發行す。

◎槇島昭武の傳記は「有職小說」の下にあり。

しよげんぞくかい
書言俗解　六巻　榊原　玄輔

經傳史紀百家の書中より有らゆる成語を採摘して之れを和解し、其の出處書目を示したるもの。部門を七十五に分ち附記百數十目あり。盧陵胡氏の「書言故事」に倣ひて著したるものなりと云ふ。眞享二年乙丑(一七四五)に刊行す。

◎榊原玄輔の傳は「印章備考」の下にあり。

しよこうぐわさん
諸公畫贊　一巻　岡田　牝沖

俳諧諸家の畫像を圖して、其の上に各自の讃を請ひ揭げたるもの。其の芭蕉、嵐雪、其角等過去の人に限り、古像或は想像を以て作りたるとなり。著者肖壇の像を合せ凡て三十餘あり、皆當年の俳諧者なり。下半册には春夏秋冬に排して各家の俳諧幾首づつを例擧す。享保十九年甲寅(一七三四)の凡例あり。著者岡田牝沖は江戸の人にて巢青壇と稱す。

しよこうけんかうろく
諸侯賢行錄　木一巻

德川時代諸侯の善政嘉行を記したるもの。肥後侯賢行錄、米澤侯賢行錄、建學大意、時習博文兩館圖及び其の學士姓名錄抄(以上湯淺子誠の錄する所)薩州學館記、城州淀侯の事、紀州侯の事、孝子林平の傳、泉州岸和田侯善政の事等を收めたり。天明七年丁未(一七八七)田世誠臨寫の奥書あり。

しよこくあんないたびすゞめ
諸國案内旅雀　七卷
日本國中江戸より諸國への海陸里程を記し、貴賤の長短、二十四節、日月長短、日入日歿、汐の滿干を知る事等を記せり。元祿十四年辛巳(一三六一)の版刻なり。

しよこくいちのみやかう
諸國一宮考　木四卷　隅田　定帖
諸國一宮の地名祭神、緣起、沿革等を考證したるもの。五畿七道と順序して掲げたり。

しよこくいちのみやじんめいちやう
諸國一宮神名帳　木一卷
諸國一宮の神名を列舉し、附錄に諸神社の鎭座等を略說す。本文の末に卜部宿禰と奥書あり。右神記の木名粗管窺を以て之を註錄す其の未だ詳ならざるものは、他日之を考索せんものなり」とあり。

しよこくいつきしふ
諸國一揆集　木一卷
寛永十四年丁丑(一二九七)肥前島原一揆。天明三年癸卯(一四四三)信州佐久郡一揆。同六年甲州巨摩郡一揆。寛政八年丙辰(一四五六)伊勢國津領一揆。享和元年辛酉(一四六一)出羽國村山領一揆。天保七年丙申(一四九六)甲斐國一揆、同八年攝州大阪一揆等を輯錄せり。

しよこくおんせきしよかきぬき
諸國御關所書拔　木一卷
德川幕府時代諸國關所通行者心得を記したる書。末に箱根關所高札の文を載せたり。

しよこくかいじやうみちのりき
諸國海上道乘記　木一卷
卷首に二十四方風の圖を揭げ、次に大阪より長崎に至る乘船次第を始めとして、全國を十五區に分ち、有名の諸港への里路乘程を記し、最後に、肥前唐津、名護屋より高麗國への船路を記せり。

しよこくかいりくき
諸國海陸記　木一卷
此の書は船路行程の事を詳說したるものなり。

しよこくかいりくだうちうき
諸國海陸道中記　一卷
諸國海陸の道程を記し、東海道、木曾路、江戸等より、「日光道中、富士參詣、身延參詣、鹿島香取道其の他を記し、卷首に御定賃物、貫目駄賃等も記せる俗書なり。天明四年甲辰(一四四四)江戸に於て版行す。

しよこくかいりくだうていちやう
諸國海陸道程帳　木一卷
大阪より西國諸方へ海陸道程を記し、卷末に京より江戸への道中、美濃道、木曾路、甲斐道、日光道等、驛々の里程をも記す。

しよこくかぢけいづ
諸國鍛冶系圖　木一卷　南　一範
八十九代龜山院の文應(一九二〇)比以下、後小松帝の明德の少し後に至れる刀劍鍛冶の系譜なり。卷端に慶長四年己亥(一二五九)冬日の自序あり。著者南一範は玉敬と稱す。

しよこくかぢよせ
諸國鍛冶寄　木二卷　深尾　直繼
諸國刀鍛冶の系譜を掲げ、其の長所を擧げ、出來を評論鑑定したるもの。慶長十九年甲寅(一二七四)直繼の奥書あり。「續群書類從」卷九百二十八上下、雜部第七十八にあり。著者深尾直繼は四郎右衛門と稱せり。

しよこくかつせんりやくき
諸國合戰略記　木一卷
保元元年丙子(一八一六)の亂より、元和元年乙卯(一二七五)の大阪陣に至る各國の戰亂記なり。各戰の年月地名將名等を記し、各條正保四年丁亥(一三〇七)を距る年數を記入したるは、此の書當年の著作なるべきを知る。

しよこくきだん
諸國奇談　木一卷
諸國の奇事怪談を集錄したるもの。狐の罪蹟の事より大蝦蟇の事に至る、四十九條あり。

しよこくぐんがうかう
諸國郡鄉考　三卷　富永　春部
「和名抄」中より抄出せる郡鄉の考なり。此の三卷には畿內のみを載す。嘉永五年壬子(一二五一二)彦

麻呂の序あり、明治三年男爵濱の校正出版するところなり。著者當永卷部は越後の人なり。

しよこくけいさいろく
諸國圭齋錄　木六冊
日本全國諸宗諸派の寺院の御朱印高を列載したるものなり。

しよこくけんじやうものしふ
諸國獻上物集　木一卷
德川時代各國諸大名の居城の地名石高を記し、幕府へ獻上品の產物を載錄したるものなり。

しよこくこじだん
圖繪諸國古寺譚　五卷
古來有名なる寺院の因緣物語を集めたるもの。向原寺、天王寺、元興寺、西大寺、東大寺、興福寺、延曆寺、三井寺等凡て六十箇寺を擧げ、每寺其の建立史より、緣起に關する俗說を述べて圖繪を插入せり。孝明天皇の嘉永三年庚戌(一二五一〇)正月の版也。

しよこくさいたんでふ
諸國歲旦帖　三卷
天明四年甲辰(一四四四)同五年の歲旦を誌きたる諸國名歌の俳諧を集めたるもの。國別にして凡そ一千數百首を收む。皆當年の俳諧者なり。

しよこくさいやくちやう
諸國採藥帳　木五卷　松井　重康
官命を帶びて諸國に採藥したる時の日記なり。編者の自序末に、「此の採藥記數多燒亡して不全、殘稿を只埋之置くも腐ふくる〳〵業なれば父の餘意を繼き一二の遺書を拾ひ册子に綴れるまゝに、其の大意を述事耳なり」とあり。卷册に「享保己亥(一三七九)予奉命始使於四方以檢查和邦之藥物焉松井牢兵衛重康敬白」と刻せる朱印を捺せり。

しよこくさうもくづ
諸國草木圖　木二卷　小林　豐章
彩色草木圖にて、卷端豐章の書に、「寬政十午年二四五八(一二)月、肥前國長崎爲御川被差遣候節、從彼地肥後國天草郡見猿御番所、新規就御取建地所、爲見分罷越、其國之草木並從琉球國持渡候草木生寫」とあり。各草木の名稱下に、寫生年月、及び場所等を記せり。

しよこくさんぶつづゑ
諸國產物圖繪　木十五册
草木禽獸魚等を圖して其の名稱方言等を記したるもの。伊勢、美作、加賀、越中、越後、陸奥、諸藩の物產繪圖帳を集輯したるものなり。

しよこくしいやりやう
諸國寺社領　木一卷
諸州の寺社領の石高を記したるもの也等社總數三千四百九十五箇所領高三十萬三千五百六十石あり遠州秋葉山、江州多賀社以下諸國社寺の略緣起也。

しよこくじやうしゆき
諸國城主記　木一卷
全國歷代城主の姓名、石高等を記せり。享保年間のものにまで至れり。當時の作なるにや。

しよこくしろのづ
諸國城之圖　木八帖
本邦各國の城廓の平圖を集錄したるもの。總數凡そ百二十種あり。城主の名を附記せり。

しよこくじんじやぶるゐ
諸國神社部類　木七册
五畿內、東海道、東山道、南海道、西海道等の神名及び各緣起等を集類したるものなり。

しよこくせんろづ
諸國船路圖　木四帖
全國船路を、着色を以て詳細に記示したる地圖なり。春夏秋冬の四帖に作れり。

しよこくたびすゞめ
諸國旅雀　九卷
日本諸國の旅行案內記なり。海陸共に其行路里程を記す。享保五年庚子(一三八〇)の版行にかゝる。橫綴九册あり。

しよこくぢしやりやくえんぎ
諸國寺社略緣起　木一卷　實相院眞言
諸國地震記　木一卷

白雉年中諸國大地震ありて、山川崩涼し、人畜死傷したる有樣より、安政二年乙卯(二五一五)江戸其の他の大地震に至る古來全國の地震大略を記したるものなり。其の數凡て五十一あり。

しよこくづゑねんちうぎやうじたいせい
諸國圖會年中行事大成　十二卷

本朝六十餘州の年中行事、即ち神社佛閣の祭祀法會の次第、及び村閭に傳はる祓賣等をは、當時の式を其の家々に尋れ、圖をも插入して詳細に記述したるもの。書は春曉齋蓮水恒章の手に成れり。文化三年丙寅(二四六六)に刻成したる現行の刊本(六卷)には、正月より六月までにて閉げたるは惜むべきことなり。

しよこくてんさいろく
弘化丁未諸國天災錄　初一卷　東　杉居

「弘化四年丁未(二五〇七)信濃及び越後其の外天災の御城書並に評判の噂等聞集め一冊となし後のはなしの種となすばかりにこそ」と端書せり。

しよこくどきびかう
諸國土宜備考　初二卷

本邦諸國に於ける古來の物產を、國分に記載したるものなり。編著及び年代等詳ならず。

しよこくどくさんしふ
諸國獨吟集　二册　北村　季吟

俳諧獨吟の集にて、由岡元隣の編輯したるものなり。寬文十一年辛亥(二三三一)六月成る。

◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下にあり。

しよこくどさんしよ
諸國土產書　初一卷　西　吉大夫

寬文九年己酉(二三二九)に寫し取れる西洋諸國の物產なり。其の品類及び產地等を記せり。

◎西吉大夫或は吉兵衛とも稱す。當時阿蘭陀の通辨人たりき。別著に「阿蘭陀方商賣覺帳」一卷、「乾坤辨說」二卷等あり。

しよこくにんずしらべ
諸國人數調　初一卷

全國の人數二千五百六十二萬一千九百五十七人(內男一千三百四十二萬七千二百四十九人、女一千二百十九萬四千七百〇八人)を各國別に統計したるものなり。石高をも朱書して、其の高二千五百七十八萬六千八百九十五石餘なり。大目付神保佐渡守が、御期定泰行石川左近將監と共に調査すると ころにして、年代は文化元年甲子(二四六四)の調査なるべしといふ。

しよこくねんちうぎやうじ
諸國年中行事　四卷

京都その他の神社の祭禮、佛寺の法事等を正月より十二月までに分ちて記したるもの。享保二年丁酉(二三七七)雛下散人素竹の序に洛の撰屋子といふもの、作なる由を記せれど、其の人詳ならず、四卷一冊に版行す。

しよこくねんちうぎやうじたいぜん
諸國年中行事大全　一卷

我が諸國神佛の正月より十二月に至る年中の行事祭禮を記したるものなり。

しよこくはいじやうかう
諸國廢城考　初廿六卷　深井　彪

五畿七道の廢城に就て、其の沿革興廢の事績を記したるもの。卽ち治承、壽永に始りて元和寬永の頃に至る古墟營壘の、名存して地閑くるもの、地存して名閑くるもの、名と地と並び存して攻守事績の詳ならざるもの等、凡て百十餘部の書を參考し、提要增訂して編著したるなりといふ。明和七年庚寅(二四三〇)の作、二十六卷を十册に作れり。假字通俗文なり。

◎深井彪は歌牧の人なり。姓を修して井彪と稱し、通稱を享兵衛といふ。別著に「七書目講」三册あり。

しよこくはうげん
諸國方言　初五卷　越谷　吾山

本書は「諸國方言物類稱呼」の下に解題したり。

しよこくはうげんぶつるゐしやうこ
諸國方言物類稱呼　初五卷　越谷　吾山

我が諸國の方言を輯錄したるもの。卷一を天地、人倫。卷二を禽獸、蟲魚。卷三を草木。卷四を衣食器財。卷五を言語に類別して、諸物の稱呼を擧げたり安永四年乙未(二四三五)の作にかゝる。單に「物類稱呼」、又「諸國方言」ともいふ。

◎越谷吾山は秀眞と稱す。武藏國越谷の富農にして、夙に俳諧を好み、其の道に達せり。晩に法橋に

敍せらる。著書は本書の外に「秋葉」その他俳諧に關するもの數種あり。

しよこくふどき
諸國風土記　初三卷

文化十一年甲戌(二四七四)及び十二年に伴直方の筆記したる、伊賀、豐後、出雲三國の風土記三卷を編輯したるものなり。

しよこくふどきいつぶん
諸國風土記逸文　初一卷

卷端單に「風土記鈔」とも稱して、山城、攝津、尼濱、越後、伯耆、出雲、播磨、備後、伊豫、土佐、筑前、筑後、豐前、肥前、肥後、日向、以上十六箇國風土記の逸文を集めたり。僅々二三行のものあり。

しよこくべんらん
諸國便覽　五卷

山城、攝津、伊賀、志摩、近江、若狹、越後、出羽、丹波、丹後、石見、播磨、以上諸國の怪談奇話を輯錄したるもの。享和元年辛酉(二四六一)の自序あり。落爽撞散人の編なり。

しよこくみどほしもくろく
諸國見通目錄　初一卷

山城以下全國の名山高地より、其國々の名地を見通しするの地名を記したる目錄にて、享保十二年丁未(二三八七)の奥書あり。

しよこくめいぎかう
諸國名義考　二卷　齋藤　彦麿

我が諸國の名義を古書に考證して解釋說明したるもの。卷末の考の如く必ずしも漢字の義に落ちず、本居師の說を基として廣く諸書に徵し、類と例とを擧げて說明せるなり。文化六年己巳(二四六九)の作にかゝる。本居大平の序文あり。

◎齋藤彦麿の傳は「稜威」の下に揭ぐ。

しよこくめいきやう
諸國名橋　初一卷

江戸行人坂の太鼓橋、甲斐都留郡の猿橋、大日橋、駿河富士郡の操舟渡、細橋、同國安倍郡の井川大釧橋、同國志太郡盤越、飛驒吉城郡籠渡、信濃水內郡の水內橋、越後信濃川の簀橋、陸奧弘前の舟橋、越前丸岡の舟橋、越前福井の九十九橋、京の三條橋、淀後五箇庄の掛橋等を圖說したるものなり。

しよこくめいさんきやうかしふ
諸國名產狂歌集　一卷　鶴廼屋

諸國の名物を題として詠み成せる狂歌集なり。凡て四十一首あり。

しよこくめいさんだいこんむりりひでんせう
諸國名產大根料理祕傳抄　二卷

蘿蔔の料理法、四十三條を記し、庖丁截方を附錄せり。天明五年乙巳(二四八五)刊行せらる。

しよこくめいしよひやくづゑ
諸國名所百圖　二折　長谷川貞信

大阪安治川口、京都四條夕涼、東都淺草花盛、周防岩國錦帶橋等より以下凡て全國の名所百箇を着色圖したるものなり。

しよこくめいぶつつうらい
諸國名物往來　一卷

本邦諸國の名產物を、其の見聞に隨て記載したるものなり。就中出城國の部、最も多く、邊鄙の國にありては僅々二三種宛を擧げたるもあり、見聞範圍の廣狹によりて、記するところに多少あるものなるべし。

しよこくめいぶつづき
諸國名物記　初二卷

本邦諸國の名產物を、其の見聞に隨て記載したるものなり。就中出城國の部、最も多く、邊鄙の國にありては僅々二三種宛を擧げたるもあり、見聞範圍の廣狹によりて、記するところに多少あるものなるべし。

しよこくめいぼくへん
諸國名木編　初一卷　田中　成之

我が全邦中、二十七國の草木二百餘種を輯採したるもの。普て其の圭松平定興の父定常諸國有名の草木を採萃するの志ありしを翼ぎて此の著なす。文化三年丙寅(二四六六)の自跋あり。

◎田中成之は叔信と字し、見龍と號す。因幡の人にして、醫を以て松平定興縫殿頭に仕ふ。

しよこくものがたりづゑしふ
諸國物語圖繪拾遺　三卷

前に解題したる二休和尙諸國物語圖繪」の拾遺なり。同和尙の諸國修行中の奇談を集め、圖繪を入れて兒女の讀物としたるなり。事實は世に傳ふる鎭

現不思議の事多し。天地人の三巻に分ち人の一巻には宗純(一休)の抄釋せる「般若心經」の退入和解を掲げたり。

しよこくりじんだん

諸國里人談 五巻 菊岡 沾凉

諸國の奇話俗談を輯錄す。巻一に武州玉川水より伊勢日向物語に至り二十三項、巻二に信州駒ヶ嶽より播州筋濱揚梁に至り二十七項、巻三に武州五色椿より、山州笠置寺に至り三十一項、巻四に佐渡奥宇水より奥州金利濱に至り三十二項、巻五に常陸鹿島靈卜より、京中御門鞠神に至り二十四項を擧ぐ。自序あり、延享三年丙寅(一七四六)著者の未記あり。

◎菊岡沾凉の傳記は「江戸砂子」の下にあり。

じよごべんぱふ

助語辨法 四巻 津 敏

助語の差別を辨明し、諸書より文例を引證したるものなり。光格天皇の文化五年戊辰(一八〇八)の自序あり。著者津敏は攝津の人。字は子惠、號は櫻屋といへり。

しよごようさいめぶるる

諸御用留部類 十五巻

享保覺政間の御用留を分類して輯記したるもの。西丸、御役順番詰御殿向、御座敷向、御城内向、御老若方、御禮日御禮席、御書取、御祝儀、兩山紅葉山、御普請御修覆、御道具、御役所、御成、御目見以下、上覽、以上十五部に分ちたり。

しよさいかう

且來稿 十二巻 石原 癡人

著者の漢文集なり。雜體數一編を收む。此稿棄るに忍びず、且來而これを存するの意によりて書名を撰べり。十二巻五册に寫傳す。

しよさいじんりやくき

諸祭神略記 一巻 小池 內廣

日待、月待、星祭、その他民間の年中に行ひ來れる神祭の次第を略記す。古戰、遺傳等をも引て記す。

◎小池內廣は越後國中蒲原郡加茂町の人にして天保三年三月生る。靜室主人と號せり。戊辰の役松田秀次郎と官軍に應ぜんと謀り、來だ事を擧ぐるに及ばずして城地に陷れり。偶ま敵情視察の爲め派遣せられたる大音龍太郎といふもの城兵に追縱せられて乘り投するに會し、爾後官軍と通信を絕たず、既にして事發覺し、同士或は自殺し、或は獄に繫がれしも、內廣は幸に免るゝを得たり。明治二年越後府社寺取調掛を命ぜられ、水原府新潟縣等に出仕して、彌彦神社宮司笨大講義に至り、同八年皇太神宮權宮に轉じ、尋て罷め歸る。著書は本書の外に和案美水門考、彌彦神社考、越後國式內神社考、越後國式外神社考、北蠻將士傳、神職心得草、越後國古城跡略記、片成集等あり。明治十年丁丑(一八七七)一月十三日卒す、年四十六。

じよさいずゐひつ

恕齋隨筆 二巻

文學其の他の雜事を當時の見聞に隨つて詳識筆錄したるものなり。恕齋は作者の號なるべけれど、今、其の姓名を詳にせず。

しよさいのはりだし

書齋の張出し 一枚 平田 篤胤

今日平田家に傳れる書齋の張出しを版したる一小紙幅なり。其の全文を擧ぐれば、「口演、此節別して著述取急ぎに付學問窮理談の外世俗無用の長談御用捨可被下候、塾生といへども學事疑問の外呼こととなくば來るべからず、道義論辨の事に於ては終日終夜の長談たりとも少か厭ひ無之候事、未五月、篤胤の下に纖胤が由緣を附して印刷せり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

しよさいふ

諸榮譜 三巻 貝原 篤信

本書或は單に「榮譜」と題して行はるゝもあり、解題は既に同名の下に於てせり。

しよさうくでん

書札口傳 三巻 小笠原長時

制札及び器物の銘等の書式を集錄したるものなり

◎小笠原長時の傳は「元服の次第」の下にあり。

しよさうさはふせう

書札作法抄 一巻

書札上の注意最肝上、恐惶謹言、進上など書く事。名字の下に上文字、狀文字を書く事、當世武家の書札、關東先代の時の事其の他の數項を說明したるもの。天文四年乙未(一五三五)の奥書あり。

しよさうはふしき

書札法式 一巻 久保 正之

書留之調上所充所內封時事、充狀事、假中禮事、制札事、太刀目錄調樣事、樽目錄調樣事、折紙調樣事、其の他種々書札の法式を記したるもの。所謂曾我流の一に係れりで寬永十七年庚辰(一六四〇)の自序、及び三條實萬の序あり。

◎久保正之は吉右衛門と稱す。延寶五年丁巳(一六七七)の千松雲軒と號す。

入に隱居し正之と改む。

しよさうはふしきりやくはふ

書札法式略法 三巻

書狀の次第經重の事、同事淺き次第之事、來主君書狀之事、同御請之事、來書御請之事、宛狀之事、攝家清家之大臣江之事、門跡方之事、國持之事、以上武家の書式を記したるものなりといふ。

しよさうれい

書札禮 一巻 植村 政勝

公家武家及び僧侶の書式を集錄したるものなり。

じよじいん

助字襍 八巻 僧 介石

此書は上六書に遡り下和訓に渉り一助字に於て體と用と和訓との三を分ち、竟に其の旨を一ならしめ、古來の說を駁正して、助字の眞面目を表はさんと欲するよしを題言に記したり。安政五年戊午(一八五八)の自序、及び三條實萬の序あり。

◎介石は眞宗本派の僧。姓は鷹瀨、後に佐田と改姓す。字は隣譏等、梁嶺と號し、肥後小島正泉寺の住僧なり。儒醫を齋藤宗原並に賀茂南溪二僧に從て、內外の學を研修す。尤も印度の曆法及び經濟の術に精通し、六齋社等の社團を造りて四洋風俗の輸入を防ぎ、外交の事起るや慨然公府へ建言すること七十餘度、首を剜ねられんとするもの十有三次。南船北馬殆んど寧日なし。其の著す所「救論凡」一巻「日本通」二巻、及び本書あり。明治十五年壬午(一八八二)十二月、越後高田に病歿す、享年六十五。嗚月院と謚す。

しよしうかいきう

諸宗階級 二册

天台宗僧徒の經歷昇進表鉢の次第より、以下各宗の階級昇進等を集錄したるもの。享和元年辛酉(一八〇一)同二年壬戌に諸宗請判より德川幕府の役に應じて書き上げたるものなりといふ。

しよしうさんやくき

諸州採藥記 九巻 植村 政勝

各國草木等の事に就て實見記述したるもの。著者は享保五年庚子(一七二〇)夏より、採藥の幕命を受けて諸州を巡歷すること數年、其の草木の事、經歷せし山澤驛路等の事を詳記して元文五年庚申(一七四〇)に復命したるものなり。

◎植村政勝は左平太と稱す。當時江戸駒場藥園の監理たりき。本書の外に「諸州採藥記抄錄」二、諸州名所雜咏等著書あり。

もの。「群書類從」巻百四十五、消息部第八に收む。

しよさうさんびやくはちじつかでう

書札三百八十箇條 一巻 平 尙祐

巻軸に「文言心得不宜條々三百八十箇條」と記して、年頭之祝儀二月申達書狀に新春御慶目出度之事より、制札高札北向にて讀む事、大將軍在時軍勢甲乙人之事等に至る三百八十箇條を記せり。もと中原大外記の三百六十箇條を元和三年丁巳(一六一七)著者の增補したる由の奥書あり。

しよさうしうちんはうぶんしよ

書札袖珍寶開書 三巻 曾我 平助

書札の法式を示したるもの。其の中消息文、披露狀、目錄、制札、高札、奏文、連判狀、召文、御內書、鷹文字等、其の他種々あり。巻尾に享保八十條箇條を載す。慶長十五年庚戌(一六一〇)九月、嫡男曾我尙祐の奥書あり。

◎曾我平助は兵庫飯と稱し、入道松軒と號す。書札の曾我流の祖、養晴養輝養昭に仕へ文祿六年七月卒す。別著に「馬座右抄」あり。

しよさうつしだい

書札次第 一巻

奏狀進書等に關する書札の法式次第を論述したる有職の書なり。

しよさうつのくに

書札の事 一巻 大館 尙氏

しよじうさいやくきせうろく　諸州採藥記抄錄　本朝　一卷　植村　政勝

前掲「諸州採藥記」九卷中より抄錄して、寶曆五年乙亥(一四一五)將軍家重に獻上したるものなり。

◎植村政勝の傳は「諸州採藥記」の下にあり。

しよしうしやうしよもくろく　諸宗章疏目錄　本朝　一卷

華嚴、天台、三論、法相、律宗等の經疏凡て三千二百十卷の目錄なり。

しよしうしやうしよろく　諸宗章疏錄　三卷　僧　謙順

佛教の書籍目錄。上卷は即ち「釋敎目錄」上卷の「五宗錄」、中卷は其の拾遺、下卷は即ち「釋敎目錄」下卷の增補なり。書目四千數百種を收載したり。寬政二年庚戌(一四五〇)十一月の凡例に本書の由來を敍して曰く、世存「釋敎錄」者兩卷。漏二雜圓超五宗錄暨基範祖師製作錄一以爲二一部一。重出繁多寫誤非レ一。予耄岁有レ年矣。蚤苦於智積經庫得二古寫五宗錄一題曰二諸宗章疏錄一、祖師製作錄亦得二古寫一比之釋敎錄一稍少二舛錯一。今就二此二書一反覆讐校且窺爲二神補一焉。上中爲二五宗錄一下卷爲二眞言錄一乃取二古題名一總曰二諸宗章疏錄一云々。著者沙門謙順は東武の人、眞言宗新義派智積院に屬す。

しよしうちよくがうき　諸宗敕號記　本朝　一卷

諸宗の敕號事につきて詳述したるもの。南禪寺、天龍寺、相國寺、大德寺、雲樹寺、建仁寺、東福寺、建長寺、圓覺寺、淨智寺、靈雲寺、妙興寺、西方寺のを掲出す。「續群書類從」卷八百四十七、釋家部第百三十二にあり。

しよしうひやうばんき　諸宗評判記　三卷

佛敎各宗及び諸僧信者等を演戲の立役實役敵役女形若衆形等に配して評判したる戲作册子なり。

しよしうめいしよなんじよせがき　諸州名所難所寄書　本朝　一卷　植村　政勝

我が國諸國の名所難所を列擧したるもの。其の保牟間著者が幕府の命を受けて採藥の爲め、諸國を巡回したる時の記「諸州採藥記」の中より抄出したるものなり。

◎植村政勝の傳は「諸州採藥記」の下にあり。

しよしうめぐり　諸州めぐり　七卷

卷一、卷二は四北紀行と稱して山城、河内、和泉、紀伊、大和、丹後、若狹、西近江の道路を記し、卷三、卷四、卷五は南遊紀行と稱して山城、河内、和泉、紀伊、大和、丹波、丹後、若狹、西近江の道路を記し、卷六、卷七は拾遺にて五州の內往來の道すぢを記したるもの。著者小川平七と稱し、美濃國ヶ原より越前の敦賀へ行く道の記なり。共に元祿二年己巳(一六八九)の事なり。七卷小册子に作らる。

◎眞原篤信の傳は「自撰集」の下にあり。

しよしうもんぜきふ　諸宗門跡譜　本朝　五册

仁和寺、御室、大覺寺、一乘、大乘、菩多院、智恩、東西本願寺、妙法、梶井、青蓮、曼珠、毘沙門、日光、淨土、水戶、妙香、安井、圓心、勸修、三寶、聖護、實相、圓滿、平等、法住、常住、如意等の門跡譜なり。

しよしうえんぎ　諸寺緣起　三册

全國諸寺の緣起二十九種を輯收したるもの。其の目を擧ぐれば、上册に、京太秦廣隆寺大略緣起一卷、南都東大寺大佛殿廬舍那像寸尺一卷、紀伊道成寺緣今京妙滿寺和解略緣起一卷、大和國吉野山金峯寺吉水院藏佛寶物略緣起一卷、大和國高市郡飛鳥社略緣起一卷、近江國三井寺鎭鐘緣起一卷、山城國葛都石清水八幡宮寺開山緣起一卷、近江比叡山根谷圓光東漸大師御影緣起一卷、京東山泉涌寺開帳覺書禁裏御寄附御寶物一卷、攝津國勝尾寺略緣起一卷、攝津國住吉略緣起一卷、攝津國河邊郡紫雲山中山寺來由記一卷、讃岐國誕生寺開帳略緣起一卷。中册に武藏國木下川青龍山藥師佛像略緣起一卷、下總國香取大神宮緣起一卷、下總國香取郡東庄樹林寺夕顏觀音緣起一卷、上總國長柄郡櫻井大悲山笠森寺之緣起一卷。武藏國葛西領下鎌田村明福寺略緣起一卷。下册に武藏國豐島郡西ヶ原村六阿彌陀三番目佛寶山西光院無量寺略緣起一卷、武藏國足立郡舍人領入谷源澄寺大子堂略緣起一卷、武藏國多磨郡野津田村花嚴院の鼓院福王寺藥師如來略緣起一卷、武藏國葛飾郡龜戶村宰府天滿宮由緒略緣起一卷、武藏川崎領大師川原平間寺勸進帳一卷、伊豆賀茂郡河津庄溫泉山蓮台寺略緣起一卷、相模國高座郡藤澤長藤山妙善寺正宗稻荷大明神略緣起一卷、信濃國須荒山寂照院親子地藏緣起一卷、近江國賀郡粟津義仲寺略緣起一卷、美濃不破郡青墓鄉弘賢山圓願寺略緣起一卷等なり。以上三册二十九種二十九卷あり。內泉涌寺、笠森寺の二種緣起は寫本にして、餘は皆版本なり。

じよじおんぎかう　助辭音義考　本朝　二卷　堀　秀成

我が國語の助辭の音義につきて一々詳細に說明したるものなり。幾多の古言に徵して其の性質を明らかにし、古來の用例を引きて其の用法等を詳にせり。

◎堀秀成の傳は「言靈妙用論」の下にあり。

じよじが　助字雅　一卷　三宅　緝明

文章上助字の性格に就て論述せるもの。元祿十二年己卯(一六九九)の自跋あり。曰く、漢文之有二助字一也、猶二俚語之有一天爾於波一。唯音異レ辨、其義通。猶二和澤若一出已曰、則如二胡人之於一越語一、終年不レ可レ得而曉也。況行二之文一哉、自二唐柳宗元言一之、明人李廷機胡文煥有二註解一、而來二東府一、與二一憲友一、淨寫以界、若二夫詩書古文錄俚談一、未レ暇及而遠旅羈徒、又莫レ以考二諸字書一、而脫語窘居多焉。其有二以細研潛玩一試之行天一爲二用得的好秀才一則亦就レ之而已矣」と。その大意を知るべし。

◎三宅緝明の傳は「觀瀾集」の下にあり。

じよじかう　助字考　本朝　一卷　伊藤　長胤

經史子集等の文を節錄して、助語義用法の實例を示したるもの。卷首には「助語義」一編を掲げ、也矣焉者。校正書岸本由豆流の束記あり。「前にあげたる阿彌爺の作り置き給へるなり。種々の格は、詞の玉の緒、詞のやちくさ、などよりぬきいでて、いさゝか自らの考なも加へて、予が記せるなり」といふ。原名「あづさ弓」といひたりしものなり。文政四年辛巳(一八二一)の作なり。著者小川平七に江戶の狂歌師珠阿彌の孫なり。

じよじかく　助辭格　一帖　小川　平七

組鏡に基きて、てにをはのとゝのへを圖表したるもの。甲州武田氏の軍功を賞したる次第より、未練の者を罰したる事等三十六條を記す。小幡勘兵衛景憲が戰功賞罰等の事を講究したる時門人服部善兵衛といふもの、其の申より抄錄して「戰功卷」と名けたるものこれなりといふ。

◎小幡景憲の傳は「甲陽合戰傳記」の下にあり。

しよじきゝがき　諸事聞書　本朝　一卷　村岡　景通

此の書は著者の見聞隨筆なり。古今の雜事を假名文にて記せり文章なも顧みずして書きつけたり。

しよしきにふしんかきあげちやう　諸色入津書上帳　本朝　一册

元治元年甲子(一八五二四)の書上帳なり。幕府評定所より引繼き內閣文庫に保存せり。

しよしきにふしんだかきあげ　諸色入津高書上　本朝　一册

慶應元年乙丑(一八五二五)同二年の書上なり。幕府評定所より引繼き內閣文庫に保存せるものなり。

しよじくやうぶるゐ　諸寺供養部類　本朝　二卷　僧　承澄

上卷に東大寺、最勝寺、成勝寺、得長壽院。下卷に法勝寺、大講堂、法金剛院、鳥羽新御堂等の供養次第、供養式等を集錄したるもの。元祿十四年辛巳(一七〇一)更勝寫の奥書あり。「續群書類從」卷七百七十上下釋家部第五十五に收めたり。著者承澄は、別に諸寺略記、諸法要略抄等を著せり。

しよしぐんだん　諸士軍談　本朝　一卷

德川氏大阪合戰の物語を日次的に記したるもの。慶長十九年甲寅(一六一四)十月朔日の記事より、冬夏兩陣始末までを記せり。

しよしこうそつせう
諸氏薨卒抄　本居十二巻
天皇を始め歴代人物の薨卒の年月を記したる忌辰錄なり。

しよしこうはいき
諸士興廢記　八巻　九二軒主人
武士の事績に關する種々の傳說世話を集錄したる軍談讀物なり。凡て二十四箇條あり。著者の作意は將士たるものは武勇に止まらずして、德を修め和を尚ぶことの必要なるよしを勸むるにあれども、記す所の事實に於ては、單に傳說に止まるものなるべし。享保三年戊戌(一三七八)の作なり。

しよしさんどくせう
諸士三德抄　本居九巻
元龜天正以來の諸士を分類して、才智に三十八人、技藝に二十二人、仁惠に十一人、剛勇に十七人、武勇に八十六人の著名事績を擧げたり。校合雜記、三河物語、四戰記聞、續武家閑話、大三川志、落穗集、武將感狀記、寬永諸家系圖傳、國朝大家廣記、眞享書上、武德編年集成、常山紀談、太平不忘記、兵用拾話、小栗家藩記、翁物語、武林隱見錄其の他の諸書より抄出したるものなり。

じよじしやうかい
助字詳解　本居七巻
漢字の助辭爲哉乎也を最初として、則乃迺最、又復亦覆、顚最竟寧、甚大殆幾等凡て一百五十餘助辭を擧げて、各、用例等を引き假名書に記し、通俗に細說したるものなり。

じよじしよう
助辭頌　一巻　森　守拙
內を助辭頌と假字頌とに分ち、助辭頌は鵜峯戊申の「語學新書」等の說に基き、假字頌は本居宣長の「字音假字用格」等の說により、てにをはの事、字音假名遣の事等を說示したるものなり。全編、歌にして示したるより頌といへるなり。天保八年丁酉(一八三七)出版。慶應元年乙丑(一八六五)再版に附せり。

しよししよくしやう
諸司職掌　本居一巻
局務、官務、少外記、少史、內記局、史生、古史生、文殿、官掌、召使、使部、其の他凡て數十項、諸司の職掌を記したるものなり。「續群書類從」卷二百四十五、官職部第二に收めたり。

しよしたうめい
諸司唐名　本居一巻　橘　廣相
本邦の官名を支那唐代の官名に配當したるものなり。著者橘廣相の傳は「侍中群要」の下に出でたり。

しよじたふくやうき
諸寺塔供養記　一巻
延曆寺根本中堂、同大講堂、無量壽院、法成寺金堂、同藥師堂、東北院圓明寺、法勝寺、東寺塔、護國寺、法勝寺、九重塔、歡喜院等の供養大會の儀式を記したるものなり。

じよじつうかう
助辭通考　一巻　白石　泰玄
和漢の助字を比較辨明し、初學をして綴字の法を了解し易からしめたるものなり。嘉永二年己酉(一八五〇九)に刊行す。

しよしでんりやく
諸士傳略　本居三十九巻
「近代諸士傳略」と內題して、卷一に小早川秀秋、伊達政宗、加藤清正。卷二に池田輝政。卷三に細川藤孝。卷四、五に細川忠興。卷六に細川忠利。卷七に黑田孝高。卷八に淺野長政、藤堂高虎。卷九に蜂須賀家政、有馬則頼、山內一豐。卷十に森可成。卷十一に田中吉政、丹波氏識。卷十二に小笠原秀政、小笠原康元。卷十三に堀秀政、堀尾吉晴、岡部正綱、金森長近、一柳直盛。卷十五に井伊直政。卷十六に本多忠勝、本多信重。卷十七に本多重次、本多正信、本多忠次。卷十八に榊原康政、大須賀康高。卷十九に松平家廣、松平好景、松平親盛。卷二十に松平利長、松平直乘、松平清善、松平重吉。卷二十一に松平正親、松平信定、松平康親、戶田圭誠。卷二十二に酒井正親、酒井忠利。卷二十三に酒井忠次。卷二十四に大久保忠俊。卷二十五に水野忠重。卷二十六に土井利勝、永井直勝。卷二十七に內藤家長。卷二十八に安藤基能。卷二十九に奧平貞能、青山忠門、石川清兼。卷三十に鳥居元忠、板倉勝重。卷三十一に戶田一西、菅沼定盈、土岐定政。卷三十二に稻垣長茂、成瀨正賴、植村泰忠。卷三十三に久世長宣、渥美勝吉、坂部正家。卷三十四に安部元眞、阿部忠政、貞重政。卷三十五に高力重長、伊奈忠次、天野康景、天野貴景。卷三十六に渡邊綱纘。卷三十七に多門重正、大岡忠勝、富木清秀、久永重勝、細井勝明。卷三十八に鈴木重好、近藤康用、柴田康忠、夏目吉信、岸柳武重。卷三十九に神保相茂、依田信盛、德永壽昌、武田信俊、中山家範等を片假名交り文にて傳す。三十九卷十三冊に寫傳せり。

しよしぶしんだん
諸士武信談　本居六巻
卷一より卷四までは、板倉重宗土井利勝等の嘉言善行を記したる牛込重恭の「敬誡記」に載する所と同じく、卷四の後半已下に於て、南部修理大夫家臣大道寺民部の事、松平陸奧守家臣棟方新三郎の事の二條を添記したり。

しよしふでんおんしやく
書集傳音釋　六巻　昌谷　碩
元の鄒季友の「書集傳」に字音を註し、字義に註釋を加へたるもの。「書集傳」は「書經」に傳註したるものなり。弘化三年丙午(一八五〇六)冬十二月の自序あり。寫四年六卷四冊に刊行す。

◎昌谷碩の傳記は「周易音訓」の下にあり。

じよじほんぎいちらん
助辭本義一覽　二巻　橘　守部
助辭の、は、も、そ、や、何、こそ等を假に指辭と名け、上卷に說明し、其の、は、も、そ、や、何、こそ等を受けて、下にて結ぶ辭どもを假に受辭と名けて、下卷に說明したるもの。男冬照の卷頭なる提要に據れば、父守部、助辭本義考として著したる七卷中より、微證傍例の繁を省き、要を採りて只しかいふ音義の一端のみを抄出したる由なり。其の文末に、「尙彼の本書もいまだ稿を脫せざれば、後に再考などくははりて、今此の一覽とかはる事あらんも知りがたし」云々といへり。天保六年乙未(一八三五)成り、同九年出版せらる。

◎橘守部の傳は「稜威道別」の下にあり。

しよしやういじ
諸將遺辭　本居一巻
諸家の雙書遺訓等を集めたるもの。會津正之の家訓、備前少將光政の家士保念、藤堂高虎の遺訓、井伊直孝の教訓書、紀伊賴宣の誡語等を集めたる也一に「水野勝成手錄」と稱するものと同本なり。

◎水野勝成は忠重の長子にして藤十郎と稱す。天正七年己卯(一五七九)三月、年十六にして始めて德川家康に馬伏塚、及び高天神の戰に從ひ、樹東長泝、その他の役に功あり、後佐々成政、小西行長、加藤清正、黑田長政等に轉仕し慶長四年更に德川家康に見え、父死して其の遺跡を襲ぶ。後大阪冬夏の戰に從ひて大功あり。元和三年九月大和郡山城を賜り、六萬石を食み、同五年八月備後當興寺山に封ぜられ十萬石を食み四海道鎭護となり福山城を築く。寬永元年從四位に敍せられ、後また島原の役に松平信綱を援けて功あり、同十五年致仕し、正保三年剃髮して宗休と號す。慶安四年辛卯(一六五一)三月、八十八にて卒す。墓康德勝院と法諡す。

しよしやうかんじやうげぢじやうならびにしよじやうつし
諸將感狀下知狀並諸士狀寫　本居一册
織田氏、豐臣氏、德川氏等より、諸將士に授與したる感狀、下知狀等を集錄したるものなり。末に慶長年代に止れり。

しよしやうきせいづ
諸將旗旌圖　三巻
上の卷に德川家康以下凡て三十九家。中の卷に豐臣太閤以下凡て六十家。下の卷に淺野采女以下凡て二十七家の旗旌類を圖出したる大本なり。寬永十四年丁丑(一六三七)愚翁周智の序あり。書林某の編なるべし。

しよしやうぎづしき　諸象戯圖式　四巻　西澤　貞陣

小象戯、中象戯、大象戯、和象戯天竺象戯等の圖式を集めたるもの。元祿七年甲戌(一六九四)西鶚の序を附したり。

しよじやうさげん　勿驕勿言　寫一巻

文武教、經學、人君の目利、儉道、民の父母、諸家の經濟、世子の守役、音樂、好惡、懲狩、兵農、圍門、死生、天地の生、賞罰、金銀の融通、養老、力田、無爲、明察、愚言、勤番、武具、海防、達練人、陰德等の事を說明して、其の君主の誡としたるものなるべし。

しよしやうそくぶりやく　諸裝束部略　一巻　竹尾　次春

武家、法體、童、女房、諸宗等の裝束を類聚略說したるもの。文政十三年庚寅(一八三〇)七月二日の自序あり、橫綴本に作る。

◎竹尾次春の傳は「續考餘錄」の下にあり。

しよしやうはんかゞみ　諸將判鑑　二巻

此の書は古來諸將の花押を集めたるものなり。多田滿仲より、豐臣秀吉に至る一百五十人のを列擧したり、獨嘯館主人の序によるに古本を再刻せるよしなれど、その序にも庚寅とのみありて年號を記されば再版の時をも知るべからず。橫綴二册の本に作りたり。

しよしやうもんじめちやう　諸証文留帳　寫一册

安政二年乙卯(一八五五)より、文久二年壬戌(一八六二)に至る書類にして、幕府評定所より引機ぎ內閣文庫に保存せり。

しよしやうれんぞくき　諸將連續記　寫三十二巻

德川三家を始め、一萬石以上の大名二百六十四人の親族系譜略傳を記したるもの。其の本國家紋知行高居城等を附記せり。いろはの字母を以て諸家を類聚し、普通親類書の體裁により、當時の繁族を洩らすところなし。盞し資永年間柳澤吉保執政の比、諸家より呈出せし書類により、集錄したるものなるべしと云ふ。

しよしやぎやうかうねんねんれいぶん　諸社行幸年々例文　寫一巻　難波　宗量

賀茂、石清水、春日、大原野、松尾、北野、平野、稻荷、祇園、日吉等の諸社に行幸の年月を記せり。御代は朱雀院の天慶年間より、後醍醐天皇の正武元年甲戌(一九九四)に至れり。奧書あり、「遠神社行幸年之勘例、以雍波三位宗量卿記、令繕寫訖、寬文十年(一六七〇)正月十四日左大史小槻重房」とあり。

しよしやきんき　諸社禁忌　寫一巻

伊勢太神宮、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、大原野、佳吉、日吉、梅宮、吉田、廣田、園濟南宮、祇園、北野、貴布禰、日前、天野、熊野、金峯山等の諸社に於ける、產穢、死穢、觸穢、五服不具、傷胎、妊者、月水、鹿食、蒜、雉、葱、六畜產、六畜死等の禁忌を詳紋したるもの。「續群書類從」卷八十、神祇部第八十にあり。

しよじやくしふい　書籍拾遺　二册　筒井　重勝

俳書目錄なり。「俳諧書籍目錄」三卷に洩れたるものを拾遺せるなり。元祿五年壬申(一六九二)の編◎筒井重勝のことは「俳諧書籍目錄」の下にあり。

しよじやくめいすう　書籍名數　三巻　中村　治重

和漢書名の數字を含みたるものを集輯したるもの。卷の上は一部より四部に至り、卷の中は五部より十部に至り、卷の下は十一部より百部に至れり。安永九年庚子(一七八〇)澤田重淵の漢文跋、天明元年辛丑(一七八一)藍古堂主人の漢文序等を附して發行す。

◎中村治重は平安の書肆にして臨泉堂と號し、百川と稱せり。

しよじやくもくろく　書籍目錄　六巻

和漢の書籍を列擧す。經、天台並當宗、法相、律宗、俱舍、眞言、禪、淨土並一向、外典、詩並聯句、字集、神書、歷書、軍書、醫書、歌書、和書並假名類、連歌、俳諧、舞並草紙、往來物並手本、釣物並繪圖、以上二

十二目に分類しおよそ七百餘種を列擧して、其の册數を記したるのみ、著者の名を記されども右分目第二に「天台並當宗」とあるより考ふれば法華宗僧侶の手になりしものなるべし。時代は所載書によりて文化文政比のものと推せらる。

しよじやくもくろく　書籍目錄　寫九巻

增保已一の主管に係れる幕府和學所の書籍目錄也

しよじやくもくろく　書籍目錄　六巻

いろは順に全國出版書目を列ねたるものにして、寬永三年丙戌(一六二六)の開版序あり。橫綴六册に作らる。

しよじやくもくろくたいぜん　書籍目錄大全　六巻

漢文書と國文書と佛教書とに大別し各綱の下にいろは順に列擧し、更に其の當時の代價大略を記したり。凡を數百部を收む。著者は未詳。編輯の年月も自序に記されたれど、今見るところ磨滅して字體の辨ぜざるを惜む。

しよしやこんげんき　諸社根元記　寫一巻

各國諸社の根元を記し、往々神寶、注連、散齊、致齊拍手、神樂等の事を記せり、丹波冰大明神より北野天神に至れり。此の書ちと三卷ありしが、二卷を闕きて一册だけ存在せるもの、如し。

しよしやこんげんせう　諸社根元抄　九巻　安居院　ア井

神道由來、宇佐八幡宮、鳥居、御正體その他の數十項につきて論ぜり。本地垂跡を主張して、佛說を以て同流の神道說を倒ふに足る。一名を「安居院神道集」といひ◎安居院の傳は「大原談義聞書抄」の下にあり。

しよしやだいじ　諸社大事　寫一巻

八幡、賀茂、祇園、天滿、權現等の雜錄起を收輯したるものなり。

しよしやでん　諸社傳　寫

伊勢內外の神宮より、諸國の名社を揭げて、各祭神、位置等を略記し、末に「熊野三山御鎭座記」を附添せり。

しよしやれいけんき　諸社靈驗記　五巻　日出　眞佐

諸書中より、諸國諸社の靈驗故事を輯錄したるもの。卷一に伊勢太神宮部十一項、卷二に八幡太神宮部十八。卷三に賀茂皇太神宮部十四、廣田太神宮一、吉田大明神一、住吉大明神部七、春日大明神部五、稻荷大明神部二。卷四に日吉大明神部三、熊野太神宮部四、生玉大明神部一、阿波神社部一、諏訪大明神部二、三島大明神部五、產山大權現部三。卷五に諸社十二項あり。元文元年丙辰(一七三六)の自序、同四年吉尾嘉寬の序、小泉思克、伊藤長堅の跋等あり。五卷三册に刊行す。

◎日出眞佐は豐後の人にして、當麻介と稱し、神道の事を以て職とせり。

しよしよえんぎ　所々緣起　一巻

三輪神社緣起卷內二卷、一谷山最重院弁安寺靈寶品錄一卷、東都中野明王山寶仙寺略緣起一卷、菊莖親子地藏尊菊莖寺照法師畫影略緣起一卷、駿州千葉山開運千手觀音略緣起一卷、吉野金峯山圖繪略記一卷、以上六種七卷を遷輯版刻したるものなり。

しよしよけいしらべしよ　諸處刑調書　寫四十五册

明和安永以下文政天保に至る間の泰行所に於ける處刑調書を輯錄したるものなり。一册每に其の雜取目錄を表記せり。

しよしよこせんおやうづ　所々御戰場圖　寫一巻

德川家康一生間の戰場を圖示したるもの、駿河遠甲信を始め諸所戰地の山川の方位里程等を記す。

しよしらいれきかう　書詩禮曆考　一巻　保井　春海

詩經、書經、禮記の中なる年月日を抄出して、其の大小干支等を考究したるものなり。寬文十一年辛亥(一六七一)の序にかゝる。

◎保井春海の傳は「類區面命」の下にあり。

しよじりやくき　諸寺略記　本朝一巻　僧　承澄

道明寺、六角堂、四天王寺、善光寺、讃峯、甚面寺、笠置寺、薬師寺、園城寺、興福寺、元興寺その他数十寺の略記なり。末に弘安二年己卯(一九三九)正和四年乙卯(一九七五)應永十一年甲申(二〇六四)寛永八年辛卯(二三七一)等の奥書あり。「續群書類從」巻七百六十九、釋家部第五十四にあり。

◎承澄のことは「諸寺供養部類」の下にあり。

しよしんかなづかひ　初心假名遣　一巻

定家かなづかひによりて、天地、時節等の三十二門を分ち、正しとするもの、誤れりとするもの、及び漢字等を列舉したるものなり。尚定家かなづかひの川法、誤謬等をも掲げたり。元祿四年辛未(一三五二)の作。同年出版す。

しよじんき　諸神記　本朝二巻

諸神の緣起鎭座等の事を記したるものにて卜部家の著述なる「諸社根元記」と大同小異の書なり。

しよじんき　諸神記　本朝一巻

巻頭に天神神祇總三千一百三十三座、大神四百九十三座、小神二千六百四十座と記し、次に日本全國の大中小諸神社の鎭座の事を、略記したるものなり。編輯の年月等詳ならず。

しよしんくわんがくせう　初心勸學鈔　二巻

天台宗の教義判釋の初歩を或問體に記述したるものなり。漢文にて記述せり。著者詳ならず。

しよしんぶんこ　手紙消狀初心文庫　一巻

年始狀より去狀に至る諸狀の文言認方等の作例を示したるもの。凡て二十四篇あり。裏紙に時候、脇付、如件、即形等の故實を掲げたり。

しよしんぽんくわいしふ　諸神本懷集　一巻　僧　存覺

佛陀神明本地垂迹の義を說きて、佛道を修行するは、神明の本懷に契ふことを述べたるもの。元亨四年甲子(一九八四)正月、釋了源の需に因りて著すところなり。「眞宗法要」第十二巻に收められ。

◎存覺の傳記は「六要鈔」の下に出でたり。

しよじんめいしよ　諸神名書　本朝三巻

延喜式の中の神社を考證したるもの。五畿七道に分けて順記す。一名を「諸神名帳」ともいふ。

しよじんめいちやう　諸神名帳　本朝三巻

本書は一名「諸神名書」の題下に解題したり。

しよせんぱいこくじひつき　諸先輩國字筆記　一巻

諸家の筆記類を雜輯したるもの。野田德勝の「近思錄紀聞」、淺見安正の「聖賢圖講義」其の他等あり。

しよそうはうきやう　書窓寶鏡　本朝十册

諸書法書式に關する集錄なり。年始文を始めとして諸贈答、諸目錄、歌詞其の他の諸式一切を抄出す。弘安禮節、延喜式、職原鈔以下の諸書諸家の說を抄して各其の出所を朱書せり。

しよそく　書則　本朝一巻　東江　文龍

書法につき、其の沿革、楷行草、篆、隸等を漢文にて略說し、更に「答土佐岩太初問書」と、「答南勢田必器問書」とを掲げたり。今見るところは安永八年己亥(二四三九)樋重美の寫本にかゝる。「叢書料本」第十六に入れたり。

しよだいみやうしゆつしのき　諸大名出仕記　本朝一巻

足利將軍の頃、諸大名が、室町禁中へ出仕の時の禮式を記したるものなり。

しよだうきよみやせけんざる　諸道聽耳世間狙　五巻　和譯　太郎

世間諸種の人の內狀等を可笑しく書き綴りたる諧謔的物語なり。目次の一冣を擧ぐれば、要害は間に合はぬ町人の城壘、貧乏は神とやまり花す要借家、文盲は昔づくりの家藥、柔行は力ありたけの相撲取、宗旨は二向目の見えぬ信心者、呑こみは鬼一口

の色茶屋、器量は頓智の雨舍り、其の他八項あり。明和三年丙戌(二四二六)の作なり。著者和譯太郎は滑稽の人なり。

しよづゑ　諸圖會　本朝一巻

研進、小研進、鐵鑿、麻裳、造紙形、越鑿、矢立小硯、御硯代、御濱床、厚盤、御褥、御疊代、御幔、御簾簀、紫縮緬御簾其の他の數種を彩圖せり。

しよてうじしよくもつちどり　諸鳥餌食百千鳥　本朝一巻　泉花堂三蝶

諸鳥を網羅して圖說したるもの。寬政十一年己未(二四五九)成る。著者泉花堂三蝶は十六兵衛と稱す。別著には「神代楢眯論」あり。

しよてうじゆんやうひでん　諸鳥馴養祕傳　三巻　比野　勘六

日本島、唐土島の諸島類を網羅して其の形狀產地を說き、且飼養法、療治法等を述べたるものなり。文化八年辛未(二四七一)の著。

◎比野勘六の傳は「鳥博士續編」の下にあり。

しよてうよぶこどり　諸鳥呼子鳥　本朝三巻　蕪生堂主人

本書は一名「世風古渡里」の下に解題せり。

しよでんきせう　諸傳記抄　本朝一册

諸家傳中より數條を拔抄せるもの。上州佛沼長門寺藏書より、大系圖、法亂記等に至る十三書中よりとれるなり。

しよにんいちだいだうちうづ　諸人一代道中圖

人間一生の善惡を圖に表示して、童蒙平生の教としたるものなり。天明年中の作にかゝる。

しよにんいちだいだうちうづのかい　諸人一代道中圖之解　一巻

「諸人一代道中圖」を解釋したるもの、元圖を掲げて、每綸にその說明をなせり。末に今長兵衛の名にて、家父の遺稿中にさぐり得て、一字を改めず、梓に上し、竪年七めぐりの香花にかへ、遠き志を次ぎ侍る」とあり。これ明和八年辛卯(二四三一)のこととなり。

しよにんだいじんだいきやうざつれい　初任大臣大饗雜例　本朝一巻

昌泰二年己未(一五五九)より、寬治二年戊辰(一七四八)に至る新任大臣の大饗雜例を記したるもの。「續群書類從」巻九百六十七、雜部第百十七に入れたり。

しよにんちようはうき　諸人重寶記　五巻

平素庶人の心得べき事として神道、人事、和歌、連歌、俳諧に綱を立て凡て二十條目にその大略を記したり。此の書は世わたる中に要とするせり。其の序中にも、此の書は世わたる中に要と

しよはつこおふれうつし　諸法度御觸寫　本朝一册

慶長十六年辛亥(一六一一)より、元和五年己未(一六一九)に至る新任大臣の大饗雜例を記したるもの。「續群書類從」巻九百六十七、雜部第百十七に入れたり。

しよにんちようはうき　諸人重寶記　五巻

平素庶人の心得べき事として神道、人事、和歌、連歌、俳諧に綱を立て凡て二十條目にその大略を記したり。此の書は世わたる中に要とするせり。其の序中にも、此の書は世わたる中に要と

しよはつこおふれうつし　諸法度御觸寫　本朝一册

慶長十六年辛亥(一六一一)より、元和五年己未(一六一九)に至る新任大臣の大饗雜例を記したるもの。「續群書類從」巻九百六十七、雜部第百十七に入れたり。

しよはふえうりやくせう　諸法要略抄　本朝一巻　僧　承澄

七佛藥師、燈盛光、普賢延命、安鎭、藥師、五佛頂、阿彌陀、一字金輪、その他とも凡て三十五法を記せり。弘安六年、元應元年、康正元年、承應三年、文化

九年等の奥書あり。「續群書類從」巻七百二十四、釋家部第九にあり。

◎承澄のことは「諸寺供養部類」の下にあり。

しよはふこんげん　諸法根源　本朝一巻　關　孝和

方錐、三角錐、臺形、楔形、截籠等の體積を求むる術の根源を明にしたる書なり。實に關流傳書の一にして、見題目錄中に在り。年代詳ならざれども、延寶天和の間に在るべし。

◎關孝和の事は「大成算經」の條に詳なり。

しよはふし　書法詩　一巻　田中　恕

書法を敘したる詩二十首、並に總詩一首を掲げ、附錄に書學歌、草書歌、寄復香雪二首、示蓼洲、示陸海、示三昧、贈可庭、答或等を收む。天保十一年庚子（一八三〇）十月の自序、天保甲辰昌谷碩の序あり。

◎田中恕は越後長岡の人にして、仁卿と稱し、脩道と號す。其の著は本書の外に、脩道百絕、脩道摘稿、史詩百律等あり。

しよはふそうしふ　書法叢集　本朝一册　森　尹祥

書式の故實を記したる「尹祥叢書」「右史訓」「改正當用書札」「座右書札」「蘇川閒書」の五種を纂めたるものなり。

◎森尹祥の傳は「懷紙裏褁抄」の下にあり。

しよはふるゐたく　書法類擇　一巻　大任

書法に就て證明したるもの。唐の張懷瓘の「玉堂禁經」、李陽氷の「翰林密論」中の難解を註釋したるなり。門人蘇原君といふもの校訂す。弘化二年乙巳（一八四五）龍山梓、矢口正常の序あり。

◎巻大任の傳は「十體源流」の下にあり。

しよはんがくせい　諸藩學政　本朝一巻

熊本時習館、筑前黒田侯甘棠館、細川能登守成章館、廣島學館、肥前平方維新館、會津若松學、以上の學政學規、學則、規約等の全文を編輯したるもの。執れも各館教授等の手に成れるものなり。

しよはんくわいぶんしふ　書判會異文集　一巻　僧　蘭英

或問的に佛書中の疑義を解釋したるものなり。萬治元年戊戌（一六五八）の自序を附し、同三年刊行。

しよはんざつぱんしよもくひつき　諸藩藏版書目筆記　本朝二巻　東條　信耕

和漢書類を分類排揷して、略解を施したる書目なり。諸藩藏版の槩ある時に際し、可否の撰擇を宜間せられて、各藩につき、其の互否先後等を答へたるなり。門人佐藤養、益池旭等の同校するところろなり。年月を記さず。

◎東條信耕の傳記は「近代叢逸目錄後編」の下にあり。

しよはんせい　書反正　一巻　伊藤　長堅

倭書疑典の一章を註解したるもの。目錄によれば、もと十一巻ありしを、今一巻のみ刊行したるものの如し。

◎伊藤長堅は仁齋の第五子にして東涯の異母弟なり。才識と稱し、陽鳴と號し、畫名を應擧といふ。家學を受けて、經史に通じ、儒を以て紀州侯に仕ふ。其の書を講ずるや音吐明瞭、論辨明爽、聽くものをして感歎せしむ。また畫を善くし、常に墨團を作る。安永七年戊戌（一七七八）三月二十六日、八十六歳にて歿す。

じよふきふさいそうしよ　如不及齋叢書　四巻　藤森　大雅

自他の假名雜著を叢書す。巻一に十事解、蓄龜問答巻二に建祭編。巻三、四に漫居備筆。寛政元年己酉（一七八九）吉賀幾の漢文序あり。

◎藤森大雅の傳は「如不及齋文鈔」の下にあり。

じよふきふさいぶんせう　如不及齋文鈔　三巻　藤森　大雅

著者の文集。雜擬凡て五十四編を收めたり。自題自序あり。末に門人川田剛の撰にかゝる「天山藤森先生墓表」一編を掲げたり。

◎藤森大雅は江戸の人、字を淳風、通稱を恭助、諱を大雅といひ弘庵、天山等の號あり。幼にして學を好み、弱冠にして父の後を承け一柳侯に仕へ右筆兼世子侍讀となり、後致仕し、天保五年甲午、土浦侯の爲めに聘せられて賓師たり、次に學政文教に務め、後職を辭して江戸に移り子弟を教授す。嘉永癸丑時事を論じて「海防備論」二巻、「勿言」六巻等

を著して名益著はる。なほ新政談、弘庵文集、春雨樓詩集及び雜錄等あり。文久二年壬戌（一八六二）十月八日、六十四にて歿せり。

しよぶついしよう　庶物異稱　本朝三巻

日用の衣服器具を始め、水火金石動物植物等庶物の異名を記したるもの。引據確實なれば、皆以て徴とするに足るべし。本書實は「本草綱目啓蒙」の抜抄なりと云ふ。

しよぶつしやしん　諸物寫眞　本朝七巻

動植物を寫生したるもの。間々漢名異名を擧げまた産地等を說明せり。初巻一二は「奇物眞圖」と題して殊に珍奇のものを掲出す。序跋なく、年代著者の名を記さず。

しよぶつるゐさん　庶物類纂　本朝七百六十四巻　稻生　宣義

博物類集の書。草、味、花、鱗、介、羽、毛、水、火、土、石、金、玉、竹、穀、菽、雜菜、水菜、菌、蔬、造醸、蟲の二十三屬に分類して、凡そ二千七百二十三種を收め、各、名稱、異名、形狀、産地、性質、效用、氣味に至るまで、古今の群籍に徴して詳述せり。全部を前編、後編、增補に分つ。此の巻數につきては或は一千巻といひ、或は一千五十四巻等傳ふれど、今見るところは四百十四册に作られて七百六十四巻より成れり。本書は實に著者が二十年間の經營に成り加賀侯相其の費を補へりといふ。寶永七年庚寅（一七一〇）稻生宣義の傳は「庶物類纂」の下に出づ。

しよぶんきたい　諸文記體　本朝一巻　藤原　實治

名の示せる如く諸文の記體を類別したるもの。即ち詔書、敕書、宣命、宣旨、口宣、綸旨、見參祿法、外任奏、御消息使奏名、御監、請奏目時期文官符、證號、年給申文、改名款狀、官方吉書、證人方吉書、春日祭見參朔旦奏表、年給米事、澁口上日、官切下文、位記、坊家奏、坊家圖、兵部省移文等に別示せり。

しよへんりきろく　處變利器錄　本朝三册

此の書は德川幕府評定所より引繼ぎて現に內閣文庫に保存せるものにして、年度は不詳なり。

しよむきかけあひ　諸向掛合　本朝八十三册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、古きは寛保三年癸亥（一七四三）より、近くは慶應四年戊辰（一八六八）に至る。書狀、問合、例留、挨拶留、留帳、年留不揃、諸向兼還掛合、非常調書々上、狩込無宿口書、御蓋圖振申上追加、書上帳、書物版行等に類集せり。

しよむきろめんとりしらべしよ　諸向地面取調書　本朝二十三巻

三家、國持、柳之間、突代寄合、御三卿方留詰、御譜代大名等より、奥田圭馬支配組、奥力同心、御徒等に至る諸方面の地面を取調たるものなり。

しよむきもんだふるゐしふ
諸向問答類集　本朝　二十五册

幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せり。天明七年丁未〔一七八七〕より、文化十年癸酉〔一八一三〕に至る。

じよむちひせう
助無智祕抄　一卷

年中の行事に關する裝束の事を記述したるものなり。故に一名を「年中行事裝束抄」といふ。

しよもんぜきふ
諸門跡譜　一卷

仁和寺、曺蓮院、隨心院、蓮華光院、淨土寺、平等院、木學寺、法住寺、安祥寺、妙香院、禪林寺、常住院、如意寺、毘沙門堂、聖護院、梶井殿、三寶院、勘修寺、圓滿院一乘院、大乘院、滋賀院、妙法院、實相院、曼殊院、大慈寺、東南院、上乘院、智恩院、大正權三僧正以下の補任譜なり。「群書類從」卷六十二、系圖部第三にあり。

しよやくこんいつじゆつ
諸約混一術　本朝　三卷　會田　安明

約術は算學中の一術にして、術中種類多し。皆關流內に行はるゝ所なり。諸約混一術とは、是れ等の約術に於て、立算の法物として、貫通するの術なり。安明が發したるものにして、關流內の約術に比して、頗る利あり。誠に最上流の書として見るべきものなり。天明四年甲辰〔一七八四〕に成れり。

◎會田安明の傳は「算法古今通覽」の下を見よ。

しよやくしふ
諸藥集　本朝　一卷

人體諸病の諸藥種調劑法を假名書にしたるものなり。何時、何人の編輯したるか詳ならず。

しよりようかう
諸陵考　本朝　一卷

全國古來の諸陵墓を穿鑿考證したるものなり。元祿十年丁丑〔一六九七〕所司代松平紀伊守信憲の命によりて作るところなりといふ。

しよりようき
諸陵記　本朝　一卷

神武天皇より武烈天皇に至る大和國の內廿九箇所、安閑天皇より、仁賢天皇に至る河內國の內十箇所仁德天皇より反正天皇に至る　和泉國の內　三箇所、天智天皇より順德天皇に至る山城國の內二十三箇所、攝津國の內一箇所。次仁明天皇より東山院に至る山城國の內四十箇所、河內國の內一箇所、攝津國の內十八箇所を擧げ、次に安德天皇、崇德天皇、嵯峨天皇、後鳥羽天皇、順德天皇、龜山天皇、土御門天皇の御陵墓國にありといふ傳說を記し、更に戊寅の夏京尹紀伊守より大和奉行に帝陵在所書付を徵したることを追記す。元祿十二年己卯〔一六九九〕の作なり。

◎細井知愼の傳記は「靈神考」の下にあり。

しよりようしうゑんじやうじゆのき
諸陵周垣成就記　五卷　細井　知愼

諸帝陵の荒廢せるを修めたる記なり。著者の見芝山、大和郡山に住みて、知愼の君松平吉保に帝陵の修繕すべきことを聞えしより、その事行はれ、著者また其の事に與りしより此の書あり。元祿十二年己卯〔一六九九〕の自序あり。本書は後に增補したりしも、大和一國に過ぎざりしが、後伴信友增補し、伴林光平插圖し、原本二卷を五卷として畿內諸國の帝陵數十箇所を記せり。

◎細井知愼の傳は「靈神考」の下にあり。

しよりようちやう
諸陵徵　本朝　七卷　谷森　種松

古來諸所の帝陵を考證したるもの。國史古記錄の考證を每陵の條下に詳記す。併せて、皇子門院方外祖父母等の葬所等をも附記せり。嘉永四年辛亥〔一八五一〕七月の自序あり。

◎谷森種松は京都の人にして當時大和介たり、通稱次郎また外記といふ。三條西家に仕ふ。伴信友の門人なり。後、諸陵助大學中博士となり、名を善臣と改む。

しよりようならびにますだいけのづ
諸陵竝益田池圖　本朝　一鋪

此の書には、大和國高市郡十市郡の邊の神祉佛閣諸陵古墳等を圖し、着色して見安からしめたり。傍に「尙重說」として掲げたるものあり。竹口尙重の編輯して、自家の考案を加へたるものなるべきか。

しよれいいしうちんぽう
書禮袖珍寶　本朝　八卷

書札に關する雜禮數十條を記載す。第六卷の最末に「元祿八乙亥〔一六九五〕五月十九日、長坂卜正辰」として花押あり、著者なるか寫本者なるか詳ならず。八卷三册に寫傳す。

しよれいいしふ
諸禮集　三卷　小笠原貞慶

世にいはゆる小笠原流の禮式を記したるもの。卷末に「天正四年丙子〔一五七六〕初五日書之」とあり。また慶長元年丙申〔一五九六〕其子秀政の奧書あり。一名「大草紙」また「小笠原諸禮集」といふ。

◎小笠原貞慶は信州の人、長時の子なり。右近大夫と稱す。父長時武田信玄と戰ひ敗北したる時逃れて織田信長に屬し、武田氏亡び、信長父子弑に遇ひて後は德川家康に屬して遂に信濃の舊城を復す。後家康に叛きて、景勝に通じ、また秀吉に仕へ、遂に秀吉に罪を獲て邑を奪はる。家康貞慶の子秀政に古河城を與ふ、貞慶圖城に老し文祿四年乙未〔一五九五〕五月、五十にて歿す。法名、以清宗傳大隆寺」と號す。貞慶幼にして顯奕、最も父の寵を受け、夙に累代の騎射禮法を傳へらる。

しよれいいしふ
諸禮集　六卷　小笠原長時

一名「小笠原家禮書」と名けて、禮式の事を記したるもの。寬永九年壬申〔一六三二〕に刊行せらる。

◎小笠原長時の傳は「元服之次第」の下にあり。

しよれいせうしゆつしよ
諸例抄出書　本朝　十三册

幕府評定所より引繼きて、內閣文庫に保存せるものなり。年度は詳ならず。

しよれきにつき
所歷日記　本朝　五卷

寬文四年三月三日、有馬の溫泉を立ち出で、東海道を經て伊勢に有馬に到りたる時の和文日記なり。五卷二册に寫傳す。「所歷事をば詳密に記したり。五卷日記增補」あり參考すべし。

◎石出常軒は帶刀また吉澤と稱す。幕府の士にして、家世々典獄たり。寬文七年丁未〔一六六七〕二月、江戶に大火ありて、傳馬町の獄舍に延燒したる時、獄囚を諭め、豎潛を堵し、三日以內に還り來るべきを約して解放したるに、因人三日を待たずして悉く約を守りきといふ。常軒が在職中の威信を察すべし。著書は本書の外に卷雨鈔、有馬道之記、札右鈔等あり。

しよれきにつきぞうほ
所歷日記增補　本朝　五卷

石出吉深の「所歷日記」を增補したるもの。同書の詳密なるを嘆し、更に「國花萬葉記」によりて增補したるものなりといふ。寬歷五年乙亥〔一七九五〕二月、小野澤庵の序あり。原書は五卷二册なるを、これは五卷五册に寫傳せり。東都の人鈴肇といふもの、增補したるなれど、其の氏名を詳にせず。

しようくけいまう
諸錄鮭網　本朝　三十卷

古來の諸記錄中より、其の大要事績を拔萃したるもの。前太平記、保元平治物語、源平盛衰記、東鑑、太平記、京都將軍家譜、太閤記、德川家譜、關原記、落穗集、家康遺訓、同夜話集、三河後風土記、甲陽軍鑑、淡海記、清正記、東國太平記拔書、武家盛衰記、七國誌、令條記、碎玉話、島原記、越後騷動、仙臺騷動記、石川記、最上記、庄內物語、正雪記等より抄す。

じらうごひやくるん
次郎五百韻　一册　岡西　惟中

大阪第二回の五百韻俳諧にして、延寶六年戊午〔一六七八〕五月、「太郎五百韻」興行の後に催したる也。

◎岡西惟中の傳記は「一時軒隨筆」の下にあり。

しらうさはうちやう
素人庖丁　三卷　淺野　高造

初編は四季魚類の獻立より、割烹調味の諸法を記し、享和三年癸亥〔一八〇三〕の版刻。二編は初編の拾遺にして、魚鳥護業の使用法、及び魚鳥飯雜燉の諸法を記し、文化二年乙丑〔一八〇五〕の版刻。三編は專ら精進料理の諸法を記し、文政三年庚辰〔一八二〇〕の版刻。各々一卷づつなり。著者淺野高造は大阪の人なり。

しらがしふ
白髮集　本朝　一卷　僧　宗祇

連歌に關する諸要件を評論したるもの。永祿六年

癸亥(二二三)紹巴、天正六年戊寅(二五七八)紹與、同九年辛酉等の書寫奥書あり。「續群書類從」卷四百九十六、連歌部第二十四に收めたり。

◎宗祇の傳は「新莵玖波集」の下にあり。

しらかはあいきうろく

白川永久錄 本朝 三卷 松平 定信

法政上の要訣、文武家平素の修錬、仕君の用意等を槪說す。天明三年癸卯(二四四三)十二月、年二十六の時の作なりといふ。「聖武融要記」と同書なり。

◎松平定信の傳記は「花月草紙」の下にあり。

しらかはかせいろく

白川家政錄 本朝 三卷 松平 定信

奥州白川の城主松平定信が、其の家臣に家政上の心得を諭したるもの。寛永諸侯の四君子十餘人の事より、家政請規定の記錄せり。其の序言に「某事田安の家にして人となり多くの人に附合す。近習番わづか六七人を相手として非の内の蛙のたへ、たゞ幼年の時大屋遠江守がすゝめに隨ひ大塚大助に就て朱學を專らとし、餘力に奧書を見て、ひたすら齊家治國の事に工夫をこらしたるとおもへども實に手かけず。またその事を司る人にも遠く、世にいふ墨水練とやらにて、打過し所、常家の嫡子と雖成候へば、是より自分國政を聞く事とはなり候。しかれば名と心を一つにして執行の事に候へば、我等が存寄の旨を申聞せ各の所存をも承り、主從相和して事をなさざるときは、何事も成就せず。依て存寄の一通りを左にあらはし候」とあり。以て其の用意を知るべし。天明三年癸卯(二四四三)十二月著者の奥書あり。

◎松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

しらかはきかう

白川紀行 本朝 一卷 僧 宗祇

著者白川旅行の紀行なり。末に「於白川關應仁二年(二一二八)十月二十二日」と記して、宗祇、尹盛、牧林、穆翁、旬阿の連歌百韻を掲げたり。其の中宗祇三十、穆翁二十四、尹盛二十二なり。「續群書類從」卷五百二十四、紀行部第一に入れたり。

◎宗祇の傳は「新莵玖波集」の下にあり。

しらかはくわんそうろく

白川關楚錄 本朝 二卷

白川樂翁公の、平生近侍の者に物語したる、人君名臣の模範たるべき善惡事實を輯錄したるもの。もと「明君白川衆話」と題したる書名を斯く改めたるなるべし。いま寛政元年己酉(二四四九)の寫本による。

◎松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

しらかはけいみんろく

白川惠民錄 本朝 一卷 松平 定信

著者が其の下役及び領內人民等訓示したること摘れ出したる事、等の全文を集錄したるもの。著者子孫家臣共への教誡として隱忍謹愼したりといふ。其の說く所最も適切懇到なり全編假名書に記せり

◎松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

しらかはこうでんしんろく

白川侯傳心錄 本朝 一卷 松平 定信

上下の勤務方を主と論述したるものなり。著者子孫家臣共への教誡として隱忍謹愼したりといふ。其の說く所最も適切懇到なり全編假名書に記せり

◎松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

しらかはこうそんじよりしよ

白川侯存寄書 本朝 一卷 松平 定信

幼主補佐の役儀に就て、政道に關し、其の意見を陳述したるものなり。「假修業書」卷第二十二に收む。

◎松平定信の傳記は「花月草紙」の下にあり。

しらかはこでんか

白川古事考 本朝 一卷 廣瀨 典

郡名建置、郡界沿革、山川、神社等の古事を考錄し、神祇官の事以下二十五事に分ちて戲述せる白川家の記錄なり。一名を「白家部類」といふ。

しらかはきかん

白川家訓 本朝 一卷 松平 定信

白川樂翁の家訓を、寛政元年己酉(二四四九)五月舍人屋次右衛門の筆記したるもの。最初に「此度愚意の趣を左に記し、其方達に爲申聞候故は、自今以後業儀も其方と倶に直に善に進み、惡を退け、各は古の忠臣義士に不恥、某も明君賢主の跡を慕ひ、後代までも君臣共に能きためしにひかれ候樣にと眞實に存入候」云々の條より書き起せり。

◎松平定信の傳記は「花月草紙」の下にあり。

建武、應永間等の古體等を揭げたり、今見るところ「卷一」と記せれど、卷二以下はなし。破本にや。

◎廣瀨典の傳記は「しがらみ」の下にあり。

しらかはこでんき

白川古傳記 本朝 一卷

奥州白川二所の關の濫觴、源義家武衡家衡を征討の時の故事等より、結城氏佐竹氏合戰の事等を詳記し、末に白河關に關する古歌三十三首を擧げたり。寛政六年甲寅(二四五四)垂髮亭主人の奥書に「白川傳記一卷、未詳何人所著」云々とあり。

しらかはし

白川志 本朝 一卷 松平 定信

施政民治の要を論述したるものなり。天明三年癸卯(二四四三)三月の作にかゝる。

◎松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

しらかはせいご

白川政語 本朝 十三卷 松平 定信

政教の源流を論じたるもの。其の目を擧ぐれば、孝者德之本たる事を論ず、國を豐にし風俗を厚する事を論ず、人君の德儉素を本とする事を論ず、政の本は食に有る事を論ず、人君過を不改誡を入れ給ふべき事を論ず、財用の道を論ず、儲積を備ふる事を論ず、廣く儲積を設る事を論ず。租稅を銀にて納る事並に利貸の害を論ず、新田開墾のこと及び賢才に任ずるの法を論ず、風俗をたゞす事を論ず、後世富民の手錢をかりて國用をたすくる事を論ず、以上十三則假名交り文にて記さる。十三卷に作り一冊にして寫傳す。天明八年戊申(二四四八)初夏の自序あり。

◎松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

しらかはごのしちひやくしゆ

白河殿七百首 二卷

文永二年乙丑(一二六五)七月七日、白河殿に催せる當座御會なり。後嵯峨院五十八首前左大臣實雄二十六、民部卿爲家七十九、五條前大納言資季四十二、新大納言顯朝四十五、皇后宮大夫師繼二十八、侍從中納言爲氏百十四、源宰相資平二十七、從三位爲教二十五、富小路三位中將實世二十七、忠繼朝臣二十三、具氏朝臣二十八、經仁二十、右大辨光俊四十五、侍從入道覺信十五、藏忠朝臣十四、重名朝臣七、資有八、伊賀入道賢阿十五首等より成る。題別にすれば春百三十首、夏七十、秋百三十、冬七十、戀百五十、雜百五十首なり。「群書類從」卷百六十五、和歌部第二十に收めたり。同書末記に「右白河殿七百首、雖有不審、依無類本、不能校合」とあり。

しらかはまさたかきやうのしふ

白川雅喬卿集 本朝 一卷 白川 雅喬

著者の家集。寛永九年壬申(二二九二)十月八日、申院通村卿亭會に於ける十三歲の作より、年月を追うて其の詠歌數百首を收む。著者白川雅喬は神祇伯正二位なり。

しらかはやわ

白川夜話 本朝 一卷 松平 定信

寛政五年癸丑(二四五三)光格天皇の御父君なる閑院宮由仁親王へ太上天皇の尊號を進ぜられたき叙慮につきて、將軍家に敎書を下し給ひしより起りて、中山愛親、正親町公明等閑東へ下り、將軍家、補佐の臣と問答ありし次第を記したる「小夜話書」に就て事實を評論したるものなり。同書と併せ見るべし。卷末に「文化九年壬申(二四七二)正月二十五日遊夢堂睡翁識誌」と記せり。「假修業書二集」卷二

十三に收む。

しらかはらくおうこうでん　白河樂翁公傳　一卷　廣瀬　典

内題には「羽林源公傳」とあり。樂翁公松平定信の生涯を最も細に敍述し、最も詳に評論したるもの。假名交り文にて記す。著者廣瀬典は樂翁公の儒臣にして殊に親近し、其の學識の豐富を以て常に政事に預りて其の諮詢に供ふるもの殊に生前に錄するところ最も確實にして誤謬なきものなりといふ。「日本文庫」第五編中に編入す。

◎廣瀬典の傳は「しがらみ」の下にあり。

しらかはわうせきでんき　白川往昔傳記　寫一卷　大塚　高之

奥州白河關由緣音の緣起より、白河城下の鎭守鹿島明神轉座の條、八龍神宮の事、白河の濫觴、白河本城の事績、三十三間堂、白河二所の關の明神、關廣宿の事、其の他の來歷傳說等を、老人の物語等に隨筆したるものなり。延寶六年戊午（二三三八）四月の自跋あり。著者大塚高之は奥州の人、白河城下のものなりといふ。

しらぎしやうたおはせ　新羅社歌合　本一卷

承安三年癸巳（一八三三）八月十五夜新羅社に於ける歌合にして、藤原俊成卿の判にかゝる。

しらぎしやぶくきりやう　新羅社服忌令　寫一卷

しらたま

しらたまさうし　白璧草紙　六卷　細川浪二郎

遊女白璧の事績を書き綴たる戯作物語なり。文政六年癸未（一八二三）自序の末に曰く「唯予は夢の浮世に遊んで、今製情白璧が事績を飛ぐ閑人其の功の少なきを弄笑へし。將斷惡修善の徵意こゝにあらば其志多からん也」云々。

◎細川浪二郎は幕府の家人にして東里山人、蟲山人、九陽等の號あり。少にして小說を好み、山東京傳の弟子となりて戯著を學び、文化年間に至りて年々版行し、其の漸く著はるゝに至れり。今其の一生の著書を擧くれば、娼妓美談雜の花、とかく浮世は元陽意氣、中將姫蓮の絲織、音曲情の絲道、梅と柳華の繼分、さて〳〵長物語、照天松黄昏草紙、天岩戸曙草紙、松浦佐川姫注文通物語、清姫太郎日高影千、清川文七元結の始、田舍講釋、繼分浪花の梅ヶ枝、茶番狂言日切のせりふ、念猫もの語、華櫻姫卯月物語、正傳二葉丹前、女郎花幻物語、契情屏風志、傾城客間筌、胡蝶の夢幻物語、逐〳〵壽草紙、物見松女熊坂、黄金花作も陸奥、浮世街道教訓道、千葉模様好の菊形、小町櫻花の面影、七種盛物語、敵討華の山大全、見鑑東孝經、出放題無茶論、面白夢須磨の雪平、天津空村夢物語、其傳錦里委、敵討關の夜烏、初役江戸の立入、大和假名懸想文貢、繪重記り盃、風俗伊勢物語、大内山月雪花志、安達原一ツ家、開道白來也、嘘の傳來開卷未來記、鉤狐花の面影、室そだち花の魁、若衆の助六、大磯虎物語、忠信芳野雙紙、彦山靈驗毛谷村仇討、安倍清明辻占雙紙、山

吹長者懲物語、馬鹿多譯合鑑、金龜傳受書、一本氣嘘の切口、圍の花淵雪草紙、世界は芝居がやうめ、注文染浴稼多新形、關蝶記、滑稽奇談尾笑艸、小野ことら誠の差込、海道茶漬服の内幕、餘計の仕業、古風仕立野道遠、天狗の話、一夜源氏、教草戯言試筆等なり。晩年家を失ひ、所々流寓、芝切通し四日市等に移り奇妙術を傳授して僅に糊口せり。安政六年己未（二八五九）九月、七十四にて歿す。

しらぬひものがたり　白縫物語　二十卷　柳下貞種員

筑前領主菊池右衛門佐貞行の家從等、豐後臣杵の城主大友入道宗麟の女、傾城於筆等其の他の關係して作り成せる例の讀本小說なり。畫の間々に細書せり。畫は歌國の手に成る。初編に嘉永二年己酉（二八五〇九）種員の自序あり。

◎柳下亭種員は江戸の人にして、通稱を坂本辰金七といふ。柳亭種彦の門人となりて、草雙紙を著すこと多し。卽ち本書の外に、童謠妙々車、美男葛紫雲、前自草紙、新撰歌俳百人一首、自來也物語、假名反古一休草紙、雨夜鐘四谷怪談等あり。安政五年戊午（二八五八）二月歿す。

しらみねでらえんぎ　白峯寺緣起　一卷　僧　良賢

弘法大師、智證大師の建立したる讃岐國河野郡白峯寺の緣起を敍したるもの。卷末に「當寺事、代々寶記雖有之、永祿緣起之間、今度再興之、以記錄等泰示、清少納言入道常宗草之、卽時從宰相行俊卿清書之、爲後證註之、于時應永十三年丙戌（一四〇六）孟秋二十五日也」とあり。「群書類從」卷四百四十二、釋家部第十八に收めたり。著者良賢は贈從三位と肩書あり。本書の外に「永德讓位記」の著あり。

しらんぶんしふ　子蘭文集　二卷　片岡　正英

卷一に文、卷二に五言排律、五言歌行、卷三に五言律、卷四に五言絕句、卷五に七言律、卷六に七言絕句を收めたり。明和六年己丑（一七六九）の自敍等を載す。別に附錄一卷ありて、本由豆流を喝す、太田南畝石川雅望を懲す、絕世之岸本由豆流を喝す、弘法大師屋代輪池翁を論ずる等の六項あり。天保二年辛卯（一八三一）二月歿す。

◎片岡正英、自ら略して岡子蘭といひ、雲香亭と號す。博通を以て知らる。著書は本書の外に「雲香亭漫錄」あり。

しりうごと　しりうごと　一卷　小說家主人（コセツトノヤ）

當時の國學及び歌人の陋習を攻擊して可笑しく評破嘲罵したるもの。本居宣長海野幸典子を詰る、太平不田篤胤を罵る、本居宣長を詰る、木居宣長

著者の家集。嘉永四年辛亥(一八五一)川北重慈、淺田惟家の序、佐久間華の跋等を附せり。

◎柳澤信兆は島原の世臣鄧邸の留守居信行の子なり。字を伯民、通稱を太郎といひ、芝陵と號す。幼より河北溫山に師事して儒を學び、詩に長ず。益精勵して遂に一藩の詩風を變ずるに至る。藩侯愛重して助員となし、また父の職を繼がしむ。伯民此の俗職を厭と雖も君命なれば職を守ること三年にして辭す。これより師溫山海鷗文社に入らしめ、また佐藤一齋に謁うて昌平黌に入らしむ。日夜精研して遂に黌中に頭角をあらはす。業成りて國に歸るや肺患に罹り、弘化二年乙巳(一八四五)八月五日、年三十にて逝く。

しりんいかうしふ

詞林意行集 六巻　宮川　道達

請家の紀行文を東西南北に分ちて拾輯す。和文、漢文、詩稿共に取れり。今其の原文目を列擧すれば、卷一、二、三、四は東方にして、筑紫宗久の「都のつと」、二條眞基の「小島のすさみ」、釋宗長の「宗祇終焉記」、仁和寺尊海の「東道の記」、細川幽齋の「東國陣道記」、澤庵和尚の「東關記」、同「石山紀行」、松永貞德の「石山詣の記」、那波道圓の「東山道記行」、榮庵の「江府記行」、平巖仙桂の「東行雜詩」、同「江東吟稿」、草山元政の「遊醍醐寺詩」、雪堂處士の「遊神明山記」、菅原玄圃の「膳所記行詩」等を掲げ、卷五は西南方にして、梁南和尚の「自尾州熱田至藝陽廣島路行之詩」、石川丈山の「藝陽道行詩」、林道春の「和石州山村藝陽途中詩」、松永昌三の「遊有馬溫泉記行和韻」、李庵正意の「遊有馬溫泉記」、藤昌琳の「南州記行」、那波道圓の「南行詩」、大秀和尚の「南行詩」、加藤磐齋の「吉野花見記」、水無瀨氏成の「隱岐記行」等を載せ、卷六は北方にして、平巖仙桂の「渭北吟稿」、同「甲辰記行」、和田宗允の「丹後海陸順遊日錄」、右京大夫の「大原記」、仙桂の詩、磐齋の歌より成れる「大原記行」、宮川一翠子の「大原和韻」等を擧げ、凡て三十三編より成れり。元祿元年戊辰(一六八八)の自序あり。本書の拾遺として「拾遺意行集」一卷あり。同題名の下に解題せり。

◎宮川道達の傳は「拾遺意行集」の下にあり。

しりんかうもく

詞林綱目 二巻　中堀　憶庵

此の書は一名「荻の栞」といふ題下に解題せり。

しりんさいえふ

詞林采葉 十巻　僧　由阿

主と「萬葉集」中の名所枕詞故事等を註釋し、此の集の書樣時代撰者點和等の事をも記したるもの。貞治元年壬寅(一三六二)十一月十五日の奥書あり、輸掛營邊藤澤山隱士桑門由阿、年秋七十七と記せり。

しりんさいえふせう

詞林采葉抄 三冊

古來の諸言詞を「萬葉集」其の他の古書中より抄出して、釋義したるものにて、十に分ち記す。後光明天皇の應安二年己酉(一三六九)以下貞治、應仁等の奥書あり。

しりんさんちせう

詞林三知抄 二巻

連歌用の詞凡て三百餘を擧げ、神祇、四季、雜に分類して、一々註解したるものなり。寛永十二年乙亥(一六三五)出版す。

しりんしえきし

司林祇役志 一巻　黒澤　惟直

文化二年乙丑(一八〇五)相州に祇役したる時の記。司林は御林奉行のことなり。二月二十九日江戸を出でて、甲相豆の山林を檢し、五月六日家に歸りたるまでを記せり。詩も三十首載せたり。

◎黒澤惟直は武藏國兒玉郡の人にして、正甫と字し、雪堂と號し、正助と稱す。經術伊洛を主とし、又文詞に長じ、志氣雄邁、學を好みて書を手に放つことなし。寛政五年命により朝士に準じ、田安家に奉仕す。後、擢でられて昌平學番長となり、學政整備の議に與りて功績多しといふ。文化八年遂つて司貨と爲れり、文政七年甲申(一八二四)閏八月二十五日、六十七にて歿す。騎籠高林禪寺に葬る。

しりんしふえふ

詞林拾葉 一巻　僧　似雲

手習波に關する口授なり。似雲の跋に曰く、其のかみ武者の小路儀同三司實陰公の机下に侍るころ、常にのたまひける御墓の言の葉は、畏くも和歌のうら波みちくるしほの、よるとなくひるとなく濱松風のたゝず耳にふれつゝ、年月をわたりしはいけるかひありと思ひながら、わたつ海の心深う

して、山の井の淺きこゝろもてくみだに知るべき事にもあらず、しかはあれど、數ある中のたまさかには、さすが身にしむ事の侍れば、忘れぬさきにと、やがてのたまひしまゝを集めにしもしほ草、名けて詞林拾葉といはんかも」とあり。

◎似雲の傳は「磯の浪」の下にあり。

しりんたんそう

四隣譚叢 本宮七巻　吉澤　好謙

信濃國佐久郡岩村田「所謂大井郷」の四隣に於ける地歷的雜事を筆錄す。第一卷より第三卷までを譚叢、第四卷を年表、第五卷を神祠、第六卷を佛宇、第七卷を廢跡譚藪の中科野國十隣境の圖、信濃御牧佐久郡方角の圖岩村田驛の圖を掲ぐ。寛保二年壬戌(一七四二)臥雲道冰の序、延享三年度會末濟の序、寛延二年己巳(一七四九)金千禮の跋あり。七卷三册に寫せり。

◎吉澤好謙のことは「信濃地名考」の下にあり。

じりんちやうか

字林長歌 一巻　源　堅

字體の差異、字音の多少等を知らしむる爲め、幾多の普通漢字を集め、それを以て一大長歌によみなせるなり。蓋し初學者の諷誦に便したるものなるべし。其の中の一二句を例摘せば、「決ぐる滅す、滅らす池しに、准は俗にて通用す、次と況とは二を偏に、辰も貳も工は俗況や凉し凝渥ゆる…」等の如く、字體扁旁、精粗眞僞を諷誦的に敘べたるなり。其の句數實に一千二百六十三、字數一千六百二十字あり。寛永七年庚寅(一六三〇)二月の自序、同五月友人細井知慎の序明和六年己丑(一七六九)碕哲子明の跋あり。著者源堅は竹隱と號し固卿と字す。

しりんまんえふりやうさく

詞林萬葉良材 二巻　中堀　憶庵

本書は一名「荻の栞」といふ。該題下に解題せり。

しりんりやうさく

詩林良材 三巻

詩作用の熟字、異名、聲字、連綿、故事等を輯め分類列序して各、假名書にて解義を施したるもの。本書は最初眞享、寛永等に版せられて大に世に行はれたるもの、蓋し詩學の書の國字を以て解せられたるもの、殆嚆矢なりといふ。今見る所は文化八年辛未(一八一一)の校訂出版にかゝる。著者は村田翁と記せり。村田翁は其の名を知るべからず、村田菟庵の著に「詩林眞材後編」ありといへり。本書の著者或は同人か。または其の父子の中なるべしなほ考ふべし。

しるしのさを

しるしの竿 一册

著者の俳諧集にて、寛永二年乙酉(一六二五)京都にて出版したるもの。著者小松は加州の俳人なり。

しるしのすぎ

驗の杉 本一巻　伴　信友

山城國紀伊郡の稻荷神に關する考證なり。自序末に、「いなり山、ゑるしの杉のすぎし世の、まことを今にたづねてそ見む」と詠ぜる歌詞を取て書名とせり。天保六年乙未(一八三五)六月の自序あり。

しるしのほこ

しるしの反故 本一巻　六誹園立路

著者の見聞の隨筆にて、朱、墨、硯等の目より小々妻に至る數十目を雜考雜記す。著者の端書に、「世にとくしれる事も老のれざめのつたなさの其のすさめとなし侍れば、そこはかおぼゆるしるしの反故と名號侍る」といふ。

◎六誹園立路の傳は「老の栞」の下にあり。

じれいじゆつし

字例述志 本七巻　龜井　昱

經史諸子に關する著者の考論雜說數十編を撰抄集錄したるもの。享保二年丁酉(一七一七)八月に成りたり。

◎龜井昱は道載の長子にして元風と字し昱次郎と稱し、昭陽、宗谷、月窟、天山遯者等の號あり。夙に經史諸子に通じまた古文辭を善くせり。著書は、譜孟子、讀學庸解、國語獨了、尚書考古序箋、莊子發音、說文談、說文繫談、蒙典、烽山日記、月窟漫筆、月窟捨筆等あり。天保七年丙申(一八三六)六年六十四にて歿す。

しれう

史料 本五百三十五册　塙　保己一

宇多天皇より、後一條天皇までを、年月日を逐ひて記し、毎事綱を掲げ、下に諸書を博證せり。塙氏和

學講談所において、幕命によりて編する所、眞に大事業なりしなり。今帝國大學の大日本史料は、この書の後を繼ぎてかけるものなり。

◎塙保己一の傳は「群書類從」の下にあり。

しれうそうしよ　史料叢書　※一百五卷

修史の資料に供すべき殘簡零册を、得るに隨て輯錄したるもの。凡そ百二種あり。編次は極めて裒雜なれども、修史家の參考たるべき珍重の書また少からず。

じれきき　自曆記　※一卷　藤原　資經

著者の記錄の一部分なり。今見るところは、後鳥羽天皇の建久九年戊午(一一九八)冬の部にかゝる。應永三十二年乙巳(一四二五)楠大納言時房の奥書あり。一名を「自曆御記」といふ。著者藤原資經は別に「資經卿記」の著あり。

じれきぎよき　自曆御記　※一卷　藤原　資經

此の書は一名「自曆記」の下に掲出したり。

しれきこにつし　知床日誌　一卷　松浦竹四郎

箱館西海岸より三百十餘里なる知床の地誌なり。山川地形の圖說せらるゝもの多し。萬延元年庚申(一八六〇)の作。安政二年癸巳(一八五五)新刻す。

◎松浦竹四郎の傳記は「蝦夷年代記」の下にあり。

じれんいしよ　二連異稱　一卷　藤田　一正

本朝要制の當例得失を記したるもの。著者の端書に「讀禮之次、因及皇朝要制「采錄古今居製一者、名曰二連異稱一、其人則天子諸侯卿大夫士庶悉備、足二以爲一法」と云ひ、後村上天皇、東部王、水戸義公、紀夏井、藤原長親、野中兼山、尾崎喜內、町定祥、川井正直、木下貞幹、伊藤仁齋等が喪中の事績を記したり。寬政五年癸丑(一七九三)櫻井安享、村井昱弘、門人會澤安等の序跋あり。

◎藤田一正の傳は「勘農或問」の下にあり。

じれんいしよう　二連異稱　一卷　藤田　一正

本朝要制の當例得失を記したるもの。著者の端書に「讀禮之次、因及皇朝要制「采錄古今居製一者、名曰二連異稱一、其人則天子諸侯卿大夫士庶悉備、足二以爲一法」と云ひ、後村上天皇、東部王、水戸義公、紀夏井、藤原長親、野中兼山、尾崎喜內、町定祥、川井正直、木下貞幹、伊藤仁齋等が喪中の事績を記したり。寬政五年癸丑(一七九三)櫻井安享、村井昱弘、門人會澤安等の序跋あり。

◎藤田一正の傳は「勘農或問」の下にあり。

しろいねぐろいねのるゐ　白稻黑稻の類　※一卷　成島　良譲

源眞讓の「文月の二十八日白稻黑稻を給はりしかしこまりを聞え奉る長歌並短歌」と大岡忠固の「さきつ年白稻黑稻を乘りけるに、其の種にて生し立給ひし稻とて給りければ其の故由をのぶる歌並短歌」との二長短各二首より成る。末に「此册は昨年復任以後、風興致し白龜を手に入奉獻候へば、白斑黑穗之禾を賜り、右奉謝の愚詠、及參政大岡侯之詠も同斷書加へ入御覽候御返却に不及申候足利樣成島」とあり。「輪池叢書」第三十二に收めたり。

◎成島良譲の傳は「南山史」の下にあり。

しろきおうものがたり　白木翁物語　四卷　小原大夫軒

孝心、仁の苗、神信仰、祈念、出來合、祟、並に狐つきの辨、佛の利生、以來の物語など平假名文に綴りたるもの。元祿年間なる白木翁といへる人の清談に託して作りたるもの。表書には「清美問答」とあり。寬政四年壬子(一七九二)の序跋等あり。

しろさとりのかくもんだふ　城取離格問答　※一卷

武田流兵法城取の事につきて、問答したるものなり。種々の圖を設けて、其の授受の有樣等を示せり

しろん　史論　二卷　新井　君美

國史に就きての論述なり。垂仁皇后之禍、景行拜彦狹島王爲東山道十五國都督、仲哀崩古事記不係神之事、應神非十四月生、應神位定矣、讀仁德帝紀、武內大臣釋冤、大連之亂、馬子弒帝、新羅貨子、東史多訛、日本府建置沿革、大化元年入月懸鐘設匱、孝德改新詔、天智崩、天武十三年十月始定八姓並者官員關白阿衡、報在唐僧中瑞牒、以上の諸目を取む。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

しろん　史論　三卷　安積　覺

我が歷史上の雜論なり。一に「濟泊史論」と稱す。帝號議、帝號議例、帝大友紀議、二宮考、神功皇后論、大日本史後序、書預修紀傳義例後、將軍傳義例、答奧川昱清問、石田筆記辨、烈祖成績序、保建大記跋、守山日記跋、書增補追加家忠日記後、源義家、平政子、入田親員、書武市常三、海上隱者、神祖興隆偉學、記直衛兼續事、題贊、道濟、信玄遠交、韮崎之戰、其の他共、凡て四十四編、更に附錄雜文二十編あり。弘化三年丙午(一八四六)板倉勝明の跋あり。

◎安積覺の傳は「澗草涉筆」の下にあり。

しろん　史論　二卷　安積　信

世變成敗人物等に關する歷史上の評論を集めたるもの。種臣子、億計王、聖德太子論、大化之政、吉備眞備、延曆遷都、三善清行、菅原道眞、保元平治之亂、賴朝論、元弘建武之事、護良親王、北畠親房、新田義貞、藤原藤房、足利尊氏、足利義滿、豐臣秀吉、其の他の數篇あり。明治十三年に至りて新刻す。

◎安積信の傳は「長齋閒話」の下にあり。

しろん　詩論　一卷　太宰　純

諸體の詩法を論じたるものにて、寬延元年戊辰(一七四八)の作。安永二年癸巳(一七七三)新刻す。

◎太宰純の傳記は「經濟錄」の下にあり。

しろんざつそう　史論襍綴　※四册

森尚謙、僧竺常、栗山堅、佐々宗淳、熊澤蕃山、林春齋、紀德良等の漢文史論數十編を輯めたるもの也。

しんあんいかう　愼庵遺稿　十卷　薮　弘篤

著者の詩文を輯む。其の中卷一より卷四までは書。卷五は序記。卷六は墓誌銘、贊跋。卷七より卷九までは雜著。卷十は詩を載せたり。寬曆十年庚辰(一八二〇)男惣の序及び附言あり。

しんあんしゆかん　新安手簡　※二卷　立原　萬

新井白石と安積澹泊との贈答手簡を編輯したるものにて、和漢書籍の事其の他文學上に關するものを採れり。

◎立原萬は字を伯時、通稱を甚五郎といひ、翠軒と號す。水戸の藩士なり、江戸に出でて、儒官となり、民等に從學し、久保益齋、柴野栗山、大塚默堂、伊勢安齋等と親交せり。學成りて後水戸に還りて儒官となり、漢唐の學を講ぜり。後文公の侍讀となり、遂に史學館總裁となり、また政事に參與し、頗る交教上の獻替時事の政務等に功ありきといふ。其の編書「新安手簡」は平生新井白石の書を好むまゝ、安積澹泊の所藏せし書牘を集輯したるなり。

しんいちにんさんしんわか　新一人三臣和歌　※一卷

後水尾院御一人の御歌と、三條西實澄、烏丸資慶、中院通村等三臣のとを編輯したるもの。後柏原院、三條西實隆、冷泉爲廣等の歌を集めたるもの。「一人三臣和歌」に對して「新一人三臣和歌」とは號けたるなり。

しんいづかい　深衣圖解　※一卷　中井　積德

◎竪弘篤は熊本の藩士なり。最初靈庵と號し、後、慮庵と改む。年十五にして父の跡を襲ひ、祿三百石を承け、仕へて鎭衛隊長となる。程朱の學を修めて當時に知らる。延享元年(一七四四)歿す、年五十七。

しんあんしゆかん　新安手簡　※二卷　立原　萬

新井白石と安積澹泊との贈答手簡を編輯したるものにて、和漢書籍の事其の他文學上に關するものを採れり。

◎立原萬は字を伯時、通稱を甚五郎といひ、翠軒と號す。水戸の藩士なり、江戸に出でて、儒官となり、民等に從學し、久保益齋、柴野栗山、大塚默堂、伊勢安齋等と親交せり。學成りて後水戸に還りて儒官となり、漢唐の學を講ぜり。後文公の侍讀となり、遂に史學館總裁となり、また政事に參與し、頗る交教上の獻替時事の政務等に功ありきといふ。其の編書「新安手簡」は平生新井白石の書を好むまゝ、安積澹泊の所藏せし書牘を集輯したるなり。

しんいちにんさんしんわか　新一人三臣和歌　※一卷

後水尾院御一人の御歌と、三條西實澄、烏丸資慶、中院通村等三臣のとを編輯したるもの。後柏原院、三條西實隆、冷泉爲廣等の歌を集めたるもの。「一人三臣和歌」に對して「新一人三臣和歌」とは號けたるなり。

しんいづかい　深衣圖解　※一卷　中井　積德

連歌の集なり。此の歌の書に筑波の名を負ふせることは宗祇の「新菟玖波集」の下に云へり。本書を「新犬筑波集」と云へるは、山崎宗鑑の「犬筑波集」といふもの既に出したるより云へるなり。自序あれど年月を記さず。

◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下に出づ。

しんいはふろくやくめいべんらん　神遺方附錄藥名便覽　※一卷　和氣　義啓

禮記の中の深衣篇、玉藻篇に就き考說圖解したるものなり。明和二年乙酉(一七六五)孟冬の自跋あ

◎中井積德の傳は「七經雕題略」の下にあり。

しんいつとうしちづせうしゆつ　清一統志地圖抄出　※一軸

「清一統志」に所載の地圖を抄出したるものにて、盛京全圖中より興京、奉天府、錦州府、寧古塔、黑龍江の五箇所を圖出せり。

しんいつとうてんかぜんづ　清一統天下全圖　一鋪

清國の一統の地圖にて、省、府、廳、直隸州、州縣、關營、鎭土司等標識を分ちて記せり。彼國乾隆三十二年丁亥歲即ち我が明和四年(一七六七)に、徐姚黃于人の著したる「天下輿圖」に基きて增補を加へたるものなりといふ。

しんいはつくばしふ　新犬筑波集　十卷　北村　季吟

動物、植物、金石にて薬方に用ふべきもの名を、いろは順に列挙し漢名をも記したるものなり。「叢書料本」第三十一に収めたり。著者和氣義啓は京都の醫にして、錦小路頬庵の門人なり。

しんいやくはう　清瀉薬方　本一巻

蘆合香丸、琥珀抱龍丸、辰砂抱龍丸、益母丸其他数十種の清瀉薬方を記載したるものなり。関山翁の識書を借りて寫せる由丹波元簡の奥書あり。何人の撰なるかを知らずといふ。

しんいれい　神異例　本七巻　橘　守部

古書中に見えたる神の霊異を集録したるもの。巻一に天照大御神霊異、巻二に内侍所神鏡霊異、巻三に熱田大御神霊異、御倉板挙神霊異、巻四に天皇皇神霊異、八幡大神霊異、巻五に罰夷賊神霊異、巻六に修理國土神霊異、臨事簡助神霊異、巻七に諸神雑霊異、崇峻諸神霊異、怠罰諸神霊異等あり。著者の意は、人に信を起さしむるに神験を以てするにあり。此の験に疑あらば神代の古言に徴すべく、尚疑ひあらば其の事績に照すべく、また三者併せて考究せば何人か信を起さゞらんとの意なり。天保十四年癸卯(一八四三)著し、七巻二冊に寫傳す。

◎橘守部の傳は「稜威道別」の下に出づ。

じんいんぐわんたんししふ　壬寅元旦詩集　一巻　篠崎　維章

享保七年壬寅(一七二二)元旦の詩を編輯したるもの。同年の自序あり。

◎篠崎維章は平姓にして、字を子文、通稱を金吾といひ、東海と號す。江戸の儒者なり。幼にして非凡、よく讀書を好み、暗誦するところ多し。長ずるに従て博覽廣通當時の學者を以て稱せらる。享保十年京に遊びて伊藤東涯に學び、遂に塾を開きて教授を業とす。小幡侯其の名を聞きて厚聘し、林鳳岡の講じ諸生を監し、都講となる。介によりて、経史を講じ諸生を教へ、著述を事とす。朝敝年の後辞してまた塾生を教へ、著述を事とす。朝野雑記、和學辨、同後編、東海談、同後編、同續編、懐卷秘革、知命筆錄、故實拾要、同附錄、同拾遺、不問談、同續、於乎止點圖説、譯訓法、詳略日本史、群書分類等あり。元文五年庚申(一七四〇)七月朔日、五十四歳にて歿す。

しんかんしふ　新韻集　本二巻

漢字にて言語を集め、韻のいろは順に列れて、各字に音訓を附したるもの。而して、漢字の平仄を分ち、ま、熟字、反切等をも示したり。天保十五年甲辰(一八四四)黒川春村の奥書中、「此書世稱萬里居士所撰、今攷其音訓、的在文明年間、且檢其引用書、必是淨居氏之撰」云々とあり。一名「色葉集」といふ。

しんかんひめみやみゆきはじめのき　新院姫宮御行始記　一巻

延慶四年辛亥(一九七一)三月二十五日、新院(後伏見)の姫宮御行始の記なり。「群書類從」巻五百二十八、雑部第八十三に入れたり。類本なきより、誤字あるも得正さゞるよしを奥書せり。

しんかんわかぎよくわいはじめならびにおんつきなみたうざ　新院和歌御會始並御月次當座　本一巻

寛文十三年癸丑(一六七三)正月二十三日、延寶二年正月二十三日、同二十七日、同四年正月二十三日、同五年正月二十三日、同六年正月二十三日、同八年二月十三日、同十月六日、同十一月七日、天和二年壬戌(一六八二)二月十七日、同三月二十一日の御會始、御月次當座等の歌を編輯す。

しんうたざれいし　新歌さゞれ石　二十巻　僧　了壽

戸田茂睡、青山宗俊以下諸家の和歌數百首を四季戀雑に類聚したるものなり。元祿十六年癸未(一七〇三)了壽の自序あり。二十巻六冊に版行す。著者了壽は柳陰堂と號せり。

しんえいたいぐら　新永代藏　六巻　北條　團水

大福長者の經歴有樣等を、可笑しく書綴りて遊興家を諷刺したる戯作なり。自序に「一日の油斷は一年の怠り、是一生の損、取かへす事あたはず。爰にちかき世の町人家業を遊興にわすれ、金銀のおもき寶を失ふ。是を諷諫せよと、ある衣綿の神の門たたき給ふより、あらたに長者の名なかべて、六巻となし、新永代藏におさむるものなり」とあり。

◎北條團水は京師の人。一に橘堂また白眼居士と號す。維本才藏の門に入りて俳諧を學び、井原西鶴

を思慕して其の筆作に模倣せるところ多し。本書「新永代藏」の如き其の一なり。著書は本書の外に武道一覽、怪談諸國物語、頭巾、くやみ草、心の紫、獨鈷鎌論、秋津島、特牛、狂言鼈、正月揃、彌み助人形、木曾有格、塗笠等あり。寶永八年辛卯(一七一一)歿す、年四十九。

しんえいほんざう　眞影本草　一帖　石黒　通玄

草類の葉形印譜なり。凡て五十種を圖す。安政四年丁巳(一八五七)版行す。戸田五郎兵衛と共に編輯したるものなり。著者石黒通玄は尾張の人なり。

しんえきべんあうひ　神易辨奥祕　本一巻　新田目道茂

本書は易占に關するもの。河洛象形五圖より始めて、占術變化の法等を説明せり。

しんえしやうにんごやう　眞慧上人御定　本一巻　僧　眞慧

末流の徒輩を訓誡せる教定なり。十條條、假名文にて記す。永正元年甲子(一五〇四)十月八日の自末記あり。「續群書類從」巻八百四十一、釋家部第百二十六に入れたり。

しんえつついぶん　信越異聞　本二巻

此の書は仁孝天皇の弘化四年丁未(一八四七)三月、信越地方の地震に關する雑記なり。當時の書札類五十餘通を掲記す。

しんえふさくしやぶるゐ　新葉作者部類　本一巻　榊原　忠次

南朝弘和元年辛酉(一三八一)に出來せる「新葉和歌集」の作者を部類略傳したるもの。著者の著書には、「源考功」と署名せるもの多し。蓋し、著者は官式部大夫にして、考功は式部大夫の唐名なればなり。

◎榊原忠次の傳は「武家百人一首」の下にあり。

しんえふわかしふ　新葉和歌集　二十巻　宗良親王

元弘以後弘和に至る歌を集めて其の數一千四百十五首あり。蓋し從來南朝に撰集なく、又北朝の撰集に南朝人のよむうたの入らざるを慨きて此の集を撰ばれしとなり、後龜山天皇之れを御覽して敕撰に准ぜらる。親王の序文中に「抑かく撰び集むることも、たゞその〳〵うちの筆かなることわざなれば、あめのした廣きもてあそびものとならんことは、思ひよるべきにあらぬを、はからざるに、今敕撰に准ふべきよしの敕をかふぶりて、老のさいはひのそみに越え、よろこびのなみだたもとにあまれり。これによりて、ところ〴〵あらためなほして弘和元年(一三八一)十二月三日これを奏す」云々とあり。水戸西山公も南朝を正統とせるより、「新葉集」も本書の序文を加へたり。

◎宗良親王は後醍醐天皇の皇子にして護良親王の弟なり。剃髪して僧となり、尊澄と號して妙法院に住し、三品に敍せられ、天台の座主たり。元弘の亂、笠置城陷りて執へられしも、亂平ぎて京師に還り再び座主となり、建武二年二品に敍せられ、遂に一品に進む。後村上帝立つに及び、遺詔を奉じ賢を斥けて宗良と改め中務卿征東將軍となる。上野親王、或は信濃宮と傳す。以來益軍事に從ひ、敗れて諸方に流離竄匿備に艱難を嘗め給ひき。

しんおうづしよ　神應圖證　一巻　深井　太平

讃岐國金毘羅社の額面中支那人琉球人等より寄進したるものを縮寫したるものなり。天保七年丙申(一八三六)の作にかゝる。

しんをらんだしやうせつ　新阿蘭陀詳説　本一巻

新阿蘭陀とは、蓋し英里吉斯諸島を通稱したるものならべし。本書は、同諸島の風俗、人情、飲食、衣服、宮室、器械等に至ることを詳説せり。

しんかいき　新階記　本一巻

貞觀元年己卯(一五一九)正月二十七日、五畿八道の諸神二百六十七社へ新敍進階ありたる時の次第を記せり。

しんかいき　神階記　本六巻

天武天皇の元年癸酉(一三三三)後奈良天皇の天文九年庚子(一五四〇)に至る、諸國神社の位階を進めし事の記錄なり。六巻一册に作れり。「續群書類

從上卷六十、神祇部第六十にも收めたり。

しんかいじりんしふゐん
新改字林集韻 一卷
書引漢字書の簡約なるものなり。寶曆四年甲戌(一七六四)大阪書肆より發刊す。

しんかいろく
神階錄 本朝 **八卷** **鶴峯 戊申** シゲノブ
式內諸神社の神階を記したるもの。六國史以下の書によりて調べ、國によりて分けたり。文化二年乙丑(一八〇五)の作。

◎鶴峯戊申は通稱彦一郎、季尼また世靈と字し、中橋、海西漁夫等の號あり。天明八年戊申(一七八八)七月二十二日、勢後國白幷に生る。八坂神社司從五位下大和守宣綱の長子なり。國性學を好み、夙に京畿の間に遊びて、和漢の學を研究したる所に子弟を教育せり。自ら常師なしといへども、能く諸學に渉り、算數、究理、音韻、悉皇、圖學にまで通ぜり。文政九年、年三十九にして父を喪ひ、家を弟、宣定に繼がしめ、更に諸國に游歷して當時の學者諸大家を尋れ、後、江戸に卜居し、究理學を開きて徒を教ふ。夙に一家の見を立て、該博なる諸學を統括し、自ら在來の學者と撰を異にせり。又、日本文典の研究に於て、西洋文典を參酌し、本邦の言語に品詞を立て、動詞の格を定め、全く西洋文典に模して組織したるは、最も創意の事に屬す。天保九年十二月十三日、文學を以て水戸烈公に謁し、爾來編纂校合和歌侍講等の御用を承り年々白銀數十枚を受け、安政三年祿を賜り藩士に列せらる。安政六年己未(一八五九)八月二十四日、駒込水戸藩邸に歿す、年七十二。小石川傳通院內緣授院(善光寺)に葬る。

著書頗る多し列擧すれば、語學新書、續語學新書、徵古新說、天之宮柱、三才究理頌、轉禍趣吉考、史傳摘抄、神階錄、日出風土記、神代文字考、國郡類纂、丙丁地震紀聞、新論新評、熟語定式、圭密辨、史記類語、詩文類語、大成和漢年代記、調錢、小學字母表、漢代紀錄、伊豆上總下總安房常陸下野常陸下野等諸國の地歷代紀錄、伊豆上總下總安房常陸下野常陸下野等諸國の地圖、新式算法九々札、本教或問、古傳說遺事集成、本教異聞、天柱、天柱考證、本教心錄、本教還事、本教略述歌裏書、圭密辨裏書、鎭木心錄、本教暗誦歌、本教大義、赤文字考、古木風俗歌解、究理新書、究理或問、當代年歷紀聞、歷代備考人名地名便覽、墨色小筆、根源口受、量地鈔撰國郡紳名考、歷代事實出所書目、地動新圖、和名抄國郡紳名考、歷代人物掌覽、鎭神祭便覽、名判集成、救貧卦選要、建宅紫白便覽、墨色小筆、木座不動町見口受記、筆算捷法、算法新式、八科捷法、「敗學捷法、理學捷法、關學捷法、語學捷法、歌學捷法、詩學捷法」、韻鏡新解、磨光韻鏡正誤、韻鏡日受未定稿、韻鏡指掌圖、韻鏡序例、字彙韻圖、韻鏡日受未定稿、韻鏡指示、悉談梓字淺略抄、悉談新釋、悉皇新抄、康熙字典切韻指掌、圖字通、圖字通釋、圖字辨、文翻譯便覽、變語節用、掌中譯鍵、助字辨、助字活用法例、助字近道、假名近道、增補正誤假名遣、礎磨詞鏡、詞の玉緒論、詠歌捷徑、言葉能橋立、歌詞清濁考、詞之品定、詠歌近道、雅言清濁、九弁口受、大中將基式、蘇居遺稿、製國僞書考、小說自在、教訓諺寄、知新漫錄、海西來定稿、今調歌集、今調詩集、五倫歌集等なり。

しんかうせいこうはつかん
新校正孔方圖鑒 一卷 **狩谷 懷之**
和漢の古錢を年代順に圖說したるもの。漢錢にては一千九百九十年前、前漢文帝五年の八字半兩錢より、始めて百數十箇を圖す。文化十二年乙亥(一八一五)の作なり。

◎狩谷懷之は諱之「被齋と號し、雲卿と字す」の男にして、字を少卿といふ。風采氣象能く父に肖て、また能く和漢の學に通ぜり。江戸淺草に住す。

しんかうだんわん
榊巷談苑 寫一卷 **榊原 玄輔**
種々の故實考解を記したるもの。其の中の二三を例擧すれば、「伊吹山のさゝも草は近江國の伊吹山にあらず下野國の伊吹山なり」、「元日の音樂を店の音になして唐藥とよむこと」、「時の鼓うつこと」「今の女ばらの仮をおめし、汁をおつけといふ等の事」、「宴の由に入りて手を空しくして歸るといふ事」等一百餘箇條あり。「みそのや」第一册に收めらる。而して天明四年甲辰(一七八四)五月の南畝の奥書に據保己一の藏書を借寫せしよしを記せり。

◎榊原玄輔の傳は「印章備考」の下にあり。

しんかうにつしよくさんばふ
新考日食三法 寫三卷 **高橋 至時**
日食の事に關し、白道新法、赤道法の二法及び消長法を立て、日食推測法を考究したるものなり。淡

文にて記し、間々細註を加ふ。寬政十年戊午(一七九八)四月著者の附言あり。

◎高橋至時は子春と字し、作左衞門と稱し、東岡また梅軒と號す。性曆學を好み、麻田剛立に就て天文を學び、幕府に仕へ、選ばれて曆官となり、源秀升、平德風等と消長法を立て、新曆を成す。詳はゆる寬政曆なり。文化元年甲子(一八〇四)正月、年四十一にて歿す。下谷源空寺に葬れり。

しんがくいけんべん
新學異見辨 一卷 **業合 大枝**
賀茂眞淵の「國比來奈備」(「歌學上の要論」)を非難したる、香川景樹の「新學異見」を辨駁したるものなり。賀茂の說を維護し、香川の論を攻擊してまた一種の古學異見を發表せり。文政二年己卯(一八一九)の著作なる由、同十一年十二月五日の著者の奥書にあり。同十二年伊原富藏の序を附して出版す。

◎業合大枝は備前石名の國學者なり。最初藤非高備に從學し、後、平田篤胤に就いて古學を研究し、大に其の說を主張せり。

しんがくおくのかけはし
心學奥の棧 三卷 **鎌田 鵬**
心學の書にて、上卷は「天地萬物は皆一針眼の虛中其の理を含藏して出來の說」より、「現の事又吉內の兆先あらはるゝ事あり並に萬物同氣相感同聲相應の說」に至る十三條。中卷は「生類物の氣に感じて形を變ずるものあるの說」より、「小兒の淨潔を嫌ひ浴湯を嫌ふとき神に祈りて驗あるの說」に至る八條。下卷は「小兒は無心にして其の感通甚速なるの說」より、「鬼神有無の說」に至る十條あり。振假名付に記す。文政元年戊寅(一八一八)上河宗禮の序、同三年六月知常の跋等あり。同五年出版す。

◎鎌田鵬の傳は「朱學辨」の下にあり。

しんがくごそく
心學五則 一卷 **鎌田 鵬**
心學流の教訓書なり。恭敬、誠仁、知命、致知、長養の五則は人倫の正路とすれども、學識なき時はこれを知ること能はずとて、修身齊家、立身出世の要道を平易に說明したるものなり。

◎鎌田鵬の傳は「朱學辨」の下にあり。

しんがくごりんしよ
心學五倫書 一卷 **跡部 良顯**
心學に基きて人倫を俗解したるもの。天道、明德、誠、敬、仁義、五倫、天の本心、一國の主、その他の項を改めて、說明せる假名書なり。寬文五年乙巳(一六六五)三月三日出版す。

しんがくしようでんき
神學承傳記 寫一卷 **跡部 良顯**
神學の道統等の事に關して、平田篤胤と會談したる時の自記なり。文化十三年丙子(一八一六)で天兒屋根命より、五十三代の道統におはし侍る云々の語あり。寬文十二年壬子(一六七二)江戸平野重誠の序あり、同人の聞書するところなり。國學院卽上河明の序あり。

◎奥田頼杖は安藝國廣島の人にして、壽太と俗稱す。泯水に從ひ石門の心學を傳授し、諸國に遊說して江戸に至り、仁孝天皇の天保十年己亥(一八三九)講を開きて說話するところを編述したるものなりといふ。

しんがくはつめいのせつ
神學發明之說 寫一卷 **跡部 良顯**
「垂加社語」の書惟一神道者以二天地一爲二書籍一以二最初我が國開闢の事、神靈傳來の事を略言し、吉田家神祇官、祝部社、祝菅麿統道の事を略記したるものなり。寬保二年壬戌(一七四二)小島長嘉寫本の奥書あり。

◎岡田正利の傳は「神代卷講歌」の下にあり。

しんがくしよくわいき
神學初會記 寫一卷 **藤塚 知直**
寬保三年癸亥(一七四三)三月九日、著者國史を研究せんため、初め恭靜の門に入り、初會相見の禮畢りて、告諭せられたる學則數條を筆記したるもの。延享四年丁卯(一七四七)源誠之の序、寬保三年の自跋等あり。著者藤塚知直は奥州鹽竈神社の神官にして式部と稱す。

しんがくだうのはなし
心學道の話 八卷 **奥田 頼杖**
石門心學に基きて、諸國に遊說したる時の講話なり。天保十三年壬寅(一八四二)江戸平野重誠の序あり、同人の聞書するところなり。國學院卽上河明の序あり。

◎奥田頼杖は安藝國廣島の人にして、壽太と俗稱す。泯水に從ひ石門の心學を傳授し、諸國に遊說して江戸に至り、仁孝天皇の天保十年己亥(一八三九)講を開きて說話するところを編述したるものなりといふ。

しんがくしようでんき
神學承傳記 寫一卷 **跡部 良顯**
「垂加社語」の書惟一神道者以二天地一爲二書籍一以二

日月」爲證明云々、正遁の「神代口訣」の古語大道而辭假說兒心求神靈云々の語を解釋したるもの。紙員僅に數葉、正德二年壬辰(一三七二)の作。

◎跡部良顯の傳は「三種祕傳考」の下にあり。

しんがくべんぎだつろ

神學辨疑脫漏　本一册

神學辨疑の脫漏の補記を拾集したるもの。卷九大八洲辨(誠之作)、卷十三天御中主尊辨(知直)、卷二十一常闇辨(之行)、卷二十二當世神辨(鹽谷世弘)、卷三十一潮干滿辨(鈴木重長)、卷四十一倭姫長誦辨(井上四明)、卷四十二、十種神寶辨並鎭魂祭及招魂法(慶德克明)、卷四十三鏡卜辨(磯野貞純)、卷四十四三種神器辨(源幸混)、卷四十七革命異同辨(國崎幸保)、卷五十八雨段再拜拍手辨附り奉幣警蹕辨(誠之)等を集む。

しんがくりふち

眞學立知　本一卷　藤原　梁章

我が神道の源流を說明せるもの。多くの古書に徵して上古の神意、神制、神器等を解釋す。漢文にて記し更に細註を加ふ。書名立知の二字は、「延喜祝詞式」の「下津磐根、宮柱太敷立、高天原、千木高知」の句にとれりといふ。寬政二年庚戌(一七九〇)の著。著者藤原梁章は越前の人なり。

しんかじやうだん

神家常談　二卷　眞野　時繩

神道の事の大略を記したるもの。本稱「しんけじやうだん」の下に詳解せり。

◎眞野時繩の傳は「異域同日譚」の下に出でたり。

しんかせいしき

新加制式　一卷

可崇神社敬寺塔事、固可有禁止賑卹事等より、被官人及攻戰其咎懸主人否事に至る二十二箇條の新加制式書なり。「續史籍集覽」に入る。

しんかせうき

新可笑記　五卷　井原　西鶴

武士に關する種々の可笑しき作話を集めたるもの。「理非の命勝負」、武士は人をたすくる一言の事」、「柿におどろく猿の執心」、武士は不斷覺悟の事」、「生胆は妙藥のよし、武士主命に替る事」、「先例の命乞、武士は內證をみせざる事」、「宦女に人の約束の馬、武士は各別長袖の事」、「死出の旅行しらぬ灸所、武士とは吾業のたがはざる事」、其の他十數項あり。前に既に「可笑記」の著ありたるゆゑ、今は新の字を冠らしめたるなり。元祿元年戊辰(一六八八)十一月刊行す。

◎井原西鶴の傳は「小夜嵐物語」の下にあり。

しんかでん

新家傳　本一卷

新家五十八家の代々補任を略記したるもの。松殿より勘解由小路に至る一名を「新補任」とも云ふ。

じんかひつえうき

人家必要記　一卷　三遷

儉約の意、衣服洗方、器材保存、家屋建築、食物調理等より栽培、處方、日用筆算等の事を詳記せり。一名を「經濟一疏」といふ。天保八年丁酉(一八三七)四月著す。

しんかまんぴつ

愼夏漫筆　四卷　西島　長孫

著者の見聞隨筆なり。「愼夏」の名は蕉窗書齋中の語に取りて、夏日の惑り易きを愼みて自ら勵ますの意なりと自序にいへり。弘化二年乙巳(一八四五)角田簡の序、同四年長戸誠の序あり。

◎西島長孫の傳は「坤齋日抄」の下に出せり。

しんかんいろく

清鑑易知錄　十六卷　村山　緯

清の太祖、大宗、世祖の三世に關する同國の歷史なり。彼三朝實錄の浩汗なるものを刪削して十六卷八册に作れるなり。漢文にて記す。南部永根鉉元鼎と同編するところなり。寬政九年丁巳(一七九七)春正月の例言、文化四年丁卯(一八〇七)柴野邦彥の序あり。

◎村山緯は字を伯經、通稱を一介といひ、芝嶋と號す。四明に就きて漢學を究め、塗に筑前侯の儒官となる。著書には本書の外に、名藩備考、清三朝實錄、採要全事略、雲關文集等あり。

しんかんじゆれききやう

新撰授時曆經　八卷　小川　正意

「授時曆經」は元の廉守敬が漢代以降の積年日法を廢し、更に最も天歩に合ふ所の新術を發したる曆書なり。彼の宣明曆の古法に假す其の新法眞善なる

り。宜なり該書一出以來、曆家靡然として、此の法に從へり。本邦僅に此の原書を傳ふ。本邦人のこれを解說したるもの多き中にも、本書を以て最初とす。其首二卷には、算法を記し、後の六卷には新に立成を附したり。故に之れを「新勘授時曆經」と云ふ。延寶元年癸丑(一六七三)出版す。著者小川正意は泉州境の人なり。

しんかんにんき

新堪忍記　七卷　青木　五省

武邊の堪忍、異見につく堪忍等より、堪忍に關する要項を擧ぐ。寬永五年戊子(一六二八)の出版にかゝる。

◎青木五省の傳記は「窓水閑談」の下にあり。

しんかんよわぜんづ

新刊輿地全圖　一折　佐藤　政養

西洋紀元一千八百五十七年(安政四年)荷蘭に於て刊行せられたる大圖を譯述したるもの。文久元年辛酉(一八六一)冬十一月の凡例第一にいはく、「專ら彼國地理家及び航海商客の用ふる者にして、輿地各洲の面積山岳の高低、江河の長短、人民の多寡、航路の遠近、及び有名航客周遊の年月、土地の氣候各國船旗、指南針の差、吸鐵氣の極、潮の方向、城邑の距離、動植の種類に至るまで、集めて大成せり、故に從來の地圖に比すれば、最も精詳なりといふべし」云々といへり。

◎佐藤政養は、羽後國飽海郡の人にして、與之助と通稱し、李山と號し、後、篁溪と改む。性孝順にして、歷領主酒井侯に褒賞せらる。夙に彫刻を好み、江戸に出でて後藤恒像に就き、其の技を究めて妙所に入る。また勝海舟に隨つて和蘭書、及び火技を學びて成り、藩侯の命を受けて火術、築城等を掌る。安政六年幕府に徵されて、軍艦操練所の蘭書翻譯官となり、慶應二年大阪鐵砲奉行となり、明治以後、大阪府兵局出仕、民部省工部省出仕鐵道助手等に歷官し、正六位に敍せらる。明治十年丁丑(一八七七)八月二日、五十七にて歿せり。

しんきうばつすゐ

鍼灸拔萃　五卷

鍼術灸法に關する理論と實際とを述したるもの。先づ人體の生理を明らめ、溫涼寒熱を察し、虛實痩肥を診し、手法、刺禁、穴處を審にし、補瀉、迎隨、手法あつて其の健全を期するにあり。蓋し鍼灸諸家の鍼灸祕密妙處の書中より、其の肝要を拔き出して輯錄編次したるものなり。偶名文に記して五卷一册に作らる。

じんぎきぶん

神祇紀聞　本六卷　貝原　篤信

我が神道、神社に關する雜說雜考なり。諸神の起原、神體、所在、齋式等を詳しく記述せり。今文化九年壬申(一八一二)の寫本による。

◎貝原篤信の傳記は「自娛集」の下にあり。

じんぎきねんぎやうじ

神祇官年中行事　本一卷

正月より十二月に至る諸社禮祭神馬供饌等の事を記したるもの。其の中には建久元暦安永眞應等年間の神事の次第を記せり。

じんぎさいしりやくき

神祇祭祀略記　本一卷　天野　信景

神祇の尊敬祭祀すべきことを論じ、また諸神の御司葬等を說きたるものなり。寬永(一六二四―四四)七一)年中の作なり。

◎天野信景の傳は「牛頭天王辨」の下に出づ。

しんぎしき

新儀式　本一卷

泰加神位階事、伊勢太神遷宮事、造住吉祖等太神事、新年祭事、祈雨祈雪事以下十數目の儀式例を、諸記錄中より抄輯せり。

じんぎしふい

神祇拾遺　本一卷　卜部　兼滿

天神七代垂跡、地神五代垂跡、愛宕權現、稻荷社本緣、賀茂岩本橋本本緣、春日若宮、三輪大黑、祇園感神院事、由王權事、祚確社事、北野天神、姪子夷事、高良神事、五所八幡事、八所靈事、向日明神本緣、山崎神社、阿蘇宮本緣、日本八島、神社牛玉、祖神、開神、犬子呪事、等の目につきて記せり。著者侍從を兼任したりしより、其の唐名を取りて、拾遺と書名せり。文化十三年丙子(一八一六)端保已一の校正にかゝる。「續群書類從」卷五十八、神祇部第五十八にあり。

◎卜部兼滿は當時神祇大輔兼侍從に任ぜり。

じんぎしやうじやう

神祇正宗　本一卷　卜部　兼名

宗廟社稷神之事、伊勢外宮内宮之事、石清水八幡宮之事、八幡大菩薩菩薩尊號之事、開闢習合之神道之事、本地垂跡之事、神明之利生護佛院事、法性神有常有之事、權者神實神之事、氏神氏子之事等を記す。巻末に「右一巻之書は吾家之祕極也、自今以後生々世々、子々孫々八十聯綿、心肌此職、永宣爲龜鏡、不遵不襲之仁、不可電見、況於他人乎」とあり。正宗は卜部兼當の嫡男、兼名のことなるべしといふ。天正三年乙亥(一五七五)寫本の奥書あり。

「續群書類從」巻五十八、神祇部五十八にあり。

◎卜部兼名は吉田兼好の祖父にして、當時從四位有京大夫たりきと。今其の詳傳を得ず。

じんぎじるゐ
神祇事類 ㊟二巻　藤井　高尚

神道、儒道、佛道、兩部神道、諸社神體、託宣眞僞の辨、幽顯の辨、靈神を荒神と申す事、井戸神、福神、其の他凡て神祇に關する雜事を解說せり。

◎藤井高尚の傳は「淺瀨のしるべ」の下に出づ。

じんぎしんごんしよじゐんほんまつてふ
新義眞言諸寺院本末牒 ㊟四巻

各國に散在して眞言宗新義派に屬する本末諸寺院の名稱及び朱印高を列記したるものなり。

じんきそくりやうはふ
新器測量法　二巻　五十嵐篤好

從來用ふる所の測量器は實用に輕便ならざるものと爲して、更に一の測量器を製し其の用法と量地の法とを記載したる者なり。按に之れを「新器測量法」と曰ふ。安政三年丙辰(一八五六)出版す。

◎五十嵐篤好は越中館野の人なり。業を同郷人石黒信由に學びて、大に測量學に通じ、又歌文を富士谷御杖に學べり。別に「天朔曆譜」等の著あり。

じんぎだうぶくきりやう
神祇道服忌令 ㊟一巻　吉田　兼倶

神祇道の服忌令を註したるもの。正保二年乙酉(一六四五)兼武の奥書に、卜部代々眞筆之記錄、悉書拔之、不滿一事者也、宜く祕中之深祕書、堅莫外見」云々と云ふ。

じんぎだうぶくきりやう
神祇道服忌令 ㊟一巻　吉田　兼倶

父母服の事附り輕服の事、父母の月忌日と、正忌日とに神社へ參事、僧尼の服の事等より、産穢甲乙丙の三等の事、七歳未滿の乳母並に家室父親類等月水の時底において別火す、其の處へ神事の人出入の事等に至る。神祇の忌服凡て一百三十六項を擧げたり。「續群書類從」巻八十一、神祇部第八十一に收めたり。

じんぎだうぶくきりやう
神祇道服忌令 ㊟一巻　吉田　兼倶

神祇道の服忌令を註したるもの。正保二年乙酉(一六四五)兼武の奥書あり。「右服忌令祕抄者、以卜部三〇五)兼武の奥書あり。

代々眞筆之記錄、悉書拔之、不滿一事者也、宜く祕中之深祕書、堅莫外見」云々と云ふ。

じんぎだうぶくきりやう
神祇道服忌令 ㊟一巻

父母服の事附り輕服の事、父母の月忌日と、正忌日とに神社へ參事、僧尼の服の事等より、産穢甲乙丙の三等の事、七歳未滿の乳母並に家室父親類等月水の時底において別火す、其の處へ神事の人出入の事等に至る。神祇の忌服凡て一百三十六項を擧げたり。「續群書類從」巻八十一、神祇部第八十一に收めたり。

じんぎだうぶくきりやう
神祇道服忌令 ㊟一巻　吉田　兼倶

神祇道の服忌令を註したるもの。正保二年乙酉(一六四五)兼武の奥書あり。「右服忌令祕抄者、以卜部家の祕錄を一事を滿さず書拔の由を奥書す。「續群書類從」巻八十一、神祇部第八十一にあり。

じんぎはうてん
神祇寶典 ㊟九巻　德川　義直

古今の神祇を列擧して、順序に其の御所御成立御宮社等の事を詳記したるなり。漢文にて記せり。

◎德川義直の傳は「家康公御年譜」の下にあり。

じんぎはぎけんしやうもんだふ
神祇破僞顯正問答 ㊟二巻　源　雅胤

神宮大物忌荒木田神主荷博の問に對して答へたる神祇の事に關して卜部家の僞說を辨破したるもの。僞作の敎宣數通を辨じ、同家の祕即符文字等をも辨じ、習合說並に卜部家の僞事其の他を辨駁す。

◎源雅胤のことは「神代紀祕解」の下にあり。

じんぎはくぶにん
神祇伯補任 ㊟一巻

和銅元年戊申(一三六八)の比より、天保二年辛卯(一八四九)に至る。卽ち中臣朝臣大島、及び中臣朝臣意美麻呂より雅譚王に至る補任なり。

じんぎびかう
神祇備考 ㊟二巻

全國の式社を列擧考證したるものなり。畿內八道に分ちて各郡別に順記せり。編年詳ならず。

しんきひけつのでん
神紀祕訣之傳 ㊟一巻　淺利　信賢

葦牙之傳、浮脂之傳、猿田彦太神之傳、其の他の紀文を儒說によりて解說したるものなり。

じんぎひせう
神祇祕抄 ㊟三巻

神佛習合の說を記したるもの。序文中に「成二十餘之問答一決二神佛不二一道一三卷之口訣、名二神祇祕抄一云々」とあり。

じんぎひやくしゆわか
神祇百首和歌 一巻　度會　元長

伊勢太神宮神祇を詠じたる百首なり。春二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、戀十首、雜二十首より成る。「群書類從」巻二十八、神祇部第二十八にも收めたり。

じんぎぶくきりやう
神祇服忌令 ㊟一巻

服暇、雜穢、物忌、魚食事、鳥食事、四足物事、五辛事等類を分ちて服忌に關する事を片假字にて記せり

しんぎやういどうかう
心經異同考 ㊟一巻　屋代　弘賢

「般若心經」六種の異譯につきて、其の異同を考論したるもの。卽ち唐三藏法師玄奘の譯を本として譯したる「般若波羅密多心經」、唐三藏法師義淨譯の「佛說般若波羅密多心經」、「羅什三藏の譯「摩訶般若波羅密大明呪經」、劉宋罽賓國三藏勝紫沙門の譯を本として譯したる「般若波羅密多心經」、東天竺國三藏沙門法月の譯せる「普遍智藏般若波羅密多心經」、唐三藏法師義淨譯の西天三藏朝本大夫試光錄卿傳法大師施護譯を本として譯したる「佛說聖佛母般若波羅密多經」の六種につきて比論したるなり。寛政四年壬子(一四五二)閏二月の草稿なり。「輪池叢書」第七に入れたり。

◎屋代弘賢の傳は「古今要覽稿」の下にあり。

しんぎやうきたん
神境紀談 ㊟七册　門垣殿舍別宮攝社其の他神

伊勢兩宮を主として、門垣殿舍別宮攝社其の他神境に關するものを集錄せり。凡例中に「凡そ世間藏するところの神境雜話といふものは卽ち此の書の草稿なり。編纂未だ就らず、好事の者の爲めに寫し去られ、遂に世に廣むことを致せり。今より後彼の雜話を棄てゝ是の紀談を用ひて可なり」といへり。七册の內二册は附錄なり。元祿十三年庚辰(一三三六〇)の自序あり。

◎度會延貞のことは「神名略記序」の下にあり。

しんぎやうげふしふ
心行業集 一巻　僧　玄尊

淨土宗鎭西派の安心起行作業の事を顯示したる漢文の法語なり。延寶三年乙卯(一三三五)九月の自序あり。

◎玄尊は淨土宗鎭西派の僧、名は智鑑、姓は平氏、遠州濱松の人なり。十三歳にして知篤の室に薙染し、淨嚮二宗を研修せり。寛文年中宮中に召されて紫宸殿に淨土教を說く延寶の末年、入十餘歲にて入寂す、年月詳ならず。

しんぎやうさうせんじもん
小眞行草千字文 三折　卷　大任

小宇三體木版摺習字帖なり。一體一帖づつに作る、明治九年出版す。

◎卷大任の傳記は「十體源流」の下にあり。

しんきやうざつれい
神境雜例 ㊟四册

刀禰任符標、沽券文刀禰證署、喪朝朝臣寄文、頓朝寄文等より、月讀宮遷前、小宮眞宮、北御門社之事、森高岡出入願書返答書等に至る雜事を輯錄したるものなり。時代は上世より、寛文比までに及べり。

しんきやうざつわ
神境雜話 ㊟四巻

全國各神社の神境に關する雜說を集錄したるもの。諸祠官の合同編輯したるものなる由天和二年壬戌(一六八二)龍尚舍の跋にあり。本書の序は延寶九年辛酉(一三三四)五月記し畢る由を記す。なほ「神境紀談」と參看すべし。

しんぎやうじばん
新行事板 一册　定　宗

俳諧の集なり。元祿四年辛未(一三五一)の編輯に

かゝる。

しんぎやうはうへしよ
心經忠箆疏　一巻　僧　黄泉
「摩訶般若波羅蜜多心經」を講釋したるものなり。文政十一年戊子(一八二八)の自序あり。
◎黄泉は禪僧にして、無著老人と稱し、萬松と肩書せるは寺號なるべし。別著に「正法眼藏涉典錄續貂」あり。

しんぎやうもんだふ
神京問答　一巻　大江　吉利
多田義俊の「神明憑談」に、天照太神御在郡の地は、豐前國中津郡なることを論じたるを、垂加派の人人の笑評したるにより、本書を著して義俊の論意を辨明したるなり。寶曆六年丙子(一七五六)坪地正路の序を載す。著者大江吉利は桃蹊と號し、多田義俊の門人なり。

じんきやうろん
人鏡論　三巻　性子
神儒佛の三者を假作して、道と利との貴賤を論じたる一種の物語なり。一は道の唯一貴重なるを說き、一は社會生活の事は皆金錢なることを主張せり。本名を「金持重寶記」と題せり。文龜三年癸亥(一四〇三)四圖寺公藤の序、長享元年丁未(一四八七)足利義政の奥書あり。元祿七年甲戌(一六九四)出版す。

しんきよかうき
振裾考記　一巻　藤原　國頭
遠江國の地誌にして、分國定界、國名義各名所等を「延喜式」以下の古書に依りて考記せり。
◎藤原國頭は遠江國讀誌社大祝にして、信濃守と稱す。別に「遠江名所和歌集」の編あり。

しんぎよくしふ
新玉集　七册　犬井　貞恕
俳諧の集なり。編輯の年時は詳ならず。著者犬井貞恕(乾軍次)の傳は「あたら千句」の下にあり。

しんぎよくしふ
新玉集　十册　渡邊　登
俳諧の集なり。四季に部類して編輯したるも、著者と年時とを詳にせず。

じんぎりやくせつ
仁義略說　一巻　朝川　鼎
孔孟のいはゆる仁義二字の要義を略說したるもの。簡なりと雖も能く其の要を得、經義に於て攷據する所なきにあらず。文化十四年丁丑(一八一七)七月、門人岡田式の跋を附して刊行す。近刊「日本文庫」第三編にも收められる。
◎朝川鼎は字を玉鼎といひ、善庵と號す。幼にして類異の聞えあり、年十二、山本北山に就きて學び、長ずるに從ひて諸方を遊歷し業大成して松浦侯の聘に遇ひ、儒官として頗る優待を受く、列侯中來り學ぶもの多し。弘化三年幕府の召に應じて誤を賜ることありき。嘉永二年己酉(一八四九)二月七日、年六十九にて歿す。遺子門人等私謚して學古先生と稱す。北總葛飾郡小梅村常宗寺に葬れり。

じんぎれいおうき
神祇靈應記　一巻　僧　春山
天神七代の事、地神五代の事、人王代神明出現の事、熊野權現の事、住吉大明神の事、賀茂大明神事、その他の雜件を記す。國部智合の書なり。應安二年己酉(一三六九)の編輯なり。

しんきろん
愼機論　一巻　渡邊　登
外國の事情及び當世の時務を痛論したるもの。僅に數葉に過ざれども、著者の抱負を伺ふに足るべし。天保七年丙申(一八三六)の作にかゝる。近刊「日本文庫」第二編にも收められる。
◎渡邊登は三河田原藩の家老、名は定靜、字は子靜また伯登といひ、華山と號す。初め經學を修め、また能く詩書をも讀習したり。此書を作りて時事を痛論し、終に高野長英等と共に罪に遇ひ、天保十三年壬寅(一八四二)十月、自殺す。

じんぎわか
神祇和歌　一巻　度會　元長
本書は一名「神祇百首和歌」の下に掲出せり。

しんぐううたあはせ
新宮歌合　一巻
正治元年己未(一一九九)十一月七日の歌合なり。

しんぐうごじんぱうもくろく
新宮御神寶目錄　一巻

紀州熊野新宮の寶物目錄なり。元文二年丁巳(一七三七)五月、御見分の時之れを寫す由を記す。

しんぐうざつれいしふ
神宮雜例集　二巻
伊勢太神宮に關する雜記なり。卷一に御事神封事附神田並御領を掲げ、卷二に神宮四至事、內侍所事、心御柱事、天平寶事、政印事、年中行事事を載せたり。「群書類從」卷四、神祇部第四にあり。

しんぐうじやうざうしよもくろく
新宮城藏書目錄　一巻
經之部、史之部、子之部、集之部、詩學之類等に分ち、書名卷數等を列記せり。新宮城は紀伊國にて水野家居城なり。また丹鹿城とも稱せり。

しんぐうせんぐうぎやうじしだい
神宮遷宮行事次第　一巻
元祿二年己巳(一六八九)九月遷宮行事の次第を錄したるもの。元祿三年庚午(一六九〇)遠僧寫字の奥書あり。

しんぐうそうじはじめのき
神宮奏事始記　一巻
天文五年丙申(一五三六)九月十四日、同六年三月二十九日、同七年正月二十二日、同八年正月二十五日等の太神宮奏事始の儀式次第を記したるもの。末に「天正六年(一五七八)三月の著なり。
◎度會延良は天孝羅雲命四十四世の孫、權禰宜從四位下なり。本書の外に二所皇太神遷宰要略、神道辨疑集を著せり。

しんぐうそうじやう
神宮奏狀　一巻
伊勢太神宮に關する諸奏狀を始め、誓狀、解狀、敎書、官符等を集めたるもの。

じんぐうそくひでんもんだふ
神宮續秘傳問答　一巻　度會　延佳
前著「神宮秘傳問答」に續きて撰述したる同體例の書なり。天和二年壬戌(一六八二)三月の著。
◎度會延佳は、伊勢太神宮神異記」の下に傳す。

じんぐうだいはんにやきやうてんどくき
神宮大般若經轉讀記　一巻
文治二年丙午(一一八六)に於ける日記なり。一名「後乘坊參宮記」と稱す。「續群書類從」卷七百四十二、雜家部第二十七に收めたり。

じんぐうはうしよ
神宮方書　一巻
伊勢太神宮に關する諸名義を考證せしものなり。

しんくわいろく
神懷錄　一巻
天神七代地神五代等の諸神の德を五行に配當し、陰陽和合の事など俗說を記したり。奥書に「右之寫本吉田神龍院龍支花判」とあり。

しんくわうきりやく
神皇紀略　五巻　賴　復
卷首に「神紀略」と題して神代の事を略記し、次に本文を「皇紀略」と題して神武天皇の元年より起りて、醍醐天皇の延長八年庚寅(一五九〇)に至る事績を記述したるもの。漢文にて記す。序跋なく、著述發行等の年月を記さず、また五册中に著者の姓名をだに記さず。然れども熊本藩士勘後鶴崎の產(岡松甕谷と、伊豫松山の藩士藤野正啓と共に編輯したるものなり。
◎賴復は山陽の第二子にして、三樹三郎の兄なり。字を士剛、通稱を又次郎、號を支峯といふ。明治元年大學二等敎授に任じ、二年大學少博士に進み、後

薨職して京都に閑居し、二十二年己丑(一五四九)七月八日、六十七にて病歿す。

しんくわうけいづ　神皇系圖　本朝一冊　聖徳太子

天神七代地神五代、その他の神皇系圖なり。永正八年己巳(一五一九)荒木田氏秀の奥書に「神皇系圖一巻、豊御食炊屋姫天皇、庚辰歳摂政上宮厩戸豊聰耳聖徳太子尊救撰定而已」とあり。

◎聖徳太子の傳は「憲法十七箇條」の下にあり。

しんくわうざつし　新光雑志　本朝一巻

上野國勢多郡新川筋新光太平山妙珠院善昌寺の由緒を記したるもの。應永二年乙亥(一三九五)の奥書、享保十九年甲寅(一七三四)善昌寺四十六世全應の附記あり。

じんくわうざふようせんきろく　神皇雑用先規録　本朝二巻

伊勢太神宮の雑事を記したるもの。巻上に御鎮座、遷宮次第、伊勢齋内親王在任、伊勢勅使、伊勢公卿勅使、摂政在任、大嘗会悠紀主基次第、二所太神宮神主装束、正権禰宜服假時叙一級領位記例、二所太神宮禰宜正権極位、以上の目に就て記せり。慶安二年己丑(一六四九)写本の奥書あり「續群書類從」巻一、神祇部第一にも入れたり。

じんくわうつうき　神皇通記　本朝三十一巻

神代より中御門天皇の朝(紀元二三九五年まで)に至る、譲位、即位、立后、立太子、摂政、任官、叙位、治亂、潜革、朝儀祭典の興廃、神社佛閣の創建、及び文人武將、忠臣義士、孝子貞女、瑞祥災異等に關する詳細なる歴史なり。古史傳記に考據して漢文にて記述し、各条の典據を註記せり。寶暦七年丁丑(一七五七)三月、中島重裕の序あり。

しんぐわきはん　心畫軌範　一巻　貝原篤信

諸書を引て書道の事を論ず。中に書論、書法、書評の三箇條あり。正徳二年壬辰(一七一二)刊行す。

◎貝原篤信の傳は「自娯集」の下にあり。

しんぐわしんでふ　新花信帖　二巻

風期、粗文、遣志、眷心、慕光尼、仁寶、其の他數十家の俳句數百首を集めたるもの。横本一冊に作れり。

しんぐわてう　新花鳥　一冊　板上好春

著者の俳句集なり。元禄年中の編輯なるべし。

◎坂上好春は京の人。元隣門の俳人にして、向陽堂と號せり。貞享元禄中の人なり。

しんぐわんぜんじりれきのき　心關禪師履歴之記　本朝一巻

心關禪師は諱を清通といふ洛陽の人なり。應安六年己巳(一三八九)七十五にて入寂す。「續群書類從」巻二百四十一、傳部五十一に入れたり。末に「法友前惠山華岳遊智叟謹志」と記せり。

しんくんきくせう　神君規矩抄　本朝五巻

徳川家康譜代合戰の始末を記したるもの。毎條和漢名將の事績を引き、且つ評論を附して家康の功徳を稱したり。事實は大抵年代を逐ひ、參州寺部城攻利陣より、豊臣秀吉と和睦の事に終れり。筆者は詳ならざれども、巻首に「下臈が先祖三州のものにて、家康公の御家人なりし故」云々とあるにて、徳川家臣の手に成れること知るべし。

しんくんきよくでう　神君玉條　本朝一巻

内題に「徳川三河守家康公御名言集」と云へり。以て本書の性質を知るに足るべし。凡て三十六條あり。大概遺誡にして軍旅の事に關するは二三に過ぎず。

しんくんげんかうろく　神君言行錄　本朝十巻

徳川家康の言行を編年體に記したるもの。其の巻一より巻五までは正しく家康の言行にして、家康誕生の事より、朝鮮渡航希望の事までを記し、巻六以下は其の談話を筆錄したるものにして、大久保石見守の事より、家康の手の指の事に至る凡そ三十條あり。徳川家人の手に成りたる者なるべし。

しんくんげんかうろく　神君言行錄　本朝五巻

徳川家康の言行記なり。猿樂の大藏大夫な大久保石見守に取立てたる事、大須賀槇原家由緒の事等を始めとして、家康の手の指の事、三池傳太腰物の事等に終れり。是も徳川家臣の手に成りたるものにして、前掲「神君言行錄」の後半と大同小異なり。蓋し同下半の單行異本なるべし。

しんくんごねんぷ　神君御年譜　本朝五巻　徳川義直

此の書は別名「家康公御年譜」の下に解題したり。

しんくんごろく　神君語類　本朝四巻　植木長賢

徳川家康の談話を集錄したるもの。元禄六年癸酉(一六九三)の自跋を附したり。著者植木長賢は依鷺堂と號し伊勢の人なり。

しんくんしふい　神君拾遺　本朝一巻

徳川家康の種々の談話、近代武將の評判、古代軍將の事績談等を集錄したるもの。僅に數條あり。

しんくんよりひでたゞみだいどころへすゝめられそろごしよのうつし　神君より秀忠公御臺所へ被進候御書之寫　本朝一巻　徳川家康

竹千代國松の養育法につき詳細に申送りたるもの。頭を收めて記したる消息文なり。家康駿河にありし時江戸に來り、還駿の時、殊に秀忠の御臺所へ與へたるものなり。二月二十五日と記せり。「叢書斜本」第二十九に入れたり。

◎徳川家康は贈太政大臣廣忠の第一子なり。天文十一年壬寅(一五四二)十二月二十六日、參河國岡崎城に生る。幼字を竹千代といふ。弘治二年元服を加ふ。年十六清水寺の住職大原に從ひ、諸所に轉戰し、傍ら餘暇を以て文事を講じ、頗る事理に通ず。晩年豊臣氏に代りて天下を一統するに方りては、先づ學者を延きて諸書を講ぜしめ活字を制して經史を版行し、學校を興し、文庫を建て、遺書を求め、寫本を爲す等、其の文事上の功績は古來殆んど其の例なき所なり。謂はゆる江戸時代の文學とて今昔に稱賛する一代文學時代を開始したるものなり。武事大統一の功に加ふるに此の功あり、なほ法制等に著大の遺績あり。林信勝等と議して新式十三條を定め、藤原昭實等と朝廷式十七條を定めた るが如き其の例なり、元和二年丙辰(一六一六)四月十七日、七十五にて薨ず。此の年三月太政大臣に拜す。久能山に葬り、後移してより先き元和二年太政大臣を位を贈り東照の諡を賜ほる。

しんけいそうづつたいわか　心敬僧都十體和歌　本朝一巻　僧心敬

有心體、幽玄體、面白體、寵體、長高體、渡體、撫民體、一節體、尊古體、旅力體の歌一百二十首より成る。「續群書類從」巻四百〇三、和歌部第三十八に收めたり。

◎心敬の傳は「老のくりごと」の下にあり。

しんけいそうづてにをん　心敬僧都庭訓　本朝一巻　僧　兼載

心敬法印兼載が連歌の上につきて初學者の爲めに其の要件を說述したるもの。長享二年戊申(一四八八)著者兼載の奥書あり。「續群書類從」巻四百九十七、連歌部第二十七に收めたり。

◎兼載の傳は「兼載雜談」の下にあり。

しんけいそうづひやくしゆ　心敬僧都百首　本朝一巻　僧　心敬

雑「舟岡やすその〳〵煙面影に、その世へだてず立ちかすみかな」より、釋教「ほどもなくめぐれる十年三瀦川、今日まで得てや水もひぬらん」に至る。文政二年己卯(一四七九)心敬の奥書あり。歌に「かきおくも袖こそぬれもしほぐさ、ながらむあとのかたみともなれ」とあり。「續群書類從」巻三百九十七、和歌部第三十二に收めたり。

◉心敬の傳は「老のくりごと」の下に出でたり。

しんけいづりやくせう

神系圖略抄 本朝 三卷

上卷は天御中主命より、崔不合尊に至り、下卷は神武天皇より、照神天皇に至り、一卷は附錄にして天七地五の事より、二十二社、三十番神、諸國一宮等の事を記せり。

しんけいなんだいひやくしゅ

心敬難題百首 本朝 一卷 僧 心敬

應仁元年丁亥(一四六七)八月三十日、住吉神社へ奉納したるところの百首なり。「藤川百首」の題にてよめり。大永七年丁亥(一五二七)正月下旬の奥書あり。

◉心敬の傳は「老のくりごと」の下にあり。

しんけいひとりごと

心敬ひとり言 本朝 一卷 僧 心敬

連歌作上に就きて種々論述したるものなり。末に「應仁二年(一四六八)仲呂晦日心敬作」とあり。「續群書類從」卷四百九十七、連歌部第二十七にあり。

◉心敬の傳は「老のくりごと」の下にあり。

しんけいひやくしゅ

心敬百首 本朝 一卷 僧 心敬

著者の歌集。春、夏、秋、冬、戀、旅、述懷、無常、釋教等の題にて百首より成る。後土御門天皇の文明三年辛卯(一四七一)の編にかゝる。

◉心敬の傳は「老のくりごと」の下にあり。

しんけさんぐわんたいい

眞假三願大意 一卷 僧 月珠

無量壽經の中の第十八願、十九願、二十願の三願大意を講說したるもの。卷首に序して「嘉永四年辛亥(一八五一)の夏調講の學林に講述するの日、堂達中の請に應じて三願の大意を醒々非焰帶寺に講す。然るに法務甚だ繁くして暇なきに迫なく、只思ひ出るに任せて日を追うて講說す。講竟の後倩筆暢の應記をとりて刪補して之れを清記し、以て後時の廢忘に備ふ」とあり。明治二十四年著作相續者悪美丹哇の出版するところなり。

◉月珠の傳は「觀經要義鈔」の下に出づ。

しんけじやうだん

神家常談 二卷 眞野 時繩

神道に關する幾多の疑問を辨解したるもの。數十項より成る。末に「神學類聚」と題し、神道に關する事物起原三百餘事十三編の目次を添へたり。眞享四年丁卯(一六八七)の自序あり、同五年出版す。

◉眞野時繩の傳は「異域同日譚」の下にあり。

しんけさんぱふ

眞元算法 四卷 武田 眞元

首に題言一册を附して、數學の由來を略記し、本編三册は八算、見一、開平、開立より、規矩術、點竄術等を雜へ記し、間々世俗の俚言中、算數に關するものを記入し、末卷は圓理の表を載せたり。此の表は和田寧の九成表、東南表、八象表等を寫出したるものなり。本書は男眞則を撰者とし、第一、第二卷は門人安達利榮を編者とし、玉田秀を訂者とし、太田直温を校者としたり。第三卷は玉田秀を編者とし、山崎直包を訂者とし、安達利榮を校者としたり。弘化元年甲辰(一八四四)出版す。

◉武田眞元は圭計と稱し、無量齋と號し、堂號を眞空堂と謂ふ。大阪の人にして司天監内測量吏たり。算學を村井求林、間重富に受け、大に斯道に通じ、遂に自學を立て、眞元法と曰ひ、更に一派を設けて武田流と曰ふ。名聞大に關西に鳴る。門人も亦甚だ盛んなり。蓋し眞元法も亦關流の點竄術に他ならず、只其の師傳相異るのみを以て永く同流を子孫家人に訓諭したるもの。凡て九十九箇條より成れり。永祿元年戊午(一五五八)記して世子長老へ與へたるものなり。「群書類從」卷四百〇三、武家部第三に入れたり。

◉武田信繁は信虎の第二子にして、左馬介また左典厩と稱し、武術の外に突才ありきといふ。永祿四年辛酉(一五六一)九月川中島の合戰に從ひて謙信の爲に敗死す。或は天文二十三年甲寅(一五五四)八月川中島役に村上義清の獲る所となりきといふ

稱せず。別著に「算法便覽」あり。「眞元算法」四卷は男眞則及び門人等の撰述編校とせしも其の實眞元自身の心力を盡したるものなり。

しんげんぜんしふ

信玄全集 二十一卷

武田信玄の兵法軍談に關する書なりといひ傳ふ。卷一に軍法本の卷、卷二、三に城取卷上下、卷四に內試の卷、卷五、六に出陣前後の事等を記し、卷七に出陣、卷八、九に陣取上下、卷十に戰地、卷十一に屋候、卷十二に三戰、卷十三に備、卷十四に人事、卷十五に城攻、卷十六、十七に兵器上下、卷十八に軍配、卷十九に、雜記、卷二十、二十一に年譜を掲ぐ。天正十四年丙戌(一五八六)の事績までを記す。目錄一卷あり。凡て二十册に發行せり。恐くは後人の假託ならん。

しんげんぜんしふ

信玄全集 四十二卷

甲陽軍鑑二十二卷と、信玄全集二十卷とを合刻して、四十二卷十八册に作りたるものなり。

しんげんだいせうぜんじぎやうじやう

眞源大照禪師行狀 本朝 一卷 僧 圓月

大照禪寺はもと總州香取の人、本名利見、諱は德見、龍山と號せり。弘安七年甲申(一二八四)に生る。夙に鎌倉諸寺寂庵照禪を師として僧となり、諸州に修業改化して、遂に延文三年戊戌(一三五八)入寂す。「續群書類從」卷二百三十四、傳部第四十五に收めたり。著者圓月は本書を延文四年己亥(一三五九)三月既望作れる由を拔記す。

◉圓月は別に「中正子」六卷をも著せり。

しんけんるりでんき

新建瑠璃殿記 一卷 公辨法親王

武州豐島郡東叡山寛永寺に新建せる瑠璃殿の記。漢文にて記せり。元祿十二年己卯(一六九九)夏六月の作なり。

◉公辨法親王の傳は「和李嶠百二十詠」の下にあり

じんごうくわうぐうごでんき

神功皇后御傳記 本朝 二卷 矢野 玄道

凡例に曰く「此編本命にて「二朝小史」と曰ふ。蓋し豐浦繁雜の二朝の事を記せり。後放ありて之を改む。諠む者其の體裁を異む勿れ」云々。安政五年戊午(一八五八)川喜多眞彦の序あり。

◉矢野玄道の傳は「印度叢志略前集」の下にあり。

じんごうくわうぐうさんかんぜめ

神功皇后三韓襲 一卷 紀 海音

享保四年己亥(一七一九)五月の初興行にかゝる淨瑠璃本なり。著者紀海音の傳は「信田森女占」の下にあり。

しんこうぐんわかしふるゐだい

新紅塵和歌集類題 二卷 一柳 嘉言

元久二年乙丑(一八六五)四月寛宴を行にせられたる時、詠進したるものを集めたるなり。源通具等の詠するところなり。

しんこきんしふみのくにへづと
新古今集美濃家裏　五巻　本居　宣長

新古今和歌集の歌を抄出して其の歌趣等を評論したるもの。門人大矢重門といふもの美濃國より來居て、「新古今和歌集」の意趣等を質問するにつきて說明したるを、後鐘郷の家土産にしたるより、此の名を附したるなり。寛政三年辛亥(一四五一)四月に著さる。藤原磯足、秦鼎、大矢重門の序あり。

◎本居宣長の傳は「古事記傳」の下にあり。

しんこきんしんせう
新古今新抄　四巻　東　常縁

此の書は本名「新古今和歌集抄」の下に解題せり。

しんこきんぞうせう
新古今增抄　二十巻　加藤　磐齋

新古今和歌集の古抄に增抄したるもの。每首古抄の說をも擧げまた自己の考を加へたり。自跋あれど年代を記さず。

◎加藤磐齋の傳は「伊勢物語初冠」の下にあり。

しんこきんみのくにへづとおりそへ
新古今美濃家裏折添　三巻　本居　宣長

新旧撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、續續古今、千載集等の歌を抄出して詳雖したるものなり。「新古今美濃家裏」の附錄として「家つとに殘れる花も折添へて、同じ山路の末をたづねよ」と記せり。さてこそ折添とは呼べるなれ。寛政三年辛亥(一四五一)四月十三日の著。同九年三月出版す。

◎本居宣長の傳は「古事記傳」の下にあり。

しんこきんるゐそ
新古今類礎　写五册　野田　忠蕭

新古今集中の歌を每句の韻礎によりて類聚したるもの。先づ初句、二句、三句、四句、五句に分ち、每句ないろは順に分ち、最初「ろ」を韻礎とせるもの、次に「は」、次に「に」とやうに順次全集を類別したるなり。末に正德五乙未(一三一五)冬十月廿五日雨夜、擔津國武庫入江於村崎六兒鄙窓前、燈下、謹忠蹟六十七歲、一紙三拜而奉書寫之乾」とあり。

◎野田忠蕭の傳は「柏傳」の下にあり。

しんこきんわかしふせう
新古今和歌集　二十巻　藤原　通具

後鳥羽院の院宣によりて撰集したるもの。建仁元年辛酉(一二〇一)三月二十六日、參議右衛門督通具、大藏卿有家、右近中將定家、前上總介家隆、右少將雅經等の五人、鳥羽の離宮に於て撰進するところなり。序中に「昔今時を分たず、貴賤老若を論ぜず、遠きも近きも、賢きも愚なるも、各其の好む所を撰び、人を嫌はず、日に見えぬ神佛の言の葉も、鳥羽玉の夢に傳へたることまで、廣くもとめ、遍くあつめしむ……萬葉集に入れたるほこれを除かず、古今集より此の方七代の集に入れる歌をば之れを載することなし」云々とあり。春上下、夏、秋上下、冬、賀、哀傷、別離、羇旅、戀一、二、三、四、五、雜上中下、神祇、釋教に部立して凡て一千九百八十八首(八雲御抄計)を收めたり。阿佛尼の「夜の鶴」には「新古今は昔の歌のやさしき姿に立ちかへりて、折ちば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなんとする玉ざゝのあられなど申すべきを、あまりにたれ過ぐして、歌のあしさまになりぬべし」云々といひ、後普光園院の「近代風體」には「新古今ほど、おもしろき集はなし、初心の人にはわろし、心得たる人は此の集を見ん事如何であしかるべき」といひ、京慶卿口傳には「新古今より〳〵見るべし、されども新古今は至極無上にして、心も詞も閑けたるところなし、あまり事理つまりて廣からず」云々と評したり。また石原正明の「尾張の家づと」には此の集の歌は多く詩調を帶びて雄偉流暢豪壯新奇なるが如く批評せり。適評なるべし。當時の文學は一般に漢學佛教の影響を受けて散文にも漢文口調を帶びたる如く歌にも詩調を帶びたる事自然の勢、從て豪壯新奇の形を成せる事當然なり。

しんこきんわかしふせう
新古今和歌集抄　四巻　東　常縁

新古今和歌集中より抄出して評註を加へたるもの著者の奥書に「此抄書遂之說、謂先達之說、少々又加了簡、書混一册也」云々とあり。別名を「新古今新抄」とも「四卷抄」とも云へり。後陽成天皇の慶長二年丁酉(一五九七)細川幽齋の奥書を附す。出版の年月は詳ならず。

◎東常縁の傳は「古今集大傳授」の下にあり。

じんこくき
人國記　二巻

日本各國の風俗民情を主として記し、且山川植物を掲げ、土地肥瘠等を記し、且各國略圖を附す。上卷に山城より佐渡までを、下卷に丹波より對馬までを記す。往昔北條時賴が、諸國を微行し、有司の功罪民情の如何を視察して、書き留めたるものと言ひ傳ふ。但し同人の著ならざる事は先輩の定說なり。此の書内には、「六十六州人國記」また「日本各國風土圖說」とも記せり。元祿十三年庚辰(一七〇〇)平瓢與の序あり。

しんこくけつぎゐん
神國決疑編　三巻　龍野　熙近

神道の淵源を述べ、國體上の疑疑を辨明したるもの。古來の儒佛の諸書にも徵して其の元理同一なりと斷論せり。奥書に云「去寛文初年、既草此編、早爲同志寫將去、更今茂繁詳略而正之、識者辨之、嘗延寶癸丑(一六七三)仲春、日書于尚舍南軒」と。泊如運敞、英中玄賢等の序あり。

◎龍野熙近の傳は「古語拾遺抄」の下にあり。

しんこくこせんかふ
新刻古錢價附　一巻

古錢の價を附したるもの。寛政十一年己未(一七九九)出版せらる。

しんこくさんさくひやう
神國三德評　写一巻　龍野　熙近

書名の示せる如く我國の三德を評論したるもの。國起自仁智勇三德、神寶生自三器三德即三德、國寶器、弓矢正直之國器、以上の諸編よりなれり。元祿三年庚午(一六九〇)生白山人尚舍の南軒に書すといふ序文あり。

◎龍野熙近の傳は「古語拾遺抄」の下にあり。

しんこくしじべんろん
神國史辨論　一巻　僧　諦忍

我が邦神字の有無を論じたるもの、金龍敏雄「取いろは問辨」を作りて空華和尚の「いろは問辨」を破せるより、更に「摧破」を著して同書を評駁す。本書は其の二書を對照編輯したるものなり。安永八年己亥(一七七九)尾張八事山門人等和尚の序あり。

◎諦忍の傳は「大光普照集」の下にあり。

しんこくしじゃうろん
神國逐狂論　写七卷　小師　僧發

佛教に關する論說なり。和漢古今の事績神儒佛の治革等を比論して其の合理を說けるもの。國語編、金編漢文にて自問師答の問答體に記せり。今、天明八年戊申(一七八八)出版せらる。著者小師僧發は雲單に「神國要論」とも書せり。

しんこくしんさくひやう
神國新作評　写一卷　龍野　熙近

しんこくしんさんろく
神國讖記　写一卷　萬　達

しんこくしんせんかふ
新刻古錢價附　一卷

しんこくしんぢゐん
神國眞子訓　一卷

しんこくしんとうじくん
神國童子訓　一卷

しんこくしんぷ
神國神孚辨論　十卷　增穗　殘口

日本の神國なること人の神孫なることを說きて祭神上の御幣、御初穗、御神酒、氏神、生土神、産神、七福神の事等を略說せるなり。來强附會の俗說なし。

しんこくれい
神國令　写一卷　玉田　永敎

惟一神道の奥信すべきこと、儒佛二敎を排するの不可なることを論じたるもの。六百數十言あり。享和三年癸亥(一八〇三)の筆述なり。

◎玉田永敎は當時吉田殿神學敎諭方たり。本書の外「當家世系」一卷あり。

じんこじきうき
神護寺舊記　写一卷

弘法大師の舊蹟神護寺の定院四十五箇條その他元暦親筆天長等の舊記を掲げたり。「續群書類從」卷七百八十八、釋家部第七十三に收入せり。

しんこしきもく
新御式目　写一卷

弘安七年甲申(一二八四)より、建長七年乙卯(一二五五)に至る、寺社其の他の式目を擧說したるものなり。

しんこじだん
新古事談　十卷　增穗　殘口

鬼沙門を信じ不思行德事、好色男實時心後たる事、明宗おほてたる事、女山伏恥辱の事等以下凡て二十二項、實を插み童蒙の說にとて記したる一種の小說なり。元文二年丁巳(一七三七)孟春の出版にかゝる。

◎增穗殘口の傳は「神代小社探」の下にあり。

しんごしふいわかしふ　新後拾遺和歌集　二十巻
藤原　爲重

北朝後圓融院の綸命によりて撰集するところなり。春上下、夏、秋上下、冬、雜春、雜秋、賀旅、慕一、二、三、四、五、雜上下、釋教、神祇、慶賀等に部立して一千五百五十四首〔或は千五百四十八首〕を收めたり。永和元年乙卯〔一三七五〕命を奉じて此の撰に從ひしが、永德元年辛酉〔一三八一〕八月、爲遠死去したるより、同十一月更に爲重に命じて撰集せしめられ、同三年癸亥〔一三八三〕功を竣へて上進す。此の集北朝の撰として南朝の人のよみ歌は入らず。

◎藤原爲重は爲冬の子にして、後小松帝の時、進みて從二位中納言に至れり。夙に和歌を善くし、また書道に巧なりき。至德二年乙丑〔一三八五〕二月十五日、盜賊の爲めに殺さる、年五十二。

じんごじぶにんきやうしう　神護寺補任交衆　本書　一巻
本書は一名「神補次第」といふ。該題下に解題せり。

じんごじれいはうもくろく　神護寺靈寶目錄　本書　一巻
神護寺寶物の一切目錄なり。明治四年內務省の謄寫するところによる。

しんごせんわかしふ　新後撰和歌集　二十巻　藤原　爲世
後宇多院の院宣に依て撰集せられたる歌集なり。

しんごたいへいき　神皇正統記　本書　一巻
北畠親房の著す。上下二卷。後村上帝の興國元年〔一三四〇〕に著し、同四年〔一三四三〕に改訂したるものなり。神代より後村上帝に至るまでの皇統を述べ、南朝の正統なることを論じたるもの。

しんごちんわかしふ　新後撰和歌集　二十巻　藤原　爲世
後宇多院の院宣に依て撰集せられたる歌集なり。

しんごてんわかしふ　新後撰和歌集　二十巻　藤原　爲世
後宇多院の院宣に依て撰集せられたる歌集なり。

しんごどうわかしふ　新後撰和歌集　二十巻　藤原　爲世
後宇多院の院宣に依て撰集せられたる歌集なり。

しんごにふわかしふ　新後撰和歌集　二十巻　藤原　爲世
後宇多院の院宣に依て撰集せられたる歌集なり。

しんごねんぶつわかしふ　新後撰和歌集　二十巻　藤原　爲世
後宇多院の院宣に依て撰集せられたる歌集なり。

しんごのき　眞小的之記　本書　一巻
眞小的の事を略記せる數枚の寫本なり。「弓術祕傳書」の中に收む。

しんごめいだいわかしふ　新後明題和歌集　四巻　伯水堂梅風
編者未詳の「新明題和歌集」十卷の後集なり。一題毎に歌二首づつを掲げたり。作者は略「新明題和歌集」のと同じくして幾多の人を加へたり。

◎伯水堂梅風は江戸の歌人なり。梅月堂の門に入り修業し、遂に其の流を極む。著書は本書の外に「部類現葉集」あり

しんごんうまざうし　眞言薄草紙　本書　一巻　僧　賴瑜
眞言諸佛の功德を論記したるものにて卷頭に「弘長二年〔一二六二〕正月九日、醍醐寺報恩院〔三寶院通稱報恩院〕始傳授」と記せり。

◎賴瑜の傳記は「六合釋私記」の下にあり。

しんごんかいこしふ　眞言開庫集　二巻　僧　蓮體
眞言宗の教義を通俗平易に敍述したる假字文の書なり。一代藏經分五法藏事、眞言宗得名事、入眞言門以灌頂爲初門事、三種灌頂五種三摩耶事、眞言念誦規則事、自力他力辨、眞言法爲鎭護國家要法事等、凡て十七章あり。真享五年戊辰〔一六八八〕著者の序あり。明治十年丁丑〔一八七七〕新刊す。

しんごんけちみやくそうしよう　眞言血脈相承　本書　一巻
此の書は眞言宗の系譜にて、大日如來、金剛薩埵、龍猛菩薩等より出でて靜海、住助、守理等に至る百餘代の血脈系なり。「續群書類從」卷八百四十二、釋家部第百二十七に入れたり。

しんごんけちみやくそうし　眞言血脈抄　本書　十三巻
卷首に「本朝眞言傳法灌頂師資相承血脈」と題して、高祖弘法大師より、下、弘安、正應頃に至る眞言宗數百人の血脈系譜なり。

しんごんでん　眞言傳　七巻　僧　靜海
印度支那及び本朝に於ける眞言宗の僧傳なり。龍猛、龍智、金剛智、善無畏、不空、一行、惠果等を始めとして、寬信、覺鑁、慶圓、高辨、定範等に終る。其の間には龍求陀羅尼事、靜勝陀羅尼事、仁王經事、千手陀羅尼等の事緣をも記したり。正中二年乙丑〔一九八五〕六月の著。

◎靜海は眞言宗の僧。大舍人藤原俊業の子なり。醍醐慈尊院の聖濟僧正に就て、眞言密教の玄旨を究め、勅修寺慈尊院圓心院神護寺等に歷住せり。官僧正に進み、貞和元年乙酉〔一三四五〕同宗の長者となりたり。其の著す所本書の外に「類聚入祖傳」十卷、「儼證羅鈔」十九卷、「兩界記」四帖、「釋門三十六人歌仙」一卷等あり。其のよみ歌は「新千載集」に入れり。

しんごんふはふさんえうせう　眞言附法纂要抄　一巻　僧　成尊
眞言宗傳統天竺第一祖より五祖まで、大唐六祖七祖を經て、日本第八祖弘法大師に至る略傳なり。康平二十三年庚子〔一〇六〇〕十一月十一日の作なり。寬文六年丙寅〔一六六六〕版行す。

◎成尊は仁海法師の弟子にして、後三條帝の延久帝儲位に在るとき、每に成尊を以て法友とし、記するに遲祚を以てし給へりと。卽位の後厚く遇せらる。延久六年甲寅〔一〇七四〕正月七日寂す。世に小野僧都と號せり。

しんごんほんもしふ　眞言本母集　三十四巻　僧　賴寶
眞言宗の教義に關する漢文の雜錄。凡て一百餘箇條あり。每條問答體に記述したり。其の一端を擧ぐれば、卷一に眞俗二諦之外存中道別體歟事、自宗意五姓各別之義歟事、衆生祕密者內證祕奧義門歟事、他作自受義限神呪功力歟事。卷二に菩提心論意以日輪喩何法哉事、對治道有大乘歟事、兩部大經教主本地加持分別事等あり。

◎賴寶は眞言宗の學僧。東寺寶嚴院に住せり。この類寶と呆寶私鈔等の著者及び賢寶〔覺海鈔等の著者〕とに、共に眞言教相の博識を以て其の名を著せり。著書は本書の外に、「釋論鈔註」二十四卷、「祕藏記祕聞鈔」三卷、「懷大東記」、眞言名目、教眼鈔、悉曇綱要鈔、身心本元鈔、微細妄執義〔各一卷〕等あり。其の事績は詳しく傳へらず。

しんごんぼんもくろく　眞言本目錄　一巻
眞言宗の諸流の書目を記したるもの。

しんごんみやうもく　眞言名目　一巻　僧　賴寶
眞言宗の教義に關する、六大體大、四曼相大、三密用大、三種御身成佛、六無畏、五智、十住心、兩部大日、字相字義、顯密分別等の名目を摘擧略述したるものなり。

◎賴寶の傳は「眞言本母集」の下にあり。

しんごんれつそへうはくしふ　眞言烈祖表白集　本書　一巻
一行、惠果、弘法、實惠、眞雅、眞濟、眞然、眞紹、宗叡、源仁、益信、聖寶、觀賢、淳祐、元杲、仁海、成尊、範俊、嚴覺、增俊、顯嚴、親厳、以上の表白を集めたるもの。「續群書類從」卷二百〇一、傳部第十四に入れたり。

しんさいいせう　眞齋遺草　一巻　高野　進德
著者眞齋の遺草詩稿を集めたるもの。諸家の序跋ありて、明治十四年出版す。

じんさいかしふ　仁齋歌集　本書　一巻　伊藤　維楨
著者の詠歌百三十五首を輯めたるもの。元祿十六年癸未〔一七〇三〕の自跋、及び享保十七年壬子〔一七三二〕男長胤の跋あり。

◎伊藤維楨の傳は「論語古義」の下にあり。

じんさいにつき　仁齋日記　本書　一巻　伊藤　維楨

學術上の事を論じて古學の義を述べたり。卷末に、極論一篇、讀近思錄鈔を附錄とせり。

◎伊藤維楨の傳は「論語古義」の下にあり。

じんさいにつさう
仁齋日札 一卷　伊藤　維楨

漢文にて學業の要を述べたるもの。まゝ宗儒の事をも云へり。末に「極論」「讀近思錄鈔」を附錄とす。

◎伊藤維楨の傳は「論語古義」の下にあり。

しんさいやご
新齋夜語 五卷　梅廬館主人

見聞傳說により批評諷刺の物語を撰集したるもの。其の全目を擧ぐれば、北野の社僧昭君の詩を難ず、渡邊綱古今の射法を辨ず、小西氏の處女天逃の嫁となす。賀茂翁歎奇の正道を語る、岐阜に老尼出離の緣を明す、戶田茂睡つれ〳〵草を誹む、室の鼓女松風が任俠幸を迎ふ、嶽峨の隱士三光院殿を請る、鍛冶國助家業に託して士を諷す。以上九項より成れり。明和八年辛卯(一七七一)君山正盛の序あり。安永四年乙未(一七七五)出版す。

◎梅廬館主人のことは「續新齋夜語」の下にあり。

しんさうがくしふ
眞草下學集 二卷

東遊破衲の「下學集」の本文の右に各々草字及び和訓を附して、童蒙に便ぜしもの。寛文六年丙午(一六六六)刊行す。

しんさうしふご
心喪集語 二卷　安東　守約

明の朱舜水の語錄、筆語等を集錄したるもの。天和二年壬戌(一六八二)の自序あり。

◎安東守約の傳は「三忠傳」の下にあり。

しんさうにつやくけみやく
秦箏相承血脈 一卷

大唐海州水陽縣孫資(仁明天皇の承和十二年乙丑(一八四五)箏並に樂曲譜を持して本朝に薦擧す)より直に北逸左大臣源信に傳ほり、それより數十代を經て隆圓法師の子忍耀最大臣公顯の女從三位氏子等に至れり。「群書類從」卷三百四十九、管絃部第九に收めたり。

しんざうだいりおんづ
新造內裏御圖 一枚

光格天皇の寛政二年庚戌(一七九〇)十一月二十二日遷幸あそばされし、新造內裏紫宸殿南庭の平面全圖なり。

しんさくせいほん
新策正本 五卷

本邦制度の沿革、及び農政經濟の要を論述したるもの。略六、議八、論二十三、凡て、三十七編より成れり。新に一人創意私言の謂、策は書策、簡策の策にして、策略謀策の策に非ずと例言せり。『通議』二十八編は本書を刪定したるものなりといふ。本書は文化初年の作にて、夙に世に流布せられたる「新策」を、安政二年乙卯(一八五五)菊山曉の序を附して杉本貞健等校訂再刻したるなり。

◎賴遼の傳は「日本外史」の下にあり。

しんさつうわらい
新札往來 一卷

新年の書札機通を集めたるものなり。天文十五年丙午(一五四六)書寫の奧書あり。「續群書類從」卷三百六十三、消息部第五にあり。

しんざふだんしふ
新雜談集 一卷

俳諧に關する雜評なり。幾多俳人の句を擧げ來りて評論したるなり。

しんさるがくき
新猿樂記 一卷　藤原　明衡

京都に右衞門尉なるものあり。妻三人女十六人男八九人ありけるが、おの〳〵其の所長に異にして、その人々のうち官人武士僧侶醫者商人相撲などありて、その產業職分によりて、藝能器物容貌態度の異なる有樣を記したるものなり。寫本の奧書に「弘安九年(一二八六)正月下旬書寫之畢、求法沙門一阿」とあり。「群書類從」卷百三十六、文筆部第十五に收めたるものには、正應六年癸巳(一二九三)の奧書もあり。

◎藤原明衡は、博學の聞えあり、和歌を善くせり。後冷泉の朝に仕へて、式部少輔左衞門尉を經て大學頭右京大夫となり、文章博士を兼ね、康平中東宮學士となれり。著書は本書の外に「雲州往來」三卷「本朝文粹」十四卷「本朝秀句」五卷等あり。

しんさんをしやうざやうじやう
深山和尙行狀 一卷

太秦海生寺開山深山の行實記。「續群書類從」卷二百二十九、傳部第四十に入れたり。

しんさんか
深山家 一卷　榎本　其角

眞草二年乙丑(一七〇五)箱根に入浴し、江の島、鎌倉等を廻り歸りたる時の道の記なり。近年發行の俳諧文庫第四編「其角全集」にも收む。

◎榎本其角の傳は「荷兄弟」の下にあり。

しんさんぎよくわかしふるゐだい
新三玉和歌集類題 二卷

「鵜巢集」(「後水尾院御集」)「老懷集」(「中院通茂作」)、「桑葉集」(「烏丸光榮作」)、以上三集中の歌を撰抄して類題としたるもの。「新三玉和歌集類題」と稱するは、其の體「三玉和歌集類題」に倣ひ作れるを以てなり。

しんさんじふろくかせん
新三十六歌仙 一卷

三十六歌仙の歌、各十首つゝ凡て三百六十首を撰集す。後鳥羽院、土御門院、順德院、後嵯峨天皇、六條宮雅成親王、鎌倉宮宗尊親王、入道二品親王道助、式子內親王、後京極攝政良經、光明峯寺道家、西園寺公經、後久我通光、宮小路實氏、右大臣實朝、九條基家、衣笠家良、慈鎭和尙、前大僧正行意、堀川通具、藤原定家、入條院高倉、後成女、宮內卿、源壁門院少將、藤原爲家、參議雅經、正三位家隆、正三位知家、大藏卿有家、右大辨光俊、左京大夫信實、侍從隆祐、左近衞權少將具親、前中務卿宗尊親王、前左馬寺源家長、鴨長明、藤原秀能等なり。正元二年庚申(一二六〇)の序あり。

しんさんじふろくにんせんかせん
新三十六人撰歌仙 一卷

三十六歌人の歌、各三首づつ凡て百八首を撰集す。三十六人は、後鳥羽院、土御門院、順德院、式子內親王、後成女、前內大臣、仁和寺宮、前大納言忠良、九條前關白、土御門內大臣、後京極攝政、慈鎭、四圓寺入道、通具、後德大寺左大臣、藤原清輔、權大納言基家、宜秋門院、前中納言定家、從二位家隆、參議雅經、源具親、二條院讚岐、右衞門督爲家、藤原隆祐、大藏卿有家、後鳥羽院の宮內卿、藤原秀能、俊惠法師、慈圓法師、皇太宮大夫俊成、西行法師等なり。

しんさんてうじつろくさいえう
清三朝實錄採要 六卷　村山　緯

清太祖、太宗、世祖、三世間の事績を漢文にて敍述したるもの。永根錠と同編するところにして、寬政九年丁巳(一七九七)編者の凡例あり。文化四年丁卯(一八〇七)六卷八冊に發行す。永根錠は南部の人にして、元鼎と號す。

◎村山緯の傳記は「清鑑易知錄」の下にあり。

しんさんびやくゐん
新三百韻 一冊

俳句の集なり。元祿初年のものなり編者詳ならず。

しんじゐ
神字彙 一卷　岩崎　長世

日文を類出したるもの。凡例にいはく、こは我が師平田翁の著されたる神字日文傳によりて、其の神字もて物書かんとする時、頓に見出し易からしめんために、其の十三支の同じ字を、一部一部に寫し集めて、やがて斯く名けたるなり。其の遺文どもの出處をも、卷ゐ首に集め記して、合圖とす」云々とあり。大體を知るべし。

◎岩崎長世は平田篤胤翁の門人初松井直太郎と云ふ。本書の外に拜造化三神調其の他の著あり。兼て風雅を能くす。維新の後住吉少宮司贈國宮司となり大阪長堀に寂す。

しんしいつでんろく
晉子一傳錄 一卷　呎尺齋豐山

晉子複本其角の略傳逸話を集錄したるものなり。十餘の著書、幾百の俳句を抄出して評論敍述するところあり。編輯の年代詳ならず。

しんしうもんさんえう
眞宗遺文纂要 一卷　僧　先啓

眞宗の教義に關する法語和讚消息等、凡て第十三種を選輯したるもの。明和元年甲申(一七六四)十月に校刻せられたり。

◎先啓の傳は「淨土眞宗聖教目錄」の下に見るべし

しんしうへだがつせんき
信州上田合戰記 一卷

天正十三年乙酉(一五八五)德川家康の信州上田城主眞田安房守昌幸と合戰したる顚末を記したり。片假名文にて記せり。

しんしうえうぎつうらん
眞宗要義通覽　二卷　僧　慧琳
淨土眞宗の教義に就いて、總論、顯彰隱密より、信後造惡に至る十三題の大要を通論したる者。假字文なり。天明三年癸卯(一七八三)八月の自序あり。
◎慧琳は眞宗東本願寺派の僧。姓は今井、字は抱玉、鶴陵と號す。正德元年辛卯(一七一一)勢州阿波替四弘寺に生れ、香嚴院慧然の弟子となる。得度の初め慧空と稱し後慧琳と改む。二十九歲にして師に代りて講師の職を襲ひ、其の職に勤むること四十九年なりき。安永六年丁酉(一七七七)宗號の事に因り、本山の命を承けて江戸に出で、此の擧に執挙するこゝ凡そ七年、本書及び『御文記事珠』等は其の際の著撰なりといふ。寬永元年己酉(一八四九)五月寂す、年七十五。

しんしうをがたをかむらじやうのづ
信州小縣岡村城圖　寫一舖
信濃小縣郡なる岡城の結構要害等を略圖したるものなり。

しんしうがくだうげんりうりやくふ
眞宗學統源流略譜　一卷　僧　超然
眞宗本願寺派に於ける學者の師資系統を繫纙圖示したるもの。嘉永五年壬子(一八五二)五月撰者の凡例五則あり。明治二十五年に至り、前田慧雲、目野仁愛二氏の校訂修補を經て、新に活刷に附せられたり。

◎超然の傳は『山居餘課』の下に在り。

しんしうかなしやうげう
眞宗假名聖教　十二卷
本書の收錄する所、全く『眞宗法要』に同じ。たゞ纂排の順序を變更したるのみ。蓋し本願寺派に於てする所を以て、東本願寺派本山にて『眞宗法要』を編輯したる後、本書を改編重刻したるものなりと云ふ。時は文化八年辛未(一八一一)の事なり。

しんしうかなしやうげうくわんてんろく
眞宗假名聖教關典錄　十三卷　僧　琢成
「眞宗假名聖教」中の引文及び事實の出據故實等を考證註解し、『眞宗法要典據』を補修したるもの。自序に「引文事實の本據を求索する多く岐路に迷ふ。爰に『稽古』『典據』の二部ありと雖も、部帙の次第今と同じからず。その闕略するもの亦甚多し」云云。是れ本書の編著ありし所以なり。天保三年壬辰(一八四二)を成稿す。活字版にて發行せり。
◎琢成は越後の人。眞宗東本願寺派の僧にして宇を義霖といへり。著書は本書の外に『眞宗假名聖教御引文』三卷、及び『明識目錄捷覽』一卷等あり。

しんしうかなしやうげうくわんもん
眞宗假名聖教御引文　三卷　僧　琢成
「眞宗假名聖教」中に他の諸經論釋より引用したる文句を拔出して、其の本據を指示したるものなり。天保十五年(弘化元年)甲辰(一八四四)の著に係る。

◎琢成の傳は『眞宗假名聖教關典錄』の下に見よ。

しんしうかはなかじまりやういうべん
信州川中島雨雄辨　寫一卷　岡　禎淑
上杉謙信、武田信玄、兩將の川中島に於ける合戰優劣を評論したるもの。諸家の戰を參照して更に自家の見を加へ、最も詳密に論斷す。假名文にて記せり。寬曆七年丁丑(一八二一七)の漢文自序あり。

しんしうきえん
神州奇苑　寫八十冊　風航　了吟
日本全國の名所舊蹟並の他の雜事を記述せり。國分けにして五畿內山城國より始れり。最初なる日次の四五を擧ぐれば、稻荷山獨鈷水、白狐石、御香宮乳母水、那須與市墓、伏見故城關燈籠等每國數百項あり。

しんしうきそさんぎやうるんらんしやう
信州木曾山義仲院濫觴　寫一卷
信州筑摩郡松本城の東なる義仲院長稱寺の古緣起にて、同時草創以來の略歷を記し、諸堂舍を圖せり。本書は同院住僧の作なるべけれど、氏名と年代とを記さず。

しんしうきそさんのづ
信州木曾山圖　寫一舖
東駒嶽を限り、西飛驒國を限り、南恵那嶽を限り、北大白川を限り、其の中の驛名、村名、山川、道路等を圖せり。

しんしうくへうき
眞宗九表記　六卷　僧　羊步
聖德太子、眞宗七高僧等の事績を始め、眞宗の教義儀式などの事を記したる雜錄なり。俗談傳說等も相交りて精確なる說のみにはあらず。寬政元年己酉(一七八九)刊行す。著者羊步は眞宗の僧なれども今詳傳を得ず。別著には『正信偈科鈔』三卷あり。

しんしうくわこせう
眞宗懷古鈔　三卷　僧　慧忍
眞宗本願寺蓮如上人が、越前吉崎、河內出口、和泉堺、山城山科、及び攝津大阪の五坊舍を創建したる來歷を記したるもの。明和四年丁[亥](一七六七)上梓す、著者慧忍は河內の僧なり。

しんしうくわこてふ
眞宗過去帖　一帖　僧　寶雲
眞宗門の過去帳なり。格上に一月三十日を分題して高祖親鸞上人、及び一宗五流、世々法主遷化の日を表記し、各日に餘白を存して、自家祖先の法諡を掲ぐべきやう作り、裏面に萬年曆を刻して其の歷年を計るに便したり。嘉永元年戊申(一八五〇)八夢庵居士の序あり。
◎寶雲の傳は『因明正理門論新疏』の下にあり。

しんしうけうぎかうえう
眞宗教義綱要　一卷　僧　致遠
其の名の如く、眞宗教義の大要を記したるもの。寬延四年辛未(一七五一)正月の著なり。
◎致遠は近江國大橋慶宗寺の住僧にして、本願寺派に屬す。『漢法宗門人なり。

しんしうこじつせう
眞宗故實鈔　寫四卷　僧　淨惠
此書は一名『眞宗故實傳來鈔』

しんしうこじつでんらいせう
眞宗故實傳來鈔　寫四卷　僧　淨惠
淨土眞宗の佛像祖影並嚴法衣行事讀經等の故實由來等を記し、且眞宗各派の沿革を略記したるもの。今其の目の一端を擧ぐれば、本佛釋像安置の事、尊像御依用の事、祖師聖人御木像の事、聖如上人御住職の事、覺如上人御木像影刻の事、東本願寺御木像之事、御繪傳の事、名號左右掛樣の事、御影堂左右間上來の事、佛前莊嚴の具の事、法衣の事、袈裟の事、本寺の有來りし行事相止事、雜樂間答その他等なり。本書は『眞宗故實傳來鈔』とも云ふ。上卷は明和二年乙酉(一七六五)、下卷は文化十二年乙亥(一八一五)依田七右衛門といふもの、轉寫したる所なり。
◎淨嘉は臨有軒と號す。眞宗東派の僧にして本書は七十三歲の時の作なり。著書は『新法曆書』の下にあり。

しんしうこせいはふ
新修五星法　寫十卷　澁川　景佑
星學の書にして、卷の一、二、三に五星圖說。卷の四、五、六に五星步法。卷の七、八に五星考。卷の九、十に五星算例を收む。文政五年壬午(一八二二)著者の附言あり。
◎澁川景佑のことは『新法曆書』の下にあり。

しんしうごようちうけんもんにおよびさふらうおもむきかきつけ
信州御用中及見聞候趣書付　寫一卷
代官、支配所、陣屋、里程、古事、土產、風俗、其の他の雜事を記せり。年代と作者とを著さゞれど、當時公用を以て滯在したりしもの、書留なる事は書名によりて知るべし。

しんしうさぐごほりむらむらかいはつひやくしやうおぼえ
信州佐久郡村々開發百姓覺　寫一卷
本書は信濃國佐久郡七十六箇村、村々開發の年代姓名等を記し、「安永四年未(一七七五)正月草稿改」として百八十箇村の名石高を記し、合計高九萬二千六十五石四斗九升八合と記せり。これは照永年中改めたる帳面の寫にして、南相木村倉島清七といふもの所持したるを、文化十二年乙亥(一八一五)依田七右衛門といふもの、轉寫したる所なり。

しんしうるせいはふ
新修彗星法　寫十三卷　澁川　景佑
彗星法を論辨したるものなり。上編六卷、下編七卷、凡て十三卷十三冊あり。內閣文庫に特別書として所藏す。
◎澁川景佑のことは『新法曆書』の下にあり。

しんしうすはしやうぐうさいれいたいがい
信州諏訪上宮祭禮大概 一巻

信濃國なる同社の神事祭禮の大概を記述したるものなり。

しんしうぜんじぎやうじやう
心宗禪師行狀 一巻

心宗禪師の傳記なり。同禪師は諱を宗鎭といひ、字を悟猶といふ。尾張丹波郡山名村の人にして美濃國破草金寶山瑞龍寺に住せり。明照九年庚申(一二六〇)に寂す。「續群書類從」巻二百四十二、傳部第五十四に收められる。

しんしうぜんじごろく
心宗禪師語錄 二巻 僧 心宗

著者の語錄にして、最初に序、繪詞、敕書を掲げ、巻上に龍寶山大德寺語、再住龍寶山大德寺語、正法山妙心寺語、雪龍山瑞泉寺語、再住雪龍山瑞泉寺語、示衆、法語、偈頌、道號、像贊、自贊、銘。巻下に佛事、行狀、葛刊行狀、葛刊跋語。附錄に雜著等の目あり。内題には「大興心宗禪寺庵穴錄」と記せり。享保六年辛丑(一三八一)遠孫妙心寺現住如幻の序あり。寛延二年己巳(一四〇九)の末記もあり。

しんしうそせつ
愼終疏節 二巻 中村 欽

儒學の精神に基きて、喪禮の事を記したるものなり。元祿三年庚午(一三五〇)の作にかゝる。

◎中村欽の傳は「講學筆記」の下にあり。

しんしうちひさがだごほりしもがうしやきしよもん
信州小縣郡下鄕社起證文 一巻

信濃國諏訪明神社に所藏せる古文書を輯錄したるもの。武田信玄が上杉謙信調伏の起證文以下敬通及び文を略して只名宛華押のみを記したるもの數百種を掲げたり。

しんしうつうき
信州通記 一巻

信濃國の地誌にして、先づ郡別にし、各郡間の里數、領地、代官、寺社、村名、堤塘、橋坂、山林、川沼、石木等を略記せり。

しんしうでんとうろく
眞宗傳燈錄 三巻 僧 知空

聖德太子、眞宗七高僧、及び親鸞聖人の傳記。兼ては眞宗の宗義法式等にも論及せり。安永五年丙申(一七七六)正月、江州原林の校刻に係る。

◎知空は眞宗本願寺派の僧。第二の龍化たり。字は性照、臥雲閣と號す。十七歳にして西吟の弟子となり、都講に擢んでらる。萬治三年龍谷の佛堂を修營し、寛文元年宗主號を賜うて大可と云ふ。少時も講演著述を廢することなく、本書の外に「往生論註翼解」九巻、「安樂集鎭開」七巻、「和讃愚鶩記」十三巻、「三帖和讃首書」三巻、「正信偈要解首書」四巻、「御傳照蒙記」九巻、「選擇集鎭」二巻、「淨土問辨」一巻、其他十數部の著あり。正德四年甲午(一七一四)八月、享年八十五にて寂す。謚して演慈院と號す。

しんしうはふえう
眞宗法要 三十一冊 僧 法如

淨土眞宗宗祖以後の和文の典籍を編纂したるもの。即ち三經往生文類、尊號眞像銘文、一念多念證文、唯信鈔文意、末燈鈔、御消息集、口傳鈔、執持鈔、願々鈔、最要鈔、本願鈔、敎行信證大意、出世元意、改邪鈔、歎異鈔、安心決定鈔、持名鈔、女人往生聞書、淨土眞要鈔、諸神本懷集、破邪顯正鈔、決智鈔、歩船鈔、報恩記、法華問答、顯名鈔、存覺法語、淨土見聞集、正信偈大意、蓮如上人御一代聞書、蓮如上人遺德記、實悟記、反敬覆書、拾遺古德傳繪詞、墓錄繪詞、最須敬重繪、唯信鈔、後世物語聞書、一念多念分別事を收め、凡て三十九部六十七巻あり。本書は寶曆十年庚辰(一七六〇)十月、宗主法如、榮厳僧模道粹の三僧に命じて校正編纂せしめしに、三人相尋いで死せしかば、更に桂巖海輪の二人に命じて業を繼がしめ、明和二年乙酉(一七六五)七月編纂の功を竣へ、翌年夏に刊行せられたり。

◎法如は眞宗本願寺第八世の宗主。名は光圓、字に子武、號は蓮堂、又は乾享齋と云ふ。法如は其の法名なり。寶永四年丁亥(一七〇七)十月に生れ、享保五年庚子九月得度して河内國顯證寺を繼ぎ、寛保三年癸亥本願寺に入りて其の法統を繼ぐ。同年八月大僧都に、延享元年僧正に任じ、同四年四月大僧正に轉ず。寛政元年己酉(一七八九)十月、八十三歳にて入寂し、信慧院と謚す。

しんしうはふえうてんきよ
眞宗法要典據 六巻 僧 仰誓

「眞宗法要」中の文句及び事實の出據故實意義等を考證註解したるもの。自序に「初學或はその引證の原據、事緣の故實、もしくは語辭の意義にくらきものあれば、これを考へて報謝の幾に擬し奉らばやとおもひて、その一二を錄しける」云々とあり。天明四年甲辰(一七八四)正月に成る。

◎仰誓は眞宗本願寺派の僧。字は欽順、含明閣と號せり。嚴華院僧機曉年の弟子にして、悪雲僧錄等と共に内典を研修し、强記を以て知らる。後、石州に趣きて弘敎に務め、遂に同國市木淨泉寺の住持となる。天性篤實にして其の學また綿密なり。殊に行狀譜嚴にて眞宗律の名に愧たり。德化園里に浴れく今猶美風の遺れるありと云ふ。木書の外に「三帖和讃略解」六巻、「正信偈要觀錄」四巻、「十二禮弊蓋錄」一巻、「略書歎慶錄」四巻、「妙好人傳」三巻等を著せり。未だ歿年を詳にせず。

しんしうはふえうてんきよ
眞宗法要典據 三十一巻

校補 僧 超然

仰誓の「眞宗法要典據」を校訂增補したるもの。初め文化八年辛未(一八〇七)仰誓の法嗣履善、父の志を襲ぎて備後の大慶と共に「眞宗法要典據」を拾遺增補して、十巻と成しけるを、超然更に宗主の命によりて香弟慈空と力を協せ校補大成したるもの。即ち本書なり。安政二年乙卯(一八五五)十二月に成る。創成より大成に至る殆んど七十餘年を經、考引證の書内外和漢に涉りて一千餘部に至れり。

◎超然の傳は「山居餘錄」の下に出づ。

しんしうまつしよよびやくくうもく
眞宗末疏書籍標目 一巻

淨土眞宗殊に本願寺派の僧侶の著書目錄。往々眞宗に關係せる淨土宗等の書目をも掲げたり。採錄疎略にして「淨土眞宗教典誌」などの精詳なるには若かざるなり。

しんしうようきやう
新修應經 三巻

應敎寶の書なり。形相以下凡ての體用倘法等を圖說す。弘仁九年戊戌(一四七八)五月二十二日編輯するところにして、今見るところは文化九年壬申(一四七二)の寫本なり。三巻一册に寫す。

しんしうりうきもんだふ
眞宗流義問答 七巻 僧 九々

他の淨土宗各派よりの批難に對して、淨土眞宗の辯護し、また眞宗の敎義、宗祖の事績等を記したるもの。其の記すところ淺略にして讀むべき價値を有せず。正德六年丙申(一三七六)の著なり。

しんしうるじやうへん
眞宗流情編 一巻

眞宗本願寺八世蓮如上人と其の弟子金森道西との、眞宗敎義に關する問答十餘條を輯錄したるもの。寶曆十一年辛巳(一七六一)二月、粟津義圭校刻。

しんしうわうじやうでん
新修往生傳 一巻 藤原 宗友

沙門戒深以下入道學生親通に至る四十餘名の往生傳なり。漢文にて記す。仁平元年辛未(一一五一)の自序あり。「續群書類從」巻百九十九、傳部第十一にあり。

しんしきもく
新式目 一巻

弘安七年甲申(一二八四)五月二十日新式目三十八箇條を掲示す。寺社領知當被沙汰付專神事佛事被止新造寺社可被加古寺社修理事より、念佛は遁世の凡下鎌倉中騎馬可被止事に終れり。「續群書類從」巻六百五十六、武家部第二に收めたり。

じんじげん
人事原 二巻 服部 宣

五行說に據りて人事の根本を論じ、天人の關係を講ぜるもの。末に天神始末統圖圖、及び全天大要圖、並に火水殘說を載せ、更に別記及び色味說を附したり。漢文にて記し、且割註を入れたり。自序中に「予本愚劣疎拙、自幼好讀書、無所得、一旦發明于天人之實、固以自慰、歷二十餘年、稿凡八改、頭腦欲涸、心腸稍悶、人亦可以察之」とあり。文政九年丙戌(一八二六)の作。翌年刊刻す。

◎服部宣は信濃の人。二本松藩に仕ふ。著書は本書の外に學疑一巻、天人雜記一巻、人事原外編二巻、

詞源音局一巻等あり。

しんじこじき

神字古事紀　三巻　吉川　政興

古事記の全文を、神代文字といへるものにて寫し出でたるものなり。字傍に片假子にて其の讀みかたを示したり。明治四年辛未(一八七一)刊刻す。著者吉川政興は藤原氏なり、世襲稻荷の祠官にて土御門家の觸頭たり。

じんじさうかん

尋字早鑑　一巻

宮商角徵羽の五音によりて捜索すべき漢字書なり。倒漢字を網羅して五音の下に類聚したるなり。宇訓字義等を知るべき字書にはあらず、一名を「五音圖」とさへいへり。寛永五年戊辰(一六二八)十月の自序凡例等あれど著者の名を記さず。

しんししんけんぎちう

信使進見儀註　二巻　新井　君美

正德元年辛卯(一七一一)韓使來朝の時の儀式を記したるもの。末に「朝鮮國使之來聘也、國初以來及度々、此儀可謂國家一盛事、況文廟之朝盡美盡善哉、亦盡善哉、於此集可觀其威儀、故謄寫亭禮之始終、以示爲家珍、正德五乙未年陽月日」とあり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

しんじせうかう

神字小考　一巻　大國　隆正

平田篤胤の說により、神代文字の事を考へ、海外諸國の文字も、大かた太卜(ふとまに)の兆より出でたりと論じたるものなり。書名も篤胤の「日文傳」を大考とし、其れに對して小考と名けたる由なり。天保十一年庚子(一八四〇)八月の自序あり。

◎大國隆正の傳は「學運論」の下にあり。

しんじせん

神字箋　一帖　大國　隆正

平田篤胤の「神字日文傳」に基き、尚、種々比較參考して、其の正體と思へるを撰び、五十音に分ちて寫し出でたるものなり。なほ委しき考は神字原二巻に記し置きたりといへり。明治六年乙未(一八七五)再版せり。

◎大國隆正の傳は「學運論」の下にあり。

しんしぜんじぎやうじつ

神子禪師行實　一巻

肥前國水上山興聖寺開山神子禪師の傳なり。漢文にて記す。神子は榮尊と諱しり。延久六年乙卯(一〇七五)に生れ、夙く佛門に入りて遂に名僧となる。文永九年壬申(一二七二)に寂す。「續群書類從」巻二百二十六、傳部第三十七に入れたり。

しんしぜんじねんぷ

神子禪師年譜　一巻　僧　宗元

肥前國水上山興聖寺禪寺開山敕特賜神子禪師の年譜なり。編者享庵宗元は前住萬壽禪寺とあり。「續群書類從」巻二百二十六、傳部第三十七にあり。著者宗元は享庵と號す。

しんしせんしようろく

深志先蹤錄　一巻

德川家康及其の先祖後裔が、淨土宗を尊信したる事績を列記したるものなり。

しんじだいふどうううたあはせ

新時代不同歌合　二巻

前に「時代不同歌合」あるより新といへり。「萬葉集」より「金葉集」に至る間の作者を左とし、「詞花集」より「續古今集」に至る作者を右として、左右各三首宛九十番あり。「群書類從」巻二百十五、和歌部第七十に收めたり。

しんしつしゆかん

新室手簡　三巻　新井　君美

享保年中に新井白石が、室鳩巢に贈りたる手簡を集錄したるものなり。故に新室の字を冠したり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

しんしていのわきまへ

臣子弟のわきまへ　一巻　谷　垣守

標題の如く臣子弟たるもの、辨へ守るべき道を、解し易きように諭したる敎業の文なり。元文三年戊午(一七三八)七月三日の記。

◎谷垣守は土州の人。泰山の長子にして幼名を荒藏といひ、後丹四郎と改む。寶曆二年壬申(一七五二)三月三十日、年五十五にて歿せり。高知城北秦泉寺に葬る。

しんしてうきりやく

清四朝紀略　十三巻　村井　量谷

清の世祖順治元年より高宗の乾隆六十年に至る歷史なり。天保十一年庚子(一八四〇)の自序を附す。

◎村井量谷の傳は「切支丹御退治記」の下にあり。

しんじひふみでん

神字日文傳　三巻　平田　篤胤

我國の上古に文字ありしことを論述したるものなり。十三條の神字ありて、一條毎に論證し、遂に朝鮮の諺文は我が神字の傳はりたるものなりと論斷せり。日文主張者には有力なる參考たり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

しんしふいわかしふ

新拾遺和歌集　二十巻　藤原　爲明

北朝後光嚴院の綸旨によりて撰集せるところ。歌數凡て二千七百五十八首あり。貞治三年甲辰(一三六四)四月二十日四季六巻を奏覽す。爲明中途にして歿し、頓阿其の跡を繼ぎて成就せりといひ傳ふ。

◎藤原爲明の傳は「遊庭祕抄」の下にあり。

しんじふにぐわつわうらい

新十二月往來　一巻　藤原　良經

「十二月往來」に倣ひて、正月三日、二月八日、三月三日、四月一日、五月四日、六月七日、七月三日、八月十日、九月八日、十月十七日、十一月十六日、十二月五日、同二十六日、以上往來消息凡て二十四通を集む。「群書類從」巻百四十、消息部第三に收めたり

◎藤原良經の傳は「殿記」の下にあり。

じんじぶるゐせう

神事部類抄　十冊　壺井　松翁

諸書の雜抄にて、神事、佛事附會、法律格制、職官、人事法制、姓氏、位階官職、雜事等を輯錄す。

しんじべん

神璽辨　一巻

神璽は勾玉の事にあらずして、天子印章の稱なる事及び異邦神璽の事を論じ、其の圖をも載せたり。享保十六年辛亥(一七三一)四月、藤原朝臣重度の序あり。

◎多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

しんしみづ

新清水　一册　望月　千春

佛語の集なり。編輯の年代は詳ならず。著者望月千春のことは「かり菴筆」の下にあり。

しんじやう

新莊記　二巻

天正年中豐臣秀吉の臣と爲つて立身出世せる新莊直賴其子直忠、三男直澄等の事績を記したるものなり。今尚務省の寫本による。

しんじやうさいしんせんさうのこと

新嘗祭神饌等之事　一巻

新嘗祭の神饌制法次第等を記したるもの略圖をも添へたり。

しんじやかうしやうせつ

神社考詳節　二巻　林　道春

天正年中豐臣秀吉の臣と爲つて立身出世せる新莊直賴其子直忠、三男直澄等の事績を記したるものなり。今尚務省の寫本による。

しんじやうさいしんせんさうのこと

新嘗祭神饌等之事　一巻

新嘗祭の神饌制法次第等を記したるもの略圖をも添へたり。

じんじやかうしやうせつ

神社考詳節　二巻　林　道春

天正年中豐臣秀吉の臣と爲つて立身出世せる新莊直賴其子直忠、三男直澄等の事績を記したるものなり。今尚務省の寫本による。

しんじやかうしやうろん

神社考志詳論　三巻　僧　澄圓

林羅山の「神社考」を詳駁したるもの。同書の佛者を排斥したる條の原文を擧げ、諸書に徵して反駁し佛者に關する記事を擁護したるものなり。漢文にて記せり。延寶五年丁巳(一六七七)の自序あり。同七年出版す。

◎澄圓の傳は「松風論」の下に出づ。

式内、式外及び近世鎭座の緒神を列舉して各位置祭神緣起等を記す。自序「本朝神祉考」の要を抄說したるなり。其の自序中に「余齋て此の書を抄錄して洛の名山に藏むる雖も、然れども愚に隨ひ、筆に隨てこれが詳節をなす。頗る次序ならず」云々とあり。尾州藩敬公（徳川義直）の爲めに作れりといふ。

◎林道春の傳は「羅山文集」の下にあり。

じんじやかうしやうせつしかう

神祉考詳節私考 𣰰一卷

林　道春

著者の先著「神祉考」を抄說したる「神祉考詳節」に、更に私考を附して「神祉考詳節私考」を成したるなり。

◎林道春は「羅山文集」の下に傳せり。

じんしやき

人車記 𣰰二十五卷 ※寫

平　信範

久安五年己巳（一一八〇九）より、嘉應元年己丑（一一八二九）に至る記錄。其の中卷一は久安五年の十月十一月、卷二は仁平二年壬申（一一五二）の十一月十二月、卷三に同三年正月より六月まで、卷四に同年八月より十二月まで、卷五に久壽三年（保元元年）丙子（一一五六）正月より三月まで、卷六に保元二年四月より七月まで、卷七に同三年正月より三月まで、卷八九十に仁安元年丙戌（一一六六）九月より十二月まで、卷十一に同二年四月より六月まで、卷十三に同三年正月、卷十四に同年七月、卷十五より卷二十一までに同年九月より十二月に至る、卷二十二に嘉應元年二月、卷二十三、四、五に同年六月より十月までの事を記せり。卷末に治承四年庚子（一一八四〇）二月、新帝の事を記したる「治承記」を附す。題號の「人車」は名「信範」の勞寃を省きて名けたるもの、一名を「兵範記」といふは、官と名とを一字づつ取りたるなり。

◎平信範は兵部大輔知信の次子なり。官に仕へ、中宮權少進、檢非違使、藏人少納言、刑部大輔、左京大夫太宰大貳、右中辨、藏人頭等の諸官を歷て、正三位兵部卿に至れり。治承元年丁酉（一一七七）年六十にて出家す。其の家を四洞院と稱せり。

じんじやきうぶん

神祉舊文 𣰰一卷

諸神祉の古文書を集録したるもの、三輪、日吉、大原野、四宮、梓槻大祉、長門一宮二宮、左女牛八幡、上州貫前等の分、末に足利學校の五經本條目を附す。寛文十年庚戌佚山散人今齋の跋を附し、同年刊行す。多田義俊は其の「わなは草子」に、本書の價値を詳して、林道春の「本朝神祉考」に勝りて可なる由を記せり。

◎白井宗因は浪華の人。一齋流の儒士にして白雲散人と號し、國學を研究せり。著書は本書の外に、神代卷私說、中臣祓、白雲抄、職原句解等あり。

じんじやしかう

神祉私考 𣰰一卷

神名、天神地祇慮變、社前、大社、小社、新年、月次、相嘗、新嘗、名神、鎭祭、神位神戶、國內神名帳、一宮、其の他等につきて考明したるものなり。「延喜式」なる神明帳の首の標目どもにつきて不明なるものを考究したりといふ。按ずるに伴信友の「神祉私考」の首卷なるべし。

じんじやぶるゐ

神祉部類 𣰰一卷

名祉の部類記なり。諸記錄に徵して案文も附したり。伊勢、八幡、賀茂、松尾、平野稻荷、春日、大原野、大神、廣瀨龍田、住吉、日吉、吉田、祇園、北野、丹生、貴布禰等に部立せり。

じんじやべんらん

神祉便覽 一卷　白井　宗因

神祉に關する略說なり。林道春の「神祉考」を節略したるもの〻如し。寛文四年甲辰（一六六四）自跋、及び秦公建の序あり。

◎白井宗因の傳は「神祉啓蒙」の下にあり。

じんじやうえき

壬戌手役志 𣰰四卷 ※寫

增島　固

享和二年壬戌（一八〇二）隨筆大久保近藤に從ひて二條城番となる。四月江戸を發して二條に入るまでの紀行にて、山川、地理、風俗、人情までを記せり。文化元年甲子（一八〇四）成島司直の序、及び古賀穀の序、杉岡道啓の跋等あり。

◎增島固の傳記は「讀易小言」の下にあり。

じんじゆつずゐひつ

壬戌隨筆 一卷　石原　正明

著者の假名隨筆。享和二年壬戌（一八〇二）の作なるより、此の名を附す。

◎石原正明は尾張の人。通左衞門と稱し、蓬堂と號す。橘保己一の門に入りて有職また和歌を學べり。著書は本書の前後に、辛酉隨筆、癸亥隨筆及び蓬堂集等あり。其の詠み歌は一萬首に及べりといふ。文政四年辛巳（一八二一）正月七日歿す、年六十二。

じんじゆつうきうはいてうき

壬戌琉球拜朝記 𣰰一卷

人見　節

天和二年壬戌（一六八二）四月十一日薩摩中將光久、琉球中山王をして、將軍家代替の式を賀せしむ、中山王の使者名護皇子部屬百餘を率ひて來朝し、江戸幕府に出でて賀儀をなしたる時の詳細記なり。

◎人見節の傳記は「韓使手口錄」の下にあり。

しんじゆのふね

眞珠之船 三卷　入江　昌喜

歌學に關する隨筆にして、歌學上の要事、雜語、俗語俚諺等をも擧げて、其の出據徵據をも示したり。

◎入江昌喜の傳記は「異名分類抄」の下にあり。

しんじゆもんだふ

神儒問答 𣰰一卷

室鳩巢等を遊佐好生に贈りて、神道の事を論議せしが、好生これを評破したるを、合せて本書一卷となしたるもの。是れ實に元祿十年丁丑（一七〇七）の事なり。

しんしよえふめいしよわかしふ

新松葉名所和歌集 二卷

尾崎　雅嘉

從來諸種の名所歌集に遺漏したるもの、及び近代諸家の新作に係る名所の歌等をも拾集したり。悉く引用の出所を明記せり。

◎尾崎雅嘉の傳は「群書一覽」の下にあり。

しんしよくせんぎんわかしふるゐだい

新續撰吟和歌集類題 𣰰二卷

尾崎　雅嘉

續撰吟和歌集類題の後に作れるより此の名あり。文明、永正、大永比の諸家の打聞歌集等より撰出して類題したり。會席に携帶して證歌の便に供ふるため、歌數を多く收めたりといふ。

◎尾崎雅嘉の傳は「群書一覽」の下にあり。

しんしよげんざんでふ

眞書嚴山帖 一折　賴　襄

楷書法帖なり。天保二年辛卯（一八三一）七月十九日に愛したる巍巖嚴山の碑文（山陽作並書）を習字法帖として刻成したるものなり。

◎賴襄の傳記は「日本外史」の下にあり。

しんしよせんじもん

眞書千字文 四折　卷　大任

木版摺習字文なり。四册續きに、千字文全編を楷書す。明治九年の出版なり。

◎卷大任の傳記は「十憾源流」の下にあり。

しんしよもんだふさつき

神書問答雜誌 一卷

神書の事に關して多門正芝の問に、公遠卿及び出雲寺信直の答へたるを筆記したるもの。延寶年間に成りたりと云ふ。

しんじりやくしき

神事略式 一卷

名の如く仕神儀式の略式を示せるもの。凡例には諸家の相傳申より、古式にも多く差違せじと思はるゝものを取捨折衷して作れる略式なる由を云へり。明治元年戊申（一八六八）の刊本に係る。

しんしろく

愼思錄 六卷　貝原　篤信

道學に對する見識を述べたるもの。思慮の塾間に關する功夫なるを以て、之に關せる條件を列舉し、店主の事を引證して論說す。漢文にて記せり。「自娛集」と合せて、著者の道學說にて名高きものなり。正德四年甲午（一七一四）の自序を附す。

◎貝原篤信の傳は「自娛集」の下にあり。

しんじんろんくわんばくき　深心院關白記　本一卷　近衛　基平

建長八年丙辰〔一九一六〕と、文永二年乙丑〔一九二五〕との日記なり。息元服、皇子降誕、臨幸、佛事法會その他等の事を記せり。

◎近衛基平は岡屋關白兼經の長子なり。母は前關白太政大臣道家の女なり。文永四年丁卯〔一九二七〕十二月、關白となり、左大臣たり。翌年十一月十九日、年二十三にて薨す。法謚を深心院と號す。

しんじんあいぶつしせう　清人詠物詩鈔　一卷　菊池　桐孫

清人詠物の詩を輯む。嘉永三年庚戌〔一八五〇〕男蘆の序あり。同五年上木す。

◎菊池桐孫の傳は「五山堂詩話」の下にあり。

じんしんにふみんき　壬申入明記　本一卷

後柏原天皇の永正九年壬申〔一五一二〕東福寺住職桂悟といふもの、將軍足利義稙の命を受けて、明國に使したることを記したるものにて、往復書類に係るものを編集すること多し。

しんじんめいやたうろん　信心銘夜塘水　三卷　僧　畫龍

支那禪宗の三祖僧璨の「信心銘」を詳解したるもの。天明元年辛丑〔一七八一〕の自序あり。近刊「寶註信心銘夜塘水」二冊あり。本書研修の資に供すべし。

◎畫龍は美濃の人、天桂禪師の法孫。本書著作の當時は攝津國川邊郡槻並村廣福寺に在りきといふ。

しんじんもんだふおほえがき　清人問答覺書　本一卷

清國の制度風俗交通等に關する答問書なり。思感任免殖産興業の事を述ず。天保弘化〔一八四四―五〇〕の間に作りたるものなるべし。

◎藤森大雅の傳は「如不及齋文鈔」の下にあり。

しんせいいじ　神聖遺事　本十五卷

德川家康の一生事歷を記したるもの。「東照宮御實紀」「本落穗集」として行はるゝものと大同小異なり。

しんせいいしひつ　新正試筆　一卷

享保八年癸卯〔一七二三〕元旦の詩を編集したるもの。自序を載せたり。

◎篠崎維章の傳は「壬寅元旦詩集」の下にあり。

しんせいいじやうぢよだいすうへう　新製乘除對數表　一卷　惠川　景之

除乘對數の新製算表にして、八算見一相場割を始め、開平開立方に至るまで、皆加減法を以て算し得るの妙法捷徑なり。安政三年丙辰〔一八五六〕刊復の序、同、山中信古の序等あり。

◎惠川景之の傳記は「孤角小成」の下にあり。

しんせいいだん　新政談　本一卷　藤森　大雅

施政治民の要を論述したるもの。思感任免殖産興業の事を述ず。天保弘化〔一八四四―四八〕の間に作りたるものなるべし。

◎藤森大雅の傳は「如不及齋文鈔」の下にあり。

しんせいいだん　新政談　本五卷

德川幕府時代に於て經濟執政上の意見を述べたるもの。第一卷を愚存大意とし。第二卷に御經濟御取締大意より、天下の財源を開き融通を便する事に至る九項。第三卷に綮修を正し風俗を正す簡條より、寺院御取扱の事に至る七項。第四卷に人才取立並に撰方簡條より、衰狄御取扱の事に至る十二項。第五卷に邊地開方簡條大意より、常平倉の事に至る八項。凡て三十七項を收む。

しんせいちきうばんこくづせつ　新製地球萬國圖說　本一卷　桂川　甫周

和蘭陀國版行の「萬國輿地全圖」を譯したるもの。原圖の寘目により、地名、譯文は主として明人の「坤輿圖說」により、漢譯なきものは假字を以て示す。其の體概して新井白石の「采覽異言」に倣ふ。里程は本邦制度三十六町を以て一里とし、天球諸曜の高下、日月交食等の事は地理に關せざればとて之れを省けり。而して卷頭「輿地總敍」には各國の氣候、山川、草木、畜獸、人民、都城、宮室、風俗、屬

國、島嶼等を擧げ、卷尾には各國の物産、合品三十餘種を圖したり。天明六年丙午〔一七八六〕仲春の譯。大槻茂質の校正したるものなり。

◎桂川甫周の傳記は「蝦夷地初發記」の下にあり。

しんせいひろく　禎製秘錄　本二卷　田村　玄臺

前卷は諸書に散見せる人參製法を集錄し、後卷には製造に關する圖畫を插入して頗る詳悉なり。或に「參製秘錄」ともいへり。

◎田村玄臺は姓坂上、字は元雄、號を藍水といふ。江戸の人にして世々醫を業とせり。幼より本草學を研究し、寶曆中擧げて、幕府の醫官となる。殊に人參の播種製法に從事す。人參甘藷、白河附子、白牛酪、芒硝及火浣布、綿羊等に於て最も發明する所多しといふ。著書は本書の外に人參耕作記、人參譜、竹譜、甘藷製造傳、琉球產物誌、木綿搖養傳、藥肆人參類集、醴泉祥瑞說、日本諸州藥譜等あり。安永五年丙申〔一七七六〕三月二十三日沒せり、享年五十九。淺草北寺町眞龍寺に葬る。

じんせつもんだふ　仁說問答　一卷　山崎　嘉

漢土諸家の仁說を集錄したるもの。卽ち朱文公の仁說並に圖、張南軒、呂東萊等の仁論等より成る。寬文八年戊申〔一六六八〕の自序を附す。

◎山崎嘉の傳は「垂加文集」の下にあり。

じんせつもんだふかうぎ　仁說問答講義　一卷　石川　默齋

山崎闇齋の「仁說問答」を講解したるもの。卽ち仁の說に關し、古來の數說を考究して詳に解釋說明したるものなり。假名書にて記す。享保十五年庚戌〔一七三〇〕同十六年辛亥の作。三宅尚齋、各編に批評す。

しんせろん　信施論　一卷

信徒祠施の輕んず可からざること、及び戒法誡行の嚴守すべきことを述べて、僧侶殊に禪門の徒を警戒したるもの。漢文にて九百有餘言あり。明和六年己丑〔一七六九〕の撰述なり。

◎瑞方の傳は「正法眼藏涕典錄」の下にあり。

しんせんねこだいぜん　新撰圍棋大全　二卷　秋山　正廣

圍碁の打方順序等を圖示して初心の者の案内に供したるもの。著者秋山正廣は仙朴と號せり。

しんせんくわいせきしつぽくしゆこうちやう　新撰會席しつぽく趣向帳　一卷　禿　蒂子

會席料理の器具、獻立等を記載す。しつぽくは卓袱の唐音なり。祖父幽閑齋が年ころ書き集めける獻立數千紙ありける中より今の世に應じ用ふるを撰べる由を述記せり。明和八年辛卯〔一七四一〕東都の書肆中椹堂主人醉智端書を附し卽行す。

◎禿蒂子のことは「八千代草」の下にあり。

しんせんさいわかしふ　新千載和歌集　二十卷　藤原　爲定

北朝後光嚴院の綸旨によりて撰集したるもの。卷上下、夏、秋上下、冬、離別、羇旅、釋敎、慶賀、戀一、二、三、四、五、雜上中下、哀傷、神祇等にて歌數二千三百五十八首あり。延文四年己亥〔一三五九〕奏進す。三光院は「新千載集は歌よりも詞おもしろし、集を見るごと其の集による詞歌の心の善惡を見知るべし、肝要なり」と評せり。南朝君臣の歌を入れざりしこと古人の見識狹窄なるところならむか。

◎藤原爲定は權中納言爲世の孫なり。和歌を以て身重せらる。嘗て後醍醐帝の敕を奉じて「續後拾遺和歌集」を撰定し、また後光嚴の敕を受けて此の「新千載和歌集」を撰す。實に斯道の譽なり。

しんせんさとぶふどき　新撰佐渡風土記　本一卷

一國の沿革故事より、各所、寺觀、其の他地誌的事項凡て四十五條を雜誌したるもの。「佐渡風土記」と稱して八卷に作り行はるゝものあり。全く本書と同一なり。只字數行數疎大にして卷數を倍したるの差あるのみ。然れども此の書も亦完本にあらず。完本は上中下の三卷ありて、此の書ほかの八卷本と共にその上卷のみあり。中下以下は世に廣く傳はらず。

しんせんさんごくうんすうふがふづ　新撰三國連數符合圖　本一卷　吉田　兼倶

印度支那日本三國の年代記なり。其の凡例に曰く「天竺は釋迦降誕以前の年數未だ詳ならず。震旦は周以來祖天竺の曆年に合す。日本は神武天皇以前

神代の年紀古今未だ勘定するものなし。因て神代書籍を以て阿含經佛祖通載並に支那帝王編年等に據り、三國の遞數を合し以て之を記す。人王以後は唯和漢即位の年を以て上下に列ぬ、其中間に佛滅以來の年數を書す」云々。

◎吉田兼倶の傳は「神祇道服忌令」の下にあり。

しんせんしかん
新撰紙鑑　一卷　木村　青竹

我が邦製紙の濫觴より、諸國に産出する紙の種類を集解し、每種その性質の精粗、色の黑白、寸法の長短等を記したるもの。享保十三年戊申(一三八八)の頃の作を、五十餘年後、安永六年丁酉(一四三七)に書肆の增訂出版したるものなり。

◎木村青竹の傳は「紙譜」の下にあり。

しんせんじきやう
新撰字鏡　十二卷　僧　昌住

漢字の訓義を示したる字書なり。天部、日部、月部、肉部、雨部、風部、火部、辵火部、人部等より、卜部、髟部等まで、偏冠によつて字を類聚し、其の外に品字様、二合字重點字等あり。自序に據るに、寛平四年壬子(一五五二)初稿既に成りしも、拾集殫むことなく、昌泰年中玉篇及び切韻を得て增補し、更に小學編の字及び本草の文等をも撰集して、片數一百六十、文數二萬四百八十餘字を收載したるなりと云ふ。桂川中良の「桂林漫錄」に曰く「新撰字鏡「古書目錄」に字鏡と記せるものこれならんか。日本にて字書といふものは、此書と「和名抄」とのみなるべし。摘取魚彦は此書はいにしへの字鏡に次て作りしゆゑに、新撰とは題せしならんといへど、昌住が自序にその事を記さず。按ずるにいにしへより曾てなきところの新書なるによりて、かくは題せしならん。目錄には新撰の字を省きしにてもあるべし」云々とあり。

しんせんじきやうしせつせう
新撰字鏡飾說抄　一卷　藤井五十足

僧昌住の「新撰字鏡」の誤れるを正し、漏れたるを補へるにて、其の師伊藤多羅の說によりて、文化二年乙丑(一四六五)著したるもの。同四年刊行す。

しんせんしやうしろく
新撰姓氏錄　三十卷　萬多親王

神別皇別諸蕃等を分ちて、日本の姓氏を詳記したるもの。神武天皇より起りて弘仁の頃に至る、一千一百八十二氏あり。本書の序文に依るに、寶字末年從五位上三原弟平、參議從三位藤原諸嗣、正五位下阿部眞勝等の名をもて「新撰姓氏錄」三十卷となし、勅して三部となせるなりと云ふ。弘仁六年乙未(一四七五)七月二十日の上表ありて、中務卿萬多親王、右大臣從二位藤原園人、參議從三位藤原諸嗣、正五位下阿部眞勝等の名をれたり。刊本には寛文八年戊申(一三二八)四月、「氏族志抄」を攝はしめられしも、時雖ありて完稿せず。よりて今齋記の煩雜を裁り新系の塗說を除きて「新撰姓氏錄」三十卷となし、勅して三部となせるなりと云ふ。弘仁六年乙未(一四七五)七月二十日の上表ありて、中務卿萬多親王、右大臣從二位藤原園人、參議從三位藤原諸嗣、正五位下阿部眞勝等の名を列れたり。刊本には寛文八年戊申(一三二八)四月、「氏族志抄」と合刻したるもの。同四年刊行す。

しんせんしやうしろく
新撰姓氏錄　三十卷　萬多親王

我が邦製紙の濫觴より、諸國に産出する紙の種類を集解し、每種その性質の精粗、色の黑白、寸法の長短等を記したるもの。享保十三年戊申(一三八八)の頃の作を、五十餘年後、安永六年丁酉(一四三七)に書肆の增訂出版したるものなり。

◎木村青竹の傳は「紙譜」の下にあり。

しんせんじきやう
新撰字鏡　十二卷　僧　昌住

漢字の訓義を示したる字書なり。天部、日部、月部、肉部、雨部、風部、火部、辵火部、人部等より、卜部、髟部等まで、偏冠によつて字を類聚し、其の外に品字様、二合字重點字等あり。自序に據るに、寛平四年壬子(一五五二)初稿既に成りしも、拾集殫むことなく、昌泰年中玉篇及び切韻を得て增補し、更に小學編の字及び本草の文等をも撰集して、片數一百六十、文數二萬四百八十餘字を收載したるなりと云ふ。桂川中良の「桂林漫錄」に曰く「新撰字鏡「古書目錄」に字鏡と記せるものこれならんか。日本にて字書といふものは、此書と「和名抄」とのみなるべし。摘取魚彦は此書はいにしへの字鏡

所の錢圖を集め、類を列れ部を分ち諸家の說と愚考とを圖下に錄して考證に備ふる由を記せり。翌天明二年北村繼元の序を附して出版す。

◎朽木龍橋は丹波福智山の城主なり。龍橋堂は其の號また彩雲堂とも號せり。著書は多く好事の餘に成りて何れも名字を著はさず。本書の外に「泰西輿地圖說」あり。世に行はる。

しんせんそうしやでんき
新撰總社傳記　卷一卷　猿渡　盛章

武州多摩郡國府の總社六所宮の傳なり。景行天皇以來天明二年壬寅(一四四二)比までの緣起を記し、更に附錄ありて幣殿、拜殿その他の事を記せり。

◎猿渡盛章は武藏國府中大國魂神社の祠官なり。小山田與清の門に入りて國學に通ぜり。門中の十哲と稱せらる。著書は本書の外に、新撰總社傳記考證、神代俚諺等あり。嗄年詳ならず。其の子寄盛孫容愛家學を繼承す。

しんせんそうしやでんきかうしよう
新撰總社傳記考證　卷四卷　猿渡　盛章

先著「新撰總社傳記」を考證したるものなり。本文の外に考文を別項す。

◎猿渡盛章の傳は「新撰總社傳記」の下にあり。

しんせんだいくひながた
新撰大工雛形　五卷　木葦　甚七

本書は單に「新撰雛形」とも題す。解題は同名の下に於てせり。

しんせんどよみじつろく
新撰豐臣實錄　卷三十四卷　大原　武清

秀吉の系生、履歷年譜を始めとして薨去に至る、一生の事績、雜件百二十條を記し、其の他三國地圖、三將軍(信長秀吉家康)系譜行狀、諸家系譜略等を附載したり。拙劣なる漢文にて物せらる。太田牛一の「天正記」「小瀨甫庵の「太閤記」に誤脫多きにより、此の書を著したるなりと云ふ。寛文五年乙巳(一六五五)長男武業の序あり。著者大原武清は越前福井の人なり。本書の外に「四書引據略圖解」の著あり。

しんせんねんぢうぎやうじ
新撰年中行事　卷一卷　藤原　行成

禁中に於ける年中行事、卽ち正月元日の節會より、十二月追儺の式までを略記す。

◎藤原行成の傳は「島羽玉簾妙集」の下にあり。

しんせんねんぺう
新撰年表　一卷　清宮　秀堅

上古より、此の書を著すまでの歷代の興廢を編年體にて記したるもの。卷一より卷四までは神代より人王第百代後小松天皇の明德三年壬申(一三九二)南北朝合一の事を記し、卷五は人王第百一代稱光天皇より第百十七代後陽成天皇の文祿四年乙未(一五九五)豐臣秀吉薨去の事を記す。

しんせんはうちやうてい
新撰庖丁梯　一卷　杉野　駁華

鯉田右府の事績を評敍したるもの。信長尼張岩倉城を攻めし事より、近江淺井長政、越前朝倉義景と合戰の顚末、後信長岐阜に歸城したることまでを記せり。

しんせんのぶながき
新撰信長記　卷十三卷

織田右府の事績を詳記したるもの。信長尼張岩倉城を攻めし事より、近江淺井長政、越前朝倉義景と合戰の顚末、後信長岐阜に歸城したることまでを記せり。

しんせんはうちやうてい
新撰庖丁梯　一卷　杉野　駁華

諸食品の料理鹽梅法等を詳記したるもの。先づ鰹節、干瓢、椎茸、昆布等の煮汁法より、味噌、醬油の醸造及び同鑑別法を說き、菜菌魚鳥の獻立調味法を記し、なほ器皿の圖までを揭げたり。就中食品原料は皆いろは順に列擧し、具原氏の「大和本草」香月氏の「卷懷食鏡」松岡氏の「食療正要」等によりて各和漢名及び性質能毒等を記したる庖厨の好案內書なり。享和二年壬戌(一八〇二)著作す。

しんせんひながた
新撰雛形　五卷　木葦　甚七

建築構營の圖式を記したるもの。宮形、門形、塔形、給櫃の五部に分ち、各細目數箇條を載せたり。寶曆八年戊寅(一七五八)六月の凡例、同年鹽谷世弘の跋、安政二年乙卯(一八五五)藤田彪の序あり。本書を增補したるものに「增補新撰雛形」「安藤一郎增訂あり。明治二十五年壬辰(一八九二)までを取れり。又「掌中新撰雛形」と稱し、本書を抄略して袖珍に作れるもあり。

◎清宮秀堅の傳は「雲龕略傳」の下にあり。

せり。一名「新撰大工雛形」とも云へり。著者本葬甚七は定賢と字せり。

しんせんひやくにんいつしゅ　新撰百人一首　一巻　網野　延平

藤原定家の小倉百首に擬して撰びたる歌集なり。後醍醐天皇の「身にかへて思ふとだにも知らせばや、民のこゝろのなさけなさを」より、光格天皇の「我すめば雲にとなれる山までも、冬さびすして独つとふなり」に至る。嘉永五年壬子（一八五二）の自序あり。巻末に作者目録を附して、位階略傳等を示せり。泰書大本に版せり。

◎網野延平は「新内裏御障子色紙和歌」の下に傳す

しんせんぶきめいかん　新撰武器銘鑑　一巻　矢澤　幸朗

本書は一名「本朝武器銘鑑」の下に解題せり。

しんせんほつしんでん　新撰發心傳　二巻　僧　性均

種々の境遇及び動機よりして、佛法修行の道心を起したる人の因縁事績を記し、且つ佛徒の心得を述べて痛切に誡励したるもの。幽靈辨及び病癒稱名辨等を附記せり。讀み易き通俗文なり。元文二年丁巳（一七三九）の著。

◎性均は眞宗本願寺派、江戸築地安養寺の住僧なり。字は唯阿、白蓮室と號す。知空の門人となり、内外の學に通じ、尤も増上寺學徒のために重んぜらる。此の書す所本書の外に「大經欣厭鈔」四巻「蓮門詮要編」二巻、「眞宗勧誡集」二巻、「追遐要訣」、「台浄念佛復宗訣」、「雷斧辨訛」、「佛難驗非」、「遺身往生傳」一紙あり。晩年宗乘に異義を主張して、宗徒の擯斥する所となる。寶暦七年丁丑（一七五七）八月、七十九歳にて逝けり。

しんせんまくら　神前的　一枚

弓馬故實の書にて、神前的三十四條に説明す。「弓馬雜集」第六にあり。

しんせんまんえふしふ　新撰萬葉集　二巻　菅原　道眞

寛平年間の后宮の歌合のなどを眞字にて書き、左傍に七言絶句を添へたるもの。一名を「菅家萬葉集」と云ふ。上巻に四季戀の歌百十九首、下巻に雜及び女郎花の歌百三十五首を收めたり。寛平五年癸丑（一八九三）作者未詳の漢文の序を載す。著者に就て「扶桑略記」には「宇多院寛平四年九月廿五日、菅原道眞公撰：新撰萬葉集上下二巻」といへり。本居宣長の「玉勝間」に云く「今は姑く前説に從ふ。本居宣長の「玉勝間」に云く「菅家萬葉集上下二巻ありと見るに上の巻はいふべきことをもなきを、下の巻は歌は眞字のさま上の巻とかはれることなければ、同じく菅公の大臣のものしたまへるならんを、詩のさまなん上の巻とはこまやかにおとりの御しわざとは見えず。むげにつたなくしてたゞ七言四句にとゝのへたるのみこそあれ。心もつゞかず、れごとなどのやうにて、何事ともわきまへがたく、いといを聞くやうにて、何事ともわきまへがたく、いといとみだりがはしく、韻字といふものをだにとゝのへず。さらに詩といふべきものにもあらず。されば下の巻ばかの大臣は歌のみをものしたまひて、詩をばそへたまはざりけんな、後の世の人上の巻にならひて、みだりにおきなひたるなるべし。さるはむげにもの〳〵しもしらぬをこのもの〳〵しわざとこそ見えたれ。序も下の巻のは詩と同じ人のかけりと見えたれいとなきなし」云々。寛文七年丁未（一六六七）の刊本あり。

◎菅原道眞の傳は「菅家文草」の下にあり。

しんせんめいかぜつく　新撰名家絶句　二巻　石川　山本　可　諧嶂

諸詩家の五七絶句を撰集したるもの。文久二年壬戌（一八六二）桑原恍の序を附し、元治元年甲子（一八六四）出版す。編者兩人の傳は未だ詳ならず。

しんせんやうさんひしよ　新撰養蠶秘書　一巻　塚田與右衞門

養蠶の順序を圖解し、其の經驗法十九件を説示せり。圖は一色信榮の筆に成れり。著者塚田與右衞門は信州小縣郡上鹽尻村の人なり。

しんせんやまとことば　新撰大和詞　二巻　各務（カガミ）支考

てにをはと、漢語の助辭とを併せ論じたるもの。漢文體の文中に、てにをは、若しくは俗語等を漢字に寫し交へたる一種の俳文やうのものを書く爲にしたるものなるべし。渡邊荘の序、寶永八年辛卯（一七一一）西華坊の序、享保五年庚子（一七二〇）の跋、同十四

年同人の序等あり。

◎各務支考の傳は「笈日記」の下にあり。

しんせんらうえいしふ　新撰朗詠集　二巻　藤原　基俊

大納言公任の撰集せる「和漢朗詠集」に倣ひて、編輯したるものなり。同書と同題にて詩歌並に文章を撰べり。

◎藤原基俊の傳は「悦目抄」の下にあり。

しんせんるゐじゆわらい　新撰類聚往來　三巻　僧　丹峯

童蒙作文の助けにとて、四季十二月往來の書簡文を輯め、其の間には日常通用の文字をも類聚したるものなり。慶安元年戊子（一六四八）上梓す。

しんせんれいしやうしゆんじうしやにちせうぎ　神仙靈章春秋社日醮儀　一巻　大江　匡弼

本朝漢土農業の始り、並に保食神の來由、五穀御祖神、土御祖神、假生大明神の由來、その他等の日につき、神祇の祭禮に功あることを説述したるもの。天明元年辛丑（一七八一）の序あり、寛政元年己酉（一七八九）の再版にかゝる。本書は單に「春秋社日醮儀」と命題せるもあり。

◎大江匡弼の傳は「神儀修事秘要」の下にあり。

しんせんろくぢょう　新撰六帖　五巻

六帖の假名題にてよめる歌集なり。作者は寂眞、爲家、知家、信實、光俊の五人にて、評點も相互に加へたるなり。

しんせんわかしふ　新撰和歌集　四巻　紀　貫之

古今和歌集の中の秀逸を抄出し併せて弘仁より延長に至る作家のなを集めたり。「古今和歌集」撰集の後、更に同歌集中より秀逸のもの拔抽すべき旨醍醐帝の敕ありしに依りて延長八年庚寅（九三〇）九月、帝崩じ給ひて奏覽を經る能はざりしとなり。編者の漢文序中に「爰以準縄配軟編、以互仁敵歌、雜歌之流、又對偶總三百六十首、分爲四軸」云々とあり。

◎紀貫之の傳は「紀貫之集」の下にあり。

しんぞういめつくはしふ　新增大筑波集　一冊　松永　貞德

此書は一名「淀河」といふ。該題下に解題せり。

しんぞうかなづかひ　新增假名遣　本二巻　荒木田　盛徵（モリアキ）

「類字假名遣」の原本にて、本文は該書と同じ。彼れは七巻の刊本、此れは二巻の寫本。共に林鵞峯の跋あり。

◎荒木田盛徵の傳は「類字假名遣」の下にあり。

しんぞうじりんぎよくへん　新增字林玉編　一巻　鎌田　禎

本書は一名「玉編補遺」といふ。該題下に解題せり。

しんそうひせう　深窓祕抄　本一巻

裝束に關する數十目を記述せり。應仁二年戊子（一四六八）八月前參議藤原顯言の奥書あり。元和二年丙辰（一六一六）藤原某の奥書に、「此の深窓抄は高倉家の書なり。永相卿の作なり。別に考あるなり」云々とあり。天明元年辛丑（一七八一）大塚嘉樹も奥書せり。また「群書類從」第百十九、裝束部第八にも收めたり。同書末には「右深窓祕抄行世既久、然其中往々有可疑者、且顯言卿寛正三年以權中納言薨而書應仁二年前參議、甚無謂、蓋他人借名以所作也、讀者可辨」とあり。

しんぞうほいほうしんぱう　新增補遺棒心方　本十二巻　僧　潤市

醫方書「棒心方」（中川子の作）を增補したるもの。漢土の諸書に比較して處方の異同增減を記

し、且數百方を補足せりといふ。天文比の作なり。永祿七年甲子(一五六四)延仁親叟泉秀の跋あり。其の中に「古今歷代の名醫に選ぶまでの群書の萃を拔集めて大成して十有二卷とし、新增補遺神心方と號す。醵餘の奇蹟とするもの、實に絕世の珍寶なり」云々とあり。著者淵雷は京都南禪寺の住職たりき。

しんぞうやうこつはう　新增應鬧方　㊟三卷　林　良意

此の書は本名「應鬧方和字鈔」の下に解題したり。

しんぞくいゐつくば　新續犬筑波　十册　北村　季吟

俳諧の集なり。寛治三年庚子(一三二〇)正月の編述にかゝる。某の「新犬筑波集」に續ける意にて名けたるか。

◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下にあり。

しんぞくかうだんき　眞俗交談記　一卷

僧正覺成、前權僧正宇遍、仁性律師、覺祕律師、澄覺阿闍梨、心覺阿闍梨、權中納言親經、參議資實、從三位爲長、大藏卿有家等、稱號、叔實、著作、宗教等の上につきて問答したる二十箇條を編輯したるもの「群書類從」卷四百九十、雜部第四十五にあり。

しんぞくきもん　清俗紀聞　十三卷　中川　忠英

本書「名清朝紀聞」の下に解題せり。

しんぞくこきんわかしふ　新續古今和歌集　廿卷　飛鳥井雅世

後花園院の敕により撰集したるもの。眞字、假名、二體の序あり。共に一條兼良の作なり。春上下、夏、秋上下、冬、賀、釋敎、離別、羇旅、戀一、二、三、四、五、哀傷、雜上中下、神祇等にて二千一百四十四首あり。永享十年戊午(一四三八)八月二十三日四季の部を奏覽に入れたるなりと。此集また北朝の撰とて南朝のは御製の外は入れず、但降服者のは數首入れたり。

◎飛鳥井雅世は參議藤原雅經の後にして、世々和歌を以て知らる。敕を奉じて本書「新續古今集」を撰す左兵衛少將從二位に任叙せられ、後權中納言正三位に進む。嘉吉二年壬戌(一四四二)剃髮して祐雅と稱せり。

しんぞくこじだん　新續古事談　五卷

源頼光弟賴信をなだむる事より、最上義光馬汰の事に至る數十條、見聞の奇談を集めたり。著者年代共に詳ならず。

しんぞくざつき　眞俗雜記　㊟二卷

作文作詩の事、佛法院本願上人鉢並の他の眞俗雜事を記す。

しんぞくせいめい　親族正名　一卷　太宰　純

親族九屬の關係區別を詳叙し、其の名を正したるもの。專ら「爾雅」により、旁ら他書に徵して說明す。享保十年乙巳(一三八五)の自序中に、「蓋聖人之道、謂之名敎、爾雅其名家之祖興、記曰名者人治之大者也。可無愼乎。孔子曰、名不正則言不順、言不順則事不成、事不成則禮樂不興、禮樂不興則刑罰不中、刑罰不中則民無所措手足。名之所係、其大矣乎。我東方之俗、苟言之習、丸名不正、遂者愛之、姻親親者、入道之本也、斯名不正、則視骨肉猶路人也。豈不痛哉。純也無似、亦嘗有意於斯者也、是書幸行、而蒙士或有興焉、倘亦爲名敎之一助矣」とあり。同年山縣孝弼の序もあり。

◎太宰純の傳は「經濟錄」の下にあり。

しんぞくだいへいねんぺう　新續泰平年表　㊟三卷

安政二年乙卯(一八五五)より、同四年に至る武家の年表なり。

しんぞくだいりんわかしふ　新續題林和歌集　十六卷

新題林和歌集に據りて成れるもの。享保千首、寛延

千首等の歌も抄用類題せるなり。作者は、靈元院、堯恭親王、職仁親王、實陰、爲村、宗家、光榮、光綱、爲久、公福、公野、通夏、重季、宣條、光胤その他等なり。明和元年甲申(一七六四)版行せらる。

しんぞくはんかんぶ　新續落葉翰譜　㊟三册

堀田、永井、岡部、丹波、谷、大久保、鳥居、石川、小笠原、北條、井上、四尾、板倉、稻葉の系譜略傳なり。落葉翰譜、落葉譜續編等に續げる意にて「新續落葉翰譜」とは稱したるなり。

しんぞくふ　親族譜　㊟一卷　岡本　保孝

和漢の古書に徵して、親族の譜を考證したるもの。宗族、姻戚、女種、婚姻、妻妾に至るまで詳しく譜圖說明せり。末に杉原心齋の說も加へたり。

◎岡本保孝の傳は「韻鏡攷」の下にあり。

しんぞくぶつじへん　眞俗佛事編　六卷　僧　子登

和漢の眞俗の佛事に關するものを輯錄す。卷一に新禱部四十一條。卷二に供養部二十二條、嚴具部八條、音樂部十五條。卷三に營繕部二十一條、苦行部十二條。卷四に造經部二十七條。卷五に雜記部二十四條。卷六に雜記部之餘三十七條を掲ぐ。享保十三年戊申(一七二八)九月出版す。著者子登は浪華生玉の人なり。

しんそこせんざのき　神祖御遷座之記　㊟一卷

しんそく

しんぞく

しんぞくこきんわかしふ　新續古今和歌集　廿卷　飛鳥井雅世

後花園院の敕により撰集したるもの。眞字、假名、二體の序あり。共に一條兼良の作なり。春上下、夏、秋上下、冬、賀、釋敎、離別、羇旅、戀一、二、三、四、五、哀傷、雜上中下、神祇等にて二千一百四十四首あり。永享十年戊午(一四三八)八月二十三日四季の部を奏覽に入れたるなりと。此集また北朝の撰とて南朝のは御製の外は入れず、但降服者のは數首入れたり。

◎飛鳥井雅世は參議藤原雅經の後にして、世々和歌を以て知らる。敕を奉じて本書「新續古今集」を撰す左兵衛少將從二位に任叙せられ、後權中納言正三位に進む。嘉吉二年壬戌(一四四二)剃髮して祐雅と稱せり。

しんぞくこじだん　新續古事談　五卷

源頼光弟賴信をなだむる事より、最上義光馬汰の事に至る數十條、見聞の奇談を集めたり。著者年代共に詳ならず。

しんぞくざつき　眞俗雜記　㊟二卷

作文作詩の事、佛法院本願上人鉢並の他の眞俗雜事を記す。

しんぞくせいめい　親族正名　一卷　太宰　純

親族九屬の關係區別を詳叙し、其の名を正したるもの。專ら「爾雅」により、旁ら他書に徵して說明す。享保十年乙巳(一三八五)の自序中に、「蓋聖人之道、謂之名敎、爾雅其名家之祖興、記曰名者人治之大者也。可無愼乎。孔子曰、名不正則言不順、言不順則事不成、事不成則禮樂不興、禮樂不興則刑罰不中、刑罰不中則民無所措手足。名之所係、其大矣乎。我東方之俗、苟言之習、丸名不正、遂者愛之、姻親親者、入道之本也、斯名不正、則視骨肉猶路人也。豈不痛哉。純也無似、亦嘗有意於斯者也、是書幸行、而蒙士或有興焉、倘亦爲名敎之一助矣」とあり。同年山縣孝弼の序もあり。

◎太宰純の傳は「經濟錄」の下にあり。

しんぞくだいへいねんぺう　新續泰平年表　㊟三卷

安政二年乙卯(一八五五)より、同四年に至る武家の年表なり。

しんぞくだいりんわかしふ　新續題林和歌集　十六卷

新題林和歌集に據りて成れるもの。享保千首、寛延

寛永十三年乙亥(一六二九)日光山東照宮の遷營竣功して、四月十日遷宮の儀式ありし次第を詳記し、四月十九日御經供養を行ひし事に終れり。

しんそせんかいきじ　神祖泉堺記事　㊟一卷　拍崎　永以

天正十年壬午(一五八二)德川家康が、泉州堺を巡覽したる時の日記なり。

◎柏崎永以の傳は「參考落穗集」の下にあり。

しんだいかうじゆつせう　神代講述抄　五卷　出口　延佳

神代卷の講說を山本廣足の筆記したるもの。寛文十二年壬子(一六七二)延佳五十八歲の時の事なり。

◎出口延佳の傳は「伊勢太神宮神異記」の下にあり

しんだいかうだんしよ　神代講談書　㊟十卷

日本紀の神代卷を、一節毎に片假名文にて講釋したるものなり。十册に寫本す。

しんたいき　進退記　㊟五卷　伊勢　貞丈

武家其の他の禮式を八門五十餘條に記したるもの。卷末に記して、「銅を以て鏡とせずんば何を以てか飛鳥を正さん。古を以て鑑とせずんば何を以てか今の世の事をなさんや。憲記の中より品々の事くさをつみ出し、かいあつめて鑑古抄と名付るなん。平貞丈」といへり。然れば本書のまたの名は「鑑古抄」ともいふならんか。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

しんだいきあしかび　神代紀葦牙　三卷　栗田　土滿

日本書紀の中神代卷を註釋したるもの。賀茂眞淵の說、本居宣長の「古事記傳」の說を用ふること多し。本居大平の評註もあり。書名は大平の題するところにて、本書の始めに天地の中に一つの物なれり、狀、葦牙の如しとあるによれり。文化七年庚午(一八一〇)の自序、同八年本居大平の序を附して出版す。同十四年青柳種信の序、同十年石川依平の跋、文政二年己卯(一八一九)大江眞船の跋等ありこれらは再版三版の時も掲げたるものなるべし。

◎栗田土滿は藤原姓、號を圓通舍といふ。遠州平尾村八幡の宮司にして、從五位下に叙し、壹岐守に任ぜらる。寛政眞淵の門人となりて國典に通ぜり。文化八年辛未(一八一一)七月八日、七十五にて歿す。

じんだいきうぢのやまかげ　神代紀髻華山陰　一卷　本居　宣長

神代紀を讀むもの、心得にとて「日本書紀」は多く漢文なるが故に「古事記」の如く古傳のまゝならざることを辨じたるなり。寛政十二年庚申(一八〇〇)刊行す。

◎本居宣長の傳記は「古事記傳」の下にあり、

じんだいきかうき　神代紀講義　五卷　清原　宣賢

日本書紀の神代卷を講釋したるもの。寛文四年甲辰(一六六四)に開版せられたる「日本書紀合解」

〔神代口訣、神代紀講義、神代紀鈔の三書を合刻したるもの〕の中にも收めらる。

◎清原宣賢は「古今和歌集傳授切紙」の下に傳す。

じんだいきせう

神代紀鈔 三卷 卜部 兼良

日本書紀の神代卷を註釋したるもの。寛文四年甲辰(一六三四)出版したる『日本書紀合解』(神代口訣、神代紀講義、神代紀鈔の三書を合刻したるもの)の中にも收めたり。

じんだいきでん

神代紀傳 三卷 竹内 嚴稻(いかしね)

日本書紀の神代卷を註釋したるもの。本書の特色とも云ふべきは同書中の神は大概同神にて其の別體なるは僅々二十神餘なりとの考なり。

◎竹内嚴稻は氣吹廼屋の門人にして、道稚孫市、幕臣にて吉田家の學頭なり。

じんだいきひかい

神代紀祕解 十七卷 源 雅胤

日本書紀の神代紀を片假名文にて註釋したる寫本なり。神祇學頭源雅胤が救を乞ひて撰するところなりといふ。全部を『神代紀上祕解』『神代紀下祕解』として十七卷五册に寫傳す。著者源雅胤は、神學に長じたる人にて、別に『神祇破僞顯正問答』の著あり。

じんだいきりやくかい

神代紀畧解 三卷 北川 政方

神代の卷を解釋するに賀茂眞淵、本居宣長等の諸說をも引用せり。首卷一册には『日本書紀』の撰者籠號及び神代卷に關する諸論を掲げたり。

◎北川政方は伊勢神宮の祠官なり。本書の外に「等由氣太神宮儀式帳鈔」四卷を著せり。

じんだいくけつ

神代口訣 五卷 忌部 正通

本書は『日本書紀口訣』十二卷中より、單に神代卷だけを寫傳して行へるものなり。

じんだいけいづ

神代系圖 一卷 平田 篤胤

天之御中主神より、天種子命に至る神代系圖なり。『古史徵』卷一の附錄を單行したるなり。文政元年戊寅(一八一八)の自跋あり。卷末に「撰古史之時、新照神等調」と題して疏闕一篇を添へその末に文政二年七月、柴崎直古の奥書を附したり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

じんだいけいづでん

神代系圖傳 三卷 和田 宗允

本書の包容するところは、其の自序、之れを紹介せり。曰く、「余嘗て日本の書目錄を見るに、帝王系圖ありて神代系圖なし。按ずるに、日本紀は則ち國常立尊に始り、古事記は則天御中主尊に起り、舊事紀は則ち天譯日天狹霧國譯月國狹霧尊に出づ。三部は則ち二名を以て一神となす。國常立尊に始て仁德天皇に終るものは日本紀に據て之れを繼ぐ。これ卽我が國神皇の正統宗廟の神なり。故に上卷とす。伊弉諾伊弉册の系に至ては則ち陽神獨化する者あり、烏絲を以て之を見はす。陰神獨生するものあり、朱墨二緒を以て之れを分ち、閱するものをして瞭然として混雜に惑はざらしむ。其の中に、月夜見素盞嗚を別けて再び之れを出して以て其の苗裔を續ぐ。此れ乃ち正統に因りて庶系を敘づ、故に中卷となす。天御中主尊より、大織冠鎌足に至るをば、古事記、舊事紀に隨て之れを列ねて天神譜と號す。是れ乃ち社襲の末派なり。故に下卷となす。亟經社の名あるものは、之れを其神の首に揭書す。且諸神の傳記を各名の左に附して「低書す」云云といへり。其の性質總藏等を知るべし。寛政七年乙卯(一七九五)出版す。

◎和田宗允の傳は「四書集註序跋解」の下にあり。

しんたいけんもんしちしきぐわんもん

新待賢門院七七忌御願文 一卷 藤原 通冬

正平十四年己亥(一三五九)六月十五日の同願文なり。漢文にて記す。「續群書類從」卷五百十九、雜部第七十四に收めたり。著者藤原通冬は別當正二位行大納言兼右近衞大將通冬とあり。

じんだいさんりようかう

神代山陵考 一卷 白尾 國柱

日本紀にいへる天津彦火瓊々杵の尊を葬りたる三可愛山陵は、今薩摩國高城郡水引鄉五窒村中山

高の嶺にあり、同紀にいへる彦火々出見尊を葬りたる高屋山陵は、今、大隅國肝屬郡内浦鄉北方村屋山の嶺にあり。同紀にいへる彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊を葬りたる吾平山陵は、今、大隅國肝屬郡姶羅(あひら)上名村の巖中にありとて、種々考を引きて論證したるものなり。『日本紀』にいへる海宮の事をも考論して附錄としたり。寛政四年壬子(一七九二)の末記あり。

◎白尾國柱は薩摩國鹿兒島の藩士にして、齋藏と稱し、白尾齋また鼓川と號す。本居宣長の門に入りて古學を研究せり。

じんだいしやく

神代釋 本 三册 多田 義俊

日本書紀の神代卷を詳釋したるものにて、延享五年戊辰(一七四八)六月上旬より、七月上旬に至るまでに作成したるものなり。桂秀樹の作を、檜山蒙齋傳へ藏するものを、更に寫傳したるなりといふ。

◎多田義俊の傳記は「遯和草」の下にあり。

じんだいすぎもくめあらそひ

神代椙眛論 一卷 泉花堂三蝶

種々草木の繡織を人に擬して仕組みたる狂言なり。故に卷内には「草物芝居化物退治」と題せり。作者の端書中に曰く「扨此度當山(箱根)權現の社にて神ぶるまひの催に付、山上の草木集り、花舞木芝居を取組、の橘精、桑の精、銀杏かうその類まで不殘罷出、相勤御覽に入奉りまする。しかる所銀杏の精かうその元より、根のあるいぞこなを仕り、萬木精葉をさはがしましてござりまする。そのあらまし(なかいつまみ、左にあらはし御覽に入奉ります)云々。安永九年庚子(一七八〇)泉花堂三蝶は東都の人、十六兵衞と稱す。

じんだいせうのうらう

神代小巢草 本 十七卷

神代の事を考證記述したるもの。卷首に度會延貳の明曆二年丙申(一六五六)に作れる神代圖を掲げて、それを詳解せるなり。元祿三年庚午(一六九〇)の自序を附す。

◎眞野時綱の傳は「異域同日譚」の下に出づ。

じんだいせきのつ

神代石之圖 本 一軸 石亭主人

古代の石器類を輯めて寫出したるもの。著者石亭の序、諸方に見聞したるものを圖し、其の由來等を記す。自序あれど其年時を記さず、序中に「天工にあらず、寔に神工のいちじるしきものなり」云々とあり、當代人種の作器なる事は知れたり。著者石亭主人は潮東の人と稱す。

じんだいせきるゐこぶつづ

神代石類古物圖 本 一軸

神代の石器類を模寫したるもの。雷斧、雷礎、石劒の類にして掛出でしもの、諸神社所藏のもの等を列載す。寛政十二年庚申(一八〇〇)の寫圖なり。

じんだいたまのみすまる

神代瓊の御統 本 一卷 鈴木 重胤

神代の御事績を長歌に敍出せるものなり。著者鈴木重胤の傳は「詞の廼舍」の下にあり。

じんだいづかい

神代圖解 一卷 眞野 時綱

我が神代の事績、開闢說等を說明したるもの。卷首に度會延貳の明曆二年丙申(一六五六)に作れる神代圖を掲げて、それを詳解せるなり。元祿三年庚午(一六九〇)の自序を附す。

◎眞野時綱の傳は「異域同日譚」の下に出づ。

じんだいのまきかうぎ

神代卷惟足抄 本 五卷 吉川 惟足

日本書紀の中神代卷を一章毎に詳解論說したるものなり。假名字に一字を低註したるなり。

◎吉川惟足の傳は「神道大意講義」の下にあり。

じんだいのまきかうぎ

神代卷講義 本 一册 淺見 安正

其の師山崎闇齋の講釋を筆記編輯したるものなり。文章は俗語體に成りて頗る通俗に適し、說も山崎派の神道說を知るに足るべし。

◎淺見安正の傳は「靖獻遺言」の下にあり。

じんだいのまきかうじゆつせう

神代卷講述鈔 二卷 山本 廣足

伊勢外宮の祠官度會延佳の講じたるところを筆記

編輯したるものなり主として纂疏釋日本紀等の説を引き伊勢卜部の説を用ひたり。寛文十二年壬子(一六七二)に成る。著者山本廣足は延佳の門人也。

じんだいのまきかだしせう

神代巻荷田氏抄 ㊀一巻

荷田 春満(アヅマロ)

本書は一名「書紀荷田抄」の名の下に解題せり。

じんだいのまきかでんきゝがき

神代巻家傳聞書 ㊀九巻

田中 宗得

日本書紀の神代巻の註釋。吉川惟足の講義を、田中宗得の筆記編纂したるもの。宗得の端書に「凡此書相傳の作法先我師前にて、素讀を讀て開合清濁を吟味し、平上去入盤整吟誦なため、次に初遍の講談を聽聞す。初遍の講談には、諸神の名義系圖垂跡和訓等を演説す。講談了て師へ不審へ畢げて決釋を請。然して再遍の講談を聽聞す。再遍の講談には、傳來の正説の大概を演説す。了て又不審を畢決釋を請。次に再々遍の講談を聽聞す。再々遍の講談には稍傳來の祕説をも洩達するなり。以上三遍の講談了て後、段々面授口訣の旨を相傳して奥祕に至るなり。」、「今此聞書は我師祝我堂翁惟足累年の間、諸方にて演説ありし旨を取集め一部となしぬれば、初遍も再遍も相雜れり。加様に相雜りたるなば雜講の格と云。但後成恩寺殿の纂疏、忌部正通の口訣、右兩抄に於ては家説と不ㇾ異の分。私の料簡を以て處々に書加之」云々。以て本書の成立を窺ふに足るべし。また元祿二年己巳(一六八九)宗得の奥書あり。

◎田中宗得は平安の人、一閑叟と號す。江都に移りといふ。天保十四年癸卯(一八四三)九月朔日同人の序あり。秀眞跋を加へ、嘉永二年己酉(一八五〇)九冊に發行せり。

じんだいのまきしほづちのでん

神代巻鹽土傳 ㊀四巻 清原 春岑

神代巻の解釋なり。本居宣長の説を引用せること多し。最初の一巻には「日本紀大綱」として書紀全體に關することを掲ぐ。寛政七年乙卯(一七九五)の著といふ。

じんだいのまきしほづちのでん

神代巻鹽土傳 五巻 谷 重遠

神代巻を漢文にて解釋したるものなり。中臣祓傳をも添へたり。

◎谷重遠の傳は「甲乙錄」の下にあり。

じんだいのまきしやうか

神代巻證歌 ㊀一巻 岡田 正利

本書は「かみよの巻證歌」として「か」の部に出せり

じんだいのまきじんじやかう

神代巻神社考 ㊀二巻 伴部 安崇

神代紀に記されたる諸神の鎮座し給へる場所、及び其の社號等を記載したるなり。

◎伴部安崇の傳は「一切成就祓抄」の下にあり。

じんだいのまきたんぎせん

神代巻副義箋 ㊀二巻 高屋 近文

日本書紀の神代巻の註釋。垂加流の説に據りたるものなり。享保二年丁酉(一七一七)に脱稿す。

◎高屋近文の傳は「徒然草典據抄」の下にあり。

じんだいのまきぐけん

神代巻獨見 ㊀一巻 伊勢 貞丈

我が神道の起元に就きて考説し、儒釋の解の誤れることを笑ひたるものなり。安永七年戊戌(一七七八)六月八日自家の束記あり。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

じんだいのまきひえうせう

神代巻祕要抄 ㊀十二巻 多田 義俊

日本書紀の神代巻上の巻の註釋。通俗なる假字交り文なり。神代巻下を註釋したる「神代巻顯要抄」あり。本書と併せ見るべし。發端の巻の末に「明和四丁(一七六七)永春三月辰日、猴樺大藏藤原義明先書識書」、「天明五年乙巳(一七八五)冬十一月六日、弟子岡崎之遠源正発校合之」と記せり。

◎多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

じんだいのまきふうえふしふ

神代巻風葉集 ㊀八巻 山崎 嘉

神代巻中一語々を抜げて解釋したるもの。著者の講義を門人等の筆記したるもの。神代紀口訣、名法要集、日本紀纂疏、五部書其の他諸家の説によりて講ぜるなり。

◎山崎嘉の傳は「垂加文集」の下にあり。

じんだいのまきふうぞくせう

神代巻風俗抄 ㊀五巻 秦 信慶

神代巻風俗の事を考ふるに、「釋日本紀」、「日本紀纂疏」、「同聚祓抄」、「神代講述抄」等の説に、著者の發明を合せたるものなり。

◎秦信慶は眞平(一三四四―一三四七)年代の國學者なり。著書は本書の外に、御鎮座本紀抄、御鎮座次第紀抄、倭姫世紀抄、外宮引付等あり。

じんだいのまきもしほぐさ

神代巻藻鹽草 五巻

日本書紀の神代巻の註釋。山崎垂加の説に基さたるものなり。元文四年己未(一七三九)刊行す。

◎玉木正英の傳は「玉籤集」の下にあり。

じんだいひけつ

神代祕決 五巻

「神代巻」を解するに佛説を以てしたるもの。牽強附會せる事多し。佛者の手に成りしこと歴然たり。

じんだいひやうせんき

神代評撰記 五巻 僧 日宣

史傳諸書に據りて、神代の記事、諸流の神道を糺して、彼れを評し、是れを撰したるものなり。天保三年壬辰(一八三二)の著。同年越前敦賀妙顯寺本宗日理の序あり。

◎日宣は山城國伏見、前日蓮宗本教等の住職にして、英智院と稱す。

じんだいひやうちう

神代評註 四巻 龍 熙近

神佛習合の説に據りて神代巻を評註したるもの。

◎龍熙近の傳は「古語拾遺抄」の下にあり。

しんだいひやくしゆ

新題百首 ㊀一巻 五井 純禎

春宮總等の詩題若くは和弓三絃等の詠みなれざる新題を撰びて川井立牧と共に詠み成せる百首なり

◎五井純禎の傳は「源語話」の下にあり。

じんだいほこらさがし

神代小社探 二巻 增穂 殘口

我が日本國の神祇なること神道の正しきこと、風俗の淳朴なること等を通俗的に面しろく書き成せるものなり。部合三十編兒女の讀物とせるなり。末に享保元年丙申(一七一六)菊月吉祥日とあり。巻首に狂文自敍を附す。

◎增穂殘口は豐後の人、名を最中、通稱を大和といひ、蟠龍子、似切齋等の號あり。夙に國學に通じまた俳諧を善くせり。京に出でて近衛公に仕ふ。著書には靈道通鑑、異理和理合鏡、神國迦摩祓、神路常世草、神路手引草、死出山分言、徒然更雲、(以上七部に本書神代小社探を合せて殘口八部の書と稱す)神道水津草、七福神傳記、增穂草等あり。享保二年丁酉(一七一七)九月二十一日、六十三歳にて歿す。

じんだいもじてんくわくかう

神代文字點畫考 一巻 鶴峯 戊申

此の書は一名「鍬木文字考」の下に解題せり。

じんだいものがたりひやくしゆ

神代物語百首 二巻 角田 忠行

我が神代の事を、百首の歌に詠出して各首註釋を加へたるものなり。慶應元年乙丑(一八六五)の自序、及び同三年矢野玄道の序、角田忠行の跋等あり
◎角田忠行の傳記は「古史略」の下にあり。

じんだいもんじかう
神代文字考　一卷　鶴峯　戊申

前著「假本文字考」を刪定したるものにて、主として、「アナイチ」等の神代文字が、我が古書中に交へ用ひられたる事を論じたるなり。嘉永元年戊申(一八五〇八)の自序あり。
◎鶴峯戊申の傳は「神階錄」の下にあり。

しんだいりおんしやうじしきしわか
新内裏御障子色紙和歌　一卷　網野　延平

清涼殿小御所の障子の色紙の繪に、上帝室の御歌より、皇族官民の名歌をかゝしめ給ひたるを、寫して版刻したるもの。明治五年壬申(一八七二)の自跋、及び正二位三條西季知の序あり。
◎網野延平は源姓にして、初め築倉延平といひ、田安家に仕へたり。別著に「新撰百人一首」あり。

しんだいりしきしがたわか
新内裏色紙形和歌　本一卷

寛政の新内裏清涼殿御障子大和繪色紙形の名所和歌を寫したるもの。色紙形の筆者は菅蓮院宮、大炊御門前内大臣、花山院大納言、石山前大納言等にして、色紙弘徽殿上の御簾稱は龜尾山、桂川、常磐杜。二間は春日野、初瀬の里、芳野山。遣盤所は宇津山、田籠浦、浮島原、富士山。布障子は三保浦。鳥間は信夫里、安積沼、松島。朝鶴は遠里小野、須磨浦、布引瀧。御手水間布障子は三津泊、御湯殿上は吹上濱。同布障子藤代御坂、藤壺上御簾稱は滋賀樂山、志賀浦、眞野入江、逢坂關、萩戸、清瀧川、伏見里、廣澤池、神山。呂明池障子は蟇蛾野。荒海障子は宇治川等皆景願名家の作に成る。

しんだいりしよぐわのき
新内裏書畫記　本一卷

寛政二年庚戌(一七九〇)内裏御造營の際に於ける禁中御殿廻りの畫樣、及び襖布障子等の張付色紙形の題歌を記したるもの。首に清涼殿各間の題歌、及び其の歌人筆者の名を列記し、次に紫宸殿の賢聖障子を始め、各御殿の繪畫の模樣及び畫工の名を記したり。

じんだいりだん
神代俚談　三卷

神代の事に關する古傳說を易段天地のはじめまた神代七代と申す事、第二段伊邪岐伊邪那美大神國土また諸神萬物を生たまふ事並御事、第三段伊邪那美命火產靈神を生たまふ事、第四段までありの「古史成文」に基きて當時の通俗文、即ち候文に病惱の事等、以下二十四段まで譯述し、圖畫をも插入して見安の讀本に便したるなり。嘉永六年癸丑(一八五三)の著。
◎猿渡盛章の傳は「新撰總記傳記」の下にあり。

しんだいりづ
新内裏圖　本一鋪

[illegible]建禮門、承明門、日華門、月華門、紫宸殿、清涼殿、小御所、温明殿等を圖せり。傍に「寛政二年庚戌(一七九〇)十一月二十二日、還幸新造内裏紫宸殿南庭之指圖、常寧殿以下、殿舍、御學文所、對屋、御清所等略之。東有四脚門、西唐門、其北清所口門其餘穴門也」と記せり。

しんだいりのそうづ
新内裏之繪圖　本一鋪

天明八年戊申(一七八八)正月晦日、禁裏炎上後、寛政二年庚戌(一七九〇)始めて御造營ありし時の圖なり。よつて「新内裏」といひしなるべし。圖中着色を以て標示す。文化四年丁卯(一八〇七)片岡直亮、坂口氏所藏の圖を復寫したる由を記せり。

しんだいりのやづ
新内裏晝圖　本一鋪

新内裏紫宸殿南庭の指圖にして、四方の御門を始め、殿舍廻廊諸官人の役處等を記す。「新内裏圖」に比すれば其の粗略なること甚し。

しんだいりんかしふ
新題林和歌集　十六卷

諸家近體の和歌を編輯したるものなり。作者は後西院、後水尾院、鏡元院、道晃親王、尭然親王、通胖、通茂、通村、涼房、氏孝、宣茂、光雄、資慶、家熙、通純等その他數十人なり。

じんだいろくしゆわか
神代六首和歌　本一卷　吉田　兼敦

八雲立つの歌以下凡て六首の神代和歌を解釋したるものなり。

じんだいわかい
神代和解　本十二卷　鴨　祐之

日本書紀の神代卷を詳解したるもの。本文を擧げ、一字を下げて漢文の註釋を加へたり。序跋等なく著作の年月詳ならず。
◎鴨祐之の傳は「祭事記」の下にあり。

じんだいわかしやく
神代和歌釋　本一卷　荷田　春滿

日本紀神代卷中の和歌を取り出でて講釋したるものなり。享保十五年庚戌(一七三〇)十月十一日在滿淨寫の奥書あり。
◎荷田春滿の傳は「伊勢物語童子問」の下にあり。

じんだいわくんしふせいせう
神代和訓集成抄　八卷　淺利　太賢

日本書紀の中なる神代卷に和訓を附し、假名書註を加へたるものなり。
◎淺利太賢は京都の人にして、甲斐と稱す。著書は本書の外に、神代纂言上乃卷、神道遠美衣、中臣祓大全、幸牛卷等あり。貞享時代の人なり。

しんだいわみやうしふ
身體和名集　本一卷　勝　正賢

身體に關する和名を、いろは順に列擧して各其の下に漢字をあてたり。例せば、いろこ〔頭垢〕いき〔息〕いきらい〔脅〕いばりぶくろ〔膀胱〕等の如く、凡て三百餘を擧げたり。文久元年辛酉(一八六一)の自序あり。著者勝正賢は尾張名古屋の人なり。

しんたうかんもん
神道勘文　本一卷

伊勢皇太神と、熊野權現と同體なるべきが否かを考論したるものなり。

しんたうごぶのしよ
神道五部書　五卷

天照座伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記、豐受皇太神宮御鎮座本紀、伊勢二所皇太神宮寶基本紀、倭姫命世紀の五書を集めたるものなり。度會延佳頭註を加へ、異本を考證したるものあり。本書は「國史大系」の第七卷に所皇太神宮御鎮座次第記、二所皇太神宮寶基本紀、倭姫命世紀の五書を收めたり。該書は二所皇太神宮御鎮座傳記、及び造二所皇太神宮御鎮座次第記、豐受皇太神宮御鎮座本紀は、「慶雲代弘賢本を原とし、度會延佳本を原とし、倭姫命世紀は、賀茂本と稱する應永二十七年の古寫本を原とし、異本敷種を以て校訂を加へ、且、吉見幸和說辨本、岡田正利抄本、及び後姫世記考、神宮本紀歸正鈔等を參攷したりといふ。

しんたうごぶのしよせつ
神道五部書抄　本六卷　岡田　正利

神道五部書を註釋す。御鎮座本紀は享保五年庚子(一七二〇)に成り、寶基本紀抄は同六年に、御鎮座傳記抄、御鎮座次第紀抄は共に同八年に成れり。何れも著者の奥書あり。五卷六册に作る。
◎岡田正利の傳は「神代卷證歌」の下にあり。

しんたうごぶのしよせつべん
神道五部書說辨　十二卷　吉見　幸和

「神道五部書」を辨駁したること名の示すが如し。廣く國史官牒の正文を引證して、同書の譫言誕說を打破し、其の牽強附會を辨折して能く俗學者の疑惑を解けり。本居宣長毎卷の終りに其の評を加へたり。元文元年丙辰(一七三六)佐藤圓仲の漢文序あり。
◎吉見幸和の傳は「國學辨疑」の下にあり。

しんたうしふ
神道集　本八卷　安居院(アゐのゐ)

神佛習合の說を書きたるもの。神道由來の事、八幡の事、鳥居の事等を始として、諸國鎭守權現の事、御神樂の事、酒肉を神に供ふる事等五十箇條あり。
◎安居院(僧聖覺)の傳は「大原談義聞書抄」の下にあり。

しんたうしふしふ
神道輯拾　本一卷　岡田　正利

神道に關する隨筆なり。玉方陣、歌、享保四年亥傳、潮翁語類、淺佐氏答書、享保七年子二月七日從齋翁狀、神代卷上、土金傳拔書、潮翁五文字封之時次第、瓊矛傳、以下種々の目を擧げて、雜考略說したるものなり。寛保元年辛酉(一七四一)岡田宗殖寫本の奥書あり。

◎岡田正利の傳は「神代卷諺歌」の下にあり。

しんたうしふせい
神道集成 十二卷　**德川　光圀**

神道に關する類聚なり。凡例に「凡そ是の書の始終兩部習合の邪說を排して惟一宗源の正道に歸す云云」とあり。卷一采圖部、卷二口訣部、卷三祓、祝詞、宣命、祭文部、卷四、卷五行事部、卷六、卷七、卷八、卷九、卷十神社部、卷十一神社神寶祭器の部、卷十二宮記倭姫世紀等を集錄せるなり。

◎德川光圀の傳は「大日本史」の下に出づ。

しんたうじふにぶのしよ
神道十二部書 十二卷

倭姫世紀、御鎭座次第記、御鎭座本紀、御鎭座本紀、御鎭座本紀、寶基本紀、天日事書、古老口實傳、御奉仕記、御鎭座本紀、機殿規式帳、心御柱記、及び神風鈔の十二部を集めたるもの。之れを禁河の書といひて、宮河の外に出すことを許さゞりきと云ふ。

しんたうしよもくしふらん
神道書目集覽 一卷　**鈴木　行義**

日本書紀以下、我が神道に關する書書二百數十部な列擧し、各書名の下に著者及び卷數を擧げたり。附錄あり、神道者流の俗說に關する事を論駁せり。明和七年庚寅(一七四三〇)の作。同年城武昭の序あり。

◎鈴木行義は東武の人にして子達と字し、龍洞と號し、好古軒と號す。著書は本書の外に中臣祓正文、中臣祓筆解、諸註集覽、葛事紀大疑、卜筮論、論語朱氏新註正誤、大學諸註集覽、中庸諸註集覽、太宰氏辨道書正誤、龍洞隨筆、二書辨、二書辨追考、射具本語考、仁齋祖徠二先生得失辨、穗積草、好古軒隨筆等あり。

しんたうしんでんくじゆ
神道神傳口授 卷一卷　**伴部　安崇**

神道に關する古書古言を摘抄して、說明したるもの。凡て八箇條より成る。卷末に著者識して云く「右の外覺えて守るべき神語數々ありと雖も、先づ此に載せたる語を熟讀して暗に覺え味ひて、さて三種大祓光の祓、金の傳を初て學ぶべしとの傳來なり云々」とあり。

◎伴部安崇の傳は「一切成就祓抄」の下にあり。

しんたうしんび
神道深祕 二卷

上卷に注連深祕卷、神入道之卷、神輿出宮卷、開山深祕卷、大主三禮卷、大師稱歎卷、戒體振祕卷、御神樂深祕卷、三國風俗川卷、諸神御返歌卷、八雲深祕卷、天岩戸之卷、辨波佛性同後來深祕卷、天岩船之卷、屋主謨禮之卷、本化著卷、小路深祕之卷、歸寂光土卷、屋主謨禮之卷、本化著薩來宮卷、灌頂卷、御注連卷。下卷に外宮明之卷、內燈明之卷、散花之卷、外戶開卷、燒香獻茗卷、御供飯饌卷、內賜給食卷、三神祕法卷、神體法華卷、正八王子之卷、淨土通穴卷、陰陽口傳卷、欲苦の卷、男女和合卷、疫病溜頂卷、御神託之卷、倭朝祕奧卷、三種神器卷、弓箭之卷、把刀劍之卷、著甲鎧之卷、三光禮拜卷、柱立之卷、夢相之卷、我身成就之卷等を略說す。全編漢文の例に書けるも、往々「謹案已前、迷情各別依、正不二說諸宗不知之、何佛說なれば見機不同計也」また「予諸國廻見に聞するに諸靈山靈地に等の書法あり。上下二卷一册に作り、凡て四十一枚あり。末に「弘仁十三年(一四八二)二月十三日」と記し、承應二年癸巳(一三一三)刊行す。

しんたうせんぐうしだいならびにさはふ
神道遷宮次第並作法 卷一卷

神宮の次第を記せること名の示すが如し。兩部習合神道家の作意せるものなりといふ。

しんたうたいい
神道大意 一卷　**卜部　兼直**

本書は神道卜部家にて唱道せる惟一神道の大意を論述したるもの一名「萬神起元」とも「神道宗源」とも云へり。後鳥羽帝に密奏したる者なりといふ。

◎卜部兼直は吉田氏中興の祖、兼延より七代に當れり、神道に精しく歌道にも通達せり。七朝の侍讀となり、神祇大副に任ぜられ、侍從左兵衛督たりき。薨するところに「神代紀和訓抄」ありといへど、今は傳らずといふ。

しんたうたいいかうだん
神道大意講談 一卷　**吉川　惟足**

卜部兼直の「神道大意」を講釋したるものなり。門人不破惟益の筆記するところなり。

◎吉川惟足は江戸の人にして、湘山また視晉堂と號す。夙に京師に出で豐國神社預恭原兼從に就いて神道と歌學とを研究し其の奧義を究む。後江戸

に歸りて保科正之の優待を受け名聲一時に高く弟子も多かりきといふ。德川家に仕へ神道方を命ぜらる。祿は百俵なれど、一人一役にて寄合(三千石以上)を以て待遇ぜらる。著書は本書の外に神道大意註、日本紀則神祇要論、鎌倉閑居記、神代卷惟足抄等あり。元祿七年甲戌(一三五四)十一月十六日歿す、年七十九。

しんたうたいいちう
神道大意註 卷一卷　**吉川　惟足**

卜部兼直の「神道大意」に註解を加へたるものなり。延寶六年戊午(一三三八)五月書寫の奧書あり。

◎吉川惟足の傳は「神道大意講談」の下にあり。

しんたうていじゆんせう
神道定準抄 卷一卷　**橫山　兼知**

神道の惟一の道理を略說したるもので、僅々數枚に寫傳せり。思惠翁橫山忠知の按文中に「夫日本書紀之中、以最爲神道之根源者、拔舉之、且捨卷記所見神語之妙者載之、則著語說及莖系、發輝之、而以垂加翁弓兵政所記、示傳來之正意、以日神之道、而猿田彥神之教之旨、而終此編、若天照太神託宣除萬言雜說、擧一心定準、定準則心柱、故名曰神道定準抄也」云々といへり。これ正德三年癸巳(一三七三)の案なり。

しんたうでんじゆ
神道傳授 卷一册　**林　道春**

神儀、神道等に關する說明なり。神道傳授、三種神器、二神即八百神事、勸請事、本跡三儀、神道人道一理、天地神人身神、先祖子孫魂魄同氣事、魂魄辨之事、陽神陰神の事等より、三世之事、息風之事、高天原之事等に至る凡て八十餘項假字文にて記せり一本の奧書等には「右一帖、神道奧儀之祕也、奉若狹國主左少將源朝臣、酒井君之求而撰寫進呈之、裝無他人願破云々正保年中民部卿法印林道春」とあり。

◎林道春の傳は「羅山文集」の下にあり。

しんたうとくご
神道獨語 一卷　**伊勢　貞丈**

我が高天原の說、神の說等を述べて或る神道者國學者流の附會妄說の說を辨明したるもの。末に「右に記せる所は今世神職にもあらずして神道なりもてあそぶ神道者といふ輩の心得たがへる事どもを論辨するなり。神代より正しくうけ傳へ給ふ中臣卜部兩家の眞傳は我等如きもの〻容て窺ひ知らぬ事なれば、いふべき事もなしおかしこ〳〵 天明二年壬寅(一七八二)四二卯月三日伊勢平藏貞丈書」とあり。尙追加して伊勢神宮の造り樣、兩部神道の事、惟一神道の安座巡行、其の他の辨を述べたり。「溫知叢書」第六編の中にも收めたり。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋隨筆書」の下にあり。

しんたうひせつ
神道祕說 卷一卷

神佛習合の俗說を記したるもの。大意、天地開闢、天神七代、地神五代、三種大事、三種神器、秋津島事、千葉破等の事あり。奧書に「神祇大副正四位下兼友在判」と記せり。

しんたうひやくしゆせう
神道百首抄 二卷　**卜部　兼邦**

本書は一名「兼邦百首歌抄」の下に解題せり。

しんたうぶくきりやう
神道服忌令 一枚　**度會　重邑**

親族服忌の日數、獸肉を忌む事等なば、太神宮參拜者のために記したるものなり。著者度會重邑は伊勢太神宮の神職なり。

しんたうべん
眞道辨 卷一卷　**岡部　東平**(ハルヒラ)

內題には「道のまことの辨」とあり。我が國の眞道は儒佛の道の如き、仰々しき形式的のものにあらざることを說き、儒佛の說の非點を擧げて攻擊し、やがて我が國道に同化せざるべからざることを論じたるものなり。

◎岡部東平はまた春平といふ。堅峯蓋根と號し、歌人と通稱せり。著書數十部あり。

しんたうべんぎしふ
神道辨疑集 卷三册　**度會　延良**

二所太神宮遷幸要略、二宮諸社名式圖、二所太神宮末社記等を編集したるもの、正保三年丙戌(一六三〇)六同輯者與村弘正の序中に「明書二所太神宮末社記、多遙遠間、而新不作、說以類語、分行小書、頗似註解、而著餘意、見者大書小書、融會貫通、或意旨相違耶、如其文筆不連、說論不悉則姑俟後人之是正、既以三册編爲一部、題之曰神道辨疑集、非集大

成、且載其指歸之梗概、若有辨一事之疑惑、則幸甚」云々とあり。

◎度會延佳のことは「神宮祕傳問答」の下にあり。

しんたうべんわく

神道辨惑　二卷　僧　聖應

伊勢兩宮、神道五部書、託宣、祈禱、聖德太子、兩部習合、高天原、山崎垂加、天岩戸、太宰辨道書、中臣祓、其の他神道に關する種々の事を記し、神道者流の謬見を評したるもの。天明五年乙巳(一七八五)三月の著。著者聖應は生玉の社僧なり。

しんたうべんわくろく

新刀辨惑錄　三卷　荒木　市秀

新刀鑑識の書。神田勝久の「新刀銘盡」六卷、中島謙福等の「續新刀銘盡後集」、鎌田魚妙が「新刀辨疑」、笹浦吉座の「新刀賞鑒餘錄」等に遺漏せる賞鑑の要領を記したるもの。凡て五十餘項より成る。寛政六年甲寅(一七九四)の自序あり。

◎荒木市秀は常陸の人。常陽また一適齋と號す。夙に木屋流の鑒識を朝岡安親の弟子となりて十餘年間研究したりといふ。

しんたうみやうもくせう

神道名目抄　一卷

神道に關する諸書中の語句等の訓讀を正したるものなり。

しんたうみやうもくるゐじゆせう

神道名目類聚鈔　三卷

其の名の如く神道に關する名目を類聚して註說圖解したるもの。宮社部、神寶部、祭器部、神官服部、神祇部、祭祀部、神官部、雜部の七門と、更に細目數十箇條を分ち、平易に說明したり。正德四年甲午(一七一四)刊行す。著者は城西の野叟某と記せり。

しんたうめいしふろくにへん

新刀銘集錄二編　三卷　森岡　朝尊

新刀の銘を集錄して鑑定に便したるもの。安政三年丙辰(一八五六)の跋を附し、同四年版行す。

しんたうやへがきでん

神道八重垣傳　五卷　藤原　齋延

天、地、皇帝、國々、家々、一身、各々八重垣ありと云へる說を述べたるもの。寶永五年戊子(一七〇八)十一月の自序あり。

◎藤原齋延のことは「古語拾遺句解」の下にあり。

しんたくろく

振濯錄　一卷　岡本　通理

「守戶」の事を論述したるもの。本書は一名を「土部源流」といふ。また本によりては「振濯錄通俗抄」と表題せるものあり。土部氏の源流變遷を詳序したるなり。衣を千切の岡に振ひ、足を萬里の流れに濯ふの句によりて名けたり。中野某の依頼によりて作れるものなり。安政二年乙卯(一八五五)菅原爲定、同四年淺野長祥、同西長緯齋谷操、同森繩、同大和家政信、同戊午玉井駿、同藤澤甫、同大槻磐溪等の序あり。同西長出版す。著者岡本通理は大和の人黃中と稱す。

しんたつか

信達歌　二卷　熊坂　邦

奥州國信夫郡、伊達郡の地理歷史に關する事項を詠じたる長篇の和歌なり。一千〇二十九字より成る。天明七年丁未(一七八七)井上澄の序あり。こは其の子秀、君實の註釋したるもの。註の文字九千七百十一字と記されたり。第二卷は考證附錄にしてあらゆる事實を諸書諸傳に徵して證明したるものにして邦の自跋あり。

◎熊坂邦の傳は「永墓編」の下にあり。

しんたまつしましやうたあはせ

新玉津島社歌合　一卷

貞治六年丁未(一三六七)三月二十三日、浦霞、尋花、神祇の題にて、藤原長基、藤原實後、藤原實英、藤原實積、藤原長冬その他の歌合なり。「群書類從」卷二百〇五、和歌部第六十に入る。

しんぢうかさねづつ

心中重井筒　一卷　近松門左衛門

寶永元年甲申(一七〇四)四月に初興行せる淨瑠璃本なり。近松が傑作の一たり。

◎近松門左衛門の傳は「國性爺合戰」の下に出づ。

しんぢうかみやおへい

心中紙屋治兵衛　一卷　近松　半二

文吉と合作するところの淨瑠璃本なり。安永七年戊戌(一七七八)四月成。著者近松半二の傳は「關取千兩幟」の下にあり。

しんぢうてんのあみしま

心中天の網島　一卷　近松門左衛門

紙屋治兵衛、紀伊國屋小春との情死を主に作り成せる淨瑠璃にして、謂ゆる近松悲劇の一なり。近年本書を評註したる者あり。東京明治書院より發行。

◎近松門左衛門の傳は「國性爺合戰」の下にあり。

しんぢうにつしんまんびつにのみやしばうさくへん

辛丑日新漫筆二宮氏報德編　本二卷

二宮尊德の報德法題意書を輯錄したるもの。原領內興復に付綿澤作右大住郡金目村兵左衛門の家政取直し手段帳、某村民報德法に隨喜し各戶捐金したるなり。事皆天保(一八三〇—四四)九〇—一五〇三)年間に係れり。

しんぢうふたつはらおび

心中二ッ腹帶　一卷　紀　海音

享保七年壬寅(一七二二)四月初興行の淨瑠璃本なり。著者紀海音の傳は「信田森女占」の下にあり。

しんぢうまんねんぐさ

心中萬年草　三卷　近松門左衛門

例の淨瑠璃本なり。著者近松門左衛門の傳は「國性爺合戰」の下に出でたり。

しんぢうよひかうしん

心中宵庚申　一卷　近松門左衛門

享保七年壬寅(一七二二)四月初興行の淨瑠璃本なり。著者近松門左衛門の傳は「國性爺合戰」の下にあり。

じんぢうろく

塵忠錄　一卷　齋藤　馨

仙臺騷動につきて伊達安藝の忠節を發揮したるもの。安藝が主家の危運に力り、一身を挺して一死を堵して、幾多の逆黨を挫き、遂に六十萬石の封土をして由緒と其の安を同うするに至らしめ精忠大節を筆錄したるもの。爰に古書に確徵して漢文に物す。嘉永二年己酉(一八五〇九)の作なり。

◎齋藤馨の傳は「蠟竹堂文鈔」の下にあり。

じんぢえうろく

仁智要錄　本十三卷　藤原　師長

箏曲の書。首卷に箏案譜法、絃名、右手、左手等を掲げ、次の第一卷より、第十一卷までには曲調の譜本なり、皆弦名を以て符記す。第十二卷には角調柱の次第、箏卷弦目傳の事等を記したり。

◎藤原師長は左大臣頼長の子なり。仁平中右近衛權中將參議に任ぜられ、從二位に進み、久壽中權中納言となり、保元中父の事に座して土佐に流さる。後召し還されて本官に復し、正二位に進みそれより累遷して治承元年從一位太政大臣に敍任す。幼より才學あり、また音律を好み琵琶、箏等の技に長ぜり。著書は本書の外に三五要錄、要箏、自馬節會抄等なり。建久三年壬子(一一九二)歲五十六にて薨ず。妙音院と法謚す。

しんちよくせんしふけいちうあん

新敕撰集契沖案　本二卷　僧　契沖

此の書は新敕撰集中の和歌につき、各其の原本によりて、異同を辨じ、略註を加へたるものなり。東山天皇の元祿十二年己卯(一六九九)五月二十六日の編述したるものなり。

◎契沖の傳は「富葉代匠記」の下にあり。

しんちよくせんしふせう
新敕撰集抄 ㊟三巻　僧　契沖

定家の「新敕撰和歌集」を抄出して評論したる者。一名を「雖敕撰」又「新敕撰雑註」といへり。元禄十二年己卯(一三五九)五月二十六日著者の奥書あり。

◎契沖の傳は「萬葉代匠記」の下に出づ。

しんちよくせんせう
新敕撰抄 ㊟二十巻　僧　尭眞

定家の「新敕撰和歌集」の全部に註釋したる者也。

◎尭眞の傳は「草庵集衆求證解」の下にあり。

しんちよくせんなんちう
新敕撰雑註 ㊟三巻　僧　契沖

本名「新敕撰集抄」といふ題の下に解題せり。

しんちよくせんるゐそ
新敕撰類礎 五巻　野田　忠蔀

藤原定家の撰集したる「新敕撰和歌集」中の歌なほ其の各句の終りの字に依りて、いろは分けに類聚したるものなり。寛永二年乙酉(一三三六五)の正月より九月までに抄出書寫を了りたりと云ふ。

◎野田忠蔀の傳は「柏傳」の下にあり。

しんちよくせんわかしふ
新敕撰和歌集 二十巻　藤原　定家

新古今和歌集の次に出來たる歌集なり。後堀河天皇の貞永元年壬辰(一八九二)敕によりて撰集せられたるもの。春上下、夏、秋上下、冬、賀、羇旅、神祇、釋教、戀一、二、三、四、五、雜一、二、三、四、五、に分ちて凡て一千三百五十三首(拾芥抄には一千三百七十一首此外短歌四首とあり)。異本非雑抄には「新敕撰をば宇治川集といひ、契沖の「雑敕撰」には「此の集に多く武士の歌を入れられたりとて異名を宇治川集とつけたりとなん、武士の八十ぢ川といふ歌にとれり」といふ。今川了俊の說に「新敕撰集は定家卿一人うけたまはりて撰ばれて花實を猴れたる集」と、烏丸光廣の說には「新古今、花に過ぎたりと古今の華美に過ぎたるを適正せんとて作りたるの意なり。本集に對する批評の一斑を見るべし。また此に注意すべき一條あり。順德三院の御詠を一首も此集に入れざりしこと是れなり。此の集は四條天皇御卽位の前一年に出來たれば當時長くも三院は各海隅に播遷ましくたれど猶御在世なれば、必ず取て入るべかりしを、さなきは定家北條氏の威權を恐れたるなるべし。不見識の極といふべし。先輩も既にこれを論ぜり。

◎藤原定家の傳は「拾遺愚草」の下にあり。

しんちよくせんわかしふせう
新敕撰和歌集抄 八巻　僧　祖能

新敕撰和歌集を抄出して評論註解したるもの。

◎祖能の傳は「拾遺愚草」の下にあり。

しんつくばしふさくしやぶるゐ
新菟玖波集作者部類 ㊟一巻

「新菟玖波集」の作者を列記して略傳を附し、各其の俳諧數をも統計せり。

しんていきねん
神延紀年 ㊟六巻　石崎　文雅

天武天皇の卽位元年辛酉より、後桃園天皇の安永七年戊戌(一四三八)に至る伊勢兩宮に關する事績皇室の禮奠祭祀に係ることを集錄せり。年序的に漢文を以て記し、且類註を加へたり。寛政九年丁巳(一四五七)七月の自序、及び坂綱明の跋あり。

◎石崎文雅の傳は「日本記纂斷」の下にあり。

しんていしやうろんせん
新訂掌中時韻牋 一折　大槻　行

◎宗祇は飯尾氏とし、自然齋、種玉庵等の號あり。幼時得度して律宗の徒弟となる。性和歌を好み、東常縁に就て「古今和歌集」を傳受し、猪苗代兼載に連歌を學び、晝夜精研し遂に連歌を以て天下第一と稱せらるゝに至る。天皇稱して花下の號を賜ふ。一世の名譽といふべし。當に天下を遍歷して名區勝域殆んど足跡の及ばざるものなし。著書は本書の外に、筑紫道記、吾妻問答、老のすさみ、伊勢物語山口記、九代抄、古今和歌集抄等あり。文龜二年壬戌(一四二)七月晦日、箱根湯本の旅宿に歿す、年八十二。其の墓は駿河の桃園にありといふ。明治三十四年淺草等光寺に於て四百年忌を營みたり。竹內久遠の影刻したる座像をかざり、後、伊香保の碧巖地へ其の像を遷りたり。

しんつくばしふさくしやぶるゐ
新菟玖波集作者部類 ㊟一巻

「新菟玖波集」の作者を列記して略傳を附し、各其の俳諧數をも統計せり。

しんていきねん
神延紀年 ㊟六巻　石崎　文雅

天武天皇の卽位元年辛酉より、後桃園天皇の安永七年戊戌(一四三八)に至る伊勢兩宮に關する事績皇室の禮奠祭祀に係ることを集錄せり。年序的に漢文を以て記し、且類註を加へたり。寛政九年丁巳(一四五七)七月の自序、及び坂綱明の跋あり。

◎石崎文雅の傳は「日本記纂斷」の下にあり。

しんていしやうろんせん
新訂掌中時韻牋 一折　大槻　行

しんていせいろしやくつ
新訂正魯齋亞國圖 ㊟一舖

「魯西亞銅版圖」を寫したるものにて、各國天度に配して其の位置を示し、本國歐羅巴の東邊より、凡て其の管區亞細亞、北亞墨利加に至るまで、其の地形を全圖し、四邊境界の國々は彩色にて分ち、各王都、都會、大小官衙、佛寺等を示せり。蓋し慕四亞地圖中の最も詳しきものなるべし。

しんていせう
心底抄 ㊟一巻　藤原　經朝

書宣旨樣、書宣命樣、書表並辭狀樣、書申文樣、顯文書樣、書經樣、一品經書樣、色紙形書樣、寫物油紙樣、摺墨樣、墨付樣、墨善惡樣、用筆樣、筆を仕樣、筆を安置樣、用筆樣、墨安置樣、見破善惡樣、洗現樣、手習樣、書行物樣、書草物樣、書錯樣、書外題樣等を記述せり。奥書に「文永九年壬申(一九三二)仲夏上旬之間、書寫口傳筆點校實、專於我家者也、雖然不可出身併以當家庭訓也、祕說奏授秋田城務之」。文永十二年(一九三五)四月十四日、正五、雜部第六十五に收めたり。

しんていしやうろんせん
新訂掌中時韻牋 一折　大槻　行

しんていきねん
神延紀年 ㊟六巻　石崎　文雅

しんていせいろしやくつ
新訂正魯齋亞國圖 ㊟一舖

しんていせう
心底抄 ㊟一巻　藤原　經朝

しんてうさいきよりつ
新朝裁許律 ㊟十巻

本書の梗概は延享三年丙寅(一七四六)の自序に明らかなり。今全文を掲ぐ。此の書は有德院殿御代始享保年中以來之御政務之御法度、並公事訴訟等に附、御老中御側衆より以て被仰出之趣、又寺社町御勘定之三奉行より、御老中并上河內守、久世大和守、水野和泉守、松平左近將監、及御側衆石馬兵庫頭、加納遠江守等を以て伺書御付札、此以後御法之御裁許之趣、此書に悉く記載之者也」とあり。十巻一册に作る。

しんてうたんじ
清朝探事 ㊟二巻

清國の風俗慣習等を詳錄圖示したるもの。年中行事、居室、冠服、飲食、開學、生誕、冠禮、婚禮、資客、羇旅、喪禮、祭禮、僧徒の十三目に分ち、假字書十三卷に作れり。本書は著者が職を長崎に奉ずるの際、屬僚を遣はし親しく清商に就て、見聞譚訊する所を筆錄したるものにして、卷末に關係者二十五人の姓名を列記したり。而して其の清商は江南浙江の人なれば、本書の記する所また其の方面に限れることを了すべきなし。著者の凡例に自記せり。寛政十一年己未(一四五九)の自跋、及び林述齋、黑澤惟直等の序、同十年申井曾弘の序等あり。本書或は「清俗紀聞」として行はるゝもあり。

◎申川忠英は士雄と字し、飛驒守と稱す。關東御郡代なり。著書には、御系譜略、撫政年表、椒庭記、舶來書目等あり。文政天保年代の人なり。

しんてうさいきよりつ
新朝裁許律 ㊟十巻

しんてうたんじ
清朝探事 ㊟二巻

享保の初萩生總七郎深見久夫の兩人が、彭城藤治右衞門を通詞として、清人朱楓章と質問應答したる筆記なり。問答は清朝の品物祭祀衣服唐好政治風俗小說書目等の事に關し、凡て二百條篇條あり。「清人問答覺書」と大同少異のものなり。

しんてんせう 神典鈔 一卷 小原 實風

古事記、日本書紀の二典によりて事實に註解を加へたるもの。假名交り文を以て簡易に記されたり。

◎小原實風は陸中稗貫郡谷內村の人にて、菊池正古に從ひ古學を修め、敬神尊皇の人たり。

しんとうせいかくのき 人頭生角之記 一卷

人頭に角の生じたるを記したるものを集錄せり。天保三年壬辰(一八四二)松田順之、同五年甲午田平格、同年安積艮齋、今川順、同七年丙申小玉烈齋等の漢文なり。「叢書斜本」第三十五に入れたり。

しんどうひようだん 神童憑談 四卷 平田 篤胤

仙童寅吉(高山嘉津間の怪談を筆記して、考案を附したるもの。寅吉は初め山崎美成の家に在りて、後には滯者の家に來り、長く逗留したりと云ふ。今本書は寅吉が仙人に連れられて、常陸國南鄕文といへる山に飛行したる事より、彼の山の天狗の有樣、また天狗の七生の舞に就ての詳細なる物語を筆錄し。第四卷は竹內健雄が記せる詳細なる寅吉の行狀記也。文政五年壬午(一八二二)に成りたり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

しんとうふ 神統譜 一卷

清和天皇より出でて德川十代將軍後明院家治までの系圖を記したるものなり。

しんとうよえい 親燈餘影 四卷

淡文の隨筆。典籍の辨證、名物の考訂、逸聞の抄錄、雜事の穿鑿等、此の小册子中に寬收載錄せられたり。文久二年壬戌(一八六二)の自序中に、殆んど二十年前の筆錄なる由を記せり。明治十五年版刻す。

◎鷲津宣光は尾張國丹羽郡丹羽村の人。字を重光といひ、九藏と稱し、穀堂と號す。文政八年十一月八日生る。年二十父の遺命を奉じて、游學し、伊勢に猪飼敬所に學び、江戶に昌平黌に入り。業成りて久留米藩に仕へ、後尾州藩に仕へ、侍讀、敎授、督學等となりて祿二百苞を受け、明治維新の際百苞を增さる。後、朝廷に徵されて權辨事に拜し、大學少丞に轉じ、登米縣知事となり、宣敎判官、權大法官、五等判事、司法少書記官、東京學士會員、司法權大書記官等に拜し、遂に勳五等從五位に敍せられ、明治十五年壬午(一八八二)二十月五日歿す、年五十八。谷申天王寺に葬る。

しんとくぐん 新獨吟 二册 寺田 重德

俳諧新獨吟を集めたるものにて、寬文十一年辛亥(一六七一)六月中旬成れり。

◎寺田重德は京の俳人にして、初め宗眸の門に入りて、後、信德の弟子となれり。著書は本書の外に、續獨吟集、塚、花見辨慶、類船等あり。

しんとくこうふ 愼德公譜 一卷

德川十二代將軍愼德院家慶一生間の年譜なり。

しんとくりやくじゆつしよう 神德略述頌 一卷 久保 季弦

神代の事績を諷誦すべく記述したるもの。七言九十六句に綴り二句毎に註釋を附して事實を詳說す

◎久保季弦の傳は「古道訓蒙頌」の下に出づ。

しんとちやうれいき 神都長嶺記 一卷 秦 定賢

伊勢國長嶺の地誌、風俗、沿革、故事等を記述したるもの。卷末に、右長嶺記は寬政四年壬子(一七九二)清書して勢宮崎文庫へ納め奉る由を記せり。今天保十三年度會常善の寫本による。著者秦定賢は宮掌大內人と記せり。

しんとぶのべん 神と武の辨 六卷

神道雜記。唯一宗源の說、神道幽妙不測の說、本朝

神武を以立說、被除の說、俗說辨の說等第一卷の目次なり。以下同種の問題數十項を問答的に平易假名文を以て論說す。天明七年丁未(一七八七)出版す。

しんにきやうじふはつしやうきやうるきぜんづ 清二京十八省疆域全圖 一折 東條 耕

清國の疆域地圖。京師、盛京、直隸、山東、山西、河南、江蘇、安徽、江西、浙江、福建、湖北、湖南、廣東、廣西、陝西、甘肅、四川、雲南、貴州の二京十八省を彩圖し、沿革、幅員等の略說を附したるなり。漢文にて記す。嘉永元年戊申(一八四八)の自序、同三年庚戌の出版に係る大折本なり。

◎東條耕の傳は「近代著述目錄後編」の下にあり。

しんにひやくるん 新二百韻 一卷 板本 其角

擧白、才丸、松濤、一晶等の二百韻にて、天和三年癸亥(一六八三)の撰集。近年發行の俳諧文庫第四編「其角全集」にも收む。

◎板本其角の傳は「句兄弟」の下にあり。

しんによくわん 眞如觀 一卷 僧 源信

佛法の第一義、眞如、實相、法界、法身、法性等の中、眞如に據つて、諸經論中に明かせる申道觀の義を說きたるもの。片假名交り文に記せり。元祿十五年壬午(一七〇二)京都にて出版す。

◎源信の傳は「往生要集」の下にあり。

しんにき 神農本草經 三卷 森 立之

唐醫書「神農本草經」を校刻して、其の中一卷を「神農本草經攷異」と題し。本書を摘抄して註解したるものなり。嘉永七年甲寅(一八五四)江戶侍醫倚藥兼醫學敎諭丹波元堅の序あり。

◎森立之の傳は「臆斷和名妓」の下にあり。

しんのみはしらのき 心御柱記 一卷

太宮柱の由來理由等を論述したるもの。大永二年壬午(一五二二)二月六日記すところなり。天和二年壬戌(一六八二)十二月二十一日、度會益弘寫本の奧書あり。著者は「大宮司伊長朝臣」と署名せり。

しんのみはしらのづくき 心御柱之圖口義 一卷 跡部 良顯

伊勢心御柱を圖して、略說したるもの。其の板は座右にかけて、日用心上の物々に突る工夫の爲めに自ら啓むるなりと云へり。今、伴部安崇の寫本による。

◎跡部良顯の傳は「三種祕傳考」の下にあり。

じんばいきようくわうせう 神拜恐惶鈔 一卷 多田 義俊

神拜の事、かしは手の事、振動の事、兩段再拜の事等を記したるもの。寬保元年辛酉(一七四一)四月の自序あり。

◎多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

じんばいでん 神拜傳 一卷 玉木 正英

神拝の次第を説明したるもの。神祇へ參詣して神前に進み拝する時、又自宅の祭神を拝する時、又自宅より遙拝する時等の拝禮次第を古書等を考へて説明せるなり。巻末に「右岡田磐齋翁の需に應じて、先師より聞る所を記す。健忘にして誤り多からんことを恐る穴賢享保十七年壬子(一七三二)二月玉木正英識記」とあり。

◎玉木正英の傳は「玉籤集」の下にあり。

じんばいほうへいしだい

神拝奉幣次第 寫一巻 山崎 嘉

垂加流の神拝奉幣の次第を詳記す。末に「右岡田磐齋翁の需に應じて、先師より聞るところを記す。健忘にして誤り多からん事を恐る穴賢享保十七年壬子(一七三九)二月玉木正英識記」とあり。

◎山崎嘉の傳は「垂加文集」の下にあり。

じんばうごもんしよ

神保古文書 寫一巻

讃州家士神保某の家に藏するところの家康時代以下の諸文書を輯收したるものなり。

じんばうそうくわんふ

神寶送官符 寫二巻

寛正三年壬午(一四六二)伊勢内宮神寶送太政官符と、應永二十六年己亥(一四一九)同外宮神寶送太政官符とを併せ寫したるもの。寛文四年甲辰(一六六四)同五年等の奥書あり。

じんばうづけいしんびしよ

神寶圖形神祕書 寫一巻

大中臣親俊

入咫鏡、草薙劍、八坂瓊曲玉の三神器及び天瓊瑞寶前に進み拝する時、又自宅の祭神を拝する時、又自宅より遙拝する時等の拝禮次第を古書等を考へて説明せるなり。巻末に「右岡田磐齋翁の需に應じて、先師より聞る所を記す。健忘にして誤り多からんことを恐る穴賢享保十七年壬子(一七三二)二月玉木正英識記」とあり。

◎玉木正英の傳は「玉籤集」の下にあり。

じんばいほうへいしだい

神拝奉幣次第 寫一巻 山崎 嘉

垂加流の神拝奉幣の次第を詳記す。末に「右岡田磐齋翁の需に應じて、先師より聞るところを記す。健忘にして誤り多からん事を恐る穴賢享保十七年壬子(一七三九)二月玉木正英識記」とあり。

◎山崎嘉の傳は「垂加文集」の下にあり。

じんばうごもんしよ

神保古文書 寫一巻

讃州家士神保某の家に藏するところの家康時代以下の諸文書を輯收したるものなり。

じんばうそうくわんふ

神寶送官符 寫二巻

寛正三年壬午(一四六二)伊勢内宮神寶送太政官符と、應永二十六年己亥(一四一九)同外宮神寶送太政官符とを併せ寫したるもの。寛文四年甲辰(一六六四)同五年等の奥書あり。

じんばうづけいしんびしよ

神寶圖形神祕書 寫一巻

大中臣親俊

新法暦に關する考究なり。巻一推日躔月數、推日躔法、推定氣用時及日出入晨昏分法。巻二推月離月數、推月離法、推太陰黄道緯度用數、推太陰黄緯度法、推太陰赤道緯度法、推太陰地半經差用數、推太陰地半經差法、推太陰出入時刻用數、推各方太陰出入時刻法。巻三推月食用數、同法、推月食帶食法、推各方月食用數、同法。巻四推日食用數、同法。巻五推土星用數、同法、推木星用數同法、推火星用數、同法、推金星用數、同法、推水星用數、同法、推五星伏見用數、同法。巻六推恒星用數、推恒星黄赤經緯度法、推歲差用數、同法。巻七京師實測二至考。京師實測二至外考。巻八江戸實測至分考。江戸實測至分外考。巻九各所實測躔離合考等の目より成る。天保十三年壬寅(一八四二)八月の跋、同九月の自序あり。

◎澁川景佑は助左衛門と稱し、元孚また滄洲と號す。幕府の天文方たり。別に三統略管見新修五星法、新修星法等の著あり。足立信頭は左內と稱して同じく天文方たり。本書は從二位行陰陽頭安倍朝臣晴親の校正するところにかゝる。

しんぱふれきしよぞくへん

新法暦書續編 寫三十巻

澁川景佑
足立信行

初編に續きて天文推歩を考究したるもの。巻一、二、三に數理總論。巻四、五に日躔數理。巻六、七、八に月離數理。巻九、十に交食數理。巻十一、十二に月食數理。巻十三、十四、十五、十六、十七に日食數理。巻十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四二十五に割圓八線表。巻二十六、二十七、二十八、二十九、三十に宴宇總論を掲げたり。弘化三年丙午(一八四六)八月、澁川景佑の附言あり。足立信行の事は「新暦法書」の下にあり。足立信行は久米之助と稱す。同天文方なり。本書は從二位行陰陽頭安倍朝臣晴雄の閲覧するところにして、天文方山路朝左衛門諸孝、同山路金之亟彰常の參考するところなり。

しんぱふれきしよへう

新法暦書表 十五巻 澁川景佑
足立信行

巻一、二、三に川表法。巻四、五に日躔表。巻六、七、八に月離數理。巻九、十に交食數理。巻十一、十二に月表。巻十三に水星表。巻十四、十五に金星表。巻十六に火星表。巻十七に木星表。巻十八、十九に土星表。巻二十に金星表。巻十三に水星表。巻十四、十五に八線對數表を掲げたり。編者、校者、閲者等は凡て「新法暦書續編」の下に同じ。

◎澁川景佑の傳は「新法暦書續編」の下に、足立信行の傳は「新法暦書」の下に、足立信頭の傳は「新法暦書續編」に傳す。

しんぱんうたざいもん

新版歌祭文 一巻 近松 半二

安永九年庚子(一七八〇)正月作の淨瑠璃本なり。著者近松半二の傳は「關取千兩幟」の下にあり。

しんぱんおほさかものがたり

新版大阪物語 二巻

絵入

本書は一名「大阪物語」といふ。該題下に解題せり。

しんぴきやうていいろく

深祕霍底錄 寫二十巻

見聞に從て、諸種の雜書を摘抄遍書したるもの。其の總目を列舉すれば、第一巻に土津靈神言行錄。第二巻に備陽少將學校之記、附學校之圖並鄉中へ令書。松平恒光廟之法令、附軍役付並鄉村令書。第三巻に井伊直幸廟之家記、同傳附石谷出入異見七箇條。第四巻に稻葉濃州鄉村令書、爾板介兵京都號令、御上洛之節御條目並御扶持方覺附御軍役付、公家衆へ被仰出御條目、御老中諸役人起請文前書。第五巻に大阪町中法令。第六、七之巻に延寶壬辰兩年松平伊豫守御手傳禁裏御造營之諸式、從禁裏本院諸奉行へ御賜之獻御重二十一代集巻頭之倭歌同花鳥之和歌色紙奥書附綺師之由緒。第八之巻に關ヶ原遠起之覺書。第九之巻に島原內徒略記並古戰目錄。附江城神劍之覺並羽柴之家系。第十巻に兵之巻附觀山子軍歌。第十一巻に奥平作州家臣敵討之覺附井伊掃部頭殿御介抱之始終、北越少將光長卿之葉臣小栗美作與余臣等對決之覺附黒田彦四郎物語。第十二、十三之巻に淺野內匠頭長矩家臣忠憤之事、附大高源五蔕知へ之文、横川勘兵衛知へ之文、寺坂吉右衛門筑州へ之狀但前後始終之記、醫世之詩歌、四十六人御裁許之覺、同義士之傳附附說重追悼之詩歌。野翁物語之部。第十五之巻に文之部八丸之記以下凡十六編。第十六之巻に詩之部。第十七之巻に倭歌之部、古今傳家、定家與家隆歌合。第十八之巻に順德院百首、清少納言枕島道記。第十九之巻に後水尾院御集抜書、元和年中御上洛御會、筑州品其由十景詩歌、中院通茲卿へ御加恩之文、久我中將殿より一條之姫宮へ贈書之歌、長嘯子七首雜題、貝つくしの歌、鎌倉之歌、寛永五年公宴御會和歌、正德元年濟御殿祝歌。第二十之巻に野翁閒書

しんばくひつわ

清舶筆話 寫五册 朝川 鼎

文化十二年乙亥(一八一五)十二月二十九日、南京永茂船、豆州下田港に漂着したる時、著者文墨の事を以て與吏となり、菲山に應接す。當時應對筆話を輯錄したるもの。但し漂客文字なく從て文雅のものにあらず、只政治凡俗等の事實上の筆記を主とするもの。

◎朝川鼎の傳は「仁義略說」の下にあり。

しんばつさんじんじふ

贅髮山人集 寫二十巻

著者の詩文集。擬風雅體一、擬古樂府四十四、五言古詩十三、五言律詩七十一、五言排律二、七言絶句一百〇八、七言律詩一、五言絶句二百三十二、巻七以下に賦一、辭一、序二十、記十七、紀行一、記事四、辨四、論三、說九、讀九、纂識碣銘八、銘三、贊三、途文一、對問一、策一、牋一、傳二、題跋三、擬文五、雜文三十、書牘四十等を收めたり。常南田保孝文藻の校するところなり。

◎諸葛鑑は下野の人、君測と字し、治郎大夫と稱し、琴堂また贅髮山人と號す。江戸に出で儒學者を以て知らる。上野輪王寺宮の侍讀となり、また姬路侯に仕ふ。其の著書には、讀論語、大學考、孝經考、墨子箋、焚書收蔵並附錄、唐詩格、郷飛略言、經學或問、印則、易筮探賾、平氏春秋、古辟考、李王文解、涵月樓雜記、政語、諸葛詩傳內外編等あり。文化七年庚午(一八一〇)十一月十七日歿す、年六十三。下谷養玉院に葬る。

しんばなつみ

新花摘 一册 谷口 蕪村

著者の發句集にて、門人月溪、自ら抽選して、蕪村自筆のまゝ、天明四年甲辰(一七八四)版刻したるものなり。近年發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉臺全集」の中にも收めたり。

◎谷口蕪村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

しんばひきつけ

神馬引付 一巻

長享、明應、文明年中に於ける內外太神宮、及び諸內諸社の馬匹を調査したるものなり。「群書類從」巻二十六、神祇部第二十六に收む。

しんばふひそうしふ

簸法祕要集 寫一巻

鍼法を說明せるもの。其の目を擧ぐれば、補瀉、押手、捻針、四季針、男女針、針折並不拔針、針立邊、針不立人付禁穴、經穴尺寸定法、髮際大推定法、針灸禁日付人神の事等なり。

しんぱふれきしよ

新法暦書 寫九巻

澁川景佑
足立信頭

之歌。第廿一之巻に京極備中守殿内通女追善歌、越臣渡逸九十郎配所紀行、禰尼了然聞書之歌等なり。編輯の年月等詳ならず。

しんぴつきうしき　信筆鳩識　三巻　前田　利保

和洋新奇の植物を掲げて、圖解したるものなり。天保十五年甲辰(一八四四)出版す。

◎前田利保の傳は「啓蒙蟲譜圖解」の下にあり。

しんぴつごはつかうき　宸筆御八講記　本一巻

天暦以下文安に至る宸筆御八講の記を集めたるもの。"續群書類從"巻七百五十八、釋家部第四十三にあり。次に掲ぐる乱行の「宸筆御八講部類」とは自ら別物なり。

しんぴつごはつかうぶるゐ　宸筆御八講部類　本一巻

村上天皇の天暦九年乙卯(一一六二五)以來、眞享三年丙寅(一三四六)に至る歴代禁中に於ての御八講御記を聚錄したるもの。巻末に「右一帖求所々書寫了享保十八年(一三九三)十一月十九日、參議右中將」として花押あり。

しんぴづせつ　秦皮圖說　本一冊　前田　利保

秦皮の種類を集めて圖說したるものなりの。天保九年戊戌(一四九八)の作にかかる。

◎前田利保の傳は「啓蒙蟲譜圖解」の下にあり。

しんぴつれきき　宸筆歴記　本三巻　花園天皇

一名を「花園院御記」といふ。延慶、文保を經て、元照三年辛酉(一九八一)に至る御略日記なり。

◎花園天皇は伏見帝の第二子にして、二條帝の禪を受けて卽位し給ふ。帝才學あり、和漢を兼ね、兼れて佛教に通じ給ふ。在位十一年にして、位を尊治親王(後醍醐天皇)に讓り、正慶中東國に幸し、後ち剃髪して遍行と號し、貞和四年戊子(一三〇八)御年五十三にて萩原仙洞に崩じ給ふ。

しんぴながたちとせそで　新雛形千歳袖　一巻

衣裳の袖模様の雛形を圖示せるもの、鳩龜寶船の讀、竹に虎ののしめ模様、かざふき小蝶小むぐらもどきの水引ぐさ、以下凡て六十四種を掲ぐ。序あり。"ばらな袴、たがふり袖の、うつくしく、染てみたきは、江戸つまや、島原風に、梅さくら、散し模様に高砂の、こゝうら模様、とりまぜて、四季折々の、なが"めにあかぬ千年の袖を、こゝにうつして、寛政十二年庚申(一七九二)〇〇)菊月」として二重圓千里の二字を以て印とせり。明治二十七年甲午(一八九四)東京博物館之を出版す。

しんひやくにんいつしゅ　新百人一首　一巻　足利　義尚

小倉の「百人一首」にならひて新に撰びたるもの。最初文武天皇の「龍田川もみぢみだれてながるめり、和たらばしき中や絶えなむ」より花園院の「あしはらやみだれしくにのかせをかへて、たみの草はもいまなびくなり」の最後に至れり。聖護院道興法親王の文明十五年癸卯(一四八三)の跋後に「小倉山しぐれふりにし古の、あとにもこゆることのはぞこれしとあり。本書の假名序文は「扶桑拾葉集」に出でたり。享和二年壬戌(一八〇二)橘千陰の摺逃せるもの多く世に行はる。同書には村田春海の跋もあり。

◎足利義尚は將軍義政の子にして、寛正六年生る。初め義熙といふ。後父の職を襲ぎ、文明五年正五位下に敍し、征討大將軍に拜す。足利九代將軍是れなり。同七年正四位下參議に敍任し、九年正三位に昇り、夙に文學を好み、軍議の間にあるも暇あれば經史を講ぜしむ、また和歌を善くし、書法を習ひ、射御を試む。實に足利十五世中最も文武兼備を以て稱せらる。後土御門天皇の長享元年佐々木高頼の亂に臨み、同二年名を義尚と改め、同三年己酉(一四八九)陣中に薨ず年二十五。紫徳院と號し太政大臣を贈らる。

しんひやくにんいつしゅ　新百人一首　二冊　重　以

著者の俳諧集にて、寛文十一年辛亥(一六七一)正月編輯したるものなり。山岡元隣の跋あり。

しんひやくものがたり　新百物語　五巻

世間の因縁話を圖入假名書に物して兒女の讀物としたるなり。もと一百話を撰集する筈なりしも讀破正しきものをとて撰擇したるため一百には足らずといへり。しかの怪案附り尺八の曳、夢の通路附りれやのあやしみ以下數十あり。元禄五年壬申(一六九二)洛下俳林子の自序あり。

じんぷういだん　神風遺談　三巻　菊池寛三郎

弘安四年蒙古來寇の事に關する諸記事を集錄したる者。蒙古主忽必烈我皇國を窺窬する企の事より、其の顚末を記し、遂に伊勢風社を營繕して風宮と號し來る事にまで及べり。圖を插入し、漢字には振假名を加へて簡明に記せり。插畫は永仁元年癸巳の作、渡邊奚兵衛、立原朴二郎の模畫、竹崎五郎兵衛の繪卷、日蓮註畫讃天文五年丙申若狹遠敷郡長源寺に於て作るところの畫圖等を寫して插入したりといふ。安政三年丙辰(一八五六)出版せり。著者菊池寛三郎は水戸の人なり。

じんぷういちらん　仁風一覽　二巻

享保十七年壬子(一七三二)國、四國、五畿内等洪水にて飢渴に及びたる時、來行救濟の觸書及び金米を義捐して其の困窮者を救ひたるもの、人名を錄し併せて其の受賞の事をも記したり。享保十九年の跋を附して大阪業書店の發行する所なり。

じんぷうき　神風記　五巻　疋田　以正

本書は神道及び神事に關する古說を說きたるものなり。假字書なり。著者疋田以正は通稱を小右衛門と云へり。今詳傳を得ず。

じんぷうしふらん　仁風集覽　五巻　疋田　以正

慶應二年丙寅(一八六六)八月の大風雨より、翌三年に及び、振救事實等を記述したるもの、巻首には先年來の賑饑事績、義捐人名等を掲げたり。

じんぷうべんらん　仁風便覽　一巻　平塚　清影

仁孝天皇の天保四年癸巳(一八三三)の饑饉により て竪五年の困窮に際し、金穀を義捐したる人々の名を列擧したるものなり。同八年大阪の書肆樹下定賢跋を附して發行す。

しんぷうわき　神風和記　本三巻　卜部　慈遍

神道大意、天地開闢、天神七代、地神五代、兩宮鎭座、祖神大分、神態忌物、尊神緣起、神佛同異、神佛誓別、十段要文等の目につきて略說す。一名を「豐葦原神風和記」といふ。後村上天皇の興國元年庚辰(一三四〇)本書を撰みて上れり。

◎卜部慈遍は、從四位右京大夫卜部宿禰兼名の長子にして、吉田兼好の兄なり。南朝に伺候して大僧正たり。別著に「祭事本紀玄義」あり。

しんぷうき　神風記　五巻　疋田　以正

本書は神道及び神事に關する古說を說きたるものなり。假字書なり。著者疋田以正は通稱を小右衛門と云へり。今詳傳を得ず。

じんぷうしふらん　仁風集覽　一巻　平塚　清影

慶應二年丙寅(一八六六)八月の大風雨より、翌三年に及び、振救事實等を記述したるもの、巻首には先年來の賑饑事績、義捐人名等を掲げたり。

じんぷうべんらん　仁風便覽　一巻

仁孝天皇の天保四年癸巳(一八三三)の饑饉により て竪五年の困窮に際し、金穀を義捐したる人々の名を列擧したるものなり。同八年大阪の書肆樹下定賢跋を附して發行す。

しんぷうわき　神風和記　本三巻　卜部　慈遍

神道大意、天地開闢、天神七代、地神五代、兩宮鎭座、祖神大分、神態忌物、尊神緣起、神佛同異、神佛誓別、十段要文等の目につきて略說す。一名を「豐葦原神風和記」といふ。後村上天皇の興國元年庚辰(一三四〇)本書を撰みて上れり。

◎卜部慈遍は、從四位右京大夫卜部宿禰兼名の長子にして、吉田兼好の兄なり。南朝に伺候して大僧正たり。別著に「祭事本紀玄義」あり。

しんぷうき　神風記　本一巻

記、諸社記、諸寺院記、松本城地形圖數記等を掲げ、第二十四卷に、評論御裁許記、寛文五年乙巳(一六六五)より、享保二年丁酉(一七一七)に至る十八箇所を擧げ、第二十五卷より二十九卷までに松本領諸件別記、第三十卷に信濃國名所和歌寄、第三十一卷、三十二卷道程記に江戸其の他への道程を示せり。三十二卷を三十三冊に寫傳せり。享保九年甲辰(一七二四)水野隼人正源忠恒の序及重武、弘篤の跋あり。忠恒は享保中松本の城主たりし人なり。其の序を按ずるに、父忠幹、嘗て二臣に命じて、松本の地理、事實、民政、典故、一國の大綱、傳聞等を輯錄せしめんとして、未だ成らざるに卒去したれば、忠恒更に其の志を繼ぎて、二臣鈴木重武、三井弘篤をして之れを成功せしめたりといふ。本書は明治十七年吟天社より印行したるものあるが、今見る所は、內閣に傳存せる舊本文庫の本なり。

◎水野忠恒は信州松本の領主にして、源姓を用ひ、隼人正と稱す。著書には「武功記」の別書あり。

しんぶにん

新補任　寫一卷

一名「新家傳」の下に解題したれば、就て見るべし。

しんぶんかんめいぶつごせう

清文鑑名物語抄　寫六卷

高橋　景保

「清文鑑」に載きて、其の中の名物語を抄出し、「清文鑑」の注文、滿文なるを辭して各名物語下に漢文にて割註せり。凡例中に冠に「清文鑑」に原き、滿文諸書を校讐し、新に「滿文雜部」を編述して上りたる由もあり。卷の一に「天文類」より「臣宰類」に至る八類。卷の二に「非務類」より「鞍輿類」に至る。十三類。卷の三に「人類」より「部院類」に至る十九類。卷の四に「室家類」より「器用類」より「旌扉帳房類」に至る二十一類。卷の五に「草類」より「蟲類」に至る二十類を收めたり。凡例中に乙酉稿を起し、今茲丁亥卒業する由あれど年號を記さず。

◎高橋景保の傳記は「日本記事譯抄」の下にあり。

しんぺいみいづかう

神兵稜威考　一卷　井上　淑蔭

神功皇后の三韓御征伐の事を記述したるもの。安政六年己未(一八五九)利根川畿、井上文雄の跋を附し、慶應二年丙寅(一八六六)刊行せり。

◎井上淑蔭は藤原氏武藏國、入間郡石井の里の人、通稱を武藏といひ、樓亭と號す。井上文雄の門に入りて國學を研究し、業成りて明治の初年大學教授となる。其の著書には伊勢二宮啻、歷史通覽、活語一卷ありて、文化三年(一八〇六)に編集せらる。新論、神典皇統、右上木、樓亭隨筆、造化考、生死名義考、一弦考等あり。

しんぺいさんぱふ

神壁算法　二卷

明和三年丙戌(一七六六)以後諸國各神社給馬堂に掲げられたる算題答術を集錄したるもの。源誠美の序文中に「圀」其書「雖」非二日用之術一皆頭乘尾除元算之法也。何得レ不レ學歟之筌蹄一哉」と云へり。寛政六年己寅(一七九四)利根川畿、井上文雄の跋を附し、慶應二年丙寅(一八六六)刊行せり。

◎井上淑蔭は藤原氏武藏國、入間郡石井の里の人、通稱を武藏といひ、樓亭と號す。井上文雄の門に入りて國學を研究し、業成りて明治の初年大學教授となる。其の著書には伊勢二宮啻、歷史通覽、活語一卷ありて、文化三年(一八〇六)に編集せらる。新論、神典皇統、右上木、樓亭隨筆、造化考、生死名義考、一弦考等あり。

しんぺいさんぱふ

神壁算法　二卷

明和三年丙戌(一七六六)以後諸國各神社給馬堂に掲げられたる算題答術を集錄したるもの。源誠美の序文中に「圀」其書「雖」非二日用之術一皆頭乘尾除元算之法也。何得レ不レ學歟之筌蹄一哉」と云へり。寛政六年己未(一七九九)利根川畿、井上文雄の跋を附し、慶應二年丙寅(一八六六)刊行せり。

◎藤田嘉言の傳は「再訂算法」の下にあり。

しんぺつき

神別記　寫十卷

天神別記、陰陽別記、天祖別記、黃泉別記、祓除別記、劍玉別記、磐戸別記、天孫別記、彈礒別記、大蛇別記、海宮別記、系圖別記、遷都別記、寶算別記等を記せり。「群書一覽」に曰く「御室書目に日本紀私記に、天皇天孫の事ども此書にありとしるせるよし見えたり。されども此書は久しく亡びて傳はらざるを、今世間に流布する寫本は、僞書の甚しきものにして、殆ど所の事どもともより無稽の言なり」云云。著者を忌部宿禰濱成といふは非なり。流傳の僞書なることは本居宣長以下諸家の論ずる所也。

しんぺんあひづふどき

新編會津風土記　寫百二十卷　松平　容衆

保科正之の「會津風土記」を基として、會津四郡(會津、耶麻、大沼、河沼)の地理に關する事項を編雜したるもの。分類門を、界域、山川等より、祭祀、褒善等に至る十六門に分ち、且、古器の圖、古文書の謄寫等殆と遺漏するものなし。文化六年己巳(一八〇九)三月の自序あり。曰く「享和三年、有命于先大父就先祖正之所上風土記、而重加蒐輯、國誌記之。蓋將偏編郡國風土記也。初正之深嘆風土記殘闕、自撰會津風土記、未及酬其志而沒。先大父受命編摩三年圀臣田中玄宰、實左右之、書已就緒、未及成而捐館、先人又繼之、未及進呈、而易簀、玄宰亦就木矣。容衆幼沖、謹繕寫裝潢上之凡百餘卷、名曰新編會津風土記」と。同年九月これを獻ず。其の功の著しきを以て、營中に召され、白銀若干を賜りしといふ。著者松平容衆は會津の藩主にして、金之助と稱せり。

しんぺんあひづふどきせう

新編會津風土記抄　寫一卷

新編會津風土記の中より抄出したるものにして、延喜式の內の伊佐須美神社に關する記事なり。

しんぺんいせめいしよしふいしふ

新編伊勢名所拾遺集　二卷　龍　貞玄

上卷に名所九十八箇所を擧げ、下卷に七十三箇所を擧げたり。その中には志摩國の名所をも入れたり。そは同國は在昔伊勢と分割せざりしに由れり。名所は地名のいろは順に列記す。目錄中、伊勢十三郡の下に、「割飯高、安濃二郡、置南北東西二郡、因並爲十五郡」と註せり。延寶七年己未(一六七九)龍尚舍の漢文序あり。「余同姓龍貞玄新編伊勢名所拾遺集、以睨我神氏、貞玄就諸古典惹章、深憤夫名區之恍惚平不可視者、撮取萬葉以降二十一代敕撰和歌集、及以國史家牒、神宮祕錄、雖記中詠和歌而著明以表檢之」といへり。二卷四冊に版行す。著者龍貞玄は、伊勢外宮の祠官なり。

しんぺんえうがくしゐん

新編幼學詩韻　四卷　東條　信耕

四季に分ち各題を設けて、各韻字本仄を示して更に略解を加へたり。和漢諸字の作例を擧ぐるもの多し。題數凡て二百五題、詩六百五十九首あり。天保十五年甲辰(一八四四)秋七月版刻するところの二冊の小册子なり。

◎東條信耕の傳は「近代著述目錄後編」の下にあり。

しんぺんかまくらし

新編鎌倉志　八卷　河井　恒久

鎌倉の詳細なる地誌なり。首卷に鎌倉の大意を論じ、鶴ヶ岡の來由を記し、東北は蛇谷に終り、二卷は鶴岡の東鳥舍原に始り、牛蒡谷に終り、三卷は鶴岡四鐵井に始り、洲崎に終り、四卷鶴岡西南星月夜井に始り、江島に終り、卷五は鶴岡西南小町に始り、佐介原に始り、梶原村に終り、卷六は鶴岡東南小町に始り、金澤に終る。全部八卷、皆鶴岡八幡宮を中心とし、一日の行程を採りて一册宛に作れり。記すところは總て二百四十二條あり。水戸相公德川光圀が、河井恒久、松村清之、力石忠一等に命じて撰ばしむる所。真享元年甲子(一六八四)力石忠一の序、大明東皐心越倚の序、同乙丑鶴山野節の序等あり。第一册序文は凡例目錄のみを掲げたり。著者河井恒久は水戸の藩臣にして、字を友水といふ。

しんぺんくわうしふじしよたいぜん

新編廣集字書大全　一册

普通の漢字彙なり。「廣集字書」を增補したるより、更に新編の二字を加へたるなり。

しんぺんこあふふ

新編古押譜　七卷　松崎　祐之

古人の花押を模寫集錄したるもの。親王以下姓氏を以て類別し、年代官位生卒等を附記したり。正德五年乙未(一七一五)の自序を載す。誤に掲出せる「古押譜」六卷と大同小異なるより見れば、本書は蓋し、增訂して「新編」の二字を冠し、年時を異にして出版したるものなるべし。

◎松崎祐之の傳は「古押譜」の下にあり。

しんぺんこはいじゆつ

新編孤背術　一卷　岩田　廣成

圓理孤背等の算法を記したる書なり。諸雇數を求むること、四十乘級に至りたるは計算の勉めたること知るべし。全卷を觀るに、當時を以てすれば、甚だ古風と謂ふべし。是の故に世人之れを稱するもの少し。天保二年辛卯(一八四一)出版せらる。著者岩田廣成は權左衞門と稱す。武州の人なり。

しんぺんさがみのくにふどきかう

新編相模國風土記稿　百二十五卷

「新編武藏國風土記稿」に擅て成れるもの。同じく德川幕府の儒臣大學頭林衡總裁となりて、昌平黌地理局に於て編輯したるものなり。「新編武藏國風土記稿」の竣功に續きて起稿し、天保十一年庚子(一八四〇)成稿完了す。今其の大綱を順記すれば、第一卷圖說、第二卷總說沿革、第三卷山川附名所國產、第四卷より第十一卷に至り鎌倉郡、第十二卷より第二十一卷に至り足柄上郡、第二十二卷より第三十八卷に至り足柄下郡、第三十九卷より第四十一卷に至り淘綾郡、第四十二卷より第五十三卷に至り大住郡、第五十四卷より第五十八卷に至り愛甲郡、第五十九卷より第六十八卷に至り高座郡、第

六十九巻より第百六巻に至り鎌倉郡、第百七巻より第百十五巻に至り三浦郡、第百十六巻より第百二十五巻に至り津久井縣、と為す。首に凡例並に前後編纂に與かりし人名を擧げ、次に目錄を載たり。

しんぺんさがみふどき　新編相模風土記　百二十六巻　間宮　士信

幕府の命を受け、「武藏國風土記」に續き天保十二年辛丑(二五〇一)成稿したる相模國地誌なり。編纂に關係あるものは、士信の外二十餘名あり。近年活刷に附して行はる。

◎間宮士信のことは「小田原編年錄」の下にあり。

しんぺんしじふはつたなばながた　新編四十八棚雛形　一巻

通り棚、ちがい棚等より、呉服棚、佛棚等に至る、四十八種の棚の雛形を圖示したるものなり。寛文十三年癸丑(一六七三)刊行す。

しんぺんしょこくじやうしゆき　新編諸國城主記　缺七巻　小野　高尚

全國の城主に關する事を錄ぐ。寛保二年壬戌(一七四二)この自序に、「城主記、蓋編圭圖合結之二書、行于世、而率強錯亂、不足徵、高尚講武之暇、參考家乘實記、删僞正惑、國郡之興廢與諸家之盛衰兼錄、而廢異聞雜、冠以新編」とあり。寛保壬戌以後の城主を記せるは、後人の記入したるものなるべし。

◎小野高尚の傳記は「古今類聚名譯傳」の下にあり

しんぺんたいへいねんぺうこうき　新編泰平年表後記　缺七巻

安政五年戊午(二八五八)より、萬延元年庚申(二八六〇)に至る武家の年表なり。

しんぺんだいぼさつぎやうじつでん　新變大菩薩行實傳　二巻　僧　行智

役行者小角の傳記なり。著者の跋に依るに、本書は「高祖本紀」、雲居寺淨諦の「修驗名稱源義」及び延元進奏の「當山祕抄」(「深密抄」と號す)の三部に基き、國史以下の諸書並に小角の諸傳記を參考校正して之れを集錄し、事實の疑はしきもの、繆老、卓池、溺古、盤守、玄蛙、桐栖、窶松、豪山、風年代の顚錯せるものは凡て省除したりと云ふ。一例を擧ぐれば小角入唐の事及び唐にありて道昭に遭ひし傳說の如きは、斷じて無稽の妄說となせり。この年小角は赦して神變大菩薩の耶、路宅、圭雨、朱純、魯隱、井里、混中、爲笠、禾葉、少翁、一飛、眞貫、眞洞、靜管、對山、諸物等四十一人四十六編の文を收めたり。文政三年庚辰(一八二〇)廣島夏雲の序、同八年乙酉爲笠の跋あり。

◎行智の傳は「悉曇字記眞釋」の下にあり。

しんぺんちくぐいかう　新編竹米考　缺一巻　小森　辰伯

和漢の竹の實に關するものの。卽ち閨更、椶太、曉窗、蕪村、士朗、葛里、敲水、重厚、乙二、巢丸、道彦、成美、葛里、月居、椿堂、雪雄、號元律師の「高祖本紀」、雲居寺淨諦の「修驗名稱源義」及び延元進奏の「當山祕抄」(「深密抄」と號す)の三部に基き、國史以下の諸書並に小角の諸傳記を參考校正して之れを集錄し、事實の疑はしきもの、繆老、卓池、溺古、盤守、玄蛙、桐栖、窶松、豪山、風年代の顚錯せるものは凡て省除したりと云ふ。一例を擧ぐれば小角入唐の事及び唐にありて道昭に遭ひし傳說の如きは、斷じて無稽の妄說となせり。この年小角は赦して神變大菩薩の耶、路宅、圭雨、朱純、魯隱、井里、混中、爲笠、禾葉、少翁、一飛、眞貫、眞洞、靜管、對山、諸物等四十一人四十六編の文を收めたり。文政三年庚辰(一八二〇)廣島夏雲の序、同八年乙酉爲笠の跋あり。

◎行智の傳は「悉曇字記眞釋」の下にあり。

しんぺんぢんかうき　新編塵劫記　缺一巻　村田　春門

「風俗文選」以後、諸家の俳文を編輯したるもの。卽ち閨更、椶太、曉窗、蕪村、士朗、葛里、敲水、重厚、乙二、巢丸、道彦、成美、葛里、月居、椿堂、雪雄、篤老、卓池、溺古、盤守、玄蛙、桐栖、窶松、豪山、風耶、路宅、圭雨、朱純、魯隱、井里、混中、爲笠、禾葉、少翁、一飛、眞貫、眞洞、靜管、對山、諸物等四十一人四十六編の文を收めたり。文政三年庚辰(一八二〇)廣島夏雲の序、同八年乙酉爲笠の跋あり。

◎村田春門は浪花の人、初め一柳亘樹といひ、郁子園、多豆能舍等の號あり。俳號を蕪庵盤守といふ。鈴廼舍門人中の開人にして、江戸また浪華等に古學詠歌等を教授す。天保七年丙申(一八三六)十一月二十四日歿せり。

しんぺんひながた　新編雛形　一巻　瀨河　政重

宮社造營の法を說明圖示したるもの。花表、四足花表、一間社向作、一間社流作、三間社、五間社、拜殿、鐘樓、樓門、總門、水門玉垣、四足門、廐等

の網につき各若干目に分ちて巨細に其の作法を示す。明曆元年乙未(一六五五)の自序自跋あり。同年出版。大形の册に作れり。著者瀨河政重は武藏國豐島郡江府の人なり。

しんぺんぶけひながた　新編武家雛形　一巻

武家造築の諸法を詳しく說明圖解したるもの。上土門、棟門、藥醫門、向唐門、不唐門、向屏重門、平屏重門、舞臺、鞠懸、廣間、納戸構、廐等を掲ぐ。自序跋あれど姓名も年月もなし。序中に「雖予不敏而不忍壞箕裘之業、纂會諸家之說、而折其衷、善者取之、惡者捨之、以既著當形圖一卷、今又撰書一卷、名曰武家雛形、庶幾爲初學者之階梯云」とあり。

しんぺんふしやうしふ　新編扶桑拾葉集　二十三巻　石川　四

此の書は原名「雞窗全集」の表題下に解題したり。

しんぺんむさしのくにふどきかう　新編武藏國風土記稿　缺二百六十五巻　山岡　浚明

本書には巻數を分たざれど「武藏志料目錄いろは分」といふ見れば、巻の一神社、寺院。巻の二河、河原、井、池、沼、浦、島、江戸賦。巻の三關屋、橋、塚、森、川。巻の四雜部。巻の五城郭。巻の六、巻の七人物。巻の八郡村記、但し二十四郡之內十二郡村名を註せずと記載せり。要するに、本書は闕漏せる部分も多けれど、材料比較的に豐富なれど、斯學の參考には適當なるべし。

◎山岡浚明の傳記は「紫のゆかり」の下にあり。

しんぺんむさしのくにふどきかう　新編武藏國風土記稿　缺二百六十五巻

詳細なる武藏全國の風土記、出雲國風土記、筑紫國風土記、常陸國風土記、攝津國風土記、肥前國風土記、豐後國風土記、播磨國風土記、伊豫國

盛宗藏本、記傳筆令膽寫畢、異日可備地理之參考者也」といへり。

しんぽうせう　神鳳抄　一卷

伊勢太神宮御料及び諸國の神戸、御厨、御園、神田、名田等のことを記したるもの。まゝ誤脫ありて不明の箇所あり。本書一說には「神鳳抄」かといへれど詳ならず。「群書類從」に收めたり。

しんぽんそうりんしふ　眞本叢林集　六卷　川那邊慧空

別解「叢林集」(元祿十一年の著)九卷中の義集を校訂して、明治十三年庚辰(二五四〇)九月出版したるものなり。

◎川那邊慧空(僧慧空)の傳は「叢林集」の下にあり

しんみち　新道　一册　池西　言水

著者の俳諧集なり。編述の年代は明記せざれど、延寶比のものなるべし。

◎池西言水の傳記は「東日記」の下にあり。

しんみなと　新湊　一册　杏醉

歌仙發句の集にて給入に作れり。元祿五年壬申(二三五二)の編なり。著者杏醉のことは「京の曙」の下にあり。

しんみらうじむかしむかしものがたり　新見老人昔々物語　二卷　新見正朝

一名「八十翁書譜」の下に解題し、著者の傳も同下に掲出せり。

しんみんかんげつしふ　新民鑑月集　㊟三卷　松浦　貞家

農業の順序大畧を述べたるもの。永祿七年甲子(二二二四)伊藤宇和島領主土居虎松丸清良の問に答へたるものなりといふ。

◎松浦貞家は伊藤國宇和郡立間の城主土居式部大輔清良の家臣なり。通稱を傳次といひ。入道して宗安といふ。永祿(二二一八—二二二九)年間、群雄割據の世にありて、獨り心を經濟、農業に委ね、研究顧る周到し、遂に農學者を以て世に知らる。

しんみんしゆち　親民須知　一卷

田賦租稅の事、耕作氣節の事等を論述したるもの。漢文にて記されたり。

じんみんほじよ　人民補助　㊟一卷

承應三年甲午(二三一四)甲斐國巨摩郡玉幡村北山川除破損修繕工事に關する同村の協議約書なり。

じんむえんかくかう　神武沿革考　二卷

我が神代以來、神武の國なるもの。「伊吹能舍著撰書目」には「皇國は萬國に卓越たる武國にして、神代は更なり、人世となりても、武を專要として、國家を治め給ひし、中古より儒佛の道渡りて、文を尊び武を卑められしより、亂臣賊子の多く出來つる由を歎かれしは實に然る非なるに就て、歷史を始め、軍書記錄の類によりて、神武の道の沿革を評論したるものなりといへり。

◎沿川好尙は新谷の藩士にて、平田篤胤の實弟なり。和學に達せり。本書の外に、癡愚冤魂、鄭子產傳、抱朴子集說、稽古要略等の著あり。

じんむきやうほしふく　神武紀享保集錄　㊟一卷

神武紀を集解せるもの享保年中に成りしこと名の示すが如し。片假名交り文にて記されたり。山崎垂加派の人の作なるべしといふ。

じんむきしふげ　神武紀集解　一卷　龍　熙近

日本紀の中、神武紀を解釋したるもの。漢籍等を引用して文字の出所、引用の出據等を明にせり。漢文にて記す。延寶二年甲寅(二三三四)の自序あり。

◎龍熙近の傳は「古語拾遺抄」の下に出づ。

じんむきじゆんかうろじべん　神武紀巡幸路次辨　㊟一卷

日本書紀の中なる神武天皇東征の文を批難して御巡幸路次第を考辨したるものなり。

じんむきちう　神武紀註　㊟一卷　鴨　祐之

日本書紀の中なる神武紀に漢文割註を入れたるも

のなり。

◎鴨祐之の傳は「祭事記」の下に出づ。

じんむきひかい　神武紀秘解　㊟七册　平　孟雅

日本紀の中、神武の御記を抄して解釋したるもの。假名交り文にて記せり。天明五年乙巳(二四四五)の作。

じんむけんかうろく　神武權衡錄　㊟六卷　松下　郡高

神儒佛三道の事を論評したる或問體假字文の書なり。即ち三道共に勸善懲惡の一致に歸すと雖も、國によりて其の適否あり。佛敎の如きは我國の風俗に適當せず、且つ其の世敎に利益あらざることを論じ、要するに我邦は神武以來固有の文武兩道にて事足ることを辨じたるものなり。著者松下郡高は兵學者なり。

しんむしやものがたり　新武者物語　八卷

武士の進退鍛錬の名もあるものを撰集す。大江元就元日祝儀、丹波長秀貢於鷺森等より、赤井爲夜討、狐取鶴、關案侍の事等に至る凡て一百二十八項、給入假名書の讀物なり。一名を「近代武家雜談」といふ。是よりさきに松田一樂入道の「武者物語」ある故「新」字を冠したるなり。洛北畠山雲關の敗に城陷の條堂の作のごとくいへど其の人に未だ詳ならず。東山天皇の寶永六年己丑(二三六九)出版したるものなり。

じんむてんわうきかうぎ　神武天皇紀講義　一卷　久保　季茲

神武紀を註釋講解したるもの。最も周到せる註解なり。

◎久保季茲の傳は「古道圖蒙昧」の下にあり

じんむのまきもしほくさ　神武卷藻鹽草　一卷　玉木　正英

山崎垂加の說に據りて、「日本書紀」神武卷を註釋したるもの。元文四年己未(二三九九)に成る。

◎玉木正英の傳は「玉籤集」の下にあり。

じんむふるうへん　神武不穀篇　㊟三册　松井　暉

天命時中要道卜筮知來之準則より、皇國武を以て主義とし、大を以て貴位とする事に至る三十條項より成る。文武に關する和漢の雜說を引徵して皇國神武の精神を說明したるもの。

◎松井暉の傳は「屯山石初編」の下にあり。

しんめいえきそく　神名役錄　㊟三卷　田中　輝義

寶曆二年壬申(二四一二)來の序中に「濱濱紀を搜見に、菱東州陸奧城の西二十五里に、正八幡宮の鎭社あり、往昔天祖より人皇に始神武卽位庚城を誅戮し、天下を治めて、七十代後冷泉院天喜五年丁酉に至て、千六百四十一年の間、經世の吉凶、日月星辰、風雨震動、天變死生、損亡委記を以て神名役錄と號す一軸あり」云々といへり。天祖辨天神地祇の歲數に始り、後冷泉院の天喜四年丙申(一七一六)に至る表に般若仁王經を書し、裏に跡過年の變を記錄したるもの。文和三年甲午(二〇一四)の作也。

◎田中輝義は奧州會津塔寺村八幡宮の祠官なり。本書の末に「文和三年甲午(二〇一四)從五位下宮司戶內兵部少輔、田中氏源朝臣輝義」と記せり。

じんめいかう　人名考　一卷　新井　君美

本邦人名の揃由に就て考論したるもの。漢字を用ひ來りてより、或は字の音字を以てし、或は其の訓を以てし、或は音訓を併せ用ふる等、各人其の意の儘に使用しければ、さきに君命によりて人名の字を「給爵抄」「節用集」「新續錄圖」「鍛冶銘字抄」等より、抄錄して上り、別に私考ありて家に藏めたるを更に上進したる由あり。「百家說林」第九卷にも收めたり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

じんめいかせう　人名歌抄　一卷　清水　濱臣

人名を詠み入れたる和歌を古書より撰集したるもの。凡そ八十首あり。

◎清水濱臣の傳は「伊勢物語添註」の下にあり。

しんめいかせうでん　清名家小傳　四卷　村瀨　季德

名の如く清朝名家の傳記。金彥章、錢謙益、龔鼎孳等より唐楚賓、王晫、何焯等に至る本傳三十七人附傳三十餘人あり。漢文にて記され每傳に短評を附

したり。文政二年己卯(一八一九)二月、古賀煜の序を載す。

◎村瀬季徳は尾張の人。初め田邊晉二郎と稱し、後諱軸と改名し、石庵と號す季徳は其の字なり。夙に漢學に志し、遂に儒者を以て知らる。著書は本書の外に纘を左傳合案、史漢合解、國策論文等あり。歿年未だ詳ならず。

じんめいき　神名記　三巻

全國神名を列載したるもの。延喜式中の第八、第九、第十の三卷を抄出して此の名を與へたるものにて、所謂京版これなり。卷末に「祝詞の卷」と題して諸祭の祝詞を收む。最末に延長五年丁亥(一五八七)十二月二十六日、藤原忠平、藤原清貫、大中臣安則、伴久永、阿刀忠行等の氏名位階を書し、又文龜三年癸亥(一二六三)十二月二十六日、卜部兼倶の名を書せり。

じんめいき　神名記　木一巻

天神七代地神五代の御名御姓を記し併せて人皇百十九代後桃園天皇に至る歴代の在位御年齢等を記したるもの。最後の項「後桃園王辰安永九年在位誌」と記されたれば當年の作なるべし。

じんめいきいほ　神名記遺補　木一巻

神名記中伊勢國の部の殘闕本なり。凡て同國内六郡百〇七座の神名を列記せり。

しんめいきやう　神明鏡　木二巻

神武天皇より第百四代後花園天皇の永享六年甲寅(一四三四)に至る略記。事項は歴代天皇の下に繫け記したり。佛者の手に成りたるものなるべし。卷尾に「天文九年庚子(一五四〇)醍月十五日於松庵書之」とあり。

じんめいしき　校神名式　木一巻　鈴木　重胤

延喜式なる神名帳を校正書入したるものなり。二十餘種の異本を參考せりといふ。弘化五年戊申(一八四八)著さる。

◎鈴木重胤の傳は「調の慶幸」の下にあり。

しんめいしよえうたあはせ　新名所繪歌合　一巻

永仁三年乙未(一二九五)春夏秋冬戀雜の諸題にて、神祇懷大副大中臣定忠、太神宮一禰宜荒木田神主成言、權禰宜荒木田神主延行その他等の歌合なり。「群書類從」卷二百〇四、和歌部第五十九に收めたり。

しんめいまふでうさうき　神明相撲闘爭記　二巻

江戸芝神明境内に於て、火消人足惣の中め組壯夫と、力士水引清五郎の大闘爭ありし顛末を記し、當時の名泰行曲瀬甲州の明斷に至るまでを記す。編者及び年代等詳ならず。

しんめいだいわかしふ　新明題和歌集　十巻

近體和歌を攬集す。後水尾院、後西院、仙洞、道晃親王、智仁親王、嘉然親王、通村、雅章、通茂、基福、資慶、基熙、後廣、意光、雅直、その他數十家のを列擧せり。

じんめいしき　神名帳考證　木八巻　度會　延經

延喜式の神名帳を考證したるもの。卷末に記あり。曰く「延喜式神名帳考證者、度會延經神主之所撰也、神主善潛思於此者三十年、未脫稾而捐館、先考得其遺稿考訂之、未收全功亦易貶、手澤猶存、不忍附蠹、於是謄淨寫之、壬子秋七月初八起筆、癸丑春三月念朔功、是雖文字有重復顚倒、無力更定、姑仍本書之舊、而繕寫之、收候後賢之正焉、享保十八歳次癸丑(一七三三)三月二十七日、桑原弘世謹書」と。其の由來を知るべきなり。全卷二冊に作らる。正徳三年癸巳(一七一三)閏五月朔日、禰宜度會智彦の序あり。本書は神名帳考證の最も初めに成れるものなり。諸國のこれより後に及ぼしたるものなり。

◎度會延經の傳は「伊勢國神名帳考證」の下にあり

じんめいちやうかうしやう　神名帳考證　木八巻　伴　信友

延喜式の中、卷九、卷十の神名帳を考證したるもの。證徴の諸書の原文を擧げて更に著者の案を加へたり。一本には「神名帳考證土代」といへり。

◎伴信友の傳は「古事逸傳考」の下にあり。

じんめいちやうかうしやうつちしろ　神名帳考證土代　木八巻　伴　信友

伴信友の「神名帳考證」の一名なり。解題は同書の下に出でたり。

じんめいちやうかうしやうつちしろふかう　神名帳考證土代附考　木二巻　黒川　春村

伴信友の「神名帳考證土代」の不足を補へるもの。まゝ同書中より抄出して古典雜書を引徴して附考す。插畫もありて平易に記されたり。

◎黒川春村は三世淺草庵と稱す。通稱を治郎左衛門といひ、後圭水と改め、灌齋、芳園等の號あり。夙に狂歌を以て知られ淺草庵の號を繼ぎて春村といひしが、後狂歌を廢して、專ら國學和歌を以て著る。淺草庵の號は筆亭仙果に繼がしめ、家を門人金子眞頼(現今文學博士)に繼がしむ。著書頗る多く、大晉會指圖、古葉莵玖波集、稱號索、名字纂、古物語類字抄、色葉類說、音韻考證、同啓蒙、調淵金、調八衢付考、詞格川例、增補字造語抄、集外歌仙傳、異能抄、古文音例、金石銘文抄、梅松論陣字訓、諸使名簿(一名使者部類)歴代地方名目抄、參書圖覽抄、畫補遺圖一覽、逸文風土記、本朝猫志、淡海名寄、猿樂考證、歴代大佛師譜、肉食辨、北奥國號考、競物名葉、伊庭時言合著)、並山日記、法華八講會年表、頓阿法師、類字常樂記(敎覺合著)、雜撰雜纂(一名使者部類)歴代地方名目抄、參書圖覽抄、畫補遺圖一覽、逸文風土記、本朝猫志、淡海名寄、猿樂考證、歴代大佛師譜、肉食辨、北奥國號考、競物名葉、伊庭時言合著)、並山日記、法華八講會年表、頓阿法師、類字常樂記、雜撰雜纂、水抄、墨水雜抄、墨水抄別錄、杉山神社藝集、類字墨水抄、墨水雜抄、墨水抄別錄、杉山神社神賀歌考證、簾中抄考、延年舞考證、長谷寺古銅塔銘文考、土佐坊昌俊木像考、文永御入講勘文考證、岐垂衣考證、一種物考、道の邊柳考、用字活川考、活語四等辨、地頭名義考、打毬考、船橋文書考證、四光寺古佛考、下總山川村古碑文字考、瓦經考說、地火爐次考證、續代圖說、千論萬歳考、四道大師行狀土代、鏡の佛影、天言活川考、陸奥國田歌解等あり。慶應二年丙寅(一八五六)十二月二十六日、六十八にて歿す。淺草永見寺に葬る。

じんめいちやうへうもくしかう　神名帳標目私考　木一巻

延喜式の神名帳の首の標目に就きて、其疑點を、神祇式、其の他等に考へ合せて書き加へたるもの。今見るところは明治九年の寫本にかゝれど、其の原書の由來詳ならず。

じんめいちやうへうもくしかうしようろく　神名帳標目私考證錄　木一巻　伴　信友

補足論考したるものなり。本居宣長、平田篤胤等の所說をも引擧せり。

◎伴信友の傳は「古事逸傳考」の下にあり。

じんめいちやうへうもくしかうふろく　神名帳標目私考附錄　木一巻　伴　信友

「神名帳標目私考證錄」に附說したるものなり。

◎伴信友の傳は「古事逸傳考」の下にあり。

じんめいちやうりやくちうかい　神名帳略注解　木一巻

大和國、十市、高市、宇智、吉野、宇陀、五郡の神名帳大略註解卷の四の補闕なりといふ。

じんめいひしよ　神名祕書　木二冊　度會　行忠

伊勢二所皇太神の附屬諸神の在所緣起等を抄錄したるもの。漢文にて記せり。奥書に「禪林寺殿御治世之時内々奏覽預叡感」云々とあり「纂群書類從」には「二所皇太神宮神名祕書」と題し、一卷にしてこれを收めたり。

◎度會行忠は伊勢の神官にして「伊勢二所皇太神宮古老口實傳」の著別あり。

しんめいひようだん　神明憑談　二巻　多田　義俊

上卷に神代人代の差別、日本紀を援する旨趣、日本紀を讀む用意、兩部惟一並に神祕の事、神國歌肉を思む考。下卷に神紀を讀むに習ひある事、和訓考、

中臣忌部職掌考、木綿（ユフタスキ）の考、異國の產物神社に納むべきやの考、其の他等を掲げたり。著者の口授を植松次親の筆記したるところなり。享保十九年甲寅（一三九四）の自序、及び筆記者の父植松永康の跋あり。

◎多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

じんめいりやくきのじよ

神名略記序 一卷 度會 延貞

伊勢二所皇太神の「神名略記」に序したるを別册としたるなり。漢文にて同社の梗概を記せり。元祿七年甲戌（一三五四）の作。

◎度會延貞は勘受皇太神宮權禰宜正四位下たり。別著には「神鏡紀談」あり。

じんめいろく

神名錄 一卷 伊勢雨宮

伊勢內外兩宮の本社より末社攝社に至る各神名鐫等を集錄したるもの。弘化四年丁未（一八〇七）祠官の寫本を校訂して刊行したるよしを記せり。

じんめいわかせう

人名和歌抄 一卷 清水 濱臣

古來人名の基ける和歌を輯釋したるもの。例せば、最初道臣を掲げて「日本紀」の「いさなしくたゝしきみちのおむかしさ、とてゝわかなもきみはたにひし」より、最後の湯川の姓につきて、「源平盛衰記」の「宮方の鵺頭になりし湯の川は、みやこに入て何も香もせず」といふを掲げたり。

◎清水濱臣の傳記は「伊勢物語澁註」の下にあり。

しんやうかいき

津陽開記 一卷

津輕の領主津輕爲信一代の事績を記錄稱贊したるもの。一名を「津輕記」と云ひ、天文の比より慶長十二年丁未（一二六七）に至る津輕近邊の戰爭記としても見ること、を得べし。恐くは其の家臣の手に成れるものならん。

しんやうきんぶ

信陽菌譜 一卷

信濃國伊那郡中に產する所の菌類七十種を圖譜し、各彩色を以て寫し、其の食菌と毒菌とを分ち、一々詳密なる解說を加へたり。寬政十一年己未（一七九九）の作。

◎市岡智覽は信濃國伊那郡の人なり。本書は土岐栗の譜によりて作れるところなりといふ。

しんやうざつし

信陽雜志 二十卷 吉澤 好謙

信濃國十郡の圖を掲げ、地理と歷史とに關する事を雜記す。一書の體裁不備にして通讀し難く、且卷都等亂雜にして、目錄には三十卷と記し、寫本は十六册に作り、自序には二十卷とあり。暫く自序によりて二十卷を標的とし、三十卷に分てるを疑問に附す。今見る十六册は完本にあらず。延享元年甲子（一七四四）の自序に「晟者或睞予一古本、不知誰之所作、以載本國諸藩城地營壘之興廢、上起文治年間、下終寬永初年、其餘裂烈鼎士之履歷、牧擧殆將盡、然而此書頗濕損磨爛、不可讀者十而八九、因採諸國史、探諸故家舊書、該綜脩訂有年、途頓一二之存、補八九之遺、復似可以爲全本、次摘古今沿革及風壤產制、係于此國者、部別以辨其首、總二十卷、名曰信陽雜志」とあり。

◎吉澤好謙の傳記は「信濃地名考」の下にあり。

しんやぶさめのしよ

新流鏑馬之書 一卷

流鏑馬の諸法故實を記述し、標註をも加へたるものなり。馬場、樽等より、流鏑馬日記の事再拜の事等に至れり。

しんやもんだふ

新野問答 一卷 藤原 定基

禁中の規式故實を記したるもの。官職位階等より裝束の式目、着物の名義等に至る。正德年中、新井白石が著者野々宮（藤原）定基に問ひて得たる答なりといふ。されば「新野の名を附したるなり。伊勢貞丈は其の著「秋窓問語評」には本書を「位記問答」といひて、同書には題號種々あれど、「新野問答」と書けるは非なりと斷ぜり。

◎藤原定基の傳は「有職問書」の下にあり。

しんゆうずゐひつ

辛酉隨筆 二卷 石原 正明

著者の假名隨筆なり。光格天皇の享和元年辛酉（一八〇一）の作なるより、此の名あり。著者は別に「壬戌隨筆」また「癸亥隨筆」をも出版せり。皆隨筆したる干支を以て名とせるなり。

◎石原正明の傳は「壬戌隨筆」の下にあり。

しんらくせんく

身樂千句 二册 山岡 元隣

著者の俳諧千句にして、內一册は俳諧仕樣を記せり。寬文二年壬寅（一六六二）正月編輯したるものなり。

◎山岡元隣の傳記は「食物和歌本草」の下にあり。

しんらんしやうにんしやうさうでん

親鸞聖人正統傳 六卷 僧 良空

淨土眞宗の開祖親鸞聖人の傳記。正德五年乙未（一七一五）正月の著なり。本書は專ら眞宗高田（專修寺）派に採用せられ、同宗本願寺に傳はれる「本願寺聖人親鸞傳絵」其の他の諸傳とは、多少の異同あり。五に參照すべきものたり。

◎良空は眞宗高田（專修寺）派の僧なり。別に「親鸞聖人正統傳絵集」四卷を著し「親鸞聖人正明傳」を校刻す。

しんらんしやうにんしやうみやうでん

親鸞聖人正明傳 四卷

眞宗の初祖親鸞聖人の傳記なり。文和元年壬辰（一三五二）十月、釋侃如の作なりと傳ふれども、古來の評家は之れを眞僞未決のものとせり。享保十八年癸丑（一七三三）冬、同宗高田派の眞空校刻す。

しんりうしやのつぜつ

斗南無雙神龍車の圖說 一卷 深海 立助

「神龍車」と名くる水車の說明なり。嘉永四年辛亥（二五一一）著者の發明に係るもの。著者深海立助は丹波龜山の人なり。

しんりつ

新律 一卷

寬永比より、享保比に至る幕府の公事訴訟仕置等に關する雜錄なり。評定所法式並公事訴訟等取捌、口論取捌、借金銀家賃地代滯等、諸奉公人出入取捌、請願訴訟無取上、入墨並所拂戶〆等、無宿者並奴女片付、酒狂人御仕置、風氣にて人殺理無盡者御仕置、其の他の部を分ちて其の判決執行等を記したるものなり。

しんりにふもんようけつ

神理入門用語訣 二帖 野之口隆正

動詞の變化を說きたるもの。其の變化の格を、用前、用川、用斷、用體、用後（他の文典にて、將然、連用、終止、連體、已然といふべきもの）の五級とし、活用の種類を、本行活用、借行活用、結辭活用の三等として說明せる一種の文典なり。五十音圖は古來普遍といひしものにて、天地間の神理此の言靈中に備はれば、其れに基きて言語を說くの意より、書名は撰びたるものなるべし。

◎野之口隆正の傳は「學運論」の下にあり。

しんりやうかうしよう

神領考證 十三卷 足代 弘訓

伊勢太神宮神領のことを古書に考證したるもの。後水尾院の延寶年中に撰集せしめ給へる「類題和歌集」に對して、「新類題和歌集」とは名けたるなり。二十一代集の外古來の敕撰私撰中より博く採用して類聚せり。原本は宮內省圖書寮にあり。

◎足代弘訓の傳は「寬居閒書」の下にあり。

しんりやうきうにんひきつけ

神領給人引付 一卷

伊勢太神宮御料のことを記したるものなり。年代著者共に詳ならず。

しんりやうせいじえんかく

神領政事沿革 一卷 足代 弘訓

伊勢太神宮の神領に關する政治上の沿革を記したるもの。神領のこと、庄園御厨の事等を附錄せり。

◎足代弘訓の傳は「寬居閒書」の下にあり。

しんりやくていぶんしふ

神略亭文集 十册 三元 元蕃

著者の文編を拾輯したるもの。寶曆十三年癸未（一七六三）の編にかゝる。著者三元元蕃は神略亭また蒲鑑と稱す。

しんるゐだいおちぼしふ

新類題落穗集 四卷

烏丸光榮等の撰集せる「新類題和歌集」に題のみありて實歌の載せられざる歌を各救撰「類題和歌集」中より抄出列舉したるものなり。

しんるゐだいわかしふ

新類題和歌集 二十卷

鎌元法皇の敕を受けて撰集したるもの。後水尾院の延寶年中に撰集せしめ給へる「類題和歌集」に對して「新類題和歌集」とは名けたるなり。二十一代集の外古來の敕撰私撰中より博く採用して類聚せ

るなり。文明永正比の御會の百首等をも載せられたり。撰者は烏丸光榮、四三條公綱、水無瀬氏成、高松重季、武者小路實陰の五人なり。

しんれい

神令 本朝二卷

諸國諸神の令條を集めたるもの。應仁三年己丑(一四六九)一條兼良寫書の奥書あり。

しんれいいくかい

新令句解 本朝一卷　新井　君美

寶永七年庚寅(一七一〇)に發布せられた武家諸法度の註解にして、後板ありて絕版せらる。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

しんれきかう

眞曆考 一卷　本居　宣長

曆日の起元につき考說したるもの。我が古言により、まづ年のはじめ、四季、朝日、夕月、閏月、十干、十二支等を論述して古書を讀まんものに資したるなり。天明二年壬寅(一七八二)九月十二日本居宣長考へ了る由を末記せり。

◎本居宣長の傳は「古事記傳」の下にあり。

しんれきふしんかうべん

眞曆不審考辨 一卷

本居宣長の「眞曆不審考」の駁謬を辨じたるものなり。今版行の本には更に本居翁の辨解をも附したり。末に翁の奥書もあり。文政三年庚辰(一八二〇)出版す。著者は鰺津老隱とのみ記して姓名を記さず、思ふに尾張邊の人なるべし。

しんれんざつしきせう

心蓮雜識鈔 一卷　僧　惠心

盂蘭盆之事、諸經十方自恣等之非、百味飮食等之非、宗外佛座川意之非等より、記誦行者寫功德如何等、實多心計以人引導因果如何之非等に至る四十五條、佛事に關する問答書なり。略して「心蓮鈔」と云へり。延寶三年乙卯(一六七五)洛陽にて開版す。

◎惠心の傳記は「往生要集」の下にあり。

しんれんせう

心蓮鈔 一卷　僧　惠心

此の書名具には「心蓮雜識鈔」といふ。故に解題は前掲該題名の下に於てせり。

しんろめんめい

新蘆面命 本朝三卷　保井　春海

元祿十七年甲申(一七〇四)三月七日、京都を發して江戸に來りしより、四月二日までの日記にして、記するところ多く天文に關せり。蓋し著者新蘆(春海の號)の立案口授を門人某の筆記したるものなりといふ。

◎保井春海は初め春哲と名け六藏と稱す、後、算哲、順正等に改め、部翁また新蘆と號せり。後束髮して名を助左衞門と改め。姓を渋川に復す。夙く山崎闇齋に就きて國史神道を學び、また經傳を研究し、最も頭角を著す。殊に算術曆學を好み、推理考究、遂に斯學に達し、其の名當世に高し。貞明曆、大衍曆、儀鳳曆等の興廢を論じ、諸州を遊歷して、日晷を測り氣候を考へ、自ら渋天儀、天球、天文分野圖、日本度數圖、地球圖等を作りて研究し、遂に其の業大成す。貞享曆を作り、敕を以て天下に行はるるに至る。貞享四年幕府新祿百五十石を賜ひ、宅地を駿河臺に賜ふ。後また百石を增加す。水戸黃門、會津中將最も重愛し、諸侯大夫の來り學ぶもの多し。實に一世の曆學者を以て知られたり。貞享曆書、日本長曆、三曆考、貞享曆法、通言天文瓊矛拾遺、土寺文集等の著あり。正德五年乙未(一七一五)七十七歲にて歿す。

しんろん

新論 二卷　會澤　安

本書の內容は、序文中に明なり。曰く、「一曰國體、以論神聖以忠孝建國、而遂及其尊尊武重民命之說、二曰形勢、以論四海萬國之大勢、三曰虜情、以論我狄覬覦之情實。四曰守禦、以論宮國強兵之要務。五曰長計、以論化民成俗之遠圖。是五論者、皆所以新天之定而復勝人也。臣之自營而以身殉天地者、大略如此矣」とあり。雄健嚴肅なる漢文にて論述せり。文政八年乙酉(一八二五)の作。蓋し著者史局にあるの日、坐平の持論を書し、揷藤田東湖に囘て哀公に進見したるものなりといふ。安政四年丁巳(一八五七)自敍を附して出版す。

◎會澤安の傳は「園悉淺錄」の下にあり。

しんろんしんひやう

新論新評 本一冊　鶴峯　戊申

業の時事を論じたる「新論」といふを、批評したるもの。卷首にいへることあり、「文政八年(一八二八

五)無名居士所著新論、貴論に從ひ、假字に引直し差上申候。付ては此の學の當否存寄も有之候はゞ、可申述由被仰下候に付、愚意聊か申上候。此の書の五論、併せて七編の中には少々の得失可否は可有之候へども、其の大體の所は至極光なる論にて、士大夫としては必ず熟讀致し、心得置くべき義と被存候。但し其の攘夷の論に至つては、文政八年の論と、今日の論とに於ては、卿差別可有之候」云々といへり。

◎鵜峯戊申の傳は「神階錄」の下にあり。

しんわうげんぶくぶるゐ

親王元服部類 本一卷

小右記、權記、法成寺關白記、吉記、玉葉、愚昧記、其の他の古記錄によりて、寬和比より、寶永比に至る親王元服の記を抄集したるものなり。

しんわうごげんぶくぶるゐき

親王御元服部類記 本二卷

延喜十六年丙子(九一六)御元服の寬明親王以下、數多の記錄類によりて、諸親王御元服の記を部類したるものなり。「纏繩書類從」卷二百九十七上下、公事部第五十に入れたり。

しんわうじつろく

神皇實錄 本一卷　藤原　園人

內題には「姓氏錄別卷」とありて、天神七代、地神五代より、以下神皇を傳す。編者の奥書に弘仁六年乙未(八一五)編言を奏して作りたる由を漢文にて記す。

◎藤原園人は、大藏卿楓麻呂の子なり。寶龜の末、從五位下に叙せられ、美濃介となる。爾來天應、延曆、大同、弘仁の間に於て、備前介、少納言、少辨、安藝守、太宰少貳、豐後守、大和守、右京大夫、治部大輔、相模守、宮內卿、備參議、正參議、皇太弟傅、觀察使等の諸官を歷て治績頗る擧る。弘仁三年右大臣となり、五年從三位に進み、同九年戊戌(八一八)六十三歲にて薨ず。帝追惜して正一位左大臣を贈り給ふ。世に山科大臣と稱す。

じんわうしやうとうき

神皇正統記 六卷　北畠　親房

神系皇統により其の御事歷を記したるもの。神代に起りて後村上天皇踐祚の條に止れり。「群書類從」本の奥書には「此の記は延元四年(一九九九)秋成る。童蒙に示す爲に老筆を馳す所なり。旅宿の間二卷の文書を著へず、幾に最略の皇代記を草れども、見ること能はず、已に五年に及ぶ。聞く廣轉書寫の罷ありと。驚て之れを披見する處、錯亂多端なり。興國四年癸未(一三〇三)の秋七月、聊か修治を加へ、此れを以て本と爲すべし、以前披覽の人、朝令暮改のみと云へり」とあり。「纏繩書類從」には興國二年親房、「神皇正統記」五卷を作れりとあり。

同三年權左少辨、德治元年左少辨に轉じ、延慶三年參議となり、同四年左中將を兼ね、應長元年左兵衞督別當、同十二月權中納言、正和五年從二位、元應元年正二位に進み、同二年淳和院別當となり、元亨二年右衞門督別當、同三年正月權大納言、同五月奬學院別當、元德二年九月十七日出家して宗玄と號す。元弘三年東國隱岐より還るに及びまた出仕して、從一位に進み、大臣に准ぜられ、正平六年三宮に准ぜらる。親房五朝に歷事して、文武の功頗る多し、人の知悉するところなり。著書は本書の外に、職原鈔、元元集、東家祕傳、二十一社記、古今集註等あり。世藤原宣房、源定房と併せて三房となし其の治博を稱す。正平九年甲午(一三五四)遂に賀名生に薨ず。

じんわうしやうとうき

神皇正統記 六卷　川喜多眞彥

標註

神皇正統記の慶安本に藤原眞彥といふもの、諸儒の評論を頭書したるものなり。慶應元年乙丑(一八六五)の自敍を附し、同二年出版す。

◎川喜多眞彥の傳は「近世名家紀年大成」の下にあり。

じんわうしやうとうろく

神皇正統錄 三卷

神代に始りて、人皇八十二代後鳥羽天皇の建久九年(一一九八)に、源頼朝落馬して終に起たざるの事までを記したる略史にして、記事ほゞ皇御孫命の下に繫け記せり。鎌倉時代の人の作なりと傳へらる。「纏群書類從」卷八百五十一上下、雜部第一にも收めたり。

しんわうじゅごうさじのこと
親王准后座次之事 ㊟一巻
慶長時代に於ける親王准后座次の事を記せること名の如し。「准后親王座次事」と合編す。

しんわうせんげぶるゐ
親王宣下部類 ㊟一巻
大治、文永、應安、文明等の親王宣下の記を部類したるものにて、内閣文庫に、特別書として所藏す。

じんわうだいだうほんぎ
神皇大道本紀 二巻 椹並 光成
神皇の大道を明かにして、儒佛二教を排斥せんとの意にて作られたるもの。天地巻開首巻、三木綱領巻、和漢變易等に分れたり。延寶六年戊午(一六七八)の刊行にかゝる。

しんわかしふ
新和歌集 十巻 藤原 爲氏
巻一春歌八十五首。巻二夏歌六十六。巻三秋歌百十八。巻四冬歌六十八。巻五賀歌二十、神祇歌二十五。釋教歌二十七、巻六離別歌十、羇旅歌二十五、哀傷五十。巻七戀上九十七。巻八戀下七十八。巻九雜歌上百二十八。巻十雜歌下七十五。以上十巻、歌數凡て八百七十二首。作者は鎌倉右大臣家、衣笠内大臣家、冷泉爲家土御門道成、京極定宗、冷泉爲氏、以下凡て百八十六人なり。編者宇都宮に下向の時撰集せるより、或は「宇都宮新和歌集」ともいへり。「群書類從」巻百五十三、和歌部第八に收む。

すゐいろ

すゐあがんもく
水蛙眼目 一巻 僧 頓阿
歌學に關する雜說なり。巻端闕佚したるもの。「群書類從」巻二百九十六和歌部第百五十に收めたり。
◎頓阿法師の傳は「高野日記」の下にあり。

すゐあせう
水蛙抄 ㊟一巻
俳句の付句を說明し一々宗祇以下諸家の例句を擧げたり。巻首に、歌に水にすむ蛙、花になく鶯などと付くるは、古今序にいへるより付け來るものなりとあるにとりて、書名とせり。明應三年甲寅(一四九四)梁氏、暨舜法師の望により傳ふる由奥書あり

すゐあんせんど
睡庵諺語 二巻 僧 玄光
著者の論集なり。巻上に巢連御、億則廣中、祭於公不宿肉等以下懿歟哲婦の目に至る二十三項。巻下に春秋元年春王正月考、胡氏論、程氏論等以下、梁有商以奠其身に至る五十八項。凡て八十餘篇あり。延寶八年庚申(一六八〇)十二月二十五日の自序あり。著者玄光は房州勝山寺の住職にして、睡庵と號せり。

すゐいうかうし
水雄岡志 二巻 栗原 信充
三代實錄の中にかて、清和天皇陽成天皇二代の記事の闕略せるを補ひ、其の誤謬を訂正したるもの。記事に關する地圖物品等の圖式考證をも載せ、第二巻には清和源氏の系譜をも詳記したり。
◎栗原信充の傳は「鞍鐙新書」の下にあり。

すゐいろく
隨意錄 八巻 家田 虎
著者の漢文漫筆なり。其の平生耳目の觸るゝ所、心意の會するところに從ひ、講業の餘暇筆錄するところ。凡て數百項あり。男敬伯、文化六年編輯に着手し中途にして歿す。弟秀其の志を繼ぎて文政八

年乙酉(一八二五)冬十月、父八十一歳の時を以て編輯し了る。
◎家田虎の傳は「滑川談」の下に出たり。

すゐうけんしわ
翠雨軒詩話 四巻 山田 信
詩中の奇字僞語を輯錄註解したるもの。僧慈周の「嘉原詩話」に倣ひて作りたるなり。文久元年辛酉(一八六一)の自序あり。慶應二年出版す。
◎山田信は攝津の詩家にして、淺痴と字し、翠雨軒と號せり。著書は、別に「丹生樵歌」八巻あり。

すゐうんゐんぞうさふのき
瑞雲院贈左府記 ㊟二巻 兼 綱
延文元年丙申(一三五六)十二月、同二年正月、應安四年辛亥(一三七一)四三月、曆應五年壬午(一三〇二)四月、文和五年丙申(一三五六)二月、三月等の日錄殘編なり。
◎兼綱のことは「延文改元定記」の下にあり。

すゐえいししよ
水泳試書 ㊟一巻 吉田 彦保
水泳法を記したるもの。水泳初心の者稽古の事、淺草川向遊の事、向越數遍試之節の事、小屋前泳様並扳手の事、扳手調子の事、同調子位の事、向越の節上乘の者舟附爲潜様の事、以上各數項に分ちて其要領を記す。天保十四年癸卯(一八四三)正月の作。著者吉田彦保は定八郎と稱す。

すゐえふしふ
隨葉集 十巻

すゐえふしふたいぜん
隨葉集大全 十巻
發句の用語を類列したるもの。寛永十四年丁丑(一六三七)出版す。

すゐえんぶんせう
隨園文鈔 三巻 田中 參
清國袁枚の文を鈔編したるもの。隨園は袁牧の號なり。安政四年丁巳(一八五七)編者の自序を附して出版す。
◎田中參は從晉軒と號せり。佐倉の藩士にて小長井小舟の實兄なり。

すゐかさうぜんしふ
垂加草全集 三十三巻 山崎 嘉
著者の遺編を集め、且先著「文會筆錄」を合刻して全集と名けたる者なり。享保六年辛丑(一七二一)刊。享保六年辛丑(一三八一)植田成章の跋を附し、天明三年(一四四三)上梓す。
◎山崎嘉の傳は「垂加文集」の下にあり。

すゐかぶんしふ
垂加文集 十三巻 山崎 嘉
著者の文集にして、内三巻を續集とし、三巻を拾遺とす。正德四年甲午(一三七四)伴部安崇の序、跡部光海の跋あり。正續二集に著者自身の編輯なれども、拾遺三巻は跡部光海の編輯するところにて享保九年甲辰(一三八四)伴部安崇の跋あり。正續は正德四年出版せり。
◎山崎嘉は朱子派の大儒なり。字を敬義といひ、闇齋、垂加等の號あり。元和四年戊午(一六一八)京都に生る。父初め妙心寺に入れて僧となす。土佐業公に事へ、京に歸りて專ら儒を修む。時に年二十五なり。日夜端研倦むことを知らず、遂に朱學の大旨に通ず、後江戸に出でて敎鞭を垂る、貴を執りて門に入るもの數千人。實に一世の鴻儒を以て稱せらる。會津侯保科正之、奥作侯加藤泰義等また禮を厚うして師事せり。晩に吉川惟足に從ひて一種の神道を唱ふ。著書には、朱易衍義、文會、孟子要略、中和集說、大學啓發集、孟浩錄、孝經刊誤附考、神奠無朕記、四書序考、小學蒙養集、孝經外傳、闕異、孝經評略、仁說、遜志錄、遠鹿詳、大家商量集、讀書要、喪葬箴、刑經、武銘張書鈔略、明備錄、程書鈔略、朱書抄書、本朝改元考、經名考、大和小學、雲谷記、溫泉遊草、敬齋箴、不自棄文、江府紀行、還遊紀行、再遊紀行、會津風土記、貴洗文、朱子輯要、日本書紀註、本朝事統、異稱考、垂加草、中臣祓風水鈔、神代卷風葉集、垂加文集、同續、同拾遺等あり。天和二年壬戌(一三四二)九月十六日、年六十五にて歿す。

すゐかりういせりやうぐうべん
垂加流伊勢兩宮辨 ㊟一巻
吉見 幸和

外宮五部の書を始め、内外兩宮に關する傳書の附會說多きことを看破したるもの。先輩宗順社穆問答」の漢文にて通俗的ならざるより、更に國文に記して此の名を與へたるなり。

◎吉見幸和の傳は「國學辨疑」の下にあり。

すゐがんぜんじぎやうだうき

瑞岩禪師行道記　一卷

前南禪瑞岩禪師一生の行狀を記錄したるもの。禪師は諱を龍章、字を仲建といひ、後に龍惶と改め、瑞岩、螺庵等の號あり。至德元年甲子(一三八四)出誕生して、終生宗學に勵精して遂に學德を成就せり。「續群書類從」卷二百四十一、傳部五十一にあり

すゐきようきじんでん

粹興奇人傳　一卷　假名垣魯文

有名なる戲作の傳を集めたるもの。瀧川如皐、木しら雪、河竹北水、假名垣魯文、山口亭有人、山閑人交來、綾岡巖松、柳亭左樂、好文舍花丸、梅葉芝魚、文桂舍榮諺、立川談志、一惠齋芳幾、三遊亭圓朝、春風亭柳枝、山衣綱道、雪松園みさほ、稻の屋文子、全亭愚生、冬の屋喜遊、福井扇夫、菊の家柳美、春遲屋幾久等の繪像を寫し、頭に各狂歌數句を掲げ、頭書に其の傳記を記し別に一枚宛其の傑作の一冊を添へたり。本書は文久三年癸亥(一八六三)山口亭有人と合輯し、一惠齋芳幾、宮城楓阿彌の畫する所也。

◎假名垣魯文は近年物故せる戲作家なり。猫々道人、金花猫翁等の號あり。花笠文京の門人なり。著すところには、安政見聞誌、假名讀八犬傳、四洋藤栗毛、安倶樂鑑、百猫畫譜、藝者の心得、高橋於傳等あり。また假名讀、いろはの二新聞を創立し、歌舞妓新報の記者たりき。明治二十五年壬辰(一八九二)十一月八日、六十五歲にて歿せり。東京谷中三崎町永久寺に葬らる。

すゐきよくしふ

水玉集　一冊

此の書は俳諧の集なり。編者及び年代を詳にせず。

すゐきんだうしかう

翠錦堂詩稿　木二卷　翠錦堂

著者の詩集。「三日水亭集」より、「墨陀堤看花」に至る絶句四百餘首を收めたり。安政四年丁巳(一八五七)正月の作。著者龍淵は紀州海善寺の僧なり。

すゐくわうざつせう

隨廣雜鈔　木一卷

最初に正三位有功の「玉の緒繰分の序」加納諸平の「玉の緒繰分の跋」を抄出し、次に言語「てにをは」に關するものを抄掲し、中には八木立禮の「用語大成」をも輯入したり。

すゐくわみつ

西瓜三ッ　一冊　平泉　鬼貫

上島一轉、岡島本兵との三吟俳諧集なり。編輯の年月は明記なけれど、延寶年中のものなるべし。

◎平泉鬼貫の傳記は「ひとりごと」の下にあり。

すゐくわんしやしん

隨觀寫眞　木二十卷　後藤　光生

水陸の博物、凡そ數百首を寫生して、各圖其の名稱方言を記し、また品によりて略說を附したり。

◎後藤光正の傳は「甘藷記」の下にあり。

すゐくわんしやしん

隨觀寫眞　木十四卷　坂本　純澤

草木數百種を寫生したるものなり。天保八年丁酉(一八三七)の作にかゝる。

◎坂本純澤の傳は「菌譜」の下にあり。

すゐぐんさうはうかん

水軍操砲艦　木三卷　名村　元義

海軍法砲艦の事等を論ず。蓋し四洋一千八百二十八年(文化十年)和蘭海軍將ヒラアルの撰述を翻譯したるものなり。

すゐげつぶんさう

水月文藻　木五卷　堀田　正敦

近世諸家の和文を輯集したるもの。水月は編者の號なり。序、跋、詞、雜、記、紀行等に分類して五十餘編を收めたり。文政七年甲申(一八二四)兩亭季文の序あり。今見るところ一二を合册して、四を上下册とし、五を脫し、凡て五册に作る。「續水月文藻」別に二册あり。

◎堀田正敦の傳記は「千城錄」の下にあり。

すゐげつろうしよもく

水月樓書目　木一卷

堀田正敦の藏書目錄なり。和漢書數百部を、分類して列記せり。書名のみ記して、卷册數も著者氏名をも記さず。

すゐけんき

瑞軒記　木一卷

元祿十一年戊寅(一六九八)三月七日、德川幕府に新規召出されて、百五十俵を賜はり、若年寄の支配に屬し、大阪川々の普請等に盡力したる川村瑞軒の事績を記したるものなり。下賤に生れて、殊に榮進せる才智絕倫の事實を悉く列記せり。

すゐげんしめいせう

水源紫明抄　木二册　藤原　親行

源氏物語の抄註なり、同書五十卷中より毎帖の字句を抄出して略解を加へたるものにして桐壺より、竹川に至れり。蓋し源抄の濫觴なり。世に謂はゆる河内本これなり。建治二年丙子(一九三六)二月、沙彌行栗藤原親行の端書あり、本書傳來のことを記せり。

すゐこうりやく

水虎考略　木一卷　古賀　煜

奇動物水虎の事を、和漢三才圖會以下十餘種の博物書に據りて、考證圖示したるものなり。文政三年庚辰(一八二〇)の漢文自跋あり。

◎古賀煜の傳は「建元錄編」の下にあり。

すゐこぐわでん

新編水滸畫傳　九十卷　瀧澤　馬琴

本書は彼の有名なる支那小說「水滸傳」を高井蘭山と共に、和譯畫傳したるものなり。當時水滸傳を譯して行へるは唯此の書あるのみ。

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

すゐさうしきりやく

水草識略　一卷　曾　槩

我が邦の水草一百三十餘種を列擧したる博物書なり。文化十一年甲戌(一八一四)の作。

◎曾槩は薩摩の醫官にして、昌啓また士孝といふ。博物學を研究せり。文化元年同藩士白尾國柱と共に「成形圖說」三十卷を著し、また「皇和典譜」一卷其の他園史草木昆蟲考、木草綱目纂疏等の博物書を著したることあり。

すゐさき

水左記　木五卷　源　俊房

◎藤原親行は經基王九代の孫右兵衛尉季遠の三男正五位下河內守兼大監物源光行の子なり。承久、元仁、仁治、建長中の間、仕へて式部丞となり、河內守たり。

すゐこんりやく

水虎考略　木一卷　古賀　煜

奇動物水虎の事を、和漢三才圖會以下十餘種の博物書に據りて、考證圖示したるものなり。文政三年庚辰(一八二〇)の漢文自跋あり。

◎古賀煜の傳は「建元錄編」の下にあり。

すゐこぐわでん

新編水滸畫傳　九十卷　瀧澤　馬琴

本書は彼の有名なる支那小說「水滸傳」を高井蘭山と共に、和譯畫傳したるものなり。當時水滸傳を譯して行へるは唯此の書あるのみ。

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

すゐさうしきりやく

水草識略　一卷　曾　槩

我が邦の水草一百三十餘種を列擧したる博物書なり。文化十一年甲戌(一八一四)の作。

◎曾槩は薩摩の醫官にして、昌啓また士孝といふ。博物學を研究せり。文化元年同藩士白尾國柱と共に「成形圖說」三十卷を著し、また「皇和典譜」一卷其の他園史草木昆蟲考、木草綱目纂疏等の博物書を著したることあり。

すゐさき

水左記　木五卷　源　俊房

著者の日錄なり。一名を「堀河左府記」といふ。水左とは源姓によりて名けたるなり。第一册に承保四年丁巳(一七三七)の秋、第二册に同冬、第三册に康平、治曆、延久、承保、承曆等、第四册に永保元年辛酉(一七四一)秋冬、第五册に承保、承曆、永保、應德等の事を記せり。順序なく、記事斷續せり。もと三十一册ありし實錄中、此の數册を遺せりといふ。

◎源俊房は太政大臣師房の子なり。祖父以來相繼で文才あり、書を善くし、又最も政事に熟達す。天喜中從二位に敍し、參議に任ぜられ、後正二位に進み、權中納言となり、承曆中大納言となり、辜で陸奥出羽の按察使を兼ね、永保二年右大臣となり、翌年左大臣に轉じ、寬治七年左近衛大將を兼ね、翌年從一位に進み、保安二年辛丑(一一二一)致仕剃髮して寂後と號し、年八十七を以て薨ず。

すゐさんろうしせう

翠山樓詩鈔二編　三卷　石作　貞

著者翠山樓の詩集なり。天明七年丁未(一七八七)江村綏の序、寬政三年辛亥(一七九一)伊東龜年の序、同四年山裏恕の跋を附して同年出版す。

◎石作貞は信濃の人。字幹と字し、貞一郎と稱し、駒石と號す。家世々信濃福島の邑主山本氏に仕ふ。貞また繼ぎて近侍となる。十九歲始めて學に志し、二十七歲の時、暇を請うて伊勢桑名に住き南宮大湫に從て儒を修む。精勵の結果業大に進み、文學を以て當時に知らるゝに至る。歸りて後益重用せられ、遂に宦老となる。著者は本書の外に葵遺集、勸學旨志編等あり。寬政八年丙辰(一七九六)正月十